

少年と少女達の輝き目 指す物語

キャプテンタディー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

静岡県沼津市に住む主人公・楠神 遼

この物語は、目指すものは違うけれど、幼馴染みの渡辺 曜、高海 千歌の他、9人とともにときに笑い、泣き、怒り、迷い、様々な日々を過ごしていくなかで、9人の少女と1人の少年がともに成長し、輝きを目指していく物語である。

ヒロイン：渡辺 曜、高海 千歌

※今作でラブライブ！作品2作目です。

※作品上、色々と大変ですが頑張ります。

※Twitterやっています。

↓<http://twitter.com/antlovesttd0914>
フォローは自由です。してくれれば嬉しいです。

目次

1st Step 輝きを目指す物語

# 1	物語の始まり	1
# 2	輝きたい！前編	32
# 3	輝きたい！後編	62
# 4	それが全ての始まり	92
# 5	はやくも前途多難!?	132
# 6	日曜日と、初対面	164
# 7	海の音	208
# 8	“大好き”という名の『気持ち』	235
# 9	初めての曲とお願いと	267
# 10	新しい朝と新理事長	299

# 11	無理難題と再会	329
# 12	宣伝とグループ名	354
# 13	最終調整と成功祈願	389
# 14	はじめの一步	417
# 15	反省会	451
# 16	花丸と、私たちの部室	483
# 17	真実と憧れと階段ダッシュ	507
# 18	体験入部	536
# 19	ルビイの気持ち	557
# 20	花丸の気持ち	582
# 21	曜と過ごす休日 前編	

812	# 2 8	千歌との初経験	後編	# 4 1	現れた強敵	1188
778	# 2 7	千歌との初経験	前編	# 3 9	真意と、責任と	1164
	# 2 6	ありのままの自分で	—	# 3 8	東京に向けて	1134
	# 2 5	堕天使でアイドル!?	—	# 3 7	一通の招待状	1109
694	# 2 4	普通になりたい堕天使	—	# 3 6	梨子と鎌倉 後編	1080
				# 3 5	梨子と鎌倉 中編	1054
				# 3 4	梨子と鎌倉 前編	1036
667	# 2 3	堕天使と上がらない順位	—	# 3 3	それが、魅力	1012
				# 3 2	知らされる真実	986
626	# 2 2	曜と過ごす休日	後編	# 3 1	失敗と思惑	955
				# 3 0	PVを作ろう!	919
602	# 2 9	学校が統廃合!?	—	# 2 9	学校が統廃合!?	884
						855

1524	# 5 3	迷いの末の『決定事項』	1495
	# 5 2	夏祭りと自覚	1445
	# 5 1	仲直り	1418
	# 5 0	蟠りと決心	1390
	# 4 9	衝突	1366
	# 4 8	過去と招待	1332
	# 4 7	充実の週末 後編	1310
	# 4 6	充実の週末 前編	1281
	# 4 5	千歌の本当の気持ち	1258
	# 4 4	それぞれの思い	1232
	# 4 3	私たちの現在地	1209
	# 4 2	感じた実力の差	

	# 6 2	合宿本格始動	1799
	# 6 1	曜の欲し、千歌の芽生え	1767
	# 6 0	夏の始まり、梨子の撰択	
	# 5 9	梨子とピアノと過去	1743
	# 5 8	決着と、驚愕	1708
	# 5 7	天罰と真実と黄昏	1670
	編		1627
	# 5 6	4人揃ってバカンスへ！	後
	編		1599
	# 5 5	4人揃ってバカンスへ！	前
	# 5 4	行方	1550

1892	#	1860	#
	6		6
	4		3
	善子の願望、		過酷特訓と謎メニユ
	千歌の驚愕		ー

1st Step 輝きを目指す物語

1 物語の始まり

3月末の春休み。その日のある朝。

「遼くん……遼くん……」

外は春の日差しが降り注ぎ、何とも春の晴れっという感じでぼかぼかと暖かい陽気に包まれていた。

けどそんな中で、俺しかないはずの俺の部屋に、突然女の子の声が聞こえてくる。

「遼くん、起きて〜」

幻聴か……はたまた現実か。

そう聞かれれば現実で、 “また来たのか” と俺は彼女の行動に毎回のごとくうんざりしていた。

「うう。あと5分だけ……」

俺はそう言って誤魔化し、無理矢理ながら寝返りを打っては起きたくないという行動を示す。

すると彼女の口からこんな言葉が出てくる。

「早く起きないと……遼くんを逮捕しちゃうぞ〜！」

「……………」

……別に驚くことはない。

これは “いつもの” ことだからだ。

彼女はそんなことを言うので、俺はまた寝返りをして仰向けになり、渋々ながら重い瞼を開けていくと、目の前には女性警察官の格好をした彼女の姿があった。

ちゃんと上のブレザーと帽子もしっかり身に付けていて、本物の警察官になりきって

いた。それにちゃっかり手錠まで持っている。彼女は俺の体を跨いではビシツと右手で敬礼をしていた。

そして俺は彼女に言う。

言うといつても、もう何百回目のことである。

「お前…いい加減そんな格好で俺を起こしにくるのはやめろ。俺から見れば痛々しいぞ」

「むっ！制服を馬鹿にするなんて酷いよ遼くん！」

思いつきり俺の胸のあたりに両手をバンツと叩くようにしてくるから、思わず咳払いをする。

それからというもの、俺はいつもいつもコスプレをして俺を起こしに来る彼女に向かって言い放つ。

「うるせえコスプレ女！だいたい今日は部活も休みだ！俺の勝手だからいいだろ別に」

「何を〜!?言わせておけば〜！」

俺がああ言えば、彼女はこう言う。

そんなただの暴言の言い合いを繰り返していつては、俺も彼女も負けじとで、全くキリがなかった。

だから俺は、とある行動に移す。

「ええい！もうこうなったらこうだ！」

「えっ!?!きやあ!?!」

俺がどんな行動を起こしたかというと、俺はまず彼女が持っていた手錠を取り上げる。

それから自分の体を無理やり起こし、俺の体に跨っていた彼女はその起き上がる勢いに負け、逆に背中から倒れそうになったところを俺はすかさず彼女の体の背中を取る。

ガチャン！ガチャン！

そして俺はその手錠を使い、彼女の両手を後ろで繋いで抵抗する術をなくした。

その行動に気づいた曜は時すでに遅し、両手は後ろに繋がれ、曜はこれで俺に対しての抵抗は無力となってしまった。

「遼くん！この手錠外してよっ！」

「やだ。毎朝いつもいつも俺の朝の邪魔ばかりする曜には、少しばかりお仕置きだ」

ガチャンガチャンと手錠を外そうとしてもがく曜だが、手錠は両手の手首にしつかりはめられ、例え曜が一生懸命もがいたとしても外れはしない。つまりはこの状況は、曜にとつて絶望的。

彼女の言葉に俺は耳を傾けず、曜の両足もちょうどテーブルにあつた細長い紐でギユツと縛り、身動きが取れないように曜をベッドに仰向けにさせる。

曜の顔が見えるよう、警察官の帽子も取る。

「お前…また大きくなつた？」

「なっ!!大きくなつてないよ!変態!」

両手を後ろで繋がれているせいか、曜のふくよかな胸は大きく盛り上がっていて、俺

の目を惹くほどに大きく強調されていた。

「まあいいや。これで曜は俺に対してどうすることも出来ないんだからな……」
「遼くん……こんな格好恥ずかしいよ……」

俺に恥ずかしい体勢をさせられ、曜自身、恥ずかしくないわけではないわけではない。曜の顔は頬を赤らめ、羞恥にまみれた表情しては涙目になっていた。

俺はその羞恥を隠しきれない曜を覆い被さるように、四つん這いになって曜に迫る。
そして俺は、曜に問いかけた。

「さあ曜、覚悟はいいかい？」

「やつ、遼くん……やめっ……」

曜は自分の一糸まとわぬ姿を見られてしまうのではないかと、顔をだんだん真つ赤に染め上げていく。

やめるように曜は俺にそう願うも、俺は曜の言葉に耳を貸さず、両手をじわりじわりと曜が着ている警察官の制服へと手を伸ばす。

ここは静岡県の沼津市という街。

広大に広がる海に面した街で、ゆつたりとした街並の中に俺は住んでいる。

「はあ…はあ…遼くん朝から酷いよ……」

「そうさせたのはお前のせいだからな」

俺の名前は楠神 遼（くすかみ りょう）。16歳。

高校は今度から2年生になる。

俺はその沼津にあるサッカーの強豪、私立沼津翔栄高等学校に通っている。つまり、俺は学校に通いながら、部活でサッカーをしているのである。

ポジションはFW（フォワード）。

基本的に得点を決める攻撃的なポジションであるが、現在俺はベンチメンバー、控え選手である。

自慢ではないけれど、控えから交代でピッチに出場して、そこですぐに得点を決めることから、切り札（ジョーカー）と言われている。

でもまあ、こんなことを紹介したとしても、決してみんなに自慢できることではないけどね。

「はあ…朝から汗がベトベトだよ……」

こいつは渡辺 曜。

俺と同じ年の高校2年で幼馴染み。彼女は内浦っていう沼津から少し離れた場所の、浦の星女学院という生徒が女子のみの学校に通っている。

やってるスポーツは水泳の高飛び込み。まああとはそれなりにスポーツが万能で、勉強も出来る。

家は何といってもお隣同士。幼馴染みだけあって感じてだが、だからこそ朝にはさっきのように、曜がコスプレをしてきて起こされる日々が続いている。いい迷惑にも程がある。

小さい頃からお父さんのように船の船長になりたいと言っていたが、色んな制服等を自分で作って、尚且つそれを自分でコスプレするという、何ともちよつと痛い女の子で

ある。

けどそこだけであって、本当は普通に良いやつ。

「とりあえずシャワー使っていていいから、早く汗を流してこいよ。こっちは用意しておくから」

「うん、分かった。ありがとう」

曜の両手を繋いでいた手錠を外し、両足を縛っていた紐も緩ませて外し、曜を解放した。

曜はお礼を言っ、俺に脱がされた警察官の上着を持ち、部屋を出て浴室へと向かった。

「さて、やりますか」

それから曜が部屋から出て行ったのを確認した俺は、部屋のカーテンを開け、体を伸ばしながら太陽の光を浴びた俺は、布団を片付けたあとで台所へと向かっていった。

く※く

「もう…汗で服もベタベタだよ…。遼くんは本当に変態なんだから…」

私は汗で体にピタツと張り付いたワイシャツを脱ぎながら、遼くんへの愚痴を漏らす。

私の名前は渡辺 曜。年齢はあと少ししたら誕生日で年も上がるから、17歳であります！

とまあこんな感じで、元気一杯の女の子。

私は浦の星女学院っていう、沼津から離れた内浦という小さな町の学校に通っているの。幼馴染みの千歌ちゃんや、1つ年上の果南ちゃんたちと一緒に、この学校に通っている。

でも通っている人数も少なくて、廃校？になっちゃうんじゃないかって…話も噂で耳にした。学校がどうなっちゃうか分からないけど、私…渡辺 曜は、今を精一杯生きるであります！えへへっ♪

それで得意なスポーツは水泳の高飛び込み！これでも私は水泳が1番得意なスポーツなんだ！他のスポーツも少しは出来るけど、やっぱり1番は水泳かな？だって…気持

ちいしい。

汗が染み込んだワイシャツを洗濯機に放り込み、下着も脱いで浴室に入り、暖かいシャワーを浴びて身体中に出ている汗を洗い流した。

「ふう…シャワーはやっぱり気持ちいいな…」

一応説明するけど、私が口になっている“遼くん”っていうのは、私の幼馴染みの楠神遼の下の名前。

サッカーが大好きで、その他でもスポーツが万能。でも勉強に関しては、私よりは馬鹿だけどね。

彼は共学の学校に通っているから、他の女の子たちからキヤーカー言われているらしい。

でも遼くんはそれにうんざりしてるようで、以前に女子生徒から告白されたらしいんだけど、その告白を断ったんだって…。

「遼くん…なんでなんだろう…」

不意に遼くんのことので口から言葉が漏れる。

モテているにもかかわらず、どうして告白されたのに断つちやっただろうって、それが気になって仕方がなかった。

シャワーで体を洗い流した私は、浴室を出て真っ白のバスタオルを体に巻き付け、小さいタオルで頭をゴシゴシと拭きながら脱衣所から出る。

すると台所では、遼くんがやかんにお水を入れて水を沸かそうとしていたところだった。

「おっ、ちようど出たところだな？」

「うん。シャワー貸してくれてありがとう」

「どういたしまして…」

遼くんはさっきの出来事がなかったように振舞って、私のお礼にそんな言葉を返した。

それから遼くんは尋ねてくる。

「曜、何か飲む？」

「えっ? いいの?」

「いいのと言われても、そのためにお水を沸かしているんだから遠慮すんな」

この時の私は、遼くんの優しさに包まれるのと同時に、遼くんにされたことに対しての憤りも無くなっていた。何というか…もういいやつて感じ。

いつまでももうじうじ考えてても仕方ないもん!

うんうん。渡辺 曜…ポジティブにいこう!

「じゃ…じゃあ、カフェオレで!」

「分かった。じゃあ椅子に座って待ってて?」

「うんっ! 待ってるね!」

そうやって私は遼くんにカフェオレを注文して、遼くんが淹れてくれるカフェオレを楽しみにしながら、ルンルンと心待ちにしているのでありました!

~~~~~※※※~~~~~

曜に注文されたカフェオレを作り、俺はいつも飲んでるコーヒーを淹れて、2人でテーブルでまったりしながら話に花を咲かせていた。

俺も曜も通っている学校は違うから、学校のこととか、あとは部活のこととか。曜に關しては千歌のことも色々と話で盛り上がっていた。

そんな話を逸らすようになってしまいが、俺は曜にいつも尋ねていることを話した。

「それで、曜はどうするの?」

「んっ? どうするって?」

俺の発言に首をかしげる曜。

彼女は分かっているつもりなのか。本当に分かかってないのかは知らない。

その様子にため息をついた俺は、少しばかり呆れるように言葉を強くして曜に言った。

「今日だよ今日。お前が家に来るたび、いつも何かの用事で俺を誘ってきたじゃないか」「ああ〜！そうだったね！」

そうだったね…ってお前…無自覚だったのかよ。

実は曜が俺の家に来るのには理由があつて、毎回のごとく俺の家に来るたびに何かしらで誘いに来るのだ。海に遊びに行こうだったり、千歌の家に行こうだったり、色々大変なのだ。

すると曜の口から発言されたのは、そのお誘いとは全く別のことだったのだ。

「今日は違うんだ。今日はちよつと…遠くに相談したいことがあつて家に来たんだ…」

「相談…したいこと？」



俺がそう言つて曜に尋ねると、曜はマグカップに残っているカフェオレを一口飲んで、話を始めた。

「私ね、〃スクールアイドル〃 っていう…学校でアイドル活動をするのを、千歌ちゃんをやってみようかなって思ってるの」

「〃スクールアイドル〃？ ああ…あれか」

スクールアイドルという単語は、俺でも少しは耳にしたことがある。

といつても、学校の同じ部活のメンバーが、とあるスクールアイドルのグループが好きでたまらないと言っていたのがそれを知るきっかけだ。

それまでは、〃スクールアイドル〃という単語そのものを俺は知らなかった。

「それで…何でスクールアイドルをしようだなんて思うんだ？ お前には水泳部があるだろ？」

「それはまあ…そうだけど…」

お茶を濁すように、曜は下に俯いて口をつぐんでしまう。ちゃんとした理由があるかどうかで、俺から話すことも変わってくる。

よほどの俺が納得できる理由じゃなかったら、幼馴染みの千歌には好きにさせて、曜はやらない方がいいと俺からはそう勧めるつもりだ。

そして何より俺が気になっているのは、何で「今」なんだということ。どうして千歌がスクールアイドルを始める事になったのかの経緯を知りたかった。

「それに、よりによって何でスクールアイドルなんだ？ どうしてスクールアイドルを始める？」

「いやあ……これには深いわけが……」

「別にいい。話してくれて構わない」

「あ……あははは……」

こういう時の俺は、何でそういう経緯になったのか話が気になって、どんなに話が長くてても耳を傾けて話を長々と聞いている。

例えば悩み事だとか、なにかしらの相談事だとしてもね。聞いてしまった以上、その問題を解決せずにはいられないから。

「じゃあ…今から話すね？」

「おう。かかってこい」

俺は威勢良くして、曜が全てを話す事柄に全神経を耳に集中させて、曜は残っていたカフエオレを全て飲み干してから話を始めた。

「千歌ちゃんがスクールアイドルを始めようって言い出したのは、今から2週間も前の話なんだ」

「に…2週間も前から!？」

千歌がスクールアイドルを始めると言い出した日に、曜から話を聞いて俺は驚いた。今から2週間も前からだそうだ。2週間前なら、まだ学校に通っていた頃だ。何でそんな時期に？

「うん。2週間前のその頃は、私と千歌ちゃんは東京に行ってたんだ。しかも秋葉原っていうところ」

「へえ。それで、そこでスクールアイドルとどういう関係があった？」

「どういう関係っていうことじゃなかったような気がするけど、とにかく千歌ちゃんが言つてたの。『これだよ！』ってね。私もそれに驚いちゃった」

「どうやら千歌がスクールアイドルを始めるきっかけは、東京の秋葉原にあったようだ。」

「曜も千歌の行動に突然すぎてよく分からなかったようだったけど、とにかくスクールアイドルを始めるきっかけは、今の話で何となく理解出来た。」

「だが、どうしてそれで曜までやる羽目になる？」

「次はそこが知りたい。」

「でも曜、お前は どうしてだ？ 千歌がスクールアイドルを始めるきっかけは今の話では分かった。けど どうして曜もやる羽目になる？」

「うん、やっぱり気になるよね？」

「気になるといふよりか、お前がスクールアイドルを始める理由を知りたいだけなんだけどな」

俺が目的としてる曜のスクールアイドルを始めるきっかけを知りたいだけなのに、俺から発した言葉に曜は苦笑いを浮かべる。

曜がスクールアイドルを始めるきっかけを話してくれれば、俺はそれで疑問はすつきりする。

「もしかして、水泳部やめたいとか？」

「水泳が一番好きなのにやめるわけないじゃん！」

「それか、他に楽しいことがしたいとか？」

「うっ、そ…それもそうだけど……」

曜はまた、下に俯いてしまう。

どう話そうとかじゃなく、ちゃんとした理由を伝えて、それで俺が納得してくれるかどうかを、曜はやり取りをしながら考えていた。

でも曜は、下に俯いて苦しそうに頭を悩ませていた表情から、決心を固めたような表情を見せる。

そして曜は顔を上げて話してくれた。

テーブルの上で自分の両手を絡めるように握って、真っ直ぐに俺に顔を向けてね。

「私がスクールアイドルを始めようって思ったのは、千歌ちゃんなんだよ！」

「えっ？あいつが理由？」

「うん！私ね、千歌ちゃんと一緒に何かやりたいな〜って思ってたの。そしたら千歌ちゃんがスクールアイドルを始めると言ってきた、私は『あつ、これだ！』って思ったの！」

ようやく話してくれたその理由。

中身は単純。幼馴染みの千歌と一緒に何かやりたいと思っていたところに、たまたまスクールアイドルというものが耳に入ってきて、曜はこれだとすぐさまそう思ったのが、曜の理由だった。

すると曜はまた口を開いて、話を続ける。

「千歌ちゃんとの思い出作りじゃないよ。私は本気で千歌ちゃんと一緒に何かをしたいと思ってる！」

「……なるほどね」

「私、千歌ちゃんとスクールアイドルやりたい！」

曜の話す理由は至極単純な理由だけど、何でそんな簡単な理由を、俺に対して話を曲げるなり、下に俯いて間を開けたりして、話を逸らしていたんだろうって俺は思った。

千歌と一緒にスクールアイドルをやりたい。

その想いは曜から発してきた言葉と重なって、強い意志があるということのをさっきの話で俺は言葉だけで感じる事が出来た。

そんな曜の想いを聞かされてしまったら、俺は単なる部外者。彼女たちの好きにさせようと思う。

「そうかい。分かったよ。曜の想いは届いた」

「えっ??:じ…じやあ…:」

「千歌と一緒に何かをやりたいって曜は言うんなら、俺は何も言わないよ。千歌と楽しくスクールアイドルをやればいいと思う」

俺の今の言葉で分かると思う。

曜の俺の言葉を聞いて、とても嬉しそうな笑顔を浮かべる表情で分かると思う。

俺は曜が千歌と一緒にスクールアイドルをすることを許可した。別に一緒に楽しい

ことをするわけだから、俺が引き止めることはしなくてもいいだろ？

「ありがとう遼くん！だ〜い好き！」

「うおっ!?!ば…馬鹿！いきなり抱きつくな！」

曜は椅子から立ち上がって、俺の方に向かってまっしぐらに体に抱きついてくる。

突進してくるかのように抱きついてきたので、少しばかり曜の抱きつきは嬉しいが、とても痛い。

俺は曜を自分の体から引き剥がし、『だけど』という形で俺は曜にアドバイスをした。

「でももし何か問題が起きたり、お前の身に何かあったときには、やめた方がいいとおも  
うぞっ。」

「うん！相談に乗ってくれてありがとうね？」

「別に構わないよ。また相談したいことがあったら、俺に話してくれていいからさ」

「うん！ありがとう！」

これにてひとまず曜の相談事は一件落着した。



2 回もの曜からのお礼を貰ったあと、これからの今日の予定で曜からとある提案をされた。

「あつ、そうだ！これから海に行かない？」

「海？何で突然……」

「今から果南ちゃんのところに行って、ダイビングでもやってこうよ！千歌ちゃんも誘ってさ！」

曜からの提案は、今から果南の家に行き、果南に頼んでダイビングをしようということだった。

果南っていう子は、名前は松浦 果南。

実は曜と俺の1つ年上なんだけど、俺や曜、千歌は果南に対してはこういう風呼び捨てなんだ。

幼馴染みたる所以、小さい頃からこの4人でずっと遊んでたから、ずっとこんな感じなんだ。

果南の家はダイビングショップを経営している。

だから果南にダイビングしたいって言えば、果南は快くダイビングの準備してくれ

る。だから曜は今日はダイビングをしようと思つ先に言い出した。

今日は天気も雲ひとつない快晴だから、良いダイビング日和だと思う。部活もないし、今日は何もすることがないから別に良いか。

「俺は別に良いよ。千歌が今日は休日だから、まだ寝てるんじゃないか？」

「まだ9時だから、きつと寝てるね……」

千歌は休みの日はいつも寝てばかりだから、きつと今も千歌は寝てるだろうって、曜とそう言つて一緒に笑みを浮かべた。

するとここで曜からまたの提案が出る。

「よしっ！こうなつたら千歌ちゃんを起こしに行こうよ！それで、果南ちゃんの家に行き直して！」

今から家を出て千歌の家に向かい、寝ているであろう千歌を叩き起こしたあとで、ダイビングショップの松浦家に向かうという予定を提案してくれた。

「よし、じゃあ俺も準備しよー！」

その予定には俺も賛成し、俺も着替えて準備をしようと意気揚々と部屋を駆け上がる。

天気は晴れてるが、気温は23度。

湿度もあるからそれなりに暑い。ブルーのジーンズにTシャツ、上着にパーカーでも羽織れば十分だ。

「お待ちせー！待った〜？」

それで1度着替えるために自分の家に戻っていった曜は、下は太ももの半分しかないショートパンツ、上は白地に水色でYと書かれたTシャツに、上着として緑のパーカーを着てやって来た。

太ももが凄く見入ってしまうが、曜にバレると何となく展開が分かるので、話を切り出して曜が持っているカバンの中身の話を持ち出す。

「そんなに待ってないから大丈夫だけど、曜はなんで学校の水着をカバンに入れてるん

だ？」

「ダイビングは1日やるわけじゃないし、ダイビングが終わったら少し泳ごうかなって！」

「左様でございますか……」

ダイビングを終えたら、曜は学校の水着で海で泳ぐらしい。水泳好きは海でも泳ぐの  
かと思いつつ、曜の水着姿を想像する。

浮き上がる曜のボディラインや、女の子を象徴する胸がボンツと強調されて、しかも  
学校の水着を着ている曜の姿をを想像するだけで、鼻血がドバドバと出てしまいそう  
だ。

「遼くん、今…変な想像したでしょ？」

「ううん。別に曜の水着姿は想像してないから」

「してるじゃん！私の魅惑の水着姿を遼くん想像してるじゃん！遼くんは変態だ！」

「あつ…悪い。つい口が滑っちゃった」

つい想像していたことを口にしてしまい、膨れっ面な曜に変態と言われてしまった。

だが後悔はない。男性は女性の体を見てしまう生き物だから。

だが自分で魅惑の水着姿という辺り、曜は自分の体をどう思ってるんだ？生足魅惑のマーメイドか。

「まっ…とにかく早速千歌の家に行こうよ。千歌のやつまだ寝てるだろうから、2人で千歌のことを思いっきり脅かしに行こうぜ！」

とにかく俺は曜に千歌の家に行こうと促す。

そして尚且つ、千歌の家に向かう間に千歌をどう脅かそうかと提案を試みた。千歌を叩き起こすには、一気に目が醒めるような脅かし方をすれば、千歌もびっくりして驚くと思うからだ。

「いいね！どんな風に脅かそうか？」

「例えば、俺か曜のどつちかが事故にあつたって言ったら…って、逆に刺激が強すぎるか？」

「うん。千歌ちゃん泣いちゃいそう…」

流石に事故ったって嘘の事を千歌に言ったら、千歌のやつは絶対に怒るだろうな。何気にあいつは俺と曜のことを一番大切に思ってるらしいし……。

それなりに俺も曜も千歌とずっと一緒にいたわけだから、この3人のうち1人がいなくなったら、流石に千歌もめっちゃ悲しむなこれ。

「まあ千歌の家に着くまでに考えよう。じゃあ、自転車で千歌の家に出発だ。曜、いつものアレ！」

「うん！行くよ〜！全速前進〜！」

「『ヨソロー！』」

こうやって何かしらで出かけるときは、曜と一緒に『ヨソロー！』をするのがいつもの恒例。

お互いに前向きに頑張ろうっていう意味合いで、俺と曜だけの特別な掛け声でもある。本当は船が前進するときにかける声なんだけどね。

「じゃあ、出発だ〜！」

「えへへっ♪ヨースロー！」

こうして俺と曜は、千歌の家に向けて出発した。

今日この1日を、精一杯楽しむ。

その想いだけを胸に乗せて……。

けど、物語はここからなのだ。

9人の少女と、1人の少年が互いに寄り添い合い、『輝き』を目指す物語が今、始まる！

## #2 輝きたい！前編

普通な私の日常に、突然訪れた……奇跡。

何かに夢中になりたくて

何かに全力になりたくて

脇目も振らずに走りたくて

でも、何をやっていいか分からなくて

くすぶっていた私の全てを吹き飛ばし

そして、舞い降りた！

それが………



「スクールアイドル部です!春から始まる!スクールアイドル部です!!」

私の名前は、高海 千歌!高校2年!

静岡県沼津市にある、内浦という小さな町に住んでいる私は、浦の星女学院っていう、いわゆる女子校に通っているの。

家は『十千万』っていう旅館に住んでいて、三姉妹の中で一番下の末っ子。特に自慢することも、特技も何もない、至って普通の女の子。

そしてそんな普通の私は、とあることに挑戦しようとしている。

それは、スクールアイドルを始めること。

「スクールアイドル部です!春から始まるスクールアイドル部です!よろしくお願います!」

きっかけは東京に行つてからんだけど、話が長くなってしまったので割愛。

幼馴染みで大事な友達でもある曜ちゃんに手伝ってもらつて、今年に入ってくる新入生に対して勧誘を行なっていた。

今日は4月7日。

今日は学校の入学式で、それと同時に各部活動が部活に入りませんかと勧誘を行なっているのが、この学校の毎年恒例である。

「輝けるアイドル！スクールアイドル〜！」

だから私も負けじと、大きく声を張り上げ、私と一緒にスクールアイドルをやりませんかと、新入生に対して入部の勧誘を呼びかけた。

けど、結果は散々だった。

「もう〜！〜！どうして来てくれないの〜！」

「全然だね。千歌ちゃん……」

誰一人として私たちを見ることもなく、新入生の人たちは他の部活の方へと足を運んでいってしまった。

「千歌ちゃん……」

曜ちゃんは私を心配そうに見つめてくる。どうするのかと、名前を言って尋ねてくる。もちろん私はまだ全然諦めてないし、もしかしたら言い続けてれば1人くらい来てくれると思う。

だから私は、言い続けることにした。

「まだまだ。きつと言い続けてれば、きつと私たちのところに来る人はいると思うし!」  
「うん。そうだね!よしっ!私も手伝うよ!」

私のために手伝ってくれる曜ちゃんが嬉しくて、どうしても1人でも多くの新生を勧誘しようと声をかけて言い続けた。

あれから10分も言い続けた。けど……

「スクールアイドル部で〜す……」

「大人気……スクールアイドル部で〜す……」

結局のところ、あれから誰も来なかった。

もう私たちの前には誰もいなくて、遠くで他の部活動に集まっている新生の姿がい

くつも見られた。

私も曜ちゃんも、やる気が消沈していた。

台座の代わりにみかん箱の上に背中合わせで座り、私と曜ちゃんは黄色いメガホンを持って、細々と呟いていただけだった。

せつかく作って用意していたスクールアイドル部のチラシも全くもって無駄だった。

「全然だね……」

「うん、そうだね……」

ずっと呼び続けても、誰も来てくれない。こうなってしまうては、もう仕方ないのかもしれない。

そう思った私は、曜ちゃんに話す。

「諦めよう曜ちゃん」

「千歌ちゃん……」

「こうやってずっと呼び続けても仕方ないもん。諦めるのも、きっといいことだよ！」

諦めるのも大事。そんなことを自分にも言い聞かせるように言い、曜ちゃんもそのことには私の意見に賛成してくれた。

「じゃあ、引き上げようか?」

「うん、そうだね」

そう言つて私はみかん箱から立ち上がり、視線を学校の昇降口付近へと向かせた。

そんなときだった。

「……………っ!!」

「…?千歌ちゃん…?」

曜ちゃんは首を傾げ、私の名前を呼ぶが、当の私は曜ちゃんの声すら全然聞こえていなかった。

なぜなら私は、目線の先に見つけたある新生たちに、目を奪われていたからだ。

「花丸ちゃん、学校終わったらどうしようか？」

「うーん、どこかでルビイちゃんと一緒に何か食べに行きたいぞらっ♪」

楽しそうに横に並び、話をする2人組の女の子。

2人とも胸のところを見るとリボンが黄色だから、間違いなく新入生だった。2人も背が小さく、私は2人がとても可愛かった。

1人は赤い髪をしていて、頭の両脇に髪の毛を下げたツインテールの女の子。もう1人の女の子は、黄色いカーデイガンを着ていて、髪はサラサラした真っ直ぐなロングヘアだった。

私は思った。もうこれは最後のチャンスなのかもしれないって。そう思った私は、すぐさま彼女たちの元へと駆け寄った。

「美少女……あれっ!？」

曜ちゃんも2人の新入生の存在に気づいたけど、いつの間にか私がそばにいないことに気づいた時、曜ちゃんはそれに驚いて、座っていたみかん箱の上から曜ちゃんは転げ落ちた。

「あのっ!」

「ずらっ!?!」

「スクールアイドルやりませんか!?!」

「……ずらっ?」

私に突然呼び止められた黄色いカーデイガンを着たまっさらな髪の毛の長い女の子は、驚きのあまりに、『ずらっ!?!』という言葉が漏らす。

ツインテールの女の子も私に呼び止められ、驚いて目を見開いてキョトンとしていた。

でも、『ずら』ってなに?

「えっ?……ずらっ?」

「あつ……いいえ。何でもありません」

自分でも『あつ……』と内心で気づいたのか、彼女は思わず口元を両手で隠すように抑え、私に向かって何でもないと話す。

2人とも突然として私に呼び止められ、ちよつと怯えるような行動もしていたけど、その怯えによる警戒心を解くために、私は笑顔で2人に接する。

「大丈夫！悪いようにはしないから！あなた達ならきつと人気が出る！間違いない！」  
「いや……でも、マルは……ちよつと……」

笑顔でそんな風に話をする、マルという女の子は困った表情を見せ、勧誘に対して拒否しようと言葉を投げかける。

もう1人のツインテールの女の子はというと、意外にも私があらかじめ作っていた宣伝用の紙に対して、じくつと彼女は見つめていた。

試しにその宣伝用の紙を動かすと……

「きゃっーきゃっっ、きゃっー！」

「……………」

彼女も紙と一緒に歩いてきて、どうやら彼女はスクールアイドルに興味があるのかと私は思った。



「もしかして、興味あるの?」

私はツインテールの女の子に対して聞いてみると、彼女は宣伝の紙を見て間を空け、それから私に向かって今度は彼女から尋ねてきた。

「ライブとか、あるんですか!？」

質問に対して質問で帰ってきたけど、彼女はライブとか聞いてくるあたりは、きっとスクールアイドルに興味があるんだろうと、私の中でそう決めて、私は彼女の質問に答える。

「ううん、ライブとかはこれからなんだ」

「そ…:…:…:…:…:…:…:…」

ツインテールの子は、その答えにしよぼくんと肩を落としてしまう。だけど私は、『だけど』に続けて、彼女に話を始めた。

もちろん、勧誘である。

「だけどあなたみたいなの可愛い子に、是非スクールアイドル部として、スクールアイドルをやって欲しいの！だから、是非……！」

そう言っつて私は、彼女の右腕のあたりをちよこんと左手で触った途端、彼女の表情が一変する。

その場の空気も、さつきより張り詰めたような？少し変わったような雰囲気にも包まれた。

「……………」

「んっ？どうしたの？」

「……………ずら……」

ツインテールの彼女は、青ざめた表情になっていた。きつかけがどうなのか分からなけれど、なぜか彼女の顔色が悪かった。

するとマルという女の子が、また「ずらっ」と言いながら耳を抑えた。私はその行動

に疑問がよぎったが、すぐに起こる事態に対して、そういうことだったのかと、私でも理解することが出来た。

「ピギヤアアアアアアア!!」

「うわっ!?!ど…どうしたの!?!」

何かの鳴き声のように、ツインテールの女の子は顔を真っ赤にして甲高い声を上げて叫んだのだ。

私は突然のあまり、片足立ちになって、驚きを隠せないポーズをとっていた。

なぜこの子は叫んだのか?その理由は、マルという女の子の発言ですぐに明らかになった。

「ルビイちゃんは、究極の人見知りずら……」

「な…なるほどね……」

マルという子は、赤い髪のツインテールの子に対して、ルビイちゃんと呼んだ。このツインテールの子は、ルビイちゃんと言うらしい。

ルビイちゃんは、究極の人見知りらしく、もしかしたら私がルビイちゃんの腕を触ったから、その衝動でルビイちゃんは叫んだということになる。

私はやっと全部理解出来た。

これでまたスクールアイドル部の話を続けられると思ったが、これだけでは終わらなかった。

「わ…わわっ…わあああ!?!」

「えっ!?!」

突然、上の方から声が聞こえて来て、上を私は見上げると、満開に咲いている桜の木々の中から、なんと女の子が落っこちて来たのだ。

これには私も驚きを隠せなかった。

だって、いつからいたのか分からないし、突然人が木から落ちてくるなんて思いもしなかったから。

ドスンッ!

そんな鈍い音がしながらも、木から落ちて来た女の子はあの高さから足で着地した。だがそれなりの高さだったため、着地した時の衝撃が足に集中し、木から落ちてきた彼女は足の痛みを堪えるのに夢中だった。

「うあ……あ……足い……」

そして彼女の悲劇は、まだ終わらなかった。

「うげっ!」

「うわっ!だ……大丈夫!」

なんと彼女が持っていたカバンが、彼女の後頭部はちょうどジャストミートするよう落ちてきた。

足の痛みにプラスで頭の痛み。不運が度重なる形で悲劇は彼女を襲った。すると曜ちゃんはあるものを見て叫ぶ。

「見て!この子も新入生だ!」

「本当だ！黄色リボン！」

よく見ると彼女も新入生だった。胸にある黄色いリボンが何よりも証拠だった。私は木から落ちてきた彼女に対して、足や頭の痛みが大丈夫かどうか尋ねる。

「ねえ、大丈夫？」

「……………フツ、フツフツフツ……………」

すると彼女は痛みを堪えるどころか、なぜか不敵に笑いを見せて、突然笑いながら話を始めた。

「ここはもしかして…地上？」

「うわっ……………」

「ぜ…全然大丈夫じゃなさそう……………」

ここは紛れもなく地上。だけど彼女は、意笑いながら味不明な言葉を口にしたので、私たちはその言葉にドン引きしてしまう。

それからまた、彼女は私たちに尋ねてくる。

「ということはあなたたちは、下劣で下等な人間ということですか?」  
「……………うわっ」

曜ちゃんは彼女のことに関して何かを悟ったのか、曜ちゃんはまた一步後ずさる。  
それでも彼女の足とかが大丈夫じゃないかと、私は彼女の足をチヨンチヨンと触りながら尋ねる。

「それよりも、足…大丈夫?」

ズキッ!

「いつ……………痛くわけないでしょ!この身体は単なる器なのだから!」

私に触ったことで痛みを感じ、目に涙をこぼしながらも彼女は堪えながらそう話す。  
彼女は胸を張り、足の痛みをもろともしないように強がつて見せながら、彼女は私たち

に話す。

「ヨハネにとつてこの姿はあくまで仮の姿…」

「ヨ…ヨハネ？」

「か…仮の姿？」

ヨハネ、それが彼女の仮の名前なのだろう。

名前を名乗ってしまったヨハネちゃんは、表情を全く変えず、もう一度自分の名前を名乗った。

「おっと、名前を言ってしまったね。聞いて驚くがいい！我が名は、墮天使ヨハ…」

「善子ちゃん？」

「……………えっ？」

するとヨハネちゃんの話の途中で、いきなりマルという子がその子の本名と思われる名前を呼ぶ。

あたかもマルという子は、頭の右側がお団子ヘアになっている女の子の発言に対し



て、とても聞き馴染みのあるように思えた。ヨハネちゃんは、自分の本名を呼ばれると、何で名前を知ってるのよと、驚きを隠せない表情へと移り変わる。

そしてマルという子は自分の中で何かを思い出し、笑顔になってその子に近づいて話をする。

「やっぱり…やっぱり善子ちゃんだ！私だよ！花丸だよ！幼稚園以来だね!!」

「はっ、は・な・ま・るう!?!」

善子ちゃんは自分の昔の友達であろう花丸ちゃんに迫られ、彼女は幼稚園の時の友達が目の前に現れたことに慌てながら、話を逸らそうとする。

「に…人間風情が何を言ってるの？私は善子ではありません。私は墮天使ヨハネです」

明らかに誤魔化して話を逸らそうとしている彼女に対して、花丸ちゃんは突然善子ちゃんに向かってジャンケンをし始めた。

「ジャ〜ンケ〜ン……」

「ポンツ！」

それに善子ちゃんも乗っかって花丸ちゃんとジャンケンをすると、花丸ちゃんはグーで、善子ちゃんはチョキを出したのだが、善子ちゃんのチョキはやや特殊で、右手の小指と中指を折り、親指と人差し指、そして薬指を伸ばしているのが、善子ちゃん流のチョキらしい。

そのチョキを目にした花丸ちゃんの表情は、疑問から確信の表情へと変わり、そのチョキを出した人物が善子ちゃんだけだということが理解できた。

「そのチョキ…やっぱり善子ちゃんだ！」

「よ…善子言うなっ！…いくい？私はヨハネ！墮天使ヨハネなんだからね〜！」

そう善子ちゃんは私たちに言い残し、カバンを上手く頭の上に乗せながら走り去ってしまうが、花丸ちゃんは善子ちゃんを追いかけ、ルビィちゃんは花丸ちゃんを追いかけるように走り去ってしまった。

「待ってよ善子ちゃん〜！」

「善子言うくなく!」

「花丸ちゃん待つてよ〜!」

自分自身、疾風の如く現れ、風のように去っていく彼女たち3人を、どうにかしてスクールアイドル部に招き入れたいと思った。

「行っちゃった……」

「曜ちゃん!あとで今の3人を、スクールアイドル部にスカウトしに行こうよ!

「えっ?今の3人を?」

「うん!3人ともとても可愛かったし、スクールアイドル始めたらきつと人気になると思う!」

花丸ちゃん、ルビィちゃん、善子ちゃんの3人はとても可愛かった。だから是非と、スクールアイドル部に勧誘したい気持ちを曜ちゃんに伝えた。

「あとでスカウトしに行こう!」

「あ…あははは…。大丈夫かな…?」

私は右手で拳を作り、あの3人を絶対に入れてやろうと思った。曜ちゃんは私の姿を見ては、少しばかり心配そうな表情をして苦笑いを浮かべた。

「ちよつと……お話いいですか？」

「えっ……?」

その決心を固めた次の瞬間、私と曜ちゃんの後ろから女性の声がして、私たちに声をかけてくる。

私はその声に後ろを振り向くと、私と曜ちゃんと同じ学校の制服を身に纏った生徒がいた。

風格が漂い、とても気品さが際立っていて、髪は真っ黒でサラサラのロングヘア。目は若干つり目気味で、口の下にホクロがある。

大和撫子というに相応しい女の子だった。

「貴方ですの?このチラシを配っていたのは?」

「えっ?えっ……?」

「いつ何時、スクールアイドル部なるものがこの浦の星女学院にできたのです?」

彼女はまっすぐ目つきを鋭くして、私を睨みつけながらそう話してくる。けど私は話していることがよく分からなかったから、とにかく彼女は新入生かどうか尋ねることにした。

「貴方も…新入生?」

「ちっ、千歌ちゃん!」

「んっ?どうしたの曜ちゃん?」

すると私から発せられた言葉に曜ちゃんは驚き、思わず私の肩を掴んでくるので私は曜ちゃんに対してどうしたのかと尋ねる。

すると曜ちゃんの口から、思いがけないような言葉が飛び出してきたのだ。

「千歌ちゃん、その人は新入生じゃないよ!この学校の生徒会長だよ!!」

「……………えっ!?!生徒会長!?!」

私は目の前に立っている人物が、まさかの生徒会長だとは思わなくて、ついタメ口で喋ってしまっていたことが間違いだったと考えさせられる。

ましてや胸のリボンは3年生がつけている緑のリボン。自分より年上だということが今はつきりした。

生徒会長に謝ろうと思ったけど、私より先に生徒会長から口を開いて話をする。

「ここで立ち話もなんなので、少しばかり話があるので、生徒会室に来てくれませんか？」

「あ……ああ、はい………」

私は生徒会長に言われるがまま、トボトボと生徒会長について行くように生徒会室へと足を運んで行くのであった。

曜ちゃんも一緒に生徒会室まで来てくれるけど、きつと生徒会長は私と話すんだろうな……。

そんな野暮な考えことを、私はするのでした。

~~~~~※※※~~~~~

「つまり、設立の許可どころか申請もしていないうちに、勝手に部員集めをしていたというわけ?」

「は……はい……」

生徒会長のツツコミに対して、千歌ちゃんは苦笑いを浮かべつつ、はいと言うことしか出来なかった。

私と千歌ちゃんがスクールアイドル部の勧誘をしていたところに、まさか生徒会長が出てくるとは、自分でも全く思わなかった。

私は千歌ちゃんと生徒会室まで来たものの、生徒会長は千歌ちゃんと話したいらしかったから、私は仕方なく生徒会室の外にいて、廊下から千歌ちゃんの様子をしばらく見守っていた。

「悪気はなかったんです。ただみんな勧誘してたんで…ついでと言うか…焦ったというか…」

千歌ちゃんはなんとか事情を話して、この場をなんとか切り抜けようと必死に話していた。

ちなみに生徒会長は、家は網元で結構古風な家系らしく、名を黒澤家。

生徒会長の名前は、黒澤ダイヤ。

「部員は今何名いるんです？この紙には、1人しか書かれていませんが？」
「今のところ…1人です」

頭をポリポリと右手で掻きながら、千歌ちゃんは生徒会長の質問に答えていく。

私も千歌ちゃんの助け舟を出したいけど、廊下からでは助け舟を出すにはとても難し

かった。

生徒会長はとても厳しい人。特にルールや規則に関してはとことん厳しい……らしい。

『部の申請は、最低でも“五人”は必要ということは知っていますわよね?』

「だ……だから勧誘してたんじゃないですか」

バンツ!

「うわあ!?!」

ダイヤさんは机の上に思いつきりバンツ!という音を立てて、部の申請書を叩きつける。

「……あつ! いったあ〜!」

「……ふつ、ふふ……」

でもどこか抜けていて、机を強く叩き過ぎたせいで、何故か自分の手まで痛めてしまった。

その様子を見た千歌ちゃんは、生徒会長の天然ぶりに思わず口が緩んで笑みがこぼれてしまう。

ただその様子を見逃さなかった生徒会長は、千歌ちゃんに指をさして言い放った。

「笑える立場ですよ！」

「ぎ……ぎめんなさい……」

すぐさまに千歌ちゃんは謝ったものの、生徒会長は部の申請書を見てため息をつき、生徒会長は千歌ちゃんに対して話す。

「とにかく、部員が5人も満たないこんな不備だらけの部の申請書、受け取れませんわ」「ええ〜!!」

突きつけられた現実には、千歌ちゃんはどうなだれる。

とりあえず生徒会長からの話は終わりそうだから、私は突きつけられた現実になだ

れる千歌ちゃんに向かって、そつと声をかけた。

「千歌ちゃん……1回戻ろう?」

後ろから私の声が聞こえたのか、千歌ちゃんは悔しいとばかりに両肩を意図的に上げたあとで、千歌ちゃんは生徒会長に言い放つ。

「じゃあ、また5人集めてまた持つてきます!」

「別に構いませんけど、例えそれでも私は承認は致しかねますがね……」

「……っ!?!」

するとダイヤさんは突然、5人集めて持つてきたとしてもスクールアイドル部の設立は認めないと言い出した。

不備だらけの申請書は受け取らないといったばつかりなのに、今度は例え持つてきたとしても申請はしない。とても矛盾だかけの発言だった。

「ど……どうしてです!?!どうして承認してくれないんですか?教えてください!」

千歌ちゃんは承認してくれない理由をダイヤさんに鬼気迫るように問い詰めた。
するとダイヤさんの口から発言された答えは、とても分かりやすい答えであるが、私
の中では少し疑問の残る答えであった。

「それはですね…私が生徒会長でいる限り、スクールアイドル部は認めないからですつ
！」

「そ、そんなあゝゝ!!」

ダイヤさんの言葉と同時に、生徒会室の中に突風が吹いてくる。

千歌ちゃんはそのダイヤさんの答えに納得してしまったのか、その言葉や風に気圧さ
れ、千歌ちゃんは涙を浮かべながらそう叫んだのだった。

千歌ちゃんのスクールアイドル部の設立は

まだ道のりは遠そうだ。

そう心の中で思った、私であった。

#3 輝きたい！ 後編

千歌ちゃんと生徒会長との話を終えて、生徒会室を出た私と千歌ちゃんは学校を出た。

「とりあえず、今日は家に帰ってまた考えよう？」

「そうだね。うん、今日は帰ろう」

今日は入学式だけだったから、普通ならお昼頃には帰れたんだけど、今はもう太陽がオレンジ色で、だんだんと沈もうとしている時間だった。

時間で言えば、だいたい3時だ。

「あつ、ちようどバスが来た！」

「本当だ! 曜ちゃん急ごう!」

「うん!」

私と千歌ちゃんは、学校への通学は主にバスを利用している。自転車もあるけど、の家からだ自転車はとも遠いから、バスを利用してるんだ。

ちよど来たバスに私と千歌ちゃんは乗り込み。バスは千歌ちゃんの家へと向かって走り出す。

ブロロロツ!

バスの走る音と、その原動力になるエンジン音がざわめくように私の耳に入ってくる。

それに私と千歌ちゃん以外のお客さんが乗っていなかったから、私と千歌ちゃんだけで貸切状態だった。

「……………」

「……………」

千歌ちゃん、多分生徒会長から言われたことにきつと落ち込んでいるに違いない。バスの窓からずつと外を見て黄昏ているし、何より千歌ちゃんの表情はどことなく曇っていた。

私から話しかけようと思ったけど、なんだかそれがとてもできない雰囲気になってしまっていた。

1番大切な友達を励まさないやいけないのに、私ったら……なにやつてるんだろう……。

そんなネガティブ思考に思い馳せていた私の体を揺るるように、千歌ちゃんが私に話しかけてきた。

「曜ちゃん、曜ちゃん」

「えっ？あつ、なに千歌ちゃん？」

あまり突然だったから、慌てて笑顔をより繕って千歌ちゃんに言葉を返すと、千歌ちゃんは私には目を向けず、下に俯いて私に話した。

「私、スクールアイドルを諦めようと思う」

「……………っ!」

突然のその言葉に、私の表情は驚きの表情で固まってしまった。悔しさが入り混じった表情を浮かべていた千歌ちゃんは、そんな答えを出した。

でも、それが千歌ちゃんの出した答え。

私からはなにも言わない。私が言うのは、千歌ちゃんに対していつものアレだけである。

「じゃあ……………やめる?」

そう言って、私は問いかけた。

でも千歌ちゃんは、今回ばかりは本当に諦めきれなかったようで、千歌ちゃんは言う。

「やだ! やめたくない! でも…………」

やめたくない。それがきつと千歌ちゃんの本心。

やっと自分がやりたいことを見つけられたって、千歌ちゃんはとても喜んでいた。なのに、生徒会長の一言で全てが崩れ去った。

『私が生徒会長である限り、スクールアイドル部は認めないからですっ!!』

「生徒会長にあんなこと言われちゃったら、もうどうしようもないよ。だって、学校ですクールアイドルを始めたくても、正式に部として…生徒会長から認めてもらえないんだもん……」

完全に千歌ちゃんは落ち込んでいた。

今にも千歌ちゃんは、ここで大声で泣いてしまいそうな、そんな辛くて悲しい表情を浮かべていた。

私は、千歌ちゃんを助けてあげたい。

1番大切な友達を、絶対に泣かせたくない。

何か。千歌ちゃんを元気にさせる方法……。

私は千歌ちゃんを元気にさせ、そして尚且つ、千歌ちゃんをスクールアイドルを続けさせる方法を、私は頭をフル回転させて考えた。

そしたら閃いた。とてもいい方法を…。

あつ、そうだ!あの人なら……!

私はきつとあの人なら、あの人なら千歌ちゃんを元気してあげられると思う。千歌ちゃんを、またやる気にさせてくれると思う。

そう思った私は、千歌ちゃんに対して話し出す。

「あつ、そうだ!千歌ちゃん、遼くんが言ってたよ。『あいつがアイドル?ぶっ…』ってね!」

「えっ?!遼くんが!?!」

さつきまで涙を堪えていた千歌ちゃんは、私の言葉を聞いて驚いた表情を見せる。泣くどころか、遼くんが言ってたこと(嘘)に対して、千歌ちゃんはある得ないといった表情を見せていた。

「酷い!遼くんそんなこと言ってたの!?!」

「う…うん。そうなんだ…。」

千歌ちゃんは私に向かって顔を近づけて聞いてくるから、私は首を縦に振りながらうんうんと、千歌ちゃんの質問に答える。

あまりに千歌ちゃんを怒らせたなら危ないかな〜と思った私は、『でも』という逆説をたて、千歌ちゃんに遼くんが本当に言っていたことを話す。

「でもね、遼くんは千歌ちゃんのスクールアイドル活動を応援してるって言ってた！」「えっ?! 本当?!」

「うん！ 本当！ 『千歌が何かをやるんなら、俺は千歌のことを応援するよ』 って！」

遼くんが言ったことは本当だよ。

前に私が千歌ちゃんとスクールアイドルをやっているかを遼くん相談しに行ったときに、遼くんは私に言っていたからね。

「それは本当？ 本当に本当?!」

「本当に本当だよ！」

2度も千歌ちゃんは聞いてくるので、私は笑顔で千歌ちゃんにそう言って信じさせる。

でも千歌ちゃんは、思いがけない行動に出る。

「じゃあ電話しよっ!」

「ええ!?なんで電話するの!?!」

「遼くんはたまに千歌のことからかうから、曜ちゃんの言ったことが本当なのかなって
…」

た…確かに遼くんってば、千歌ちゃんのことをよくからかってたりしてたときが多くあつた。

だからその部分で千歌ちゃんは、私が言った遼くんのことを、あんまり信じてないみたいだった。

「遼くん部活中だよ!駄目だよ千歌ちゃん!」

「部活中だったとしても、あとで遼くんから掛け直してくればそれでいいよ!」

そんなダメもとのような発言をした千歌ちゃんは、スマホをささつと指で操り、ダメもとで遼くんへと電話をかける。

私はもう仕方ないと思い、千歌ちゃんが電話しようとしているのを止めようとはしなかった。

ブルルルツ　ブルルルツ

それに普通なら、遼くんは今も部活中。

そんな簡単に電話が繋がるわけが――

ブツッ！

『……もしもし?』

「あつ、遼くん? 私だよ、千歌だよ!」

『よう千歌。こんな時間にどうしたんだ?』

つ……繋がつたあああ〜!?

嘘っ!?今、普通に電話繋がったよね!?

えっ!?なんで普通に打ちやうの!?

「まだ部活中だった?」

『いや、今は休憩中だよ。それで?千歌が俺に電話してくるなんてどうしたんだ?』

何だ、部活の休憩中だったのかあ……。

いや、遼くんが部活をサボってたら、夜に遼くんの家に行きこうと思ったんだ。

でも、そんな心配は全然いらなかったみたい。

「あのね、遼くんって…私のスクールアイドル活動を応援してるの?」

『なにを藪から棒に……』

「曜ちゃんから話を聞いたの。ねえ、本当はどうなの?応援してるの?」

千歌ちゃんはそう言って遼くんに真意を尋ねる。

正直、私の言ったことは嘘も混じってた。特に、『千歌がアイドル？ぷっ…』ってところが、私が適当に言ったことなんだけど……。

お願い遼くん！なんとか言って！

私は心の中でそう願った。もし言ったことが嘘だったら、本当に千歌ちゃんはスクールアイドルをやめちゃうかもしれない！いや、絶対にやめちゃう！

心臓のドキドキ音が鳴るなかで、私の願いが遼くんに届いたのか、しばらくの間が空いたけど、遼くんは千歌ちゃんに言い放つ。

『そりゃもちろん。幼馴染みがかかやろうとしてることを、俺が応援しないわけないじゃないか』

「…っ！うん、そうだよね……」

千歌ちゃんは遼くんの言葉に、嬉しさのあまりに目から涙がポロポロと溢れ出てくる。

安心というか、自分が誰かから応援されていることに、千歌ちゃんは嬉しかかったんだと思う。

千歌ちゃんが涙を拭っても、拭っても拭いても拭いても、目から溢れ出てくる涙は止

まらなかった。

そんな中で千歌ちゃんは、遼くんにお礼を言った。

「うん。ありがとう遼くん……」

『おい、今の一言だけで泣いてんのか?』

「ぐすつ……泣いてない。泣いてないもん!」

遼くんの問いかけに、千歌ちゃんは泣いていないと大声で強がるけど、泣いているせいで、千歌ちゃんの強がりには全く遼くんには通じなかった。

遼くんはそれで千歌ちゃんに話を続ける。

その話とは、私に関してのことだった。

『それに曜だってお前のこと応援してるんだ。そのためにも、千歌はめげずに頑張れ!』
「そうだよ千歌ちゃん。私も千歌ちゃんのことを応援するから、スクールアイドル、やめないで?」

「曜ちゃん……」

遼くんの話に便乗して、私は千歌ちゃんの左手をぎゅっと両手で握りしめ、スクールアイドルをやめないでと心の底から言い、自分のやりたいことを貫いて欲しいと、心の中で呟いた。

千歌ちゃんは遼くんや私の言葉を聞いて、下に俯いて考え込む。きっとスクールアイドルのことだから、少しは考え直してくれただろうか？

「千歌ちゃん……」

『千歌……』

私も遼くんも、千歌ちゃんが答えてくれるのを待っていた。最善な答えを出してくれる千歌ちゃんを、私と遼くんは固唾を飲んで待ちわびた。

そして考えがついたのか、千歌ちゃんは俯いていた顔を上げ、電話中のスマホをスピーカーにし、私と遼くんに向かって答えを言い放った。

「分かった。千歌、スクールアイドル続けるよ！」

『……うん。それでいいんだよ』

遼くんは笑顔なのだろうか。千歌ちゃんの言葉を聞いて、少し安心したような言葉をかけていた。

私も千歌ちゃんの言葉を聞いて、ホッと胸をなでおろすと同時に、なぜか私の心の底から、何かこみ上げてくるものがあった。

やばいなあ……なんか私まで泣いちゃいそうだよ。

ダメダメ! 私が泣いちゃいけない! 堪える堪える!

そんな中、私が泣いちゃいけないと堪えているとき、そんな私の感情を吹き飛ばすように、遼くんはあることについて千歌ちゃんに尋ねてくる。

『それで? 勧誘はうまくいったのか?』

「ぎくっ! いや……それはその……」

『その様子じゃ、駄目だったようだな』

千歌ちゃんが勧誘で全然ダメだったことが、遼くんに一瞬にしてバレてしまった。

まあ千歌ちゃんは単純なときもあるし、そうやって遼くんにもからかわれたりしてるから。

私は遼くんバレてしまった千歌ちゃんの慌てている表情を見て、不思議と笑って

た。

何でだろうね？これは遼くんパワーなのかもね。

そしてまたそんなことを考えていたとき、電話の向こうから遼くんとは違う人の声が聞こえてくる。

『おい楠神！そろそろ練習だ！』

『あつ、はい！分かりました！』

遼くんの部活の先輩の声のようだ。そろそろ練習を再開するからと、遼くんを呼びに来たのだろう。

それから遼くんは、千歌ちゃんに向かって言い放つ。ポジティブな、前向きな言葉をかける。

『じゃあ千歌、生徒会長に負けんなよ。めげずにやれば、きっと承認してくれるさ』
「うん！ありがとう遼くん！」

ブツツ！ブツツ　ブツツ

そして千歌ちゃんが遼くんに対してお礼を言ったところで、電話はそこで途切れ、スマホから『プーツ プーツ』と音が鳴っているだけだった。

千歌ちゃんは電話を切り、スマホの画面を真っ暗にした後で、千歌ちゃんは私に顔を向けて話す。

「曜ちゃん、こんなことに迷惑かけちゃってごめんね? 私……もう迷わないから!」

「うん! 千歌ちゃん、全力で頑張つてね!」

「……っ! うん! 千歌、頑張る!!」

これにて問題は解決。千歌はスクールアイドルを諦めず、まず生徒会長に何が何でも部として承認してもらおうと、彼女は決意するのである。

そして千歌ちゃんは、ただ真っ暗な画面になっているスマホに向かって、彼女は頬を真っ赤に染め、なんだか幸せそうな表情を見せながら言う。

「遼くん、ありがとう……／＼／＼」

スマホをぎゅつと握りしめながら遼くんにお礼を言った千歌ちゃんは、遼くんから応援されたからとても嬉しそうで、不意に笑みを浮かべていた。

けど、私はその笑顔の表情を見たとき、何故か胸のあたりがチクツと痛みが走る。

そして千歌ちゃんが発した遼くんへのその言葉にも、チクチクと胸に痛みが走った。何故そんなことが起きてるのか？

そしてそれは何が原因なのかは、まだ先の話……

~~~~~※※※~~~~~

私と千歌ちゃんは、そのあとで無事にバスで千歌ちゃんの家である『十千万』に帰って来た。

だけどちようどその時、千歌ちゃんのお母さんに捕まり、回覧板を渡してくるという頼みごとを頼まれちゃって、今は千歌ちゃんと一緒にフェリーに乗って、とあるの家に向かっているところ。

「もう！ やつとお家に帰って来たのに、お母さんったら回覧板渡してきてって頼んでくるし、もう一体なんなのよ!!」

「あはは…タイミングの問題だね…」

やつと家に帰ってきたところをお母さんに捕まり、そして回覧板を渡してくるというお仕事を任された千歌ちゃんは、不満を大きな声で言い放つ。

逆に私は、自分の家に帰っても良かった。

けど千歌ちゃん一人じゃ寂しいかなって思って、私も千歌ちゃんと一緒にフェリーに乗っている。

「果南ちゃん、家にいるかな？」

「家にいるんじゃない？いかなかったらいなかったで、ポストに入れておけばいいよ」

千歌ちゃんと一緒にフェリーで向かっていると、果南ちゃんのお家。

回覧板と一緒に、みかん数個を果南ちゃんへの手土産として、小さなフェリーでゆらゆらと果南ちゃんの家に向かっていた。

「う〜ん……何でだろう……」

「んっ？どうしたの千歌ちゃん？」

「う……うん。ちよつとね……」

そんなとき、千歌ちゃんとはある人物に対して、とても疑念を抱いていた。

千歌ちゃんの様子に気づいた私は、千歌ちゃんにどうしたのと尋ねると、千歌ちゃんは私に疑問を投げかけるように話し始めた。

千歌ちゃんが疑念を抱いている人物は、生徒会長のダイヤさんについてだった。

「でもなんで生徒会長……あんなにスクールアイドル部は駄目だって言うんだろう……」



素朴な疑問だった。

『私が生徒会長である限り、スクールアイドル部は認めないからです!!』

今思えば、私もそれは感じていた。直々にダイヤの声を聞いた時も、なんか…生徒会長はスクールアイドルを嫌っているように聞こえてきた。

んっ……嫌ってる? あっ、そういえば……

私は頭の中で昔の話を思い出し、千歌ちゃんが考えているダイヤさんがなんでスクールアイドルは駄目って言うんだらうという理由を、千歌ちゃんに向けて話し出す。

「もしかしたら生徒会長、スクールアイドルを嫌ってるのかもしれない……」

「スクールアイドルを、嫌ってる?」

私の話にも、千歌ちゃんはそう言って首を傾げながら尋ねてくる。私は千歌ちゃんにさらに話す。

「うん…。前にクラスの子が、千歌ちゃんみたいにスクールアイドルを始めようって言うってたんだけど、生徒会長に駄目って断られたって…」

この話は千歌ちゃんには話していない話。だから話を聞いた千歌ちゃんは、その話を聞いて驚いていた。まずそんな話があったことにね…。

「えっ?!?そんな話あったの!?!」

「ごめん千歌ちゃん!本当なら千歌ちゃんにも言いたかったの!」

「ええ!?!先に行つてよお……」

両手を合わせ、私はそのことを千歌ちゃんに謝る。

それを横目に千歌ちゃんに関しては、他にもスクールアイドルを始めようとしていた事を知り、一緒にやりたかったなうなだれ、フェリーの柵を背に寄りかかり、グデくとうを見上げた。

私が千歌ちゃんにこの事を言えなかったのは、スクールアイドルを知った千歌ちゃん、もうスクールアイドルにずっと夢中だったからだった。

「だって千歌ちゃん、スクールアイドルに夢中だったし、だから、言い出しにくくて……」

千歌ちゃんに申し訳ないという風に、言い出しにくかった理由を千歌ちゃん話した。

その上で、私はそれからダイヤさんが何故スクールアイドルが嫌いなのかを、噂で流れて着たことを含めて、千歌ちゃんに話した。

「それに、生徒会長の家、網元で結構古風な家らしくて、だからスクールアイドルっていうチャラチャラした感じの物は嫌ってるんじゃないかって噂があるし、とにかく嫌ってるんじゃないかって……」

これは単なる噂。

だけど、ダイヤさんの家は実際にそうらしくて、だからスクールアイドルたるものは、全部嫌いなんじゃないかって、クラスの子も言っていた。

千歌ちゃんは、私のダイヤさんについての話を聞いたあと、夕方の空を悠々と飛んでいるカモメに手を伸ばし、ぎゅつと手を握る。

「チャラチャラじゃないのにな……」

千歌ちゃんは、小さくそう呟いた。

ダイヤさんが本当にスクールアイドルを嫌っているのかは、誰を聞いても分からな

い。

だから真意は本人に聞くしかないと思う。でも、そう簡単に口を開いてくれるとは思わないけど。

「よっ！着いた！」

フェリーも目的地に到着し、フェリーが港に付けられたところで、千歌ちゃんが一番に降りて、そんな言葉を口にしながら変なポーズをとる。

「千歌ちゃん、元気になって良かった！」

「うん！千歌は元気100倍だよ！」

千歌ちゃんはすっかり元気になったから、私もホツとしている。全部、遼くんのおかげだね。

私と千歌ちゃんが、フェリーを降りてから、数分くらいずっと歩いていくと、目の前にログハウスの果南ちゃんの家が見えてくる。

そして入り口のところには、ダイビングスーツを着ていた果南ちゃんの姿もあった。

「果南ちゃん!!」

「あつ、千歌、曜! だいぶ遅かったね」

千歌ちゃんが大声で名前を叫ぶと、果南ちゃんは笑顔で私と千歌ちゃんを迎えてくれた。

けどそこで、果南ちゃんの一言が炸裂する。

「今日は入学式だけでしょ?」

「それがまあ……色々とありまして……」

果南ちゃんの一言に、私はそう言っただけで用事が遅くなったことにして話をした。

千歌ちゃんが部活を立ち上げようとして、生徒会長のダイヤさんに断られたって言うたら、果南ちゃんがどんな反応するのか自分でも分かる気がしたから、私はそう話してやり過ごした。

そして千歌ちゃんは、果南ちゃんに対して大きな袋を目の前に出して、回覧板と土産としてみかんを持ってきたことを話す。

「はい！回覧板とお母さんから！」

「どうせまたみかんでしょ？」

「文句ならお母さんに言つてよ！」

「ふふっ。はいはい」

ぶつちやけ果南ちゃんにみかンをあげることは毎回のことだから、毎回のように、千歌ちゃんと果南ちゃんはそんなやり取りになる。

そして必然、果南ちゃんのお返しにも、千歌ちゃんと果南ちゃんのやり取りは同じである。

「はい！それじゃあお返しの干物！」

「ええく!?また干物〜？」

「文句ならお母さんに言つてよ！」

果南ちゃんのお返しは、千歌ちゃんと同じように、毎回の如く干物なのだ。

だから千歌ちゃんも『またく?』って感じに、千歌ちゃんは呆れた表情を取っていた。

逆に私かというと、千歌ちゃんはみかん、果南ちゃんは干物とずっと同じものを毎回あげたり貰ったりしてるから、それを見ていて面白かった。

「ふう……よつと……」

それから果南ちゃんは、ダイビングに使う大きな酸素ボンベを運んでいたりして、私と千歌ちゃんはバルコニーにある椅子に座り、果南ちゃんが新学期から学校に来れると尋ねていた。

「それで果南ちゃんは、新学期から学校来れそう?」

「うん。まだ家の手伝いも結構あってね…。父さんの骨折も、もうちよつと掛かりそうだし…」

実は果南ちゃんは、お父さんの怪我の影響で、しばらく学校を休んでいたの。

お父さんのダイビングショップの経営も出来ないからって、果南ちゃんは無理して一人でダイビングショップをやっている。

逆に私からすると、一人でダイビングショップを経営していることに驚いていた。

無理しているはずなのに、果南ちゃん凄いなあ…。

「そつか…果南ちゃんも誘いたかったな…」

「誘う？何に？」

果南ちゃんは千歌ちゃんの言った言葉に疑問を抱き、千歌ちゃんが何に誘おうとしていたのかを尋ねると、隣の千歌ちゃんは、果南ちゃんを何に誘おうとしていたのかを、笑顔で話した。

「私ね、スクールアイドルやるんだ！」

ピタッ！

んっ？今、果南ちゃんの手が止まったような…？

気のせいかな？多分…気のせいだと思う。

「だから、果南ちゃんも一緒にスクールアイドルやりたいな…って思ってたんだけど、ま



だ果南ちゃん大変そうだから、仕方ないかな……」

千歌ちゃんは、果南ちゃんを本気で一緒にスクールアイドルをしようって誘おうとしていた。

でも果南ちゃんの事情を聞いた千歌ちゃんは、仕方ないと言って果南ちゃんをスクールアイドルに誘うのを諦めることにした。

「ふう〜ん……。まあそれに、私はもう3年生だし、たった1年しかできないから……ごめんね?」

「大丈夫! 気にしてないから!」

それに果南ちゃんは今度から3年生。

一緒にスクールアイドルを出来たとしても、一緒にやれるのはたったの1年だけ。だから果南ちゃんも千歌ちゃんにそう話し、千歌ちゃんはそれを聞いて快く受け入れた。

それから果南ちゃんは、千歌ちゃんに対して自分の今の状況を告げ、学校のことをについて話をする。

「まつ、そういうわけで！もうちよつと休学続くから、学校で何かあったら教えてね！」

「うん！学校でなにかあったら、すぐに果南ちゃんに教えてあげるね！」

「うん。待ってる！」

学校のこと、何かあったら教えるというちよつとした約束事を決めた千歌ちゃんと果南ちゃん。

2人とも笑顔を浮かべて、笑い合った。もちろん、その場にいた私も、2人と一緒に笑いあった。

そんな時…空から変な音が聞こえてる。

何かのエンジン音と、プロペラの奇妙な音が、私と千歌ちゃん、そして果南ちゃんの耳を刺激して、私たちその音につられて3人は空を見上げる。

「んっ？何だろう？」

「もしかしてヘリコプター？」

千歌ちゃんがそう言って空を見上げると、ちょうど私たちの上を、ピンク色をした派手なヘリコプターが低空飛行で飛んでいく。

どんな人がピンク色のヘリコプターに乗っているんだろうと思っていたら、果南ちゃんがピンク色のヘリコプターを見ながら、ボソツと呟いた。

「小原家でしょ……」

果南ちゃんがそう呟いたとき、私と千歌ちゃんは、果南ちゃんが口にしたときにしてきた表情に、私たちは全く気づくことはなかった。

「2年ブウリですか……」

## #4 それが全ての始まり

それから果南ちゃんの家をあとにして、またフェリーに乗って港に帰ってきた私と曜ちゃん。

曜ちゃんはそれから、直接家に帰るということで、ちようど来たバスに乗って帰るところになった。

「じゃあ千歌ちゃん、またね！」

「うん！また明日！」

「えへへっ♪ヨーソロー♪」

曜ちゃんは私にいつもの敬礼を見せてバスに乗り込み、私は曜ちゃんに手を振って見送った。

「バイバイ！」

曜ちゃんに乗ってるバスが、全く見えなくなるまで手を振り続けたあと、私は帰路へと歩み始めた。

フェリーが出る港からさほど遠くもないし、家まで歩いて10分のところだから、全く問題はない。

曜ちゃんと別れた私は、カバンから自分で作ったチラシの紙を取り出す。

「どうにかしなくっちゃな……」

実際のところ、生徒会長に対して、なんとか弁解して承認してもらわなきゃ、スクールアイドル部を作ってもくれないから。やるしかないと思う。

海に沈もうする太陽と、太陽によってオレンジ色に輝く海を眺めながら、私は歩道を歩いていた。

有耶無耶に考えてても仕方ない。

そう思った私は、急いで家へと帰ろうと思って、足の歩幅を広くして歩いていた。

フワツ……

「……………えっ?」

そしたら突如として、花のような…フローラル?のような匂いが、私の鼻を突かせる。

「なんだろう、この匂い……」

この匂いはどこからなのか?

その匂いにつられるようにして、私は匂いのありかを探るように周辺を見渡した。

「……………」

「……………っ!」

すると周辺を見渡していた私の正面、港の海岸に、1人の少女が海を見つめながら立っていた。

綺麗な顔立ちで、赤みがかった長い髪に、頭の後ろにはピンク色のヘアピンをしてい

る。

身長は見るからに、私より少し高い。

「綺麗な人……」

そんな言葉が似合うくらい、そんな言葉が口から溢れるくらい、私はその女性に魅入っていた。

だけど少女はこころ辺の高校生ではない。

そうでないと分かるのは、少女が着ている制服にある。こころ辺では見たこともない制服だった。

真っ青なブレザー、水色に少し赤い模様があるとても短いスカート、胸のあたりには水色のリボンを身につけていた。

なんでこんな時間にここにいるんだろうと思った私は、ふと彼女に声をかけようと考えた。でも声をかけたら、変な人だと思われちゃうかな？でも同じ高校生だから、きつと話してくれるだろう。

そう思った私は、少女がいる海岸に向かって歩み始めようと思った。

だが海岸に立っていた彼女は、私が思っていた“綺麗な少女”というレッテルを覆す

ような、私でも開いていた口が塞がらないような行動をとる。  
私は、その行動に驚くしかなかった。

スルツ……

「……えっ!？」

なんと彼女は、着ている制服を脱ぎ始めた。

スルツ……スルツ……

「えっ……嘘っ? まだ4月だよ?」

制服のブレザー、スカート、そして、胸のリボンにワイシャツを次々に脱いでいく彼女。  
女。

彼女は……まさかの露出狂!?! って思ってたら、ワイシャツの下には競泳用の水着を見に纏っていた。





「待つて！飛び込んじやダメ！」

「離して！行かなくちやいけないの！」

なんで海に行かなきやいけないのか私も分からない。知らない赤の他人だけど、いきなり目の前でこんな行動をされたら、止められずにいられない。

もしかしたら、自殺かもしれない。

そんなやばい思いが頭をよぎった私は、彼女を海から遠ざけようと行動に出る。

「てやあああああ！」

私は力を振り絞って彼女を海から遠ざけるように、勢いで自分の真後ろに彼女を移動させた。

勢いに任せた行動だったから、勢いによつて、私も彼女もその勢いで共倒れに倒れた。何とかだけど、それで彼女の行動を止められることが出来た。

「はあ……はあ……ふう……何とか止められ……」

「なんで止めるのよ！」

そしたら私に向かって、彼女は叫んできた。

止められるのを嫌がっていた彼女は、私に鋭い視線を向けてきて、私に向かって怒鳴るように言い放ってきた。

その言葉に私も我慢が出来なくなつて、私も彼女に向かって怒鳴るように注意をした。

「なんでつて……いきなり海に飛び込むのは危険なんだよ！死んじゃうかもしれないんだから！」

「……………っ！」

死んじゃうかもしれない。彼女は私の言い放った言葉を間に受け、彼女はシユンと下に俯いてしまう。

言い過ぎだとは私も思つてる。けど、突然にあんな行動を目の当たりにしたら、自殺かもしれないと、そう思つても可能性はゼロじゃなかったから、私は彼女に話を続けた。

「それに4月だけど、海もまだ冷たいし、沖縄じゃないんだから。海に入りたいなら、ダ

イビングシヨップもあるのに……」

「……ごめんなさい。私ったら……」

私はそう言って彼女に、ダイビングシヨップや、海は4月でもまだ冷たいと説明をしたあとで、彼女は私に対して謝ってきた。

もちろん、私は彼女の海に飛び込もうとした動機を聞く上で、彼女を許そうと話した。

「気にしないで。私もちよつとびつくりしちゃったただけだから、謝らなくてもいいよ」  
「うん……ありがとう……」

彼女はお礼を言ってきたから、とりあえず今のひと騒動は無事に解決して収まった。

それから彼女には制服を着てもらった。し……下着は持ってきてなかったから、彼女はまた水着の上からせつせと制服を着た。

そして私は彼女が着替え終わったあとで、彼女に海に飛び込もうとした動機を尋ねた。

「ねえ、どうして海に入ろうとしたの？」

「……海の音が聞きたかったの」

「海の音?」

「うん、海中の音……」

下に俯き、彼女は体育座りになったあとで、私に向かって海に飛び込もうとした動機を話してくれた。

私は、その動機の理由も尋ねる。

「どうして?」

「私ね、曲の作曲をしているの」

「作曲!?へえ、凄いな!」

彼女は何かしらの作曲をしていて、きっとその作曲が思い浮かばなかったから、こうして海に来て飛び込もうとしていたみたい。

作曲かあ……。この子も凄いなあ。

それから私は、彼女がどこの学校なのかを尋ねると、彼女から思いがけない言葉が返ってくる。

「そういえば、あなたはどこの学校？」

「私…東京から来たの」

「と…東京!?!わざわざ!?!」

「わざわざっていうか……」

この少女はわざわざというわけではないけれど、彼女はなんと東京からやって来たという。  
はっ!この子が東京からやって来たと言うのなら、もしかしたら彼女もスクールアイドルのことを知ってるのかな?

この時に私はそう思い、スクールアイドルを知っているのか確信を掴むため、彼女に対してウキウキしながら私は尋ねる。

「ねえ…あなたスクールアイドルって知ってる?」

「スクールアイドル?何それ?」

「知らないの?スクールアイドルだよ!学校でアイドル活動をして、大会が開かれたりするの!」

彼女はスクールアイドルを知らないみたい。

彼女はもしや、東京に住んでいるけど、スクールアイドルとかに興味がないのかもしれない。

そう思っていたら、彼女からスクールアイドルというものが、そんなに有名なのかと尋ねてきた。

「そんなにスクールアイドルって…有名なの？」

「有名だよっ！ドーム大会も開かれたこともあるくらいで、超々人気なんだよ！…っていつても、私も詳しく知ったのは最近なんだけど…」

私の言葉に、『ふふっ』と笑う彼女。

「そうなんだ…。私もずっとピアノをやってたから、そういうの疎くて…」

彼女は多分、小さい頃からピアノをずっとやっていたんだと思う。だから、スクールアイドルの存在を私が教えるまで知らなかったんだと思う。

そうなんだ。ピアノをずっとやっていたから、スクールアイドルのことを知らなかったんだね。

じゃあ…興味が無いわけじゃないんだね。

「じゃあ見てみる？なんじゃこりやつてなるから」

「なんじゃこりやつ？」

「なんじゃこりやつ！」

私はそう言ってスマホをポケットから取り出し、とあるスクールアイドルの写真を彼女に見せる。

どんな写真かと聞かれれば、確か東京で見た、9人組の女子高生が写っている写真。私はその写真を彼女に見せて、この9人のスクールアイドルグループを見てどう思ったかを尋ねた。

「…………どう？」

「うん、なんというか…普通？」



普通……普通ね……。

でも、彼女がそう言うのは想定内。

だって、私も同じことを思っていたから。

「……………」

「あつ……いえ！悪い意味じゃなくて！アイドルって言うから、もつと芸能人みたいな感じなのかなって思ってたっていうか……」

私の無言の反応を見て怒らせた、又は誤解を生んでしまったのかと思った彼女は、誤解を解こうと慌てて話の修正をする。

でも私は、誤解を解こうとしていた彼女が言い切る前に、彼女に対して私はこう言っ  
た。

「……………だよね……………」

「えっ……………」

“だよね”。たったその一言に、彼女は困惑する。

困惑するのは当たり前だよ。だって、私にしか分からない意味で言ったのだから。何に対して、何の意味も分からない単語を発したら、彼女は困惑するに決まってる。だからその一言の意味を理解してもらうため、私は彼女に対してこう言った。

「私ね、普通なの…」

「普通……」

自分は何もない『普通』であるということ…。

私がそう言ったあと、そこでやっと彼女は、私が何の意味に対して『だよね』と言ったのかを、理解することが出来たみたい。

彼女も、同じことを考えていたんだって…。

それから私は彼女の一步前に出て、海の水平線に沈もうとしている夕日をずっと見つめながら、自分が普通であることの意味について話し始めた。

「あなたみたいにならずとピアノを頑張ってきたとか大好きなことに夢中でやってきたとか、将来こんな風になりたい夢とか一つもなくて、どんなに変身しても普通なんだって、

そんな風に思ってた、それでも何かあるんじゃないかと思ってたんだけど、気づいたら…もう高校2年になってた…」

「……大変だったんだね」

「うん……大変だった」

彼女はずっと体育座りのままだったけど、私の話を真剣に聞いてくれた。

彼女も私の話を聞いて、何かを感じてくれたのかもしれない。心配そうに声をかけてくれたから、私はそれがとても嬉しかった。

そして私は彼女に向かって、私の人生そのものを変えてくれた人たちに出会ったことを話す。

「でもそんな時、出会ったの！あの人たちに！」

「あの人たち？どんな人たちなの？」

「私と同じような、どこにでもいる普通の高校生なのに、凄く…キラキラしてた」

「キラキラ…してた？」

簡単な言葉を並べただけで、それをもろっと詳しく彼女に話すのは、私はちよつと苦

手なの。

でも私は、彼女に十分に私の思いが伝わるような、そんな言葉を紡いで私は言い放つた。

「スクールアイドルって……こんなにも……キラキラと輝けるんだなくって思ってたの！」

私を感じたそんな思いは、彼女にもきつと分かってくれると思う。それくらい、彼女に十分に伝えられると思ってるから。

「気づいたら全部の曲を聞いてた！毎日動画見て、歌を歌って、ずっと覚えてた！」

両手を大きく広げ、あの人たちに出会ってから私はいろんなことをやり始めたことを打ち明けた。

あの人たちが歌っていた曲の動画を見たり、曲の合間に踊っている振り付けまで自分も踊ったりして、ずっとあの人たちに夢中だった。

そうしているうちに、私は思うようになった。

「そして思ったの。私も仲間と一緒に頑張って、この人たちが目指したところを、私も目指したい！」

「私も…輝きたいって!!」

あの人たちのようになりたいと思うようになった。

あの人たちのように、キラキラ輝きたいと思った。

でもまずは生徒会長に部として認めてもらわなきゃいけないけど、きっと出来る。そう信じてるから。

すると彼女の方から、口を開いて言った。

「ありがとう…」

「えっ…?」

「何か…頑張れって言われた気がする…今の話」

「本当?」

「ええ！スクールアイドル…なれるといいわね」

「うん！ありがとう！」

私の知らないうちに、今の話が彼女への応援の言葉になっていたみたい。でも、悩んでいるならお互い様だよ！私も頭にあつたモヤモヤが、少しばかりふっ切れた気がした。

彼女の方も、いい曲が出来るといいね！

そう思っていた私は、とりあえず私から自己紹介を始めた。まだ出会って数分しか経ってないけど、別に仲良くなってもいいよね？

「あつ、私の名前は高海 千歌！あそこの丘にある、浦の星女学院っていう高校の2年生なんだ！」

「あつ、そしたら私と同一年ね」

「本当!?!」

「ええ、本当よ！」

彼女は、私と同じ年だった。

同じ年なら彼女ととても仲良くなれそう。

そう思った矢先に、彼女は立ち上がって私の横まで来て、次に彼女が自己紹介を話し始めた。

「私の名前は、桜内 梨子」

「梨子ちゃん、いい名前だね！」

「ふふっ、ありがとう！」

名前は、桜内 梨子って言うみたい。

とても素敵な苗字だし、綺麗な桜内さんにとって、素敵な名前だと私は思った。

そして彼女は、通っている学校の名前も言った。

「高校は…音ノ木坂学院高校」

桜内さんは東京の学校に通ってるって言ってたし、凄く頭のいい学校なんだろうなあ

…。

すると桜内さんは、『あつ』と声を出して、何かを思い出したかのように口を開く。

「あつ、そろそろ行かなきゃ！」

「えっ？もう行っちゃうの？」

「うん。また会えたら…いつかね？」

もう桜内さんは行ってしまふみたい。さつき初めて会ったばかりなのに……残念。でも、もし東京に行つてまた桜内さんに会えたら、今度は私から会いに行こう！  
そう思った私は、なんだか寂しくなかつた。

「うん！また会おうね！」

「それじゃあ、さよなら！」

「うん！さよなら〜！」

私と桜内さんはそんなやり取りをしたあとで、桜内さんは私に背を向けて、彼女は疾風のように私の前から走り去ってしまった。



「また…会えるかな？」

私は彼女が走り去って行った方向を向いて、ボソツと小さく…そう呟いたのであった。

～  
～  
～  
～  
～  
※※※※※  
～  
～  
～  
～  
～

今日も今日とて、曜は俺の部屋に上がり込んできた。もう夜の9時を回っているのに

関わらずだ。

毎回のように俺の部屋に来るのは、もう小さいときの頃だから仕方ないかもしれない。いい。

それで俺は曜に対して、ジト〜ツとジト目で睨みながら、俺は彼女にあることを尋ねた。

「んでっ？お前…千歌に言えたのかよ？」

俺の勉強机の椅子は回転式。机から離れ椅子を回して曜に正面に向くようにして尋ねると、曜は俺の質問に対して変な汗を流し、ぶつきらぼうに俺の質問から話を逸らそうとする。

「えっ？な…何のことかな？」

そっぽを向き、俺と視線を合わせようとしない彼女を見て、俺は思った通りだと心の中で思った。

だから俺は、夕方に千歌から電話してきたことをもとに、曜にこう話したのだ。

「とぼけんよ。今日の夕方、千歌から電話してきたとき、曜はまだ千歌と一緒にスクールアイドルやりたいって言ってないって分かったからな」

「えっ!?!あの時に分かったの!?!」

「ああ。お前があの方に千歌に言い放った一言で、俺はすぐに分かったよ」

『私も千歌ちゃんのことを応援するから、スクールアイドル、やめないで?』

曜が千歌に対して、『一緒にスクールアイドルやりたい!』と言ってないということが分かったのは、曜が言ったこの一言だ。

何ともまあ、相変わらずのヘタレ曜だ。

「なんだ。分かっちゃってたんだ……」

「それで?ちゃんと千歌に言うんだろう?」

「うん。もちろん言うよ。もうこの機会を逃しちゃったら、きつと千歌ちゃんと、もう一緒に出来ないかもしれないから……」

曜は下に俯いて、一つの決心を決める曜。

その様子なら、俺は心配しない。

なんせ、曜が千歌に『スクールアイドル一緒にやりたい!』って言うだけだからな。変に余計な心配は全然していない。

「曜がそう言うのなら、俺は心配しない」

「うん。遼くん心配させちゃうのは、ちよつと面倒くさいからね」

「面倒くさいとはなんだ面倒とは…」

曜に面倒くさいと言われた。

別にメンタルはやられてないけど、変にそう言われると、心がしんどくなる。

「それにね、あのあとに、千歌ちゃんが嬉しそうに言ってたよ。ありがとうってね…」  
「そっか。あいつがそんなことを……」

あいつらしいといえば、とてもあいつらしい。

元氣だし、馬鹿だし、何かと面倒な奴だけど、根っこは全くのいい女の子だから、まあ

嬉しい。

だがそんなことをよそに、曜は何故か頬を膨らませて、ジト〜ツと俺をジト目で睨んでいた。

あれ？もしかして…顔に出てた？

「曜？どうしたそんな顔して…？」

「別に…なんでもないよ？」

曜の反応を見る限り、俺が千歌の言葉に対して嬉しく思っている表情は出ていなかった。ひとまず良しとするが、曜はなんだかご機嫌斜めだ。

まあこういうときは、アレだね。

そう考えた俺は、曜に一言呟いたあとで、曜にいつもやっているアレを繰り出した。

「なんだと〜このやろ〜！」

「えっ!?! ひっ…あは…あははは！遼くん…やめ…あははは！くす…くすぐりたいよ！あははは！」

「ほれほれ〜！こちよこちよだ〜！」

「あははは！やめ…いひひひっ！」

通称：こちよこちよの刑

俺が曜や、千歌に対してよくやる刑だ。

両手を上手く使って、曜の脇腹や、脇の下をこちよこちよして、思う存分に懲らしめるためにある。

俺は曜の後ろに瞬時に回り込み、両手を曜の脇腹に持つていきこちよこちよをする。

ビクツと…こちよこちよに対する反応を示した曜は、笑いと共にベットに倒れこむ。しかもうつ伏せに倒れたから、俺が曜の上になるわけで、思う存分にこちよこちよを続けた。

「遼くん…こちよこちよなんて…卑怯だよ…！」

「だってお前が不機嫌なんだから、こうやってお前を笑わせてやってるんだよ！」

「ちよ…そんなことで…くひっ、あははは！」

だいたい1分くらい、こちよこちよを続けた。

曜は俺のこちよこちよにもがくように、自分の両足をバタバタとベットを叩く。曜の笑い声は止まず、それに伴って涙も溢れる。

俺は曜を元気付けるためにやったわけだから、後悔はない。むしろ楽しかった。

「はあ…はあ…遠くんいつもこうなんだから…／＼／＼」

「でも、元気は出ただろ？」

「うっ、うん。元気は、出たよ」

「それならよろしい」

俺は曜から離れると、彼女はうつ伏せから仰向けになって呼吸を整える。こちよこちよのせいか、顔もほんのり赤くなっていた。

それから曜が落ち着いたあと、今日の学校で、生徒会長との話についてを曜から詳しく聞いたあとで、曜は10時を回ったところで帰ると言い出した。

「それじゃあ私そろそろ帰るね。明日も学校だし、千歌ちゃんもきつとまた生徒会長のところに話しに行くだろうから」

「分かった。あいつには頑張れよって言うておいてくれ。それでも十分にやる気出るだ

ろ」

「まあ、千歌ちゃんだからね！うん！ちゃんと千歌ちゃんに伝えておくよ！」

千歌にはエールを送ることが、彼女をやる気にさせる一番のポイントだ。

曜もついてるから、千歌が何かしらでむやみに突っ走ってしまふところがあつたら、曜がそれを上手く制してくれるはずだ。

千歌も曜と一緒にスクールアイドルしてくれたら、きつと大喜びだろうしね。すると曜は、何かを思い出すように俺に振り向く。

「あつ、そうだ！遼くん！」

「んっ？今度はなんだ？」

今度は曜が何を話し出すんだろうと、曜が振り向きざまに声をかけてきたことに問い尋ねると、彼女は自分が言うことに恥ずかしさを覚えたのか、頬を真っ赤染めていた曜が尋ねてくる。

「あの…ね？私が…スクールアイドルになったら、遼くんは応援…してくれる？／／／」



なんかそれ…この間も聞いたような気がする。  
でもきつと、曜はもう一度聞きたかったんだろう。  
俺から発せられる、その言葉にな……。

「何を今更…するよ！しないわけがない！」

「……っ！／／／」

曜は俺のその言葉に、心を何かを掴まれたのかと顔を真っ赤に染め上げる。

自分がこれからやろうとしていることに、幼馴染みから応援されるのは、やっぱり嬉しいものなのだろう。やっぱりそりや、俺もそうだけど……。

曜や千歌から応援されれば、そりやもちろん…その応援に応えるべく燃えるわけには  
いかない。

曜の心も、きつとこんな感じなんだろう。

「応援するよ。曜のこと！」

そして俺はもう一言、そう言つて笑顔を見せると、曜は嬉しくてたまらなくなって、曜からも嬉しそうに満面の笑みを浮かべてお礼を言った。

「うん！ありがとう遼くん！／＼／＼」

「……っ！／＼／＼」

その表情に、俺もまた然り。

「じゃあまたね！おやすみっ！」

「あ…ああ、おやすみ」

曜の満面の笑顔に不意を突かれた俺は、曜のおやすみの言葉に遅れて反応する。

曜が笑顔のまま手を振つて部屋を出て行ったそのあと、俺はさっきの曜の笑顔についてふと思つた。

曜つて、あんな笑顔が出来たんだってね…。

「あいつ笑顔…反則だろ…／＼／＼」



翌日、浦の星女学院の教室。

そろそろホームルームが始まるから、隣同士の私と千歌ちゃんは席についていた。

「1人もいない。生徒会長の言う通りだったよ…」

それで今、なんで千歌ちゃんが机にもたれかかって項垂れているのかというと、今日もまた生徒会長のダイヤさんのところに行った私たちに、ダイヤさんからこう言われたのだ。

『スクールアイドルを始めるときには、オリジナルの曲でなくてはいけない。最初に難関になるポイントですわ。それに、ここには作曲が出来る人なんていませんもの…』

ダイヤさんからのきついお言葉。

それに作曲が出来る人は本当に1人もいなくて、だから千歌ちゃんはこうして項垂れている。

アイドルだから、曲が必要なのは分かった。

でも途端にこの問題に直面してしまうと、私も千歌ちゃんもどうしていいか分からな

かった。

私っ？私はおめん…作曲なんて出来ないよ。

アイドルだから、多分衣装くらいは作ることは出来る。自分で服くらい作っちゃうくらいだから。

あつ、それにね！

私…渡辺 曜は、無事に千歌ちゃんに『一緒にスクールアイドルをやりたい！』って言うことが出来たのであります！

もちろん水泳部はやめない。掛け持ちでやる。

そしたら千歌ちゃん、嬉しくてたまらなくなつて私に思いっきり抱きしめてきたの。両腕までがっちりホールドされちゃうくらいに強かつたから、ちよつと苦しかつたけど……。

でも、これでいいんだ。やつと千歌ちゃんと一緒に何かが出来るんだもん！それに遼くんも応援してくれる。私も頑張らなきゃ！

「え〜い！こうなったら私が…！」

すると千歌ちゃんは、学校で使っている音楽の教科書を取り出し、自分で作詞や作曲をしようと躍起になり出す。

でも千歌ちゃん、作詞はおろか…作曲なんて出来るはずもなく、私の一言ですぐに撃沈する。

「できる頃には、卒業してると思うよ…」

「はあ…だよ〜」

スクールアイドルって、始めるだけでも大変なんだなあって思う私と千歌ちゃん。千歌ちゃんは作曲してくれる人がいなかったからと、ボソツとあることを呟く。

「はあ…誰か曲の作曲してくれる人とかいないのかなあ…。学校の生徒じゃなくてもいいから、誰でもいいから作曲してくれないかなあ〜」

「そんなこと言っても、きっと作曲してくれそうな人は…いないかも…」

「うわあ〜ん！どうしよ〜う！」

困った表情をして、体を机にもたれかかって喚く千歌ちゃんは、まるで小さな子供のよう。私からして見れば、可愛いからいいんだけど……。

ちよつと苦笑いを浮かべつつ、心の中でそんな風に思っていたら、ちよつと教室に先生がやって来る。

ガラガラッ！

「はい、みんな席について〜！」

閉まっていた教室のドアを開け、左の脇に出席票を挟めたまま、両手でパンパンと生徒に席に座るように促す。そして生徒みんなが席についたところで、先生が話し始めるけど、すぐにホームルームは始まらなかつた。

「では、ホームルームを始める前に、今日からこの学校に通う転校生を紹介します！」

先生が言い放った一言に、転校生がやって来ることに、生徒全員：教室全体がざわめき始める。

私も千歌ちゃんも、今日に新しく転校生が入って来ることに驚いてる。でもそれとはまた逆で、どんな子が入ってくるんだらうって、期待に胸を膨らませている自分もいた。

「転校生かゝどんな人かな〜?」

「そうだね、どんな人だらう…」

千歌ちゃんも私と同じだった。

綺麗な人なんだろうなあ〜って、千歌ちゃんも私と同じようにワクワクと期待に胸を膨らませていた。

「それじゃあ入ってきて!」

「……はい!」

先生の合図で返事をする、転校生の声。

透き通った声で返事をした転校生は、自分の赤みがかった髪をなびかせながら教室に



入ってきた。

綺麗な顔をしていて、その表情にキュンときめくものがあつた。それにサラサラとした綺麗な長い髪を、ピンク色のヘアピンで後ろで留めていた。

ゆつたりとした歩調で教卓まで歩いてきた彼女は、私たちの方に向き直り、先生は転校生の名前を、黒板に縦書きで大きく書く。

『“桜内 梨子”』

黒板に彼女の名前であろう文字が書かれたとき、隣に座っていた千歌ちゃん表情が一変した。

「あ……ああ……!」

何というか……“嬉しい”という感情が、一番に強い表情を千歌ちゃんはしていた。

どうして初めて会う人物に対して、千歌ちゃんはそんな感情を持っているのか？

そう思っていたら、転校生の少女は、ちよつと少しおどおどした挙動を見せながら自己紹介を始めた。

「は…初めまして！今日からこの学校に編入することになった…くしゅん！失礼…東京の音ノ木坂という高校から転校してきました」

途中くしゅみに襲われた転校生だけど、すぐに表情を和やかにして、転校生は自分の名前を紹介した。

その名前を紹介した瞬間、千歌ちゃんの疑惑の表情は、確信のものへと変化した。

「桜内 梨子です。よろしくお願いします！」

「…っ！奇跡だよ！」

「…っ！?!あ…あなたは?!」

千歌ちゃんは、その転校生との再会に喜びを爆発させ、桜内っていう転校生は、千歌ちゃんとの思いもよらない再会に驚きを隠せなかった。

少女漫画などでしか見たことのない展開なんだけど、それが今、私の目の前で繰り広げられていた。

これは一体…どういふことなんだろう？

そう思うことしか、出来なかった私であった。

そして私たちの出会いが、偶然なの必然なのか…  
この物語の…全ての始まりだった……。

## #5 はやくも前途多難!?

曜から電話で聞いたときは、正直呆れた。

「それで…今日から転校してきた子に対して、千歌がアグレッシブに勧誘してると?」  
『勧誘っていうか、スクールアイドルをするから、曲を作曲してくれって、千歌ちゃん  
ずっとその子にアプローチしてるの……』  
「はあ…本当にいい迷惑だなそれは…」

時はちようど昼休み。

俺の元に、曜から1本の電話がかかってきた。

ちようどその頃には1人で屋上で昼飯を食っていたから、出ないわけにもいかないだ  
ろうと思って電話に出たら、話は千歌のことで持ちきりだ。

『千歌ちゃん、ずっと転校生の子に話しかけてて、『あの子なら作曲してくれる!』って、私の話も聞いてくれないんだ……』

「そりゃ……もう大変だな……」

転校生にとつては、いきなり学校の生徒からアグレッシブに勧誘されたらたまったもんじゃない。いい迷惑にも程がある。

電話での話で、スクールアイドルをするために曲を作らなきゃいけないってのは分かかった。

でもその作曲を、わざわざ転校してきた子にいきなりやらせるのはどうかと思うんだがな……。

千歌の野郎、ちゃんと相手のことも考えてやってんだろうか? いや、あいつの事だから何も考えてないで転校生を勧誘しているだろう。

「それで、転校生の子は大丈夫なのか? 千歌の勧誘に対して、絶対嫌がつてるんじゃないか?」

『うん……まあね……』

ああ。曜の反応で全てを察したよ。

これはもうやばいな。下手したら嫌われるぞ。

『まあとりあえず、千歌ちゃんはずっと転校生に作曲のお願いばかりしてるから、どうかしてみるよ。転校生にも悪いしね』

「その方がいい。最悪な事態になる前にも、曜からきつちり言つてやった方がいいよ」  
『うん、分かった！』

曜も千歌の行動には、少しやり過ぎなんじゃないかなと感じてはいるみたいだからな。

だが、どうして千歌はその子にこだわるのかが分からない。どうしてその転校生に作曲をお願いするのは、俺にはどう考えても分からなかった。

だから俺は、曜に一つ尋ねた。

「曜、お前今一人なのか？」

『えっ？う…うん。千歌ちゃんにはトイレに行ってるって言って誤魔化してきたから』

「それは好都合だ。曜に一つ聞きたいことがある」

『聞きたいこと?』

曜は電話越しに首を傾げ、俺の質問に耳を貸す。

俺は曜に対して、どんな質問をするのかといえは、転校生がやってきた時、千歌はその子に対してどんな反応をしていたのかという話だ。

「千歌はさ、その転校生の顔を見た時、どんな顔をしていた?そこだけが知りたいんだ」

『千歌ちゃんの…転校生に対しての反応?』

「そうだ。普通初対面なら、どんな子なんだろうって思う人が多いはずなんだ」

普通みんなそう思うはずだ。東京という、遠くからやってきたその子に対してみんなはどんな子なんだろうって、普通思うはずなんだ。

曜はしばらくの間を置いてから、その当時の千歌の様子について話してくれた。そしたら意外な言葉が飛び出してきた。

『確か千歌ちゃん、嬉しそうな顔をしてた』

「嬉しそうな顔？」

『うん。転校生の顔を見たときに、とても嬉しそうな…なんか知り合いの人と久しぶりに再会したような顔だったんだ』

「…なるほど、分かった」

知り合いの人に久しぶりに会ったような表情

その一つの長々のキーワードに、一つの思い当たるかもしれない選択肢が思い浮かぶ。

でもそれは仮説ではなく、確信に近い考えだ。きっとそれに違いないと思えるくらいだ。

「千歌がどうしてその転校生に作曲をお願いしようとしているのか。なんとなく分かった気がするよ」

『本当!?!それで…どうしてなの?』

曜は俺の発言に食いつくように聞いてくる。

急かすのはあまり良くないから、曜に自分で考えさせるようにして、俺は話をしてい



く。

「よく考えてみる？今、曜が言ったことに矛盾があるじゃないか。初対面なのに、久しぶりに再会したようになってところが…」

『よくよく考えてみたら、あつ！』

良かった。曜は分かったみたい。

「分かったか？ということは、曜がその転校生に出会う前に千歌が出会ってることになるんだ。多分、その子が作曲できるって知ってるのは、その子から直々に聞いたか、風の噂で聞いたってことになる」

その事実というか、本当にそんな事の流れて今になっているかは事実上よく分からないけど、その考え方が一番近いと思う。

『そう考えたら千歌ちゃんが、ずっとその子に対して作曲をお願いしているってことに合点が行くね。だから千歌ちゃん、転校生にそんなことを……』

「でもまあ……しつこく作曲をお願いをしていたら、嫌がられて終わりなんだけど……」

だから正直、俺の思うに早めに千歌はその転校生から手を引いてもらうしかない。  
でないと……うん。不登校はありえる。

「俺からは手を引けばって言うておくよ。あとはもう千歌のその行動が自分で後悔しないことを祈る」

『分かった。千歌ちゃんにも伝えておくね』

転校生の子はとて大変だろうな。転校初日に学校の生徒からいきなり『作曲して！』ってお願いされたらたまったもんじゃないだろう。

どうにかして、千歌のことを誰でもいいから止めて欲しいと思った俺である。

そして俺は、曜にあることを尋ねる。

「それでどうせ、お前はスクールアイドルの服を作る担当になるんだろうけど……」

『分かつちゃう？千歌ちゃんにもう頼まれちゃったんだ。アイドルっぽい……ヒラヒラしてて、キラキラした服を作って欲しいって……』

「それもまた大変な無理難題だな……」

やはりといったところか、千歌は既に曜にもスクールアイドルの服を作って欲しいと頼まれていた。

曜は確かに裁縫が得意で、服なんて楽に作っちゃう奴だけど、アイドルだもんな……。曜が作る服なんて大体スクールアイドルみたいなキラキラしたものから程遠いものばかりだ。

船の船員の服だったり、警察官の服だったり。大体が仕事で着るような制服ばかりだ。

『遼くん?今さっき私のこと馬鹿にしたでしょ?』

「ううん。何も…お前がいつも着てきたりしてくる制服のことで馬鹿になんかしてないよっ。」

『ちやつかり遼くん言っちゃってるよ…』

あつ、また言っちゃった。つい思ってることをたまに口が滑っちゃうんだよな。俺の方は柔らかい。

「でもまあ…可愛いくないとは思ってないけど…」

『ええっ!?!／／』

「んっ…?俺…何か言ったか?」

俺は別に何も言った覚えはないのだが、何故か曜はとんでもない声を上げて驚いていた。

『……遼くんの馬鹿…／／』

「えっ?」

ブツッ!ブツッ! ブーツ!

と思つたら、今度は曜は俺に馬鹿と小さく言ったあとで、突然電話をブツッ!と切つてしまった。

「えっ!?!おい曜!曜〜!」



『可愛くないとは思ってないけど……』

そんな遼くんの素っ気なさそうな言葉が、私の頭の中でグルグルと回っていた。

私は、その言葉が出てきた時は思わず驚いた。

だって遼くんの口から、あんな言葉を口にしてくるなんて私は思っていなかったから、そりゃ……驚くものは驚くよね？

「おっ！ 曜ちゃん!!」

「あつ、ごめくん！ 遅くなっちゃった!」

そんな時、私がちょうど中庭に出られる廊下を歩いてたら、中庭にあるベンチで腰掛けていた千歌ちゃんから、私の名前を大声で呼ぶ。

その声に呼ばれるように、私は千歌ちゃんへと手を振りながら走っていった。

とりあえず、あの言葉に関してはまだ遼くんの家に押しかけて、真実を知りに行こう

！その方が、1番手っ取り早いから…楽しみだな！

「曜ちゃん、ステップの練習しよう！」

「いいよ！準備オツケー！」

千歌ちゃんは、中庭で基本的なダンスをステップの練習をしようと提案する。

私はその提案にOKサインをして、私もあまりやった事のないダンスのステップを千歌ちゃんと始める。どんなステップの練習かといえば、基本の横に動くステップの練習なんだけどね。

こうやって正面から右に移動するときは、つま先を右にして左足を前に出して体を右に捻るように動いて、逆に左に行くとき、つま先を左に向けて左足を前に出し、体を左に捻って動く練習をするの。

「ワンツー！ワンツー！ワンツー！」

左右に10回ずつ、計20回のステップを踏む。

私のスマホには、ちょうどダンスやステップの練習に使えるメトロノームのアプリが

ある。そのメトロノームが刻む音に合わせて、私と千歌ちゃんは左右に動くステップの練習をした。

足だけを動かさず、他にも腕を動かしたり、その左右に動くステップに合わせて上半身も動かしした。

それで私は自分が電話をしにいつている間に、千歌ちゃんはまたあの子に対して作曲のお願いをしていたのかを、疑問形にして尋ねる。

「それで千歌ちゃん、またダメだったの？」

「うん。桜内さんにまた断られちゃった……」

ネガティブに千歌ちゃんに質問した理由は、何度も断られているからそう聞いた方が早かったからだ。

実際にそう聞いて、やっぱりなって思った。

だけど千歌ちゃんは空を見上げて、今度はポジティブな千歌ちゃんの発言に、私は本当にかなって、千歌ちゃんを見つめながら疑った。

「でもね曜ちゃん！あと少しであの子に作曲をしてもらえるかもしれないの！あと一歩



……あと一押しって感じなの!」

「だってあの子の断り方が『ごめんなさい!』から、『ごめんなさい…』ってなつてたし!」

「それ…絶対に違うと思う」

千歌ちゃんの思つてることとは絶対に違う。

絶対にあの子の断り方、だんだん嫌がつてる感じに聞こえたもん。これはヤバイかも。本当に遼くんが言つてることに近づいてきてるかもしれない。

「もし万が一になつても、何とかなるし!」

「それも…あまり考えない方がいいかも…」

万が一千歌ちゃんが作詞と作曲をするにしたつて、千歌ちゃんがいい曲を作れるはずもなく、音楽の教科書を見せられたらどんな結末になるのかは、言わなくても分かると思う。

手を引いた方がいいって遼くんに言われたけど、でも千歌ちゃんが作曲をするなら、

私は転校生に作曲してもらった方がいいと思ってる。

千歌ちゃんがあんなにお願いしてるなら、あの転校生は間違いなく作曲は上手だと確信出来る。

だから遼くんとの電話での会話や、遼くんから貰ったアドバイスはなかったことにする。千歌ちゃんとスクールアイドルするんだ！だから2人で、悔いのないようにやりたい！

そう考えた私は、遼くんとの電話での内容を1、2のポカンって感じで消去して、頭の中にあつた雑念を綺麗さっぱりに忘れさせた。

それから基本的なステツプの練習を休憩しながらやり終えて、疲れた体を中庭のベンチに預けたところで、千歌ちゃんが私に頼んでいた衣装の件について尋ねてくる。

「それより曜ちゃん、私が伝えたスクールアイドルっぽくて、キラキラした衣装って考えてきた？」

「もちろん！考えてきたよ！」

千歌ちゃんに頼まれていたスクールアイドルの衣装は、もう既に自分のスケッチブックに描いてきた。

まだイメージ段階ではあるけれど、今その考えている衣装が、私の中ではとても可愛  
いって思ってる。

「見たい見たい！曜ちゃん見せて！」

「分かった！ちよつと待ってて！」

「うんっ！」

千歌ちゃんは、早速私が考えている衣装に興味津々で、私が描いたイメージの衣装を  
今すぐ見たいと、目を輝かせていた。

私は千歌ちゃんを中庭のベンチで待たせつつ、私は猛スピードで教室に向かう。自分  
のカバンから大きなスケッチブックを取り、千歌ちゃんの元へとまた猛スピードで  
走って戻る。

「お待ちせ〜！」

「ねえ曜ちゃん！早く見せて！」

「じゃあ見せるね！はいっ！」

この目で早くスクールアイドルの衣装を見たいと、ウズウズして堪らなくなってる千歌ちゃん。

私は試しに描いた衣装のページまでめくったあと、何も躊躇うこともなく、私が今考えているスクールアイドルの衣装を彼女に見せた。

その絵を見せると、千歌ちゃん目を輝かせる。自分がこんな可愛い衣装を着るってことにね。

「わ〜！凄いい〜！凄くキラキラしてる〜！」

「でしょ!?!スクールアイドルっぽくて、とっても可愛い衣装を頑張って描いてみたんだ！」

スケッチブックに描かれているモデルは、もちろん千歌ちゃん。スクールアイドルっぽくて、とっても可愛い衣装を着ているのをイメージしたんだ。

「でも大丈夫?これ本当に作れるの?」

「もちろん!大丈夫であります!」

スケッチブックの横から顔を出して、私は千歌ちゃんに向かってビシツと敬礼する。初めてこういう衣装とか、頭につける装飾とか初めて作るところも多いし大変だけど、千歌ちゃんのためだもん！私はやる！絶対に！

そう心に決めたとこで、千歌ちゃんは私の言葉に嬉しくなって腕を私の首に回して抱きしめてくる。

「わ〜いっ！曜ちゃんありがとう〜！」

「わっ！ち…千歌ちゃん！く…苦しいよ〜」

千歌ちゃんの胸の柔らかい感触が、ちようど私の顔全体を覆う。千歌ちゃんの胸がとても柔らかくて、私はそれに虜になってしまっただった。

それに息も出来なくて息苦しくて死にそう。でも千歌ちゃんの胸で殺されるなら、死んでいいかも…。

……つて！千歌ちゃんの胸でなに变なこと考えてるの私は〜!? もう〜このバカ曜〜  
!//  
!//

私は頭に浮かんでいた変な妄想を消し飛ばし、私を抱きしめ続ける千歌ちゃんに向かって言う。

「ち…千歌ちゃん、嬉しくて抱きしめるのはいいけど、私苦しくて死んじゃうよ」  
／  
「わあ!!…ごめん曜ちゃん！」

抱きしめられていたままだったから、私もそこまで強くは言えなかったけど、千歌ちゃんにそう伝えると、彼女はそれに気づいて慌てて私から離れる。

抱きしめることに夢中で、私の様子を全く知らなかった千歌ちゃんは、私に近寄って心配そうな表情を浮かべていた。てか千歌ちゃんの顔近い…

「大丈夫曜ちゃん? 苦しかった?」

「ちよつとだけね…。でも、もう大丈夫だよ！」

「本当? 良かった〜」

私の話を聞いた千歌ちゃんは、ホッと一安心した後で胸をなで下ろす。

でも私の胸は、心臓が破裂しそうなくらいに動悸がドクンドクンと強く、早くなっていた。

今日は暑いからとかそういうことじゃなくて、ただ単に千歌ちゃんの無自覚の行動に、私は赤面した。

「よ〜しっ！私も負けてられない！」

すると千歌ちゃんは、私の頑張りに対して、自分も頑張らなきゃと闘志を燃やす。千歌ちゃんはベンチから立ち上がると、すぐさま何処かへとズカズカと歩き出した。

私もその後を追い、千歌ちゃんに尋ねる。

「千歌ちゃん！どこに行くの!?!」

「生徒会長のところ！もう一度行って、絶対にスクールアイドルを部として認めてもらうんだから！」

「ええ〜?!無茶だよ〜！」

また千歌ちゃんは生徒会長のところに行くらしい。

これでもう3回目になっちゃうけれど、また絶対にダイヤさんに追い返されるに違いない。

『3度目の正直』って言葉があるけれど、私の頭に浮かんだ言葉は、『2度あることは3度ある』という言葉。だから千歌ちゃんがまたダイヤさんのところに行つたとしても、認めてくれるわけではない。

逆に認めてくれるまで、生徒会長のところに向かう千歌ちゃんのその勇氣は、とても凄いと思つてる。

普通ならそこで折れるはずなのに、それでも尚として抗い続ける千歌ちゃんの姿が羨ましかった。

私にも…こんな勇氣があれば……。

「さっ、曜ちゃん行こう!」

「あつ!ち…千歌ちゃん待つてよ〜!」

前を先急ぐ千歌ちゃんに急かされ、私は千歌ちゃんと生徒会室へと足を運んだのだつた。

千歌ちゃんの3度目の正直は、果たしてなるのか?





生徒会長のところにもう一度来たものの、生徒会長はまた来たのかと呆れた表情を見せ、疾風が如く、千歌ちゃんの要望を却下した。

ここまでくると認めて欲しいとは私も思っていたけど、名前と同じようにとてもお固い人だった。

「5人必要だと言ったはずですよ。それにそれ以前にですが、作曲はどうなったのですか？」

「それは……たぶん……きつと！可能性は無限大！」

作曲に関しては全然何もできていない。

そしてそのことがすぐバレてしまうような言動を、千歌ちゃんにする。千歌ちゃんは何とかなると答えているけど、ダイヤさんから見ればダメだと思うのも仕方ないかもしれない。

「はあ………」

「うっ……あの……その………」

ダイヤさんの落ち込んだ深いため息を見てしまった千歌ちゃんは、途端におどおどしてしまふ。何とかダイヤさんに話題を振らなきやと、頭に閃いたことをダイヤさんに口走るように言った。

「で…でも！それでも最初は3人しかいなくて大変だったんですよ…『u, s』も……」

ピクツ

んっ？今…ダイヤさんの眉毛、動いたような…？

確かといえれば言い切れない。でも今、千歌ちゃんが話したの話の中で、ダイヤさんの中に何か反応するものがあつたに違いない。

千歌ちゃんはまだそのことに気づいていない。

気づいていないどころか、千歌ちゃんはダイヤさんにペラペラと話を続けた。

「知りませんか？第2回のラブライブで優勝した、音ノ木坂学院スクールアイドル『u, s』！」

「……それってもしかして、『μ s』の事を言ってるのではありませんすわよね？」  
「……………えっ?」

千歌ちゃんが『μ s』について話をしていたら、ダイヤさんはその話に厳しめの口調で問いかける。

千歌ちゃんは突然に話に入ってきたダイヤさんの話に対して、『えっ?』と素っ気ない声を上げ、自分が好きになったスクールアイドルの『μ s』の名前を、間違えていたことに気づく。

それでも尚ダイヤさんは話をする。

それにダイヤさんの表情は怒っていた。千歌ちゃんがスクールアイドルの名前を間違えたから、ダイヤさんが怒っているのは確実に間違いない。

「もしかして『μ s』のことを言ってるのですか!? それでしたら片腹痛いですわ! 名前を間違えてますわよ! あ” あ” あ”!」

ほらね。ダイヤさん女の子なのに、”あ”に濁点ついちゃってる。これは本当に怒ってる証拠だよ。

ていうか、今のは女の子が出してはいけない声だと思う。ましてや生徒会長であるダイヤさんがね。

それからダイヤさんは千歌ちゃんに向かって『μ、s』がいかにどれだけ凄いかを話す。それに伴って、ダイヤさんは椅子から立ち上がって、千歌ちゃんにグイグイと迫るように話をした。

『μ、s』は活動しているスクールアイドルたちにとつての伝説！聖域！聖典！宇宙にも等しき生命の源ですわよ！その名前を間違えるなんて、片腹痛いですわ!!」

ダイヤさんに鬼気迫られる千歌ちゃんは、彼女に何も言うことも出来ないままダイヤさんに押されるように後ろにだんだん下がっていく。そしてその後ろはいつしか壁があり、千歌ちゃんは後ろが壁に気付いた時には正面にはすぐダイヤさんがいて、千歌ちゃんはどうすることも出来なかった。

ただ千歌ちゃんが口にしたのは、たった一言。

「ち…：近くないですか？」

「…っ?!あっ…：ゴホンッ、失礼…」

でもその千歌ちゃんの一言に、ダイヤさんはハツとした表情をして一連の行動に謝罪を述べる。

ダイヤさんと千歌ちゃんとの距離は、一時は唇同士が重なってしまふのではないかというくらいまで近かった。千歌ちゃんかダイヤさんに言うまで気がつかなかつたら、うん…ヤバイね…。

でもこれで分かったのは、スクールアイドルが嫌いと言われていたダイヤさんは、実はスクールアイドルが好きだったということだ。

伝説と言われているスクールアイドル『μ's』のことさえ、千歌ちゃんよりも多く知っている。これってつまり…ガチってやつ？

「ふんっ！その浅い知識だと、たまたま偶然見つけたから、軽い気持ちで真似をしてみようかと思ったのですね。ふふっ…笑わせてくれますわ…」

「…っ！そんなこと…そんなことないです！」

千歌ちゃんはダイヤさんに嘲笑われ、それに怒りを感じた千歌ちゃんもすかさずダイヤさんに反論を見せるが、威勢だけでどうにかなる相手じゃない。

スクールアイドルに関してのことは千歌ちゃんよりも知識はあり過ぎて、ラスボス感があつた。

するとダイヤさんは私たちに背を向けると、顔だけをこちらに向けてきね、千歌ちゃんに突然問題を出してきた。

でも問題というよりか、クイズに近いかも。

「ならば、『μ, s』が初めて最初に9人で歌った曲、あなたは答えられますか？」

「えっ!? えっ…えっつと…」

「ブッ！ ですわっ！」

「早いですよ！ もっと時間くださいっ！」

何故こんなことになってしまったのかは分からないけど、ダイヤさんは千歌ちゃんに問題を出す。どれだけ『μ, s』の知識があるのか、きつとダイヤさんは、千歌ちゃんのを力量を確かめたかったんだらう。

でも千歌ちゃんは、ダイヤさんから出された問題に悪戦苦闘する。何も答えることも出来ず、ダイヤさんに答えを言われてしまう。

「『僕らのL I V E、君とのL I F E』、通称『ぼららら』ですわ。次、第2回ラブライブ  
な予選で、*μ's*がA—R I S Eと一緒にステージに選んだ場所は？」

「ス……ステージ？」

「ブツブツ！ですわっ！」

「ええ〜！だから早いですってば〜！」

「秋葉原のU T X屋上。あの伝説と言われるA—R I S Eとの予選ですわ！」

それにしても、ダイヤさんが問題を出すにしても、千歌ちゃんの答える時間が短すぎ  
ませんか？これは千歌ちゃんにとって圧倒的不利に見える。

私も別に外れてもいいから答えてもいいかなって思ってたけど、なんだか間には入れ  
なさそう。それに私もスクールアイドルのことには知識は疎いから、千歌ちゃんの助け  
にはなれないかも……。

「次、ラブライブ第2回決勝で、*μ's*がアンコールで歌った曲は……？」

「それなら分かります！『僕らは今のなかで！』」

とおもったら、千歌ちゃんは3つ目の問題ですぐさま答えられた。これでダイヤさん



を見返せるとドヤ顔を見せつけた千歌ちゃんだったが、不敵にほくそ笑んでいるダイヤさんは、『実はその問題には続きがあるのですわ』といった表情を見せて千歌ちゃんに話を続けた。

「ふふっ…甘いですわ。ですが、曲の冒頭でスキップしている4名は9人のうち誰ですか?」

「ええ〜!?そんなの分からないですよ〜!」

「ブツブツブ〜!!ですわ!」

引っ掛け問題にも程がありすぎると思う。

千歌ちゃんもなんだかんだダイヤさんのクイズに答えるのに夢中だし、本気で悔しがってる。

私はジト目でダイヤさんを見つめた。いや、まさかここまでダイヤさんがスクールアイドルに対しての知識が豊富だったのかというか、スクールアイドルのことになると、ペラペラと話をしているのを見るのは初めて見た。

私の耳に流れてきた噂は、全くの嘘だったのだ。

「絢瀬絵里、東條希、星空凛、西木野真姫！こんなの基本中の基本ですわよ！分かりました!?!」

「わ…分かりました。でもすごい！ダイヤさんつてもしかして、μ'sのファン？」  
「あまり前ですわっ！私を誰だと思って……はっ！一般教養ですわ一般教養！」

もう私でも確信できる。ダイヤさんも千歌ちゃんと同じで、スクールアイドルが大好きなんだと……。

千歌ちゃんはいずれ、ダイヤさんを介してスクールアイドルのことをたくさん学ぶでの先輩として、多分お世話になるんじゃないかな…って思う。

スクールアイドルに詳しい人なんて、ダイヤさん以外でそこまではないだろうからね。きつといい勉強になるんじゃないかな？

「とにかく、スクールアイドル部は認めません！」

「ええ〜結局!?!そんなあ〜！」

といつても、やっぱり認めてくれなかった。

「ダイヤさんお願いします!! スクールアイドルを部として認めてください!!」  
「認めないと言ったら認めませ〜ん!!」

こんなやり取りを、あと数回も繰り返された。

「も〜! 前途多難すぎるよ〜!!」

そしてそれから千歌ちゃんは、自分の中に溜まったストレスを、海に向かって叫ぶのであった。

## #6 日曜日と、初対面

放課後

なんの成果も得られなかった千歌ちゃんと私。

2人で道路と海に挟まれた防波堤に座り込み、千歌ちゃんはいろんな意味で頭を下  
げ、項垂れていた。

転校生には作曲を断られ、ダイヤさんにも結局スクールアイドルを部として認めくれ  
なかつた。

「もう〜！前途多難過ぎるよお〜！」

「じゃあ……やめる？」

「ううん！やめないよ！」

千歌ちゃんに私はいつもので尋ねると、千歌ちゃんは頬を膨らませ、強気にやめないといい切った。

まだ千歌ちゃんの心はまだ折れていない。

けど、それもいつまで続くか分からない。

きつとこれからも千歌ちゃんはダイヤさんをお願いしに行くことが何度も続くと思う。でもダイヤさんもダイヤさんで、きつと認めてもくれない。

そして転校生の子にも同じだ。

千歌ちゃんにはめげずに頼み込んでいるけど、彼女もまた引き受けてはくれないだろう。

「あつ、あの2人は!」

「んっ? あつ...あの時の...」

すると千歌ちゃんは後ろを振り向いたとき、ひときわ大きな声を上げて何かを見つけたみたい。

私もその声につられるように振り返ると、入学式の時に千歌ちゃんが勧誘していた花丸ちゃんとルビィちゃんの2人がいた。

「あつ、花丸ちゃん！ルビイちゃん！」

「あつ、こんにちは！」

「ピ…ピギイ！」

千歌ちゃんは花丸ちゃんとルビイちゃんを見つけると、手を振りながら大声で2人の名前を呼ぶ。

花丸ちゃんは千歌ちゃんに挨拶を返すけど、究極の人見知りと花丸ちゃんが称していたルビイちゃんは、千歌ちゃんを見て近くの木に隠れてしまう。

「ねえ、ルビイちゃん！この飴をあげるからこっちおいで！大丈夫…怖がらないで！」

「う…うゆ……」

千歌ちゃんはそのルビイちゃんに、カバンから取り出した1つの棒付きの飴でルビイちゃんを誘う。

「ほくらほら怖くない。食べる？」

いつからそんな飴を持っていたのかは知らないけど、千歌ちゃんはその飴を揺らしながらルビイちゃんに声をかけると、こっそり木の陰から恐る恐るとルビイちゃんは顔を  
出す。

「…っ！あつ、飴さんだ！」

「おつ、えへへっ！さあ〜おいで〜！」

ルビイちゃんはまるで不審者に誘われる小学生のよう。不審者が千歌ちゃん、ルビイちゃんが知らない人について行ってしまわないかと不安になる。

それから千歌ちゃんはちゃんとルビイちゃんに飴をあげて、ルビイちゃんは大喜びだった。

ブロロロツ！

「あつ、ちょうど今バスが来たよ！曜ちゃん！花丸ちゃん！ルビイちゃん！一緒に乗ろう！」

「は…はいずら！あつ…はい！」

「ピ…ピギイ…!!」

ちょうど来た沼津駅行きのバスに私たち4人は乗り込み、私たちが乗ったバスは沼津へと走り始める。

1番後ろに私と千歌ちゃん、その前の席にルビイちゃんと花丸ちゃんが乗っていて、千歌ちゃんは後ろから花丸ちゃんのほっぺを突っついていた。

「へへっ！花丸ちゃんのほっぺ柔らかい♪」

「うう…止めてくださいいずらく！」

「うんうん！花丸ちゃんすっごく可愛い！」

ほっぺを突かれている花丸ちゃんは、嫌がっているけど満更でもなさそうな表情。千歌ちゃんも花丸ちゃんたちに初めてあつてからずっとこんな調子だ。

ずっと可愛いって言ってるから、そのうち花丸ちゃんとルビイちゃんにも勧誘をするだろう。

ていうかルビイちゃんはスクールアイドル好きそう。千歌ちゃんが作ったチラシに



興味津々だったし、スクールアイドルは大好きそうに見える。

ただ人見知りという、人と接する上での壁のようなものがあるから、難しいんじゃないかな？

「花丸ちゃんスクールアイドルやればいいのに…」

「スクールアイドル？何ですかそれ？」

「とつても楽しいよ！興味ある？」

「あつ…いいえ！マルは図書委員なので、図書委員の仕事があるすら。いいえ、あるし…」

花丸ちゃんはとても真面目。

花丸ちゃんは図書委員らしく、図書委員の仕事があると言って、千歌ちゃんの間いかに丁寧に丁寧に断りをした。

でも花丸ちゃん、たまに『ずらっ』って語尾がつくけど、直さなくてもいいんじゃないかな？

その方が花丸ちゃんらしくていいと思うんだけど…野暮だったかな？

「ルビイちゃんはどう？やってみる？」

「ル…ルビイはえつと…その…お姉ちゃんが…」

「お姉ちゃん？」

千歌ちゃんは、今度はルビイちゃんにも同じように尋ねると、ルビイちゃんはすぐには答えられず、『お姉ちゃん』とだけ呟いた。

どうして『お姉ちゃん』なのかと私と千歌ちゃんは思っていたら、花丸ちゃんから思ってもよらない言葉が飛び出してきたの。その話には千歌ちゃんも驚きを隠せなかった。

「ルビイちゃん、ダイヤさんの妹ずら」

「えっ!?!あの生徒会長の妹なの!?!」

「は…は…は…」

ルビイちゃんは生徒会長のダイヤさんの妹だった。

よくよく考えてみたら、ルビイちゃんもダイヤさんも名前は『宝石』名前で呼ばれている。

家系の関係なのか、それともご両親が宝石のように輝ける女性であってほしいがため

に付けたのか？

私の中では…もちろん後者だ。

素敵が名前だし、キラキラしてる。だから両親が宝石のように輝ける女性であつてほしいがために付けたと私は考えてる。

でも話は別になる。ルビィちゃんがやりたいと言つても、ダイヤさんがまずスクールアイドルが嫌いなわけだし、認めてくれるとは思わない。

「何だか嫌いみたいだもんね、スクールアイドル」

「はい。そうなんです…」

でも疑問に残るのは、ルビィちゃんがスクールアイドルが好きで、ダイヤさんが嫌いというところではなく、ダイヤさんが『μ's』という伝説のスクールアイドルのことを知つていながら、どうしてスクールアイドルが嫌いなのかというところ。

ダイヤさんが『μ's』を知っているなら、もちろんルビィちゃん知つてはいるはず。

だけど、そもその根本的なところでの“スクールアイドル”というものには、妹が好きで、姉が嫌いということが私の心の中で矛盾していた。

この矛盾は、いつ晴れるだろう？

「でも千歌ちゃん、今は曲を作ることを考えた方がいいかも。何か変わるかもしれないし…」

「そうだね。うん…そうしよう」

千歌ちゃんは私の話にうんと首を縦に振って、花丸ちゃんたちへのちよつとした勧誘を終わらせた。

実際に本当に今は曲を作らないとアイドル出来ないからね。花丸ちゃんたちにはまたの機会に勧誘させたらいいと思う。

そう思っていたら、千歌ちゃんは花丸ちゃんにバスの降りるところを尋ねていた。

「花丸ちゃんはどこで降りるの？」

「今日は沼津までノートを届けに行くところ…」

「ノート？どうして？」

花丸ちゃんは今から沼津まで行って誰かのためにノートを届けるようだけど、一体誰にノートを？

と思ひ当たる人物もいないのにそんなことを考えていたら、花丸ちゃんから出た言葉は、とある入学式に現れた、あの善子ちゃんっていう子だった。

実はその善子ちゃんが、入学式に来て以来、次の日から学校に来なくなってしまったらしい。

みんなへの自己紹介のとき、善子ちゃんはその時と同じように自己紹介をしたらしい。それが原因で、みんなから中二病だと思われたのかは分からないけど、それつきり学校に来なくなったみたい。

善子ちゃん大丈夫かな？まだあまり話したこともないけど、ちよつと心配かな？

「そうなんだ……。大変だね……」

「ずらつ……。はっ……。またずらつて言っちゃった……」

「ははっ！花丸ちゃんずっとそればかり！」

「また言ってしまったずら……。あっ！」

そんな天然つぷりを發揮する花丸ちゃんの言葉に、さつきまでの重苦しい空気が軽くなった。

花丸ちゃんの天然は面白い。すぐ言ったそばからまた言ってしまうというあたり、

きっとその語尾が馴染んでしまっているのだろう。

でも、間違った時のあの表情は面白い。写真撮って、1つの思い出として残しておきたいくらい。

『次は十千万前♪十千万前になります』

するとバスのアナウンスから、千歌ちゃんがいつも降りているバス停前に差し掛かっていた。

辺りを見渡しても、日は夕方になり、バスは港付近を走っていたから、千歌ちゃんはそろそろバスから降りる準備をした。

「じゃあ曜ちゃん、また明日ね！」

「うん！また明日！」

今日は金曜日だから、明日は土曜日の休日。

毎週のように千歌ちゃんから遊ぼうと誘いが来るから、休日でも楽しい日々が続いている。私にとって、1つのお楽しみであります！

「じゃあ花丸ちゃんもルビィちゃんもまたね！」

「はい！さよなら〜！」

「さ…さようなら〜」

それから千歌ちゃんは花丸ちゃんやルビィちゃんにもそう言つて、笑顔でバスを降りていった。

今日もまた、夜に遼くんのお家に行くつもり。

それが、私の毎日の日課だから。

〜  
〜  
〜  
〜  
※※※※※  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

「じゃあね〜！また明日〜！」

一番後ろに乗っていた曜ちゃんに手を振りながら、私はバスが見えなくなるまで見送った。

「……………」

「あつ、あの子……………」

それからそのあと自分の家に帰ろうとしたら、あの時と同じように、海の浜辺に転校生の姿があった。

カバンを両手で前に持って、沈もうとしている太陽とオレンジ色の海を眺めていた。

「桜内さ〜ん！」

「……………」



あの子、わざとシカトしてる。

私はあの子に聞こえるくらいに大声で名前を呼んだけど、きっと私の声を聞いて、また作曲のことかと思ってるのだろう。

でも今は別に作曲のことじゃないし、たまたま帰りに偶然会っただけだから何も心配ない。

「……………」

あの子は私に振り向きもしない。

こうなったら、あの時の話をぶり返すようだけど、アレをするしかないかな？

うん…思い立ったらすぐ行動だよ！

私は道路から砂浜へと階段を降りる。桜内さんはそれでも気づかないから、そつと音を立てないように桜内さんのすぐ背後に迫り、その場で私は座る。

そして私は桜内さんのスカートを……

ペラッ

桜内さんに言いながら堂々とめくった。

「もしかして…また海に入ろうと…あっ／＼／」

「なっ…ななななっ…／＼／」

そしたら桜内さんの制服の下には、あの時と同じ競泳用の水着じゃなくて、女の子なら誰でも身につけているであろう…下着だった。

しかも桜内さんの『桜』にちなんだ薄ピンク色。

桜内さんは自分の下着を見られ、恥ずかしさのあまりに顔を真っ赤にしながら私の方を見てくる。

それから彼女は私の方に振り向き、私がめくっていたままのスカートを強制的にバツと閉じてから、恥ずかしさの勢いに任せて私に尋ねてくる。

「み…見ました?!／＼／」

「ごめんなさい。また桜内さんが海に入ろうとしてるのかなって思っちゃって…つい…」

「してないですっ！／＼／＼」

彼女にしてしまった以上、見てしまったとしか言えない。逆に言わなかったら作曲どころか、もう相手にしてくれなくなっちゃう。

私はそれだけは嫌だった。

「それで？また私に作曲のお願いしに来たの？あのね…そんなに作曲のお願いをしてきても、私が答えることは変わらないわよ？」

「違うよ桜内さん。私の家がこっちだから、偶然ここを通りかかったただだよ」

やっぱりと思った。

きっと桜内さんはここでも私が勧誘してくるだろうと思って、彼女はそう話したんだろうけど、目的は全然違うことを話して弁解した。

それから私は、彼女がずっと…初めて会った時に話していたことを彼女へ問いかけた。

「そう言えば、海の音…聞くことはできた？」

「……ううん、聴けてない」

その私の問いかけに、彼女は首を2度横に振って答える。海の音は…まだ聞けてないようだった。

その時に私は、彼女にあることを尋ねる。

「じゃあ今度の日曜日…空いてる？」

「えっ?どうして?」

「海の音を聞かせてあげる」

日曜日は私も何もすることもないから、彼女のために日曜日に海の音を聞きに行こうと誘う。曜ちゃんも遼くんも大丈夫だと思うから、私は尋ねた。

でも彼女は私の本当の気持ちを悟られてしまい、彼女は私に向かって言い放った。

「でも聴けたらどうせ…スクールアイドルになれって言うんでしょ…?」

「そうしてくれたら…いいんだけど…」

バテていた。私が誘ってその後に言おうとしていたのに、真つ先に彼女に言われてしまった。

すると彼女は、初めて出会った時に話していたことを、もう一度だけ私に向けて話し出す。

「あのね…私が小さい頃からピアノをやっているって話は、ここで初めて会った時に話したでしょ？」

「うん、その話は覚えてるよ」

「小さい頃からずつとやってたんだけど、最近いくらやっても上達しなくて、やる気も出なくて。それで、環境変えてみようって。海の音を聞ければ何かが変わるのかなって…」

桜内さんはとても申し訳ないような、こんなことを話しても理解とかしてくれないよねって、なんか…辛そうな、そんな表情で話をしていた。

私も個人の事情は話を聞いてもよく分からないことはある。でも、私から言えるのは、彼女を前向きに、ポジティブにさせるのが一番だと思う。

私は自分の両手を彼女の両手と繋いで、にこやかに笑って彼女に言葉を投げかける。

「桜内さんなら変われるよ、きつと！」

「…っ、簡単に言わないでよ！」

「そんなの分かつてる。でも…そんな気がする…」

「……っ！」

確かに、簡単に変われるはずがない。

そう簡単に人生とか、運命とか変えられるなんて、そんなことを簡単に考えてなんかいない。

でも、それでもやるんだって信じて前に進めれば、きつと変われると思う。私はそう信じてる。あの人たちの歌を聴いて、そう思えるようになったから。

すると桜内さんは私の言葉と、私の表情を見て何かを思ったのか、口角が上がり『フツ』と微かな笑みを浮かべた桜内さんは言う。

「ふふっ…変な人ね、あなた……」

「笑った。梨子ちゃん笑った！」

「ふふっ…もう……っ！」

とうとう変な人って言われちゃった。けど、初めて会った時より表情は笑ってるから、つい私は彼女の下の名前で呼ぶ。でも桜内さんは、そんなことを気にしてもいなかった。

そして桜内さんは話を切り替えて私に話す。

「とにかく、私はスクールアイドルなんてやってる暇はないの。だから……ごめんね……？」

また申し訳なさそうに話す桜内さん。

でも、彼女のために海の音は聞かせてあげたい。

私が頭の中でそう考えたとき、閃いた。

頭の中で閃いた私は、『じゃあ』って言葉に続けて桜内さんに話をした。それももちろん、スクールアイドルとか全然関係ないこととしてね！

「じゃあ海の音だけ聞きに行こう！スクールアイドルとか、関係なしでね！」

「ええ〜!!？」

「それなら……大丈夫でしょ？」

桜内さんの両手を強く握りしめ、私はあなたのために協力するよって気持ちで、言葉と一緒に笑顔でメッセージとして送る。

私の笑顔を見た桜内さんは、その私の笑顔を見たあとで、ため息をつきながら私に言い放った。

「やっぱりあなたは変な人ね。ありがとう」

その彼女の言葉は、私が海の音を聞かせてくれる…協力してくれることに感謝している言葉だった。

私はその言葉を聞いて、心の底から喜んだ。そしてそれから、私から彼女へ海の音を聞きに行く日にちのことも一緒に話をした。

「じゃあ今度の日曜日に、ここに来てね！」

「( )でいいの？」

「うん！( )でいいの！」



きっと桜内さんはここに来て日も浅いし、ダイビングショップにも行ったこともないと思うから、ここに集まった方が桜内さんも大丈夫だと思う。

それであとから私がダイビングショップに連れて行って、曜ちゃんとかもみんなも誘って、海の音を聞きに行こうと思う。

「じゃあ約束だからね〜！」

「う…うん。約束ね…？」

そして私はそんな約束を桜内さんとして、私はそれからそそくさと家に帰るのであった。

桜内さんは私の強引さに少し困り気味だったけど、海の音に聴きに行けることに、私  
が去ったあとで笑みをこぼすのであった。



そして曜の手には、いつも着ている水着が入った手提げカバンを持っていた。

今日は曜と千歌の学校にやってきた転校生の要望で、海の音を聞きたいということ  
で、ちやうど部活が休みだった俺も誘われることになった。

ていうか、この曇り空だと潜ったら絶対冷たいと思う。若干ではあるが、木も揺れて  
るから風もある。

「遼くん、早く行こうよ〜!」

まだ朝の8時なのにもかかわらず、曜は集合場所の『十千万』の近くの浜辺に行こう  
と急かしてくる。早く行きたい気持ちも分かるが、俺はまだ起きたばかりだ。それに集  
合時間は9時なんだから、そんなに急がなくてもいい気がする。

朝飯も食ってないし、歯を磨いてもない。こいつが準備するのが早すぎなだけなん  
だ。

「遼くんってば〜」

「はあ……」

でもまあ……こいつが早く行きたいって言うのなら、こいつの我が儘に仕方なく付き合つてやるか。

俺に上目遣いをしてきて、俺に駄々をこねてきたのが可愛かったなんてことは、こいつには内緒な？

「はいはい。今から準備するから待つてろよ？」

「うん！ ヨーソロー！」

曜にそう言つて自分の部屋で待たせ、自分の部屋を出た俺は、すぐさま準備に取り掛かる。

朝御飯は簡単にバナナなどのエネルギー食品を体に取り入れ、お腹の空腹感を満たす。それから洗面所で歯を磨き、顔を洗う。

真つ白でふかふかなタオルで濡れた顔を拭き、そのあとでまた部屋に戻ると、曜は勝手に俺のベッドに横たわつて寛いでいた。

「あつ、おかえり〜♪」

「『あつ、おかえり♪』じゃねえよ。人のベッドで勝手に寛ぐな。あの時みたいに襲われ

たいのか？」

「きやく！ 遼くんに襲われる〜！」

「こいつ俺のことを馬鹿にしてやがる……」

いや、やろうと思えばやれるのよ？

こんな余裕な表情をしている曜を、いつでも淫らな格好にさせることなんて俺にとつて容易だ。

まあ……やろうと思えばの話だ。

「とりあえず、俺は着替えたり準備するから、曜はとつと部屋を出て下に降りて待つてろ」

「は〜い！」

曜が部屋から姿を消したあと、俺は即座に外に出られる格好に着替えた。ダイビングスーツにかさばらないよう、いつも履いている水着のパンツをカバンに放り込み、タオルなどもカバンに入れたあとで、俺は曜が待つリビングに足を運ぶ。

「悪いな。お待たせ」

「それじゃあ行こうか！ちよつと早いけど！」

「ああ！ちよつと早い方がちよつどいい」

それから俺と曜は家を出て、2人で出発の合図である『ヨーソロー！』をいつものように掛け声をしてから自転車で集合場所へと向かった。

俺たちが向かう集合場所である『十千万』までは、ここから結構遠い。それに自転車だから、それなりに時間はかかってしまう。

だが曜といろんなことを話したりしていたら、いつの間にか集合場所に着いてしまった。

「あつ！曜ちゃん！遅くくん！」

『十千万』に近づくと、集合場所の近くの浜辺から千歌の声が聞こえてきた。浜辺に目を向けると、浜辺には千歌ともう1人の女の子がいた。赤みがかつた長い髪に、顔立ちが綺麗な女の子。

きつとその子が転校してきた子なんだろうと思つた俺は、曜の自転車と一緒に『十千

万』に場所を借りて自転車を止めてもらい、カバンだけを持って千歌がいるところへと歩いていく。

「おはよう曜ちゃん！遼くん！」

「千歌ちゃん、おはよう！桜内さんも！」

「お……おはよう……」

千歌、曜、そして転校生の子の3人は挨拶をして、その後に俺の正面に千歌たちの学校に転校してきた子を千歌は連れてくる。

そして千歌から紹介をもらった。

「遼くん、この子は桜内 梨子ちゃん！東京の音ノ木坂学院つてところから来た子だよ！」

「さ……桜内 梨子です！あの……高海さんから幼馴染みだとは聞いてます！あの……その……  
／／／  
／／／」

初対面だからだいたい緊張してるねこの子。

桜内さんは俺に対して、もじもじと顔を赤面させながら自己紹介をしてくる。

男の子とかと絡む機会とかなさそうだし、自分で話をしているけど、その最中は俺に目を合わせず、目線を横や下に泳がせていた。

こういうのは、俺から話しかけた方がいいかも。

そう考えた俺は彼女に対して一歩前に近づき、彼女に手を差し伸べて彼女に自己紹介をした。

「よろしく！俺の名前は楠神 遼。桜内さんが言った通り、千歌と曜の幼馴染みだよ。これからよろしくね、桜内さん！」

「は…はい！よろしくお願いします！」

桜内さんはまだ落ち着きを取り戻せていないけど、初対面ということだから仕方ないか。

俺と桜内さんは両手で握手を交わし、それから桜内さんに話をしたあとで千歌にあることを尋ねる。

「まあ詳しいことは船で話そう？」



「は…はい！」

「千歌、この時間に定期船あったよな？」

「うん！一本あるよ！」

千歌に尋ねたのは、港から出る定期船のことだ。

ここで桜内さんと話すのもなんだから、船で果南のところに行きながら話した方がいいと思つてね。

できるだけ、この桜内さんの緊張もほぐしてやった方がいいと思うし、これから千歌たちとも友達としてやっていくのであるのなら、俺もその子とは友達になりたい。

「じゃあその船で行こう。定期船で少し桜内さんとも話がしたいしな…」

「ああく！遼くんナンパだ！」

「違うわ！ナンパなんかすか！」

千歌と曜にナンパとか言われるのはちよつと悲しいけど、仲良くなりたから我慢した。

とりあえず俺たちはそれから定期船がある港に行き、定期船に乗り込む。波にゆらゆ

らと揺られながらダイビングショップへと向かった。

「楠神くんって、何かスポーツでもやってるの?」

「俺はサッカーだよ。小さい頃からやってる」

「遠くんって凄いんだよ! サッカーですごく強い学校に通ってるんだよ! 凄いよね!」

「へえ〜! そうなんだ〜!」

定期船で目的地に向かう間、みんなで話を花を咲かせた。桜内さんも少しずつつ千歌や曜の話の中に入っていけるようになっていったので、俺はそれを見て少し安心した。

俺の話をしたあとで、彼女たちは彼女たちでしばらく話をしていった。内容といたら、ガールズトークならではの話だ。例えば: オシャレとかな?

「あつ、そろそろ港に着くよ!」

「本当? 結構着くの早いのね」

「まあ、そこまで遠くもないからね」

15分ほど定期船で過ごした時間は短かった。まあそれくらい、みんなで話していたからな。

俺たちは定期船を降り、港からダイビングショップへと徒歩で歩いていく。事前に果南にも連絡はしていると千歌は言っていたから、果南もダイビングの準備は進めているだろう。

約5分ほど歩いたところで、例のダイビングショップが見えてくる。ちょうど入り口の前には、すでにダイビングスーツを着ていた果南の姿があった。

「おーい！果南ちゃん！」

「ち……ちよつと！お店の人を名前と呼ぶなんてちよつと失礼じゃない!？」

突然、千歌がお店の人に対して名前呼び捨てるのを見て、桜内さんは驚いて叱責する。でもこれは仕方のないことで、俺は彼女を宥めて説明をした。

もちろん、果南との関係も含めてだ。

「大丈夫だよ。千歌が今呼んだ彼女も俺たちの友達でね、実は俺たちと同じ幼馴染みなんだ」

「ええ!?あの人も幼馴染みなの!」

「ああ。年は俺たちより一つ上だし、とても優しい人だから安心して構わない」

果南とは幼馴染みだと話すと、流石に桜内さんも驚きを隠しきれない様子だった。年上に幼馴染みって考えると、そう思われても仕方ないよね。

でもすぐに桜内さんはそれで納得してくれた。実際果南は優しいお姉ちゃんみたいな人だし、千歌も曜もそんな風に絡んでる。果南もそれで満更でもない表情だったりする。

まあとにかく、果南は包容力のあるお姉さん。

初めて会う桜内さんには、そう思ってもらったほうがいいかもしれない。

「おっ、みんな来たね!おはよう〜!」

「おはよう果南ちゃん!」

「ヨーソロー!おはよう果南ちゃん!」

千歌と曜はいつも通りに果南と挨拶を交わす。

「おはよう果南。相変わらず準備は早いな」

「千歌にダイビングするって言われたから、準備はしないとね。物事にはまず準備が大事だから」

俺も2人に続いて果南と挨拶をして、話を終えたところで俺は桜内さんの背中を押し、千歌に彼女を果南に紹介しようと促す。

「ほら千歌、果南に紹介しないと」

「うん！果南ちゃん！桜内 梨子ちゃんだよ！」

「よろしくね！梨子ちゃん！」

「は…はい！よ…よろしくお願いします！」

おどおどしながらも頭を下げ、桜内さんは果南と挨拶をする。果南はそれを行動に笑みを浮かべつつ、もう下の名前を呼び始めた。

それから千歌から桜内さんの話を聞いていて、東京から転校してきたことや、ピアノがとてもしっかりであることに果南は関心を抱いていた。

それで千歌から桜内さんの話をし終えたところで、果南は俺たちに話を切り出す。

「それじゃあ、ダイビングスーツの準備は出来てるから、早速中で着替えてきて！全員が着替え終わったら、早速ダイビングに出発だよ！」

「はーい！」

海に潜るためのダイビングスーツは中に準備されているらしい。千歌と曜は果南に言われるがまま建物の中へと入り、着替えに向かっていた。

だが桜内さんは更衣室へと向かわずに俺のそばにいたので、俺は桜内さんに向かって言う。

「桜内さんも着替えてきたよ。俺は千歌たちが着替え終わったら着替えるからさ」

「はい、これが梨子ちゃんのスーツだよ！」

俺が話をしていると、果南もその話に入ってきて桜内さんにダイビングスーツを手渡す。果南が渡したのは、紺色をベースに両脇にピンクのラインが入ったダイビングスーツだ。

「水着は持ってきた？」

「は…はい。水着は持ってきました」

「じゃあ大丈夫だね！」

「さっ、着替えた着替えた！」

桜内さんは果南や俺に急かされるがまま、建物の中へと入って更衣室へと向かった。千歌や曜もいるから着替えは大丈夫だろう。

そして5分くらい経ったあと、着替え終わった千歌と曜は桜内さんを連れて戻ってきた。

「お待ちせ〜！」

「お待ちせしたであります！」

「うう…なんか恥ずかしい…／＼／＼」

千歌と曜はいつも通り陽気に歩いてくる。逆に初めてダイビングスーツを着る桜内さんは恥ずかしさのあまりに顔を赤面させていた。

桜内さんの髪型はさっきまでとは違い、髪を後ろでお団子ヘアみたいにまとめてい

た。

「く…楠神くん！み…見ないで…／＼／＼」

そう言つて桜内さんは、別に俺はまじまじと見ているわけでもないのに、恥ずかしくて両手で自分の体を頑張つて見せないようにしている。けど、自分の体のボディラインを浮き上がらせてしまうダイビングスーツを着ている彼女がしているのは、全くもつて無意味である。

ある意味、セクシーなポーズをしているようで性的興奮を駆り立てるだけだった。

「大丈夫！見てないから安心して？」

「うっ…本当ですか？」

「本当だよ。安心して」

俺は桜内さんを安心させ、それから今度は俺が着替える番だったからそそくさと着替えに向かった。



「じゃあ俺も早速着替えてきますかな」

「早く着替えて着てね〜！」

千歌に大声でそう言われ、はいはいと心で思いながら更衣室でダイビングスーツに着替えた。

それで更衣室で着替え終わったあと、みんなが待っているところへと戻ると、ダイビングに使う用具が千歌たちの手によって用意されていた。

ゴーグルにシュノーケル、そしてフィンが用意されていた。桜内さんのために海の音を聞きに行くだけだし、比較的浅いところでダイビングするわけなので、そこまで重装備はしない。

「準備は万端な感じだな」

「うん。そつちも着替え終わったね？」

「ああ！じゃあそろそろ海に出発しようか？」

「よお〜し！出発だ〜！」

千歌はもうすでにダイビングすることに笑顔でウキウキとしていた。千歌はゴーグ

ルとシュノーケルを持って、港へと走って向かっていった。

曜も千歌のあとを徒歩でついて行く。曜は忘れてないだろうが、千歌に関しては、今日の本当の目的を忘れてしまっていないか心配だ。

「千歌の野郎…桜内さんのためだけに海に潜るってことを忘れてるな…あれは…」

「別に気にしなくても大丈夫です。高海さんがわざわざ私のためにこんなことをしてくれているので、別に文句なんて言いませんよ」

「悪いな。友達があんなので…」

「いいえ！別に大丈夫です」

何か凄く気を使われてる感じがしてならない。笑顔をより繕ってる様子が彼女を見て感じられる。

もちろんきつと桜内さんは、転校初日で千歌から勧誘をされまくっていたから、そのことで少し腹を立てているのかもしれない。

でも彼女の表情は真つ白で、どす黒いオーラなど何もなかった。なんというか、彼女は天使かと思ってしまう俺であった。

俺と桜内さん、そして果南の3人はダイビング用の小さなボートが止めてある港へ足

を運ぶ。千歌と曜はすでにボートに乗り込んでいた。

「遼く〜ん！桜内さ〜ん！果南ちや〜ん！」

「早く行こうよ〜！」

俺たち3人を急かしてくるようように声をかけてくる千歌と曜に俺はイラつとするけど、そこはちよつと我慢して俺たちは船の目の前までやってきた。

すると何かに疑問を持った表情をした桜内さんは、俺や果南に向かって疑問を投げかけてきた。

「そういえば思ったんですけど、船は誰が運転するんですか？船にも免許はいるんですよ？果南さんといえど、運転するにはまだはy…」

「船は私が運転するんだよ」

「……………えっ？」

桜内さんが疑問に思っていたのは、この船を誰が運転するということだった。でもその疑問は、桜内さんが尋ねてくる前に、果南のたった一言で解決してしまった。

果南のたった一言で、桜内さんの表情は固まる。

唾然とした表情のまま、その表情を果南の方へと向けてそれが本当なのかともう一度尋ねるが、その前に俺から真実を告げた。

「えっ?でも…果南さんは…」

「果南だよ。船を運転するのは…」

「ええ〜!?!」

自分の1つ年上が、まさか船を運転するという驚きの真実に、桜内さんは驚愕して声を上げた。

そしてそこから一步、二歩後ずさり、今にも逃げようとする体勢になりかけていた桜内さんの背後を俺は取り、彼女に言う。

「く…楠神くん!?!」

「さあさあ、行きますよ桜内さん!」

「ええ〜!そんなあ〜!」

俺は桜内さんの背後を取ったあとで、後ろから桜内さんの背中を押しして半強制的に船に乗り込ませた。

彼女が逃げるってことはなさそうだったけど、ダイビングの本来の目的は桜内さんが海の音を聞きたいからということだから、本人がまず逃げてしまつてはどうにもならない。

「じゃあ少し揺れるけど、我慢してね？」

「はーい！」

全員が船に乗り込んだあとで、果南が操縦席に座り、みんなに声をかけてくる。その声に千歌と曜は陽気に返事をして、俺は無言で右手をあげた。

声を上げなかったのは、隣に桜内さんがいるからだ。実は船に乗るのは初めてらしい。だから少し怖がついていたんだなって、今はつきり理解できた。

「桜内さん、大丈夫？」

「う…うん。こういう船に乗るのは初めてだから、その…少しそばにいてください…」

「……うん。分かったよ桜内さん」

桜内さんの甘えてくる表情……めっちゃ可愛い。

なに？このか弱い小動物は？赤面して甘えてくるあたり、めっちゃ恥ずかしがつてるのが見て取れる。

内心めっちゃ可愛いと思いつつ、このドキドキ感が3人にバレないように頑張つて平然を装った。

「じゃあ、出発だよ！」

「はーい！しゅっぱーつ！」

「えへっ！ヨーソロー！」

そして果南は船を走らせる。船の出発と同時に船体は大きく揺れ動き、『きやつ！』と声を上げる桜内さんの胸が、俺の左腕に当たってくる。

桜内さんの胸が……当たってる。俺の左腕にムニユっていう感触が伝わってくる。桜内さんの胸の感触に襲われる俺は、心臓がドクンドクンと動悸が早くなっていた。そして俺は思う。

どうか……バレずにこのままでいさせてくれ。

ダイビングするポイントに着くまででいいんだ。

このまま桜内さんが俺に甘えたまま、俺にこの至福のひとときを過ごさせてくれ！

心の中でそう願う俺であった。

## #7 海の音

「はい、着いたよ〜！」

7〜8分ほど船に揺られながら移動して、ダイビングするポイントまで来たところで、果南は船を止めて俺たちに声をかける。

船に揺られながら桜内さんのそばにいた俺は、至福のひとときを終えて満足していた。

「遼くん？なんか顔がやけてるよ？」

「そうか？別になんでもないんだけど…」

いけないいけない。顔のにやけを抑えないと、今度は桜内さんにも変態と言われてし



まいかねない。

それだけはマジで勘弁だった。

「じゃあ、ダイビングする準備して！」

「は〜い!!」

果南はダイビングの準備へと取り掛かる。船の錨を海へと下ろし、船が動かないようにする。

千歌と曜の2人もダイビングの準備を始める。ゴーグルを頭につけ、足にフィンを履き始めていた。

「あれ…?あれれっ…?」

すると準備に戸惑っていたのは桜内さん。

足につけるフィンの履き方が全く分からず、フィンを履くのに手間取っていた。それを見た俺は、すぐに行動に移した。

「足にフィン…付けてあげるよ」

「いいんですか？こんなことしてもらって…？」

「別に大丈夫。ほら、足出して？」

「えっ？あつ、はい…」

履くのに手間取っていた桜内さんの分のフィンを、俺が代わりにつけてあげることにした。

片方ずつしっかり足にフィンをつけてあげて、フィンを両足につけてあげたところで履き心地が悪くないかを彼女に確かめる。

「どう？きつくない？」

「うん。足もちやんと動かせるから大丈夫」

「それなら良かった」

フィンの履き心地に関しては問題ないようだ。

俺も足にフィンとゴーグル、シユノーケルを手間取ることなく頭につけて準備を整える。

「準備は出来た？」

「出来たよ！桜内さんは？」

「私も準備は大丈夫です！」

「じゃあ早速潜ろう！」

桜内さんにも準備が出来たかと尋ねた千歌は、そのあとに海に向けて猛然と飛び込んだ。

バシヤン！

大きな音とともに海に飛び込んだあとで、曜も千歌のあとに続くように海に飛び込んだ。でいった。

「遼くん！先に行くね！」

「おう！」

曜は高飛び込みの選手だから、海に飛び込むときは大抵、高飛び込みのフォームで飛び込む。

2人が順に海に入って行くところを見た桜内さんは、何かと少し心配そうな表情をしていた。

「だ…大丈夫かな？」

「心配しなくても大丈夫だよ。俺も桜内さんに付き添ってあげるから、なんの心配もいらないよ」

彼女にそう告げ、そのあとで俺は彼女の手を手に取り、ゆっくりと海の方へと歩く。

その時、果南から告げ口を告げられる。

「遼、梨子ちゃんと一緒にいるからには、絶対に離れないでね？潮の流れは早くないけど、はぐれたら容赦しないんだから！」

「は…い、分かりました」

果南からの忠告を十分に胸に刻んだ俺は、まず桜内さんを船に置いて海に入る。

海は果南の言う通り、そこまで潮の流れは早くない。海の温度は予想通り、少し冷たかった。

「さっ、桜内さん。俺の手を取ってゆっくりね」

「う…うん…！」

桜内さんに手を差し伸べ、桜内さんは俺の手を使ってはゆっくりと海に入ってくる。ホツと胸を撫で下ろした桜内さんに、俺は尋ねる。

「桜内さん大丈夫？桜内さんってここまで海で深いところに来るのは初めてでしょ？」

「うん。海は浜辺の近くでしか遊んだことなかったから、ここまでは初めて…」

「そっか。じゃあ初めての桜内さんにはしっかり俺が付いてあげるから、あまり気負いはせず、目的の海の音を聞きに行こう」

「うん！よろしくね！楠神くん！」

自分から桜内さんに言ったし、果南にも任された以上は責任は果たすつもりだ。

命を掛けても…とはいかないけど、初めて体験するダイビングに不安を持たせてしま

わないよう、俺は彼女のサポートをすることを誓った。

「じゃあ潜るよ?」

「う……うん……!」

「3……………2……………1……………!」

俺が指で3からカウントし、それから大きく息を吸って、そのまま一緒に海へと潜る。海のに潜ると、天気に影響もされているから、曇り空のようにほぼ真っ暗に近く、何も見えなかった。

しばらく深く潜ったところで俺は桜内さんとその場で留まり、桜内さんは海の音を聞こうと目をスツと閉じて海の音を聞く。

「……………」

10秒ほど目を閉じて海の音を聞いていた桜内さんに対して、俺はジェスチャーで尋ねる。

(どう? 海の音は聞こえた?)

(ううん…ダメ…)

彼女は首を横に振り、『ダメ』と返事をした。

その後で千歌と曜も俺たちのところに泳いできて、千歌が聞こえた? って尋ねれば、桜内さんは俺の時と同じように首を横に振った。

一度、俺たちは海面に浮上した。

「ぶはあ! はあ…はあ…!」

「大丈夫? きつくない?」

「うん…大丈夫。まだ潜るわ!」

桜内さんはまだ潜る意思はあるようで、どうしても海の音を聞きたいみたいだった。

「じゃあ俺が付き添うよ。もし桜内さんの身に何か起きたら大変だからね。千歌と曜はどうする?」

「私と曜ちゃんも一緒にいるよっ! だって…もとはといえば私が桜内さんを誘ったんだ

しー！」

にもかかわらず、本来の目的を忘れて、曜と一緒に潜っていたのはどうなんだろう？  
しつかり者の曜でも忘れていたようだから、本当に大丈夫なのかと俺は少し心配になつてくる。

「じゃあまた海の音を聞きに行こう！」

「うんー！じゃあ早速潜ろう！」

それからまた千歌と曜は海へと潜つて行った。

「ごめんな…俺の幼馴染みがこんなで…」

「いいんです。最初の頃は、変な人だなあつて思つてたんだけど、今は少しだけですけど、高海さんといると楽しいな〜つて思うの」

「……そつか。それならそれでいい」

少し心を開いてくれたつて証拠かなかな？





私のために手伝ってくれてる3人のためにも、私は何としても海の音が聞きたかった。

だけど…海の音は聞こえない。

「ぶはあ！はあ…はあ…はあ…！」

「桜内さん、大丈夫？」

「うん…大丈夫…」

何度も海に潜つても、何回聞こうとしても、肝心の海の音は聞こえなかった。

「どうする？また潜る？」

「ううん。ちよつと疲れてきちやつた…」

高海さんの問いかけに、私は答えるのに必死だった。理由としては、海に潜り続けていたせいで息が上がっていたからだだった。

その私の答え方に何かを悟った楠神くんは、すぐに私に対して対応してくれた。

「じゃあ一旦船に戻ろうか。桜内さんの体力はもしかしたらそろそろ限界に近いと思うからさ」

「うん、分かったよ遼くん」

「さっ、桜内さんも船に戻ろう」

「うん……」

楠神くんに船まで連れてきてもらい、先に船に上がった高海さんと渡辺さんに引き上げてもらった私は、船で疲れた体を休めることにした。

「イメージか…、難しいね……」

「うん。イメージするって簡単だと思ってたけど、とても難しいんだね……」

高海さんや渡辺さんは、楠神くんがアドバイスしてくれた言葉に解決を見いだせず、

悩んでいた。

楠神くんがアドバイスしてくれたのは、『海の音』をちゃんとイメージした方がいいんじゃないかっていう、いたってシンプルなおアドバイスだった。

ただ目を瞑れば聞こえるなんてことはないからと、的確にアドバイスしてくれた楠神くんは凄く感謝しているけれど、なかなかそれでも聞こえなかった。

「俺がシンプルにアドバイスしても聞こえないってことは、そんなに簡単に聞こえないってことなんだよ。それに、天気で景色は真つ暗だし…」

「景色は真つ暗…かあ……あつ！」

すると高海さんが何か思いついたように声を上げ、私たちに向かって話をする。

「そうか分かった！分かったよ！桜内さん、もう一回だけ海に行ってみよう！」

「えっ!?!い…今から!?!」

「お前な、今さつき船に戻って来たばかりなんだぞ。少し桜内さんの気を遣ってやれよ」

楠神くんは私のことを気にしてくれて、高海さんに向かって叱責をするけど、彼女は

まるで子供みたいに地団駄を踏んでは言い返す。

「今しかないの〜!今しか〜!」

高海さんの子供のような行動に呆れた楠神くんは、呆れた表情のまま私に顔をを向けて尋ねて来た。

「…つたく。桜内さん、どうする?」

「う〜ん…そこまで高海さんが言うなら…」

「本当!? やった〜!」

悩んだ挙句に答えを出した私は、高海さんにそう話す。私の答えを聞いた高海さんは、大喜びして勢い任せに海に飛び込んでいった。

「ち…千歌ちゃん!飛び込んだら危ないよ!」

「だ〜いじよ〜ぶ〜!!」

渡辺さんの心配にも笑顔でそう話せるあたり、彼女は本当に笑顔が絶えない人だなあつて感じる。

羨ましくないといえば、嘘になる。

「仕方ない。行きますか？」

「ええ！もう一度、海に行きましょう！」

それから私たちはもう一度、高海さんが何かを思いついて示した行動につられる形で海に潜る。

また楠神くんにリードとして手を繋いでもらいながら、高海さんと渡辺さんを追いかけるように泳ぐ。

次こそは…次こそはと思った私は目をスツと閉じて、海の音を聞こうとする。

「……………」

だけど…何も聞こえない。景色も真つ暗だった。

心の中でため息をつく。

ピアノが全然弾けなくなって、環境変えるため…何かしらのヒントを得るために高海さんや渡辺さん、それに楠神くんや果南さんにここまでして優しくしてくれたのに、海の音も聞けず、何も掴めないまま終わってしまうのかと…私は申し訳なく思った。

ポンツポンツ

(……………っ！)

するとその時、ずっと隣にいてくれていた楠神くんが、私の肩を優しく叩いてきた。私は彼を見ると、彼は私を見たまま左手の人差し指を海面へと指差していた。そして高海さんや渡辺さんも同じように私を見ては、右手の人差し指を海面の方へと指差していた。

(上…見てみなよ)

楠神くんの表情からそんな言葉がかけられたような気がした私は、その伝えられた言葉に従うまま、顔を上へと向ける。

(…っ！これって…！)

すると目の前に見えた景色は、さっきまでのとは違った景色が広がっていた。真つ暗な景色ではなく、海に光が差し込み、あたり一面が明るくなっていく景色が広がっていた。

するとその時だった。

くく♪

(…っ！?今の…今の音って…！)

景色を見て感動していた私の耳に、ピアノのような旋律が入ってきた。

もう一度その音を聞こうと、その音が今なんだったのかを聞こうと、私は耳をよく澄ませた。

すると……





間違いなかった。今の音はピアノの旋律。  
そしてそれが、海の音の正体だった。

(聞こえた！これが…海の音！)

私は両手を目の前に出して、ピアノを弾くように指を動かすと、またピアノの旋律が  
鳴り響く。



やっと聞けたんだ。私が求めていた海の音。

そのあとで海面に一気に浮上して、シュノーケルを取って上がっていた呼吸を整えて  
いると、高海さんと渡辺さんも海面に浮き上がってきて、高海さんは私の方に寄ってき  
ては私に尋ねてきた。

「ねえ！今、音が聞こえなかった!？」

「うん！聞こえた!」

「私も今、聞こえた気がする!」

高海さんの聞き方や話し方だと、高海さんも私と同じ海の音を聞くことが出来たみたいで、彼女は嬉しそうにはしゃぎ始める。

「本当!?!私も聞こえた気がした!?!」

すると渡辺さんも同じように海の音が聞こえたみたいで、嬉しそうに私と高海さんに寄ってくる。

「曜ちゃんも!?!じゃあ私たち…海の音を聞くことが出来たんだね!」

「うん!きつとそう思う!」

本来の目的だった海の音を、彼女たち2人も聞く事が出来たことで、2人はとても嬉

しそうだった。

そして、私も何故か嬉しかった。

なんでだろう。もしかしたら、同じ目的を達成したことで、きつとその喜びを分かち合える友達がいるっていう証拠なんかもしれない。

そう思った私は、自然に笑みがこぼれた。

「ふふっ……！」

「あっ、桜内さん笑ってる！」

「なんで笑ってるの？」

「ううん……何でもない……！」

私が笑っている理由をはぐらかしたことで、『変な桜内さん』って高海さんに言われてしまった。

でも、それでもいい……。

だってもう……私の目の前には、私を支えてくれる仲間が出来たんだから……！

「えへへっ！あはははっ！」

「あはは！あはははっ！」

「うふっ！うふふふっ！」

それから私たちは抱きしめ合ってたくさん笑った。

目的だった海の音を聞くことが出来たことを、私たちみんなで祝うように……たくさん笑った。

~~~~~※※※~~~~~

目的だった海の音を聞くことが出来たのか、千歌、曜、桜内さんの3人は嬉しそうに笑っていた。

無事に海の音を聞くことが出来たのかどうなのか分からなかったから、俺は3人のそばに寄って行き、そつと声をかける。

「海の音、聞けたかい？」

「ええ！海の音…！しっかり聞けたわ！」

初めて目の当たりにした桜内さんの笑顔を見て、海の音はかけたようだと言った心の中で思った俺である。

「ねえねえ遼くんは？遼くんは聞けたの？」

「残念ながら…俺には全く聞こえなかったよ。でも海の中から見えた景色はとても最高だったよ」

海の音がどんな音だったのか…俺もすごく知りたかったけど、今回は桜内さんの要望で聞きに来たわけなので、今日は諦めることにした。

また今度、俺一人で来るとしよう。

「じゃあ目的の海の音が聞けたようだから、そろそろ船に戻ろうか？果南をずっと船に待たせるわけにはいかないしね？」

「そうだね！じゃあ戻ろう！」

そうして俺たちは泳いで果南が待つ船に戻る。

船の甲板には、ダイビングスーツのまま腕を組み、仁王立ちで俺たちを待っていた果南の姿がある。

「お疲れ様。海の音は聞けた？」

「うんっ！海の音、すつごく綺麗だった！」

「私は千歌に來ているんじゃないやなくて、梨子ちゃんに聞いているのになあ〜」

果南の不満を述べる言葉に、千歌は『ええ〜!?』って叫びつつ、その言葉が重く突き刺さったらしく、近くの壁にもたれて項垂れる。

その様子に俺たちは笑みをこぼす。

桜内さんも、それを見て笑っていた。

「じゃあ目的の海の音は聞けたのね？」

「はい！3人のおかげで、海の音は無事に聞くことが出来ました！なので、もう十分です！」

そして果南の問いかけに桜内さんはそう答え、彼女は満面の笑みを浮かべた。

果南もその表情を見て運転席の方へと歩き出し、運転席の入り口に差し掛かるところで俺たちに振り向いて、彼女は言い放つ。

「それじゃあお店に戻るから、船を出すね？」

「はーいー！」

果南の声に千歌と曜は大きく返事をして、それから果南が船にエンジンをかける。船からは大きな音が鳴り響き、俺たちの耳に響いてくる。

そろそろ船が動き出そうとしていたとき、俺は桜内さんの近くまで歩み寄り、尋ねる。

「桜内さん、また近くに来てあげようか？」

「うん…お願いします」

彼女がそう答えるあたりは、まだ船に慣れていないようなので、俺は自分の右腕を差し出し、その右腕に彼女は両手を使ってしがみつくように俺に密着してきた。

まだ彼女の胸が俺の腕に当たって来てまたドキドキしていたけど、彼女が俺に話しかけてきたので、俺はその話には耳を傾けた。

「楠神くん、あ…あのね…」

「んっ？なに桜内さん？」

「あの…今日はありがとう。海で私を引っ張ってくれたり、色々手伝ってくれて…／

／

「お礼なんていらないよ。俺は桜内さんの目的のために手伝ってあげただけだからさ…」

彼女から出た言葉に、俺はドキツとしてしまう。

幸い顔には出なかったけど、お礼を言ってきた桜内さんの言葉はしっかりそのお礼を

受け止め、心の中にしまっておくことにした。口からは「お礼なんていらないよ」って
言ってしまったけど…。

すると桜内さんから、思いがけない言葉は飛び出して来る。それは俺でも想像もしな
い言葉だった。

「それでね。あの…もしよければ…」

「えっ…?」

「今度から、名前で呼び合いませんか?」

「えっ? いきなりそんなこと言っているの?」

お互いに名前で呼び合おうというのだ。

その言葉を聞いた時は、今日初対面で初めて会った人に言える言葉かと、俺は心の中
で思った。

「いいんです。今日初めて会ったのに、私に優しく接してくれた楠神くんには感謝して
います。だからこそ、私はもつとあなたを知りたいんです!」

でも、彼女の表情は本物だった。

眼差しは真つ直ぐで、俺を見てずっと離さない。

そんな眼差しで見られては、断れるわけがない。

「そんな眼差しで言われると断れないよ…梨子」

「…っ！遼くん！これからよろしくね！／＼／＼」

自分で提案したにも関わらず、顔を赤面させるのは彼女っぽいようで、彼女は恥ずか
しがりながらも、俺の名前を呼んだ。

ということと俺は桜内さんのことを…今度から名前で呼び合うことになった。

初対面の女の子を…名前で呼ぶことになった。

そしてそれと同時に……

「遼くん、桜内さんとイチャイチャしてる」

「変態だなあ…遼くんは…」

千歌と曜から罵声を浴びせられるのであった。

8 “大好き” という名の『気持ち』

翌日、昼休み

「えっ？桜内さんに作曲をしてもらえるだって？」

『うん！でもスクールアイドルには流石にならないって言ってたけどね…』

「いや…それでも十分だろ…」

俺は曜の話聞いて、とても驚いている。

実は、梨子が千歌たちに対して、作曲をしてあげると自ら申し出たということなのだ。どういふ訳かは彼女の考えあつての行動だろう。

そうとしか考えられない。

『でも凄いやね！私たちのために作曲してくれるんだもん！きつとあの時のお礼でなのかな？』

「さあな。でも…一番の理由はそれだと思う」

日曜にダイビングしに行った時には、梨子も思いっきり千歌と曜と一緒に笑っていた。

それが何よりも証拠で、目的の海の音を聞けたからと、手伝ってくれたそのお礼と思いい、彼女はそんな行動に出たのだろう。

考えがもし正しくなければ、彼女自身…自らがわざわざ申し出るわけもないと思うからね。

『それでね…千歌ちゃんが歌詞って何って…』

「…あいつ、また何かやらかしたのか？」

『やらかしたというわけじゃないけれど、桜内さんが千歌ちゃんに『詞を頂戴』って言ったとき、千歌ちゃんの頭には、*ダ*、*ダ*、マークがあつてさ…』

「あいつ…スクールアイドルというものが何するか本当に分かってるのかな？すごく心配だ」

『詞』……つまりは曲の歌詞のことだろう。

だが千歌の野郎は、そんな歌詞のことすら分かっていないようで、『詞』って何って梨子に尋ねていたと、あとで曜から話は聞いた。

「それで？作曲はしてくれるにしても、作詞をどうするのか気になるけど……実際どうするんだ？」

『うん！それはね、今日の放課後に千歌ちゃんの家で作詞をやることになった！』

どうやら放課後に作詞はやるみたいだ。

それならそれでもいいんだが、作詞もどうも上手くいくのかも分からない。

やけに心配ばかりする俺もあれだけどき……。

「そっか。じゃあ作詞作るの頑張っつてね」

『うん！3人で一緒に頑張るね！』

曜はやる気満々の元気ハツラツな声でそう答え、今にも電話を切ろうとしていると

き、俺は言う。

「あのさ……曲が出来たら、その曲は最初に俺に聞かせてくれ。千歌と曜の2人が歌う初めての曲だから楽しみにしているよ」

『うんっ！曲が出来たら真っ先に遼くんに聞かせにいくから、楽しみにしててね！』

もし曲が出来たら最初に俺に聞かせてくれという、一丁前な言葉をかけてしまったけれど、曜はそれに嬉しく思ったのか、そう言っただけで大きく頷いた。

それから曜は電話を切り、通話は終わる。

梨子が作曲をしてくれるとなると、曲ができるのも時間の問題かな。さて……どんな曲に仕上がるのか、今から完成が待ち遠しい。

梨子に作曲をしてくれることに感謝しつつ、頭の中でどんな曲になるのか楽しみに待つことにした。

2人が歌う初めての曲、楽しみだなあ〜！

胸の内で心を躍らせながら思う、俺であった。

旅館だというのを知って、目を丸くしたまま驚いていた。

「ここなら時間も気にしないで出来るし、バス停も近いから帰りも楽だしね！」
「そうね…。バス停も近くにあるし、ここだったら作詞とかは出来そうね」

それから私が桜内さんに時間とか帰りとか話をしているとき、旅館の中から一人の女性が出てくる。

真つ黒で艶やかなロングヘアで、その人は千歌ちゃんの姉で、私も知っている人物だった。

「おかえり！そしていらっしやい！あら曜ちゃん、相変わらず可愛いわね〜！」
「えへへっ…♪」

この私の頭を撫でて優しく接してくれる人は、千歌ちゃんの三姉妹の一番上のお姉さんの志満さん。

おっとりしてて、とても優しいお姉さんなんだ。

いつも千歌ちゃんと一緒にお世話になっているから、この人は私にとってお姉さんの

存在なの。

「そちらは千歌ちゃんが言ってた子？」

「そうだよ！桜内さん、志満姉ちゃんだよ！」

「あ……えつと……桜内梨子です……！」

「よろしくね〜！」

桜内さんが志満姉さんと挨拶を交わし、そのあとで志満姉さんが私たちを招き入れる。

だけど桜内さんは旅館に入らず、何故か目を細めて険しい表情をしていた。理由としては、桜内さんが見ている方向に、ある動物がいるからだった。

「ハッハッハッハッ……」

「……………つ！」

桜内さんがじゅつと見つめていたのは、千歌ちゃんが飼っている、ペットのしいたけだった。

桜内さんとしたけはじつと見つめ合い、数秒後、しいたけが吠えたところで彼女は怯え、私と千歌ちゃんのあとを追うように旅館に入ってきた。

もしかしたら桜内さんって、犬嫌い？

「私の部屋はここだよ！」

「ゆっくり寛いでつてね〜！」

「は…はい。ありがとうございます…」

それから私たち3人は千歌ちゃんの部屋に辿り着き、荷物をまとめて部屋の片隅に置いたところで、話は作詞の話へと移る。

「それじゃあ作詞を始めましょう」

「うん！よろし！いい歌詞を作るぞっ！」

「あはは…出来るのかな…？」

ノートを広げ、ペンを持ち、今から作詞をすることにやる気満々の千歌ちゃん。

でも私は思う。この作詞をする作業は、千歌ちゃんが思っている以上に難しいんじゃない

ないかって…。

10分後

「う〜ん…はあ…何も思い浮かばないよ〜！」

「あはは…やつぱり…。」

「はあ…。」

私の思っていた通りの展開になった。

作詞を始めてから10分が経過したけど、千歌ちゃんは頭を抱え、歌詞にする言葉も思いつくことも何も出来ず、千歌ちゃんの前に広げられたノートは真っ白で何も書かれていない。

それを見ていた桜内さんも、千歌ちゃんを見て呆れてものも言えない表情をしていた。

「やつぱり…恋の歌は無理なんじゃないの？」

「いやだ！μsのスノハレみたいな曲がいいの！」

「とはいっても…思いつかないんでしょ？」

「うっ…それは…そうだけど…」

千歌ちゃんが作ろうとしている曲は、今千歌ちゃんが言った『スノハレ』っていう曲みたいな恋の歌を作りたいみたい。

でもその恋の歌にちなんだ言葉がなかなか出てこないから、千歌ちゃんはこうして悩んでいる。

私も恋の歌って言われても、どんな言葉がいいんだろうって考えちゃうし、何より…恋愛経験もない。

「それに…恋愛経験もないんでしょ？」

「うっ…それは…ないけど…？」

「じゃあやつぱり…恋の歌は無理よ…」

恋の歌を諦めさせようと、桜内さんは現実をつけつけるように千歌ちゃんに言い放つ。

私もこの有様を目の当たりにしてしまうと、私にもどうすることも出来ないし、千歌

ちゃんよりも作詞が出来るわけもない。

だから、恋の歌は諦めるしかなかった。

でも千歌ちゃんは、その『スノハレ』についてとある事柄を思いついて話し出す。

「でも、μ sがこの曲を作れたってことは、この曲を作っていた時に恋愛してたってことだよな？」

「なんでそんな話になるのよ？作詞でしょ？」

「気になる…。ちよつと調べてみる！」

そう言って千歌ちゃんは自分の目の前にパソコンを持ってきて、μ sで誰が恋愛をしていたのかを、慣れた手つきで検索を始めた。

「本当に恋愛してたわけじゃないと思うけど…」

「でも気になるし！」

「はあ…何でこうなるの……」

千歌ちゃんの行動に呆れも呆れまくる桜内さん。

私は桜内さんの表情を見て、彼女に対して弁解するように、ある一言を桜内さんに告げる。

「千歌ちゃんは今、スクールアイドルが大好きっていうか、*恋*してるからね…」
「……………えっ？今…なんて…？」

だけど私が今言い放った言葉に、作詞をする上でのヒントが含まれていた。

桜内さんはそれに気づき、私の方を見る。

それから桜内さんの話を頼りに、私は今言った言葉をもう一度振り返ってみると、確かにヒントがあることが分かった。

私もついびつくりで、ふいに声を上げる。

「んっ？…あつ！」

「何？どうしたの？」

私が声を上げた時、千歌ちゃんは手を止めてこちらの様子を伺ってきたから、私は言った。作詞をする上での大ヒントを、千歌ちゃんに与えた。

「千歌ちゃん！こう考えたらいんじゃないかな？スクールアイドルに対して、ドキドキする気持ちとか、大好きっていう感覚とか、そういうのなら書ける気しない？」
「…っ！うんっ！書ける！それなら…私ならいくらでも書けるよっ！」

千歌ちゃんはそう言って喜びの笑顔を見せると、置いていたパソコンを横に置き、真つ白だったノートにペンで歌詞を書き始める。

「えっと、まず輝いているところでしょう？それから…えへっ…あとね…えへっ…えへへっ♪」

笑顔は絶えず、ペンをひたすら動かす。

さつきまで悩んでいたことが嘘のように、千歌ちゃんはペンを走らせ、歌詞を書いていく。

千歌ちゃんが歌詞を書いている間、私も桜内さんも、千歌ちゃんが頑張って歌詞を書いている様子を微笑ましく見守った。

そして作詞を始めてから5分もしないうちに、千歌ちゃんは歌詞を完成させたよう

だった。

「はい！出来たよ！」

「えっ…？もう出来たの!?!」

「ううん、これは参考だよ。私ね…こんな曲が作りたくなって思ってるの！」

千歌ちゃんが書いたのは歌詞だけど、どうやら参考としてこの曲を作りたいと望んでいる歌詞らしい。

千歌ちゃんが桜内さん手渡したノートを、私も桜内さんの横から覗き込むようにしてみると、書かれていたのは『ユメノトビラ』という文字で、下にはその曲の歌詞のような言葉が並べられていた。

「ユメノ…トビラ…?」

「そう！『ユメノトビラ』！」

「私も聞いたことない曲だよ」

私も知らない曲だった。

千歌ちゃんが言うには、この曲も千歌ちゃんが大好きなμ sが作った曲なんだって。

「私ね、その曲を聞いて…スクールアイドルをやりたいつて思った。μ sみたいにキラキラしたいつて本気で思ったの！」

「μ sみたいに…？」

「うんっ！頑張つて努力して、みんなと力を合わせて、奇跡を起こしていく。私でも出来るんじゃないかって…今の私から、変わるんじゃないかって…そう思ったの！」

「………そうなんだ」

千歌ちゃんの思いを聞いた桜内さんは、納得気味の表情で笑っていた。でもどこか、少し寂しげな表情としても見て取れた。

本当…千歌ちゃんはμ sが好きなんだなあ…つて、私もそんなことを考えていた。

「大好きなのね…μ s」

「うんっ！大好きだよ！」

それから私たちは3人で、そこから1時間くらい作詞を考えた。『大好き』っていう言葉にちなむ言葉を、3人でたくさん出した。

特に千歌ちゃんなんかが一番出てたと思う。

『キラキラ』とか『キラリ』とか。

“スクールアイドル”というものを初めて見たときに思ったことを、千歌ちゃんはたくさん言葉をノートに書き込んでいった。

そうやって歌詞を考えているうちに、時間も夕方の6時を回ろうとしていた頃だった。

「うわっ、もうこんな時間!?! 終バス来ちゃう!」

「えっ? もう帰るの?」

「うん。曜ちゃんはバスがないと帰れなくなっちゃうんだ。それにこっちは都会と違って、バスの本数もとても少ないんだ」

千歌ちゃんが桜内さんにバスのことを説明している間に、私は急いで身支度を整え

る。この時間だと、もうバスは一本しかなくて、これを逃すと家に帰れなくなるという事態になってしまふのだ。

私が帰る準備をしているところを見ていた桜内さんも、自分も帰ろうとテーブルから立ち上がる。

「じゃあ…私も帰るわ。明日もまた学校だし」

「ええ!? 帰っちゃうの?」

「また明日考えればいだけよ。大丈夫、まだ時間はあるんだから…」

「…うん。分かったよ…」

千歌ちゃんの寂しいなっという表情を見てしまうと、少し帰るのが辛くなってしまうそうになる。

でも桜内さんが千歌ちゃんに優しく声をかけてくれたことで、千歌ちゃんの表情も和らいだ。

「じゃあ、また明日ね?」

「千歌ちゃん! じゃあまた明日!」

「うんっ！2人ともまた明日！」

そして私たちは『またね』と挨拶を交わして、私と桜内さんは千歌ちゃんの部屋を出る。それから家を出る時にも、千歌ちゃんのお姉さんの志満姉さんに軽く会釈して、私と桜内さんは家を出た。

「じゃあ桜内さんもまた明日！」

「ええ！また明日！あつ…ちよつと待って！」

「んっ？…どうしたの？」

桜内さんにも挨拶を交わし、バスに乗り遅れちゃうと思っていたところを、私は桜内さんに止められる。

どうしたんだろうと思って彼女に振り向くと、彼女は少しだけ恥ずかしそうな表情をしていた。なんというか…顔をほんのり赤くしていた。

すると彼女の口からある問いかけが飛んでくる。

「あのね、私と渡辺さんが出会って…まだ数日しか経ってないけど、もし私を友達として

見てくれてるなら、お互いに名前呼び合わない？ずっとさん付けして呼んでるとあれだから…ね？」

思いもよらない言葉だった。

だって、桜内さんが自分から名前呼び合おうって言うって言うとは思わなかったから…。

でも…なんだか嬉しい。

また新しい友達が出来ることに、自分の心はとても晴れ晴れとしていた。

「いいよ！じゃあ…梨子ちゃん！」

「うんっ！私は…曜ちゃんって呼ぶね！」

「うん！これからもよろしくね！」

「ええ！よろしくね！」

桜内さんを「梨子ちゃん」と、お互いに名前呼び合い、こうして梨子ちゃんとも友

『梨子ちゃん、とても上手ね!』

『だって、ピアノを弾いてると空飛んでるみたいなの!自分がキラキラになるの!お星様みたいに!』

ふと…昔の小さい頃の私を思い出す。

『みんな…私と同じような、どこにでもいる普通の高校生なのに、キラキラしてた…』
『スクールアイドルって…、こんなにも、キラキラ輝けるんだって!』

今思うと、昔の私と高海さんは似ていた。

楽しそうにピアノを弾いている昔の私と、スクールアイドルに夢中で、*μ's* みたいにキラキラ輝きたいって思っている高海さんが、すごく似ていた。

なのに“今”の私は、何をやっても…きっかけや環境を変えても、全然何も得ることは出来ていない。

私は部屋の明かりも付けず、学校の制服から着替えようともせず、ベッドの上で自分のクッションを抱いたまま、ずっととうづくまっていた。

「……………どうすれば、いいんだろう……………」

自分のスマホからは、高海さんが話していたμsの『ユメノトビラ』という曲が流れていた。

高海さんがスクールアイドルを始めるきっかけにもなった曲。彼女がμsみたいになりたいと思いはじめたきっかけにもなった曲。

私は正直、彼女が羨ましかった。

すごく笑顔の絶えない人で、今思えばすごく優しい人だった。

なのに…：せっかくなの海の音を聞くことも出来たのに、私は未だに一步を踏み出せずにいた。

それから私は部屋に置かれたピアノの方へと足を運ぶ。ベットから立ち上がり、ピアノが置かれた方向に歩き、ピアノの椅子に腰掛ける。

そしてそと…：ピアノの扉を開いた時だった。

「……………」

私は、あの時のトラウマを思い出してしまふ。

高校1年の時の、とあるピアノの発表会。

私の番が来て、ステージに自分だけがピアノの前にいた。そしてピアノを弾こうとすると、観客の視線が私だけに向けられて、その視線が私には怖くってプレッシャーを感じてしまい、私はピアノを引く事ができなかつた。

それからだ。自分がピアノを弾くことすら…楽しくなくなつてしまつたのは…。

でも、今はそんなプレッシャーも感じない。私の部屋には誰もいないし、私ただ一人だけだから。

♪

一度だけピアノの音を出したあと、少しだけ…私は勇気を出し、ピアノの鍵盤を弾いた。

「夢のとくびくらく　　ずつとさくがし続けた♪」

「君とく僕とくのく　　繋がりを探しくてくた♪」

高海さんが大好きと話していた、彼女のお気に入りの『ユメノトビラ』を、私は口ずさんだ。

すると……

「……あれ？ 梨子ちゃん？」

窓の外から私の名前を呼ぶ声が聞こえ、私は視線を窓へと向けると、そこには高海さんの姿があった。

高海さんは風呂上がりなのだろうか？ 頭にタオルを巻いていて、寝間着の姿で私に手を振っていた。

「た…高海さん!？」

「そこって梨子ちゃんの部屋だったんだ！」

「そっか。私ここに引越してきたばかりで、全然気が付かなかった…」

歌っていたのを聞かれていたのはまだしも、まさか自分の部屋の隣が、同級生の高海さんの家だった事に私は驚きを隠せなかった。

そしたら高海さんは、私に尋ねてきた。

「今の…『ユメノトビラ』だよね？」

「えっ…？」

「梨子ちゃん歌ってたよね!？」

「あ…その…それは…」

自分が大好きな歌を、私が歌っていたことに興奮している高海さん。そこから高海さんは、自分の好きな曲sのことを語り始める。

「私、その曲が大好きなんだ!あれは、第2回ラブライブの予選で…!」

「高海さんっ!」

「えっ…？」

でも私はその話を止めるように、つい大きな声彼女の名前を叫び、彼女も黙ってしま
う。

「私……どうしたらいいんだろう。何をやっても楽しくなくて、変わらなくて……」
「梨子ちゃん……」

私は、自分の心に思っていたことを打ち明ける。

ベランダの手摺を掴みながら、ベランダの壁にもたれてしゃがみ込んで、項垂れてい
た。

何をしてもし上手くいかなくって、せっかく高海さんや遼くんの助けを借りて、海の音
を聞けてきつかけを作ってくれたのに……変われなくって……。

惨めな私に……嫌気がさしていた。

そんな時に高海さんは、私に手を差し伸べて言う。

「やってみない？ スクールアイドル……」

「……ダメ……このままピアノを諦めるわけには……」

高海さんはまた、スクールアイドルに誘ってきた。

でも私にはピアノがあると行って、高海さんの言葉に、私は断るように話をする。だけど、また彼女は優しく私に話してくる。

「やってみて、笑顔になれたら…変われたら、また弾けばいい。諦めることないよ！」
「失礼だよ…。本気でやろうとしている高海さんにそんな気持ちで…。そんなの失礼だよ…」

私はそう言ってベランダの影に隠れ、うずくまる。

本気でスクールアイドルとして活動しようとしている高海さんに、悪い思いはさせたくない。彼女に迷惑や、足手まといになりたくないから…。

でもそれでも、高海さんは話してくる。

でも何故か…：なんでか苦しそうな声だった。

「梨子ちゃんの力になれるなら…：私は嬉しい。みんなを笑顔にするのが、スクールアイドルだもん」

私はベランダの影からそつと見ると、高海さんは自分の部屋の窓枠から身を乗り出して、私に向かって手を伸ばしていた。

でもその行動はとても危険だった。ここは2階だから、一步踏み外してしまえば、地面に真つ逆さまに落ちしまいそうな行動だったから。

「……っ！千歌ちゃん!!」

私はその行動に驚きのあまりベランダから身を乗り出し、自然と彼女の名前を呼んでいた。

外は風が吹き始め、頭に巻いていた高海さんのタオルが外れ、下に落ちていく。

「それって……とても素敵なことだよ！」

「……っ！」

何故……そこまで私に優しくしてくれるのだろう。

知り合って間もないのに、どうして彼女は……千歌ちゃんは私にここまでしてくれるん

だろう。

私には、よく分からなかった。

だけど…嫌じゃない。むしろ…嬉しかった。

私は差し出された千歌ちゃんの右手に、自分の右手を千歌ちゃんに向かって手を伸ばした。

「んっ……くっ……！」

「うっ……くっ……！」

でも、どんなに手を伸ばしても届かない。

その距離は、届きそうで届かない距離だった。

私は一度手を引っ込めて、諦めかけた。

「…流石に、届かないね…」

「待って！だめっ！」

「……っ！」

でも彼女は私に『諦めないでっ！』って言い聞かせているようで、私の心に重く響いた。

さらに千歌ちゃんは身を乗り出し、手を伸ばす。

必死に伸ばされた千歌ちゃんの手を、私も掴もうと必死に手を伸ばした。

「んんっ……くっ……！」

「んっ……あっ……あぁっ…………！」

私と彼女の声が漏れるくらい、必死に私と千歌ちゃんは、手を掴もうと手を伸ばした。そして、その思いは報われた。

「……っ！届いた〜！」

「……っ！うんっ！」

手を掴むことは出来なかったけれど、指の先には、確かに千歌ちゃんの指の感触があった。

届いたのだ。届かないと思っていたのに……。

「やったね！梨子ちゃん！」

「ええ！私も嬉しい！」

私は千歌ちゃんと喜びを分かち合った。届かない距離だと思っていたのに、手を一生懸命伸ばしたことで、指先が届いた。

小さなことかもしれない…。

だけど、大きな成功にも思えた。

「梨子ちゃん！やる？スクールアイドル…？」

そして聞いてくる、高海さんの声。

その彼女の問いかけに、私ははつきり答えた。

「ええ！これからよろしくね、千歌ちゃん！」

「…っ！うん！よろしくね、梨子ちゃん!!」

これが私の輝きになる…夢の第一歩だった。

9 初めての曲とお願いと

とある日の朝

「遼くん！おはヨーソロー！」

快晴の空の下、俺は相変わらず休日はず家で過ごすことが多いのだが、今日も今日とて、曜のやつは元気に意気揚々と俺の家にやって来た。

しかも…俺が起きてから10分も経たずにだ。

「おはよう。相変わらず元気だな。お前は…」

「えへへっ♪」

曜は照れて頬を掻く。

今日の曜は打って変わり、曜は眼鏡をかけていた。黒い縁で覆われた、真つ黒の眼鏡をかけていた。

そして俺は、曜が何故か大きな紙袋を持っていたので、俺は彼女に尋ねた。
俺の考えが当たっているかそれだけのことだ。

「なあ曜、その紙袋の中身は？」

「これ？実は…千歌ちゃんに頼まれた衣装なんだ！一応布はあるし、少し作ろうかなって！」

やっぱり…どうやら大きな紙袋の中身には、千歌にずっと頼まれていたスクールアイドルの衣装が入っているようだ。

一体どんな衣装なんだろう？気になる…。

「へえ〜！見てもいい？」

「うん！見てもいいよ！」

「サンキュー！」

曜から見てもいいよと許可が無事に下りたので、俺は大きな紙袋の中身を拝見すると、中にはたくさん布が入っていた。

千歌の分かもしれないオレンジの布と、曜の分かもしれない水色の布があった。

千歌と曜の2人分の布があるのを俺は見ても理解することが出来たが、オレンジと水色の布の間からは、何故かピンク色をした布が紙袋に入っていた。

俺はそれを見て、もうすでにテーブルに裁縫の準備をしていた曜に尋ねた。

「なあ曜、このピンクの布って誰の分だ？」

「それ？それは梨子ちゃんのだよー！」

「えっ？ええ!？」

曜の発言に、俺は開いた口が塞がらなかつた。

あの梨子がスクールアイドルを始めるだつて!?! な…何かの間違いではないのか？

「ちよつと待て！梨子もスクールアイドル始めるのか？だつてあいつ…やらないつて

…」

「なんか梨子ちゃん、千歌ちゃんに説得されちゃったみたいで、梨子ちゃんもスクールアイドルを始めるって千歌ちゃんが言ってた」

よりにもよって千歌に説得されたのか。

それにしても、梨子があんなにスクールアイドルをやるのを嫌がっていたのに、どんな風の吹き回しなんだろうか？

「ということは、梨子が俺の家に来て来る意味も、なんとなく理解出来た気がするよ」
「うん！だから今日はよろしく！」

それに伴って俺は、自分の家に梨子が出て来る意味をやつと理解できた。

千歌から連絡は来ていたものの、なんで梨子もなんだろうと思つたらそういうことなんだなくと、俺は理解することが出来た。

「それじゃあ千歌と梨子の2人がやって来る前に、俺は顔でも洗って来るかな。曜、お菓子いる？」

「うん！欲しい欲しい！」

「りよーかい」

それから俺は曜の要望を聞き入れ、曜を部屋に残し1階の洗面所に向かう。歯を磨き、顔を洗った後で俺は台所にあるお菓子を頂戴し、部屋に戻る。

するとドアを開けた時、シーンとした部屋の中で、曜のやつは俺のベットに寝転がっていた。

「すう……むにや……すう……」

「……おいおい」

しかも……勝手に寝ていた。

「曜、曜さくん……」

「すう……すう……すう……」

体を揺すつてもピクリともしない。曜のやつ……完全に寝てしまっている。

と、お思いのあなた。実は違うんだよね。

こいつは目をつぶって寝息を立てているけど、実際は寝ていない。寝たふりをしてい

る。
そう分かったのは、曜の体を揺すったときだ。曜の体を揺すった時、こいつの心臓の音はドクンドクンって物凄い速さで鳴っていた。

だから分かる。こいつは寝ていないって…。

「お前……起きてる?」

「……………」

「そのわざとらしい寝息。バレバレだぞ?」

「……………すう……………すう……………」

俺の言葉に反応して、曜が頬を少しずつ赤く染めていくのが分かる。しつかり俺の声が、曜に聞こえているという証拠である。

どうみても曜はいつまでも俺に対してシラを切っているので、俺は彼女に言う。

「どうしても曜が起きないっていうなら、俺もそれ相応のことをしないとイケないな」

「……………／／／」

ほれ見なさい。曜は俺の言葉で顔を真っ赤にする。

もうこの状況からして、曜は寝ているという前提で話をしているから、曜にとつては何をされても文句は言えないというわけだ。

だから俺は、曜にこうするのだ。

「さて、曜がこの前持ってきた手錠を、こうして。その手錠の鎖の部分、俺のベットにつけて…」

わざと声に出し、俺は曜の両手にまた手錠をかける。あの時と同様だが、それに+αとして、ベットにある木製の格子状のところに手錠をくくりつけ、曜の両手を拘束した。曜の今の状態を説明するなら、今さっき鎖を木製の格子にくくり付けたから、曜の両手は頭の上で拘束されているような感じだ。

さて、これでどうするかな？

「曜、いい加減白状したらどうだ？」

「……やっぱり、遼くんには敵わないなあ…」

曜は観念し、目を開けてこちらを見てくる。

バレてしまったことの悔しさが顔に滲み出ていた。バレていないと思っただろうが、浅はかだったな。

「バレてないと思ってた？」

「うん。バレないと思ってた」

曜はバレてしまったことに、苦笑いを浮かべる。

「あんな短時間で寝れる曜でもないしな。どうせ俺が曜をそのまま放っておいたら、曜は俺を襲うつもりだったんだだろうけど……」

「うつ……そこもバレてたのかあ……」

幼馴染みだもの。曜が考えてそうなのは、俺もよく理解している。

それから曜は参ったと降参し、俺はそれを見て心の中でニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

もちろん、曜をやるためだ。

「じゃあこの手錠外してよ。また衣装の続きでもう少しで出来上がるところがあるから
や」

そう言つて彼女は手錠を解いてとお願いしてくる。

でも俺は、その彼女のお願いを聞き入れなかった。あの時と同じようにね…。

「……………やだ♪」

「えっ!?!いや…お願い!取つてよ〜!」

「あの時と同じさ。今度は俺のベットで勝手に寝ていたことへの罰ゲームみたいなもんだけどさ…」

「ちよ…そんなの理不尽!取つて〜!」

ガチャンガチャンと、曜は手錠に繋がれた手をもがくように動かす。でもその両手は俺のベットと繋がれていて、頭から下へ動かすことは出来ない。

俺は曜の体に跨り、彼女のTシャツに手をかける。

「問答無用！そりゃ〜！」

「きゃっ！いや…見ないで〜！／＼／＼」

恥ずかしがっている曜にも目もくれず、俺は曜のTシャツを彼女の首までたくし上げる。

すると、俺の目には曜の膨やかな胸が現れる。

今日は水色に白の横縞が入った下着に胸は包まれているが、その下着の横から胸がはみ出ている。曜が身につけている下着が少し小さく俺は見えた。

「相変わらずおつきいな…」

「いや…そんな…ジロジロ見ないでよ…／＼／＼」

男を落とすにはちようどいい大きさと褒めたんだが、彼女からしてみればお世辞でもなんでもない。

この状況に陥っている今、彼女は幼馴染みに大きな胸を見られ、それを弄ばれることに、彼女は恥ずかしさの頂点に達していた。

そして俺は彼女の胸に手をかけた。

「さて、感触はどうかな…？」

「んっ…やめ…やあ…／／／」

ムニユ♪ ムニツムニツ♪

お…おお…曜の胸は、もの凄い感触である。

お菓子でいうマシユマロって感じのような、柔らかくてとても弾力のある胸だった。

高校2年のこいつが、ここまで大きいとは思わなかった。

あっ…ちなみに胸は直で触れます。

曜の下着は取っ払いました。

「んっ…あっ…ふあ…／／／」

「どうだ曜。まさか…興奮してる？」

「ま…さか、そんなわけ…んっ／／／」

強がる曜は声を抑えようとするけど、彼女の口からは淫らな嬌声が出てくる。顔を真つ赤にしているあたり、明らかに興奮しているようだった。

「やつ…あつ…んっ…／＼／＼」

曜の体は、だんだん熱く火照ってきている。

曜の胸の頂点も、綺麗な薄いピンク色になっていて、ぷつくりと大きく膨らんできていた。

「はあっ…あつ…あんっ！／＼／＼」

なんか…だんだんと罰ゲームどころじゃなくなっているかと思っているのは、俺だけではないと思う。

まるで、1人の男と1人の女がベットの上で…って、なんか俺も淫らで興奮している曜の表情を見ていると、ちよつと興奮してきた…。

「り…遼…くんっ…！あつ…／＼／＼」

「……………」

幼い子供のように曜は俺の名前を発する。

俺の脳がドロドロに溶けてしまいそうなくらい彼女は甘い声を発し、その彼女の声は俺の性欲そのものを駆り立てられる。

ふと考えた時、あることが頭をよぎる。

俺が曜をやっている間に、千歌と梨子の2人が部屋にやって来てしまわないかということ。

でもその頭をよぎった事は、性欲に駆り立てられた俺にとつてもうどうでもよくなつて、その考えは頭から綺麗さっぱり消去されてしまった。

「さて、覚悟はいいな？」

俺は一旦手を曜の胸から離し、両手をポキポキと音を鳴らして曜に声をかける。手を音を鳴らしたのは別に意味はない。ただの見せしめだ。

「やつ…やだあ…誰か…誰か助けて〜！／／／」

顔を真っ赤にしながら、誰もいない誰かに向かって助けを求める声を上げる。でも誰も助けに来る様子もなく、俺は助けを求めている曜の膨よかで柔らかい胸へと、ジワリジワリと手を伸ばしていく。

あと5cm、あと2cm

そうやって心の中でしめしめと思い、曜は覚悟を決めたのか、赤面しつつ、目をギュツと瞑っていた。

そして俺は、ようやく曜のおっきな胸を、また弄ぶことが出来ると… そう思っていた時でした。

「曜ちゃん!?!どうしたの!?!」

「今…曜ちゃんの声が聞こえ…た…?」

「……………あら、あらから……………」

やって来てしまいました。あの2人が…。

「…っ！千歌ちゃん、梨子ちゃん！助けてっ！」

「えっ!? な…なに!? 何が起きてるの!? / / /」

梨子は俺と曜のこの状況を見ては戸惑いを隠せずにいる。初めて見る光景だから、若干ながら顔を赤くしていた彼女である。

そして、もう一人の彼女はというと…。

「曜ちゃん！待ってて！今助けるから！」

千歌は自分が持っていたカバンを、俺の部屋の隅に置いたと思ったら、突然変なポーズを取ってくる。それにそのポーズは、格闘ゲームによく出て来そうなキャラクターのポーズだった。

つまり状況を簡単にまとめるなら、千歌が曜を助けにやってきたヒーロー。俺は悪役というわけだ。

さつきまで『エッチ』みたいな雰囲気だったのが、千歌たちが来たことで一気に様変わってしまった。まあ…俺からしてみればいいかなと思ってる。

「ハツハツヘ〜！彼女を助けたければ、まずこの俺を倒してからにしろ〜！」

「千歌ちゃん！私を助けて！」

「うん！絶対に曜ちゃんを助けてあげるから！」

俺は悪役になりきり、それから今からやられますよフラグ丸出しの捨て台詞を吐き飛ばす。

まるで子供がやるごっこ遊び。

普通はやること自体おかしいけれど、それでも俺は最後まで千歌の真似事に付き合っ
た。

もちろん、やられる前提でね。

~~~~~※※※~~~~~

俺の家に3人がやって来たのは、彼女たちが俺を目当てにあることをお願いして来たからだった。

「朝練に付き合え!？」

「うんっ! 毎朝、私たちのダンスの練習に、遼くんも付き合って欲しいの!」

正直、千歌から出た言葉に驚きしかなかった。

いきなり朝練に付き合えと千歌に言われても、場所だったり、何よりもお前が起きれるのかと、色々と心配で仕方ない。

「私は迷惑だつて止めたんだけど…あはは…」

梨子は俺に気を遣って、千歌に付き合わさない方がいいと意見を提示したらしいが、千歌はその意見を無視したみたい。なんてやつだ…。

「ねえ遼くんお願い！付き合ってください！」

「そう言われてもなあ…」

朝練といえど、こっちはこっちで毎朝ランニングをやってる身だし、千歌たちの朝練に付き合って欲しいとお願いされても、すぐに答えを決断できるはずもなく、答えるのに迷ってしまった。

すると千歌は最後の手段として、隣で衣装を作っていた曜に頼み込んでいた。

「曜ちゃん！曜ちゃんからもお願いしてよ！」

「えっ？あつ……うん……」

だけど曜は衣装の作業に集中していたせいで、全然千歌の声に気づいていなかった。ふと、曜は俺に視線を向け、俺に言ってくる。

「遼くん。遼くんは…サッカーと…私たち3人、今…どっちが大事だと思ってるの？」

「えっ…ええ!？」

「それを…聞かせて…?」

曜の真剣すぎる質問の内容に、俺は耳を疑った。

サッカーと千歌たち3人、今どっちが大事だと!?なんだよそんな究極の選択みたいな話…。

サッカーは俺にとって人生そのもの。だから簡単に自分のかけがえないものを手放したりなんか出来やしない。

「それはもちろん…サッカーだ!サッカーは、俺の人生そのものだ!だから…だから…」

「だから…?」

「だから…その…」

くそっ…なんでお前はそんな目をしてくる?

お前がそんな目をしてくると、余計にサッカーの方が大事だつてことを…千歌たちに

ちやんと言えなくなっちまうだろうが！

はっ…もしやまさか、さっきの仕返し!?

わざとそんな顔をして、俺を朝練に付き合わせようと企んでいるんだな？

はあ…しやないなあ…。

「ああ〜もうっ！分かったよ！」

「ええ!?!それってもしかして…!」

「曜の件もあるし、仕方ない！俺は千歌たちの朝練に付き合うことに決めた！」

「本当!?!やった〜!」

曜があんな上目遣いできるとは思わなかった。

あんな上目遣いをされてしまったら、流石に俺でもそれを断ることは出来ない。

千歌は俺の話を聞いて、彼女は大喜び。

俺の話を聞いた曜は、仕返しとして俺を嵌められたことにしめしめと表情に出ている。曜のいいように流されてしまったのは、正直否めなかった。

「ありがとう遼くん！」

「ていうか、俺は何をすりゃいいんだ？」

俺はそういえばと話を切り替え、千歌に尋ねると、彼女からはこんな意見が飛び出して来た。

「遼くんはね、私たちのダンスを見て、色々アドバイスをして欲しいなってるの」

「アドバイス？どんな風に？」

「例えば梨子ちゃんのリズムが遅いとか、曜ちゃんの動きが、みんなと少しずれてるよとか、そういうところかな？まあ私にも…詳しいところは分かってないんだけどね……」

大体やって欲しいところは理解出来た。

とりあえずは3人の動きを見て、どういうところの動きが悪いのか。そしてどう修正すればいいよとかのアドバイスをすればいいってわけだよな。

うん。俺にして欲しいことは理解出来たよ。

「まあ言いたいことは分かった。それで？練習する場所は決めてあるのか？」

「うん！私の家の前の砂浜！」

「あそこなら、私も遼くんも行けるよね？」

「3人で話し合って決めたの」

練習場所は千歌の家の前にあるあの砂浜か。確かに場所は広いし、朝練にはうつつけどな。

それで、朝練を始める時間がどうなのかだけ……。

「じゃあ始める時間は？」

「始める時間？それは朝の5時！」

「6時にしたら、私も遼くんも、学校の準備とかで時間なくなっちゃうでしょ？」

「そうか、分かった。朝の5時だね？」

どうやら朝5時みたい。家の近くだからと千歌が寝坊しないか心配だけど、3人で話し合った結果なら、それに合わせるしかないよね？

まあ俺は……4時起きだけど……。



「他に聞きたいことはある？」

「ううん。あらかた3人から聞きたいことは聞けたから、もう俺は大丈夫だよ」

「そう。それならよかつ…」

「あゝっ！忘れてた〜！」

梨子がそう言つて話を終わらせようとした時、突然千歌が大声で叫び、この場にいた俺を含めて3人はその声に驚く。

「わあ!?!ど…どうしたの千歌ちゃん!?!」

「ちよつと…大声出さないでよ」

千歌が大声で叫んだことで曜は驚き、梨子は逆に怒りを買ってしまったが、そんなことをお構いなしに千歌は俺に向かって言い放つ。

「遼くん！出来たよ！」

「えっ？な…何が出来たの？」

千歌の言うことの内容にバツサリ主語が抜けているため、俺は千歌に何が出来たのかを尋ねた。

すると千歌は、テーブルに身を乗り出して答えた。

「曲だよ！ 私たちの曲、やっと出来たんだよ！」

「えっ？ 曲が出来たのか？」

千歌が言いたかったのは、千歌たち3人で作った曲が、やっと出来たということだった。

その話を聞いた俺は、やっと千歌たちが歌う初めての曲が出来たことに喜びを感じ、早く聞いてみたいという期待感に溢れていた。

「それで？ どんな曲なんだ？」

「それはもうすつごくて、キラキラしてるんだ！」

「……ごめん。何言ってるか分からないや」

どんな曲なのかを千歌に聞いてみたが、千歌のやつは表現が下手すぎて何を言ってい

るのかさっぱり分からなかった。

なので代わりに、曜に説明してもらった。

「簡単に言うなら、『大好き』っていう気持ちを、そのまま歌にしたって感じかな？」

「『大好き』を…そのまま？」

「ええ。ちやうど歌詞持ってきたから、見て？」

そうやって梨子は俺に一枚の紙を手渡してきた。

それに歌詞が書いてあるのかと思い、それを受け取った俺は折り畳まれた紙を開く。

するとそこには、ずらりと並べられた言葉の数々。

『大好き』という気持ちを違う言葉にして、遠回しに訴えているような、そんな歌詞だった。

『ダイスキだったらダイジヨウブ』

それが、千歌たちが作った曲の名前だった。

「うん……いい曲だと思う！」

「本当!? 嬉しい！」

歌詞を一通り見て、千歌に感想を伝える。

彼女はそれを聞いては、嬉しそうにはしやぐ。

曜も梨子の2人も俺の言葉を聞いたら、彼女たちも嬉しそうに微笑んでいた。それで俺は、もう2つ尋ねる。

「歌詞が出来たっていうことは、作曲は？」

「ええ、順調よ」

「衣装は？」

「全然大丈夫！ 問題ないであります！」

梨子は作曲が進んでいて、曜も今のところ衣装作りは順調。ということとは、あとはダンスの振り付けだけということだった。

「じゃあ後はダンスだけだな。ただ突っ立って歌を歌うわけにもいかないだろう」

「うん！μ s みたいにキラキラしたダンスにした方がいいな〜って、私考えてるんだ！」

“ μ s ” みたいにキラキラ…か。

ダンスのことは今は決めず、またの機会にしよう。

「そうだな。でもダンスはまだ考えなくてもいいだろう。歌詞も出来たんだしね……」  
「うん！はあく早くライブがしたいな〜♪」

今の千歌の言葉には、語尾のあたりに音符が見えたような気がした。

曲を早くみんなの前で披露したいという、期待感と高揚感に胸を膨らませていた千歌だった。

話の全てが終わってしまい何も話すことがなくなってしまった俺たち。それで俺は3人に、とあることをしようと呼びかける。

「じゃあ話も終わったことだし、みんなでゲームやらない？ちようど4人で出来るゲームがあるんだ」

「やる〜！私やりた〜い！」

「はいは〜い！私もやるであります！」

千歌と曜は、即反応。

だが千歌はまだしも、衣装の作業をしていたはずの曜までもが参加しようとしてきた。

驚きのあまり、俺はびっくりしてしまっただが、やりたいならやらせるのが一番いいのだ。曜のしている衣装作りは地道で大変な作業だから、気分転換にもいいだろうと思っただ。

でも、それを止めようとする人がいた。

そう…梨子である。

「ちよつと千歌ちゃん!?!話が終わったなら、すぐ帰る予定じゃなかったの!?!」

梨子は千歌に詰め寄り、話が終わったら帰るんじゃないかと確認を求めようとして尋ねる。

でも千歌はそれを聞いては、俺の誘いを断るわけにはいかないと、彼女はそう答えた。

「そうだけど。せっかく遼くんが誘ってきてくれたなら、それを断るわけにはいかないよー!」

「だから、梨子ちゃんもやろうよ!」

そう言つて曜は梨子の手にゲームコントローラーを持たせ、テレビの画面の前に連れてくる。

『もう…』と言つて少し呆れた表情を見せた梨子だったけれど、すぐに笑みを浮かべて、仕方ないから参加してあげるわといった表情を見せた。

ゲームがすぐ出来る状態にし、テレビを付けて自分のコントローラーを手に取つた俺は、3人が並んでいるところの一番端っこに座つた。隣は曜である。

「じゃあ始めるぞ〜!」

「「おう!」」

3人の掛け声を聞いた俺は、コントローラーのスタートボタンを押して、ゲームをスタートさせた。

ゲームが始まるまでのロードの間、突然不意打ちみたいに曜が耳打ちをしてきた。

「遼くん、あのね……」

「んっ……？どうした曜？」

あまりにも曜は小さい声で話しかけてきたから、俺はよく耳をすませて彼女の声を聞いた。

そしたら曜が発した言葉に、俺は思わず声が出そうになってしまった。

「あのね、千歌ちゃんが来る前にやってあれ……あの続き、あとでまたしない？」

「……………えっ？」

耳を疑った。まさか曜が、あの時の続きをしようと言い出してきたのだから。

「でもお前……あんなに嫌がって……」

「嫌だったけど、あの時は中途半端で終わっちゃったから……これも遼くんのため……／＼」



「曜……」

確かにあの時は、俺が曜にする前に終わってしまったから、俺のためと彼女は言っているけど、実際はどうなんだろう？ 彼女の心情は不明である。

でも、あの時の続きが出来るのか。

今考えると、俄然やる気出るな！

おお……やる気がみなぎってくるぞ！！

「よしっ！ やってやるぞ〜！」

「遼くん、やる気満々だね！ 千歌も負けないよ！」

「悪いな。今日は勝たせてもらおうぜ！」

俺の言葉が千歌に発破をかけたようだけど、俺はそう言っただけで千歌に勝利宣言をしてみた。

そして隣にいる曜は……

「これも全部……遼くんのせいだからね……／／／」

俺の耳に聞こえないくらい小さい声で、何かをつぶやいていたような気がした。

## #10 新しい朝と新理事長

月曜日。いつもの朝がやって来た。

でも、今日からは俺のいつもの朝じゃない。

それはなぜか？なぜなら……

「遼く〜ん！早く来て〜！」

「はいはい、分かりましたよ」

今日から千歌たちのスクールアイドルのお手伝いをする事になったからだ。

基本的には、ダンスの練習を考えること。

それにもう一つは、彼女たちがそのダンスがずっと出来るように、笑顔のままダンスが続けられるように体力作りをすることだ。

「それじゃあ早速始めようか？時間的にも、あまり練習出来ることも少ないだろうから」  
「うん！じゃあ始めよう！」

この5時という、今なら普通まだみんな寝ているだろうって時に、朝つぱらから元気な千歌である。

彼女の服装は、なんかとても変。

千歌のサイズよりちよつぱり大きめの黄色いTシャツに、大きなカタカナで『チ』と書かれていた。

千歌の服のセンスって、なんか皆無だな。

「ふわあ…まだ私…眠いんだけど……」

「梨子…眠そうだね……」

「ええ、こんな朝早くに起きるの初めてだから」

あくびを1つした梨子は、海に向かって大きく背伸びをする。太陽の日の出の光を浴びていた梨子の姿は、とても美しく見えた。

それにしても、初日から3人も寝坊せず、ちゃんと集まれたから良かった。特に千歌とかが寝坊するんじゃないかって思っていたが、寝坊せずに集合したからなんの心配もなさそうだ。

「じゃあ先ずはストレッチから！」

「はーい！」

彼女たち3人は、俺の指示でストレッチを始める。

最初はいつも普段からやっている準備体操から始める。それから砂浜に座って両足を開き、体を左右に倒して体を伸ばして体をほぐしていく。

ただ3人がしているのを見ると、体を伸ばしたときに3人のボディラインが見えたり見えなかったりして、時々エロさを感じる。

おへそがチラツと見えたりして、俺の中にある理性という名のブレーキが、俺の性欲を止めるブレーキをかけていた。

「ストレッチは十分かな？」

「うん！オツケーだよ！」

ストレッチを終えた千歌は、自分の両腕をブンブンと振り回していたから、彼女は相  
当なやる気に満ち溢れているのが伺える。

「でも、ダンスって何から始めるの？」

すると梨子は俺にそう尋ねてくる。

ダンスとか、そういう体を動かすことが苦手そうな感じに見える梨子にとっては、ま  
ず最初に何をするのか分からないでいる。

だからそこでだ。

梨子みたいにダンスとか苦手な人向けに、練習はまず基本のステップをすることにし  
ようと考えた。

「今日は最初だから、最初の練習はダンスの基本的な動き、〃ボックスステップ〃をしよ  
う」

「ボックス…ステップ？何それ？」

千歌は首を傾げ、俺に尋ねてくる。

「『ボックスステップ』というのは、ボックス：箱の形みたいに動く基本的な動きの名前さ」

「あつ！もしかしてこれかな？」

すると曜は、ボックスステップが一体どんな動きをするのか分かったようで、彼女はその場でボックスステップを踏んでみる。

そしたら意外もその動きそのままで、ボックスステップの動きがすっかり出来ていた。

「こんな動きでしょ!？」

「ああ。曜の今の動きが『ボックスステップ』だよ」

「すごい！曜ちゃんすごい！」

千歌は曜を褒め、曜は頭を掻いて照れる。

でも梨子は、その動きを見ても気難しそうな表情になっていた。眉間にシワが寄り、

険しい顔だった。

「まずはこういう基本的な練習に尽きる。今日の練習はこれだけだから、3人はこれが出れば済むように頑張ろう」

「うん！千歌も頑張る！梨子ちゃんも頑張ろう！」

「え……ええ……」

「大丈夫。俺が手取り足取り教えるから」

手取り足取り……決して深い意味はない。

とりあえずは梨子の体に覚えさせるようにする。

それから3人がボックスステップの動きを覚えるまで、みっちり時間を費やすのが今日の練習。

だが……それが意外にも時間がかからなかった。

「えつと、こう……かしら？」

「そうそう。何かと梨子も飲み込みが早いな」

「本当!?良かった〜！」



俺の教えた通りに梨子はボックスステップを踏む事が出来たから、あまりにも上達することに俺は驚きを感じていた。

そして千歌の方は曜に動き方を教えてもらい、千歌の方も上達は早く、すぐに出来るようになった。

それで俺は3人を集め、次の段階に進む。

「じゃあ3人も少しずつ出来るようになっていいるから、今度はリズムをつけて動いてみようか?」

「リズム? どうやってやるの?」

それでまた千歌が首を傾げながら俺にそう尋ねてきたから、俺はまずその問いに答えず、自分の右手を曜に向かって差し出して尋ねる。

「曜、お前のスマホって動画撮れるよな?」

「えっ…うん。動画なら撮れるよ」

「ちよつと貸してくれないか? 良い事をするから」

良い事と言って具体的に何に使うかは言わなかったけど、それでも曜は何も躊躇うこともなく、自分のスマホを貸してくれた。

それから俺は曜のスマホを立ち上げ、カメラを動画に切り替えたあと、今度は俺のスマホを取り出してとあるアプリを立ち上げる。

「よしっ、これでOKー」

そして曜と俺のスマホ2つをちようど立てて置ける大きな石を置き、そこに2人のスマホを置いたところで準備が出来た。

ちようどその時に、千歌がもう一度尋ねてきた。

「遼くん？これはっ？」

千歌が俺のスマホに指を指していたので、多分俺が立ち上げたアプリが知りたいんだろうと思ひ、俺はそれに答える。

「メトロノーム。知ってるだろう？」

「もしかして、これでリズムを？」

「そう。メトロノームのリズムでステップを踏み、曜のスマホで3人の動きを動画で撮る。動画はあとで動きで見直すことも出来るから、俺がいなくてもこうすれば練習は捗るだろう」

梨子は音楽をやっているからメトロノームを知っていて、俺がなぜこんな事をしたのかも、彼女は分かっていたようだった。

「そうだね！そうした方が画期的かも！」

「どうせ俺がいての練習なんてあるわけないから、3人でこうした方が効率的だと思う」

実際こんな事を考えたのは今さっき。

3人がダンスの練習をする上で、動きの確認は自分では分からない。他人に見られることで分かることもあるから、逆にこうして動画にして自分で確認して、どこが悪いか確認が出来るから、ダンスの練習だったらこれがいいかなって思った。

曜もこの俺がした試みには賛成のようだった。

「それじゃあ3人はカメラが映るまで下がって横に並んで？練習は俺の合図で始めるから」

「はい！」

そして今から練習を始めると、俺は3人に声をかける。千歌たちは左から梨子、千歌、曜と横並びに一列で並び、練習出来る位置についた。

それで俺は3人が準備できた事を確認した俺は、3人に一声かけて練習をスタートさせた。

「じゃあ始めるぞ〜！テンポは少し早めにするから、テンポに遅れないようにな！」

「はい！」

まるで、俺が指導者にでもなっているかのようだった。3人は俺に向かって返事をしてくるから、自分が3人にダンスを教える指導者にでもなっているかのようにならされた。

「それじゃあ……スタート！」

「ワン、ツー、ス……」

「わああく!?」

ドテツ!

「ち……千歌ちゃん!?!」

「大丈夫!?!」

「え……えへへっ、ごめんごめん……」

練習を始めだと思ったら初っ端から千歌が倒れる。

いきなり過ぎて曜や梨子はびっくりしていた。

俺はまあまだ最初だし、次第に慣れていくだろうと首を長くして千歌を見つめていた。

「じゃあ気を取り直して……だな」

「うん! ようしっ! 頑張るぞ〜!」

「おお〜！」

それから5分くらいボックスステップをやっていたんだけど、もうなんかいいかなって思った。

理由は簡単、3人とも早く上達したからだ。

まあボックスステップは初心者がする基本的なステップだって調べた時に書いてあったから、それくらい出来て当然かと俺は思った。

だから俺はボックスステップに少し動きを加えて、片方の足を動かしながら、もう片方の足を蹴り上げるような動きにしてみた。

あとは上半身の動きもプラスした。ダンスをする上でも、上半身もしっかり動かせるようにしなきゃならないからね。

「ワン、ツー、スリー、フォー！」

そしたら3人は悪戦苦闘。地味に難しくしたから、千歌だったり梨子がたまに転んだりしていた。

でも、それでも3人は徐々に上達している。

見違えるほどに上達しているわけじゃないけど、3人は地道に上達していた。

「はい、ストップ！」

まあ…それでも問題は少なからずあるけどね。

俺は一旦休憩を挟む形で3人に指示し、動画を撮っていた曜のスマホを持ち上げ、録画していた今のところをもう一度見直す。

後から千歌たち3人が俺の後ろから動画を覗き込むように見ていたので、俺は動画を見せながら、3人に悪いところをアドバイスした。

「見て。3人とも動きはだいぶ良くなってきているけど、ここの足の蹴り上げがみんな弱い」

「あつ…本当だ…」

動画を見て、実際左足の蹴り上げがみんな弱い。

梨子はそれを見て、思わず声を上げる。

すると曜も自分から、ここは悪い動きだと思ったところを2人に指摘した。

「あつ…あとこの動きも弱いね」

「凄い。よく気づくわね」

「高飛び込みやってたから、フォームの確認は結構得意なんだ!」

曜はえっへんと胸を張って答える。

それから千歌に対して、さっきやってたステップのリズムについて俺は伝える。

「それで、リズムなんだけど…千歌」

「んっ?なに?」

「お前だけリズムが2人より少し遅れてる。だからもう少し2人に合わせて取り組んでくれ」

「ええ〜!?!私〜!?!」

千歌は俺に言われて愕然とした表情で驚く。

『嘘だ』と表情に出っていたので、俺は千歌に動画を見せる。すると本当にリズムが曜と梨



子の2人よりも遅れている事実を知った千歌は、頭を抱えて上を見上げて『ああく!』と叫んだ。

「本当だ。私…2人より少し遅れてる」

「まあリズムは少しずつ慣れていけば、次第に2人と合わさって良くなると思うから、あまりしよげなくても大丈夫だろう」

「本当?嘘言つてない?」

「俺はこんなことで嘘つかないよ」

なにげに心配する千歌を、俺は優しく言った。

彼女はそれで笑顔になり、元気も出た。

「よくしつ!また頑張るぞ〜!」

「もう…千歌ちゃんつたら…」

梨子が千歌の言葉を聞いて、苦笑いを浮かべる。

曜も千歌に向かって笑顔を向けていたとき、千歌の口から突然声を上がった。

「あつ……あれつて……」

千歌は上を向いていた。

俺や曜や梨子は、千歌が見ていた先……つまり空を見上げたとき、一機のヘリコプターが俺たちの上空を回るように飛んでいた。

ヘリコプターはピンク色だったから、俺は派手だと思い、じつとヘリコプターを見つめていた。

「あれつて……小原家のヘリだね」

「小原家？」

「うん。淡島にあるホテルを経営してて、学校にくる新しい理事長もその人らしいよ」  
「へえ……そうなんだ……」

曜と梨子の話を隣で聞いていた俺は、理事長なんて言葉を初めて知った。普通の学校なら、だいたい校長先生つて言われていると思っただけだから、尚更、俺はその言葉に内心驚いていた。

そしてヘリコプターは俺たちの上空をうようよしたあとで、淡島のホテルの方へと飛んで行った。

「行っちゃった……」

「理事長……どんな人なんだろう……」

俺の前ですっと佇んでヘリコプターの方を見つめていた千歌は、小さくそう呟いていた。

俺は会えるわけじゃないけど、小原家って聞くと「あいつ」のことをどうしても思い出してしまう。

小原家か……

あいつ……元気にしてっかな？

俺は心の奥底で、2年前に海外に留学していった

「あいつ」のことを、頭の中で思いふけていた。



「イエー・スーでも、理事長だからって気を使わず、私のことを普通に『マリー』って呼んでほしいの！」

とても明るい人だということは、最初の話を聞いて分かった。けどなんというか：年下の人にも気軽にそんな風にな前に名前を呼んでと言える人は、私が会ってきた人たちの中でも今まで見たこともなかった。

髪は金髪。頭の右上には自分のチャームポイントとなのかもしれない輪っかがある。

それに私が驚いたのは、彼女が着ている服装。

理事長だったら普通、スーツみたいな：ピシツとしたもつと大人っぽい服装だと思っていたら、彼女が着ていたのは浦女の制服だった。

しかもリボンの色は緑色だから、この人は、私たちの1つ年上であり、生徒会長のダイヤさんと同級生だということが分かった。

そして同時に、この人がホテルを経営しているあの小原家の人間だということを、私は心の中で改めて思い知らされた。

「あの…：新理事長…：」

「ち・が・う！マリーって呼んで？」

「マ……マリー……」

千歌ちゃんが理事長の名前を呼ぶと、理事長は途端に笑顔になる。とても……陽気な人だ……。

「その制服はどうしたんですか？」

「どこか変……かな？ちゃんと3年生の緑色のリボンを用意したはずんですけど……」

理事長の名前は、小原 鞠莉。

さっき言った通りだけど、淡島のホテルを経営している“小原家”の娘。

彼女は制服で変なところはないかと、胸元にある緑色のリボンを摘んで心配そうにしていた。

そんな理事長に、千歌ちゃんは尋ねる。

「でも……理事長ですよ？」

「ええ！でもしかし、私はこの学校の3年生！生徒兼理事長だから、カレー牛丼みたいなものね！」

理事長はそう言つて例えを話す。

カレーと牛丼を合わせた……みたいなことを話して私たちに理解をさせようとしていたみたいだけど、梨子ちゃんは澄ましたような顔をして、鞠莉さんに対して例えが分からないと答えた。

「例えがよく分かりません……」

「ええ〜!?分からないの!?!」

「そんなの……分からないに決まっていますわ!」

すると突然、理事長の鞠莉さんの後ろから生徒会長のダイヤさんがドンツと飛び出てくる。

鞠莉さんはそれに驚いて尻もちをつくけど、ダイヤさんを見るとすぐさま立ち上がり、思いきりダイヤさんに抱きついた。

「Oh〜!ダイヤ久しぶり!随分大きくなって〜!」

「……触らないでいただけます?」

ダイヤさんは鞠莉さんにそう言うも、当の鞠莉さんはダイヤさんの頭を撫でたりと久しぶりに会ったという嬉しさで一杯なご様子。

「フフツ…でも〜っ♡」

「…っ！あっ…：…／／／」

すると鞠莉さんは両手を頭からだんだん下げていく。そして鞠莉さんはなんとダイヤさんの胸を制服越しから触ったのだ。

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、ダイヤさんの胸をモミモミする鞠莉さん。

ダイヤさんは不意をつかれ、私たちもそれに不意をつかれ、ダイヤさんの聞いたことのない声が私たちの耳に入ってきた。

「胸は相変わらずねえ〜♡」

「や…やかましいですわ！／／／」

「イツツジヨ〜ク☆」



ダイヤさんは顔を真っ赤にしながら、力の限りに大きな声で怒鳴ると、鞠莉さんはさ  
らっとその場を離れる。鞠莉さんは怒られているにも関わらず、余裕そうな表情で言葉  
を発する。

私ながら、この人は自由人だなって思った。

「全く。1年の時にいなくなっただと思っただらこんな時に戻ってくるなんて…。一体どう  
いうつもり…」

「シャイニ〜☆」

うん…とつても自由奔放な人だと思う。

鞠莉さんは窓のカーテンを勢いよく開けて、彼女の口癖なのか、鞠莉さんは『シャイ  
ニー』の叫ぶ。

「人の話を聞かない癖は相変わらずのようね？」

「イツツジヨ〜ク☆」

ダイヤさんは鞠莉さんの性格が分かっているようで、ダイヤさんは鞠莉さんの制服の

胸ぐらを掴み、顔を寄せてそう言い放つ。

けど鞠莉さんは余裕綽々。私たちに向かってピースサインすら出来るくらいに余裕な表情だった。

「とにかくっ！高校3年生が理事長だなんて、冗談にもほどがありますわ！」

そしてダイヤさんは鞠莉さんにそう言い放つ。

それには私も千歌ちゃん、そして梨子ちゃんもそう思っていた。そもそも1つ年上の人が、学校の1番上に立つなんてことがあるのかってくらい。

だけど鞠莉さんは、ダイヤさんのその言葉に対して、突然真剣な表情を見せる。

「でも、そっちはジョークじゃないのよね」

「えっ？」

すると鞠莉さんは自分のポケットから一枚の紙を取り出す。そして折り畳まれていた紙を開き、ダイヤさんの目の前に見せびらかす。

ダイヤさんはそれを見て、鞠莉さんが持っている紙が何なのかを尋ねる。

「これは…なんですか？」

「委任状よ。私のホームである小原家のこの学校への寄付は、相当な額なのよ」

『委任状』、鞠莉さんの口から出た言葉。

それは本来は自分がしなければならぬことを他の人に任せるとき、任せることを証明するものとして持たせる文書のことである。

つまり鞠莉さんが持っている委任状は本物で、この学校は全て鞠莉さんに権限があることになるのだ。

ダイヤさんはその委任状に書かれている文字に目を通すと、信じられないといった表情をして呟く。

「う…嘘っ…」

「な、なんで!？」

千歌ちゃんも鞠莉さんに一言尋ねると、鞠莉さんは私たちを見てニヤリと笑みを浮かべながら話す。

「実は…この浦の星女学院に、スクールアイドルが誕生したつという噂を聞いてね…」  
「まさか…それだけのために？」

「そう！ダイヤに邪魔されてはとっても可哀想なので、私が応援しに来たのです！」

鞠莉さんがこちらを見て笑ったときは、私もそんなことを考えていた。もしかしたら  
と思った。

そしたら案の定、鞠莉さんはそれを話した。

私たち…千歌ちゃんにとつてはとんでもない助っ人といつても過言じゃなかった。

「それ…本当ですか!？」

「イエス！このマリーが来たからには心配ありません！あなたたちのデビューライブは  
アキバドゥームを用意してみたわ！」

すると鞠莉さんは、自分の小さなノートパソコンを取り出すと、それを開いて私たちに  
アキバドームと言われる大きな会場に、大きなステージがある画像を見せてきた。

その画像をじっと見つめていた私たちは、三者三様の驚きを見せた。

「えっ!? そ…そんな!」

「いきなり…そんなところで…」

「き…奇跡だよっ!」

特に千歌ちゃんは一番はしゃいでいた。

画像を見て目をキラキラさせて、とても嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

けど鞠莉さんの一言で、全てが崩れた。

「えへっ♪ イツツジヨクよ☆」

「わざわざ私たちへのジヨクのためになんか用意しないでください…」

「本当…驚きました…」

笑顔で鞠莉さんからそう言われると、千歌ちゃんの笑顔はなくなり、鞠莉さんにジト目で言い放つ。

「梨子ちゃんも鞠莉さんに対してそう言った。そんなものを用意しないでくださいと私もそう思った。」

まだスクールアイドルを始めたばかりなのにそんな大きな会場を用意されても、私たち3人にはとてつもなく大きすぎるから。

「でも実際には…とある場所を用意したの！」

「とある…場所？」

そしたら鞠莉さんは今度は嘘っぽくなく、私たちのためにとある場所を用意してください。たらしい。

「着いてきて！見せてあげる！」

ただ千歌ちゃんの質問には、彼女はそれがどこかは教えず、ただ『着いてきて』と言いつつ、残して理事長室を出て行ってしまった。

顔を見合わせた私たちは、3人で話し合う。

「どうする？着いてっってみる？」

「うんっ！だってライブの会場を用意してくれてるんだよ！着いて行かないわけないよ

！」

率先して千歌ちゃんはそう話し、先頭を切って鞠莉さんの後について理事長室を出て行く。

私や梨子ちゃんは、まだあの理事長に対して不審感みたいなのがあっただけれど、千歌ちゃんがあの人について行ったから私たちもついて行こうと思った。

「じゃあ……行こうか？」

「う……うん……」

それで私たちは理事長室に佇んでいたダイヤさんにお辞儀をし、それから千歌ちゃんを追いかけた。

そんなとき……

「……なんで……戻ってきたんですか……？」

理事長室で、なぜか悲しみにくれていた  
ダイヤさんの声が聞こえた気がした。



## # 1 1 無理難題と再会

私たちは鞠莉さんについて行くと、鞠莉さんが行き着いた場所はなんと学校の体育館だった。

「もしかして…ここですか？」

「イエス！あなた達はライブで、この大きな体育館を“満員”にしてください！」

「「えっ!?!」」

すると鞠莉さんとはんでもないことを言い出す。

この体育館を“満員”にすることだった。

まだ始めたばかりの私たちに、いきなりこの体育館を満員にするなんて無謀過ぎる。

そしたら千歌ちゃんは、もしここを満員出来たららの条件を聞こうと鞠莉さんに尋ね

る。

「も……もし満員に出来たら？」

「ここを満員に出来たら、部員の人数に関わらず、部として承認してあげます！」

「本当!?! やった〜！」

「部費も使えるしねっ！」

鞠莉さんが出した条件は、この体育館を満員に出来たら、部を立ち上げる際に必要な人数に満たなくても、部として認めてくれることだった。

条件を提示するには見合った条件。

だけど梨子ちゃんは、千歌ちゃんがした質問とは逆の質問を鞠莉さんに尋ねた。

「でも……ここを満員に出来なければ？」

「……………」

鞠莉さんは私たちに背を向け、間を置く。

そしてそれから鞠莉さんは言い放った。

それはとてもシンプルで、私たちにとてもシビアな条件だった。

「その時は、〃解散〃してもらうしかありません」

「えっ!? そ…そんなあ……」

「嫌なら別に断つてもいいんですよ?」

悪戯っぽく笑みを浮かべ、冷たく私たちに向かって言い放つ鞠莉さん。

この人は多分、私たちを試している。

私は…そんな気がする。

「どうって……」

「結構広いよねここ。千歌ちゃん、どうする?」

不安な表情を見せる梨子ちゃん。

それを横目に私は千歌ちゃんに尋ねる。この体育館でライブをするのかどうなのか

?

それで千歌ちゃんは言う。

「やるしかないよっ！他にやれそうな場所もないし、他に手があるわけじゃないんだし！」

「うんっ！そうだね!!」

千歌ちゃんはやるとやる気満々。

それを見ていた私も梨子ちゃんも、この体育館でライブをすることを決心した。それを見た鞠莉さんは、私たちに言う。

「OK…ということでもいいのね？」

「はいっ！ここでやらせていただきます！」

「そう。それじゃあ、楽しみにしているね！」

鞠莉さんはそう言い残した後、私たちに背を向け、体育館を後にするように出て行った。

そしたらその直後、梨子ちゃんは何かを思い出したように私に問いかけてきた。

「あっ…待って！」

「うん? どうしたの?」

「この学校の全校生徒、全部で何人?」

「えっ? うん…えつと……」

梨子ちゃんが聞いてきたのは、この学校の全校生徒の数。梨子ちゃんはそのことを尋ねてきたから、私は無意識に指を折って生徒の人数を数えた。

そしたら私は、とあることに気づく。

早くそれが気づいていればと、私は悔やんだ。

「……あっ」

「えっ? なになに?」

「千歌ちゃん分からない? この学校の全校生徒全員来たとしても、ここは満員にならない

い……」

「えっ? 嘘……」

その言葉と共に、千歌ちゃんは膝を落とす。

鞠莉さんに突きつけられたのは、どちらに転んだとしても絶望しか待っていないということだった。

それを知った千歌ちゃんは、呆然だった。

「まさか鞠莉さん…それを分かかってて…」

「うん。きつと分かかってて言ったんだと思う」

鞠莉さんって、あんな性格や雰囲気醸し出しながらも、実は頭が切れるタイプなのかもしれない。

鞠莉さんは、策士なのかもしれないと思った。

「え〜！どうしよう〜！」

頭を抱えて叫ぶ千歌ちゃん。

でも何となく、鞠莉さんが伝えたかったことも分かる。ただ彼女が、遠回しで私たちに伝えただけ。

だから私は鞠莉さんに騙されたと思いつながら、彼女からの確かな1つのメッセージが

込められていた事に気づくことが出来た。

「でも千歌ちゃん、鞠莉さんの言うことは私には分かる。ここでそのくらい出来なきゃ、この先もダメってことでしょ？」

「でも……曲も出来たばかりだし、それに遼くんに教えてもらってるダンスだってまだだし……」

頭を抱えてたまま、そんなことを呟いて思いつめている千歌ちゃん。そんな彼女に私は、アレを言う。

「じゃあ……諦める？」

「ううんっ！諦めない！」

千歌ちゃんのその言葉に、私は笑顔になる。

けども梨子ちゃんは私の尋ね方に不満な表情を見せ、梨子ちゃんは私に問いかけてくる。

「何で：そんな言い方するの？」

「この方が千歌ちゃん、凄く燃えるから」

良くも悪くも単純。小さい頃から私は千歌ちゃんにそう言ってきたこと梨子ちゃんに説明をした。

すぐに梨子ちゃんは納得してくれて、同時に梨子ちゃんへ私は今みたいになつたら試しに言ってみてと、冗談交じりに言つた。

「あつ、良いこと思いついた！」

すると千歌ちゃんはピヨンと立ち上がる。

「どうしたの千歌ちゃん？」

「私ね、良いこと思いついちゃつた！」

千歌ちゃんはどうかやら何かを思いついたらしくて、私と梨子ちゃんに対して目を輝かせていた。



「何よ……良いことつて……?」

「とりあえず早くきてよ! 早く早く!」

一体どんなことを思いついたのかはいざ知らず、千歌ちゃんは私と梨子ちゃんに対してそう言い、先々に体育館から飛び出して行ってしまった。

「あつ! 待つてよ千歌ちゃん!」

「もう〜! 一体なんなのよ〜!」

慌てて私も梨子ちゃんも千歌ちゃんの後を追いかけたけど、千歌ちゃんの家に着くまで私と梨子ちゃんは、千歌ちゃんが一体どんないいことを思いついたのかは、全く分かっていなかった。

~~~~~※※※~~~~~

「おかしい。完璧な作戦のはずだったのに……」

「お姉さんが言うことも、分かるけどね」

千歌ちゃんが思いついたことは、千歌ちゃんのもう1人の姉である美渡さんに対して人を集めて欲しいということだった。

美渡さんは社会人として仕事をしているから、千歌ちゃんはそこに漬け込み、その会社の社員さん達を体育館に連れてきてライブを見てほしいとお願いしたらいいんだけど……。

だけどそのお願いはあえなく撃沈され、千歌ちゃんのおでこに『バカチカ』と書かれていた。

「ええ!? 曜ちゃんお姉ちゃん派!」

「お姉ちゃん派…というよりも、まずは体育館に人を集める方法を考えなきゃね」
「そうだねえ……」

お姉ちゃん派…千歌ちゃんのお姉ちゃん…って、私は一体何を考えてるんだ。集中…集中……。

私はいつもの通り衣装を作る作業をして、糸が通された針で布を合わせるようにチクチクと縫っていく作業を地道に続けていた。

私は美渡さんの思いが、千歌ちゃんの額に書かれている『バカチカ』で伝わっている。きつと人に頼らず、自分たちの力で人を集めて見にきてもらえってことなんだと思う。美渡さんなりの伝え方だから、千歌ちゃんも伝わってると思う。

「うくん、何かいい考えないかあ……」

「例えば、校内放送で呼びかけるとかいいんじゃない? 頼めば出来ると思うけど……」

私が意見を出したのは、学校の校内放送を使って、ライブを見に来てもらうという意

見。

その方がより多くの人に放送を聞いてもらえるし、見に来てくれる人も多くなるだろうからね。

プルルルッ♪ プルルルッ♪

「んっ？誰からだろう？」

するとその時、一本の電話がかかってくる。

しかも私のスマホに電話がかかってきた。だから、もしかしたらと思い作業を一旦止め、ポケットからスマホを取り出して電話をしてきた名前を見る。

『遼くん』

電話をしてきたのは、遼くんだった。

「もっもっっっ！」

『もしもし曜か？電話してきてごめんな？』

「ううん大丈夫。どうしたの？」

『いや、今どんな感じなのかなって、ちよつとした様子見で電話してみたんだ』

どうやら遼くん、私たちのことを心配してくれているみたいで、まだ遼くん自身部活中にも関わらずに電話してくるなんてね。

本当…遼くんってば……。

「遼くんどうしたの？部活は？」

『千歌か。ということは曜は千歌と一緒にどこかにいるんだな？』

「うんっ！今ね、千歌の家なんだ！」

千歌ちゃんの声を聞いた遼くんは、すぐに私が千歌ちゃんの一緒にいたことが分かったみたいで、千歌ちゃんは彼に今は自分の家にいるよって伝える。

すると遼くんは、千歌ちゃんがさつき尋ねた部活のことで私たちに話をしてくれた。

『そうか。実は今日部活が早く終わったんだ』

「えっ!? 本当!？」

『ああ! もし良かったら今からそっちに行こうか? 何か手伝えることがあったら手伝うよー!』

「本当!?! ありがとう遼くん!」

そして遼くんは、なんとこっちの手伝いをしようとまで言ってきた。千歌ちゃんは嬉しそうにはしゃいでいたけど、いいのかなあ…。

「いいの? 手伝ってくれるの?」

『ああ。千歌たちが何か困っていることがあるなら、俺も何かしら手伝うよ!』

本当に遼くんは優しい。

人を集める方法を考えていたところに、ちょうど電話でそんな風に言つて、まさに正義の味方。

遼くんは正にヒーローみたいだった。

「じゃあ今から来て! 曜ちゃんと梨子ちゃんも一緒にうちで待つてるから!」

『分かった。じゃあ切るね?』

「うん!早く来てね!」

そう千歌ちゃんが言ったあとで、電話は遼くんの方から切られた。私は電話の間、あまり遼くんと話すことが出来なかった。

それなのに…千歌ちゃんはとても嬉しそうで、早く遼くんが来てくれないかとはしゃいでいた。

「ああ〜早く遼くん来ないかな〜」

「……………うん、そうだねえ……………」

そう言う千歌ちゃんに苦笑いした私は、その後にもた衣装の作業を再開した。だけど、その作業は長く続かなかった。

ズキツ…ズキツズキツ

「……………っ!」

「とりあえず…早く急がないとな」

実は、今日は学校がまず午前中で終わった。

それで部活を夕方までみっちりこなした後で、曜に電話をして急遽千歌の家に向かうことになった。

手伝いに行くのは別に構わないのだが、今考えればちよつと失敗したかもしれない。なにせ千歌の家に向かうときに、一度俺の家の前を通り過ぎるからである。そう…移動の問題なのだ。

「はあ…はあ…」

地味に今日は暑いわけで、制服のワイシャツが自分の体に張り付いていや感じだった。

はやいところ…急いで千歌の家に行くべきだなと思った俺は、1人で海が見える海岸沿いの道を、いそいそと自転車を漕いでいた。

「大体…あと30分つてところかな？」

スマホで現在時刻を確認した俺は、千歌の家に着くまでの時間を憶測で考えてひたすら漕いだ。

それから10分くらい漕いだところだろうか？

「……………んっ？あの後ろ姿は……………」

俺は海辺の砂浜に目をやったときに、1人の少女が白い砂浜から海に沈む夕陽をじつと眺めていた。

その少女をよく見てみると、服装が千歌や曜と同じ制服。どうやら浦の星の生徒のようだった。

「すう……………はあ……………」

少女の髪の色は黒。ちょうど太陽と少女と俺が一直線上に並ぶ感じだったから、太陽

の逆光で黒にしか見えなかった。実際のところ髪の色は何色なのかは俺も分からない。とりあえず彼女はとても深い深呼吸を1つする行動を見せたあと、彼女は声を発した。

『あいゝしてゝるばんぎゝい』

『こゝこでよかゝつたゝ』

『わゝたしたゝちのいゝまが こゝこにあゝるゝ』

とても綺麗な歌声だった。

海に向かって歌っている彼女の後ろ姿は、顔を見ていなくても間違いなく美少女だということ、間違いなく俺には分かる。

でも何故か、どこかで聞いたことのある声だった。

『あいゝしてゝるばんぎゝい』

『はゝじまつたばゝかゝりゝ』

『あゝしたゝもゝよゝろしくゝねゝ』

『まだゝゴゝルじゃなゝいゝ』

彼女の歌はそれだけで終わった。

つい自転車を止めて、彼女の歌を真剣に聞いてしまっていたが、ずっとその歌声を聞いていたくなるような…そんな綺麗な声だった。

もうちよつと聞いていたかったと名残惜しかったが、千歌の家に向かわなければと、俺は自転車をもう一度漕ぎ始めようとした。

その時だった。

海に向かって歌っていた少女がこちらを向いた時、俺はその少女の顔を見て驚きを隠せなかった。

俺自身、彼女と会うのが久しぶり過ぎて、俺は彼女の名前を呼ばずにはいられなかった。

「…………つ、ダイヤ!?ダイヤ…なのか?」

「えっ!?もしや……………遼……………さん!」

彼女も俺を見ては、久々の再会に驚いていた。
なにせ、もう2年も会ってないんだからな。

「ダイヤじゃないか！久しぶりだな！」

「間違いないですわ。遼さんですわ」

俺は彼女に出会えたことに嬉しく思っていた。

けど彼女は俺と久々に会えたにも関わらず、あまり嬉しそうには見えなかった。

なんとというか、嬉しさと悲しさが半分半分くらいに混ざりあっているような…そんな感じがした。

「どうした？何が悩みごとか？」

「……………いいえ。何でもありませんわ」

今の少しの間。明らかに何かを隠してる。

こちらから先制攻撃を仕掛けるしかないと思った俺は、すぐさまダイヤに尋ねる。

「ダイヤはさ、生徒会長なんだろう？」

「…っ!?ど…どうしてそんなことを…!?」

「千歌たちから聞いた。ダイヤ、スクールアイドル部を設立させるの止めてただろ？」

俺はそう言うと、彼女は1つため息をついたから何となく理解出来たんだろう。俺が千歌と曜と関わりを持っているって…。

するとダイヤは鋭い目つきで答える。

「そうですが？」

「何で止めるんだよ?だって…お前…」

「お黙りなさい!!」

「…っ!ダイヤ…」

俺はダイヤに言おうとしていたことを彼女本人から怒声で止められる。あまりにも大きい声だったから、ビクツて体が跳ね上がる。

何故そこまで怒るんだ?俺が言おうとしていたことは、ダイヤの全ての真実だということに…。

「私はもう…スクールアイドルは嫌いですわ」

「何でそんな簡単に言えるんだよ…」

「もう…私自身が決めたことなので…」

なんで…そこまで澄ました顔で言えるんだ。

好きなものを、わざと自分から嫌いと言って、自分自身を抑え込んでいるようにしか見えない。

「じゃあなんで歌ってた？」

「……………」

ダイヤは何も答えない。口を噤むだけだった。

一体、彼女の身に何が起きたんだろうか？

「ダイヤ、2年前に何があつた？」

「別に…何もありませんわ」

「……………」

2年前のことを聞いても、ダイヤは口を噤む。

もう何も話してくれそうにないと思ったとき、彼女は目を瞑りながら私の横を通り過ぎ、俺の目の前から去ろうと歩き出す。

「では……私はもうこれで……」

「……………ダイヤー！」

俺は彼女が歩き去ってしまうのを止めようと、ダイヤの方を振り向いて彼女の名前を叫んだ。

その時、彼女は言った。

「鞠莉さんが…帰ってきましたわ」

「えっ?!鞠莉姉が!?!」

俺はダイヤから告げられた事実には驚き、空いた口が塞がらず、声も何も発することが

出来なかった。

鞠莉姉が、内浦に帰ってきた。

「それだけ……あなたに伝えて起きますわ」

「……………」

そしてダイヤは去ってしまった。

その時のダイヤの背中は何か……悲しみなのかはよく俺には分からないけど、ダイヤは何か苦しいものを背負っているような、そんな気がした。

「鞠莉姉、帰ってきたのか……」

そして俺はダイヤから告げられた、鞠莉姉が帰ってきたことを、ただボソリと呟いたのであった。

#12 宣伝とグループ名

翌日の午後

私と千歌ちゃんちゃんと梨子ちゃんは、学校が終わった放課後、とある場所に来ていた。

「よしっ！頑張ってアピールするぞ！」

「本当に…出来るのかな？」

「あははは…大丈夫だよ！」

私たちがやって来たのは、沼津駅。

ちようど時間も午後の4時を回っているけど、太陽は強く私たちを照りつけ、とても暑かった。

この時間帯は、沼津駅には多くの生徒がやってくる時間帯でもあった。

車の数もそれなりに多くて、生徒の帰りを待つ親の迎えも多数見受けられた。

そんな中で、どうして沼津駅に私たち3人がやって来たのかというと、ライブのお知らせをするためのチラシを配りをするためにやって来た。

駅なら多くの人が集まるし、違う学校の生徒の子たちもやって来るから、そこを狙ってって感じかな。

「東京に比べると少ないけど、やっぱり都会ね」

梨子ちゃんポツリとそう呟く。

東京よりは断然人は少ないけど、私からしてみれば駅付近はそれなりに人は集まるから、チラシ配りにはもってこいだと思う。

それから千歌ちゃんは私に尋ねてくる。

「曜ちゃん、そろそろ部活が終わった人たちがここに来る時間だよね？」

「うん！そろそろだと思う！」

「よくしつ！気合い入れて頑張るぞ〜！」

そうやって千歌ちゃんは駅に向かって走っていく。

ライブの宣伝で多くの人に見てもらいたいからと、千歌ちゃんはとても気合いが入っていた。

そしてちょうど2人の女子生徒が千歌ちゃんの目の前に現れ、それを見た千歌ちゃんはずかさずライブの宣伝をしながらチラシを渡そうとする。

「あのっ！よろしくお願いします!!」

けど千歌ちゃんに声をかけられた2人は、千歌ちゃんの声にスルーして通り過ぎていった。

「あれ？あれれ？」

千歌ちゃんはポカんと、口を開けていた。

「意外と難しいのね……」

梨子ちゃんも千歌ちゃんの姿を見て、宣伝することに対して気難しそうな表情を見せる。

梨子ちゃんに関しては、彼女はあまり自分から話し出すタイプじゃないって話をしていたから、私がチラシ配りの手本を見せる必要があった。

「うーん、難しいなあ……」

「大丈夫だよ梨子ちゃん！こういうチラシ配りっていうのは、気持ちとタイミグなんだよ！」

そして梨子ちゃんに『見てて！』と言い残した私は、早速駅から出てきた2人の女子生徒に狙いを定め、ライブの宣伝を始めた。

「ライブのお知らせです！」

「……っ！」

目の前にバツと現れた私を見た2人の女子高生は、驚いて足を止める。

それから私はすかさずライブの宣伝にと、2人の女子高生にチラシを見せて宣伝す

る。

「よろしくお願いします!」

「ライブ…ですか?」

「はい!」

1人の生徒に尋ねられ、私は答える。

するともう1人の生徒が私に尋ねてくる。

「あなたが歌うの?」

「はいっ!是非見に来てください!」

私は宣伝をするのと一緒にビシツと敬礼をする。

2人はチラシを受け取り、チラシに書かれていることに目を通したあとに、顔を見合
わせながら話をしていた。

「ライブは日曜日なんだ。行ってみる?」

「うん、いいよ〜！」

そう2人が話し、私の前から去っていく中で、私は『よろしくお願いします！』と一礼した。

私を見ていた千歌ちゃんは、俄然やる気が増す。

「凄い！千歌も負けてられない！」

「す…凄い……」

逆に梨子ちゃんは凄いと行って、私のコミュニケーション能力の高さに脱帽していった。

そして脱帽するどころか、羨ましがられた。

「凄いなあ。いきなり知らない学校の生徒とすぐに話せるんだもん。曜ちゃんって凄いな」

「別に…そんなに凄くないよ」

頬を搔き、頬を赤く染めて照れる私。

最初から持つてして生まれてきた訳じゃないけど、運動や勉強が出来るからってだけで、人気が出ちゃうだけなんだ…。

だから正直、嬉しいとは思わない。

「じゃあ次は梨子ちゃんの番！」

「えっ？私ができるの？」

「そうだよ！だって…私と千歌ちゃんと梨子ちゃんの3人しかいないんだしっ！」

私はそう梨子ちゃんに話すと、梨子ちゃんは駅付近のロータリーにいる多くの人を見て固唾を呑む。

梨子ちゃんはとても緊張している様子だった。

「ライブやりますっ！是非！」

「ど、どうも！」

それで千歌ちゃんはよく分からないけど、1人の女子高生に対して壁ドンをして、

何だか脅迫してるみたいにライブの宣伝をしていた。

黒縁のメガネをした女子高生は、怯えながらも千歌ちゃんが持っていたチラシをそそくさと受け取り、そのまま立ち去って行った。

「うんっ！勝った！」

何に勝ったんだろう？

よそから見られれば、一体何をしているんだろうって言われてしまいそうだった。

「さっ、梨子ちゃんも頑張ろう！」

「う…うん、頑張る……」

私は梨子ちゃんを応援する。

梨子ちゃんは今からライブの宣伝をすることに不安が入り混じった表情を見せるけど、やるんだと表情を真剣な眼差しに変え、ライブの宣伝をしてチラシ配りを始めた。

「あのっ！今度ライブやります！是非見に来てください！」

「……………」

梨子ちゃんの第一声は、やむなく撃沈。

目の前を通った女子高生に声をかけたけど、チラシを受け取ることもなくスルーされてしまった。

「あのっ！お願いします！」

「……………」

続く梨子ちゃんの第二声には、梨子ちゃんより少し背が小さい女子高生？が、梨子ちゃんの一声にビクツと驚いて、女子高生の足が止まる。

見た感じがすごく怪しい人っぽくて、サングラスとマスクをしている。水色のコートみたいなのでも暑そうな上着を着ていた彼女は、梨子ちゃんの一言で思わず足を止めてチラシを見つめる。

それを見て今だと感じた梨子ちゃんは、目の前にチラシを見せて力強く言い放つ。

「ライブやりますっ！是非来てください！」

梨子ちゃんのその一言に、チラシを差し出された女子高生は少し唸るような声を上げたあと、梨子ちゃんが持っていたチラシを取り上げるように貫つて、その場を去るように走って行った。

梨子ちゃんはチラシを受け取ってもらえて、嬉しそうに笑っていた。けど、それから梨子ちゃんが持っているチラシは一向に減らなかつた。

声をかけてもスルーされ、チラシを受け取ってもらえない。梨子ちゃんは意気消沈していた。

「うう……これ……上手くいくのかな？」

悲しく漏れる、梨子ちゃんの不安の声。

梨子ちゃんの様子を見ていた私はすぐさま彼女の元へと向かい、声をかける。

「梨子ちゃん、大丈夫？」

「……ううん、全然大丈夫じゃない……」

完全に意気消沈しかけている梨子ちゃん。

こんな時、彼女に対してどう声をかければいいのか分からないでいた私だけど、優しく話して梨子ちゃんをやる気にさせればいいのかなんて思った。

「梨子ちゃん、頑張ろう?」

「えっ…?」

変に難しく話さないで、ただ単に梨子ちゃんを元気にさせるような言葉をかけて、私は梨子ちゃんが元気になるような言葉をかけた。

「大丈夫!スルーされてもいい。焦らず無理せず、梨子ちゃんのペースで宣伝すれば大丈夫だよ!」

「曜……ちゃん……」

ニコツとはにかむような笑顔を見せながら、彼女に言葉を投げかけて元気付ける。

すると梨子ちゃんは私の言葉に何かを感じたのか、彼女は目の色を変えて、やる気を見せる。

沼津駅でチラシ配りを始めて1時間が経つ。

1時間前の時よりも駅には多くの学校の生徒が帰っていて、仕事帰りのサラリーマンの人数も少しづつ多くなっていた。

「よろしくお願いしま〜す！」

「ライブやります〜！よろしくお願いします〜！」

そんな中で私たちは、鞠莉さんが貸してくれた体育館を満員するために、一生懸命にライブの宣伝と、そのチラシを配ることに追われていた。

曜ちゃんも梨子ちゃんも、駅を通る人たちにライブの宣伝を一生懸命にしていた。

ライブの宣伝をしている実感は、私にはある。

「ライブやります〜す〜！よろしくお願いします〜！」

私たちでたくさん作ったチラシの数も1時間前よりも全然減ってきているし、受け取ってくれてる人たちも、私たちのライブについて見に行くかどうかで話し合っているのも耳にした。

この作戦は成功に近いと、私は思った。

「お願いしま〜す！ライブやりますので、是非見に来てくださ〜い！」

それから私は目の前を通る1人1人に対して、曜ちゃんが見せてくれた手本を頼りにライブの告知を行っていた。

そんな時、見たことのある人物に遭遇する。

「あつ！花丸ちゃん！ルビィちゃん！」

「あつ、こんにちは！」

「ピ…ピギイツ！」

花丸ちゃんとルビィちゃん。

花丸ちゃんも私に気づくと、ペコリと頭を下げ、挨拶をしてくる。ルビィちゃんは私を見ると、驚いて花丸ちゃんの後ろに隠れてしまった。

花丸ちゃんが背負っている風呂敷の中身が何なのかは私には分からなかったけど、私はとりあえず花丸ちゃんにチラシを手渡す。

「はい！花丸ちゃん！」

「これは何ですか？」

「ライブのお知らせだよ！」

「ライブ…ですか？」

「花丸ちゃんも見に来てね！」

花丸ちゃんは一度チラシに目を通してくれたけど、ライブという言葉聞いて首を傾げる。

すると花丸ちゃんの後ろから、*“ライブ”* という言葉に反応したルビィちゃんが、ピョコツと顔を覗き込むように顔を出して尋ねてくる。

「ライブ…やるんですか!？」

「えっ? あつ、ルビイちゃん!」

「あつ……うゆ……」

だけど、ルビイちゃんの質問に対して私が少しでも反応すると、彼女はびつくりして、また花丸ちゃん後ろにチョコンと隠れてしまう。

まだ私に心を開いてくれない様子だった。

私はルビイちゃんに対してゆつくりと彼女に歩み寄り、しゃがみこんで蹲っていたルビイちゃんにチラシを手渡しながら大事なことを話した。

「私たちのライブ、学校の体育館でやるんだ」

「えっ?」

私のその一言に、ルビイちゃんは驚く。

「それで、体育館を満員にしないと私たち……スクールアイドル出来なくなっちゃうんだ

……」

「えっ!?! 本当なんですか!?!」

「うん、そうなんだ……」

私は『あはは……』とルビイちゃんに対して苦笑いをしながら頭をポリポリと搔く。ルビイちゃんは衝撃の事実を聞いてしまったような表情をして、悲しそうな表情を浮かべていた。

それで『だから』と私は、ルビイちゃんに私の気持ちを全面に押し出すように伝えた。

「だから……絶対に、体育館を満員にしたいんだ!!だから来てね、ルビイちゃん!」
「……っ!はいつ!絶対見に行きますっ!」

私の話を聞いた上で、ルビイちゃんは宣言した。

その言葉に嘘はなくて、私たちのライブを絶対に見に来てくれると思わせられるほどの笑顔でそう話してくれた。

それが何だか嬉しくて、やる気が漲ってくる。

こうして私たちを応援してくれていると思うと、私は嬉しくてたまらなかつた。

『よしっ!』と心の中で叫んでしまうほどに、私の体からはやる気が溢れかえっていた。

「じゃあ私、まだ配らないといけないからー！」

そして私は花丸ちゃんとルビイちゃんにそう言つて、背を向けて2人の元から離れて再びチラシ配りを始めようと走り始めた。

するとそのとき、私の後ろから大きな声でルビイちゃんに呼び止められる。

「あ…ああ、あのっ…！」

「んっ? どうしたの?」

まだ私に対して、緊張気味な面持ちを見せるルビイちゃんだったが、彼女は一旦呼吸おいてから、ある事を私に尋ねてきた。

それは、私たちにとって重要なことだった。

「『グループ名』は、なんて言うんですか?」

「えっ? グループ名…?」

私はルビイちゃんの言葉を聞いて、自分が手に持っているチラシに目を通す。

「えっ？グループ名？」

「そう、グループ名だよ！」

千歌は俺に向かってそう言つて、俺は千歌が何故そう目をキラキラしてるのか不思議に思っている。

「そういえば、そんなの決めてなかったね」

曜もその事を忘れていたらしく、自分も忘れていたと千歌の話しに続けて話す。曜までも忘れていたとなると、千歌が俺をここに呼び出した事情というか…現状が分かった気がする。

俺は部活の後、『相談に乗って欲しいことがある』と千歌からメールが届き、どうしたのだろうと思つて俺は千歌に返信はしたのだが…。

『とにかく砂浜に来て！』と、詳しい事情は聞かされず、仕方なしと千歌の言う砂浜へと向かった。

「ならなんで俺がここまで来なきゃならない？別に電話とかで相談はいつでも出来ただろ？」

「そうだけど…今決めなきゃいけないの！」

そしたら相談というのはグループ名を決めるということで、俺はその言葉を聞いてため息をつかながら彼女にそう話す。

すると彼女も俺に反論する。

どうして今決めなきゃいけないのかは不思議に思っている。グループ名なら、いつでも決められる時間はあるはずなのに…。

「じゃあどうして今なんだ？答えろ」

「ルビイちゃんから言われたの」

「ルビイ…ちゃん？」

千歌はルビイちゃんという子から言われたと、グループ名を決めるきっかけになった事を話す。

「そう！ 駅でライブの宣伝でチラシ配りをしていたときに、そのルビイちゃんって子に言われたの！！ グループ名はなんて言うんですかって！」

それが多分、千歌たちがグループ名を決める事になった理由なんだと、俺はすぐに理解出来た。

「でも…まさか決めてないなんて…」

「梨子ちゃんだって忘れてたくせにっ！」

梨子はストレッチしながら呆れながら千歌に話すと、千歌は自分のせいにされて少々腹が立って、梨子に反論するように言い放つ。

そんなごちゃごちゃ話していたら埒があかないと、曜は2人の仲介に入って早いところ名前を決めようと、2人に話を促す。

「とにかく早く決めなきゃ！」

「そうだな。早いところ決めないと…」

「えっ!?!手伝つてくれるの!?!」

すると俺の言葉に驚く反応を見せる千歌。

「いちいち俺に詰め寄ってくる癖は直して欲しいが、今は仕方ないと思って、彼女に俺は話をする。」

「今グループ名が決まってないということは、自分たちを紹介する上で色々と面倒なんだろう?」

「う……うん……」

「だったら早いところ決めないと。そのルビイちゃんに自分たちはこんなグループ名だよって教えてやらないとな!」

少し強引ではあるけれど、さつきとグループ名を決めようと話すと千歌は喜んで抱きついてくる。

抱きついてくる癖も直して欲しいが、これも今は仕方ないと思った俺は、千歌に抱きつかれたままグループ名について3人に話す。

「どうせなら、グループの名前に学校の名前が入ってるほうがいいんだろ？」
「へえ。例えば……？」

千歌は俺にそう尋ねてくると、俺はしばらくグループ名を考えた上で3人に言った。

「うーん……浦の星スクールガールズとか？」

「そのまんまじゃない！」

そしたら梨子に一蹴され、あえなく却下された。意外と物事を却下されると、心に来るもんだな……。

「じゃあ梨子ちゃんは決めてよ」

「えっ!? わ……私!?」

「そうだね！東京の最先端な言葉とか！」

梨子は千歌と曜に話を振られ、彼女は眉間にしわを寄せて考える。東京の最先端な言葉とか、聞いてみたい気もするけどな……。

でも一体何に期待をしてるんだこの2人は…。

「えつと…じゃあ、私たち3人が海で知り合ったから、*“スリーマーメイド”*…とか？」
「……………」

…つておい!?お前らな、2人で梨子に話を振っておいてその反応は冷たいと思うぞ？
ましてや無言で何も言わないなんて…。

「ま…待って、今のなし!／／／」

梨子は何も言われないことに頬を赤く染め、今のはノーカウントと言って、両手をブンブン振りながら言うてくる。

自分のセンスのなさに恥ずかしく思ったんだろうけど、確かにあまりセンスはないなと感じた。

「その…悪くわないと思うよ?」

「いい、言わなくていいよ〜!／／／」

超絶に返すのが遅い。

曜はそう言うけど、梨子はさらに顔を赤くしていた。まるで湯気が立ち上るタコのよう……。

「じゃあ曜ちゃんは？」

「私？私はね……そうだな……」

そして千歌は今度は曜に意見を聞く。

こいつの場合、大体こいつが言いそうなることは分かっている。それくらい曜はやってるし、スクールアイドルもそうするから……。

「制服少女隊!!どう?」

「ないね」

「ないわね」

「ないわ。却下却下」

「ええく!!」

そう言うだろうと思ったよコスプレ女。

千歌も梨子も曜の意見にいまいちピンと来なかったようで、曜の意見は却下された。

「もう〜！決まらないよ〜！」

その後にも4人で意見を出し合って、自分で良いと思ったグループ名を砂浜に書いていく。

だけど結局、4人が満場一致するようなグループ名は一向に決まらず、砂浜には俺たちが書いた文字が一面に広がっていた。

『sunshine』『波の乙女』『blue sky lady』等々

たくさん思いついた名前があったけど、3人はいまいちピンと来るようなグループ名はなかった。

そんな時に、梨子は言い出す。

「でもやっぱりグループ名とかこういうのは、言い出しつぺの人が決めるものよね」

「賛成〜！」

「うわあ〜ん！戻ってきたあ〜！」

何故か『海鮮』と書いた後に木の枝をグサツと砂浜に指した梨子は、もうグループ名を考えるのが嫌になって話を千歌に放り投げる。

「うえ〜ん。もう分かんないよ〜！」

だが千歌も同じだった。頭を抱えて考えるも、砂浜に書いたもの以外で思いつくのはもうなかった。

「じゃあ制服少女隊でいいってこと？」

「スリーマーメイドよりはマシかな〜？」

「なっ!?!それは無しって言ったでしょ!／／／／」

それで梨子はまた『スリーマーメイド』を話を掘り返されたことで、頬を赤くして話

をやめさせる。

そんなもって俺は、曜の『制服少女隊』という特に意味のよく分からない名前を却下した。

「まつ、俺は制服少女隊は無しだけどな〜」

「もう〜！なんで遼くんはそう言うの〜！」

曜はふくれっ面で怒って俺の肩だったら胸のあたりを叩いて来るが、全然痛くもかゆくもない。

逆に膨れている曜の頬を、俺の右手人差し指と親指でギュツと掴むと、頬はしぼんで変な音が出る。

まるで屁のような音だった。

「ぷっ……ぷっぷっ」

「ははっ……まるでオナラの音だ」

「もう〜！遼くんったら〜!!」

曜は俺に弄ばれたことに怒って地団駄をする。

俺や曜の側にいた梨子は、俺と曜のこのやり取りを見ていて笑っていた。彼女は曜の素性というか、まだ梨子から見た曜についてまだ知らないことは多いだろうからな。

聞かれれば曜の素性なんて1時間くらい話せる自信はある。『自信』だけはな…？

「お〜い！3人とも〜！」

「んっ？あれっ!?!千歌ちゃん!?!」

「い…いつの間に…!?!」

すると遠くから、千歌が俺たち3人をことを呼ぶ声が聞こえてくる。

ふと声が出た方向に首を振ってみると、千歌が手を振って何かを見つけたようなジェスチャーをする。

「早く来て〜! いいもの見つけたから〜！」

「良いもの…?」

曜はそう言うも、千歌が早く来てと言うもんだから、俺たちは急いで千歌の元へと向

かう。

それで千歌の元にたどり着いた時、梨子は尋ねる。

「千歌ちゃん、一体どうしたのよ？」

「見て見て！私たちがグループ名を砂浜に書いた時に、砂浜に書いてないものがあつたんだ」

「書いて…ないもの？」

「どれどれ見せて？」

千歌はどうしても見せたいものらしく、曜は見せてと懇願すると、千歌は俺たちにその砂浜に書かれていたものを見せてくれた。

「書かれていたものは…これだあ！」

やけに変に大雑把な行動ではあるけれど、千歌は俺たちに見せてくれた。

砂浜に書かれていたもの…それは……

『A q o u r s 』

字体は歪んでいたものの、そう書かれていた。

「あゝきゆうあわゝず?」

「アキユア?」

曜と梨子はそう言って、書かれている言葉を音読してみる。だが、そうじゃない。本当は……こう言う。

「これは多分、アクアって読むんだと思う」

「アクア?それって水ってこと?」

「そうだな。そう言った方が正しいかも」

俺もよくは分からない。でも、この言葉をどこかで見たことがあって、確かにそう読んでいた。

確か……あいつらだったような…。

「水かあ…。なんか良くない？グループ名に！」

すると千歌はこの名前を気に入ったようだ。

『Aqours』という言葉をまじまじと見ていた彼女は、曜と梨子の2人に対してそう話す。

「だけど梨子は、この文字は俺たちが書いたものではないからこれを名前にするのはどうなのかと、少しばかり不満を漏らした。

「これをグループ名にするの？誰がここに…何の為に書いたのかも分からないの？」

「だからいいんだよ！名前を決めようとしている時に、この名前に出会った。それって

…凄く大切なんじゃないかな？」

「はあ…仕方ないわね……」

名前を決める時って、俺もよく分からない。

「どういうコンセプトで、どんな風にキラキラした名前にしようかなんて、考えたこともなかった。」

だけど千歌の話聞いた時、何となく分かったような気がする。はつきりとは…言い切れないけど。

「そうかもね！私もこの名前がいいかも！」

「そうね。このままずっと続けても、名前も決まりそうにもないしね…。」

それで曜と梨子は千歌の意見に賛成した。俺が何も言わずとも、その名前にするとう事実は、決して変わることもないしね…。

「遼くんは？どう思う？」

「俺か？ああ、俺もその名前がいいと思うよ。少し文字を捻った感じな名前だけど、とてもシンプルでいいんじゃないかな？」

俺の話に、3人は顔を見合わせる。

もうすでにグループ名は決まったも当然なのに、俺の一言でこれにしようって更に決心を強めるものだから、困ったものだよ…。

「それじゃあ決定だねっ！この出会いに感謝して、今から私達は『A q o u r s』だ！」

海に向かってジャンプした千歌は、明るい笑顔をしながらそう叫んだのだった。

偶然にも出会った言葉を、グループ名として3人は胸に刻み、そしてそれはまた、彼女たちの新たななる航海の旅路の始まりでもあった。

1 3 最終調整と成功祈願

とある日の夕方のこと

「ここでステップするより、ここでこう動いた方がお客さんに正対出来て良いと思うんだけど……」

「じゃあ、私がここからこう回り込むように動いて、それからサビに入る？」

俺や曜、そして梨子がいるのは千歌の部屋。

俺たち3人は振り付けの見直しをしていた。

というのも、梨子がサビ前の動きがまだ怪しいらしく、少し動き方を調整している最中なのである。

大体のところは曲の振り付けが出来ていて、3人は朝の練習で十分に上達したと俺は

自負している。

3人ともダンスは上達するのがとても早かったからもう大丈夫だと思う。俺の目に狂いはない。

「だとしても間に合うか？」

「いくら曜ちゃんでも、大変だと思うけどな……」

「大丈夫！私に任せてよ！」

余裕綽々と曜は得意気に言ってみせる。

梨子は大丈夫だろうかと不安になっているが、曜のやる気を感じてか、梨子は曜なら大丈夫だろうと思いい相談していた動きを曜にして貰うことにした。

「じゃあ曜ちゃん、ここは任せるわね！」

「うん！了解であります！」

「じゃあダンスの動きはこれで大丈夫だな」

曜がビシッと、梨子に対して敬礼したところでダンスの最後の最終調整は終わった。

それで曜はスマホで時間を見る。

「うわっ！もうこんな時間。バスもう終わっちゃってるよ……」
「あらマジ？どくすつかなく？」

すると時間は6時半を回り、日はすでに山に隠れて沈みきっていた。バスで通学している曜は、終バスの時間をも逃してしまっていた。

ただ不幸中の幸い、俺は千歌の家までは自転車で来ている。曜を後ろに乗せて、2人乗りは出来る。

千歌の家から俺と曜の家まで歩くとなると、余裕で1時間以上はかかるから、ここは俺から誘って帰った方が最適かもしれない。

そう思った俺はすぐさま行動に移す。

「なら曜、乗りは俺の自転車に乗って帰るか？俺は自転車で来たから、二人乗りになるけど……」

「うん、そうする！その方が帰るのが早そうだし！」

「じゃあ決まりだな」

「ダメ！二人乗りはダメよ！」

だけどそこへ梨子は注意をしてきた。

自転車の二人乗りは禁止だと、梨子は俺と曜の親かとも言われてしまいそうなくらいに、彼女は嚴重に注意をしてくる。

梨子はルールをきっちり守る人だとは思っていたが、そこまで厳しく言ってくるとは思わなかった。

「先生から教わらなかつた!?自転車の二人乗りは絶対にしたらダメだつて！」

「ダメだつて言われても、ねえ？」

俺は曜に話を振られたので、梨子に対してどう答えようかと思つたが、東京と内浦、都会と田舎の違うところを話すことにした。

「東京と違つて、こつちじや普通だしな」

「ええ!?普通なの!?!」

梨子にそう話すと、彼女は驚きを隠せない。

「確かに二人乗りはダメかもしれないけど、あまり警察とかお世話になったことないしね……」

「ああ。ましてやこんな時間帯だ。大丈夫大丈夫」

俺と曜のヘラヘラした話を聞いていた梨子自身は、『なんて子たちなの!』と、両手を口に抑えて、信じられないみたいに驚いていた。

それと同時に都会と違って、田舎ではこうなのかと彼女は開いた口が塞がらないくらい驚いていた。

それで曜は俺に言ってくる。

「じゃあ帰ろう遼くん！」

「おうよ」

早く帰らないと本当の親に怒られるからと、曜はすでに自分のカバンを肩にかけ、帰る気満々だった。

俺と曜の話聞いて呆れた梨子は、自分もそろそろ帰ろうと思って千歌の名前を呼ぶ。

「千歌ちゃん！曜ちゃんと遼くん帰るって！」

「……………」

そろそろお邪魔させてもらおうと彼女の名前を呼んだが、千歌からの返事はなく、よく見ると、千歌はテーブルに置いたノートパソコンを起動させたまま突っ伏して眠っていた。

ましてや隣には歌詞が載ったノートを広げ、右手にペンまで持って寝ていた。

「あらっ？寝てるのかよ」

千歌はというと俺たちとは別に、自分たちが歌う曲の歌詞の見直しと修正をしていた。

彼女は『自分たちが歌う歌詞に間違いがあつたら大問題だよ！』って言っていたけど、千歌は最近頑張っていたから、疲れてしまったんだろう。

でなきゃここで自分から寝るはずもないからな。

「すう……すう……」

「最近の千歌はすごく頑張ってるからな。このまま寝させてあげようか」

「そうね。このまま寝かせてあげましょう」

「ははっ、そうだね」

曜も梨子もぐつつすり寝ている千歌を見て、俺が口にしたことにもウンウンと頷き意見に賛成した。

だけど曜は千歌の寝ている場所に指摘をする。

「だけど、千歌ちゃんをこのままテーブルで寝かせてたらダメなんじゃないかな？ 風邪引いちやうよ」

「そうだな。風邪ひいちゃったら大変だし」

「頑張ってきたことが水の泡だわ……」

このままテーブルに突っ伏したまま寝させるのはどうかと、曜はそんな意見を提示す

る。

俺も梨子もそれには同意見で、まず俺は立ち上がったままの千歌のノートパソコンの電源を切る。

次に千歌をテーブルからベットまでどうにか動かして寝かせなければならぬ。さつきも言ったが、このまま寝かせていたらライブの直前に風邪を引くなんて元も子もない。

千歌の体を無理やりにも引きずってベットまで持つていくのもあれだからな。下手に刺激して千歌を起こしてしまうかもしれないよ。

そうなれば……こうするしかないよね？

「曜、梨子。ちよつとどいて」

「えっ？うん……」

「何をするつもりなの？ま……まさか……」

「別にやましい事なんてしないよ」

俺はあることを思いつき、前にいる曜と梨子にどいてもらおうように声をかける。

そしたら梨子の変な妄想からそんな如何わしい言葉が出てきたから、俺はそう言って

はぐらかし、千歌の隣に来てしゃがむ。

多分、俺が次に起こす行動に意味を察した時、曜と梨子は絶対に顔を真っ赤にするだろう。

「千歌、寝てるどころ悪いな…よいしょ！」

「…っ?!?ええ!?!／／／」

簡単に言うと、千歌にお姫様抱っこをしている。

テーブルに突っ伏していた体を起こし、左腕で千歌の上半身を支える。その後に残っていた右腕を使い千歌の膝裏を持ち上げてお姫様抱っこ完成。

この様子を例えるならば…そうだな。

「眠りの姫を抱える白馬の王子様」

………って、俺は一体何を考えているんだ。

痛いし、バカバカしくてまるで子供だよ。

「遼くんが……お姫様だっこ……」

「あ……ああ……」

それで曜と梨子は思った通り赤面していた。

曜は変な妄想をして頭がショートしてるし、梨子に関しては両手を顔を隠してるけど指の間から目を出して見てるから、隠してる意味がないよと俺は心の中でツツコミを食らわした。

「んしょ……よいしょ、よつこいしょ」

それから俺は、無事に千歌をベッドに移動させて、ぐっすり寝ている千歌に布団を掛ける。

千歌をお姫様抱っこしていた時、千歌の体は本当に高校生の体かと思ってしまうほど、彼女の体はとて魅力的だった。

制服越しだったけど、千歌のよく育った体の感触を味わえた感覚がしたよ。うん……とても凄く。

それで、千歌の1つ上の姉である美渡さんの部屋を通る際、曜と梨子はそう言つて挨拶してから軽く会釈をして通り過ぎる。

美渡さんが2人に挨拶を返したあと、俺は美渡さんに対して一言だけ言いたかったことを伝えた。

「美渡さん、千歌はベットで寝てしまったので後のことはよろしくお願いしますね？」
「んっ？分かった、ありがとね！」

美渡さんからお礼をもらい、俺も軽く会釈をしたあとで部屋を通り過ぎる。

その時に俺は、ふと美渡さんの右肘にあるものを目にする。裏がえされていたけど、紙のようなものが美渡さんの右肘にあった。

俺や曜たちから見えないよう、美渡さんは何かを隠している様子が伺えたから、俺は女性ファッション誌を読んでいた美渡さんに尋ねる。

「あつ、あともう1つなんですけど…」

「んっ？今度は何よ？」

「美渡さんの右肘に隠してる紙、別に隠さなくてもいいと思うんですよね？」

「……………!?／／／」

美渡さんは俺の尋ね方にバレたのかと思っただのか、裏返されていた紙を一度見た美渡さんは、ファツション誌をパンツと閉じては、バツと隠していた紙を全身で隠す。

俺の美渡さんへの尋ね方が幸い良かったのかもしれない。今の美渡さんの反応の驚きぶりを見たとき、俺の疑問は確信に変わった。

「……………これは別に何でも無い!／／／」

「千歌のため…なんですよね?」

「バ…バカ!ベ…別にそんなんじゃない!／／／」

慌ただしく僕の質問を否定する美渡さん。

意外と美渡さんは嘘をつくのは苦手なのかな?

あまり話す機会もないことが多かったけど、でもこうして話してみると、千歌の1つ上の姉といえど、千歌と何だか似てるような感じがしてとても面白い人だなと、俺は思った。

それから俺は美渡さんに問いかけるように話す。

「でもやっぱり…手伝いたくなりますよね？千歌が最近あんなに頑張ってるのを見ると……」

「……そうね……／＼／＼」

千歌の最近の頑張りようについて話をすると、美渡さんは口をツンつと尖らせて、半目で赤面しつつ、千歌と部屋の方向を見ながらボソツと呟く。

美渡さんは千歌に対して敵対的な態度をとり、いつも喧嘩をしていると千歌から話は聞いているけど、中身は根っから優しい、姉らしい姉だった。

千歌には自分の本性を見せないだけ。

ただ……それだけだった。

それから僅かな時間を使って間を開けた俺は、美渡さんの方に身体を向き直して話した。

「美渡さん、千歌のことを応援してください。姉として…妹の頑張りを見てやってくださいー！」

「……………」

深く長く…きちんとお辞儀をして、俺は美渡さんの答えを聞かないで部屋を去る。
美渡さんなら千歌のことを大切に思ってくれているはず。だから、答えは聞かなくとも、あの人がどう行動するのは俺の中で分かっていた。

「遼く〜ん！早く帰ろ〜！」

美渡さんの部屋を去って玄関まで来ると、曜は手を振って俺を急かしに言ってくる。
もう夜だし、曜が早く帰りたいたいのも分かっていたから、俺は急いで曜と梨子の元へと急ぐ。

「あらっ？もう帰るの？」

「あつ、志満さん」

するとそこへ千歌のもう一人の姉、三姉妹の長女である志満さんが現れる。

さつきまで洗った物をしていたのか、彼女の手にはタオルがあり、濡れた手を拭きながらやってくる。

「はい。千歌は疲れてベッドで寝ています」

「本当？ありがとう！」

千歌は部屋で寝ていることを報告し、志満さんは千歌のことについて俺に話をしてくる。

やっぱり志満さんでさえも千歌がスクールアイドルというものに興味を持ち、それに凄くのめり込んでいることが未だに信じられないようだった。

「あの子が何かしらにのめり込んでいるところ、あまり見たことないから」

「ええ、それは僕も一緒です」

俺も志満さんの意見に同じように共感し、志満さんはさらに俺に対して話をしてくる。

それは、とても大事なことだった。

「もしあの子の身に何かあったら、遼くん、千歌のことをよろしくね？」

「はい、言われなくても大丈夫です！」

大切な人を守らなければならないという、小さいけれど大きな…多大な責任を負わされてきているような、そんな責務を感じた。

でもそれを俺は任されたから、志満さんの願いには応えようと俺はそう答える。

それを見た志満さんは、安心して笑顔を見せた。

「うん。遼くんなら任せられるわ！」

「はい！任せてください！」

そんなやり取りを志満さんとした後で、俺は志満さんにお邪魔しましたとお辞儀をし、急いで曜たちの元へと向かう。

すると『十千万』の入り口の暖簾を潜ろうとした俺を、また志満さんは呼び止めてきた。

「あつ、遼くんちよつといい？」

「えっ？何ですか？」

何かを思い出したように俺を呼び、右手でこつちに来てとジェスチャーをしてくるから、俺は一旦曜には『ちよつと待ってて!』と言い残し、志満さんのところへと戻る。すると志満から耳元で囁くように尋ねてきて、俺はその内容に心臓がドクンツと一気に跳ね上がる。

「それで? 誰が1番の本命なの?」

「えっ?! ええ!」

「だって、あんなに可愛い同級生の3人と一緒にいて、何も思わないわけないでしょ? ましてや、千歌ちゃんと曜ちゃんとは幼馴染みなんだから!」

志満さんのいきなりのもんでもない質問に、俺は体が飛び上がるように驚く。

いや:まずどうして志満さんの口からそんな話題が飛び出してくるんだ? 志満さんって恋愛の話とか大好きそうだけど、本当に好きなのか?

それにどうして男の恋愛事情に首を突っ込んでくるのかも、俺にはよく分からなかった。

そしたら志満さんは俺の話も聞かずに、ペラペラと3人を1人ずつ俺に尋ねながらこ

とを話し始める。

「もしかして転校してきた梨子ちゃん？あの子とても綺麗だし、遼くんと付き合ったら、とてもお似合いだと思っわよ？」

「いや…僕は今それは全然……」

「それとも千歌ちゃん？遼くんならいつでも千歌ちゃんのこと貰っていいからね！」

「いや…ですから……！」

志満さんは俺の話も聞かず、ペラペラと梨子と千歌のことを話して本命なのかどうかを尋ねてくる。

確かに梨子は都会っ子だけあってとても綺麗だし、千歌は元気一杯で一緒に遊んでても楽しい。

「それとも…… “曜ちゃん”？」

「なっ!?!い……いえ……あいつとは全然……!／／／」

それで俺は曜の名前を聞いたとき、不意に自分の顔が熱くなるのを感じた。どうしてなのか……俺も全然よく分かってない。

「ん〜っ？何で顔赤いのかな〜？」

「……これはただ暑いだけです！」

ジト〜ツと正面から見つめる志満さんに目を背けたまま、俺はその真意については何も語ろうとしなかった。自分でも分からないことを他人に話したところで、何が分かるわけじゃないから。

とりあえず、この事は頭の隅っこに置いておこうと思う。いつしか分かるからかもしれないから。

それでこのまま志満さんの質問責めに付き合っていたら埒があかないと思つた俺は、その場の雰囲気壊すように志満さんに言う。

「べ……別になんでもありませんから、僕はこれで失礼します！お……お……お邪魔しました

〜！／／／

「ふふっ♪は〜い、また来てね〜！」

質問責めを振り払うように志満さんにそう言って、俺は『十千万』の暖簾をくぐって外に出る。

志満さんのあの質問責めから逃れることが出来たのだが、休憩の文字はなさそうだった。

なんせ目の前には彼女が待っているのだから。

「やっと来た！もう遅いよ遼くん！」

「ああ……ごめんごめん」

彼女は腕を腰を立てて仁王立ちし、プンプンと怒って待ちくたびれていた様子を見せていた。

それから曜は俺に向かって言ってくる。

「遼くん待つてる間、梨子ちゃん先に帰っちゃったんだからね！責任とってよね！」

「うん、それは分かったよ」

どうやら梨子は先に帰ってしまったらしい。待たせてしまうのも悪かったから、先に帰らせておいてよかったと思う。

曜に関しては俺が責任を取って、あとで曜が大好きなミカンアイスを奢るしかないよ
うだ。

でないと曜の機嫌も治らないからなあ……。

「じゃあ早く帰ろう！もうお腹ペコペコ〜！」

「はいはい。じゃあ後ろに乗って？」

時間も夜の6時半を過ぎている。

日もとつくに暮れていて空も真っ暗。曜のお腹も空いているようなので、俺は曜にそう言つて自転車の後ろになるように促す。

曜は素直に指示に従い、サドルの後ろにある荷台を乗せるところに曜はきちつと座る。

「はい、乗ったよ〜！」

「じゃあしつかり掴んどけよ？離すなよな？」

「風は気持ちいいですか？」

「うん！とつても気持ちいいよ！」

「それは良かった」

今の時間帯はとても涼しく、俺も曜も自転車の勢いで起こる心地よい風を感じていた。

千歌の家を出発して10分ほど自転車を漕いで海の海岸沿いを走ってるものの、一向に道のりは遠い。

それに逆に二人乗りをしてるせいかな、いつもより俺は疲れているように感じた。

だけでもこれは俺から誘ったわけで、途中でやめたらこいつに煽られるのが目に見えるので、我慢して自転車を漕ぎ続ける。

そんな時に曜は、俺に話しかけてくる。

「遼くん、あのね？」

「ん？なに？」

「あのね、体育館でやる私たちのライブ、遼くんは見に来てくれるの？」

彼女は後ろから、俺を覗き込むように尋ねてくる。

曜が尋ねてきた内容はライブの話であり、俺に向かって何かを期待しているような尋ね方だった。

ライブを見に来てくれると尋ねてきた曜なのだが、俺のその質問の答えは……『No』だ。

その日は残念ながら、部活がある。

「曜、俺はその日は部活なんだ」

「……そうなんだ」

「ああ。見に行きたいのも山々なんだけど、部活だから見に行く事はできない。だから……（めんな？）」

「……うん。分かった……」

曜は俺の話を聞いたあとで、自分の頭をコツンと俺の背中に預けるようにしてに俯いた彼女を思うと、罪悪感というものが否めなかった。

千歌、曜、梨子。

3人が頑張つてするライブは、俺もとても見に行きたかった。例えば客が俺1人だろうと、俺はどうしても彼女たちが輝くところを見たかった。

だが現実はどうしても彼女たちが輝くところを見ることが出来なかった。

だから千歌たちがするライブは、またの機会に行きたいと思う。今度のライブで千歌たちの活動の進退がどうなるかは分からないけれど、俺は3人のライブの成功を信じるよ。

「でも俺は、曜たちのライブの成功を祈るよ」

「えっ？本当……？」

「うん。曜が可愛い衣装を着て踊る姿を見たかったけど、部活で見に行けないから。だから俺は曜たちのライブの成功を信じるよ！頑張れよ…曜！」

「……………！／／／」

3人のライブの成功を祈ったり、曜の可愛い衣装を見たかったと彼女自身に伝えると、曜は自分の頬はポワツと赤く染め、顔に熱が帯びるのを感じた。

そうした中で曜は、俺がエールを送ったことに対して恥ずかしそうにお礼を言う。

「うん…ありがとう遼くん。私…頑張るね！／／／」

「おう、頑張れ頑張れ！」

顔を背中に預けているせいで、曜の顔の表情は確認出来なかったけど、嬉しかったに違いない。

俺の服を無意識なのかぎゅっと握りしめて、背中のある一部分だけが熱くて俺の背中に伝わってくるから、曜の感情は多分そうなのかなと思う。

「じゃあスピードを上げるぞ？」

「うん！更に全速前進であります！」

それで俺は更に自転車のスピードを上げ、曜は合わせていつもの言葉を俺に向かつて言い放つ。

親の影響もあつて、曜はその言葉を使うのがとても好きだった。ていうかそれが曜らしいと俺は感じているから、俺そんな曜が好きかなつて感じてゐる。

「お前……本当にその言葉好きだよな？」

「うん……だつて……大好きなんだもんっ！」

曜たちのライブが成功するかは、当日になつてみないと分からない。だけど俺は成功を信じる。

今まで朝練を毎日欠かさずに頑張つてきたんだし、失うものはなにもない。だから信じる、ライブは……

成功するって！

曜たちのライブの成功をそう信じ、家に向けて自転車を漕ぎ続ける俺なのであつた。

1 4 はじめの一步

今日は待ちに待った、ライブの日。

今日までにたくさんの人たちに宣伝をして、体育館にはたくさんの人たちが来てくれるだろうと、私たち3人は期待に胸を躍らせていた。

ただ、今日の天気は最悪だった。

「最悪だね、今日の天気……」

「そうね。天気は私たちの敵をしてるのよ」

雨足は体育館の窓を打ち付け、風もビュービューと音を立てる。今日の天気は生憎の雨。

まるで私たちが今までやって来た事を、全て台無しにしてしまおうって感じで、雨風とともに、雷まで鳴り響いていた。

何というか……ついてない。

こんな天気の中でお客さんが来てくれるのかと考えれば、限りなく『No』に近い。それでも尚、千歌ちゃんはやる気満々な様子。

「よしっ！それじゃあ曜ちゃんが私たちに作ってくれた衣装、早く着替えよ！」

「そうだね！もうそろそろライブの時間だし！」

「う、うん。分かったわ」

千歌ちゃんは外の天気のことなんて考えなくて、ただライブをすることにやる気に満ち溢れていた。

「じゃあ私から着替えてくるね！」

「うん！サイズが合わなかったら……ごめんね？」

「大丈夫大丈夫！多分着れると思うから！」

カーテンで仕切られたスペースを使って、1人ずつそこで衣装に着替える。

まず最初には千歌ちゃんが先陣を切って、私が一生懸命作った衣装に着替えていった。

私たちがいるのは体育館のステージの裏側。

雨と湿気のせいで舞台裏の空気はとてもジメジメしてて、湿った木の匂いが鼻をつつく。ライブが始まるまでは、私たちはここでライブの準備をする。

それに今日は、凄い助っ人もついてくれる。

クラスメイトのヨシミちゃん、イツキちゃん、ムツちゃんの3人が、私たちのためにライブの手助けをしてくれるんだ。

イヤホンマイクとかスポットライトとか、本格的なライブのように私たちのために機材を準備してくれて、彼女たちには本当に感謝してる。

駅で行ってたチラシ配りにも積極的に参加してくれて、千歌ちゃんもすつごく喜んでた。

「ジャジャーン♪着替え終わったよ〜♪」

そうしてるうちに、千歌ちゃんは着替え終わる。

カーテンを思いっきり開けて、右手をピースサインにして可愛くポーズを取ってく
る。

私は似合っているとしか思いようがないくらい、衣装を着ていた千歌ちゃんの姿がとて
も可愛かった。

「わあ！千歌ちゃん凄く似合ってる！可愛いよ！」

「本当？えへへ…嬉しいな…／／／」

千歌ちゃんは照れながら、その場で衣装のスカートを翻すように一回転してみせる。
衣装の特徴は袖がなく、肩を露出させたノースリーブが特徴。

千歌ちゃんは丸見えの肩を気にする様子もない。千歌ちゃんの衣装の色はオレンジ
色。みかんが千歌ちゃんは大好きだから、その色に合わせてみた。

特に衣装の問題はなさそう。頑張って作った甲斐があったと、私は心の中でホツとし
た。

「じゃあ次は梨子ちゃんね！」

「えっ!?わ…私!?!」

「私は最後でいいから、さっ…早く早く！」

「わっ！分かったからあ…」

次に着替えるのは梨子ちゃん。

梨子ちゃんは私や千歌ちゃんに背中を押しされ、押し込まれる形で着替える場所へと足を運ぶ。

カーテンを閉め、梨子ちゃんは制服から衣装に着替えるときに、とても恥ずかしそうな声がカーテンの向こう側から漏れて聞こえてくる。

「うう…スカート短い…／＼／」

「大丈夫だよ梨子ちゃん！*μ* sのライブも、最初はこんな感じだったからー！」

「そ…そういう問題じゃないのっ！／＼／」

梨子ちゃんはスカートについてで千歌ちゃんとそんなやり取りをしながらも、梨子ちゃんは恥ずかしがらながら衣装に着替え終わる。

「お…終わったわよ…／＼／」

「終わった？じゃあカーテン開けるね〜！」

千歌ちゃんの合図と一緒にカーテンが開かれると、もじもじと体を縮こませ、恥ずかしそうにスカートの前の部分の裾を摘んで佇んでいた。

梨子ちゃんの身に纏っている衣装の色はピンク。梨子ちゃんの名前の通り、“桜”色にしてみた。

衣装の特徴は千歌ちゃんと同じで肩は露出させたノースリーブ。梨子ちゃんは顔を赤く染めて、千歌ちゃんと違ってノースリーブが気になつてる様子。

「梨子ちゃん可愛い！凄く似合ってるよ！」

「そ…：そうかな？でもスカートがちよつと短くて、ちよつと私…：恥ずかしいかも…：」
 〃〃

千歌ちゃんは梨子ちゃんに可愛いとべた褒めする。

確かに衣装を着た梨子ちゃんは可愛かった。

見た目が全く…：全然違う。いつも綺麗とか美人とか言われたりしている梨子ちゃんだけど、今日はそれに『可愛い』が追加されて、今まで見たことのない梨子ちゃんを発

見ることが出来た。

それでこの時、もっと可愛い衣装を作って、もっとたくさん可愛い梨子ちゃんを見たいなって、私はそう思うようになったのである。

「じゃあ最後は私だね！」

「うん！ 曜ちゃんが着替えてる間、見に来てくれた人たちに挨拶する言葉とか考えてるから！」

「分かった！ じゃあ着替えてくるね！」

それから最後に私が衣装に着替える。

カーテンを閉めたあと、素早く制服を脱いでいく。こういうのはいつも、警察官とか自分で作って制服を着てたりしてるから、いつの間にかこういうのが慣れちゃってるんだよね。

だけど私にとってちよつと新鮮だった。

「うわあ。なんか新鮮な気分……」

良い意味で新鮮な気分。

警察官とか、船員の制服とかを自着てきた私だけど、こんな可愛くてフリフリなスカート^{カートの衣装を着たのは本当に初めてだった。}

「似合ってる…かな…?」

それ故に、自分が似合ってるのかどうか確かめようと、全身が映る鏡の前に立ってみる。

しばらく自分が作った衣装に不備がないか確かめたあとで、スカートの先に摘んで可愛くポーピングしたり、スカートをフワツと翻すようにその場で一回転してみたりする。

…可愛い。

自分で言うのもあれだけど、自分でも衣装を着てる姿がとても可愛いと思ってしまうていた。

ただこれを…衣装を着ている私の姿を、彼に見せてあげられなかったのは残念だけど

…。

…って！何考えてるの私!?!
やだやだっ！忘れろ忘れろ!?!
///
///

「曜ちゃん？終わった〜？」

「あつ、う…うん！ちよつと待ってて！」

自分が変な妄想をしていたことを忘れようと、私は頭を横に振って振り払っている
と、カーテンの向こう側から千歌ちゃんは私に声をかけてくる。

私の着替えはあと手袋だったり、髪にアクセサリーを付けるだけだから、私は千
歌ちゃんに待ってと言ひ、急いで衣装で身に付ける手袋をはめて、アクセサリーなども
身に付ける。

「これで……よしっ！」

それから着替え終わってカーテンを開けると、私が着替え終わるのを待っていた千歌
ちゃんと梨子ちゃんの姿があった。

「どう？似合ってるかな？」

だから私は試しに尋ねてみる。2人が私の衣装を見てどんな感想が返ってくるのか、私は聞かずにはいられなかった。

それで千歌ちゃんから話してくる。

「うん！曜ちゃん凄く似合ってるよ！」

「本当!？」

「ええ！私も似合ってると思うわよ！」

「梨子ちゃん！へへっ…ありがとう2人とも！」

『可愛い』

2人の感想を聞いた私は、その言葉に思わず口角が上がってしまう。似合ってるって2人から言われたのが、私はとても嬉しかった。これで私たち3人はそれぞれ着替え終わった。

それで頭をポリポリと掻いて、照れている私を見つめていた千歌ちゃんは、それから私と梨子ちゃんに向かって言ってくる。

「じゃあそろそろ時間だよね？」

「ええ、そろそろだと思う」

ライブの時間がやって来たことに対して千歌ちゃんがそう話すと、途端に空気が変わる。さっきまでの穏やかな雰囲気はなくなって、ピリピリと張りつめたような空気が漂う。

そんな中で私たち3人は円陣を組むように丸くなって、千歌ちゃんは円陣をどうしようか尋ねてくる。

「じゃあどうしよつか？」

「3人で右手を前に出して重ね合わせて、みんなで掛け声をかけて気合いでも入れてみる？」

「うーん…それはそれで変…かな？」

千歌ちゃんの質問に私は意見を出すと、梨子ちゃんにツツコミを入れられて拒否されてしまう。

そしたら今度は千歌ちゃんが意見を出して来る。

「じゃあ手を繋ごうよー！」

「手を…繋ぐ?」

「こーやってお互いに手を繋いで…」

千歌ちゃんの手を繋ごうという意見に流されるがまま、それに従って私は左手を梨子ちゃんの右手と繋ぎ、右手を千歌ちゃんの左手と繋ぐ。

輪になるように私たちは手を繋いでると、心から何か…暖かい気分になっていく感じがしてくる。手から伝わってくる温もりが、私たちの心を温めてくれるような感覚が、私たちの体に伝わってくる。

「ねっ? 私…暖かくて好き…」

「本当だ。暖かい…」

梨子ちゃんも同じように感じているのか、にっこりと笑顔を見せていた。それで千歌ちゃんも…一緒に笑っていた。

「雨…だね…」

私たちは手を繋いだまま、目を瞑って外の音に耳を傾けていた。静まり返った空間のなかで、雨の音を聞いた千歌ちゃんはそう呟く。

私も心配していることを口に出して呟く。

「みんな…来てくれるかな？」

梨子ちゃんは不安に思う事を口に出して呟く。

「もし…来てくれなかったら…?」

「じゃあここでやめて終わりにする?」

そしたら千歌ちゃんの梨子ちゃんの言葉に対してツツコミが入り、私たち3人に笑顔

がこぼれる。

「ふふふ……ふふつ……」

「あはははっ……ははっ……」

「ははは……ははっ……」

3人で笑い合い、場の空気が和んだところで、千歌ちゃんは私と梨子ちゃんに向かって強く言い放つ。

「さあ、行こう！今……全力で輝こう！」

「うん！頑張ろう！」

「ええ！精一杯やりましょう！」

ライブを成功させるため、私も梨子ちゃんも強い気持ちを胸に秘めて言い放ち、3人は右手を前に出して円陣を組む。

それで3人で顔を見合わせてから、一斉にグループの名前を叫んで円陣を切った。

「うん！頑張るね！」

「ヨシミちゃんもありがとうね！わざわざ私たちのライブの手伝いをしてくれて……」
「いいのいいの。3人が頑張ってるのを見てたら、手伝わずにはいられなくて！」

ヨシミちゃんに感謝しながら私たちは耳にイヤホンマイクをセットする。声の音量はすでに調整済みらしく、こんな細かい調整までしてくれるヨシミちゃんたちには本当に感謝だ。

「じゃあ頑張つてね！」

「うんっ！ありがとうっ！」

ヨシミちゃんは私たちにエールを送り、そのまま自分の役割を担う持ち場へと戻って行った。

「じゃあ手を繋ごう」

「えっ!?!ここでも!?!」

「大丈夫。恥ずかしくないから！」

クラスメイトの友達からエールを送られたことに、千歌ちゃんのやる気がグンと上がる。

私も梨子ちゃんも気持ちは同じだった。

なんとしてもライブを成功させたい。体育館を満員にしてライブをすることで、鞠莉さんに部として認めてもらえるんだから。

その気持ちを胸に秘め、3人は横並びに手を繋ぐ。

左から私、千歌ちゃん、梨子ちゃんと横一列に並んで手を繋ぎ、目を瞑ってステージに立つ。

そしてしばらくして、舞台の幕が上がる。

暗かったステージに徐々に明かりが差し込んできて、幕が上限まで上がったのと同時に、私たちは一斉に目を開けて体育館の景色を見渡す。

その景色を見た私たちは、愕然としてしまった。

パチパチパチパチパチ！

「えっ…?」

隣にいる千歌ちゃんはその景色を見て、思わずそんな落胆の声漏れてしまっていた。

この体育館に集まった人は、うちの生徒や他の学校の生徒を合わせても約10人ほどしかいなかった。

中には梨子ちゃんがチラシを渡した、変な服装した女性がいる。集まっているところから離れた場所に鞠莉さんがいて、体育館の入り口にはルビィちゃんと花丸ちゃんの2人が私たちを見つめていた。

現実には：残酷だった。

私も梨子ちゃんもこうなることに驚きを隠せなくて、暗い表情で落ち込んでしまう。駅であんなにライブの宣伝をしても、来てくれる人はごく僅かな人たちしかないんだと、私たちはそれを痛感させられた。

すると千歌ちゃんは顔を上げ、私と梨子ちゃんより一歩前に踏み出したあとに、集まってくれた人たちに対して挨拶を始めた。

そのときの表情は、やると決めた時の顔だった。

「皆さんこんにちは！えつと…私たちは、スクールアイドルの『Aquours』です！」

最初に千歌ちゃんは自分たちの自己紹介をする。

私と梨子ちゃんも千歌ちゃんの勇気に腹をくくり、私たちも一步前に出て話をする。

「私たちはその輝きと！」

「諦めない気持ちと！」

「信じる力に憧れ、スクールアイドルを始めました！目標は、スクールアイドル…μ's
です！」

千歌ちゃんが目標にしている『μ's』のようになりたいと、約10人ほどの見に来てくれている人たちの前で、千歌ちゃんは力強く話す。

そのあとで私たちは、ライブの準備をする。

曲が始まる時の最初の位置に着き、千歌ちゃんは胸を張って見に来てくれている人たちに言い張った。

私たちの歌を…聞いてくださいってね。

「聞いてください!!」

私たちの歌を聴いてくださいと、気持ちを前面に押しだした千歌ちゃんの声とともに、曲のイントロが流れ始めて私たちは歌い始めた。

『きくらくりとくきめくきがく♪』

『うまくれたくんだとく♪』

『気づいたわくけはく♪』

『目の前のきくみくだくつてくこくとさく♪』

『ダイスキだったらダイジョウブ♪』

それが、私たちが歌っている曲の名前である。

『ララララララララ♪』

『ララララララララ♪』

歌を歌いながら、私たちが一生懸命やってきたダンスの練習の成果を、みんなの前で披露した。

10人ほどの少ない人数しか見てくれる人はいないけど、10人も私たちのライブを見てくれている人がいるから、私たちは全力で歌い、全力で踊った。

曲は順調に進んでいた。

歌詞の言い間違いも私を含めてもないし、ダンスによる大きなミスもない。

イヤホンマイクを付けているおかげで、私たちの声は体育館中に響き渡っている。集まっていた人たちも目を輝かせて私たちを見つめていた。

このまま順調にいけば、ライブは成功する。

そう……私たちは思っていた。

千歌ちゃんが一人で歌って、それからサビに入ろうとした瞬間、事件は起きてしまった。

ピカッ！ゴロゴロゴロツ！

いきなりの落雷だった。

そしてそのせいで体育館は停電してしまう。

流れていた曲も途中で途切れ、私たちを照らしていたスポットライトさえも消えてしまった。

暗いステージのなかで、私たちは不安ばかりでその場で立ち尽くしていた。

「どうすれば……?」

「一体、どうしたら……!」

不安に駆られ、私と梨子ちゃんは眩く。

すると千歌ちゃんは曲もないまま歌い出す。

ただ、その千歌ちゃんの声はとてもか弱かった。

「気持ちがあつくながかりそうなくんだ」

「知らないことばかり、なにもかくもが」

「それでも きたいでく足がく軽くいよ」

でも千歌ちゃんが歌っていたからと、私や梨子ちゃんも一緒に後に続くように歌い続ける。

けれども曲が流れているわけでもなく、私たちは歌っていても楽しくもないし、明るくもない。

だから場の空気に気圧され、次第に声は小さくなってしまふ。そしてやがて千歌ちゃんを始め、私たちは歌わなくなってしまった。

「う……うう……」

「千歌……ちゃん……」

今まで頑張つて来たことが、ここで全て無駄になってしまったような感覚が私にはあった。

梨子ちゃんもきつと……同じ考えだと思う。

千歌ちゃん肩を小刻みに震わせながら、両手を拳にしてギュツと握り締めている。彼女の目には涙が浮かべ、小さくすすり泣きをしている。

千歌ちゃんは、とても悔しがっていた。

ライブは失敗になって、私たちのスクールアイドル活動を鞠莉さんに受け入れてもらえずに、そのままグループは解散。

そんな最悪な結末を、ここで迎えてしまったことに千歌ちゃんは悔しさを抑えきれなくなっていた。

「千歌ちゃん……」

今にもここで大泣きしてしまいそうな千歌ちゃんのもとへ、私は一歩前へ歩み出す。

すると次の瞬間

バタンツ！

体育館の入り口が突如として開かれ、体育館に眩しい光が差し込んでくる。

すると誰かが千歌ちゃんに声をかける。

「バカ千歌〜!!」

「えっ!？」

「あんた開始時間、間違えたでしょ!!」

その声を頼りに入り口の方に私たちは視線を送ると、なんと入り口にはレインコート
を羽織った美渡さんが姿があつたのだ。

「お…お姉ちゃん!!」

右手の親指を立ててグットサインをしてみせる美渡さん。一体この状況で何が起
こってるのか、私たちは全く分からなかった。

するとどこかからか声が聞こえてくる。

「ここが会場かな？」

「体育館…暗い!」

「あつ、もうステージに出てるよ!」

「本当だ!早くライブしないかな？」

体育館はまだ暗いままだったから、なんでこんなに人の声がたくさんするんだろうと、私たち3人は疑問に思うばかりだった。

そして長らく消えていた電気が復旧すると、私たちは目の前に現れた景色に驚きを隠せなかった。

「…っ!?」…これって……」

「みんな…私たちのために……?」

体育館がライトで明るくなると同時に、体育館にはたくさんの人が私たちを見つめていた。

沼津の高校生や大人もたくさんいる。この体育館に入り切らない程の人がたくさんいて、みんなは私たちのライブを見に来てくれていた。

この光景を見た私たちは言葉を失っていた。

体育館に収まらない程の人たちが、私たちのライブを見に来てくれるとは思ってもいなかったから。

すると美渡さんはステージの前まで来て、千歌ちゃんに向かっていつもの言葉を言い放つ。

「バカ千歌！」

「お姉ちゃん……」

「何ぼさつとしてるの！ さつさとライブを始めなさい！ みんなあんたたちのためのライブを見たいつて来てくれてるんだから！」

「……っ！ うん！」

美渡さんに指摘された千歌ちゃんはその光景を見たあとで流していた涙を拭う。たぐさんの人たちが見に来てくれたことが嬉しくなっていた。

「私……バカ千歌だ……」

それから千歌ちゃんは自分を罵倒し、発破をかけてやる気を出すと、私と梨子ちゃんに言う。

「曜ちゃん！ 梨子ちゃん！」

「うん！ もう一回やり直そう！」

「みんなのために、歌を届けましょう！」

「うん！みなさん！私たちの歌を、どうか最後まで聞いてってください！」

パチパチパチパチッ！

拍手にとともに私たちはもう一度、私たち3人は来てくれた人たちのために最初からライブをした。

~~~~~※※※~~~~~

曲の途中から最初に戻って、もう一回みんなのためにライブをするのって変かもしれない。

だけど、私たちのためにライブを見に来てくれた人たちに、ライブ途中から見せるのってとても失礼だし、私たちにとってもとても勿体無かった。

だから私たちは最初から最後まで見せた。

ライブの日までにやってきた、今までの練習の成果を全てぶつけるように、私たちは歌って踊った。

『ダイスキ〜があれば〜♪』

『ダ〜イジヨ〜ウブさ〜♪』

最後まで歌いきり、しばらくの静寂に包まれる。

ステージ上で最後のポーズをし、私たち3人は肩で息をしながら、ライブを精一杯にやり遂げることが出来たと実感していた。

パチパチパチパチッ！

黄色い歓声とともに、最高の拍手が送られる。

ただライブ自体は成功したとは思わない。それは、一歩前に出てみんなに向かって話をしようとする千歌ちゃんも同じだった。

「彼女たちは…言いました！」

息を整えながら、千歌ちゃんは話をする。

「スクールアイドルは、これからも広がっていく。どこまでだつても行ける。そして繋がっていく…どんな夢だつて叶えられると！」

以前に私に話してくれたことをみんなにも向かって千歌ちゃんは話をする。μ's  
が話していた今の言葉を千歌ちゃんは胸を張って伝える。

ライブ自体は失敗に終わってしまったけれど、私もこれだけは言えると思う。

私たち3人は、輝くことができたと思う。

するとその時、人ごみのなかを突っ切ってステージに立つ私たちの前に、とある人物が現れる。

「あなたたち!」

「あつ、ダイヤさん!」

目の前に現れた人物はダイヤさん。

両腕を前で組んで、私たちに向かって今日のライブの成功について話をする。

その話は、私たちが思っていたことと同じだった。

「いいですか?これは今までのスクールアイドルの努力と、街の人たちの善意があつての成功ですわ!決して…あなたたちの努力が実つての成功ではありません!勘違いしないように…!」

このライブの成功は、街の人たち集まってくれたおかげであつて、私たちの努力で集まってくれたわけじゃない。私たちの実力はまだまだ未熟。

生まれたてのひよこのようなものだった。

でも今日のライブで、私や梨子ちゃん、そして千歌ちゃんもそれを理解することが出来た。

千歌ちゃんはダイヤさんに臆することなく、彼女はダイヤさんに向かって言い放った。

「分かっています！」

「……………」

「でも…でもただ見てるだけじゃ始まらないって！上手く言葉では言えないけど、今しかない『瞬間』だから！だから……………」

その千歌ちゃんの言葉とともに、私と梨子ちゃんは千歌ちゃんのそばに寄り添うように近づく。

「千歌ちゃん！」

「千歌ちゃんっ！」

「うん！」



そして手を取り合い、私たちは叫んだ。

「「輝きたい!!」」

いつ…そんな風になれるかは分からない。だけど、千歌ちゃんと言った今しかない瞬間っていうのは、本当に今しかないのかもしれないって思った。

そんな私たちの言葉を聞いていた人たちは、私たちに対して頑張ってねと、まるで応援してくれているようで、私たちに拍手を送ってくれた。

千歌ちゃんも満足そうに笑顔を浮かべて、私たちのライブはなんとか無事に終わりを告げた。

今回のライブは、いい教訓になったと思う。

最初から上手いくことなんてないんだって…。

今まで過ごしてきた時間も決して無駄じゃないんだってことが、私たちはそれを知ることが出来た。

これで鞠莉さんがどう決断するのか。

私たちをスクールアイドル“部”として認めてもらえるのか、それとも虚しく解散させられるのか。

その2つの行方に、私たちは知る由もなかった。

私たちはふと体育館の窓を見ると、空から明かりが差し込み、雲の切れ間から青空が顔を出す。

そして太陽の暖かい日差しが、私たちの浦の星を、眩しく照らしていたのであった。

## # 1 5 反省会

翌日の、いつもの朝

今日の彼女はいつもより元気そうで、且つまたいつものように変装をして俺の部屋にやってきた。

「遼くん！おはヨソロー！」

「おはよう…って、また変装してきたのかよ」

「えへへっ♪」

今月でもう4回目だ。

最初は警察官、次は船の船員、その次は飛行機のキャビンアテンダントと、前回まではそんな服装で俺の部屋に押しかけてやってきた曜だ。

今まで仕事で着るような服装ばかりを着ていた曜だったが、今回は打って変わり、それとはかけ離れた服装を身に纏っていた。

「でも曜、なんかいつもと違わないか？」

「へへっ！気がついた？」

いつもと何かが違うことに気づくと、曜はそれに気づいてもらえて嬉しそうな笑みを浮かべる。

曜の着ている服装は水色だ。何とも大胆に肩を露出させて、彼女の引き締まった太ももの全部が丸見えしそうなくらいに短いスカートを履いている。

胸と頭に水色のリボンをつけ、いつもとは違う雰囲気を漂わせていた。

「どう遼くん、似合ってるかな？」

「えっ？あつ……」

俺は曜の着ている服装に見とれていた。

いつもなら元気澆刺に、敬礼して『ヨーソロー！』って言うてくるはずなんだが、今

日は何も言わずにその場で俺に見せるように一回転する。

今日の曜は、『私を見て?』と心に訴えかけているようだった。

それと同時に、彼女はどこか恥ずかしそうだった。

何に對してかは、なんとなく分かる。

俺だって…こんな曜の姿を目の当たりにするのは、人生で初めてなのだから。

「うん…似合ってる…////」

「ほ…本当?」

「ああ、凄く可愛いよ。曜は…」

「……………////」

感想を言うこつちも恥ずかしくなってくる。

曜は俺に言われた感想を嬉しそうに聞いていた。

『やった!』と心のどこかでそう感じていて、拳を握って小さくガッツポーズをしていた。

そんな彼女に、俺は今日の予定を尋ねる。

「そ…そういうえば曜。今日は千歌と梨子と3人で、ライブの反省会をするんじゃないかったのか？」

「う…うん、そうなんだ！あ…あはは…」

どうして曜に今日の予定のことを尋ねたのかというと、今日の曜には予定がある。

その予定というのは、千歌の家でライブの反省会をするのだそうだ。

それでなんで俺がそんなこと？ってなると思うんだけど、俺は3人のライブを間近に見ていない。

というよりか、俺は部活があって行けなかった。

だからあれだよ…3人にライブどうだったみたいなきな感想を聞きに行きたいわけ。

「遼くんも来る？千歌ちゃんってば、遼くんにたくさん話したいことがあるんだって！」

「本当か？ただの自慢話なんじゃないのか？」

「違うよ！でも…意外とそうかも…」

千歌だつたら言わなくもないからな。

曜も流石にそう考えてしまうのも無理ないよ。

だって千歌は何かが出来ると、すぐ喜んですぐ人に自慢するやつだからな。俺や曜に對してもそう。

『私出来たよ！凄いでしょ!?!』

そう言つて胸を張つてドヤ顔をかまし続けてきたから、今回もきつとそうなんだろうな。つて、俺は頭の中でそう考える。

とりあえず俺から話を切り出そうとしていたところを、逆に曜が話を持ちかけてきてくれたので、俺はその話に乗つて、千歌たちのライブの反省会に参加することにした。

「まあとりあえず、俺もそのライブの反省会とやらに参加するよ。実際…どんなライブだったか話とか聞いて見たいからさ」

「本当!?!じゃあ千歌ちゃんに連絡するね!」

「おう。しとけしとけ」

俺も反省会に参加すると、曜はカバンからスマホを取り出し、千歌にメールで連絡をする。

サツサツと慣れた手つきで文字を打ち、風の如くといわんばかりにメールを送信する。

「どう？凄いでしょ!?!」

「いや…何が凄いのか分からない」

なぜか自分のスマホを見せつけ、意味不明にドヤ顔をしてきたから俺はジト目でそう言った。

その言葉に曜は『ガクン!』と表情を驚かせ、酷いという感じに困った表情をしていた。

理由は簡単、面白くないからだ。

携帯で早く文字を打ってメールを送信なんて誰でも出来ることよ。だからドヤ顔されても驚かない。

凄いでしょ?と言われても凄いは思わないよ。

ただ俺が目止まったのは、曜の右手に持っている水色のスマホだ。それを見るのは初めてで、曜ってそんなスマホ持ってたか?と、ふとそう思ったので俺は彼女に尋ねる。



「でも曜、そのスマホどうしたんだ？」

「あ……これ？これは進級祝い！2年生になった進級の祝いで買ってもらったんだ！」

彼女は買ってもらったその当時のことを思い浮かべながら話す。その表情は、いつも見てきた曜の彼女らしい元気で明るい笑顔だった。

曜のスマホはピッカピカに綺麗で、画面も大きい。見る限りもしかしたら最新機種かもしれない。

「へえ……見せてくれよ」

「うん！いいよ！」

曜は俺の願いに快く受け入れてくれて、手渡さずとも俺の目の前に自分のスマホを見せてくれた。

ただ……それだけじゃあ、つまらないよね。

「よつと！曜のスマホもくらい！」

「あつ！私のスマホ〜！」

自慢気に見せつけてくる曜のスマホを、俺はひったくるように取り上げる。

自分の大事なスマホを、俺に取り上げられた曜は、スマホをすぐさま取り返そうと俺に迫ってくる。

「遼くん！返してよ〜！」

「や〜だね〜！」

だが俺はスマホを持った右手を高々と掲げ、曜の手の届かない、ジャンプしても届かないところにスマホを高く持ち上げていた。

だから曜がいくら頑張っても、自分のスマホを取り返すことすら、手に届かないこともままならなかった。

「う〜ん！う〜ん〜っ！」

「ははっ、俺から見ると曜はおもちゃを取り上げられて返してよと泣き迫ってくる子供みたいだな」

「もう〜！私でいじるのやめてよ〜！」

いや、子供っぽいから面白い。

曜もたまたま千歌みたいに子供っぽくなる。だから何かしらでいじってみると、曜も千歌と同じように子供みたいにがむしやらになるのだ。

それでスマホを取り上げてずっとワーワーやっているが、いづれ彼女側から飽きてしまおうと思った俺は、今度はスマホの中身を覗いてみようかな。

「え〜と、ロックを解除するには暗証番号が必要なのか。う〜ん…そうだな〜」  
「…っ!?だめ!それだけはだめ〜!」

曜は俺にスマホのロックを解除されるのはどうしてもダメらしい。このスマホの中には何が入っているのか、とても気になる。

ムニツ♪

それで彼女はわざとではないと思うけど、俺の胸のあたりに彼女の胸が当たってる。しかも可愛い服装のあのままでだ。

「返して！返してよ〜！」

しかも無自覚というおまけ付き。曜は俺に胸を当てて密着する形で、自分のスマホを何としてでも取り返そうとしてきた。

そんな彼女の胸の柔らかさの感触を味わい、心に湧き上がる興奮を抑え、俺は彼女がスマホに設定しているであろう暗証番号を打ち込んだ。

『0417』つと……。

この4つの番号は、彼女に取って大切な番号だ。

彼女はスマホのロックを解除するには、きつとこの番号かもしれないと思つた俺は、曜のスマホにその番号を打ち込むと、たくさんのアプリが並んだ画面に飛ぶことが出来た。

つまり、ロックを解除出来たわけだ。

「あつ、ロック解除できた」

「えっ!? 解除出来ちゃったの!?!」

「ああ…: すんなり解除したよ」

「やだっ! だめ〜!」

どうやら『0417』がこのスマホを解除するための番号らしい。うん…: いい情報を得た気分だ。

「ほい、スマホは返す」

「えっ?」

「なんだ? 返して欲しかったんだろ?」

俺はそれで彼女にスマホを返した。

本当なら、曜が隠しているかもしれない情報を見てみたかった。だが本人が目の前にいるため、今日はここまですておくことにした。

この続きは、彼女がいない時にしよう。

「もしや…: 俺に見られてもいいモノがスマホにでも入ってるのか? あるなら見せてくれ

よ」

「なっ?!ち…違うよ馬鹿!／＼／＼」

曜は見られてまずいものは隠してないと言い張る。だが曜は顔を真っ赤にするので、何かを隠していると考えられる。

それが何なのか、楽しみで仕方ない。

「じゃあ早くその服装、別のに着替えて千歌の家に行くぞ。集合時間とか決まってるんだろ?」

「うん!千歌ちゃんの家には10時!」

それから俺は曜に千歌の家に集合する時間を尋ねると、向こうに10時集合だと言  
う。

俺は部屋にある電波時計を見ると、時計の短い針は9と10の間にあり、長い針は5  
と6の間にある。

つまり時間は、大体午前の9時28分。

あと30分しかしないってわけだ。

「あと30分しかねえじゃねえか!!」

「うわあ!?! 本当だ!!」

「馬鹿野郎〜!」

俺と曜は急いで千歌の家に向かう準備をした。

曜に関してはちゃんとした服装に着替えたり、俺に関しては顔を洗ったりして、千歌の家に行くために約10分ほど準備に費やしてしまった。

「忘れてものは?」

「ないよ!..じゃあ遼くん!急ごう!」

「ああ!」

それで俺たちは自転車に向かう。

曜を俺の後ろに乗せ、この間のように自転車で2人乗りをして千歌の家に向かうことにした。

「じゃあ出発！」

「猛烈に全速前進であります！」

ただ天気雲ひとつない快晴。

太陽の暑さに蝕まれ、千歌の家に着く頃には俺は干からびたミイラにもなっているかもな。

~~~~~※※※~~~~~


「お疲れ様〜!」

「お疲れ様〜!」

3人はライブの成功を祝って乾杯する。

ガラスのコップを陽気にカランツ!と音を立てて、3人はオレンジジュースを一気に飲み干す。

「ぶはあ! うま〜い!!」

大好物であるオレンジジュースを飲み干した千歌は、気分爽快に笑顔を浮かべていた。

テーブルを囲むように座っていた曜と梨子も、オレンジジュースを飲み干してライブの成功の余韻に浸っている表情を見せていた。

「あ” あ”〜! 疲れた〜!」

ただ俺は、今は千歌のベットで寝ている。

今日の天気と、2人乗りによって重さが倍増にし、その中で俺は自転車を漕いだおかげで、自分の体力は限りなく0%に近いほどに奪われた。

曜に『頑張れ遼くん！』って何度も何度もエールを送ってくれたおかげで着くことはできたけど、もう動ける力は残っていない。

だから今は疲れ切った体を休ませようとして、勝手にだが千歌のベットに横になっ
ているのだ。

「もう遼くん！千歌のベットに寝ないでよ！」

「いいだろ別に！減るもんじゃないんだから！」

彼女には注意されるけど、決してそれでやめたりはしない。体に残る疲れが十分に取るまでは、この千歌のベットで休憩するつもりだ。

「それよりも、ライブの話聞かせてくれよ。初のライブは…結構大変だったじゃないか」

「ええ、結構大変だったわ」

「雨が降ってて雷も鳴ってて、あんなに宣伝したのにお客さんが来ないかもしれない

て思ってた」

梨子と曜は、その時に思っていたことを口に出して話してくれた。雨が降ったり雷が鳴ったりしていたのは、俺が部活中にも降ったり鳴ったりしたいから知っている。

「そうだな。俺の方も雨は降ってたから、部活中そっちの方がすごく心配だったよ」

だから心配ではあった。千歌たちの初めてのライブが失敗するんじゃないかってね。天候は千歌たちの門出を祝ってくれないのかって思ってた。

でも心配はいらなかったようだった。

「でも美渡さんを始め、みんな千歌たちのライブを見に来てくれたんだってな？」

「うん！凄かったよね！」

「うんっ！体育館に人が入らないくらいたくさんいてね、とにかく凄かったんだ！」

やっぱり美渡さんに対してあの時にお願いしておいて良かったかもしれない。あのお願いをしたから、美渡さんは妹のために動いてくれたに違いない。

だから妹のライブの成功のために人を集めて来てくれた美渡さんには、感謝しないと
な。

「それよりも私つてば初めてのライブだったから、心臓がバツクバクで緊張してたんだ
よ〜！」

「千歌ちゃんも緊張してたんだ。意外ね」
「私だつて緊張するよ〜！」

千歌はお正月によく食べるお餅みたいに、プクツと頬を膨らませては梨子に対して怒
る。

ただ梨子も、千歌と同じだったらしい。

梨子は得意としているピアノのコンクールとは全くの別物だと感じていたらしく、彼
女は凄く緊張していた面持ちだったようだ。

「私も凄く緊張してた。ピアノのコンクールの時と違って、目の前でピアノじゃなく
て、歌とダンスを披露することに凄く緊張してた」

「私もそうだった。水泳の高飛び込みは1人でやるものだけど、スクールアイドルは仲

間と歌ったり、息を合わせて踊ったりするから、上手く出来るかなって、私も凄く緊張してた」

曜に関して、初めての経験に凄く緊張していた事を口に出して話してくれた。

俺は正直、2人の話には驚いた。

曜は水泳の大きな大会に出ているし、梨子はピアノのコンクールに出ている。だから2人は人前に出たとしても緊張とかは慣れていると思っていた。

でも2人は人間だ。初めての経験には、やはり緊張してしまうものなのかもしれない。

「やっぱ初めては緊張するよな……」

「遼くんもないの？緊張したこと……」

「それはまあ、なくもない……かな？」

それで千歌からそう質問された俺は、初めての経験で凄く緊張した記憶を思い出そうとする。

凄く緊張したことといえば、多分去年になる。

「冬の選手権かな？まだ一つ上の先輩が数人くらい残っていたときだと思う」

「あつ、もしかして遼くんの話してることって前に私に話してた初めて試合に出て得点決めた話？」

「よく覚えてるな。曜のその通りだよ」

全くもって、曜が話してくれた通りである。

「3年生の先輩たちがいる中で、大事な試合に自分が初めて出ることもそうだけど、自分が出てもいいのかって思ってたりにして、凄く緊張してたんだ」

「遼くんも緊張していたのね…」

「うん、緊張してた」

梨子の言う通り、俺は凄く緊張していた。

試合の途中から出場。初めて高校生として試合に出だし、ましてや公式戦。緊張しないわけがない。

でもその緊張をほぐしてくれたのは、あの人だ。

「あの人がいなかったら、俺はこうしてチームの一員になれてないし、今の俺もいないと思う」

「あの人？どんな人なの…その人？」

梨子は首を傾げて「あの人」について尋ねてくる。

千歌と曜の2人も梨子と同じように、その人について話を聞いたようにテーブルに身を乗り出しながらこちらを見つめてくる。

それで2人がテーブルに身を乗り出してのせいで、千歌と曜のおっぱいがフニユツといい感じに潰れててなんか凄くエロいな…。

なんて変な考えはさておき、俺は1つ深呼吸をし、心を落ち着かせて3人に話した。

「名前は、逢沢真司先輩。俺が所属するサッカー部の当時のキャプテンだった人だ」

「キャプテン。とっても良い人だったのね」

「ああ。とっても良い人だったよ」

あの人がいなかったら今の俺はいないし、俺はあの人に感謝しているし、尊敬もして

いる。

あの人はサッカー上手いし参考になる。それに俺が初めてレギュラーメンバーの中に入ったときにも、積極的に声をかけてきてくれて、すぐにレギュラーメンバーの人たちと打ち解けることも出来た。

俺が所属しているサッカー部は、あの人を先頭に部は成り立っていた。ただあの人には……もう会うことが出来ない。

「でも……もうあの人には会えない」

「えっ?ど……どうして会えないの?」

「……………察して?」

「えっ……………あつ」

俺はあの人に会えないとそう考えてしまうだけで、梨子にまで分かってしまうほど表情に出していた。

そう……あの人は交通事故で亡くなった。

しかも県大会の決勝の2日前。全国の舞台に行けるかもしれないと思っていた矢先の出来事だった。

なぜ交通事故なのか？理由はある。

道路に小さい子供が急に飛び出してきて、車は思いつきり急ブレーキをかけても間に合わなかった。

それでその時に、先輩が子供を庇って犠牲に…。

俺はそれを知ったときには、家に帰らないで、誰にも見つかからない場所で一人で泣いていた。

何であの人が犠牲になるんだってね。

「そう……だったのね」

「辛かった……よね？」

「ああ。ごめんな？いきなりこんなこと話して…」

「良いのよ。大丈夫だから……」

梨子と曜は俺に対して、優しく気を遣ってくれていたけれど、彼女たちは、凄く申し訳なさそうな表情で悲しんでいた。

知ってはいけないようなことを知ってしまい、気分も落ち込んでしまっていた。

するとその時の大会について、千歌は尋ねてくる。

「それで遼くん。その時の大会はどうなったの？」

「……………ダメだったよ」

「…っ！そう…なんだ……………」

千歌は『やっぱり』って感じに悲しい表情をして、すぐく申し訳なさそうに顔を下に俯かせる。

そのあとの大会の決勝は、やはり逢沢先輩の交通事故のショックでサッカーどころではなかった。俺もショックが大きすぎて、途中から試合に出ても何も出来なかった。

「ごめんね遼くん。辛い思いさせちゃって…」

お前までそんな申し訳なさそうな顔するなよ。

もう……………仕方のないことなんだ。

今更こんなこと思い出して、あくだこくだ言っても何も始まらない。何をしたとしても、劇的に何かが変わったりなんかしないんだから。

「もういいよ千歌。そんな酷い顔するな」

「遼くん……」

「曜も梨子も！笑顔笑顔！」

「う、うん。あ……あははっ……」

だから俺は、3人を元気付けた。

完全なるお通夜ムードになっているこの雰囲気を、何とかぶち壊してやりたくて、俺は千歌の目の前にあつたみかんと、1つ摘み食いした。

「千歌のみかんもくらいい！」

「ああ！私のみかんく!!!」

悪いな……みかんよ。

3人を元気にさせるための礎になってくれ。

俺は千歌の食べかけだったみかんと食べると、彼女はムキムキでまるで猿みたいに怒り出す。

「何で食べちゃうの〜！」

「小腹が空いたから食べたかっただけ」

「せっかく残してたのに〜！」

彼女の問いかけに、俺は思っていたことを正直に答え、俺は千歌と梨子、曜の表情を伺う。

「まあまあ千歌ちゃん。まだみかんは沢山残ってるんだから、1つくらい食べられても大丈夫よ」

「そうだよ千歌ちゃん。怒らない怒らない」

「うう……私のみかん……」

千歌は俺にみかんを食べられて悔し顔になり、梨子と曜は千歌を宥め、表情は笑顔が溢れていた。

もうさつきまでのお通夜ムードに重苦しかった空気はもう無く、3人の顔には笑顔が溢れかえっていたからとりあえず一安心だ。

「それよりライブの話、もっと聞かせてくれよ！」

「そうだね！私も話したいこと沢山ある！」

「うん！よくしつ！反省会続けるぞ〜！」

「おお〜！」

それから3人は、俺のためにライブにあつた出来事や、当時に考えていた胸中の思いなどを、たくさんのお話を話してくれた。

ライブ後にはダイヤにも言葉をかけられたそう。

『これは今までのスクールアイドルの努力と、街の人たちの善意があつての成功ですわ！！決して……あなたたちの努力が実つての成功ではありません！勘違いしないように……！』

いかにもダイヤらしい言葉だ。

でもそれはまるで……彼女自身も「やってた」みたいな意味深な発言みたいにも聞こえるけど……。

まだ千歌たちもはじめの一步を踏み出し、スクールアイドルも始めたばかりだから、

成長の兆しは十分にあると思う。俺はそう感じている。

「それでね、千歌ちゃんがさあ〜！」

「ああ！曜ちゃんそれ言っちゃダメ〜！／＼／＼」

「あははははっ!!」

小一時間ほど4人で話に花を咲かせていた俺たち。

ライブについての話題は尽きた頃、千歌が思い出したように立ち上がると俺たちに話してくる。

「ねえねえ！今から海に行こうよ！」

「海!?!何で今!?!」

「家でゴロゴロするよりいいでしょ！たまには4人で海で遊ぼうよ！」

突然、海で遊ぼうよと誘ってくる千歌。

家でゴロゴロしてのんびりするより、外で遊ぼうという彼女の願望らしい。

すると曜が嬉しそうに目を輝かせる。

「いいね！千歌ちゃんがそう言うだろうと思って、家から水着持ってきたんだ！」

「よ…曜ちゃん!？」

「お前いつの間にそんなもの持ってきたんだよ」

曜は俺の知らないうちに自分の水着を家から持ってきたらしい。それで俺がいるのにかかわらず、彼女は堂々とその持ってきた水着を見せつける。

シンプルな水色のビキニの水着。

曜はそんなビキニの水着をまざまざと見せつけて、俺を誘ってるのか？

いいや、俺を誘ってるようにしか見えない。

「曜ちゃんが水着持ってきてるなら、私も水着を着て遊ぼうつと！じゃあ梨子ちゃんも水着持ってきて！今から遊ぶから！」

「ええ!?!私の意見もなし!?!」

すると千歌までも水着を着て遊ぼうと言い出す。

そして梨子に対しては、彼女は半ば強制的に水着を着てきてと梨子に命令口調で言い

放った。

どうやら梨子には拒否権はなさそうだから、少し俺は可哀想かなって思っていた。

ただ俺からしてみれば、初めて梨子の水着姿を拝めるといふ至福を味わうことが出来るのだから、全然そうとは思えなかった。

我ながらこの状況、運がいい。

「じゃあ私、もう早速水着に着替えてくる！」

「いってらっしゃい！じゃあ私も水着に着替えてくるから、梨子ちゃんも着替えてきてね！」

「ええ〜！そんなあ……」

梨子があつくり肩を落としている中で、千歌と曜は水着に着替えに部屋を出ていってしまう。

部屋に取り残された梨子は、千歌のベットに座っていた俺をチラッと見てくる。

チラッ チラチラッ

そんなテンポよく俺をチラ見されると、さすがに俺だつて気づかないわけがない。全てを悟つた俺は、梨子に話しかける。

「どうした梨子？ 顔赤くして……」

「べ…別になんでもないわよ…／＼／」

「俺に水着姿を見られるのが恥ずかしいのか？」

「なっ!?! べ…別にそうじゃないから!／＼／」

今の反応と慌てぶりは、どうやら凶星なよう。

梨子は強がつて認めようとしなけれど、顔が赤くなつてる地点で説得力は全くないに等しかった。

それで彼女は立ち上がつて俺に対して背中を向けると、澁々と水着に着替えに部屋を出ていった。

梨子の水着姿を拝めると思っていた俺は、彼女に向かって手を振りながら見送つた。『気をつけて』と、胸中に不敵に笑みを浮かべながら……。

それから俺はというと……

「で…俺はどうすりゃいいの?？」

静かな千歌の部屋に、1人取り残されていた。

水着のパンツさえ持つてきていないのに、俺は一体どうすればいいのって、3人が水着に着替えているとき、そんなことを思っていた。

#16 花丸と、私たちの部室

オラの名前は……あつ。

またオラって言っちゃったずら……。

私の名前は、国木田 花丸。

小さい頃、幼稚園の頃から隅っこで遊んでた私は、あまり目立たない子だった。

マルは運動も苦手で、幼稚園の学芸会では、いつも木の役をやったりしていた。だからだんだんマルはいつも一人で遊ぶようになっていた。

そんなとき、私は本に出会った。本を読んでいくにつれて、次第に本を読むのが大好きになっていった。

それで小学校、中学校と、図書室はいつしかマルの居場所となり、そこで読む本の中

で、いつも空想を膨らませていた。

読み終わった時、ちよつぱり寂しかったけど…。

それでも、本があれば大丈夫だと思つた。

「花丸ちゃ〜ん!!」

今日から月曜日で、学校も始まる。

そんな何気ない朝、今日も彼女がやってくる。

「花丸ちゃ〜ん!」

「あつ、ルビィちゃん!おはよう!」

「うんつ!おはよう!」

その子は黒澤ルビィ。マルの大切な友達。

中学校の時に図書室で初めて彼女と出会つてから、ずっとルビィちゃんとは友達。

一緒に遊んだり、2人で楽しく話したりしていくうちに、マルもルビィちゃんも、お互いにかけてえのない存在として成り立つた。

「はあく、どうなるんだろう?」

「んっ? 何が?」

そんなルビイちゃんは、私の隣でそんな風に意味の分からないことを上の空に言っていたから、マルはルビイちゃんに何のことか尋ねる。
するとルビイちゃんは笑顔になりながら答える。

「A q o u r s のあの 3 人のことだよ!!」

「ああ! スクールアイドルの!」

「うんっ! 3 人が、今日から活動を続けられるのかどうか決まるんだって! お姉ちゃんが言ってたからずっと気になってるんだ……」

ルビイちゃんが気になっているのは、2 年生の 3 人が活動している、 “ A q o u r s ” っていうスクールアイドルが、これから活動を続けられるのかっていう、存続についてのことらしい。

ルビイちゃんはスクールアイドルが大好きだから、そういうことが気にせずにいられ

なかった。

「ああ〜やつぱり気になるう！」

「ル…ルビイちゃん!？」

そしたらルビイちゃんは、私の隣から突然、猛然と走り始める。

隣にいた私もびつくりして、学校が始まる時間まではまだ時間もあるのにと思っていたら、ルビイちゃんは私に向かってこう言ったの。

「花丸ちゃん！早く学校に行こう！ルビイあの3人が凄く気になるから！」

「ええ!?あ…ちよ…ルビイちゃん！」

ルビイちゃんは本当に、スクールアイドルが大好きなんだな〜って思う瞬間だった。

千歌さん達の初めてのライブを見た以降でも、私に対してスクールアイドルのことを楽しそうに話してくれる。

それで私は思うんだ。

昼休み

私たちがいるのは、学校の体育館。

私たちは体育館で行ったライブの成功が認められて、晴れて念願のスクールアイドル部の創立を果たすことが出来た。

それで理事長の鞠莉さんから許可を貰い、体育館の部室の一つを貰うことになった。

「えへへっ♪これでよしっ！」

念願のスクールアイドル部を設立することが出来た千歌ちゃんは大きな脚立に乗って、〃スクールアイドル部〃と書かれた部のプレートをはめ込む。

プレートをはめて、脚立から降りて部のプレートを眺める千歌ちゃんは、思わず表情がにやけてしまうほどにとても嬉しそうだった。

「まさか本当に承認されるなんて…」

「うん、本当にびつくりだよ」

私と梨子ちゃんは、鞠莉さんが本当に約束通りに、部として承認してくれることに驚きだった。

「部員も足りないのにね……」

「そうだね。なんか…ノリノリだったよね…」

部員も5人以上に満たしていないのに、鞠莉さんは何の躊躇いもなく、ノリノリで『承認♪』って判子を押してくれた。

何であんなに私たちの肩を持つてくれるのか、私はとてもそれが気になって仕方なかった。

「なんで私たちの肩を持つてくれるんだろう？」

梨子ちゃんも同じことを考えていたらしい。

「スクールアイドルが好きなんじゃない？」

「私はそれだけじゃないと思うわ」

千歌ちゃんは梨子ちゃんの質問に対して呑気に答えれば、梨子ちゃんは千歌ちゃんが言った答えとは、また別のことを鞠莉さんは考えてるんじゃないかっていう考察らしい。

私も一応、梨子ちゃんと同じ考えなんだけどね…。

鞠莉さんって、何考えてるかわからないし…。

「とにかく、中に入ろう！」

それで千歌ちゃんは鞠莉さんから貰った部室の鍵を取り出し、早速私たちが使う部室の中に入る。

すると部室の中は大変なことになっていた。

「うわっっ！」

「き…汚いわね…」

「うう…」

『なんじゃこりや…』って言いたくなるくらいに、部室の中はたくさんダンボールの山があった。

おまけにプリントなどの書類や、多分図書室にあった本など、まるでこの部室は前から倉庫みたい扱われていたようだった。

「理事長、片付けて使えって言ってたけど…」

「流石これは大変だね…」

「これ全部…!？」

長年倉庫として使われていたからか、ダンボールやプリントにはたくさんホコリも付いている。

ここに置いてある以上、ゴミとして一刻も早く片付けないといけないよね。

それで千歌ちゃんは、ダンボールの山やプリントなどの多く書類が溜まっているのを見て、これを全部片付けるのが面倒くさそうな表情をしていた。

「片付けるの面倒くさいよ……」

「でも千歌ちゃん、このダンボールの山を片付けないと、いつまでもこのままだよ？」

「そうよ。文句言っても仕方ないわ」

「もう〜！うう……」

文句を言っても私たちしか片付ける人はいない。

だから私や梨子ちゃんは制服の袖をまくりながら、千歌ちゃんにそう指摘する。

それで千歌ちゃんは、私たちの言葉に嫌々ながらも理解してくれた。渋々ながら制服の袖をまくる千歌ちゃん。その様子を見た私と梨子ちゃんも、部室に溜まったものを片付け始めようとした。

「んっ？んっ？んんっ？」

すると何かに気づく千歌ちゃん。

視線は部室に置いてあるホワイトボードに向いていて、千歌ちゃんは目線をホワイトボードに向けながら歩いていく。

そしてじくつとホワイトボードを凝視している千歌ちゃんに、私は言う。

「千歌ちゃん、どうしたの？」

「何か書いてある。薄くて分からないけど…」

「えっ？それって歌詞…かな？」

「ううん、分からない…」

千歌ちゃんの言葉に梨子ちゃんも反応を見せると、ホワイトボードをに書いてある文字は歌の歌詞なんじゃないかと、千歌ちゃんに聞くように尋ねる。

「ただ千歌ちゃんが言った通り、薄くてはつきり何が書いてあるのか分からないらしい。」

このホワイトボードは、一体どこから運ばれてきたんだろう？

曲の歌詞が書いてあるのなら、きつと…音楽室から運ばれてきたんじゃないかな？使われなくなっちゃったホワイトボードをここに運んできた。そういうことなんじゃないかな？

「それにしても……」

「そうね。早くここを片付けましょう」

「そうだね！ヨースロー！」

まあ、まず先にこの部室を片付けないとね。

ゴミばかりの中で生活するの、凄く嫌だし。

「……んっ？」

そう思った私は部室の換気をするために窓を開けようと思い、ふと外を見ると、何か赤いものがフワツと動いたような気がした。

でも私はその動いたその場所に向かうも、そこには何もなかった。私のただの勘違いだったみたい。

「曜ちゃん！こつち片付けよう！」

「うん！分かったよ！」

それから私たちは部室を片付け始めた。

しんでいる。

「は…花丸ちゃん！」

そんなマルのもとに、友達の子ビイちゃんがマルの名前を呼びながら図書室に駆け込んで来る。

図書室にある貸出カウンターで本を読んでいたマルは一旦本を読むのをやめ、本を閉じてから子ビイちゃんに視線を送ると、彼女はとても嬉しそうな表情を浮かべて、笑っていた。

「花丸ちゃん！部室できてた！スクールアイドル部承認されたんだよ！」

「良かったね〜！」

「うんっ！あぁ〜またライブ観れるんだ〜♪」

どうやら子ビイちゃんが朝から気になっていたスクールアイドルが、部として承認されたみたい。

その様子を見た子ビイちゃんはとても嬉しそうで、また、あの3人のライブが見られ

るといふ楽しみをすでに心待ちにしている様子だった。

「こんにちは〜!!」

「ピギイ!」

するとそこへ、私とルビイちゃんしかいない図書室に、陽気に声を出して挨拶をしてくる千歌さんたち3人がやってくる。

ルビイちゃんは3人が来たことに驚き、カウンターのそばの置いてある大きな扇風機の陰に隠れる。

「あつ、花丸ちゃん!」

「こんにちは!」

それで先頭を切って私の前に来る千歌さんの両手には、大量の本を持っていた。後ろにいた2人の先輩の両手にも、たくさんの本を持っていた。

すると千歌さんは突然右手の人差し指を上へ高々と上げると、ルビイちゃんが隠れている扇風機の方を指差して名前を呼ぶ。

「と…ルビイちゃん!!」

「ピギアア!」

ルビイちゃんが隠れているのは、千歌さんにはバレバレだった。ルビイちゃんは極度の人見知りだからすぐ物陰に隠れちゃうんだけど、扇風機の後ろだと姿が丸見えだから見つかったちゃうぞら。

「よく分かったね?」

「へっ? 曜ちゃん分からなかった?」

「ごめん…気づかなかったよ」

ルビイちゃんが隠れていたことに気づかなかった曜さんは頭をポリポリと掻く。

千歌さんに気づかれてしまったルビイちゃんは、扇風機の陰から顔を出して恐る恐る挨拶をした。

「い…こんにちは……」

「かわいい〜!」

ルビイちゃんの姿にそう笑みを浮かべて言う千歌さん。ルビイちゃんに対して本当に可愛いと思ってるみたいで、とても陽気な先輩ずら。

それで持ってきた大量の本を貸出カウンターに置くと、梨子さんが尋ねてくる。

「それでね、私たちの部室に置いてあったんだけど、これって図書室の本じゃないかしら？」

「図書室の…ですか？」

梨子さんの言葉に疑問を持ったマルは、1冊の本を手に持ち、中を見て確認する。

すると裏表紙の裏に貸出カードが入っていた。

ずらつ、これは間違いなく図書室の本ずら。

「あつ、確かにそうかもしれないです!返しにきてくれて、ありがとうございま……」

「スクールアイドル部へようこそ!」

「ええっ!?!」

「ピギヤア!？」

マルは本を持ってきてくれた3人にお礼を言おうとすると、千歌さんが突然、マルの手とルビィちゃんの手を握って、部への勧誘をしてきた。

「グループも結成したし、理事長に承認されて部にもなったし！絶対悪いようにはしませんよ〜」

いや…千歌さんの顔が全然そうじゃないぞら。

顔の表情が少なからず笑ってるし、何かスケベことを考えてそうな顔だったぞら。

隣にいたルビィちゃんもキョトンとした顔をしていて、千歌さんの話に困り顔だった。

「2人ともすごく可愛いし、歌ったら絶対キラキラする！間違いないっ!!」

尚も私たちを勧誘してくる千歌さん。

「マ…マルは、そういうの苦手っていうか…」
「ル…ルビイも…」

マルは運動苦手だから、スクールアイドルみたいなのも苦手だと、千歌さんに話す。それでルビイちゃんも私と同じように答えるけれど、彼女が言っているそれは…全て嘘ずら。

ずつと隣にいたから、分かるんだ。

すると私とルビイちゃんを勧誘していた千歌さんに、梨子さんと曜さんが注意する。

「千歌ちゃん、強引に誘ったら可哀想だよ」

「そうよ。まだ入学したばかりの1年生なんだし」

「う…うん…。ごめん…可愛いからつい…」

強引に勧誘したら可哀想だ、まだ入学したばかりの1年生なんだからと、2人は私たちのために千歌さんを注意してくれた。

そして曜さんと梨子さんに注意された千歌さんも、2人の注意に勧誘をやめてくれて、マルの手とルビイちゃんの手を離してくれた。

そして話を切り出すように曜さんが言う。

「じゃあ千歌ちゃん、そろそろ部室に戻ろう！部室の掃除の続きやらなきや!!」
「あつ、うん！そうだね！」

3人は部室の掃除をやっているようで、その続きを早くしようとする曜さんは伝える。

千歌さんは曜さんの話に元気よく答えると、私とルビィちゃんに手を振って別れの言葉を言う。

「じゃあ花丸ちゃん、ルビィちゃん、またね！」

「はい。さようなら〜」

「さ、さようならっ！」

それから梨子さんも曜さんも私たちに手を振って、3人が図書室から出ていくのをマールもルビィちゃんも3人に手を振って別れる。

「よくしつ！掃除の続き、頑張るぞ〜！」

それで千歌さんが声が廊下中に響き渡っているのが耳に入ってくる中で、ルビィちゃんルビィちゃんは小さく呟く。

「スクールアイドル……かあ……」

スクールアイドルに対して、凄く憧れているような目をしているルビィちゃん。
そのルビィちゃんに、マルは言う。

「やりたいんじゃないの？」

「えっ？」

「スクールアイドル、やりたいんじゃないの？」

「え……ええ!!」

ルビィちゃんは私の言葉に一步後ろにずさる。

マルの質問に驚きを見せる。ただルビィちゃんはすぐさまそれを否定したり、肯定もしたりしない。

だからルビイちゃんは本当は、スクールアイドルをやりたいんじゃないかって…私は思う。

確かに、ルビイちゃんは極度の人見知り。

スクールアイドルが大好きだけど、周りで見られるとルビイちゃんは萎縮してしまう。

だけどスクールアイドルが大好きなら、絶対にやりたいと思ってるはず。性格とか関係なしに…。

「どうなの？ルビイちゃん…？？」

「花丸ちゃん…。」

キーンコーンカーンコーン♪

マルがルビイちゃんが思ってる真意を確かめようとすると、それを邪魔するようにして、午後の授業の5分前を告げるチャイムが鳴り響く。

チャイムが鳴り終わるまで私たちは見つめ合い、目を逸らすこともなかった。

そしてチャイムが鳴り終わって5秒後

私の質問に対して何も答えなかったルビイちゃんは、私に対してやつと口を開く。

でもルビイちゃんから発せられた言葉は、私の質問の答えではなく、ルビイちゃんが背負っていることの全てを話すことだった。

「花丸ちゃん、あのね……」

「うん……」

「放課後になったら、全部……話すから」

神妙な表情を浮かべていたルビイちゃん。

その表情は、マルに自分のことを全て話すと決心を固め、一言も漏らさずに伝えようという表情。

その表情を見たマルは、ルビイちゃんの言い放った言葉を信じようと思った。

「……うん。分かったぞら」

「じゃあ授業始まるから、教室に戻る？」

「うん。そうするずらっ！」

そしてマルはルビイちゃんと図書室から教室へ向かう前に、読んでいた本を棚にし
まっつて図書室の鍵を閉め、職員室に鍵を置いてから向かった。

廊下を歩いているとき、笑顔をマルに向けて笑っているルビイちゃん。

その笑顔の裏には、一体どんなものを背負っているのか？マルは授業中…ずっとそれ
を考えていた。

1 7 真実と憧れと階段ダッシュ

「えっ？ダイヤさんが？」

「うん、そうなんだ」

放課後、バス停の近くの堤防に座ってバスが来るのを待っていたマルとルビイちゃん。
ん。

それでバスを待っているとき、ルビイちゃんは最初にマルのために生徒会長、お姉さんのダイヤさんについて話をしてくれた。

「お姉ちゃん、本当はああ見えて昔はスクールアイドルが大好きなんだ」

「へえ…そうだったんだ」

「特に『μ's』ってグループが大好きで、私もそのグループが大好きだったんだ」

「そうなんだ……」

ダイヤさんは、ルビイちゃんと同じようにスクールアイドルが大好き。あの雰囲気ながら、実は千歌さんたちがしているようなスクールアイドルが大好きという、ルビイちゃんの話による意外な事実が発覚してマルはびっくりした。

「お姉ちゃんと私でね、一緒に μ sの真似とかしてた。 μ sの歌を歌ったりしてたんだ」

「本当に大好きだったんだね」

「うん。大好きだった……」

ルビイちゃんの話から想像してみると、ダイヤさんはルビイちゃん以上にスクールアイドルに対しての愛が強いというか、大好きだったみたい。

時に μ sが着ていた衣装を自分たちで作り、それを自分たちが着て真似したりしていたと、ルビイちゃんの口からそんな話題が飛び出してきて、マルは驚きの連続だった。

でも……どうしても気になるのは1つだけ。

そんなスクールアイドルが大好きだったダイヤさんが、どうしてスクールアイドルを嫌うようになってしまったのか？

マルは、それがどうしても気になっていた。

「でもルビイちゃん、どうしてダイヤさんはスクールアイドルを嫌いになっちゃったの？」

「う…うん……」

マルはルビイちゃんにそう尋ねる。

ルビイちゃんはお姉さんがスクールアイドルを嫌いになった理由を尋ねられて、何も言わずに顔を下に俯かせてしまう。

ただどしばらくの沈黙の後で、ルビイちゃんはマルの質問に答えてくれた。

「実はね、ルビイもよく分からないんだ…」

「えっ？分らない？」

「うん。お姉ちゃんがスクールアイドルを嫌いになったのは、お姉ちゃんが高校に入っ

てからしばらくした頃で、ルビイがスクールアイドルの雑誌を読んだ時にお姉ちゃんに言われたんだ……」

『片付けて！それ……見たくない!!』

ダイヤさんがそんなことをルビイちゃんに言っていたことに、マルは衝撃を受けた。

「そう……なんだ……」

「本当はね、ルビイもお姉ちゃんと同じように嫌いにならなきゃいけないんだけど……」

「……っ!? どうして?」

「お姉ちゃんが見たくないって言ってるものを好きでなんかいられないよ!」

「ルビイちゃん……」

ダイヤさんの嫌いなものには、ルビイちゃんも嫌いにならなきゃいけない。

多分、マルがルビイちゃんに聞こうとしていたことの「答え」って、きつとこれなのかもしれない。

ダイヤさんがスクールアイドルを嫌いになっっているから、ルビイちゃんがスクールア

アイドルを始めたら何が起きるか分からないって、ルビィちゃんはそう思ってるんだと思う。

でもマルは、そのルビィちゃんの考えは間違ってると思ってる。他人の嫌いなものを自分も嫌いになるなんて、そんなの間違ってる。

「でもルビィちゃん、ダイヤさんと同じようにそれを嫌いにならなくてもいいと思う」

「どうして？」

「だって…ダイヤさんが嫌いだから、ルビィちゃんまで嫌いになる必要はないよ。スクールアイドルが好きなら、好きでいればいいと思う」

「花丸ちゃん……」

隣で縮こまって座っている親友を、正面に向き合わせてマルは意見を述べる。

ダイヤさんがスクールアイドルが嫌いだからって、ルビィちゃんも嫌いにならなきゃいけない理由なんてない。

好き嫌いは個人の自由。

それにマルはルビィちゃんがスクールアイドルの話をしているときの笑顔が大好きだから、嫌いにならないでほしいって思ってる。

マルの変な考えの押し付けになっちゃうけど、マルはルビイちゃんにそうできてほしいと願った。

するとその後、ルビイちゃんが逆に尋ねてくる。

「花丸ちゃんはスクールアイドルに興味ないの？」

「マ……マル!? ないない！ ほ……ほら、自分のことをオラとか言っちゃうし……」

ルビイちゃんはとても真剣な眼差しでマルを見て、マルの表情を覗き込むようにながら尋ねてきたから、マルはルビイちゃんの質問に対して両手をブンブンと振って、慌てながら質問に答える。

マルは正直に言っつてスクールアイドルは似合わないと思ってる。お寺の子だし、地味だし、自分のことを時々『オラ』って言っちゃうときがあるし……。

「じゃあ、ルビイも平気！」

「……ルビイちゃん」

ルビイちゃんはそう言っつて、作り笑顔を見せる。

普段のルビィちゃんなら、いつも眩しい太陽のような無邪気な笑顔をマルに見せてくれる。

でもこの日のルビィちゃんの写真は、本来の無邪気な笑顔と、いつもの太陽のような明るさとはとても程遠いものだった。

なんというか、我慢している。

自分がスクールアイドルをしたら、ダイヤさんが妹のことで首を突っ込んでくるのではないかと、常に考えているのかもしれない。

これはマルの考えで、本当はどう思ってるのか分からない。だけど、そうだと信じた

い。
ルビィちゃんは…本当は何がしたいんだろう？

顔を俯かせ、悩んでいる表情を浮かべていたルビィちゃんを見て、マルはそう思うのであった。

~~~~~※※※~~~~~

「じゃあ花丸ちゃん、じゃあね〜！」

「うん！また明日〜！」

それからバスに乗って沼津へ向かった後、沼津駅でルビイちゃんと別れたマルは、帰りにいつも寄っている本屋さんへと歩みを進める。

「今日もいい本あるずらか〜？」

いつもの期待を持ちつつ、店の中に入る。

店に入ると、『いらっしやいませ〜！』と男性店員の少し高めの声がマルに向かって発せられる。その声を耳にしながらマルは、文庫ものの棚の方へと足を運ぶ。

店の本棚の間を縫っていくようにして、マルはいつものように店を歩いていた。けどマルは、あるものを目にして足が止まる。

「あっ……」

それが視界に無意識に入った。たったそれだけで、マルの足は自然に止まってしまった。

『スクールアイドル特集』

スクールアイドルに関して特集されたものばかりの雑誌の本棚を見たマル。

頭に思い浮かぶのは、親友の苦悩。

「……………っ！」

あんなに思い悩んでいるルビィちゃんを、どうにかしてマルが解放してあげたい。その気持ちは今、マルにはある。

そして、それと同時に思い出すのは……

『花丸ちゃんはスクールアイドルに興味ないの?』

そんなルビイちゃんの問いかけだった。

文庫ものの本棚に向かおうとしていたマルは、気がつけばスクールアイドル特集と書かれた本棚の前にいた。それで、ルビイちゃんが大好きな『μ s』の特集がされていた本を手に取り、目を通していった。

「μ sか……」

μ sのメンバーは9人。

ルビイちゃんから『μ s』の話は聞いていたけど、ルビイちゃんの言っていた通り、9人全員が本当に『キラキラ』していた。

メンバーの一人一人が、まるでルビイちゃん的笑顔のように太陽みたいで、すごくキラキラしてた。

「んっ……？」

本のページをめくっていき、*μs*の歩んできた軌跡を見ていく中で、マルはふとあるページを見て、ページをめくっていた右手を止める。

「何これ……すごいずら……！」

雑誌に大きく写真で載っていたのは、結婚式の時に女の子が着ているウエディングドレス姿の写真。

そのウエディングドレスに扮した衣装を身に纏い、オレンジ色のショートヘアのその少女に、マルは目と心を奪われ、思わず言葉が漏れる。

その子の名前は、“星空 凜”ってみたい。

しかも、マルと同じ年の1年生。凄いずら…。

「わあ……綺麗ずら……！」

マルはスクールアイドルでも、こんな素敵な衣装が着られるんだってことを初めて知った。

それと同時に、マルの眼に映るこの人物が、本当にマルと同年の高校生なのって疑ってしまうほど、『星空 凜』っていう少女はとても綺麗だった。

とても明るそうな女の子。

常にみんなを引つ張っていくような、太陽のような明るさがありそうな女の子で、マルもこんな明るさがあったらいいなって思ってしまう。

羨ましい。ただただ…羨ましかった。

スクールアイドル……。

こんなオラも、輝けるのかな？

この人みたいに…。

こんなに地味で、運動も出来なくて、本を読むことしかなくて、一人称を『オラ』って言っちゃう時があるこんなマルが……。

スクールアイドルなんて出来るのだろうか？

「………よしっ！」

とりあえず、この本を買っていこう。

ルビィちゃんから話してくれる『μ s』について、マルも自分から少し勉強しないと…。

そう思ったマルは、読んでいたμ sの特集がされていた本を買うことにして、その後には読もうと思っていた文庫の本2冊も、一緒に買うことにした。

「ありがとうございます〜！」

店員さんの声を聞きながら、マルは書店を出る。

空もすっかり夕焼け色に染まっていた。

太陽も山に隠れて見えなくて、だんだん空には星も見えてくる。とても幻想的な風景  
ずら。

「さてと、うちに帰らなきゃ！」

マルはそう言つて空の景色を見たあと、暗くなる前に早く家に帰ることにした。

「あつ、そうだ！」

それで家に帰る途中、マルはルビイちゃんに対して面白いことを考えたずら。

ルビイちゃんが、快くスクールアイドル部に入れるよう、マルはとても良いことを考えたのでした。

~~~~~※※※~~~~~


次の日の朝のこと

俺は千歌の提案に付き合わされて、いつものように朝練をするわけなのだけれど、今日の朝練でやって来たのは淡島神社。

「ハハハだよーハハハハッ！」

「なるほど、ハハハか……」

千歌の提案というのは、とても過酷なものでした。

「この階段、段数っていくつあるの？」

「うーん、分かんない！」

「分かんない……じゃないわよ！」

「あはは……まあ梨子ちゃん、落ち着いて……」

梨子の怒りは曜によってなんとか沈められ、千歌はごめんね？と梨子に苦笑いしながら

ら謝る。

俺が言う過酷っていうのは、目の前にある淡島神社へと通じている階段である。

階段の段数が非常に多く、普通に歩いて登ったり、走って駆け上がったとしても、せいぜい時間は10分以上はかかってもおかしくはない。

だからはつきり言わせてもらおうが、ここで特訓をするなら相当の覚悟が必要。でない……死ぬぞ。

「それで?こここの階段を登るのが朝練か?」

「うん!μ sも階段を登って、体力作りをして鍛えてたつて聞いたことあるから!」

「ふうくん、なるほどねえ……」

どうやらこここの階段を使って朝練をする理由としては、千歌たちの体力作りが主旨になるだろう。

きつと歌ってダンスをするのが、今の現状ではまだまだ体力が必要なんだなと思うけど、μ sがやっていたその階段ダッシュは、これくらいヤバい階段を登って鍛えていたのだろうか?

それが1番、俺は気になるけどな。

「じゃあ早速、登って朝練開始だよ……」

「待った。朝練をする前にしつかり準備体操な？」

「うう……分かったよ……」

千歌は俺の指摘に項垂れつつ、準備体操を始める。

曜と梨子の2人も、千歌が渋々に準備体操を始めると、同じように2人も始める。

体操は怪我を防止するもの。だから練習前にはしつかり準備体操は欠かさずにやるのが、怪我しない体にも繋がっていく。

曜は言わなくても分かると思うし、梨子も話せば分かってくれる。だから特に千歌には、毎日そういうのをしつかりやって欲しいんだ。

リーダー（仮）が練習で怪我したらどうにもならないからな。そういうところを気をつけて欲しい。

「よしっ！これでいいでしょっ？」

「ああ、十分だ」

「じゃあ始めるね！」

準備体操を終えた千歌は、階段前の鳥居をスタートラインに位置に着く。曜と梨子もそれにつられて、千歌の両脇にスタート位置を取ると、曜が俺に言うてる。

「それでは遼くん、スタートの合図を！」

「えっ？あ…ああ、分かったよ」

正直、俺も3人と一緒に階段を登る練習をしようと思っていた。だが曜がそう言うので、俺は3人が先に登って行かせたのちに、俺が後から追いかけるようにしようと考えた。

なんの心配もいらないよ。

俺はこれでも、一応ここの階段は、ノンストップで頂上まで行けるくらいだ。いつも、あいつと一緒に階段を走って登ってるからね。

「じゃあ頑張れよ〜お前ら」

「は〜こ〜」

「よ〜い…………どんっ！」

それで俺の力強いスタートの合図で、3人は同時にものすごい勢いで階段を駆け上がっていく。

でもまあ、その勢いは最初だけだろうけど…。

「じゃあ、俺も準備しよ〜っ」と

3人が階段を登り始めて姿が見えなくなったころ、俺は千歌たちがいたスタートラインに立つ。そこで屈伸、アキレス腱伸ばしなど、準備体操を怠らずに行ったあとに、俺は先に登って行った3人を追いかけるようにして階段登り始める。

本当にこの階段は、頂上に行くまでとても遠い。

千歌たちにとっては、地獄のようだと思ってもおかしくはない。多分千歌たちは、昔の俺みたいになっているだろう。

「あつ、見えた…………」

そんなことを考えながら階段を登り続けていると、階段を登る3人の後ろ姿が見えてきた。でも俺が見たところ、既に限界にきている3人だった。もって…あの中間地点くらいだろう。

「お前ら遅いぞ〜！」

「りよ…遼くん!？」

「中間地点で待つてるからな〜」

俺は限界にきている3人を無慈悲に抜き去る。

自分たちのためにやるのなら、俺の助けなんかいらないよね？つて俺は思いながら、中間地点で待つてると言い残して先に登っていく。

「はあ…はあ………」

「き…きつ……」

「はあ…はあ………」

俺が中間地点に辿り着いてから、5分後

ようやく中間地点に辿り着いた3人。

中間地点に着いた途端、千歌を始め、3人は息を荒げて座り込んでしまう。相当しんどかったようだ。

「遼くん…階段登るのが早いよ……」

「しよがないだろ？ここはもう慣れてるからさ」

「息……切らしてないなんて……」

因みに俺の言う中間地点というのは、登山者に対してのエアールを送るためにある『がんばって』という標識があるということだ。

なかなかシンプルな標識だと思う。だけど、どうしてここにこんな標識を作ったのかは分からない。俺も結構、これに関しては不思議でしかない。

「遼くんは…サッカー部だもん。本当に凄いよ」

「そういえば…そうだった…わね……」

自分たちと比べ、階段を登っても全然息を切らしていない俺を見て、衝撃を受ける3

人。

1番衝撃を受けている梨子は息を荒げ、女の子座りをしつつ両手を地面について俺を見上げる。

その体勢を逆に俺から見ると、その梨子の体勢はなんともエロい格好なのかと思いつらされる。

梨子の肩幅並みの狭い感覚にある梨子の両腕。

その両腕の間に梨子の胸がムギュツと寄る感じで、梨子の服の隙間から、彼女の胸の谷間が見えそうで見えないギリギリのラインだった。

ギリギリのところで梨子の胸を拝見することが出来ないのがとても残念ではあるが、梨子の胸もいつか見たいものだ。

曜以外の胸とか触ってみたいしね。

梨子もそうだけど、見た感じ発育のいい千歌の胸も触ってみたい。ていうかこれマジの変態じゃん。

いけないいけない。変な妄想は消え去れ。

「梨子も体力を付ければこれくらいは余裕だよ。俺だって最初は、梨子みたいにすぐバテてたから」

「そうなの？」

「うん。だから頑張ろうよ」

俺はそう言って、梨子を励ます。

まだ初めてのことから、下を向かないでコツコツと続けていこうという意味合いを込め、俺は彼女に手を差し伸べる。

だけど梨子は、ネガティブな発言をする。

「でも、もう無理よ……」

「梨子ちゃん！そんなにすぐ諦めちゃったらどうにもならないよ！」

「いや、お前が言っただけさ」

「痛っ！もう痛いわよ！」

千歌が言ったことには間違いはない。ただ、千歌が言うから説得力がない。なにせ、千歌も梨子と同様にもうバテているからだ。

だけど俺は、千歌の言ったことだけは間違っていないと、梨子にちゃんと説明した。

「確かに千歌の言ったことは間違つてない。だからそんなに早く諦めたらダメだよ梨子」

「でも…私…!」

「大丈夫。俺も梨子のために頑張るから…ね?」

「…:…つ／＼／＼」

そう言つて、俺は梨子を励ます。

今、梨子の目に俺がどう映つてるか分からない。

別に千歌の言葉を使つて言つたわけで、全然良い事なんて言つてないのに、梨子の顔は真つ赤だ。

だから外野から、罵声が飛んでくる。

「イチヤつくのは別の場所でやってください〜い」

「そうだそうだ〜!」

「お…お前らなあ…:…」

梨子が顔を真つ赤にしているおかげで、俺には弁解の余地がなさそうな雰囲気になれ

てしまう。

俺…何も言っていないのになあ…。

「あれ？千歌たちじゃん」

すると階段の上の方から、聞きなれた声が聞こえてくるのを耳にする。

俺たち4人は、頂上へ通じる階段の上に視線を向けると、階段をそれなりのスピードで降りてくる果南の姿があった。

どうやら、今日も登っていたみたいだ。

「あつ、果南ちゃん！」

「おはよう果南。いつものやつの帰り？」

「うん。いつものやつの帰り！」

俺は確認のために果南に尋ねると、やっぱりそうだったみたいだ。相変わらずすげえよ、果南は…。

「果南ちゃんもしかして、上まで走っていたの？」

「一応ね！まあ、日課だから」

「ええ!?!日課なんですか!?!」

「まあね。ずっとここを毎日のように走ってるから、いつの間にか日課にちゃって……」

梨子の驚愕した声が漏れるのと一緒に、千歌も曜も驚きの表情をしていた。

3人の表情、驚きを隠しきれていないよ。

まあ仕方ないよね。果南ってば、あまりそういうことを人に話すことなんて全くしないし、何でもかんでも隠したがる性格だから。

それで果南が俺たちに尋ねてくる。

「それよりどうしたの？こんなところで？」

「えっとね、私たちスクールアイドルやってるから、この階段で鍛えなくっちゃって！」「ふうくん、そっか……」

千歌たちが体力を付けるためにこの階段で練習を始めたことを知った果南は、そんな反応を見せる。

果南はスクールアイドルに関してあまり興味はない感じに見えなさそう。果南がそんな反応を見せるのは、きっとそういうことなんだろう。

「まあ、頑張りなよ？」

「うん！頑張る！」

「じゃあ、店開けなきゃいけないから！」

「ばいばい！」

それから果南は俺たちにそう言っつて、階段を息一つ切らさずに降りていった。果南の前で言いたくないけど、果南は本当に化け物だよ。

マジの体力馬鹿っつてやつだ。

「凄い。息一つ切れてないなんて……」

「上には上がいるっつことだね！」

「よくしつ、負けてられないぞ〜！」

果南の体力の凄さを間近に目の当たりにした千歌は、立ち上がってやる気を漲らせ

る。

果南が出来るんだから、私たちも頑張れば果南みたいになれるかもと思ったんだろう。でも、すぐには果南みたいになるわけじゃない。

果南は毎日欠かさずにやってアレなんだから、千歌たちも毎日の朝練でやるべきだな。

「じゃあ千歌、俺を階段で追い越せなかったら帰りにジューズ一本奢りな〜?」

「ええ〜!? やだよお〜!」

「果南みたいに頑張るんだろ〜?」

「もう〜! 馬鹿にするな〜!」

3人はまだまだ、この超長い階段をノンストップで登りきれ体力は全然ない。けれど、ダンスの練習の時のように成長できる見込みは十分にある。

だから出来るだけ、3日坊主ですぐ止めさせるのもいけないと思ってる。彼女たちのためだからね。

「じゃあ私たちも、行くよお〜!!」

「「「おお〜」」」

それからしばらくの休憩のあと、俺たち4人は一緒に中間地点から頂上へ階段ダッシュを始めた。

まだまだ初日だ。焦ることはない。

ドテッ！

「あいたっ！」

「千歌ちゃん!？」

「千歌、大丈夫か？ほれ、手を出せ」

「…っ！うんっ！ありがとう！」

地道に努力して、みんなで上を目指そう。

階段を登っている時、俺はそう思ったのであった。

#18 体験入部

「えっ!? 本当!？」

「はい!!」

「よろしくお願ひします!」

朝練後、いつものように3人で学校に向かい、授業を受けたその放課後、私たちスクールアイドル部に2人の訪問客がやってくる。

訪れてきたのは、千歌ちゃんが可愛いと言っては、スクールアイドル部に勧誘していたルビィちゃんと花丸ちゃんの2人だった。

「やった………やったよ………!」

千歌ちゃんは2人の話を聞いて目には涙を滲ませ、嬉しくて震える声で呟く。

「やったあ〜!!」

そして千歌ちゃんは部室から庭に出る扉を勢いよく開けると、喜びを表現して大ジャンプする。

いや、オーバーリアクション過ぎるけどね。

「これでラブライブ優勝だよ！レジェンドだよ！」

千歌ちゃんは私と梨子ちゃんの肩に腕を回し、気が早過ぎるくらいにそんな事を言っている。

うん…千歌ちゃん全然分かってない。

まだ「仮入部」だっていうことを忘れてる。

「違うよ千歌ちゃん。体験入部だよ？」

「えっ？どういう事？」

千歌ちゃんは私の言葉にそんな素っ気ない声を上げると、代わりに梨子ちゃんが説明をしてくれた。

「要するに、お試してこと。それでいけそうだったら入るし、合わないって言うなら入らない」

「へえ〜そうなんだ〜」

千歌ちゃんもやっと本題の話を理解してくれたので、花丸ちゃんとルビィちゃんに話をしようとしたら、千歌ちゃんがいきなり言い放つ。

「…って、そうなの!？」

「千歌ちゃん……」

「話聞いてなかったわね……」

梨子ちゃんの言う通り、千歌ちゃんは話を聞いていなかった。花丸ちゃんから体験入部をしたって言いに来たことを、千歌ちゃんは全く耳にしていなかったようだ。

でも花丸ちゃんは、千歌ちゃんの驚きながら尋ねられたことに対し、少し言葉を濁らすように答える。

「いや…あの、その……いろいろあつて…」

花丸ちゃんはルビイちゃんを度々チラツと見ながら話をしているから、もしやと思ひ私は尋ねる。

「もしかして、生徒会長？」

「あつ…はい。だから、だからルビイちゃんここに来たことは内密にして欲しいんです」

「ああ、なるほどね」

すると答えはやはりそれだった。

ルビイちゃんにはダイヤさんがいる。ルビイちゃんがスクールアイドル部に体験入部していると知ったら、辞めさせられるだろうと思っただろう。

2人が折角体験入部に来てくれた。花丸ちゃんからのお願いは、聞き入れる他ない

よね。

「いいよ！ダイヤさんには内緒にしておくから！」

「…っ！ありがとうございますっ！」

ルビイちゃんは私の話を聞くと、パア〜つと明るい笑顔を見せ、そう言つて律儀にお礼をしてくる。

こういうのを見ると、やっぱりダイヤさんの妹なんだなつて、私は今改めてそう考えさせられる。

「じゃあとりあえず、2人も私たちと一緒に練習をやつてもらうのが一番ね！」

「は…はいっ！」

「よろしくお願いします！」

それから梨子ちゃんその場を仕切り、ルビイちゃんと花丸ちゃんに声をかける。

2人は梨子ちゃんの言葉を聞いて返事をする。ルビイちゃんに関しては、凄く練習することが楽しみそうな表情を見せていた。

私たちが活動を始めてから、ずっと私たちのことを見てくれていたルビィちゃんは、もしかしたらスクールアイドルが好きなのかも。

ダイヤさんはスクールアイドルが大嫌い。だけど、ルビィちゃんはスクールアイドルが大好きっていうちよつとおかしな構図だけれど…。

私の憶測だけど、そんな気がする。

「これは私たちの練習メニュー。いろいろなスクールアイドルのブログを見て作ってみたの！」

「わあ〜！本物のスクールアイドルの練習！」

それで梨子ちゃんはホワイトボードに私たち3人が考えて作った練習スケジュールのグラフを見せる。

準備運動、基礎体力の訓練、ボイストレーニング、ダンストレーニングの4つの項目がグラフに示されている。

それで私は梨子ちゃんに言う。

「曲作りは？」

「それは別に時間を見つけてやるしかないわね」

千歌ちゃんや梨子ちゃんが担当する曲作りに関しては、空いた時間を縫って作ることにしてみたい。

ルビイちゃんと花丸ちゃんは、ホワイトボードに貼られたスケジュールを見ては感心し、『おお〜!』と声を上げる。

ルビイちゃんはここでも、目を輝かせていた。

やっぱり…ルビイちゃんは本当に……。

「でも、練習はどこでやるんですか?」

「……………あぁ〜!」

そんな花丸ちゃんの質問に対し、千歌ちゃんはそれをまるつきり忘れていた声で絶叫する。

私も梨子ちゃんもすっかり忘れていた。

だからどうやら今から、私たちは学校での練習場所を探す必要があるみたい。

「よしっ！探しに行こう〜！」

「ず…ずらあく〜!!」

「ピギヤア!?!」

千歌ちゃんは花丸ちゃんとルビィちゃんの手を掴むと、そのまま練習場所を探しに向かつて部室から出て行ってしまった。

「もう…千歌ちゃんつたら〜」

「仕方ないよ。私たちも忘れてたんだから…」

「むう…そうね…」

千歌ちゃんの自由奔放さに、梨子ちゃんは頬を膨らませて怒っている。けど私は梨子ちゃんを慰めて、梨子ちゃんの怒りを鎮める。

それから千歌ちゃんたちを追いかけようにして、私と梨子ちゃんも部室から飛び出した。

練習場所を探すために、私たちはまず学校の校庭に向かったんだけど、校庭はソフトボール部が使っていて、使えるスペースはほとんどなかった。

カキーン！

「回れ〜回れ〜！」

金属製のバットがボールに当たって大きな金属音が鳴り響く。同時に部員の指示の声も大きく聞こえて私たちの耳に入ってくる。

校庭でソフトボールの練習に取り組んでいる部員の姿を、私たちはフェンスの裏から眺めていた。

「中庭もグラウンドも、他の部活が使ってていっぱいだね。部室もそこまで広くないし…」

千歌ちゃんは学校の校庭や中庭も使えないことに、ひどく悲しい声を上げる。

それで私は、いつも放課後に練習している砂浜じゃだめなのか尋ねると、梨子ちゃんが右手を顎に当てながら答える。

「いつも練習してる砂浜じゃだめなの？」

「できるだけ…練習場所は学校内で確保したいわ。練習の時間考えていつも練習してる砂浜まで行くには、それなりに時間もかかるし…」

それは…そうだね。

梨子ちゃんの言う通り、学校からいつもの練習場所である砂浜まで行くには、相当に時間もかかる。

話を聞いたら、私も納得してしまった。するとルビィちゃんから意見を出す。

「あの！屋上じゃだめなんですか？」

「えっ？屋上？」

千歌ちゃんはそんなルビィちゃんの意見に聞き返すと、ルビィちゃんは話を続ける。

「μ、sはいつも、屋上で練習してたって…」

「あつ、そうかつ！」

ルビィちゃんから意見を聞いた千歌ちゃんは、μ s が学校の屋上で練習していたことを思い出し、右手を拳で左手の手のひらにポンつと軽く手を叩く。

「屋上か〜!」

「屋上ならいいかもっ!」

私も屋上なら賛成。雨が降ったときは練習出来ないかもしれないけど、梨子ちゃんも学校内だからとルビィちゃんの意見に賛成していた。

「じゃあ早速、屋上に行ってみよ〜!」

「「おおくっ!」」

「ヨソーロー!」

そうと決まった私たちは屋上に向かう前に、千歌ちゃんを先頭に一旦部室に戻ることにした。

何故なら、私たちまだ練習着に着替えてないから。

ジャンプする。

「だけど梨子ちゃんが言ったそばから、千歌ちゃんは本当にはしやぎすぎて転んでしま
う。梨子ちゃんが建てたフラグが見事に回収された瞬間だった。」

「富士山、くつきり見えてる!」

「でも、この日差しは少し強いかも」

屋上からは富士山がくつきり見え、感動していることを私が口にすれば、花丸ちゃん
が太陽の日差しが眩しそうに手をおでこに当てて日陰を作る。

「そこがいいんだよ!太陽の光を一杯浴びて、海の空気を胸一杯に吸い込んで!」

千歌ちゃんは両手を広げながら、みんなに言う。

それから私たちは千歌ちゃんの近くまで行き、屋上の床にみんなで円になって座り込
む。

「あったかい…」

「本当だ。あつたかい……」

千歌ちゃんの言葉に、私もそう言う。

太陽によって温められた屋上の床はどことなく暖かくて、その場で横になつたらとても気持ち良さそうなベッドになりそうだった。

「ん〜！気持ちいいぞらあ〜♪」

「ふふっ…花丸ちゃんつたら…」

そしたら花丸ちゃんは気持ちよくて、その場で横になる。とても気持ち良さそうな表情をしていた。

隣にいたルビィちゃんは花丸ちゃんの行動に笑みを浮かべると、花丸ちゃんの頬を左手の人差し指で、ツンツンとつつく。

見たところ、花丸ちゃんの頬はとても柔らかかそう。

部に入ったら、あとで触ってみよう。

「さあ、始めようか！」

それで立ち上がった千歌ちゃんはそう話す。

千歌ちゃんの言葉に私も首を縦に振って頷いたあとで、その場に立ち上がって話す。

「そうだね！」

「ええ！2人とも、用意はいい？」

「はい！大丈夫です！」

「が…頑張ります！」

梨子ちゃんは花丸ちゃんとルビィちゃんに聞けば、2人ともやる気は満々。練習に励むと強い気持ちがかもつていた。

「じゃあ円陣組んで！」

そして千歌ちゃんの指示のもとで5人で円になって円陣を組み、手を重ね合わせる。それから千歌ちゃんの合図で、私たちは叫んだ。

「いくよ〜! A q o u r s s〜!」

「「「サ〜ンシャイ〜ン!」」」

体験入部で練習参加してくれた花丸ちゃんとルビイちゃんを含め、私たちは練習を始めた。

「ワン、ツー、スリー、フォー!」

「はあ…はあ…!」

私の手拍子と声に合わせながら、最初に千歌ちゃんとルビイちゃんの2人がダンスの練習をしている。

振り付けは、最初のライブで踊った『ダイスキだったらダイジョウブ』の振り付け。ルビイちゃんは私たちのライブを見てくれたのか、ダンスがとても上手だった。初めて練習するとは思えないくらいにすごかった。

多分、飲み込みが早いんだと思う。

あとは自分の性格としっかり向き合うことかな。

ルビイちゃんは人見知りだから、人前で弱気にならないことが大事になってくるかも

ね。

ダンスを一区切りまで踊り終え、最後の決めポーズまでしつかり踊り終えることが出来たルビイちゃんはとても嬉しそうだった。

「はあ……はあ……出来た……！」

「流石ルビイちゃん！」

隣で梨子ちゃんと一緒に見ていた花丸ちゃんは、ダンスをし終えたルビイちゃんを褒める。

「出来ました！千歌先……輩……？」

ルビイちゃんはダンスが出来たことを嬉しそうに千歌ちゃんに声をかけようとした。だけど当の本人は、ルビイちゃんがした最後の決めポーズとは全く違うポーズをしていた。違う踊りで例えるなら、盆踊りのポーズ。

「……………あつ、あれっ？」

ようやく今の状況が分かった千歌ちゃんが気まずい声をあげると、梨子ちゃんに告げられる。

「千歌ちゃんはやり直し」

「ええ!? そんなあ〜!」

ルビイちゃんも花丸ちゃんも苦笑い。

千歌ちゃんは梨子ちゃんに告げられたように、千歌ちゃんだけまた踊る羽目になってしまった。

千歌ちゃんが1人でまた踊り、その次に梨子ちゃんと花丸ちゃんの2人が踊る。

「ワン、ツー、スリー、フォー!」

「はあ…はあ…!」

運動が苦手だと自分で話していた花丸ちゃんだけど、ダンスの練習を楽しそうに取り組んでいた。

時々見せる笑顔も、心から楽しんでいる証拠。

花丸ちゃんも、ルビイちゃんと同じでスクールアイドルが好きなんじゃないかな。私
はそう思う。

「今日までつて約束だったはずよ！」

「だって…思いつかなかったんだもん……」

それからダンスの練習の後で部室に戻り、梨子ちゃんは千歌ちゃんに対して叱責す
る。

実は千歌ちゃん、今日までに新曲の歌詞を完成させなければいけなかった。だけど、
梨子ちゃんの怒りようをみると歌詞は完成していないみたい。

「思いつかなかったもん……じゃないの！」

梨子ちゃんと期限を約束していたなら、梨子ちゃんが怒るのも無理ないかなって思
う。

千歌ちゃんは歌詞担当で、梨子ちゃんは作曲担当。

歌詞が完成しなければ作曲も出来ないわけだから、最近はず2人のこんなやり取りの場面をよく見るようになってる。

花丸ちゃんが2人の様子を見て尋ねてくる。

「曜先輩、何かあったんですか？」

「う……うん。新しい曲を今作っててね……」

「花丸ちゃんも思いついたら何か言ってみてね！」

私は花丸ちゃんに曲作りの話をする、梨子にお説教されている千歌ちゃんも花丸ちゃんに言う。

「はあ……」

だけど花丸ちゃんは首を傾げる。

曲作りとの向き合い方が分からない彼女にとって、同意見を出せばいいのかわからないでいた。

そんな彼女は、ルビィちゃんの方へと目を向ける。

「ほっ…へっ…ほっ…」

ルビイちゃんは屋上で練習したダンスの振り付けの復習をしていた。小刻みにステップを踏み、部室の隅っこで小さく踊っている。

そんなルビイちゃんを見ていた花丸ちゃんは、少し嬉しそうに微笑んでいたのだった。

19 ルビイの気持ち

夕方

空はすっかり夕焼け色に染まっていた。

でも、私たちの練習はまだまだ続く。

私たち5人が学校をあとにして向かったところは、朝練で登った淡島神社へと続く階段。

私たちの次の練習は、この階段を登ること。

「これいつも上ってるんですか？」

「もちろん！」

目の前に映る階段の多さに、驚きを隠せないルビイちゃん。そんなルビイちゃんの質

問に、千歌ちゃんが胸を張って得意げに話す。

だけれど、私がそれに水を差す。

「でもいつも途中で休憩しちゃうんだよね…」

「そうなんだよねえ。えへへ…」

本当の事実を私が打ち明けたから、千歌ちゃんは2人に対して照れくさそうに頭を掻く。

それで梨子ちゃんが話を続ける。

「でもライブで何曲も踊るには、頂上まで駆け上がるスタミナが必要だし！」

「*μ*sも階段で鍛えてたって聞いたことあるから、私たちもやらないわけにはいかな
いよね！」

梨子ちゃんと千歌ちゃんの話に、ルビィちゃんも花丸ちゃんもゴクリと唾を飲み込む。いきなり初めてのことをするのは、2人にとってはきついと思うけど、何とか…頑張るって欲しいなと思う。

「じゃあ……s目指して！用意！ドゥーン！」

そして千歌ちゃんの元気な合図とともに、私たちは階段を一気に駆け上がって行く。

「はあ……はあ……！」

「はあ……はあ……！」

1段1段、階段を走って登っていく。

練朝練で登った時よりも、私と千歌ちゃん、そして梨子ちゃんも、疲れて止まる気配もなかった。階段を登るペースは落とすこともなく、中間地点を悠々と通過して登っていく。

朝の時はこんなに登れなかったのに、とただならぬ3人の成長を感じながら登っているとき、ふと私は後ろを振り向く。

「はあ……はあ……！」

後ろから少し遅れて、私たちの後にルビイちゃんがいる。初めてのはずなのに、ルビイちゃんは必死に私たちについてくる。

ルビイちゃんはそこそこ体力があるんだろうと思うと、私はそれに感心する。ただ、花丸ちゃんの姿は見えない。

でも、それは仕方のないこと。

体験入部で、初めてで、しかも運動が苦手だと言っていた花丸ちゃんに、いきなり休憩なしでこの階段を登りきれなんて思ってもいけないから。

するとルビイちゃんが登っていた足を止めて、逆になぜか1段2段と階段を降りていく。

「花丸ちゃん……」

どうしたんだろうと、私は階段の下の方を見つめていたルビイちゃんに尋ねる。

「どうしたの?」

「あつ、ちよつと息が切れちゃって、あの……先に行つててくださいー!」

息遣いを荒くし、呼吸を整えながらルビィちゃんは私たちに言うので、私はルビィちゃんに言う。

「分かった。無理しないでね！」

「はい！」

「じゃあ先に行こう！」

「うん！」

体験入部だから、怪我はさせたくない。

だから私はそう言い残して、千歌ちゃんと梨子ちゃんの3人で先に頂上へ向かう事にした。

決して無理せず、ゆっくりでもいいからと、私はルビィちゃんたちにそう訴えながら、3人で頂上へと向かったのであった。

く花丸 side く

やっぱり…マルには無理ずら。

スクールアイドルなんて出来っこない。

階段を走って登っているうちに、マルはそう思うようになってしまっていた。

体験入部を経て、もし：スクールアイドル部に入部したら、この先、この練習を、ずっと続けていかなければならないと考えてしまっていたマルの体は、もうすでにズタズタだった。

階段を登る体力も一ミリもない。

歩いて登ることしか出来なかった。

「花丸ちゃん!」

「…っ! ルビィ…:ちゃん?」

その時、階段の上からルビィちゃんが降りてくる。

「一緒に行こう!」

「はあ…:はあ…:…」

ルビィちゃんはその場で足踏みをしながら、笑顔でマルにそう話してくる。

マルはルビイちゃんのその笑顔を見た時、ルビイちゃんはマルのことを心配している
と思った。

だからマルは、ルビイちゃんを突き放した。

「ダメだよ。ルビイちゃんは走らなきゃ…」

「花丸ちゃん？」

私の発言にルビイちゃんはその場で足踏みを止めては、首を傾げてマルの名前を言
う。

マルはルビイちゃんに話を続けた。

「ルビイちゃんもつと自分の気持ちを大切にしなきゃ。無理に人に合わせても…辛い
だけだよ！」

自分の気持ちを隠し続け、他人にずつと合わせていたら自分が苦勞して辛くなつてし
まうだけと、マルはルビイちゃんに伝える。

「別に…合わせてるわけじゃ…」

目線を逸らし、そうではないと言うルビィちゃん。
そんなルビィちゃんに、マルは尋ねる。

「ルビィちゃんは、憧れだった…スクールアイドルになりたいんでしょ？」

「う…うん………」

「だったら、前に進まなきゃ！」

悲しげな表情のルビィちゃんに対して、マルは笑顔でそう話す。憧れだったスクールアイドルになれるチャンスが無駄にしたらダメだよと、マルはその言葉にその気持ちを込めて伝えた。

そして、マルはルビィちゃんに促す。

「さあ！行って！」

夢へと踏み出す、その一步を…。

「えっ、でも……!」

「さあ!」

「……………うんっ!」

ルビィちゃんは、笑顔で踵を返す。

マルに対して背中を向けて、またそこから勢いよく階段を登り始めた。2年生の3人が待っているであろう頂上へと…。

ルビィちゃんの姿が見えなくなった時、マルは180度身を翻し、階段を降り始める。やっと一步を踏み出した彼女に対して、もう自分がやるべきことは、もう何もなくなつたから…。

「……………」

マルと一緒に図書室で過ごしてくれた、その子は、とても優しく、とても思いやりがあつて、でも、気にし過ぎな子。

素晴らしい夢も、キラキラした憧れもある。

けど、それ全てを、胸に閉じ込めてしまおう子。

だからマルは、その胸の扉を思い切り開いてあげたいと、ずっと思っていた。

胸の中に詰まっている一杯の光を、世界の隅々まで照らせるようなその輝きを……この大空に、放ってあげたかった！

それが……マルの夢だった。

「やったよー！登り切ったよー!!」

千歌さんの声が頂上から聞こえたときには、マルは階段を一人で降りていた。

千歌さんの声が聞こえたとき、マルは確信した。

ルビィちゃんも、きつと登れただろうって……。

広場に出るところまで降りたマルは、振り向いて頂上を見上げる。頂上にいるであろうルビィちゃんに対して、マルはエールを送った。

『頑張ってね!』と、簡単に一言だけ。

それが……一番いいと思った。

そんな時、マルの後ろからとある人物が声をかけてくる。その人は、マルがここは呼んだ人だった。

「何ですの？こんなところに呼び出して…」

「ダイヤさん……」

黒澤ダイヤさん。

ルビィちゃんにとって、大切なお姉さん。

そんなダイヤさんを正面に、マルは話す。

「あの……ルビィちゃんの話を、ルビィちゃんの気持ちを……聞いてあげてください！」

「ルビィの……？」

「はいっ！」

ここにダイヤさんと呼んだ理由。

それは、ルビィちゃんの気持ちをいち早くダイヤさんに伝えるため。そして尚且つ、

ルビイちゃん自身の口からダイヤさんに発言させるため。

これも全て…ルビイちゃんのためだった。

マルはダイヤさんに対して、ルビイちゃんの話や、気持ちを聞いてほしいと伝えたあと、マルはその場から立ち去った。

そのマルが立ち去る間際、ダイヤさんは呟いた。

「そんなの……分かってる……」

哀しそうな表情をしていて、夕日とオレンジの海を眺めるダイヤさん。
その背中が、とても寂しそうな背中だった。

〈花丸 side out〉

だから、ルビイはとても心配だった。

「ルビイちゃん、下に行ってみる？」

曜さんは私を見て、どうするか尋ねてくる。

もちろん私は、花丸ちゃんのことを探したい。

ルビイは、曜さんに話す。

「はい。花丸ちゃんを探したいです」

「じゃあ、行こっか」

「はい！」

私の答えを聞いたあと、曜さんは自分を先頭に階段をゆつくりと降りていく。

花丸ちゃんはどうしてしまったんだろうと、千歌さんも梨子さんの2人も、とても心配していた。

「花丸ちゃん！」

「花丸ちゃん！返事して〜！」

階段を降りながら、花丸ちゃんを呼ぶ。

千歌さんも曜さんも梨子さんも、名前を叫んで花丸ちゃんを呼んでいた。

だけど、一向に返事が返ってくる気配もない。

私たちの4人の声は、空気を振動させて消えていくだけだった。

「見つからないね…」

「もしかしたら花丸ちゃん、私たちに何も言わないで、先に帰っちゃったのかも…」

「ええ!? そんなあ……」

花丸ちゃんが先に帰ってしまったのかもしれない。梨子さんが発したその言葉に、千歌さんは驚いては落胆の声を上げる。

ルビィも梨子さんのその言葉に、そう思わざるを得ませんでした。だって、こんなに花丸ちゃんを呼んでも、返事すらしてくれなかったんだから。

そうとしか…考えられなかった。

「でも…どうして何も言わずに？」

「ルビイちゃんは、何か知らない？」

曜さんはルビイにそう尋ねてくる。

だけどルビイには、花丸ちゃんがどうして帰ってしまったのかの理由が分からなかった。

だからルビイは、曜さんの質問に何も答えることが出来なかった。

「ごめんなさい。ルビイも何も…」

「そっか。じゃあ…仕方ないね」

質問に答えられなかったことに、ルビイはごめんなさい、と先輩たちに謝る。

「だけど大丈夫だよ、と曜さんをはじめに千歌さんも梨子さんも、心から優しく許してくれた。」

こんなに優しい先輩に出会えたことに、ルビイは心から感謝した。スクールアイドルを始めた先輩たちが、こんなにも優しくルビイに対して接してくれることに、ルビイは嬉しかった。

「とりあえず日もそろそろ暮れそうだから、今日の練習はここまでにしませう」
「ルビィちゃんもそれでいい？」
「はい。ルビィもそれでいいと思います」

それで梨子さんの言葉を仕切りに、ルビィの体験入部は終わりになった。太陽が沈んでそろそろ日が暮れるということで、練習は終わりになる。

学校の屋上で、sが練習してたように練習することが出来たりと、今日は濃密な一日だった。

「じゃあ下に降りよう」

「そうだね！」

それで千歌さんの声に曜さんもそう答えて、私たちはそこからまた階段を降り始める。

階段から見える景色は、とても絶景だった。

夕日に照らされた海は夕日と同じオレンジ色に輝いていて、とても綺麗だった。

そして私たち4人が、ベンチがある少し広々とした広場まで降りたとき、ルビイはある人物の後ろ姿を見て、思わず声を上げてしまった。

「お姉ちゃん!?!」

「…っ!ルビイ…!?!」

ここにいないはずのお姉ちゃんが、そこにいた。

そして同時に、スクールアイドル部に体験入部していることがお姉ちゃんにバレてしまった。

千歌さんたちもお姉ちゃんを見て、驚いていた。

「ダイヤさん!どうしてここに?」

「これは一体どういうことですか?」

千歌さんはお姉ちゃんにそう尋ねるけど、お姉ちゃんはそれよりもルビイがスクールアイドル部の練習に参加していることに強い怒りが湧き出ているのをルビイは感じた。

お姉ちゃんの鋭い目つきが、それを物語っている。

「あの、それは…その……」

ルビイはお姉ちゃんの問いにどうすればいいのか言葉を探す。千歌さんたちに迷惑のかからない、一番最適な言葉を頭の中で選ぶ。

そんな時、ルビイは花丸ちゃんの言葉を思います。

『ルビイちゃんは、もっと自分の気持ちを大切にしなきゃ!』

『スクールアイドルになりたいんでしょ?』

『だったら…前に進まなきゃ!』

「……っ!」

そうだ……前に……進まなきゃ!

自分の気持ちを大切に、お姉ちゃんにルビイの気持ちをはっきりここで伝えなきゃ!

「違うんです!ルビイちゃんは……」

「千歌さん！大丈夫です」

「ル……ルビイちゃん……」

ルビイは千歌さんが代わりに話そうとしてくれていたのを声に出して止める。そしてそれから、ルビイは1歩……2歩と、お姉ちゃんの方へ歩み寄る。

大丈夫。全部花丸ちゃんから教えてもらった。

それを全て今、お姉ちゃんにぶつけるだけ。

「お姉ちゃん……」

「……ルビイ」

一度目線を下に降ろし、自分の中で話すタイミングを待つ。後ろで千歌さん、曜さん、梨子さんの3人が見守ってくれている中で、ルビイは意を決して、お姉ちゃんに言い放った。

「ルビイ……ルビイねっ！千歌さんたちと一緒に、スクールアイドルがやりたい！」

「……っ！」

「お姉ちゃんがなんでスクールアイドルを嫌いになったのかは知らない。でも、ルビイはスクールアイドルは大好きで憧れなの！だからルビイ、スクールアイドルがやりたい！」

「……ルビイ」

「ルビイちゃん……」

ハッキリと、自分の気持ちを言った。

例え、お姉ちゃんがずっとスクールアイドルが嫌いでも、ルビイはやる。大好きで……ずっと憧れだったスクールアイドルを……

ルビイの思っていた気持ち、その話を聞いたお姉ちゃんは、虚を突かれたように驚いていた。

だけど、その表情はスツと戻される。

お姉ちゃんは私に対しては何も言わず、無言のままゆっくりと私の横を通り過ぎていく。

私は心の中で思った。

やっぱり……ダメだったのかな……？

花丸ちゃんの言葉で勇気を貰ったのに、お姉ちゃんに自分の気持ちを全面にぶつけたのに、それでも、やっぱりお姉ちゃんには届かなかった。

もう…スクールアイドルは出来ないかな…。

憧れだったスクールアイドルになれる夢は、無情にも儂い夢となって消えてしまった。

と…ルビイはそう思っていた。

そんな時、お姉ちゃんが言葉を発した。

「ルビイ…あなたの好きにしなさい。ただし、羽目を外しすぎないように…ね」

「……………っ！」

私の方に一切振り向かないまま、一言だけ私に向かってそう言い残すと、そのままお姉ちゃんは、階段を降りて去っていった。

ルビイは耳を疑った。

お姉ちゃんの言ったことが信じられないくらいに耳を疑っていたルビィは、それをしつかり理解するまでに時間をととても要した。

理解するころには、大喜びをして私に抱きついてくる千歌さんの姿があった。

「やった〜！やったねルビィちゃん！」

そこで私はやつと気づいたの。お姉ちゃんからスクールアイドルをやつてもいいという、入部の許可をもらえたことに…。

それをやつと理解したルビィは、自分でも自覚できるくらいに笑っていた。気持ちがちゃんとお姉ちゃんに伝わっていたことに、ルビィは嬉しかった。

「……っ！はい！ありがとうございます！」

私に抱きついていた千歌さんの周りには、曜さんも梨子さんもいた。2人もとても嬉しそうな表情をしていて、曜さんが私に言う。

「ようこそ、スクールアイドル部へ！」

「一緒に頑張ろうね！」

梨子さんもそう言うのと、2人は千歌さんと同じように優しく抱きついてくる。おしくらまんじゅうみたいにギュウギュウされちゃってるけど、ルビイはそれが満更でもなかった。

「はい！よろしくお願いしますっ！」

曜さんと梨子さんの言葉に、ちよつぴりルビイは泣きそうになりかけた。けど、ルビイは我慢した。

そして勇気を振り絞ってお姉ちゃんに言ったおかげで、念願の…本物の…正真正銘のスクールアイドルになることが出来た。

どれもこれも、全て花丸ちゃんのおかげだった。

ルビイがスクールアイドルになれたのも、ルビイに勇気を与えてくれたのも全部花丸ちゃんのおかげ。

でも、肝心の花丸ちゃんは見つからなかった。

淡島神社へと通じる階段を最後まで降りてきても、花丸ちゃんの姿はそこにはなかった。

花丸ちゃん…どうしちやつたんだろう。

そんな自分の大切な友達が、忽然と消えてしまったことに、ルビイはとても心配になるのです。

〈ルビイ side out〉

#20 花丸の気持ち

翌朝の学校

部室でルビイは、入部届を書いている。

お姉ちゃんからスクールアイドルをしてもいいと、許可を貰えた次の日の朝、千歌さんたちに見守られながら、ルビイは入部届を書く。

氏名 黒澤 ルビイ

“スクールアイドル”部への

入部を希望します。

「よろしくお願いしますー！」

自分の名前と入部する部の名前を書いた私は、ペンを置いて千歌さんにその紙を渡す。

ルビイから入部届の用紙を受け取った千歌さんは、入部届に不備がないかを確認した上で、笑顔でルビイを迎えてくれた。

A q o u r s の、4人目のメンバーとして…。

「よろしくね！ルビイちゃん！」

「ようこそ、A q o u r s へ！」

曜さんも梨子さんも、ルビイを快く迎えてくれた。

本当の意味で、スクールアイドルになれた。

ルビイの夢が、叶った瞬間だった。

「はい！頑張ります！」

曜さんの歓迎の言葉に、笑顔でそれに答える。

自分の中でも、夢が叶ったからには全力でスクールアイドルを頑張ろうと、ルビイは

心から誓った。

そんな時、梨子さんが不思議そうに尋ねてくる。

「そういえば、国木田さんは？」

「……っ！」

友達である、花丸ちゃんのことだった。

花丸ちゃんは、この部屋にはいない。

昨日から、連絡すら取れていなかった。

「あれからルビイちゃん、連絡は取れたの？」

「い……いえ。花丸ちゃんにはメールとか、電話もしてみたんですけど、全然出てくれなくて……」

「そうなんだ……」

昨日の練習のあと、千歌さんたちと別れてからルビイは、花丸ちゃんにメールとか、花丸ちゃんの携帯電話に電話してみたりもした。

だけど、一度も出てくれなかった。

私の背中を押してくれた花丸ちゃんにお礼が言いたかったのに、どうしてなの…花丸ちゃん。

私は顔を下に俯かせてシユンとしてしまっていた。

するとそんな時、私の落ち込みようを見かねた千歌さんは、花丸ちゃんの話をする。

「花丸ちゃん、昨日の屋上での練習、凄く楽しそうにしてたのにね…」

昨日の練習で、花丸ちゃんが凄く楽しそうに練習していたのを見ていた千歌さんがそう呟く。

すると、曜さんもそれに反応を見せる。

「千歌ちゃんも思ってたんだ。実は…私も…」

「曜ちゃんも?」

「うん。私も同じこと思ってた」

曜さんは千歌さんの話に共感していた。

そして梨子さんも、花丸ちゃんの事に關して不思議に思つたことを、ルビイたちの前で首を傾げながら疑問として投げかける。

「どうして花丸ちゃん、私たちに何も言わずに去つてしまつたんだろう？」

「……………」

だけどその梨子さんの疑問に、ルビイを含めて千歌さんも曜さんも理由が全く分からなかつた。

でも、ルビイはさっきの千歌さんと曜さんの2人の話を聞いて、2つだけ分かつたものがある。

1つは、花丸ちゃんは無理していたということ。

ルビイに気を遣つてスクールアイドルをして、私がスクールアイドル部に入れるように仕向けて、花丸ちゃんは無理をしていたんだと思う。

昼休みに花丸ちゃんから、『体験入部してみない』って、話を持ちかけてくれたあの時から…。

ううん…そのずっと前からだと思う。

「でも、やっぱりそうだったんだ……」

「……？ルビイちゃん？」

そして2つ目は、花丸ちゃんはスクールアイドルが大好きなのかもしれないということ。

でなきや、千歌さんと曜さんの2人が言ってみたみに、花丸ちゃんが楽しそうに練習するわけではない。

花丸ちゃんは隠してたんだ。

ルビイに対して、先輩たちに対して、スクールアイドルが本当は好きだってことが……。

ルビイはそんなことを頭の中でずっと考えたとき、ルビイは突発的に先輩たちに言葉を発していた。

「ルビイ、花丸ちゃんのところに行きます！」

「えっ!?!」

私の思いもよらない発言に梨子さんは驚く。

今、花丸ちゃんのところに行かないと手遅れになると思う。多分きつと、このままじゃ花丸ちゃんはこのから1人ぼっちになっちゃう。

それだけは絶対にさせたくない。

だって、花丸ちゃんの本当の気持ちは！

「大丈夫ですっ！花丸ちゃんは学校に来てると思います。本を読むのが大好きだから、多分きつと花丸ちゃんは図書室に！」

そう先輩たちに花丸ちゃんの居場所を話したルビイは、部室を飛び出し、急いで花丸ちゃんがいる図書室へと向かった。

待ってて花丸ちゃん！

今度は、ルビイが花丸ちゃんの背中を押す番！

~~~~~※※※~~~~~

花丸 side

マルのお話は、もうこれでおしまい。

マルの夢は…叶ったから。

マルはこれから、また本の世界に戻るの。

図書室にいるマルは、ルビィちゃんが千歌さんに入部届を出していたのを目の当たりにした。

だから理解出来た。

自分の気持ちをダイヤさんに伝えられて、それでスクールアイドルをしてもいいん

だつてことに、マルはそれを見て思った。

嬉しかった。マルの夢が、叶ったことに…。

そして、1人ぼっちになることも…。

「……………大丈夫。1人でも…」

ルビィちゃんがスクールアイドルを始めれば、必然的に私は1人ぼっちになる。

でも大丈夫ずら。マルは小さい頃から、そうやって1人で遊んだり、1人でずっと本を読んでいたから、きつと…大丈夫ずら。

1人そんな風に考えていたマルは、受付カウンターの引き出しに入っている雑誌を取り出す。

それは一昨日、マルがスクールアイドルの勉強にと思つて買った、『μ's』の特集がされた雑誌。

『星空 凜』

マルはこの雑誌を読んで目に止まった、彼女の記事までページをめくる。彼女がウエディングドレスを身に纏った写真を見て、マルはずっと思っていた。ううん…この雑誌を読んでいるうちに思っていた。

マルも、こんな風になりたいって…。

彼女みたいに、ルビイちゃんみたいに、キラキラ輝く星のように、マルもスクールアイドルになって、こんな風になりたかったって…。

「でも、マルには無理ずら…。」

でも、マルはそれになれない。

運動も苦手だし、むいてない。

だからマルは、彼女みたいにできない。

だから、これでさよなら。

マルの話は、これでもうおしまいだから。

だから

「バイバイ……」

マルはその雑誌を、そつと閉じていく。

彼女との別れを惜しむことなく、ゆっくりと……。

その時だった。

「ルビィね！」

「えっ!?!」

図書室の入り口から声がして、マルはそこに視線を送ると、そこにはいないはずのルビィちゃんの姿があつた。

マルはそれに、凄く動揺していた。



同時に、マルは驚いていた。ルビイちゃんがマルに対して、すごい真剣な表情をしていることに。

「ルビイちゃん…?」

「ルビイね!!花丸ちゃんのことをずっと見てた!ルビイに気を使って、スクールアイドルやってるんじゃないかって…。ルビイのために、無理してるんじゃないかって、心配だったから…!」

そしてルビイちゃんは、今にも泣きそうな声でマルに向かって叫んでいる。ずっと人見知りばかりしていた、マルの大切な友達が……。

「でも練習の時も、屋上にいた時も、みんな話してる時も、花丸ちゃん、嬉しそうだった!それ見て思った。花丸ちゃん好きなんだって!ルビイと同じくらい好きなんだって!スクールアイドルが!」

自分の気持ちを押し出すようにして、自分の言葉で、マルに向かって叫んでいた。それに、マルがスクールアイドルが好き?

そんな…そんなのありえないすら。

「マルが…？まさか……」

「じゃあ、なんでその本そんなに読んでたの？」

「そ…それは……」

ただルビイちゃんからそう聞かれた時、マルは瞬時に言葉を詰まらせてしまう。

ルビイちゃんから、目をそらしてしまう。

なんでこの本をそんなに読んでいたのか、なんでこんなにも惹かれてしまったのか。

心の中で考えても、マルの考えは全くまとまらなかった。

するとルビイちゃんは受付カウンターの正面に来て、マルと正面を向き合って話し出す。

「ルビイね！花丸ちゃんとスクールアイドルやれたらつて、花丸ちゃんと一緒に頑張れたらつて、ずっと思ってた！」

マルと一緒に？スクールアイドルを？

ルビィちゃんは自分の気持ちを真つ直ぐに、マルに思っていることと、その気持ちは、マルの胸に直接伝わってきた。ルビィちゃんその言葉が、マルにとってその思いが、とても嬉しかった。

でも、マルはその思いには応えられない。  
マルは首を振って、ルビィちゃんに話す。

「でもマルには無理ずら。ルビィちゃんだって昨日の練習でも見たはずだよ？階段を登るだけでマルの体力がもたないし、運動も出来ない。だからマルには、向いてないよ……」

大切な友達のルビィちゃんを正面に、マルは自分の思うことを正直に話す。

するとルビィちゃんは、泣きそうだった顔から少し笑う表情を見せると、マルが見ていた『星空 凜』の記事をルビィちゃんは見ている事を話し出す。

その内容は、マルも驚きを隠せなかった。

「その星空凜ちゃんもね、自分はスクールアイドルに向いてないって、ずっと思ってたんだよ？」

「えっ!?この人が!？」

「うん。そうだよ!」

ウエディングドレスを身に纏って、こんなに可愛い笑顔をしているのに、この子も今のマルのように、自分は向いていないってずっと思っていたことが、マルにとって本当に驚きだった。

でも…だとしたら、どうしてこの子はスクールアイドルをやっていたの？

マルはそれを、とても不思議に思っていた。

「でも好きだった」

「えっ!？」

するとその時、図書室の入口からまた声が聞こえてくる。その方向に目を向けると、そこには2年生の千歌さんたちが立っていた。

その中で声に出していたのは、梨子さんだった。

「やってみようと思った。最初はそれでいいと思うけど…?」

「そうだよ！花丸ちゃんもやろう？」

曜さんも、ルビィちゃんと同じような言葉をかけてきて、やってみようってマルを誘う。

千歌さんも、マルに手を差し出してくる。

曜さんみたいに口から言葉で言うのではなく、にこやかに笑って、目でマルに訴えかけていた。

マルが、その手を握っていいのかな？

心に不安がよぎり、千歌さんが差し伸べてくれた手を、マルが握っていいのかなって思っていた。

でも、ルビィちゃんは叫んだ。

「ルビィ！スクールアイドルがやりたい！」

「花丸ちゃんと!!」

「……っ！ルビィ……ちゃん……」

マルと一緒に、スクールアイドルがしたいって…。

ルビィちゃんが叫んだその一言に込められた想いは、マルにとってとてつもなく大きいものだった。

「マルに…できるかな……？」

「大丈夫だよ！」

「えっ？」

「私だってそうだよ？」

千歌さんはマルに優しく話しかけてくる。

マルの不安な気持ちを吹き飛ばしてくれるくらいに、それはとても優しい言葉だった。

「大切なのは、出来るかどうかじゃない。やりたいかどうかだよ!!」

「やりたいか……どうか？」

「花丸ちゃんは、スクールアイドルやりたい？」

千歌さんのそんな問いかけに、マルは考える。

周りの千歌さん、曜さん、梨子さん、そしてルビィちゃんは笑顔でマルを見つめている。

やりたいか……どうか。

マルがスクールアイドル始めたら、いつしか彼女《星空 凜》みたいになれるかな？  
キラキラと、輝く星みたいになれるかな？

だとしたら……やりたい。

マルも、スクールアイドルが……やりたい！

その時の千歌さんは、まるで私を照らしてくれる太陽のようで、差し伸ばしてくれたその右手に、マルはそっと自分の右手で掴んで触れる。

それからマルの右手の上に、梨子さん、ルビィちゃん、曜さんの順番に手を重ねて、マルの手は暖かくなって、とても心地良かった。

そして千歌さんは、マルに言い放った。

「A q o u r s へようこそ、花丸ちゃん！」

とびきりの笑顔で、マルをA q o u r s のメンバーとして歓迎するとっても暖かい言葉。

その暖かい言葉に、マルは思う。

ここからが、マルのお話の始まりなんだって。

「つ……はい！よろしくお願ひします！」

「花丸ちゃん！」

ルビィちゃんは受付カウンターを周り込み、マルに思いつきり抱きついてくる。



「ルビイちゃんー！」

マルはルビイちゃんの勢いで後ろに倒れそうになったけど、マルはなんとかそれを持ち堪えて、マルもルビイちゃんをギョツと抱きしめた。

千歌さんたちになにこやかに私とルビイちゃんの様子を見つめられながら、マルは心から誓った。

マルにとつて大好きな友達と、マルを大切にしてくれるルビイちゃんと、二人三脚でスクールアイドルを一緒に頑張ろう。

マルは心からそう誓うのであった。

く花丸 side out く

## #21 曜と過ごす休日 前編

今日の俺は、部活はない。

朝練のために朝5時に起きることもない。  
なのにも関わらず、この時間だ。

「げっ……まだ6時じゃん……」

朝の6時。内浦に日も上り出して間もない頃。

そんな早い時間に、俺は早く起きてしまった。

部活もない、待ちに待った休日なのにだ。

休日なのに、早い時間に起きてしまう話をよく友人から聞いたことがあるけれど、早く目覚めてしまうとやっぱり嫌なもんだ。

折角の休みなのに、早く起きてしまうことがね。

「はあ…どうすつかない今日…」

ただ今日に関しては、家に籠ってずっと部活続きで体に溜まった疲れを癒そうと思っていた。

千歌たちの練習には毎朝付き合っただけだよ。

花丸ちゃんとルビィちゃん。新しくAqoursのメンバーに加わった1年生の2人組。

親友といわれる所以なのか、2人は手を取り合っただけで一生懸命に頑張っている。淡島神社の階段の登りに関しても、ダンスにしてもそうだ。

お互いに助け合っただけ頑張っている。

Aqoursのメンバーもこれで5人になった。ちゃんとした正式な部になる人数は十分に満たしているし、千歌もそれで凄く満足気だった。

5人で切磋琢磨して、練習に励んでほしい。

「じゃあ…2度寝すつか…」

とりあえず、俺はもう一度寝る。2度寝する。

今日は休日だ。十分に楽しむさ。

そう思った矢先、俺の部屋のドアが破られる。

「遼くん！おはヨーソロー！」

「……………」

渡辺 曜

お隣さんのコスプレ大好き少女が、今日も今日とて俺の部屋にやって来やがった。

「お前…今日はどうしたその格好…」

「えへへっ♪どう？似合ってる？」

正直に言うと、それ以前にこんなに朝早くから俺の部屋にやってくる彼女はどうかしてる。俺が起きてると分かって来てるのか？

テレパシーかなんかか？いや…それはない。

そう言う彼女は、着ている制服を俺に見せるようにしてその場で一回転してみせる。彼女が着ているのは、この前に着ていた船の船員とは全く違う制服だった。なんとうか、もつと凄い船員が着てそうな制服である。

例えるなら、〇ン〇ースの海軍が着てる軍服だ。

「それ…なんの服だ？ どうせ曜の事だから、もつとすげえとこの船員が着てる制服だろ…？」

「おつ、お目が高いねえ〜お兄さん！」

俺の考えていた事が当たったのか、曜は帽子のツバをクイツと右手の人差し指で持ち上げ、そんなことを眩く。しかもドヤ顔で…。

お前にそんな風に言われてもなんとも思わないわ。

ただ何だか凄く楽しそうな笑顔を見せている曜は、その制服が一体何なのか、俺に教えてくれた。

「これね、あの海軍の制服なんだ！」

「ああ…何となく言われて分かったかも…」

曜が着ている制服は、海上自衛隊の制服。

上は白を基調とし、半袖。ネクタイは黒、肩には黒とキラキラした金の星と3つのラインがある。

下は丈の長い黒のスカート。

特に目立つものも何もない無地の黒のスカートであるが、特に目立つのは曜が被っている白地に黒のツバがある帽子だろう。

海上自衛隊の海将、海将補のみが被ることのできる制帽だ。コスプレすること以外、滅多にお目にかかることができない帽子なのである。

「これ、全部曜が作ったんだろ？」

「うん！帽子以外大変だった！」

「左様でございますか……」

帽子は通販で買い、それ以外は全部手作り。

本物に近いクオリティだった。曜が好きだからできる芸当であり、他には真似できないものだった。

「遼くんも着る?」

「いえ、結構です」

ただ悪いが、俺はそつちには興味ない。

作ってもらった制服を着るとか、自分で作った制服を着るとかに関しても、俺は全く興味はない。

それでとりあえずいい加減かもしれないが、彼女の左手に持っている紙が一体何なのか、そろそろ俺に教えてもらいたいところだ。

「それで曜、左手に持ってる紙ってなんだ?」

「紙? ああ! これだね!」

俺はそれを曜に尋ねると、彼女自身も少し忘れかけていたような声をあげ、左手に持っていた紙を俺に見せてくれた。

「私が持って来たのは……これ!」

彼女から手渡された紙を受け取った俺は、その紙に書かれていた内容を知る。それはどうやら、曜が大好きそうなものだった。

「帆船…日本丸…？」

「そう！横浜にある、帆船日本丸だよ！」

『帆船日本丸』

1930年に進水した文部省の航海練習帆船で、かつて「太平洋の白鳥」と呼ばれていた。

1984年9月16日にその役目を終えて退役した後、1985年4月より、日本丸メモリアルパーク内の展示ドックで浮体展示されている…らしい。

そしてその日本丸の展示は、通常の際は帆が畳まれて展示されているらしい。だけど年に12回、つまり月に1度、29枚もの帆を全ての広げる『総帆展帆』が実施されるのだ。





「本当に俺と2人で？」

「うん。本当は千歌ちゃんも誘おうと思ってたんだけど、千歌ちゃんあまり興味なさそうだし、無理やり連れてくのもあれかな〜って……」

まあ確かに、千歌ってこういうの興味なさそう。

「そうだな。千歌ならそうかも……」

逆に千歌が興味に引かれそうなのは、今やっているスクールアイドルに関しての一択だと思う。

時刻は午前7時半である。

とりあえず報告するなら、今日は家で過ごすことはなく、曜と一緒に横浜に行くことになった。

それで今は家を出て、沼津駅にいる。

電車が来るまでの間、俺と曜は駅のホームのベンチでゆっくりと寛いでいた。

「~~~~♪」

特に曜は、横浜について勉強中である。

鼻歌混じりに、黙々と…。

「ねえ遼くん！赤レンガ倉庫って、日本丸の近くにあるんだって！後で見にいこうよ！」  
曜は横浜の観光ガイドブックを読んでいて、その本で見ているのは横浜赤レンガ倉庫である。

日本丸以上の観光スポットで、たまにニュースキャスターの後ろによく写ってる。でかくて赤いレンガで作られた建物。

「別に良いけど、そこまで結構歩くんだぞ？」

「大丈夫！体力には自信はあるから！」

まあ……いいか。

彼女が見たいって言うし、付き合うしかない。

「そっか……」

「遼くんはいいの？どこか見たいところは？」

「俺か？まあ……今のところはないかな」

俺は特に横浜で見たいというところは今の所ない。繁華街とかに行つて、そこで曜と一緒に色々とかかを食べ歩きたいとは思つてるけどな。

横浜に着いたときに、曜にあと話してみよう。

『まもなく3番線に、電車が到着します。危ないですので、黄色い線より下がって、お待ちください』

ちよつとした計画を考えてるうちに、どうやら電車がそろそろ来るみたいだ。電車が来るというアナウンスのあと、曜はベンチから立ち上がる。

「じゃあ遼くん！今日はいっぱい楽しもう！」

「……そうだな。せつかくの休日だし、誘ってくれた曜に感謝して、今日は楽しむとするか！」

「うん！2人でたくさん、思い出作ろうね！」

そんな曜の笑顔での一言に、俺も思わず笑みが溢れる。そして同時に、今日は目一杯楽しむことにしようと思った。

本当なら家でのんびりしたかったが、たまには外に出て、曜と2人で出かけるのもいかなって、そう思った俺であった。

「それでは、電車に搭乘〜！」

「全く……やれやれだなあ……」

今日はなんとなく、曜に振り回されそうだなと変に考えせられた俺は、曜とともに電

車に乗る。

JR東海道本線で横浜駅まで、約2時間。  
長〜い電車旅の始まりである。

「とりあえず、横浜駅まで2時間だよな？」

「そうだね！何しよつか？」

「そうだな……寝る」

「ええ〜!? “曜”とお話しし“よう”よ〜！」

なんだその変なダジャレは。

俺が寝るのを阻止しようとして、そんなダジャレを言ったんだろうと思うけど、すごく寒いぞ。

ていうか、ダジャレのどこが面白いんだか…。

「そんな寒すぎるダジャレ言ったって、俺には全然通用しないぞ？千歌に習ってくるんだな…」

俺はそう言って、元祖ダジャレ少女の千歌に教えてもらえと曜に俺は告げ口をする。ただダジャレを言って、それから自分からネタばらしをする千歌に關しても、あまり彼女のダジャレは全然面白くないけどな…。

そしたらそれが、曜の癩に触ってしまった。

「あつ！そうやって千歌ちゃんまでバカにするんだ！遼くんにはこうしてやる〜！」  
「いだだだだだだ！痛いっ！痛いっば！」

曜は激おこポンポン丸になって、隣に座っていた俺の両頬を掴んでは、曜はグイッと力強く引つ張ってくる。

それに俺は声を上げずにはいられない。頬の両方には激痛が走り、だんだんヒリヒリと頬に赤みがかっているのが自分でも分かる。

俺は曜にやめろと言う。

「曜、やめろってば！」

「えへへ〜！やめないよ〜だ！」

たが曜は俺の言葉に耳を傾けず、逆に完全に遊んでいる様にしか見えなかった。

だから俺は、曜の両手を掴んで頬から無理やり引きずり離し、そのまま曜の両手を掴んでは、ボックス席の仕切り側の壁へと曜を追いやる。

「え〜いつ!やめろ〜っ!」

「うわあ…!?!//」

ボックス席の背もたれの裏に曜の背中が密着して、さらにそこに曜の両手を押さえつけ、俺は曜に面と向かって言い放った。

「止めろって言ったら、やめてほしいな…」

「う…うん。わ…分かった…//」

ずいっと、俺と曜との顔の距離はわずか数センチ。

俺の言葉に、首を何度も縦に振る曜。

曜は俺の話にやっと理解してやめてくれたものの、俺が曜の両手を離れたあと、曜の顔は少し赤く染め上げ、下に俯きっぱなしだった。



どうして顔を真っ赤にしていたのかは、俺にはよく分からなかった。

~~~~~※※※~~~~~

それから俺は横浜駅までの間、ずっと寝ていた。

横浜までの2時間をどう過ごすかなんて、寝る以外ありえない。部活の遠征でもそうだったし、それが俺の普通なのだ。

移り変わる景色を見て楽しむ人もいるだろうけど、俺は断固、寝るに尽きる。

それでいつの間にか曜の肩に、女の子の肩にもたれかかってしまうという、俺の人生で最大の大失態を犯してしまった。

そして勿論、曜に寝顔も撮られてしまった。

「曜、お願いだ！俺の寝顔の写真消してくれ！」

「や〜だね〜！消して欲しかったら、遼くんは私の言うことにちゃんと付き合ってもらうから！」

「そ、そんなあ〜!!」

横浜駅に、悲鳴が1つ鳴り響いた。

それで俺と曜は、休日で溢れかえった人混みの中を歩いていた。横浜で大都会で、沼津では考えられないくらい量の人がいた。

「うう…：人が多い」

「気をつけろよ。はぐれたら洒落にならないから」

人混みの間を、俺と曜はゆっくりと進む。

俺は後ろを見れば、人混みの中を歩くのに一苦労している曜の姿がある。とても険しい表情だった。

幸い、降りた駅のホームから乗り換える駅のホームには近かったから良かったもの、これが結構遠かったらやばかったかもしれない。

下手をすれば、逸れかねない。

「曜、大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

だから正直、すぐに逸れなくて良かった。

人混みの中を少し歩いたせいで、曜はちよつと疲れている様子がうかがえる。

曜の服は白地のたぼつとした長袖に、水色の超短い短パン。そして頭に赤色のニット帽を被った格好。おまけにピンク色のシヨルダーバッグを背負って、いかにもボーイッシュな格好である。

んでそれと人の熱気、そしてこの快晴と気温がマイナス面に働き、曜は人混みの中をちよつと歩いただけでも疲れていた。

「ほれお水。水分補給は大事なんだろう？」
「うん。ありがとう♪」

俺の飲みかけのペットボトルを曜に手渡す。

するとその時、俺はあることをふと思い出す。

だが、その時にはすでに遅かった。

曜はペットボトルのキャップを開けると、そのままぶつくりと膨らんだ艶やかな唇をペットボトルの先に付け、ゴクゴクとお水を飲んでいく。

俺は何を思ったか。それはこうである。

俺が口に付けたペットボトルの先に、曜の口がペットボトルの先に付いたということ。

つまり…間接キスである。

やべっ！それ今考えたせいで顔が熱い！

これバレないかな。バレないようにしないと！

「んっ？ 遼くんどうしたの？」

「い…いやっ！ なんでもない！／＼／＼」

顔が熱く、且つ、赤くなっている理由を隠すため、俺は曜から目線を逸らしながら答える。

曜に勘付かれてしまえば、あいつもいずれは気づいて顔を真っ赤にして気まずい状況になる。そうなることだけは是非とも回避したい。

「と、とりあえず電車乗ろうぜ！／＼／＼」

「えっ？ う…うん…」

ちょうど電車が来たから、俺は曜にそう言って話をはぐらかすようにそそくさと電車に乗る。

顔を真っ赤にしている地点で怪しまれてるかもしれないが、できるだけ自然に曜とやり取りをして、間接キスのことは忘れようと思う。

それをずっと引きずってたら、俺の精神がもたないかもしれない。うん…絶対

たない。

とりあえず、俺は曜とJR京浜東北線っていう水色版の山手線に乗って、横浜駅から日本丸に近い桜木町という駅まで移動した。

あれっ？間違っでないよな？？

「よっ！着いた！」

「ふう…やっ！と目的地に着いた」

うん、間違っではないようだ。

目的の桜木町という駅に着いた俺と曜は、電車から降りては足早に改札を抜けて出る。

その瞬間、ふわりと海の潮が鼻をつつく。

海がもう近いせいからなのか、海の匂いがする。

沼津の海と、同じ匂い。

隣の曜は、海の匂いをスウ〜と深く息を吸って、とても嬉しそうな表情を浮かべていた。

「うん。海のいい匂い」

「もう近くには海だからな。曜が楽しみにしている日本丸も、そろそろ見れるかもな」

俺は曜にそう告げて、それからトボトボと目的地である帆船日本丸へと俺と曜は歩みを進めていく。

沼津とは違って、横浜はとても車の量が多い。

都会つてこともあるけれど、だから俺は時に、よく車の行き違いを目で追っていた。沼津じゃあそんなこと全くしないのだが、不意に車を目で追ってしまった。

そうしているうちに、目的の船が見えてくる。

そう、『帆船日本丸』である。

「うわあ〜！大つきい〜！」

壮大すぎて、遠くからでも分かってしまうくらい、その船は巨大で存在感がとてつもなく大きかった。

「船体は白、帆まで白、本当に真っ白だな…」

パソコンやテレビの画面の中でしか見たことがないけれど、その船体は何処もかしこも純白という色に包まれていて、『太平洋の白鳥』と、そう言われていた所以なんだなど、改めて関心した俺である。

「こんな間近で見られるなんて、最高だよっ！」

船を見た途端、凄くキラキラと目を輝かせている曜に関しては、まあ……いつも通りである。

親父さんが船の船長だけあって、船にはものすごく興味津々な表情を見せていた曜は、俺の手を掴んで一気に駆け出す。

「遼くん！早く入場券を買いに行こう！」

「おわっ!!?こらっ、引っ張るなって！」

手を繋いでいるなんてことを一切気にしていなかった俺と曜は、そこから走って船へと向かう。

こいつは何かに夢中になると、途端に周りが見えなくなる時があるから、俺がしっかりとサポートしてやらないと大変なことになる。

でも、それもそれで楽しいんだけど…。

何かにはしゃいでいる曜の後ろ姿を見ていた俺は、不意に楽しくて笑みをこぼす。

それが曜に対しての、○○だとは知らずに……。

#22 曜と過ごす休日 後編

俺と曜は日本丸を見るため、まず見るための入場券を買いに来ていた。

入場料を見てみると、どうやら日本丸の隣に建っている『横浜みなと博物館』と一緒に見るかどうかで料金は変わるらしい。

簡単に言ってしまうと、日本丸と博物館、どっちも見ると1人600円と少々高いのだ。

「どうする？どっちも見ると？」

「ううん。今日は日本丸を見に来たから、日本丸だけの単館券にする」

「じゃあ日本丸の単館券をお願いします」

「では、2名で800円になります」

どちらか片方だけを見るなら1人400円と安い。

今日は曜の志望で日本丸だけ見に来たわけだから、入場料が400円分得した気分だった。

えっ?なんで俺が入場金を払うのかって?

曜に寝顔を撮られた件があるからな。察して。

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

入場券を受け取り、受付の係員のスラツとした綺麗なお辞儀に目が釘付けになっていた俺は、またさつきと同じように曜に手を引つ張られる。

「ほら遼くん!ぼさつとしてると置いてくよ!」

「おいしい!?だから手を引つ張るなって!」

早く船の中を見たいという、目をキラキラ輝かせて訴えかけている曜に、俺は成す術もなかった。

とにかく、入場券を買えたから船を見ることは出来る。ただ船も博物館同様。順路を

追って見学するわけだから、ゆっくり見ていく必要がある。
でも曜のことだ。それ関しては問題ないと思う。

「うわあ〜！すごい！」

今のあいつはまるで無邪気は子供だ。

「あまりはしやぐなよ。怪我するぞ！」

「分かってるよ〜！」

曜の言葉に、俺はため息をつく。

俺の話に対して分かったようなつもりで答えていると、あとで自分にバチが当たるとぞ。

はい、フラグ立てた。

「それにしても、スゲエなやつば……」

そして俺は日本丸の甲板の上に立ち、足元の甲板を見てすごく感激する。

やはり日本丸の甲板は、とても立派なものだった。

床はピカピカに磨かれ、開館前に磨いてからそんなに時間が経っていないのだろう。ところどころに木が濡れている場所をいくつか発見し、小さな水溜まりもいくつか発見した。

「えへっ♪えへへっ♪」

そんなのお構いなしの様子を見せていた曜は、はにかんだ笑顔のまま船首の部分へと走っていく。

曜を追いかける俺は、自分の上に張られた真っ白なマストを見上げながら、曜が向かっていった船首の方へと歩いていく。

時々、船の後方に振り返ったりと、あっちの方とか見てみたかったと思っていたけど、あくまで博物館だから順路通りに進む必要がある。

「遼くん！早くおいでよ〜！」

「はいはい。ちよつと待ってて…」

見学案内には船の後方も見れるって書いてあったから、船全体を見れることに胸躍らせた俺は、曜に急かされるように船首部分へと向かう。

「あはっ！あはははっ！」

「はあ……やれやれ……」

船首部分にやっとなり着くと、そこにはいつまでも笑顔を絶やさずに甲板の上をクルクル回っている曜の姿1人だけだった。

今日はまるで、この日本丸には俺と曜しかいない雰囲気させられる。

船の甲板の下にも見学できる場所があり、その下に他に見学している人はいるだろうけれど、無意識にそう感じさせられた。

2人つきりで船の上……ゴクリ。

だが、その束の間だった。

グラッ！

「うわあ!?!」

「……………っ! 危ない!」

さつき俺が立てたフラグが、見事に回収された。

曜は甲板から出ぼっていた円状の部分に踵が躓き、それにびつくりした曜は体勢を崩してそのまま背中から倒れる。

だが俺から見ると、曜は頭から甲板に倒れるように見えた。だからその瞬間を見た俺は、瞬発的に曜のもとへと走っていた。

距離は5メートル。

スライディングすればギリギリ間に合う。

曜はいきなりだったから、受身は取れない。
間に合えっ! 間に合えっ!

ズササササッ! ガシッ!

「ふう、間に合ったあ…」

「……………
／／／

とりあえず、超がつくほどにギリギリだった。

俺は曜の背中と、甲板の間に入り込むようにスライディングをして、なんとかことは免れられた。

今の状況を詳しく説明すれば、俺の右手が曜の背中を通って右肩を支え、俺の左手は腕と一緒に、曜の両膝の裏を持ち上げている状態である。

「大丈夫か？ 怪我はない？」

「う…うん。大丈夫…」

ともかく、曜も無事に怪我もなくて良かった。

スクールアイドルをやってる身なんだから、もう少し注意して行動してほしいもんだけどな。

「ほい。立てるか？」

「うん。ありがとっ…」

一旦、曜を抱きかかえたまま俺は立ち上がり、その後 ゆっくりと曜を下ろす。

俺の問いかけに曜は顔を赤く染めながら答えると、ボソツと小さな声で何かを呟いたが、俺にはなんて言ったのか分からなかった。

「んじや、日本丸の内部の見学といこうぜ」

「うんっ！全速前進であります！」

それで曜は仕切り直すように俺に向かってピシツと敬礼をすると、自分から先頭を切って、今度は船の内部へと歩き出す。

日本丸は下にあと2階くらいあるらしいから、順路を追って見学して行こうと思う。

「次は転けるなよ〜？」

「うっ、了解であります…／＼／＼」

曜にはちゃんと忠告したし、これで安心だろう。

これでもうやく、安心して見学出来そうだ。

また、当時に大海原を航海していた頃の乗組員のインタビュー映像や写真など、日本丸のあゆみや、練習船での訓練と生活などを紹介されていたところにとっても感銘を受けた。

この船の見学に費やした時間は、約1時間。
曜は満足感の溢れる笑顔をしていた。

「遼くん、楽しかったね！」

「ああ。歴史あるものをこんなに関近に見れるのはあまり滅多にないことだし、見れてよかったな」

「うん！」

俺もこの機会に日本丸という歴史のある船を見る事が出来てよかったと思ってる。

曜には誘ってくれたことに感謝しかない。

家に籠ろうとしていた俺が馬鹿だったよ。

休みの日は沼津から離れてちよつと遠くに出かけてみるのも、意外とありなのかもしれない。

もちろん1人ではなく、誰かを誘ってね。

グウウウウ〜！

「あっ……………／＼／＼」

「……………」

そして誰かさんのお腹の音がなると、恥ずかしかったのかお腹を両手で抑え、彼女は謝る。

「あ…あはは…ごめんね？／＼／＼」

「別にいいさ。ちようどお昼の時間だから、一旦俺たちが降りた駅まで戻るか。駅周辺になら食べられる場所とかあるだろうし…」

「そうだね。早速行ってみよう！」

時間はまだ正午すら回っていない。

今の時刻は11時半だけど、この後には赤レンガ倉庫にも行くから時間的にはちょうどいいくらい。

それに、日本丸に着いた頃は陽射しが強くて物凄く暑かったのだが、今では少し雲がかかってきて少し涼しくなってきた。

この天気が少しでも長く続いてくれれば、俺からしてみれば嬉しい限りである。だが、天気のことよりも先に問題がありそうだ。

「うわっ……人さつきより多くない?」

「だな。お昼近い時間だし、先にお昼を済ませようって俺たちと考えてることは一緒なんだな」

駅に戻った俺と曜だが、こここの駅に着いた時よりも人がだいぶ多く集まってきた。俺の見る限り、ここには昼食を食べられるところがたくさんあることが分かるけれども、果たしてすぐに食べられる場所は見つかるだろうか?

否、なかなか見つからない。

「お店、全部に長い行列が出来てるから、すぐには食べられなさそうだね……」

駅周辺のお店を回ってはいるものの、それなりに長蛇の列があり、なかなかすぐ食べられるお店はほとんどないに近かった。

ラーメン屋、中にはイタリアンレストランと、俺と曜が今までに見たこともないお店が数多くずらっと立ち並んでいて、沼津でも感じたことのない賑やかさがあつた。

これが、都会の街ってやつなんだな。

「でもそれだけ、どのお店も出している料理が美味しいってことなんだろうな」

長い行列を見て呟いていた曜に対して、俺はそう話したのはいいけれども、逆に不味いものは出さないだろうって、何故か俺は一人で納得してしまう。

それで俺は、曜と行列があまりないお店を探していた。且つ、お値段が安いところとかね。

時間が経つ次第に俺と曜は一言も話すこともなくなり、無我夢中にお店を探していたら、値段的に安いお店を曜は見つける。

「あつ、あつたよ！行列がないお店！」

「どれ？どこにある？」

「あそこ！『松屋』って書いてあるお店！」

俺は曜が指差す方向に目をしかめて見ると、明るい黄色い看板に深い青字で、間違いなく『松屋』と少し字崩れした漢字で書かれている。

文字の上には赤い丸があり、その赤い丸の中には少し小さめの黄色い丸と青い丸の2つがある。

何処かで見覚えあつたようなと、やや不確かな記憶をたどっていた俺は、ふとハッと思い出す。

あれ、沼津にもあるやつだっことをね。

「曜、あれは牛丼屋の松屋だ」

「えっ？……あつ、本当だ！」

俺は曜が指差していた看板のお店の正体を指摘すると、曜も俺みたいにかめつ面で

看板を見てはすぐにそのお店が「松屋」だつてことに納得する。

まさか曜が見つけたお店が、まさか三大牛丼チェーン店の松屋だと思わなかつた。

実は沼津にも松屋はあつて、俺と曜がまだ小学生の小さい時から松屋の牛丼を食べていた。

幸い、松屋のお店の中はガラガラ。

お店の中に入って、すぐに牛丼の注文が出来そうなくらいに人は少なく、行列も全くない。

お昼を食べるなら、ここしかない。

「どうする？変なお店に入って高いもの食べるよりはマシだと思うけど、やめる？」

「ううん！松屋にする！」

曜もその気らしい。

日本丸で1時間も見学していれば、自然とお腹が空いてしまうのも無理もないだろう。

「んじゃ、さっさとお昼食べて、さっさと赤レンガ倉庫に行くぞ。善は急げだ」

「了解であります！」

彼女自身も松屋がいいとむうくと一点張りだから、今日のお昼は松屋の牛丼に決定し、俺と曜はトコトコと躊躇うことなくお店の中に入って行く。

松屋は食券を買ってメニューを注文するから、入り口でまず食券を買わなければならない。

だけど俺も曜も、松屋に来たら食べるものはとくに決まっていたのだ。

「牛めしでいい？」

「いいよー！牛めし牛めし〜♪」

『牛めし』

松屋で最も食べられている一番人気牛丼で、俺も曜もそれを初めて食べてからずっと食べている。

曜に関しては嬉しそうにはしゃぐくらい大好きで、松屋に来たら絶対に牛めし。それ以外は絶対に食べないと、とてもプライドが高い。

それでお店の厨房に近いテーブル席に座り、注文した牛めしを待つ。正面に向き合う

ようにして俺と曜は席に座っていて、牛めしが来るまでしばらくの間はこの後について話をしていた。

「ねえ、遼くんはどこに行きたいの？」

「えっ？」

曜に振られたのは、そんな素っ気ない質問。

赤レンガ倉庫を見に行ったあと、多分俺の行きたいところに一緒に行こうと曜は考えているんだろう。

「私のわがままに付き合ってもらってばかりじゃ、遼くんだって楽しくないでしょ？」

「……っ！」

曜の話がまともすぎで、俺は一瞬ビビる。

俺の寝顔を写真で撮って、今まで散々俺を引っ張り回してきた彼女とは思えないほどの真剣な表情。

でも逆に、そんなことを言われてもすぐに行きたいところを思いつく俺ではない。

さつき曜が言った通り、俺は曜が行きたいところについて来ただけ。別に行きたいところはない。

だから俺は、曜の問いかけに対して否定した。

「何を急に……。俺は別に……」

「お待たせしました。牛めしになります」

だがそこに邪魔が入り、最後まで言えなかった。

2つの牛めしをお盆に乗せ、俺たちのテーブルにやって来た店員さん。にこやかに丁寧な口調でメニューの名前を言ったあとで、ゆつくりとこぼさないように2つの大きな器をテーブルに置いていく。

「キタ〜！牛めしだ〜！」

他のお客さんに鋭く痛い目線が送られているのも知らず、牛丼が来たくらいで大はしゃぎする曜。

俺はその姿にやれやれとやや呆れ、お店の店員は『ごゆつくりどうぞ』と、笑顔でそ

う言つて持ち場の厨房へと戻つていった。

「記念に写真撮つところ〜！」

「つておい！俺の食べるところ撮るなよ！」

パシヤ！

「えっへへ〜♪もう遅いのだ〜♪」

この日2枚目の被写体となり、牛めしを食べようとしていたところを曜に写真を撮られてしまった。

別にこういうときに撮られるのはいいんだけどさ、寝ているところを写真に収めるのはちよつとやめてほしいかな。

だつて俺の寝顔だし……。

「それでは、いったただつきまゝす！」

両手を合わせ、満面な笑顔でそう言い放った曜は、右手に箸を持ちガツガツと牛めしを食べ始める。

その姿はまるで大食いする人みたいで、器を左手で持ってガツツリとご飯とお肉を美味しそうに食べている曜を見ると、なぜか不思議と微笑ましいなど感じている俺がいる。

「もぐもぐ……もぐもぐ……！」

それでリスみたいに頬が膨らむまで口にご飯をかきこんでいる曜に対して、俺はゆつくりとご飯を口に運んだ。

うん、牛めしはやっぱ美味しい。

本当にその一言に限るよ。

それで松屋でお昼を終えた俺と曜。

次に向かうのは、横浜赤レンガ倉庫。

赤レンガ倉庫は、当時の明治時代の明治政府によって保税倉庫として建設され、建設当時の正式名称は『横浜税関新港埠頭倉庫』

長々とした名前で、当時の赤レンガ倉庫はそういう風に使われていたらしい。

その後、その役目は終えた倉庫は商業施設へと変貌した。1号館は展示スペース、ホールなどの文化施設。2号館は商業施設となり、最上階の3階にはレストランが立ち並んでいる。

そして倉庫の付近一帯は、主に広場と公園を備える赤レンガパークとして整備され、時々そこで屋台などが出されて盛り上がっているそうだ。

「(ぎ)馳走様でした！」

空になった器に箸を置き、両手を合わせる。

食べ物を食べられたことに感謝を込めて俺と曜はそう言葉に表し、曜は俺に向かって言う。

「じゃあ早速、赤レンガ倉庫に行こう！」

「そうだな。行くか」

「うんっ！」

すでに赤レンガ倉庫に行く気満々の曜。

牛めしを食べ、すっかり元気になったようだ。

それからレジで会計を済ませ店の外に出ると、空はまた陽射しが強くなっていた。でも風もあり、結構涼しいから体感温度的にはちょうどいい。

「じゃ、行くか」

「ヨーソロー！」

そして隣に寄り添う曜にそんな言葉を投げかけて、俺と曜は赤レンガ倉庫へと向かうことにした。

~~~~~※※※~~~~~

松屋から赤レンガ倉庫まで、大体30分くらい。

車が多く行き来する場所の歩道をてくてくと歩いて行くと、赤レンガと名の付く通りに赤レンガで作られた大きな倉庫が2つ見えてくる。

「あれか、赤レンガ倉庫」

「すっごい！大っきいね〜！」

あまりの巨大さにびっくり仰天してしまうほどだ。

平行に並ぶ2つの赤レンガ倉庫。そのうち小さい方が1号館で、大きい方が2号館。

建物の高さは20mで同じだけれど、違うのは建物の長さが違うだけ。大きいとか小さいとかあれかもしれないけど、区別するのはそれしかなかった。



「遼くん、先に1号館の方を見よう！」

「いいよ。時間もあるし、ゆっくり見ていこう」

曜は先に1号館の方を見たいと言うから、俺はゆっくりと見ていこうと曜のあとについていく。

あらかじめ開けられていた両開きのドアをくぐって中に入っていくと、どこもかしこも壁の内装は赤レンガで、びっしりと積み上げられていた。

そして当時の面影が残されたまま、この1号館の1階は多くのショップが立ち並んでいる。

ここは本当に素晴らしい建物だと、俺は建物の雰囲気を感じてそう思った。

「あつ！遼くん見て！」

「お土産やさんか。千歌と梨子に1個買ってくか」

「あと花丸ちゃんに、ルビィちゃんの分もね！」

中を2人で散策していたときに曜が立ち止まったのは、Depot【デポ】という主

にお土産を専門に売っているお店。

洋菓子などの食べ物はもちろん、付箋などの小物品やトートバックなどの大きなものなど、幅広いジャンルのお土産を取り揃えていた。

それでこの店の中で曜が1番に目に止まったのは、ここ赤レンガ倉庫でオリジナルのカステラである『横浜かすてら』だった。

「うわあ〜！美味しそう〜♪」

「また食べ物かよー！」

「いいじゃんいいじゃんー！」

赤レンガの色に扮した赤色のパッケージに身を包み、どう見ても美味しいと言わな  
いであろうそのカステラは、1人分でも大きいくらいに大きい。

だから俺は、曜に1つ提案を提示する。

「つてか、そのでかい食べ物をお土産にするなら、せいぜい2個ぐらいでいいだろう」

「えっ…？どうして？」

「1人でそんなにでかいカステラ食べられるか？その大きさだったら、5人で食べるなら

2個で十分。1個に対して3等分すればいいだけの話さ」  
「おお！遼くん名案だね！」

いや、別に名案じゃないと思うけど…。

赤レンガ倉庫オリジナルだけあって、1人で全部を食すなんてまず無理だとは思わず。少食っぽい梨子なら絶対に食べられなさそうな大きさだ。

「じゃあ2つ買って、学校で5人で食べるよ！」

「ああ。そうした方がいい」

「すみませくん！このカステラ2つください！」

この時、俺は財布を後ろ手に自分が払うんじゃないかって考えていた。だが、このカステラは曜が自分で払うって言い出したから、ある意味助かった。

まあ…そういうことよ。

1個1300円もするカステラを5個買ってみる？

6500円だぞ？払えるわけないじゃない！

「いや〜！いいお土産買えたぞ〜！」

お土産を買い、ウハウハ気分の曜。

買った2つのカステラは5人で分けて食べるそうだから、みんなで楽しそうにカステラを食べてる様子が容易に頭に思い浮かぶよ。

「じゃあ次行こう！」

「はいよ。ただし、ゆっくりな……」

それから俺と曜は1階のお店を見て回る。

ブランド品を取り扱うお店があったり、ジェルキャンドルというものを作る体験が出来るガラス細工のお店があったりと、お店を見て回るだけでも楽しいと思えるようなお店がたくさんあった。

「あつ、これ可愛い！」

「それって、錨のストラップじゃないか」

俺たちが次に見ているのは、Felicia!【フェアリシア】という主にアクセサリーやストラップなどの小物品を取り扱うお店。

その中で曜が見ていたのは、水色に染まった船の錨の形をしたストラップ。

それには小さい船の舵も付いていて、ある意味では海をイメージしたようなストラップだった。

「たくさん色があって、どれにするか迷うな」

「曜、買う前提なのかよ」

「うん！この中で2つ選ぼうと思ってるんだけど、遼くんは何色がいい？」

曜にストラップの色選びを手伝わされる俺は、仕方なくそのストラップの色選びを手伝う。

2つのうち1つは千歌とかへのプレゼントで、もう1つは曜が自分で付けるものだろうと思っていた俺は、棚にひっかけられたストラップを見回し、迷うことなく色を選ぶ。

「水色と、オレンジかな」

「分かった。早速買ってくるね！」

それで曜は俺が選んだ水色とオレンジのストラップを手に持ち、レジで会計を済ます。

正直、俺だけの意見で簡単にそれを決めてしまつて良いのだろうかと考えていた。例えそれがプレゼントなら、それは尚更だ。

ストラップが入った小さな紙袋を見せびらかして、曜は店の外で待つていた俺の元へと戻ってくる。

「お待ちせ〜！」

だが一番の幼馴染へのプレゼントを買えたことに喜びを感じていた曜を見ていた俺は、曜がそれで良いならそれでいいかと、安易に考えるのをやめた。

「んじゃ、次は2号館に行こうか」

「えっ？2階と3階は見ないの？」

「1号館の2階と3階にはもうお店とかないんだ。イベントがあるときとか、そういう時にしか上には行けないらしいよ」

俺はさつき曜が会計を済ませている間、実は1号館の案内板を見ていた。

1号館の2階はクリエイティブフロアで、3階はホールフロア。イベントがあるときのみには2階や3階は行けなくて、この1号館は1階しかほぼ開いてないようなものだった。

それを彼女に説明をすると、それに納得すると同時に、驚きを隠せない表情を見せていた。

「そうだったんだね。全然知らなかった」

「でも2号館はちゃんと3階まで行けるらしいから、2号館の方がもっと楽しめるんじゃない?」

「そうだね!」

大体、2号館が主に商業施設だって Wikipedia さんに書いてあったし、それで間違いはないだろうから、2号館に行ってみた方がいいと俺は思う。

「それじゃあ2号館に行ってみよう！」

曜は腕を高々を掲げ、意気揚々と2号館に向かう。

1号館とは打って変わって、2号館は主に雑貨を取り扱うお店や、服を扱うお店。レストランもあって、本当に普通によくある商業施設のようだった。

まるで…街の中にショッピングモールがあるかのように、この赤レンガ倉庫の2号館にはたくさんのお店が立ち並んでいた。

「本当にショッピングモールみたい……」

「商業施設だっけ書いてあったからな。初めてきた俺たちからしてみれば驚きでしかない」

「本当だよね」

大きな倉庫がたちまち商業施設に変わるなんてことが、まず信じられない。

それに、2号館のほうが1号館よりも人が多い。

だから逸れないように、俺は曜の手を掴む。



ギユツ

「えっ？」

「人が多いし、逸れないようにしないと…」

「そ…そうだね…：：：／／／」

突然、自分の左手が俺の右手に掴まれていることに驚いていた曜だったけど、手を掴んだ理由を耳にした曜はギユツと俺の手を握り返す。

まあ、満更でもなさそうな表情をしてる。

「んじゃ、ゆっくり見ているこう」

「うんっ！全速前進〜！」

俺と曜は最初の一步を同時に踏み出し、横浜赤レンガ倉庫2号館の中をゆっくり歩いて見ていく。

服を試着しあつてアドバイスしあつたり、アクセサリーショップによれば曜がアクセ

サリーを試しにつけてキャツキャしたりと、曜と一緒に楽しい時間を過ごした。でも俺と曜も2人での楽しい時間は、あつという間に過ぎ去っていった。

「はあ〜！疲れた疲れた〜！」

赤レンガ倉庫を後にした俺たちは、沼津に帰るために横浜駅に行かなければならない。

それで俺と曜は、最初に降りた桜木町駅のホームにいる。ベンチに腰掛け、歩き回って疲れた体を一時的に休ませていた。

時刻は午後6時。

消えていた街の街灯がちらほらと付きはじめ、横浜の街の夜の姿がじわりじわりと現れていく。

だけど今回、俺と曜はその姿を目の当たりにすることはできない。理由は簡単で、早く帰らないと怒られてしまうから。親にね…。

「ああ〜あ、夜景見たかったな…」

「また来ればいいさ。街は逃げたりしないよ」

夜景を見れず、捻くれてしまう曜。

都会の夜の街を俺も見てみたかったけれど、今回は我慢。またここに来て、今度はちやんと夜の景色を眺めたい。

『まもなく3番線に、京浜東北・根岸線、大宮行きが参ります！危ないですので、黄色い線より下がってお待ちください！』

電車が来るアナウンスが流れ、そろそろ帰る準備をしようと立ち上がると、曜がいきなり声を上げる。

「ああ！忘れてた！」

「えっ？ええ？」

曜は突然そんなびつくりするくらいに声を発して、俺は一体何を忘れたんだろうと思っていた。

すると曜は、カバンからあるものを取り出す。

それはなんと、1号館の*F e l i c i a*!というお店で買った錨と舵のストラップが2個入った紙袋。

どうしてそんなものをとりだしたんだ?と思っていたら、曜はそのストラップが入った紙袋をいきなりガサゴソと開け始めたのだ。

「おい!何してんだよ!」

「いいから!」

その彼女の行動に驚愕し、俺は問い詰めるも彼女はその問いに対してをはぐらかす。

彼女に疑念を抱いた俺は、どうして買ったものの袋をいきなり開けるんだ?と、彼女の行動に対して不思議としか思えなかった。

そしてら曜は、意外な行動に出る。

ただそれは、思いもよらない行動だった。

「はい!遼くんにプレゼント!!」

「えっ?ええ!?!」

彼女はオレンジ色の锚のストラップを袋から取り出すと、そのまま俺に差し出してきたのだ。

詳しいことは言わず、ただプレゼントと突然に…。

驚きを隠しきれずにいる俺は、どうしていきなりプレゼントと渡してきたのか考えていると、曜はまた話し出す。

「これ…実は、遼くんへのプレゼントなんだ…／＼／」

「えっ!? だってこのストラップ、千歌にプレゼントするはずじゃなかったのか?」

曜の話によると、実はこのストラップは本当は俺が貰うということだったらしい。

何故、今までそれを隠してたんだって思うよ。

それで俺が思っていたことをそのまま言葉にして彼女に尋ねると、曜は首を横に振り、そしてまた彼女は尋ねてくる。

俺に思い返すよう仕向けて…。

「ううん、違うよ。遼くんは分からなかった? 私、あのとき遼くんに対してなんて聞いた

「？」

「えっ……？」

俺は曜に言われるまま、あのときに曜に聞かれた言葉を思い返す。ストラップの色を選ぶ前、曜に尋ねられたキーワード。

『この中で2つ選ぶうと思ってるんだけど、遼くんは何色が“いい”？』

ああ……そっか。そういうことかよ。

これは実際、誤解されてもおかしくはない。

「あつ……そういう事かよ……」

「えへへっ♪理解できた？」

俺が思い出した表情を見せると、曜は俺の表情を見て途端に笑い出す。このヨーソロー野郎……変な誤解させやがってえ……！

「全く…変な誤解させやがって……」

「遼くんが勝手に誤解してただけでしょ？」

「んだと〜！こうしてやる〜！」

あまりにも曜は俺を馬鹿にしてくるから、俺は両手を使って曜の脇腹をくすぐった。

「あははっ！遼くんくすぐりたいよお〜！」

「お前のせいだ〜！」

そうさせたのは曜だ。

俺はちよつとした怒り任せに脇腹から上の腋の部分もくすぐり、彼女が許すまでくすぐった。

「とりあえず、これは貰つとく〜！」

「えへへっ♪ありがとう遼くん〜！」

そしてとりあえず、曜に手渡されたオレンジ色の錨ストラップは貰うことにした。曜

からのそのプレゼントは、私の我儘に付き合ってくれたそのお礼。

あの言葉を思い出した時と同時に、プレゼントの意味もなんとなく分かった。

ただそれをこの時間まで隠さないで、買ったときに渡してくれれば良かったのにと  
思っていたら、いつの間にか電車が来てしまったようだ。

「はあ……んじゃ……帰るか？」

「うんっ！帰宅開始であります！」

荷物持ちは当然……俺。

といつても買ったのは、カステラだけ。

だからまだ良かった。

他にいろんなものを買ってたら、俺の身は大変じゃ済まない。多分……死ぬんじやないか？

「遼くん、ちよつと耳貸して？」

「えっ？なんで？」

「いいから貸して」



すると曜はまた変なことを言ってくる。しかも今度は耳を貸して欲しいというお願いだった。

正直、耳打ちするほど重要なことを聞かされるのか思いながら、俺は渋々と曜の口の高さまで体をかがめ、彼女に耳を貸す。

一体何を聞かされるのか？ そう思った瞬間

チュツ  
♡

耳ではなく、頬に感触を感じた。

「……?!?!?!」

俺は感触があつた左頬に手を当て、曜の顔を見ると、彼女の顔は茹でタコのように真っ赤に染まり、そして曜は赤面しつつ言った。

「今日は…ありがとう♪／＼／」

「あ…ああ。どう…いたしまして…／＼／」

曜の恥ずかしがりながらも笑顔で言ったその言葉に、俺も顔をほのかに赤くしてそう  
言っ返す。

ただ頬にキスされた俺は、しばらくの間ずっと頬に残るキスの感触を忘れられずにい  
た。

何せ曜から頬にキスをされるのは……

今までの人生で初めてのことだったから…。

## # 2 3 墮天使と上がらない順位

とあるマンションの一室

「……感じます。精霊結界の損壊により、魔力構造が変化していくのが……。世界の趨勢が天界議決により、決していくのが……」

部屋はカーテンを締め切り真っ暗。

電気もつけず、唯一の明かりは一本の蠟燭のみ。

その蠟燭の前に立つ私は、墮天使のような真っ黒な衣装に身を包み、私の生放送を見ているリトルデーモンたちに、ことを呟いていた。

「かの約束の地に降臨した……。墮天使ヨハネの魔眼が、その全てを見通すのです。全て

のリトルデーモンに授ける…墮天の力を！」

最後の話を終えた私は、見てくれているリトルデーモンたちの前でフツ！と、火を灯していた蠟燭に息を吹きかけ火を消す。

それと同時に画面は切り替わり、生放送は終了。

無事に何事もなく、生放送は終わりを告げた。

のだが……

「やってしまった〜！」

我に帰った私は、そう部屋で叫んだ。

またやってしまったと、締め切っていたベランダのカーテンを開き、部屋からベランダに出て、私は海に向かって叫んだのだ。

「何墮天使って？ヨハネって何？リトルデーモン？サタン？いるわけないでしょ、そんなも〜ん！」

実は時刻は午前6時頃。

こんな朝早く、私は生放送を行なっていた。

「もう高校生でしょ津島善子！卒業するの！そう…この世界はもつとリアル！リアルこそ正義！リア充に私はなる！」

私の名前は墮天使ヨハネ！じゃなくて…！

私の本当の名前は、津島 善子。

浦の星女学院に、通って「いた」高校1年生。

【貴女も墮天使ヨハネと契約して、私のリトルデーモンにならない？うふっ♪】

うわあ〜！もうっ！やっぱりこんなの嫌っ！！

あの時を思い出すだけで嫌になる！

「ああ〜！！もう何であんなこと言ったのよ〜！！学校行けないじゃなくいい！！」

なんであんなこと言っちゃったんだろう。  
私のバカ。これじゃもう…学校に行けないわ…。

~~~~~※※※~~~~~

「うーん、今日も上がってない」

部室には、千歌ちゃんの困った唸り声。

でもそれはもう仕方のないことで、今みんな練習前にAqoursのランキングがどのくらいなのか見ているんだけれど…。

Aqoursのランキングは、今のところ4768位。

ランキングに載ってはや1週間が経つんだけど、まだまだ底辺に近いランキングだった。

「昨日が4856位で、今日が4768位かあ…」

「まあ、落ちてはないけど…」

今の順位に不満そうな千歌ちゃんと梨子ちゃん。

「ライブの歌は評判いいんですけど…」

ルビィちゃんも今のランキングの状況を見て、険しい表情と声でそう呟く。

ライブの評判は確かに良いとは言えるけど、それ以外の所でインパクトのあるものはなかった。

「でも千歌ちゃん、1日で100位くらい上がってるから大丈夫だっていう考えはダメなの？」

「ダメだよ。もっと注目されないとラブライブには出られないんだから！」

私は千歌ちゃんに対して、そんな考えを持って口に出してみただけれど、千歌ちゃんは私の意見を否定。もっとランキングを上げて、ジャンジャン人気者になりたいみたい。でも、ランキング以外の所では評判はいい。

「それに、新加入の2人も可愛いって！」

「えっ!?! そうなんですか!?!」

ルビイちゃんと花丸ちゃん。

2人がメンバーに加わったお知らせをホームページに掲載したら、たちまち2人の人気は急上昇。

千歌ちゃんから話を聞いたルビイちゃんは、嬉しそうに笑顔で聞き返す。

「特に、花丸ちゃんの人気が凄いだよ！」

千歌ちゃんはパソコンをみんなに見せるようにしてくれと、確かにコメントには花丸ちゃんへのコメントばかりだった。

「花丸ちゃん！応援してます！」

「花丸ちゃんが歌つてるところ早く見たいです！」

私はその書かれているコメントを読んでいく。

千歌ちゃんの言う通り、5人の中では特に花丸ちゃんへのコメントがたくさん書かれていた。

「ねっ！ねっ！大人気でしょ!？」

まるで自分のことのように喜んでいる千歌ちゃん。

とりあえず、ランキング以外でメンバー内での人気があることが分かった。ルビィちゃんや花丸ちゃんもまだ入ったばかりだけど、みんなからとても受け入れられてる印象だった。

すると、当の人気メンバ―N.O. 1である花丸ちゃんは何だか不思議そうな表情をしながら、フラフラとパソコンの画面へと寄っていく。

そして花丸ちゃんから発せられた開口第一声の言葉に、私たち全員は衝撃を受けた。

信じられない、あり得ないと思った。

「これが、パソコンずらか？」

「ええ!?そこっ!?!」

まるでパソコンを初めて見ましたという発言をした花丸ちゃんに対し、私は思わずツツコミを入れる。

花丸ちゃんの目はパソコンの画面ではなく、パソコン自体に目を輝かせていた。

「これがあの『知識の海』へと繋がっているとされている、『インターネット』!?!」

花丸ちゃんから出てきた言葉の数々は、まるで過去の人が現代にタイムスリップしてきて、未来のものに触れて驚きを隠せないという感じだった。

自分がメンバー内で一番人気なのに、コメントよりパソコンに反応する花丸ちゃん。千歌ちゃんも梨子ちゃんも私と同じように驚いていたけど、梨子ちゃんは冷静に対処してくれた。

「そうね。知識の海かどうかは知らないけど…」

「わあ〜！すごいぞら〜！」

でも、梨子ちゃんもちよつと驚きを隠せていない。

この歳、高校1年生で初めてパソコンを見る人なんて初めて見たし、何よりも普通なら、学校の授業とかでパソコンぐらい使うと思ってた。

「もしかして花丸ちゃん、パソコンとかって使ったことないのかな？」

「まさか。流石に学校の授業で使うでしょ」

千歌ちゃんが自分の持論を展開すると、梨子ちゃんは私が考えていたことをそのままに話して、千歌ちゃんのその意見に反論をする。

それでその話の間に割って入ってきたのは、花丸ちゃんを誰よりも知っているルビィ

ちゃんだった。

「実は花丸ちゃん、お家が古いお寺で、電化製品とかもほとんど無いらしいんです…」
「そうなんだ！」

「はい。おじいちゃんが古風な人らしくて…」

ルビイちゃんの説明に、千歌ちゃんは驚く。

ルビイちゃんは苦笑いしながら花丸ちゃんの家事情を話してくれて、それから自分で目の当たりにした花丸ちゃんの姿のことも話してくれた。

「この前沼津に行つたときもそうなんです。手をかざせばお水が出る洗面器や、手を乾かす機械を見てとても驚いてました。『未来ずらく〜！』って…」

ルビイちゃんの話の聞いていると、本当に花丸ちゃんは家電製品とかに情報は疎いようだった。

もしかしたら私が愛用しているヘアアイロンを花丸ちゃんに渡したら、きつとそれをどう使えばいいのか分からないって言い出すと思う。

教えたら教えたで、『未来ずら!』って言うかも。

「逆にここまで来ると凄いわね。ここまで家電製品とかに疎いなんて……」
「でも、お家がそうなら仕方ないよ」

梨子ちゃんも、花丸ちゃんの事情を聞いてはすごく驚いている。元々都会っ子だった梨子ちゃんからしてみれば、信じられないの一言だろう。

「これ、触っても良いですか!？」

「もちろん! いいよ!」

「わあ〜! 未来ずら〜!」

花丸ちゃんはパソコンに対して感動の声を上げながら、花丸ちゃんは自分の両手をゆっくりパソコンに近づけていく。

千歌ちゃんは花丸ちゃんにパソコン触ってもいいよって許可したけど、何だか嫌な予感がする。

するどころか、する(断定)だと思う。

「んっ?」

それから花丸ちゃんは手をピタッと止め、パソコンで何かに対して疑問の声を上げる。

その瞬間、私は嫌な予感がした。

そしてそれが、すぐさま現実になった。

「……ずらっ!」

ポチッ!

そんな音が鳴るように花丸ちゃんはキーボードのボタンを押すと、付いていたパソコンの電源が突然落ち、画面が一瞬で真っ暗になる。

「えっ!?!」

「い、いきなり何を押したの!?!」

突然パソコンの画面が真っ暗になったことに慌て、梨子ちゃんは花丸ちゃんにパソコンに一体何をしたのかを尋ねる。

それで梨子ちゃんの慌てぶりを見た花丸ちゃんは、疑問の表情に引きつった笑みを浮かべて答える。

「えっ……っただけ光るボタンがあるな〜って…」

ビュンツ！

「……………えっ?」

その瞬間、私と梨子ちゃんは勢いよくパソコンの元に飛びつく。私がいた位置からパソコンまでの距離はほとんどないのに、花丸ちゃんの髪がブワツてなびくくらいに風が巻き起こった。

「大丈夫!?!」

「衣装のデータ保存してたかな〜」

私はシャツトダウンしたパソコンを再起動させて、衣装を考える参考として保存していた衣装の画像のチェックを始める。

花丸ちゃんは今の状況を見て、自分がまずい方向に関与してしまったのではないかと、ガタガタと壊れかけのロボットのようになんげいしながら振り向く。

「マ…マル。何かいけないことしました？」

「あはは…大丈夫大丈夫…」

「んん〜！」

花丸ちゃんは目を潤ませ、申し訳なさそうにこちらを見つめる。でも大丈夫。シャツトダウンをしただけで、パソコンが壊れたわけじゃないから。

「ふう…なんとか大丈夫だったよ！」

「良かった〜！」

何とか衣装の参考の画像は残ってたし、他にも何かデータが飛んだわけでもなかったから、とにかく何事もなかったから良かった。

「ごめんなさいずら。マル……」

下に俯き、申し訳なさそうに謝る花丸ちゃん。

それで私は、花丸ちゃんにパソコンの使い方を教えたほうがいいかもしれないと思っ
た。

その方が、花丸ちゃんにとっていい機会になる。

「大丈夫。あとで使い方を教えて上げるよ！」

「本当ですか!?!ありがとうございます！」

花丸ちゃんは私の言葉を聞いて笑顔になる。

そして千歌ちゃんは、私と花丸ちゃんのやり取りを見てから練習を始めようと言
い放った。

「じゃあ、練習始めよっか！」

「ええ！そうしましょ！」

梨子ちゃんもその意見に賛成し、千歌ちゃんと梨子ちゃんとルビィちゃんの3人は先に部室を出て屋上へと向かっていく。

「私たちも行こうか？」

「あつ、曜さん！」

私もあとから3人を追って屋上に行こうと思つて所を、すぐ後ろにいた花丸ちゃんに止められる。

「あの一！今から練習前でいいので、少しだけ…このパソコンの使い方、教えてくれませんか？」

「えっ？練習前に？」

花丸ちゃんに言われた内容は、練習前にパソコンの使い方を教えて欲しいということ

だった。

「どうかお願いしますずらっ！」

「う……う……」

今から練習なのに、その前に使い方を教えて欲しいと願う花丸ちゃんに私は驚いた。目を輝かせ、教えてくださいと言わんばかりに鬼気迫って私を見つめてくる花丸ちゃんの気迫に、私は負けたのであった。

「分かった。練習前に少しね？」

「あ……ありがとうございます、曜さん！」

花丸ちゃんの思いに観念し、練習前に少しだけパソコンの使い方を教えようと思った私は、テーブルに置かれているパソコンを左手に抱える。

それから私は、花丸ちゃんに言った。

「じゃあ、急いで屋上に行こう！」

「おおっ！こんなに弘法大師…空海の情報が！」

「うん！ここで画面切り替わるからね！」

「すごいぞら〜！」

屋上で、私が付き添いながらパソコンの操作の仕方を教えている。さつきみたいに押し間違いでシャットダウンにはならないと思うけどね。

それで花丸ちゃんに少しパソコンの使い方を教えたら、花丸ちゃんはすっかりパソコンにハマっちゃったみたい…。

真言宗を開いた人で知られる空海をパソコンで調べると、画面に一杯にその空海のことが出てきて花丸ちゃんは凄く驚いている。

ただどその横で、梨子ちゃんは不満気に話す。

「もう…今から練習なのに…」

今から練習なのにその前にパソコンをいじること、梨子ちゃんは膨れっ面でこちら

を見つめていた。

ただどそこに、花丸ちゃんが発言する。

「ごめんなさい梨子さん。マル…どうしてもパソコンの使い方を知りたくて……」

「だから、許して梨子ちゃん」

「うっ……」

目を潤ませ、そう嘆きかけてくる花丸ちゃんに梨子ちゃんは言葉を詰まらせ、『やめなさい』と、言うにも言えない状況にさせられた。

そこへ私もそれに追い打ちをかけ、梨子ちゃんに対して許してもらえるように話すと、梨子ちゃんはため息を一つ付き、両手を腰に当てて言う。

「仕方…ないわね。5分だけよ…」

「っ！ありがとうございます！梨子さん！」

「えへっ！ありがとうございます！」

何とか、梨子ちゃんからの許しは得てもらえた。

それから千歌ちゃんがまたランキングのことで再度話を切り出す。

「それより、ランキングどうしようかだよね。こんな何も無い場所の地味 & 地味

& 地味！なスクールアイドルだし…」

「毎年、スクールアイドルが増えてますから」

何も「地味」を3回繰り返し返して言わなくてもいい気がするけど、毎年スクールアイドルが増えているとルビィちゃんが言うには、確かにランキングをどうにかしなければならぬ。

けどそこに、梨子ちゃんが千歌ちゃんに言う。

「そんなに目立たないとダメなの？」

「やっぱり人気は大切だよ」

梨子ちゃんの…千歌ちゃんの言葉に対しての質問に、千歌ちゃんはそう答える。

「目立つこと……」

私はボソツと、そんな素っ気ない声を上げる。

そんな時、梨子ちゃんが意見を出す。

「そうね。例えば、グループの名前をもっと奇抜な名前につけ直してみるとか？」

「奇抜なグループ名……」

その梨子ちゃんの見解に、私は梨子ちゃんが思いついたあのグループ名を思い出す。だがそれを思いついた瞬間、千歌ちゃんが言う。

「スリーマーメイド？」

久しぶりに聞いたようなそのグループ名。

千歌ちゃんがその名前を口にした途端、名付け親である梨子ちゃんは顔を真っ赤にして、恥ずかしくてたまらない表情をしてみせる。

「あ……あれは無しって言ったじゃない！／＼／＼」

「あつ、でも今はファイブか……」

話を蒸し返され、梨子ちゃんは怒る。

だけどそれを気に入っているルビイちゃんがいた。

「ファイブマーメイド……♪」

私たち5人が、人魚の格好をしている想像をしていそうなルビイちゃん。それを横目に、梨子ちゃんはまだ千歌ちゃんに対して怒っている。

「何であの話を蒸し返すのよ〜!」

「あつ、でも踊れないじゃん!」

「千歌ちゃん……」

でも千歌ちゃんは聞く耳を持たず、マーメイドは人魚で足がないということに気づく。

そこへルビイちゃんが提案をする。

「じゃあみんなの応援があれば、人魚のヒレから足になる設定というのはどうでしょう？」

「いい！その設定良いよルビィちゃん！」

いつの間にか、千歌ちゃんとルビィちゃんの2人で勝手にファイブマーメイドの名前の設定を考えていた。

笑顔を見せる千歌ちゃんとルビィちゃん。

でも、そこには唯一無二の欠点がある。

それを千歌ちゃんとルビィちゃんに、私は話す。

「でも千歌ちゃん、ルビィちゃん。足になる代わりに、声がなくなっちゃうんだよ…？」

「ああ…!? そうだった〜！」

「そしたら私たち…歌えなくなっちゃう…」

「悲しい話だよねえ、人魚姫……」

悪戯つぼく2人に話したら、千歌ちゃんは頭を抱えてしゃがみこみ、ルビィちゃんは声がなくなることに身を震え上がらせる。

声がなくなっちゃったら、スクールアイドルが出来なくなっちゃうからね。

「とにかく！その名前はもうなしっ！」

「ええ〜？どうして〜？」

「だから、それは単なる思いつきで！」

千歌ちゃんと梨子ちゃんは『スリーマーメイド』のことでそんなやり取りをみせていた。

そういうえば、人魚のヒレが足になる代わりに声なくなるっているのは、人魚が人間に「恋」をするお話なんだよね。

人間に対して恋が叶わなくて結婚できなかつたら、2度と人魚に戻れなくなつて海に泡となつて消えてしまう。とっても悲しいお話なんだ…。

「…？善子ちゃん？」

「んっ? どうしたの?」

「あつ、いえ…なんでもないです…」

するとふと、パソコンに夢中だった花丸ちゃんが声を上げる。私は彼女に尋ねたが、はぐらかされてしまったので花丸ちゃんが見ていた方向を見る。

だけど、誰もいなかった。

そしたら花丸ちゃんはその場で立ち上がり、みんなに向かってトイレに行つてくると言い出す。

「あの…マル、お手洗に行つてくるすら」

「う…うん! 行つてらっしゃい!」

梨子ちゃんに肩を掴まれ、グラグラと揺さぶられていた千歌ちゃんはそれに返事すると、花丸ちゃんそそくさと屋上を降りていった。

「じゃあ花丸ちゃんがトイレから戻ってきたら練習始めましょう」
「うん！今日も練習頑張るぞ〜！」

花丸ちゃんが戻るまで、しばしの休憩。

練習をする気満々の千歌ちゃんを横に、私は練習前の準備運動を始めるのであった。

#24 普通になりたい堕天使

間違いない。確かにマルは見たずら。

屋上をチラツと見ている善子ちゃんの姿を…。

「ハア…ハア…どこ行つたずら？」

みんなにはお手洗いと嘘をつき、実際は善子ちゃんを追いかけてきちやつたから、善子ちゃんを探している時間はあまりかけられない。

善子ちゃんの姿が見当たらない中で、マルがやつて来たところは学校の1年生の教室前の廊下。

どうしてここなのか？

それは…マルの勘ずら。

善子ちゃんはマルと同じ1年生だし、他に隠れる場所といってもほとんどの教室は鍵が掛かっているから一度職員室に行かないといけない。

教室も使わないときは、普段は鍵がかかっている。

だから善子ちゃんが隠れるなら、きつと廊下の外側にある戸棚だと考えていた。

「あつ、あれは……」

すると案の定、キッチリ閉まっている戸棚の中に、不自然に半開きになっている戸棚があった。

「ふふつ、善子ちゃんたら……」

私はゆっくりそこへ忍び寄り、不自然に半開きになっていた戸棚を全開に開けると、中には体育座りで縮こまっている善子ちゃんの姿があった。

「……学校、来たずらか」

「うわあ!?!」

マルは戸棚に隠れてる善子ちゃんの顔を覗き見ると、善子ちゃんは驚いた声を上げ、戸棚を飛び出して反対側の壁にもたれかかる。

それで善子ちゃんは言い訳をする。

「来たってというか、たまたま……通りかかったから寄っただけで……」

偶然に通りかかったと言っても、善子ちゃんが着ている服装は学校の制服。本当はたまたまではなく、最初から学校に来るつもりだったんだと思う。

屋上にまで顔を出してきたのだから、善子ちゃんはいつもの事をしに来たんだと思う
ずら。

「本当にたまたま……?」

「べ…別にいいでしょ!そんなこと!」

マルは善子ちゃんに尋ねたけど、善子ちゃんはマルの問いかけに一切答えてくれなかった。

はぐらかさちやつたずら…悲しいずら。

そう心の中で悲しんでいるとき、壁にもたれていた善子ちゃんは立ち上がり、制服のスカートについている埃をパンパンと落としながら尋ねてきた。

「それより、クラスのみんななんて言ってる？」

「えっ？」

尋ねてきたのは、クラスのみんなのこと。

善子ちゃんがその質問をしてきた意味に関しては、マルははつきりと理解していた。

それが、善子ちゃんが学校に來ない理由であることも、マルはちゃんと分かっていた。

ただ、善子ちゃんの質問には主語たるものの言葉が抜けていたから、マルはわざと知らないふりをし、わざと本人から打ち明けるように仕向けた。

そして善子ちゃんは自分から打ち明けてくれた。

「私のことよ！変な子ね！つとか、ヨハネって何！つとか、リトルデーモンだって、ぷぷつとか！」

「はあ……」

善子ちゃんはクラスの子が自分に対して思っていることを表現する。それは完全に、自分の自己紹介の時に言ってしまった後のイメーヅで捉えていた。

『墮天使ヨハネ？何それ…ふふっ、ダサっw』

『厨二病だよねアレw』

『自分は墮天使とかw 頭馬鹿じゃないのw』

きつと、善子ちゃんの頭はあれからずっとこんな感じのことを考えているだと思ふ。

それに、さっき私は善子ちゃんの質問に呑気な声で返事をしてしまったから、善子ちゃんはその返事を真に受け止めてしまった。

「そのリアクション、やっぱり噂になってるのね」

がつくり肩を落とし、項垂れる善子ちゃん。

そして善子ちゃんはまた、戸棚に逃げ込む。

「そうよね…あんな変なこと言ったんだもん。終わった！ラグナロク！まさに…D e a
d O r A l i v e！」

ガタンツ！

と、善子ちゃんは戸棚を閉めて閉じこもる。
そんなに悲嘆しなくてもいいのに…。

「それ、 “生きるか死ぬか” って意味だと思わずら」

「別にいいでしょ〜！」

でも、幼稚園の頃から本当に変わってないずら。

マルは善子ちゃんに本当の意味を指摘すると、善子ちゃんは意地を張って声を上げる。
る。

そしてマルは、善子ちゃんに言った。

「ていうか善子ちゃん、誰も気にしてないよ？」

「でしょー！……えっ？」

クラスのみんが思っていることを代表し、マルは善子ちゃんにそれを伝えた。

「それより、みんなどうして来ないんだろうとか、悪いことしちやったのかなって心配してて……」

殻に閉じこもるように戸棚の中にいる善子ちゃんにマルは感情をも込めて伝える。

善子ちゃんはマルの言ったことに対して信じがたい反応をみせ、それが本当なのかマルに尋ねてきた。

「……本当？」

「うんっ！」

「本当ね？嘘じゃないわよね？天界墮天条例に誓って、嘘じゃないわよね？」

戸棚をちよこつと開けて、顔を出す善子ちゃん。

2度も聞かなくても分かると思うけど、本当だよ。マルの言うことは嘘じゃないぞ

ら。

「……ずらー！」

マルは善子ちゃんの問いかけに『ずらっ』と、解釈するなら『本当だよ』と答える。そしたら善子ちゃん、凄く元気になった。

「よし！まだいける！まだやり直せる！今から普通の生徒でいければ……！」

自分のクラスのみんなが、自分に対して思っていることをようやく信じた善子ちゃん
は、戸棚を思いつきり開けて飛び出してくる。

自分の心の中で、もう一度“普通”の高校生になるために決心を決めた善子ちゃん
は、突然戸棚を開けたことにびっくりしてその場で尻餅をついているマルに対して声を
かけてくる。

「ずら丸！」

「な……なんずら〜?!」

「ヨハネたつてのお願いがあるの！」

顔を近づけ、目を鋭くして話してくる善子ちゃん。

お願いがあるのと言われても、マルからしてみれば善子ちゃんがお願いしてきそうなことは、今までの話を聞いてて大体分かるすら。

それで善子ちゃんは話し出す。

「私、堕天使ヨハ：ゲフンゲフン。私：津島 善子は、何かあるとどうしても堕天使ヨハネの顔に出してしまうの。だからすら丸……」

「堕天使にならないように注意すればいいすら？」

「そう！すら丸にしか出来ないお願いなの！」

両手を合わせ、マルに懇願してくる善子ちゃん。

堕天使ヨハネを捨てて普通の高校生を目指すということは、〃今までの自分〃を捨てるということ。

それを善子ちゃんは分かっている、それでも普通になりたいって思ってるなら、マルはそれに手伝わないわけではないすら。

小さい頃の大切な友達のお願ひなら、尚更ずら。

「善子ちゃんはどうしてものお願ひなら、マルは快く引き受けるずら!」
「本当!? ありがとうずら丸!」

マルは善子ちゃんのお願ひを引き受けると、善子ちゃんは思いつきりマルを抱きしめてくる。腕ごと抱きしめられたから、ちよつと苦しいずら…。

「よ…善子ちゃん! マル…そろそろ練習に戻らないといけないから離してほしいずら!」

「あつ、ごめん。ついうっかりしてたわ…」

善子ちゃんはマルの話にハツと我に帰る。

それで抱きしめていた腕を解いてくれた善子ちゃんは、マルに向かって言い放つた。

「じゃあねずら丸! 明日から私は学校に来るから、私のお願ひ、絶対に守つてよね!」
「ずらつ! 墮天使ヨハネさんのお願ひなら、リトルデーモンのマルはちゃんと守るずら」

よ〜」

「クツクツク…我がリトルデーモンよ。明日からの我に忠誠を誓うことをここに…ハッ
!?!」

「……………」

約束したそばから早速出る堕天使ヨハネ。

堕天使ヨハネから普通になるには、とても険しい道になりそうぞら。

「じゃ…じゃあずら丸! また明日ね?」

「うん。また明日!」

そして善子ちゃんはマルに背を向け、そのままマルから立ち去るように走って行つた
ぞら。

姿が見えなくなった後、マルも急いで屋上へ向かった。千歌さんたちが待ちくたびれ
ないように、急いで屋上へ向かう階段を駆け上がった。

「お…お待たせしました!」

「おっ、帰ってきたね！」

息を切らしながら屋上に来ると、準備運動をしていた曜さんが気がつき手を振つてくる。

「長かったね。そんなに我慢してた？」

「は…はい。でも…何とか耐えました」

善子ちゃんと会ったことは秘密にし、曜さんの話に合わせてマルは話した。

マルが戻つてようやく5人が集まったのを見かねた千歌さんは、右腕を高々と掲げて青空に叫んだ。

「よくしつ！早速練習始めよう〜！」

「「おお〜!!」」

「おっ…おお〜!!」

一瞬マルだけが遅れて声を上げたけど、他のみんなはそれを気にすることなく練習は

始まった。

明日からは善子ちゃんがちゃんと学校に来る。

そう考えていたマルは、心なしか嬉しかった。

やつと…善子ちゃんと学校生活を送れるからっ！

~~~~~※※※~~~~~

善子 side

昨日の学校で、ずら丸に無理いつて墮天使になるのを止めてほしいとお願いしてからの翌日。

はつきり言つて、こんなに清々しい朝はない。

正に…神からの祝福！

……はっ!?またやってしまった…。

もうこれは卒業するの。墮天使ヨハネは、この日を待つて終わりにするの！

これからは、津島 善子として生きていくの！

「行つてきまゝす！」

「いつてらっしや〜い！」

ママには私はそう告げ、学校に向けて家を出る。

学校まで行くにはバスに乗つて行く必要があつて、私はまず沼津駅まで歩いていかな

いといけない。

学校行きのバスは、沼津駅にしかないから。

『次は、浦の星女学院前、浦の星女学院前です』

沼津駅からバスに乗ってしばらく揺られて、バスのアナウンスで学校前のバス停に差し掛かる。

私は降りる降車ボタンを押し、運転手に知らせる。

同じバスには同じ学校の生徒もいて、ちよつとドキドキしてる。だけど、絶対に墮天使にはならないと決めた以上、その約束は守るつもり。

落ち着いて立ち振る舞えば、きつと大丈夫。

「おはよう〜！」

「あつ、おはよう〜！」

学校に続く坂道を登っていくと、次第に周りは朝の挨拶をする生徒たちがたくさん見えてくる。

「ねえ。あれ…津島さんじゃない？」

「あつ、本当だ」

すると私の前を歩く3人組が、私を見てヒソヒソと話している。リボンの色は見えないけど、私の話をしてるならきつと1年生。

ただ、私の話をされていることにドキッとした私は、まず心を落ち着かせる。

歩いていたはずの3人は立ち止まって私をじくつと見つめていたが、私はその横を通り過ぎて気にせず学校へと歩いて行く。

特に3人が何か話している様子もない。

どうやら丸の言った通り、あの時の事はみんな覚えていないみたい。

よしっ。それなら…まず第一印象を残さないと！

「…おはようっ！」

歩めていた足を止め、私を見ていた3人のクラスの子たちに向かって私はにこやかに挨拶をした。

普通らしく…何も飾らずに…。

「お……おはよう……」

3人は突然の私の挨拶に驚いていたけど、3人のうちの1人がちゃんと私に挨拶を返してくれた。

うんうん！掴みは大体オツケーね！

そして私はまた学校へと歩き出す。

今日から私は、普通らしく生きる。

リア充に……私になるの！

善子 side out



今から数時間前のことすら。

昨日、善子ちゃんから墮天使が出ちやうから危なくなったら止めてと言われ、マルは学校にやって来た善子ちゃんを見張っていた。

善子ちゃんは入学式から学校に来ていない。だから善子ちゃんが自分の席に座ると、善子ちゃんを取り囲むように周りには人集りができていた。

それで周りのみんなは、善子ちゃんに対していろんな質問を投げかけ、善子ちゃんはその質問の嵐に笑顔を見せながら答えていた。

その時は、何も問題なかったすら。

善子ちゃんが望んでいた普通の女子高校生として、望んでいた生活を楽しんでいた。

アレをやってしまった前までは……ねっ？

「まさか、善子ちゃんがあんな物を持って来るとは思わなかったすら……」



原因は、善子ちゃんに対して『趣味とかあるの?』という質問で、善子ちゃんのお対応にあった。

でもそれまでは好きな食べ物とか、どこに住んでるのとか、ごく一般的な質問ばかりで、墮天使ヨハネが顔を出すそぶりなど全くなかった。

たけど趣味について聞かれたとき、善子ちゃんは『占いをちよつと』とまず答えた。そして、クラスのみんなは善子ちゃんに占つてとお願ひされ、そしてそれが：墮天使ヨハネを呼び出してしまうことになってしまった。

善子ちゃんは自分のバックから黒地に白い線で描かれた魔法陣のテーブルクロスを机に広げ、少しだけサイズが大きめの真っ黒のマントを身に纏う。

そして最後には蠟燭立てと蠟燭を取り出し、蠟燭に火をつけて詠唱まで始めたのだ。

『天界と魔界の蔓延る遍く精霊。

煉獄に墮ちたる眷属たちに告げます。

ルシファー、アスモデウスの洗礼者、

墮天使ヨハネと共に、墮天の時が来たのです!』

マルがハツ!?と気づいた時にはもう遅くて、完全に墮天使ヨハネになってしまった善子ちゃん。

自分で気づいた頃にはクラスのみんなからドン引きされた目で見られ、きつと善子ちゃんの頭の中では“終わった…ラグナロク!”とか思ってる。

故に、今でもそうずら。

「う…うう…!」

「ルビイちゃん、これどういうことなの?」

今の状況をいまいちを理解できずにいる先輩たちには、ルビイちゃんがマルの代わりに話してくれた。

善子ちゃんのことの説明を含めてね。

「ルビイもさつき聞いたんですけど、善子ちゃんは中学の時、自分のことを“墮天使”だと思い込んでたみたいで、まだその時の癖が抜けてなくて…」

「墮天使……」

「まさにこれ……厨二病ってやつだね」

曜さんは善子の心に響く一言を投げかけ、墮天使とボソツと呟いた梨子さんは『この子が墮天使?』と、少し驚いた表情で善子ちゃんを見つめていた。

「自分でも分かっているのよ。自分が…墮天使のはずなんてないんだって…。そもそも、そんなもの最初からいないんだって……」

善子ちゃんは自分が最初から墮天使じゃないということとはちゃんと理解している。でも気が抜けると、墮天使ヨハネが出てきてしまう。

墮天使をやめたくてもやめられないという現象が、善子ちゃんの身に起きている現状なのだ。

「でもその…墮天使?をやめたいのなら、どうしてマントとかを学校に持って来たの?」「それは…その…ヨハネのアイデンティティみたいな物で、あれがなかったら、私は私でいられないっていうか……」

善子ちゃんが持つてきていたマントや、魔法陣が描かれた真っ黒のテーブルクロス。

それら全てを持っていないとヨハネらしくないと、持ち物に対しても善子ちゃんはそう話す。

その話に梨子さんは小さくため息をつきながらも、善子ちゃんの現状を何となく理解してくれた。

「とりあえず何か…心が複雑な状態になるということはよく分かった気がするわ……」  
「うん。私も何となく分かった気がする」

曜さんも自分が言った質問の答えに対して完全に理解出来ていないけれど、何となく分かったと、頭を悩ませながらもそう話す。

「そうですね。実際今でも、善子ちゃんはネットで占いやっていますし……」

そしていつの間にかルビイちゃんはパソコンで善子ちゃんやっている『生放送』という名の映像を開いていて、映像の中の善子ちゃんと言う。

『またヨハネと一緒に墮天しましょ！フフッ♪』

「ああ〜！やめて〜っ！／＼／＼」

自分がしている生放送の映像を見られ、恥ずかしいと思っっている善子ちゃん。ルビィちゃんが見ているパソコンを強制的に閉じ、善子ちゃんはマルに詰め寄って来る。

「とにかくっ！私は『普通の高校生』になりたいの！ずら丸〜！何とかして〜！」  
「な…何とかって言われても…」

半ば涙を浮かべて半泣き状態の善子ちゃん。

そんな様子でマルに対して普通の高校生になりたいと言われても、マルにもどうすればいいのか分からないでいる。

マルの見る限り、今日のアレや今まで善子ちゃんの様子を見てみると、善子ちゃんが望んでいる『普通の高校生』になるのは、だいぶ難しいと思うすら。

『墮天使なんてやめるずらっ！』

…って、マルが言えればいいのに。

そうすれば善子ちゃんも決心してくれる。なのに、マルは自信がなくて、それすら言えなかった。

本当、マルは友だち失格ずら……。

「可愛い……！」

「「えっ……？」」

その時、善子ちゃんが強制で閉じたはずのパソコンが開かれていた。そして善子ちゃんの映像を見て、思わずそう呟いたのは、なんと千歌さんだった。

「これだ！これだよ！」

「ち……千歌ちゃん!？」

黒い衣装を着ている善子ちゃんを見て、すぐく目を輝かせている千歌さんに曜さんは驚く。

善子ちゃんの姿を見て一体何を思いついたんだろうと、マルはもとより他のみんなも

そう考えていた時、千歌さんは善子ちゃんの両手を握る。

そして千歌さんは、善子ちゃんに言い放った。

「津島 善子ちゃん！ いや…墮天使ヨハネちゃん!! 私たちと一緒に、スクールアイドルやりませんか？ 墮天使アイドルとしてっ！」

「……………えっ？」

その言葉は、善子ちゃんをA q o u r sに勧誘する言葉だったと同時に、  
「墮天使ア  
イドル」になると言っているようなものだった。

「えっ……………なに？ 何なの？」

「千歌ちゃん……………」

「はあ……………」

あまりにも唐突過ぎる言葉だったから、言われた善子ちゃんは『何を言っているの？』と、千歌さんに対して疑問を抱く。

曜さんと梨子さんに関しては『またか』という感じに、やや呆れた表情で千歌さんを

見つめていた。

“墮天使アイドル”

それが一体どういう“アイドル”ものなのか、その時のマルは、まだ知る由もなかった。たずら。



## # 2 5 墮天使でアイドル!?

「つ…次はこれで歌うの?」

「そうだよ! 可愛いよね!」

「この前より短いじゃない!」

あれから後日、千歌ちゃんは「墮天使ヨハネ」こと、津島 善子ちゃんをスクールアイドルに誘い、そして千歌ちゃんの家で作戦会議として集まっていた。

「これでダンスしたら、流石に見えるわ……」

それで梨子ちゃんはいつになく顔を真っ赤に染め、自分が着ている衣装のスカートに對してとても恥ずかしそうにオドオドしている。

「大丈夫!!!」

だけど、千歌ちゃんは梨子ちゃんとは真逆。

千歌ちゃんは衣装のスカートを捲り上げ、下に学校のジャージを履いているから大丈夫と言う。パンツだったらそんな事しない。

「そういう事しないの!」

それで梨子ちゃんは千歌ちゃんがしている事をやめさせるよう、スカートを無理やり元に戻す。

ため息をつき、梨子ちゃんは話す。

「はあ……いいのかなあ? 本当に……」

自分たちのしていることが本当に良いことなのか心配で、とても困った顔をしている梨子ちゃん。

実際、私たちが千歌ちゃんの家を集まって着ている衣装は、千歌ちゃんが言い出した

“墮天使アイドル”を模した黒を基調とした衣装。

衣装を作ったのはもちろん私。

千歌ちゃんに『墮天使っぽい衣装を作って』と言われちゃったから、黒を基調に白のレースを付けて、頑張って作った。

ただ、その衣装を作ってるのを遼くんに見られて…

『お前…：とうとうイタイものにもまで目覚めたか』

『違うから！これは次の衣装！』

『はいはい。言わなくても分かってるよ』

次の衣装だと知っていても、彼はそう言っただけで私をからかってくる。全然そういうことに目覚めてなんかいないのに……。

酷いものだよ、遼くんは……。

「私調べただけで、調べてたら墮天使アイドルってなくて、結構インパクトあると思うんだよね」

それで千歌ちゃんは今あるスクールアイドルを調べたらしく、その全てには『墮天使』というものが含まれているスクールアイドルはないらしい。

確かに、墮天使アイドルなんて聞いたことない。

「確かに昨日までこうだったのが、こう変わる」

私は千歌ちゃんのベットに置かれたファーストライブの衣装を見たあと、みんなが着ている衣装を見回すように目を向ける。

なんか、すごい様変わりだなって思う。

ファーストライブの衣装はシンプルな感じの衣装なんだけど、墮天使のアイドルは凄く飾ってる感じが多い。白のレースでスカートにまで模様がついている感じが、なんか子供っぽさを感じる。

「うゆ…何か恥ずかしい…／＼／＼」

「落ち着かないずら〜」

初めてスクールアイドルの衣装を着たから、ルビイちゃんと花丸ちゃんはとても落ち

着かず、ソワソワとしていた。

墮天使を模した衣装を着て恥ずかしそうに萎縮してしまうルビィちゃんや、衣装のスカートを捲り上げてフリフリの衣装に着慣れずにいる花丸ちゃん。

その様子を目の当たりにした梨子ちゃんは、改めて千歌ちゃんに尋ねる。

「本当に大丈夫なの？こんな格好で歌って…？」

「可愛いね〜！」

「そういう問題じゃない」

でも、千歌ちゃんが出した答えは全然違う。

質問と答えが全然合致してないことに、梨子ちゃんは千歌ちゃんの話にツツコミを入れる。

ただ千歌ちゃんは、みんなに向かって話をする。

「これでいいんだよ！ステージ上で、墮天使の魅力をみんなで思い切り振りまくのっ！」

「墮天使の……魅力」

墮天使の魅力を振り撒く。

その言葉を聞いた善子ちゃんは一瞬何を考えたのだろうか？墮天使ヨハネと名乗っている善子ちゃんの表情は、とてもとは思えないくらいに不敵な笑みを浮かべる。

だけど我に返り、顔の前で手でバツ印を作る。

「あつ、だめだめ！そんな事したらドン引かれるに決まってるでしょ！」

クラスのみんなからドン引かれたことを目の当たりにされれば、自然と見てくれている人たちにも拒否されてしまうのではないかと、善子ちゃんは話す。

「大丈夫だよ！きつと！」

だけど千歌ちゃんはとてもポジティブだ。

『天界からのドロップアウト、墮天使ヨハネ！墮天降臨！』みたいな感じで墮天使を振りまけば、みんな見てくれるよ！」

「墮天……降臨……」

善子ちゃんの真似をするようにして、千歌ちゃんは善子ちゃんの前で『墮天降臨っ!』  
と言いつつ。

すると善子ちゃんは、満員の観衆の前で自分がしていることを想像すると、部屋の隅っこに座つては、『ふひひ…』と不気味な笑みを浮かべた。

「大人気……ふひひ……」

「協力……してくれるみたいです……」

ルビィちゃんはそれを見てゾツとしながら、協力してくれることを話す。というかルビィちゃんはもとより、私を含めてみんなゾツとしていた。

「はあ……しようがないわね……」

梨子ちゃんのため息をつく。

彼女からしてみると、墮天使という正体不明でよく分からないものの魅力を、見てくれている人たちに振り撒く言われても、それを受け入れてくれるのかと、とても心配そ

うな表情だった。

「ごめん、ちよつとトイレ借りるね？」

「うん！行ってらっしゃい！」

それから梨子ちゃんはトイレと言って部屋を出て行き、トイレと向かっていった。ていうか梨子ちゃん、一人で行って大丈夫かな？

千歌ちゃんの家に「アレ」がいるけど、多分大丈夫だと思う。志満さんに美渡さんもいるからね。

「あの…曜さん？」

「んっ？」

すると、後ろから私を呼ぶ声が出て振り返る。

そしたら私の後ろには、私の着ている衣装の袖を摘んでいる花丸ちゃんがいた。

「花丸ちゃん、どうしたの？」



「あの、ここがちよつときつくて……」

「腰回りのところ?」

「腰がきつくて動きづらいんです……」

花丸ちゃんはどうかやら衣装の腰回りがきついらしく、ウエストに余裕をもたせてほしいという衣装の要望だった。

出来るだけちよつどいいサイズに作ってみたんだけど、逆にきつくなっちゃったのか。

まあ……そういう失敗は受け止めるしかない。

「分かった。じゃあちよつと採寸し直すから、両手をバンザイしてじつとしててね?」

「はい、分かりましたずら」

花丸ちゃんの両手をバンザイさせ、私は巻き尺を手にとって花丸ちゃんの腰回りの採寸をする。

「どこから辺がきつい?」

「えっと……ここです」

「脇腹だね。じゃあじつとしててね」

「は……はい……」

腰回りの脇腹がきついと花丸ちゃんは言っていた。だからまた作るときは、お腹の幅に余裕を持たせればちようどいいと私は考える。

メンバーはルビィちゃんと花丸ちゃんが入って5人に増えたし、作る衣装の数も増えた。

だからあまり衣装の作成ミスは避けたい。

衣装に使う布のにも限りがあるしね。

「はい、終わったからもういいよ」

「終わった……ずらか？」

「うん！もう大丈夫！」

「ありがとうございますずらー！」

採寸は終わり、花丸ちゃんは笑顔を見せる。

とりあえず、花丸ちゃんが着ている衣装の腰回りがきついと言っていたから、またあとで作り返さ……

「いやああああああああ!!!」

「「「「……?!」」」」

私が考えている途中で、誰かの叫びが響く。

私を含めて千歌ちゃんたちも驚くと、部屋の外の廊下からドタドタと走る音が聞こえてくる。

「いやああ〜!来ないで〜!」

ふと耳にした声は、聞いたことのある声だった。

トイレに行っていたはずの、梨子ちゃんの声。

「梨子ちゃん?」

何に対して『来ないで!』と言っているのか? 私は障子越しで廊下に現れた梨子ちゃん、もう一つの影のシルエットで何となく察した。

「……………ワン!」

千歌ちゃんが飼っている、ペットのしいたけだ。

「ワンッ!ワンッワンッ!」

「やめて!来ないでっ!」

どうやらトイレに行つてるときに、しいたけとバッタリ会ってしまったんだろう。

それでこつちに逃げたら、しいたけも梨子ちゃんに付いてきて、今の状況になつているんだと思う。

「いやあああああああ!!」

本当に梨子ちゃん、犬嫌いなんだね。

それから梨子ちゃんは私たちがいる部屋の隣の部屋に入っては、しいたけと部屋でどんちゃん騒ぎにまでなっている。ていうかそこの部屋、千歌ちゃんの姉の美渡さんの部屋だよね？

大丈夫かな？怒られたりしない…はずだよね？

「梨子ちゃん、大丈夫!？」

千歌ちゃんは梨子ちゃんに落ち着くよう声をかけるけど、落ち着く気配が全くない。多分、大丈夫じゃなさそう。

「安心して!しいたけは大人し……」

バタンツ!

「ぶわっ!」

「梨子ちゃん!?!」

すると梨子ちゃんは目の前の襖を蹴り破り、私たちがいる部屋に乱入し、しいたけも追いかけるようにして部屋に入ってくる。

そしたら梨子ちゃんはその勢いそのまま部屋の向かい側まで走ると、なんと正面にある梨子ちゃんの家のベランダへと飛んだのだ。

家から……家へと……。

「とおおおりやあああああ!!」

「と、飛んだ……」

ものすごい跳躍力に、私たちは必然的に梨子ちゃんの行方を目で追っていた。

そして梨子ちゃんは空中で一回転をしたあと、無事に自分の家のベランダに着地したようだった。家のベランダの影に隠れて、着地する瞬間は分らなかったけど…。

「[[[[「おお〜!」]]]]」

とりあえず凄いものが見れたことにみんな拍手喝采し、梨子ちゃんはベランダから顔

を覗かせる。

「お、おかえり……」

が、そのとき背後から梨子ちゃんのお母さんが掃除をしながら彼女にそう言ってきた。

「た……ただいまあ……」

だからそれに驚いた梨子ちゃんはとんでもなく恥ずかしそうな表情を浮かべつつ、そのままよろよろとまたベランダの影に隠れてしまった。

梨子ちゃん、恥ずかしいところ見られちゃったね。



次の日

私たちは墮天使衣装を纏いつつ、善子ちゃんと共にA q o u r sの紹介PVをビデオカメラで撮った。

場所は学校の屋上。

晴れた快晴の空の下で、私たちは動画を撮った。

「ハイ！伊豆のビーチから登場した待望のニューカーマン、ヨハネよ！」

自分で生放送をしているだけあって、カメラの前では凄く話し慣れてる善子ちゃん。いつもやっている墮天使ヨハネをビデオカメラの前で見せびらかし、みんなでインパクトを残す。



「私たちと一緒に、墮天しない？」

「「「「しない？」」」」」

それから1人1人、ヨハネ様のリトルデーモンとしての紹介も一緒に動画を撮り、パソコンでホームページに動画をアップした。

それから後日

見てくれている人たちの反応を確認すべく、みんなで部室に集まってパソコンの前に立つ。

順位も上がっているのかどうか、私も千歌ちゃんたちもそれが気になって仕方なかった。

「はあ…やってしまった…」

ただ梨子ちゃんは、体育館側のガラスのドアに頭を当てて、自分がしたこと酷く落

ち込んでいた。

すごく可愛く撮れているのに、梨子ちゃんは余程のこと恥ずかしかったみたい。

ピロンツ♪

「あつ、出たよ！」

「！！…っ！！！！」

パソコンから順位が新たに更新された音になり、私の声にみんなパソコンの画面に目を向ける。

新たに更新された順位に、私たちは目を疑った。

「えっ?!嘘っ?!」

「一気にこんなになっ?!」

画面に表示されていた順位は、なんと953位。4700位から、一気に3桁まで上がったのだ。

パソコンに写っている画面を見て信じられないと、みんなはそう感じていた。

「じゃあ、効果があつたつてこと!?!」

「そういうことだね!」

「コメントもたくさん!すごい!」

壁に項垂れたいた梨子ちゃんも、画面に表示されていた順位に驚きを隠せなかつた。

そしてルビィちゃんの言う通り、紹介PVに対してのコメントが多く寄せられていたことに凄くびつくりしている。

「ルビィちゃんと墮天する!」

「ルビィちゃん最高!」

「ルビィちゃんのミニスカートがとてもいいです!」

「ルビィちゃんの笑顔が可愛い!」

特にその張本人のルビィちゃんに対してのコメントがとてつもなく多い。『可愛い』『最高!』っていうコメントが多く寄せられ、ルビィちゃんはそれに凄く恥ずかしがつて

いた。

「いやあくそんなあく。え…えへへ…／＼／＼」

「良かったねえ〜ルビイちゃん！」

「うん！凄く嬉しい！」

自分を褒めてくれるコメントに対して、照れながら笑顔を見せるルビイちゃん。

表情からして、とても満更でもなさそうだった。

それからみんなで、ワイワイと動画について寄せられたコメントを読んでいた時、突然学校の校内放送が流れる。

『スクールアイドル部の部長の方たち、今すぐ生徒会室に来てください！今すぐに！』  
「えっ!?!ダイヤさんの声だ！」

校内放送を流したのは、生徒会長のダイヤさん。

ダイヤさんの声からして、とても怒っているような声。私たちを生徒会室に怒鳴って呼び出すなんて、一体何の用なんだろう？

「もしかして、この動画見たのかな？」

「えっ!? そしたらやばいんじゃない!？」

すると千歌ちゃんはそんな些細なことを眩く。

その言葉を聞いた梨子ちゃんは『えっ!?』と驚き、生徒会長のダイヤさんに何か言われるんじゃないかと途端に慌て始める。

もしそれが本当なら、きつとルビィちゃんのこととも言われるのかもしれない。

だつて……ねえ？

『ヨハネ様のリトルデーモン4号、く…黒澤ルビィです。一番小さな悪魔、可愛がつてね  
!』

きつと…このルビィちゃんの映像を見たんだろう。

そうに違いない。多分、きつとね……。

「まあとりあえず、生徒会室に行つてみようよ。話はダイヤさんから話されるだろうし

……」

「そうだね。行ってみよう」

私はそう言ってみんなに生徒会室に行こうと促し、千歌ちゃんもそれに同意見で、みんなに生徒会室へ行こうと椅子から立ち上がる。

そして善子ちゃんも一緒にみんなで生徒会室に向かうと、生徒会室にはダイヤさんだけではなく、理事長の鞠莉さんまでいた。

するとダイヤさんが見ているパソコンから、私たちが投稿した動画の音が聞こえて来た。

『ヨハネ様のリトルデーモン4号、く…黒澤ルビイです。一番小さな悪魔、可愛がってね！』

「Oh! Pretty bomber head!」

やっぱり、ルビイちゃんの映像だった。

鞠莉さんは墮天使の格好したルビイちゃんを見て、とても可愛いと英語だけど褒めていた。

「ただどダイヤさんはというと……。」

「プリティ?どこがですか?こういうのは破廉恥というのですわ!!」

鬼の形相で、とてつもなく怒っていた。

「いや……そういう衣装というか……」

「キャラというか……」

私と千歌ちゃんは苦笑いを浮かべ、ダイヤさんに話をするも受け入れてもらえず、梨子ちゃんのため息をつきながら話す。

「だから私はいいの?って言ったのに……」

「あ……あはは……」

前に千歌ちゃんの家で言っていた、衣装に関してのこと。それがダイヤさんの癪に触ってしまったことに、千歌ちゃんの顔は反省の色に染まっていた。

それからダイヤさんは机をバンツ！と叩きながら立ち上がり、私たちに話をする。

「そもそも、私がルビイにスクールアイドル活動を許可したのは、節度を持って自分の意志でやりたいと言ったからです！こんな格好をさせて注目を浴びようなど…！」

「ごめんなさい…お姉ちゃん…！」

ルビイちゃんのことを話に持ち上げ、ルビイちゃんは申し訳なさそうにダイヤさんに謝る。

それを見たダイヤさんは『ハア…』と大きなため息をつき、私たちは今回の動画の件でダイヤさんからお叱りを受けた。

「とにかく、キャラが立ってないとか、個性がないと人気が出ないとか、そういう狙いでこんな事をするのは頂けませんわ！」

「でも、順位は一応上がりました！」

ただ私はダイヤさんに、今回の動画で順位は3桁まで上がったことを主張する。

ある程度ら私たちを見てくれている人たちにインパクトは残せた。だから私はダイ



やさんに、一歩前に出てそう主張した。

だけどダイヤさんは、私の話を切り捨てた。

「そんなの一瞬だけに決まっていますわ! 試しに…これで見ればいいですわ!」

私の話を一蹴したダイヤさんは、使っていたパソコンをテーブルの上で滑らせて渡してくる。

私はそれを受け取り、今の順位を確認する。

すると、ダイヤさんの言った通りになっていた。

「嘘、もうこんなに下がって……」

「ほ…本当だ……」

後ろから身を乗り出していた他のみんなも啞然とした表情をしていて、千歌ちゃんは画面に映る順位に茫然とした声を上げた。

『1526位』

3桁にまで上がっていた順位は、一瞬にして4桁…500位も下がっていた。現実を、まざまざと思い知らされた瞬間だった。

「貴方たちが本気で上を目指すのなら、どうするべきか…もう一度考え直すのですわね！」

「……………はい」

鋭い目つきと、厳しい口調で指摘されたダイヤさんの言葉が、私たちに重くのしかかる

そして私たち6人はこの時、誰も…そのダイヤさん言葉に反論する人はいなくて、ただ…ダイヤさんの言葉に従うだけだった。

## # 2 6 ありのままの自分で

ダイヤさんにきつい言葉をぶつけられた私たちは、沈む夕陽に照らされながら、海の堤防に背中合わせで座っていた。

「失敗したなあ……」

千歌ちゃんはため息混じりにそう呟く。

ダイヤさんから言われたことが、千歌ちゃんの心の中で相当に堪えてしまったのだろう。

もちろん私も、順位が一瞬で3桁から4桁まで落ちていたのが心許なくて、とてもシヨツクを受けた。

でも、それが現実なんだって改めて思った。

「確かにダイヤさんの言う通りだよ。こんなことでμ×sみたいになりたいだなんて、失礼だよね……」

体育座りで縮こまり、ダイヤさんの言葉に私以上にシヨックを受けている千歌ちゃんは、溜息を吐きながらそう呟く。

μ×sみたいになりたいと思っっている千歌ちゃんは、とても深く反省していた。

「ち…千歌さんが悪いわけじゃないです！」

ただどルビィちゃんが千歌ちゃんを励ますように、千歌ちゃんが悪くないという風に声をかける。

自分自身がやっていたことがダイヤさんにバレて、それで怒られてしまったのだから、ルビィちゃんは千歌ちゃんを励ます声をかける。

それは、善子ちゃんも同じだった。

「そうよ……」

「「「「えっ?」」」」

ただ、その「同じ」という意味が、ルビイちゃんから発せられたことの話とは別物だった。

「いけなかったのは、私の『墮天使』よ」  
「えっ?」

まるで…自分を責めてるような口調。

千歌ちゃん…いや、私たちみんなで墮天使アイドルをしようってなった原因は、全て自分にあるという口調の善子ちゃん。

その善子ちゃんは、縮こまって話す。

自分の…改めて感じたことを呟いた。

「やっぱり…高校生にもなっても通じないよ」

「違う!それは違うよ善子ちゃ…」

「いいの!」

「……っ！善子……ちゃん……」

千歌ちゃんは善子ちゃんの言葉を否定する。けど、善子ちゃんはその否定を拒絶する  
ように叫ぶ。

もうしたくない。もうそもそも、堕天使ヨハネなんて存在するはずなんてないって……  
！

心から湧き上がる、善子ちゃんの悲しい叫び。

「……………」

その背中を、私は支えてあげられなかった。

「よいしょ……っ……」

それから善子ちゃんは立ち上がり、背伸びをする。

そして私たちに見向きもせず、何故かスッキリしたような声を出して、夕暮れの空を  
見上げながらボソッと呟いた。

「なんか、スッキリした。明日から今度こそ、*“普通の高校生”*になれそう」  
「じ…じゃあ、スクールアイドルは？」

その話に、ルビィちゃんは不安げに尋ねる。  
でも善子ちゃんはルビィちゃんに顔を一切向けず、『うくん』と考えたのちに、ルビィちゃんの質問に否定するように答えた。

「やめとく。迷惑かけそうだし…」

「善子ちゃん…」

心配そうに善子ちゃんの名を呼ぶ花丸ちゃん。  
でも善子ちゃんは振り返ることもなく、私たち5人に別れの挨拶を告げた。

「じゃあ…ね？」

そう言って背を向けて、善子ちゃんは歩く。

それで2、3歩と歩いたとき、善子ちゃんは私たちに振り向いて話し出す。それは、墮天使に付き合ってくれたお礼だった。

「少しの間だったけど、墮天使に付き合ってくれてありがとうね。楽しかったよ！」  
「……………」

善子ちゃんがようやくくこつち振り向き、私たち5人に見せた顔は楽しかったという笑顔の顔。

そしてその後にもまた背中を向け、善子ちゃんは足早に歩き出す。寂しさが思い募る背中を見せながら、善子ちゃんは姿を消してしまった。

「どうして…『墮天使』だったんだろう？」

善子ちゃんがいなくなり、海のさざ波の音しか聞こえないこの場で、梨子ちゃんはそんな疑問を抱く。

それは私を含め、花丸ちゃん以外のみんながずっと思っていたことで……。



「マル……分かる気がします」

「えっ……？」

善子ちゃんが墮天使であることの真実を、幼稚園の頃から知っている花丸ちゃんが教えてくれた。

「ずっと、『普通』だったんだと思うんです」

「墮天使が……『普通』だった？」

「はい」

善子ちゃんは、『墮天使ヨハネ』があつて普通なんだと花丸ちゃんはそう話す。

でも、それが他人から蔑まされている原因で、普通になりたかつた善子ちゃんは、普通になりたくてもなれなかつた。

だから花丸ちゃんは、善子ちゃんにとつての普通というのは墮天使ヨハネであることなんだつて、花丸ちゃんは下に俯きながら話す。

「私たちと同じで、あまり目立たなくて、そういうとき思いませんか？これが……『本当の

自分”なのかなあって……」

「本当の……自分……」

「元々は天使みたいにキラキラしてて、何かの弾みでこうなっちゃってるんじゃないかって……」

花丸ちゃんの話聞いてみると、善子ちゃんは多分墮天使ヨハネという存在が、本当の自分を見失っているような、そういう考えが思い当たってくる。

それを考えたら、善子ちゃんがずっと普通になりたいって言っていることが、何となく分かる。

すると花丸ちゃんは、夕暮れの空を飛び行くカモメを見ながら、幼稚園の頃の善子ちゃんのことを少しばかり話してくれた。

でもそれが、今の善子ちゃんに繋がっているんだって思うくらい、花丸ちゃんの話ははつきりしているものだった。

「幼稚園の頃の善子ちゃんは、いつもこう言ってたんです。『私、本当は天使なの！いつか羽が生えて天に帰るんだ！』って……」

「善子ちゃんが、そんな事を……」

今の善子ちゃんは、その時からああだったみたい。

その時の善子ちゃんは自分を天使と思い込んでいたけれど、花丸ちゃんの言う通り、何かの弾みがあつて“墮天使ヨハネ”になつてしまつた。

そう考えたとき、千歌ちゃんは言う。

「だったら、善子ちゃんを助けようよ」

「「えっ？」」

千歌ちゃんは立ち上がり、私たちに言葉を投げかける。善子ちゃんを…私たちの手で救おうってね。

「善子ちゃんは、墮天使ヨハネがあつて善子ちゃんなんだよね？ だったらそれが、善子ちゃんなんだよ。それが、ありのままの善子ちゃんなんだよ！」

花丸ちゃんの話聞いていて、千歌ちゃんはそんな答えを見つけた。それは、私も同じ答え。

ううん…みんなも同じ答えだった。

「そうね。それが…善子ちゃんの本当の自分なのかも。たまに変なこと言ったりするけど……」

「はいっ！確かにそれが、善子ちゃんなのかも！」

梨子ちゃんもルビィちゃんも、千歌ちゃんが話したことと同じ意見を述べて賛同する。花丸ちゃんも、それに笑顔を見せながら話す。

「マルもそう思うぞら。ここまできちやうと、逆にそれが善子ちゃんらしいんだって思うぞらー！」

花丸ちゃんも同じことを考えていた。

「曜ちゃんは？」

「あはは、ここ聞いてちやうど？」

そしたら千歌ちゃんは、私に尋ねてくる。  
でもそれって、野暮なんじゃない？

「私もみんなと一緒にだよ！」

「よ〜しっ！満場一致だね！」

私は千歌ちゃんにそうとだけ話すと、千歌ちゃんは笑顔を見せては両手を拳にし、そのままオレンジ色の空に向かって突き上げる。

それから千歌ちゃんは、私たちにいきなりとんでもないことを言いだしてきた。

「それじゃあ、善子ちゃんを探そう！」

「「「ええ〜!?!」」」

突然すぎるその言葉に、私たちは声を上げられずにはいられないのであった。  
本当…いきなり過ぎだよ千歌ちゃん…。

～～～～～  
※※※※※  
～～～～～

「ふう…疲れた疲れた……」

今日も部活の激しい練習が終わり、俺は部室で練習着から制服にせつせと着替える。

「おいくつすん！今日ラーメン食ってこうぜ！」

そんな時、同じ部でクラスメイトの高城からラーメンを食べに行こうぜと声をかけられる。

だが俺は今日はそのような気分じゃなく、さつさと家に帰りた気分だったから、高城の誘いには今日はお断りさせてもらった。

「悪い！今日はお断りさせてもらおうわ！」

「オツケー！次はちゃんと付き合えよ！」

「分かつてるよ！それじゃあ、またな！」

「おう！またなくつすん！」

高城と別れの挨拶をした後、別の部室で談笑している先輩たちにも挨拶をし、俺はさつさと帰るために部室を飛び出す。

因みに、高城から言われている“くつすん”っていう前名は、俺の“楠神”の苗字から出来たあだ名だ。

高一の時からあいつに言われててな、そのせいでそのあだ名が定着してしまつて、同期からも先輩からもそう呼ばれている。

嫌ではないが、他のあだ名を作っておけば良かったと、俺は心の奥底でちよつと後悔していた。

カシャカシャカシャカシャ！

いつも家から自転車で通っている俺は、夕日を背にして自転車を漕ぎ、学校を出る。学校から家に帰るまでは、約20分かかる。

それまでの通学路は必ず沼津駅の前を通り、それから沿岸に沿って帰るのが俺のいつもの通学路。

「~~~~~♪」

この間に千歌たちが歌っていた、『ダイスキだったらダイジョウブ』っていう曲を鼻歌に、俺は普段と変わらずに自転車を漕いでいた。

ただ、今日はなんか違った。

その理由は、俺の目に映った少女の姿にある。

「これでいいのよ……これで……」



彼女と俺がいるのは、海に合流する大きな川がある住宅街であり、道路を跨いで反対側には、とても大きな海の堤防がある。

声小さくて何を言っているのか分からないが、俺にはその子を放つてはおけなかった。

彼女は海の堤防に体育座りをして、小さくうずくまっている。俺はその子の近くに自転車を止め、彼女にゆっくりと近づきながら彼女を観察した。

体育座りだから体格とかはいまいちピンとは来ないが、彼女が着ているのは間違いない浦女の制服で、胸のリボンの色が黄色。

そして何よりも彼女の特徴のして印象に残ったのは、頭の右側にお団子ヘアをしていること。

それを見たときに俺は、彼女は「あの子」だつてことがすぐに分かった。

「あ……あの、君」

「……………っ！」

俺は彼女に声をかけると、その子は頭を上げてこちらを見るや、驚いた表情を見せる。

いきなり知らない人から声をかけられたと思っっている彼女は、体育座りの体勢を崩しつつ、俺に警戒心を抱きながら尋ねてくる。

「い…いきなり何ですか？あなた誰です？」

「あまり警戒したり、怖がらなくていい。俺は君を知っている子の友達だよ」

俺は彼女の警戒心を解くべく、その子に対して優しく声をかける。名前を伏せるのもあれだけど、本当かどうか分からないから一応の処置ね。

「君は、津島 善子ちゃんだよね？」

「えっ!?何で私の名前を知ってるのよ!?!」

だが、名前を言ったらその反応。

どうやらビンゴだったようだ。

とりあえず俺は、初対面の善子ちゃんの名前をなぜ知っているのか理由を話す。

「君の友達の花丸ちゃんから聞いた。ていうか俺は、A q o u r s っというスクールア

アイドルのちよつとしたお手伝いをしている」

「あつ、そう…なのね……」

“A q o u r s” って単語を出した途端、彼女はすんなりと理解してくれた。警戒心も解け、胸をなでおろすように小さく息を吐いた。

すると善子ちゃんから、ある事を尋ねられる。

「ていうか、何で私の住んでる場所を知っているの？まさか…ずら丸に聞いたんじゃないわよね？」

「………えっ?」

聞かれたのは、善子ちゃんの住んでいる場所をなぜ知っているのかということ。

ていうか俺、たまたま善子ちゃんを見つけたからたまたま声をかけただけで、というか善子ちゃんの住んでる場所なんか知らないし。

でも善子ちゃんが言うには、ここの近くにこの子は住んでいるということが分かった。

てか“ずら丸” って誰？あつ、花丸ちゃんか…。

「待て待て！俺は君に声をかけたのは、君がすごく悲しんでいる顔をしていたからだ！」  
「……………っ！」

とりあえずまず、俺は誤解を解く。

俺が善子ちゃんに話しかけた理由を、単純で分かりやすく、強い口調で説明をした。  
そしたら善子ちゃんは、また体育座りをする。

「私、普通になるんです」

「へっ？…ふ…普通？」

そして突然、善子ちゃんは変なことを呟いた。

善子ちゃんは確か、自分を「墮天使ヨハネ」と謳っていて、パソコンとかでも生放送をしているって花丸ちゃんから聞いた。

でも普通って…一体なんの普通なんだ？

「普通って…なんの？」

「普通は普通よ！私はなんの変哲もない、一般的で普通な女子高生になりたいの！もう墮天使ヨハネとか、そんなものはもういらなの！」

ああ…なるほどね。

「墮天使ヨハネとか、ルシファーとか、元々そんなものは存在なんかしないんだし、周りのみんなから蔑まされるだけ……」

花丸ちゃんから少し話は聞いていたけれど、相当に重症みたいだね。彼女の様子でよく分かる。

墮天使ヨハネという存在が、善子ちゃんにとっては不必要で、その墮天使を忘れて普通の女子高校生になるというのが、善子ちゃんの願い。

ただ、どうしても墮天使ヨハネが出てきてしまう事から、彼女はとても苦しんでいた。

「どうしても、普通になりたい？」

「勿論よ！明日には墮天使グッズはパンドラの箱に封印して、永久の彼方に消滅させるの！」

「善子ちゃん、墮天使出てる」

「ハッ…!?またやってしまった…」

俺は善子ちゃんの隣に座り、彼女の話聞く。

パンドラの箱、きつとダンボール箱。

永久の彼方に消滅させる。つまり捨てること。

それをわざわざ墮天使っぽくして難しく言うあたりでは、絶対に普通にはなれない。  
じゃあどうすればいいか？答えは簡単。

「一層のこと、そのままがいいよ」

変わらずに、ありのままの自分を大切にすべきだ。それが、きつと善子ちゃんの個性なのだ。

だが、善子ちゃんはそれを許さない。

「嫌よ！このまま墮天使を背負うなんて…」

「だって、今さつき出てただろ？」

「うっ……」

でも俺はそう話すと、善子ちゃんは返す言葉が思いつかず、口を噤んでしまう。

普通になりたいって口だけならなんとでも言える。だが口で言ったとしても、行動で墮天使が出てきてしまえば元も子もないのだ。

「お前、墮天使好きなんだろ？」

「なっ！私に別に……」

「墮天使出ちゃうんだろ？」 『墮天、降臨！』 って、ついポーズして言っちゃうんだろ？」  
俺はそう言えば、善子ちゃんは強がる。

ただその後には何も言わず、ずっと口を塞ぐように閉じている善子ちゃん。きつと俺の話の聞いて、さっきまでの考えが崩れているんだろう。

私はやっぱり…墮天使でいいのかなって……。

だから俺は、あと一押しに言葉を投げかける。

「だったら、善子ちゃんはそのままがいいよ。自分の好きなものは大切にして、ありのままの自分を、みんなに見せればいいんだ」

「……………」

ありのままの自分。

即ち、墮天使ヨハネの魅力を見てくれているみんなに見せびらかし、それが私が一番好きなものだってことを、みんなに分かってもらえればいい。

たった、それだけの話なのだ。

「本当に…それで分かってもらえるかしら？」

「ああ。善子ちゃんなら大丈夫さ」

「……………っ／／／」

俺が返したその言葉に、善子ちゃんの顔は夕陽に当たっているせいか、真っ赤に染まっていた。

そしてそれが、善子ちゃんにとって「嬉しい」という喜び溢れる感情であることが、



そのときの俺はまだ知るよしもなかった。

そんな時……

「善子ちゃん……ん！」

「んっ……っ？」

どこからか小さい声で、善子ちゃんを呼んでいる声が聞こえてくる。

するとその声はだんだんと大きくなってきた。俺はふと声が出た右側に顔を向けると、ちょうど千歌、曜、梨子、花丸、ルビイの5人の姿があった。

「あれ？千歌たちじゃん」

「あれ!? 遼くん!？」

千歌が最初に俺のことを発見すると、彼女たちは凄く驚いた様子を見せ、どうして俺と善子ちゃんが一緒にいるのかと、千歌が尋ねてくる。

「遼くん!?! どうして善子ちゃんど?」

「この子、墮天使のことで少ししよんぼりしててな。俺が話に付き合ってたんだ」

とりあえずあまり話を拗らせると、変なことに思わされがちになるから、俺は出来るだけ簡単に、彼女たちに対して何をしていたのか説明をした。

それで千歌たちは納得し、逆に今度は俺が彼女たちになぜここに来たのかを尋ねる。

「んで? 千歌たちは何の用なんだ?」

「私たちはね、善子ちゃんを:A q o u r sのメンバーにするために来たんだよ」

「えっ!?! 私を:A q o u r sに:~!?!」

すると千歌の答えに、善子は後退りする。

それで千歌たちは善子ちゃんの前に横並びになって立ち、千歌が一步前に出て笑顔で話し出す。

「善子ちゃん、ううん、墮天使ヨハネちゃん!」

「な…:何よ?」

「スクールアイドルに入ってください！私たちA q o u r sに！堕天使ヨハネとして！」

その話は、善子ちゃんをA q o u r sに勧誘する言葉。

そして千歌の言い放った言葉は、俺がさつき善子ちゃんに話した事と同じようなものだった。

「何言ってるの？話したでしょ？私はもう……」

「いいんだよ！堕天使で！善子ちゃんが好きなら、それでいいんだよ！」

ほら………ね？

千歌も、並んでいるみんなも、善子ちゃんはあるのままの自分で良いんだと訴えていた。

「生徒会長にも怒られたでしょ！」

「それは私たちが悪かったんだよ。だから善子ちゃんはいんだよ！そのまんまで！」

ダイヤといざこざが、またあったのかなんてことはいざ知らず、俺は彼女たちのやり取りを、そばからじつと見守っていた。

善子ちゃんのためにも：俺はそばいた。

「私ね！μ sがどうして伝説を作れたのか、どうしてスクールアイドルがそこまで繋がっているのか、考えてみて分かったんだ！それはステージの上で、自分の好きを迷わずに見せることなんだよ！」

それから千歌は、憧れのμ sの話を持ちかける。

見てくれている人に、自分の好きなもの…：ことを見せる。それが、μ sが伝説を作った所以であると、千歌は説明をする。

「お客さんにどう思われるかとか、人気がどうかじゃない！自分が一番好きな姿を、輝いている姿を見せることなんだよ！」

お客さんから不評とか言われてしまうのではないかという恐怖とか、人気が落ちてしまふとかそれ以前に、千歌は好きな姿を…：輝いている姿を見せることが大事なんだと、

善子ちゃんに説明をする。

それは善子ちゃんに対し、ありのままの自分を大事にしてと訴えているように俺は聞こえた。

善子ちゃんも、少なからず思ってるはず……。

そして千歌は、善子ちゃんに言い放った。

「だから善子ちゃんは捨てじゃだめなんだよ！自分が、堕天使を好きな限り！」  
「……………っ！」

真っ直ぐに、善子ちゃんに思いを乗せて。

その言葉を聞いた善子ちゃんは右手を胸に当てて、ギュツと制服を握り締める。

善子ちゃんの表情には、迷いがある。

堕天使ヨハネとして生きるか？普通に生きるか？

その迷いが生じている心を解き放ってやるしかないと思った俺は、善子ちゃんの背中に周り込み、両肩をポンつと置いて彼女に話をしたのである。

「こうやって君のことを許してくれる仲間がいるんだ。だから、もうそうやって自分を苦しめるのは、もう止めよう?」

「……………はっ」

そして俺の話聞いたあとに、善子ちゃんはとうとう屈するのであった。

普通になるのを諦め、「墮天使ヨハネ」として自分を大事にするという、そう決心する声を上げる。

その言葉を聞いた俺は、ホッと一安心したのち、彼女の背中を軽く押して上げる。

「じゃあ、ほれ!」

「わっ……………!」

驚いた彼女は、思わず怒って膨れっ面で俺を見てくる。だが俺は、その表情に笑顔で返す。そして、彼女も笑顔になった。

善子ちゃんはそれから千歌たちに顔を向け、ちよつとしたやり取りが繰り広げられた。

「本当にいいの？変なこと言うわよ？」

「いいよ！」

「時々、儀式とかするかもよ？」

「そのくらい我慢するわ！」

「リトルデーモンになれって言うかもよ？」

「嫌だったら、嫌だって言うから！」

ただもう千歌たちも、善子ちゃんに心を許していた。善子ちゃんのいかなる質問にも

大丈夫と、彼女をAqoursとして歓迎していた。

もちろん、俺も大歓迎だけどね。

「だから改めて言うね！善：堕天使ヨハネちゃん、Aqoursに入ってください！」

千歌がそう言ったあと、少しの沈黙が流れる。

が、その沈黙はすぐに破られた。

「はい！よろしくお願いします！」  
「やったあ〜！」

A q o u r sのメンバーになるとそう告げた善子ちゃんの言葉に、千歌を始め、みんなが善子ちゃんに勢いよくギュツと抱きついた。

「おいおい……って、いきなり善子ちゃんに何してんだよと思ってた俺だったけど、今回は許してやるかって、そう思った俺である。」

善子ちゃんはみんなから抱きつかれて、嬉しすぎて泣きそうな表情が浮かんでいた。

信用してくれる仲間が見つかって、良かったな。

こうしてA q o u r sには善子こと墮天使ヨハネが加わって、メンバーはなんと6人になった。

あれから1年生が3人も加わることなんて思ってもいなかったけれど、いい意味で良かったんじゃないかなって、俺は思う。



だがしかし……………

「鞠莉さん！」

「ダイヤ。どうしたの？」

「あのメールはなんですか?!？」

「何って、書いてある通りよ？」

俺たちがそうしている裏側で、千歌達に通っている浦の星女学院に、史上最大の危機が訪れていることを、俺も、彼女たちも、

「そんな…………嘘でしょ…………」

まだ、知らなかったのである。

## #27 千歌との初経験 前編

今日の俺の休日は、誰かからの電話が来るアラーム音から始まり、そしてそれが、今日の予定になる事の確定事項である。

プルルルッ！プルルルッ！

時刻は午前7時。朝からいい迷惑だ。

「うう……んっ、誰だよ……朝っぱらから……」

朝っぱらから電話を掛けてくる事は、俺の眠り妨げ、とても非常に迷惑極まりないのである。

そんなことを平然と電話してくる人物なんて、俺の知っている人物の中でただ一人しか  
かない。

大丈夫、お隣の曜ではない別の人物だ。

俺は重い瞼をこじ開け、電話に出る。

「うあい？もしも……」

「おはよ〜！遼くん！」

電話に出た瞬間、そいつの大声に驚いた俺は、思わず携帯を耳から遠ざける。

声の主を聞いた時は俺は呆れて物も言えず、薄れていた眠気が一気に覚めてしまっ  
た。

まあ……悪い意味でな……。

それでそいつは、朝っぱらからとても元気な奴だなあ〜って、思った瞬間だった。

「んだよ…朝からうるせえよ、バカ千歌」

「ああ！せつかく千歌からの朝のモーニングコールしてあげたのに〜！」

モーニングコールって…アホか。

朝から大声聞かされるこっちの身にもなってみろ。迷惑極まりないぜ全くよ……。

でもとりあえずは少し、聞いてみるか。

どうして電話して来たのかの理由をね。

「まさか、わざわざそんな事をするだけのために、俺に電話してきたんじゃないだろうな？」

「……………うん!!」

ブツツ！

「はあ……………」

俺がこいつに理由を聞いたのが馬鹿だったよ。

あくあつ。何だか俺の眠りをこいつに奪われてしまった気分だ。わざわざ俺を眠り

から覚まさせるためだけに電話を掛けてくるなんて……。

あいつ……絶対あとで……

プルルルッ！プルルルッ！

その瞬間、また俺の携帯が鳴り響く。

掛けてきたのは、またバカ千歌。

「はぁ……今度は何なんだよ？」

正直に言うと、本当なら出ないつもりだった。

だが、あとで千歌から『何で出ないの？』とか質問責めさせられそうだったから、仕方なくその電話に嫌々ながら出ることにした。

「はい、俺だけど……」

「ゴメン！違うの！本当は違うの！」

そしたらまた、千歌の大声。

思わず耳を携帯から離すが、俺に電話を掛けてきた本当の理由を千歌が話してきたから、とりあえず話を聞か。

「違うって、じゃあ何なんだよ？」

「本当は、遼くんを手伝って欲しいことがあるの。ちよつと……重要なことなんだけど……」

「重要なこと……」

千歌にとって重要なこと、はつきり言ってしまえば俺にはよく分からないことだ。

それを俺に手伝ってもらいたいということは、それなりにとても重要なことなんだろうけど……。

俺は自分の部屋の天井をボクツツと見つめて、千歌にとって重要なことってなんだろうと考えるが、考えても考えても何も思い浮かばない。

だから千歌に尋ねる。

「それって、一体何なんだ？」

「ここでは言えない。だから…来て欲しい」

俺は千歌のその言葉に、思わず首を傾げた。

えっ? どこに…? ?

ってか、何故言えない?

「千歌の家に、来て?」

「はあああああ!」

電話の向こうで話している千歌の様子が、俺としては何だかおかしいと感じたのはその時だ。

「1時に家に来て? 待ってるから…」

「お…おい! 千歌!!」

ブツッ!

千歌はそして家に来てほしい時刻を告げ、そのあと即座に電話を切りやがった。千歌が電話した用件を何一つも言わず、ただ家に来てと告げるためだけに電話をしてくるなんて、俺は夢でも見てるんじゃないやあ……。

ギユツ！ギユツギユツ！

そう思つて頬をつねつてみるが、頬が痛いだけ。

「……………痛い」

その時に俺は、夢ではない事を思い知った。

~~~~~※※※~~~~~


午後1時、俺は仕方なく渋々向かった。

千歌の家である『十千万』に……。

「ごめんくださいー！」

自転車で20分かけて来た俺は、正面玄関から入って大声を出し、自分が来たことをアピールをする。

だけど誰も俺の声に反応する様子はなく、俺の声は旅館の静けさの中に消え、勝手に上がっても大丈夫だろうかと少々心配になる。

そんな時だった。

「は〜い!どちら様〜?」

旅館の奥から、ドタドタと床の音を立てながら玄関に足を運んでくる姿が1人。その人は、いつも家に来たときにお世話になっている志満さんだった。

いつもは玄関の正面の受付に綺麗に佇んでいるのに、今日は一体どうしたんだろうか?もしかしたら旅館が忙しいのかも…。

「あら、遼くんじゃない」

「すみません。旅館が忙しいときに……」

「いいのよ。別に大丈夫だから……」

だが志満さんは、俺に優しく対応してくれる。

こんな優しい姉が欲しかったよ、俺は……。

「それより、今日はどうしたの?」

「千歌に『家に来て』って呼ばれて来ました」

「千歌ちゃんが?」

「はい」

今日は千歌に呼ばれて来たことを志満さんに説明し、事情を全て話したあとで、家に千歌がいるかを志満さんに尋ねる。

「そう。変なことも話すのね」

「本当ですよ。千歌はいますか？」

「千歌ちゃんなら部屋にいると思うわ」

「ありがとうございます！」

千歌は当然、自分の部屋にいるようだ。

まあ自分から呼び出ししておきながら、部屋にいなかったら俺は相当怒るぞ？あつちから電話をかけてきて、家に来てって言ってきたんだからな。

「あとでジュースと煎餅、持ってくるからね？」

「はい、ありがとうございます」

そのあと志満さんとはそんなやり取りをして、俺を待っているであろう千歌の部屋へと急ぐ。

重要な事を手伝って欲しいと電話で言っていた千歌は、一体何を手伝って欲しいんだろう？そんな疑問を持ちながら、俺は廊下を歩いては千歌の部屋の前までやって来る。

そして、部屋にいる千歌に声をかける。

「千歌、来てやったぞー！」

「あつ、遼くん！」

俺の声を聞いた千歌は、表情を見なくとも俺が来たことにとても嬉しそうな声を上げる。

トタトタと千歌が歩く音を立て、目の前の障子が開けられると、まだ寝巻き姿の千歌がそこにいた。

髪を全部降ろし、タンクトップ気味のシャツを着て、下は短パンを履いていた。因みに色は青と水色のボーダーのシンプルな感じ。

「おはよ。てかまだ寝巻きかよ」

「今から着替えようと思ってたんだもん！」

俺は千歌の言葉に真顔で『そうかよ』という。

けど心の中では驚きを隠せないのと同時に、とあるシチュエーションを、頭の中で考えられずにはいられなかった。

なに!?!着替えようと思ってただど!?!

だとしたら俺があと1分くらい遅れて部屋にやって来ていたら、もしかしたら千歌の着替えを、千歌の生々しい姿を見られたというのか!?!

『もう……遼くんのエッチ……!?!』

いかん、エロ過ぎて鼻血が出そうだ……。

ダメだダメだ。そんなことは考えてはダメだ。

「遼くん! 遼くんってば!」

「は……はい!?!」

「どうしたの? ボーッとして……?」

「い……いや！何でもない！」

俺の様子を千歌は上目遣いで見てくるが、特に気にする様子もなく、俺の一言で納得してくれた。

それで話題を変えようと、俺は話を切り出す。

話をしたのは、今日のことである。

「それより、今日はどうして俺を呼んだ？」

「あつ、そうだった！遼くんを誘った理由は部屋に入れば分かるよ！さあ、入って入って！」

千歌に背中を押され、促されるまま俺は千歌の部屋へと入っていく。

相変わらずよく分からぬいぐるみがベットに置かれているのが目に入る。伊勢工ビとダイオウグソクムシだっけか？本当デカイぬいぐるみだよ。

そんな風に思いつつ、俺はテーブルの前であぐらで座り込むと、千歌が俺を呼んだ理由を話し始めた。

「今日、遼くんを呼んだのは他でもない！」

「何だよその上から目線の言い方は……」

「いいの！遼くんに手伝って欲しいのは、これ！」

そう言っただけに見せて来たのは、普通のA4サイズのキャンパスノートである。

だがそのノートの表紙には、『歌詞ノート』と黒いマッキーペンで書かれている。それを見た瞬間に俺は『あつ……（察し）』な気分になった。

「歌詞……ノート？」

「うん！遼くんには私と、一緒に次の新曲の歌詞を考えて欲しいなあ〜って、呼んだんだ！」

……………なるほどね。

千歌にとって『重要な事』は、歌詞を作ること。

ただ、電話の時に普通に『歌詞考えるの手伝って！』と話せよ馬鹿野郎！と、瞬間的に俺の頭の中はそんなことを思っていた。

「じゃあ何で電話した時に言わなかったんだ？」

「言ったら遼くん、『嫌だ』って言いそうだし…」

「ぐっ、なんて卑怯な……」

「だから教えて、『重要な事』って話したんだ！」

確かに俺の性格上だったら、電話で話したら千歌の言う通りかもしれない。だから、『重要な事』と遠回しに伝え、俺をここに呼んだ。

つまりは餌に食いついた魚のように、千歌の策略にまんまと引っかかってしまったわけだ。

「はあ…仕方ない。どうせ梨子から『歌詞早く完成させて！』とか発破かけられたんだろ？」

「うっ。まさにその通りで反論出来ない」

それで自分の頭の中で思っていたことを千歌に尋ねたら、それがまんまと的確に当たった。俺を呼んだ理由なんて、そんなもんだらうと思ったださ。

そして俺は千歌に言う。

「じゃあとつとと始めて、さっさと終わらせるぞ」

その言葉を聞いた千歌は満面の笑みを浮かべ、嬉しそうに俺に言葉を返す。

「うん！ 遼くんとなら、すぐに出来そうだよ！」

何だか変に照れくさい言葉を返してきたなど思った俺は、少し不意に笑みを浮かべ、千歌が持っていた歌詞ノートの紙を一枚だけ抜き取る。

「んじゃ、始めっか！」

「うん！ 頑張ろう！」

ここまで来てしまえば、もう手伝うという選択肢しかない。だから千歌とそんな決意をして、俺と千歌は作詞の作成を始めたのであった。

「また梨子ちゃんに怒られちゃう……」

「……………はあ」

千歌が次の新曲として作ろうとしていた曲、それは『夢』っていう言葉をコンセプトにして、次なる曲を作ろうと考えているらしい。

また曲やテンポとかも決まっているらしくて、最初の曲である『ダイスキだったらダイジョウブ』では速いテンポだったから、次の曲はゆっくりとしたテンポにするって決めているらしい。

でも、2時間考えても何一つ思い浮かばない。

俺も、当然千歌もだ。

「はあ……どうしたらいいんだろう……」

「……………」

両手で頬づえをついて、何も書いていない真っ白のノートを見つめて張り詰めた表情をしている千歌。

その様子を見かねた俺は、千歌にこう話す。

「千歌、一旦外に出ようぜ」

「えっ? どうして?」

「こういうときは、何も考えずに頭を空っぽにするんだ。海にでも行って、新鮮な空気を吸って、頭をリセットさせてこようぜ」

「う…うん。分かった」

別に作詞って、今日で完成させなければならぬって期限は全く限られてないよね? そう考えた時に、無理に考えたってしょうがない。ゆっくり少しずつ、地道に作詞していくのが一番。

「んじゃ、早速行こうぜ」

「あつ、遼くん待つてよ〜!」

そして俺は千歌を置いてけぼりにするように部屋を出て、千歌は慌てて俺を追いかけってくる。

そのあと千歌の家から出て、向かったのはすぐそばにある海岸の浜辺。外はとても暑

かった。

「うん…暑い」

「暑〜い！」

外に出たのに外が暑い。だが海は冷たかったから、俺は靴を脱いで素足になり、足だけ海に浸かる。

足だけ冷たいのに、少し気持ちいい気がした。

「はあ……気持ちいい」

「むう…私もやる！」

すると俺の行動を羨ましがるように、千歌も素足になって海に足だけを浸からせる。気持ち良さそうな表情を見せる千歌を見ると、何だか悪戯をしたい気持ちにさせられた。

そしてその気持ちになった時、俺は行動に移した。

「はあ……気持ちい……」

「そりやあ〜！」

バシヤン！

「きやあ〜！」

「あっはっはっ！」

千歌にめがけて海水の水を両手でぶち撒げ、千歌が着ていた服は濡れてびしょびしょになった。

「ん〜！遼くんのおかげで服濡れちゃったじゃん！」

「や〜い！悔しかったらやり返してみろ〜！」

千歌は濡れた服を俺に見せつける。

でも濡れた服を見せても何とも思っていない俺は、やり返してみろと千歌に煽りを入れる。すると千歌はいつもの怒りんぼになり、俺にやり返そうと海水の水を浴びせかけ

てきた。

「こら〜！ 遼くん待て〜！」

「嫌々なこった！」

当然俺はその襲撃から逃げるわけだが、逃げるだけじゃ面白くないから、俺は千歌の攻撃から避けながら、千歌にカウンターを仕掛けた。

カウンターはとりあえずは、海水を浴びせるだけのただ単純なことだけだな。

そして30分後

「はあ……はあ……」

「はあ……はあ……」

報告するなら、千歌の服は全部びちよびちよ。

シャツも短パンも、全部俺が海水で濡れさせた。

俺も少しシャツの袖とか、短パンの裾に少し濡れてしまったところもあるが、千歌の

方が比べ物にならないくらい濡れていた。

「もう〜！全部濡れちゃったじゃ〜ん！」

「俺は知〜らない」

千歌は服が全部濡れ、怒って地団駄を踏む。

その様子を俺は知ったかぶりして、ヒューヒューと口笛を吹いていた。

それで千歌は俺に言ってくる。

「遼くんのせいだからね！」

「へへ〜ん！無警戒の千歌が悪いんだよ！」

「なにを〜！とりやあ〜！」

そしたら千歌は大胆にも、濡れたままの服で俺にそのまま抱きついてきた。

そりゃあ勿論、俺の服も濡れるわけで…。

「い…こら！離れろ千歌！」

「嫌だよ！絶対に離さない！」

「えっ………？」

なんだか千歌の言葉が、別れに別れたくない恋人の彼女のようそんな言葉だった。そんな事を言ってきた千歌に対して、俺が変にスキを見せてしまった時は、もうすでに遅かった。

「スキあり〜！」

「げっ!?!しまっ………!?!」

千歌を引き剥がすことに夢中で、自分の体が後ろに仰け反って倒れそうなことに気づかなかつた俺は、千歌の言葉でやっと気づいた頃には時すでに遅く、そのまま千歌に後ろに倒された。

それで千歌が俺に覆い被さる形で上にいて、俺は砂浜を背にして動くこともままならない状態。

「へっへん！私の…勝ちだね！」

「一体何の勝負なんだ？」

俺を倒した千歌は、ドヤ顔でそう言い放つ。

だが、さつきまでののはただ海の水を掛け合っただけで、いきなり千歌がそんなことを言つても何の意味もないし、別に勝負をしていたわけでもない。

それに一見不利な状況であるが、全然不利でも何でもない。なんせ、この状態でも、形成逆転が俺には十分に出来るからだ。

「でも、詰めが甘いよ」

「えっ？ きゃあ……！」

俺は千歌にそう言った瞬間、自分の両手を使い千歌の両肩を掴む。にして、体に勢いをつけてそのまま体を左へ回転させる。

「形成……逆転だな……」

「な……なんで!？」

千歌は一瞬の出来事に理解できずにいた。なんせ俺を押し倒していたはずなのに、いつの間にか自分が押し倒されていたのだから。

「さあ……どうやってお料理しようか？」

「えっ……？今から何するの？」

お料理という言葉に、千歌は首をかしげる。こんなところでお料理なんて言葉はまず出てこないし、あり得ないってね。

だけど俺にとってのお料理というのは、今から千歌をお料理するってことなんだ。

「何って……こうするんだよ」

ムニユ♪

「えっ……？／／／」

俺は服の上から、千歌の胸を鷲掴みに触る。

その瞬間、千歌は驚き顔を真っ赤にする。

「ちよ…遼くん!?!」

「千歌がいけないんだ。そんな濡れた体で俺を誘惑するから……」

唐突にお前は何を言っているんだって思う人も多いはずだ。千歌もそんな表情をしている。

実は今の千歌の状態を見ていた俺は、すごく興奮気味だった。濡れた服を身に纏い、身体のラインがくつきり見えていた千歌のその状態がね。

モミツ…ムニユムニユ……

「あつ…なに…んっ…／／／」

千歌の喘ぎを見るに、初めての感覚なんだろう。

胸を揉まれ、何かよく分からないものに陥っていく感覚と、千歌の発した嬌声がそれを物語っていた。

「千歌、感じてるんだね？」

「えっ…感じ…てるって…？／＼／＼」

「…気持ちいいってことだよ」

「気持ち…いい？／＼／＼」

それを俺は、『気持ちいい』という言葉で説明をした。あながち間違っではないと思う。

千歌は一度俺が発した言葉を繰り返す言うが、それが気持ちいいという感覚には、まだ完全に理解出来ない様子を見せていた。

「うっ…んっ、よく…分からない…や／＼／＼」

「そうか。なら…」

その様子を見かねた俺は、千歌に対し、一度はその感覚を覚えさせたほうがいいのかなと思ひ、俺はすぐ様行動に移したのである。

「その感覚を、今ここで覚えさせてやる」
「えっ……あつ、んんっ／＼／」

千歌も思春期に入るし、そのうちは好きな男の子が出来て恋人になって、そして多分……うん、その先は今とは言わないでおこう。

「はあ……あつ、んっ……／＼／」

「気持ちいい声、出てるよ……千歌」

「はっ……んっ……あんっ！／＼／」

俺はすでに千歌の服を首までたくし上げ、オレンジのブラをも一緒にたくし上げる。だから千歌の胸は、一糸纏わぬ姿になっている。

その胸に俺は、両手で激しく揉んでいた。

左胸の頂点の乳首を左手の親指と人差し指で摘んでクリクリしたり、右胸は右手を大きく使って胸を鷲掴み、激しく揉んであげたり。

今の千歌は、快楽に溺れていた。

「りよ……りよくん……」

千歌の声は、思わず脳が溶けてしまいそうなくらいの甘い声で発せられ、呂律が回っていない。

顔を火照らせ蕩けた顔をしていた千歌は、俺に対してそんな声を発しながらあることを言ってきた。

「遼くん、なんか……変なの……くる／＼／」

「変なの……?」

“変なのが来る”

その言葉を聞いた俺は、もうアレしかないとすぐに理解することができたのと同時に、自分の両手は、千歌の短パンに手をかけていた。

「りよ……遼くん……?」

「パンツ下がるから、腰上げて?」

「……うん……／＼／＼」

俺の行動に不思議に思っていた千歌だったが、千歌の頭は今それを考えられる余裕がなく、俺の指示に従って腰を上げ、俺はパンツを下げる。

やっぱり……あそこ〃が濡れていた。

クチュ……♪

「あんっ！／＼／＼」

「ごめん。でも大丈夫だから」

俺はそう言つて千歌に謝り、右手であそこを弄る。

激しい水音が俺の耳に入って興奮を駆り立て、千歌は更に激しい嬌声を上げる。

「あつ……ああっ！んっ……はあん！／＼／＼」

「大丈夫、直ぐに終わるから」

俺は千歌に優しく声をかけつつ激しくあそこを弄ったり、胸には緩急をつけて弄ったりしていく。

そのおかげか、千歌は身体を小刻みに震え上がらせ、俺の首に両腕を回して言い放つ。

「あんっ！くる…くる…なにか…きちやう！」

その千歌の様子を見た俺は、千歌の耳元で囁いた。

「いいよ。イツちやえ……！」

小さい声で、尚且つ力強く。

そして俺の言葉を聞いた千歌は、強い刺激を感じながら、身体が弓のように仰け反り、腰を震わせて叫んだのだった。

「イ…イ…イツちやううううう〜！」

『イツちやう』

そう叫んだあとの千歌は、『はあ……はあ……』と卑しい吐息が漏れ出していて、グツタリとそのまま仰向けで寝てしまった。

「すう……すう……」

「あらら……寝てしまったか……」

このあとまた作詞をしようと思ってたのに、てか、こうなったのは全部俺のせいだな。海の水を掛け合って、それでこんなエロい展開にまでなつて……。

全て……これは俺の責任だな。

「よいしょ……つと」

俺はとりあえず千歌をお姫様抱っこし、千歌の部屋まで運ぶ。千歌の今のこの状態は、まるで……疲れて寝ている子供のようだった。

「さて、少しだけやるか」

そしてベッドに千歌を寝かせた俺は、そのまま一人で作詞を作り始めた。作詞するのは初めてだけど、きつと何とかなるだろうってね。

確か考えていたコンセプトは『夢』

うん……きつと何とかなるだろう（汗）

#28 千歌との初経験 後編

あれからまた1時間が経った。

『夢』っていうコンセプトのもとで、ある程度言葉を繋ぎ合わせて作ってみたはいいものの、なかなかしっくりくる歌詞は出来なかった。

「はあ……駄目だこりゃ……」

初めて作詞というものをしてるのに、初めてでも分かるくらいに作詞の出来が悪い。

俺は歌詞が書かれたその紙をくしゃくしゃに丸め、それを部屋の隅っこにあるゴミ箱に放り投げた。

もうこの動作も、もう10回目にもなる。

「はあ……どうすればいいんだ？」

新しくテーブルに置いた真つ白な紙とにらめっこしながら、俺はボソツと悔し紛れにそう呟く。ここまで何かしらに上手くいかないことなんてなかったから、本当に悔しかった。

「んん……あれ？ 遼……くん？」

するとついさつきまで寝ていた千歌の野郎が、ようやく眠りから目が覚めたようだ。

俺が歌詞作りを再開した時間と同じ時間に寝始めたから、千歌がベッドで寝ていた時間は、1時間程度くらいになる。

そんな千歌は眠りから覚め、眠気でしょぼしょぼした目を両手でこすり、俺に尋ねてくる。

「遼くん、何……してるの？」

「見て分からない？ 作詞してるんだよ」

俺はその答えに、自分が書いている紙を見せた。

『夢にまつわる歌』

でも実際、今はこれだけしか書いてない。

だけど千歌に手伝ってと言われた作詞は、ちゃんと作業しているつもりだ。

「夢にまつわる……歌」

「お前話してたろ？ 次の曲は、『夢』をコンセプトにした曲にしたいってさ」

「……………あつ！ 忘れてた！」

ズツテーーン！

千歌の発せられた言葉に、俺は盛大にずっこける。

そして同時に俺は呆れ、大きなため息をついた。

なんというか、本当にこいつは「バカ千歌」なんだな〜って、改めてそう感じさせら

れたよ。

「馬鹿かお前！忘れてたとかアホやろ！」

「だって忘れてたんだもん！」

俺は千歌に対して作詞のコンセプトを忘れていたことに指摘をぶちかますと、千歌は忘れていたということとで一点張りである。

はあ……まあいいや。

本当なら千歌を襲おうと思っていたのだが、1時間前に千歌をやったことを思い出し、それもあるからまたあとでにしようと思った。

とりあえず俺は、千歌を隣に座らせる。

「とりあえず起きたなら、隣に座れ！」

「ふんっ！言われなくても分かっているよ〜！」

千歌はブンブンと未だに怒ながらも、俺の隣に正座して座り込む。その千歌に俺は彼女がいつも使っている歌詞ノートとシャープペンシルを渡し、千歌にこう言い放った。

「帰る時間までは、俺もちゃんと作詞に付き合つてやる。それまでお前も頑張れ」

「……………つ！遼くん……………」

俺が帰ろうと思つている時間は6時。

その頃には夕陽も沈みきつて、夜になりかけているだろうけど、その頃には俺は帰るつもり。

だからその時間まで作詞を頑張ろうつて、俺は千歌にメールを送つたら、彼女はそのメールにやる気が出たみたいだった。

「うん、千歌も頑張る！だから遼くんも頑張ろ！」

「ああ！お前に言われなくても！」

俺にまたメールを送つてくる千歌に対し、俺はふと笑みを浮かべながらそう言い返す。

さつきまでのちよつとした口喧嘩は嘘のようになくなり、俺と千歌は作詞を再び始めた。

そして1時間半が経過し、残り30分。

だが、意外にもそこまで時間はかからなかった。

「やった〜！出来た〜！」

ようやくの思いで、次の曲の歌詞が完成した。

「遼くんありがとう！手伝ってくれて！」

千歌は嬉しそうにお礼を言ってくる。

ただ今までの3時間は、凄く無駄な時間だったなと俺は考えていたけれど、歌う側の千歌にとっては、そんなものはどうでもいい感じだった。

「別にいいよそんなの。お礼くらい……」

千歌にはそんなことを返し、俺はその場で立ち上がる。もちろん、作詞が終わったから帰るためだ。

「えっ? どこにいくの?」

「どこにつて、作詞が終わったから帰るんだよ」

「ええ〜!?!」

だが千歌は、すごく名残惜しそうな声を上げる。

そしてそれは何だか、俺を家から帰らせるつもりがなさそうな声にも思えてくる。

すると千歌は、とんでもないことを発言した。

「なんで帰るの!?!泊まってつてよ!」

「……………えっ?」

俺は耳を疑ったよ。

なんせ千歌から、自分からそんなことを言い出すとは思わなかったからね。正直ビビってる。

「泊まるって、ここにか？」

「そうだよ！今日手伝ってくれたそのお礼！」

「はあああああ!!？」

どうやら千歌は、今日の作詞を手伝ってくれたお礼として、俺を部屋に泊めようというのだ。

気持ちは嬉しいが、それはダメだ。

「すまないが、今回は見送らせてくれ」

「ええ?! 駄目なの？」

そんな悲しい顔すんなよ……。

俺だつて明日には学校で朝練だし、もし今日泊まることになったら明日大変なことになるので、家に泊まったら確実に俺の身がもたないかも……。

「うつ…そんな目で見るな……」

「ねえ〜！おねがあ〜い♡」

だがそれに負けじと千歌は目をウルウルさせ、俺にガシツと抱きついては、上目遣いで俺に泊まってと訴えかけてくる。

弱った……完全に弱ったな、俺ってば……。

砂浜で起きた出来事を早く忘れがたいがため、早く家に帰ろうとも思ってはいたが、千歌の様子を見るにそうそう返してくれなさそうだった。

もうこうなったら、仕方ないのかもしれない。

「はあ、仕方ないなあ……」

「…っ！泊まって…くれる？」

純粹で生粋な目で上目遣いをしてくる千歌に、俺は屈することになってしまったよう

だ。

その千歌の問いかけに、俺は答える。

「分かったよ。ただし…今回だけだからな」

「うわあ〜い！遼くんありがとう！」

そしたら千歌のやつは大喜び。

部屋の中を悠々とはしやぎ回り、下手したら隣の部屋にいる美渡さんに怒られるんじゃないかって思っていたが、美渡さんが姿を見せることはない。

すると、千歌が美渡さんの話をする。

「美渡姉は今、仕事で出張なんだ」

「出張。だからいないのか？」

「うん！だからこうしてはしやいでるの！」

逆に美渡さんが隣の部屋にいたなら、こんなに千歌がはしやぎ回ることもないつてことか。そうだとしたら、本当に家ではお騒がせな奴なんだな。

やれやれつて感じだぜ、全くよ……。

「じゃあ志満姉ちゃんに言ってくるね〜!」

「はいはい。行つてらっしゃい」

それで千歌は、志満さんに俺が家に泊まる事を告げに部屋を出ていき、俺もスマホでお母さんに千歌の家に泊まると連絡を入れた。

母さんつてば、驚いていたけどね。

『えっ?!千歌ちゃんの家に泊まるの!?!』

『うん。でも明日の朝の、5時とか早い時間帯には家に帰るから大丈夫だよ』

『そう。あまり迷惑かけないようにね?』

『分かつてる。じゃあ、切るね?』

そうして母さんとの電話を切ると、ちょうどその頃に千歌も部屋に戻ってきた。

「言ってきたよ!」

「はいはい。分かりましたよ」

「はあく!! 遼くんが千歌の部屋に泊まるなんて、とつても久しぶりな気分だよ♪」

満面な笑みを浮かべている千歌は、俺が千歌の家に泊まることに対して、高揚感と、懐かしさというものが言葉として俺に発せられた。

俺も、千歌の家に泊まるなんて久しぶりだ。

子供の時とかは、よく曜とも一緒に泊まっていた時があった。でも、今はそんな機会すらない。

俺も曜も進むべき道を、夢に向かっていている最中。

だから誰かが誰かの家に泊まること自体、滅多になくなってしまったのだ。仕方ないといえば、仕方ないけどね。

「じゃあ始めよ!」

「えっ……?」

すると千歌は突然、パソコンを俺の目の前に持ってくる、パソコンの画面にはスクールアイドル一覧というものが映し出されていた。

「あの……千歌さん？一体何を……？」

それに千歌の格好は、いつそれに着替えたんだって思うくらいだった。

よく着るであろう真つ黒なスーツをビシツと着こなし、赤色で縁取られた眼鏡を装着していた。

それで千歌が俺に対して、一体何をしようとしているのか尋ねると、千歌は両手を腰に当てて、大きく膨よかな胸をドンツと張って答えた。

「今から遼くんには、スクールアイドルの勉強をこのタカミーチカから教えてあげます！」
「……………はっ？」

その答えに、俺は心の中で呟いた。

『マジかよ』と……。


~~~~~※※※~~~~~

「はいっ！これでスクールアイドルについての勉強はおしまいだよ！」  
「はあ……疲れた……」

色んなスクールアイドルの話聞いていて、俺の身体はすごくどつと疲れた気分  
に陥っていた。

別にスクールアイドルの話は、聞いていて楽しい。

全国には色んなグループがあつて、その各グループそれぞれに個性があつて、色んな  
スクールアイドルがあるんだな〜って感心させられる。

ただ：疲れた要因として強いて1つだけあげるならば、それは千歌の話し方に問題がある。

はつきり言ってしまうえば、全国のスクールアイドルのグループの紹介の仕方というか、千歌の話し方が飛びに飛びまくっているのだ。

例えば、『これは〇〇〇〇ってグループで3人組』

あとは、『この学校のグループの人数は6人』

おまけに、『これは〇〇〇〇〇〇ってグループ』

最初の話については、そのグループがどの学校に通っているのかが不明であること。

2つ目は、通っている学校は分かったが、その6人のグループ名がなんなのか不明であること。

そして3つ目は、グループ名しか言わずに、何人が所属しているとか、どこの学校に通っているとかは何も言わず、全くもって論外であること。

スクールアイドルの紹介の仕方がそれぞれバラバラで、もうちよつといい話し方とかないのかなくと、少し残念な気持ちになっていた。

「どう?面白かった!？」

だが、そんな俺の気持ちはどこ吹く風。

千歌は目をキラキラ輝かせ、自分の話に対してどう思っているのか感想を聞いてくる。

この雰囲気からして、こう答えた方がいい。

「ああ、とても面白かったよ」

「本当!?!良かった〜！」

こう答えた方が、千歌も十分に喜ぶ。

「また時間あったら、またスクールアイドルの勉強しようね!私はいつでもできるから!」

「ま…まあ、時間があつたらな?」

でも千歌が笑顔でそう話してきたとき、俺は苦笑いをしながらそう話す。そして俺が千歌に対して言った喜ぶようなことを、彼女に言わなければ良かったと、俺は後悔した。

すると部屋の外から、志満さんの声がする。

「2人とも、ご飯が出来たわよ！」

「は〜い！今から行くね〜！」

「あれ、もうそんな時間かよ」

志満さんの声を聞いて時計を見ると、ちょうど時間は7時を回っていて、晩御飯には良い時間。

逆に1時間ものスクールアイドルの勉強をしていたと思うと、スクールアイドルの影響力は凄いいんだなって改めて思う。

「じゃあ、ご飯食べてこよう！」

「そうだな。俺も腹減ったし」

「えへへっ♪じゃあ行くこうよ！」

俺は千歌と一緒に晩御飯を食べに台所へ向かう。

台所のキッチンと冷蔵庫、後はダイニングテーブルと椅子が一緒に設けられた部屋に向かうと、ピンクのエプロン姿がよく似合う志満さんがそこにいた。

「ごめんね？今日は簡単なものしか作れていないんだけど、お口に合うかしら？」  
「わあ〜い！今日は生姜焼きだ〜♪」

テーブルには、大きなお皿に出来立ての生姜焼きが置かれていて、生姜焼きのお肉と、玉ねぎの香ばしい匂いが鼻を突き、腹を虫を鳴かせる。

千歌の口からは既によだれが垂れている。志満さんもそれを見て、フツツと笑みをこぼしていた。

「千歌、よだれ出てる」

「あつ、生姜焼きが美味しそうに見えて…つい…」

「やれやれ……」

俺はよだれが出ていることを千歌に指摘し、千歌は慌ててよだれをティッシュで拭く。

それで俺と千歌が席に着いたところで、志満さんは両手を広げ、俺と千歌に対して笑顔で言い放った。

「さっ、たあ〜んと召し上がれ♪」

「いただきます〜す〜！」

その志満さんの言葉に両手を合わせ、そして食べ物に感謝の気持ちを寄せて、2人でそう言った。

「う〜ん♪美味〜い♪」

「生姜焼き、とても美味しいです〜！」

「うふふつ、良かったわ〜♪」

箸で肉と玉ねぎを同時に口へと運ぶ。

お肉のジューシーな旨味と、玉ねぎのちよつとした甘みがいい感じに口の中で広がって、物凄くたまんねえ〜！って感じに美味しい。

頬つぺたが落ちるって、こういうことなんだな。

前までだったら、今まで俺が千歌の家に泊まった時は、いつも千歌のお母さんが晩御飯を作っていた。

今は仕事の関係上、千歌のお母さんはいないらしいけど、志満さんもそれくらいに美味しかった。

「はあ……♪食べた食べた〜！」

いつも志満さんの手料理を食べている千歌も、今日はすごい満足気な笑顔の表情をしていた。

いつも家で食ってるのにね……。

「志満さん、今日はご馳走様でした！」

「はあ〜い！お粗末様でした〜♪」

俺は志満さんに対してそんなお礼の言葉を告げると、志満さんも手料理を賄って良かったと、そんな嬉しそうな表情が見てとれる。

俺が泊まるって千歌に言われて、それなりに料理に対して腕を振るったんだと思う。するとその志満さんが、俺に話をしてくる。

「今日は旅館にお客さんは誰もいないから、遼くんの大好きな露天風呂、貸切出来るわよ？」

「えっ!?! 本当ですか!?!」

「うふふ……本当よ♪」

なんと、旅館には今誰一人泊まっていないらしい。

それで志満さんが言うには、今なら露天風呂は貸切状態で入れるということだった。

実は俺、千歌の旅館の露天風呂が大好きだ。

昼間とかに露天風呂に入ったら、海を眺められたりと景色は最高だ。でもだからと言つて、夜に入りたくないわけではない。夜の景色も最高だ。

満天の星空を眺めながらお風呂に入るのも、俺の中では気分的に最高の気分だ。

でも、逆に入ってもいいのか？



「えっ、でも、入っていいんですか？」

「勿論よ！今日はもう旅館にお泊まりに来るお客さんはいないから、ゆつくり入ってきなさい」

「は……はあ……」

志満さんは、『お言葉に甘えなさい』って感じに、笑顔で俺に対してそう話してくる。隣に座っている千歌も、『そうしなよ』という風に笑顔の表情で接してくるから、こういう時は素直に甘えさせてもらったほうがいいのかももしれない。

でなきや、志満さんに失礼だもんな。

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

「は〜い。ごゆつくり〜♪」

俺は志満さんにそう言い残し、食べた晩御飯の食器を片付けてから部屋を出る。

向かうのは、俺の大好きな露天風呂だ。

それで俺は、着替えを持ってきていない。千歌の家に泊まるなんて思ってもいなかった

たからだが、志満さんが特別に旅館用の寝巻きを貸してくれるというので、すごく有り難かった。

～  
～  
～  
～※※※※～  
～  
～  
～  
～

「久々だな、ここも……」

目の前にあるのは、大きく書かれた『ゆ』の文字。

その暖簾をくぐると、よく見慣れた風呂場の脱衣所の大きなスペースが現れる。小さ

い頃から結構時間が経っているけれど、全然変わってない。

とりあえず久々の露天風呂。満喫するぞ！

「さくて、さつさと入りますか！」

俺は着ていた服を全て脱ぎ、まずは頭と体を洗うため、脱衣所からシャワーが設置された部屋に出る。

露天風呂に行くには、シャワーが設置された部屋から外に出るので、お楽しみはまたあとで……。

シャカシャカシャカシャカ♪

「はぁ……気持ちいい……」

シャンプーを泡立て、頭を洗う。

あらかじめ露天風呂に入るんだったら、少し運動とか、いつものランニングをしてくれば良かったと、俺は今すぐ後悔している。

運動後のお風呂とか、もう最高の一言。

お風呂に入っているときの疲れが抜けていく感覚が俺には堪らないんだ。入る時はお風呂には10分以上も入っているときがある。

まあ、大体その時はのぼせちゃうんだけどな…。

そんな時でした。

「お待たせしました！お客様♪」

「え” え” つ!？」

俺の後ろから突然声が出て、俺はその反応とともに頭をついている泡をシャワーで洗い流す。

全ての泡を洗い取った後で、顔をふと声が出た方向へと向けると、真っ白なバスタオルを巻いた彼女の姿がそこにあつた。

絶対にここには入ってこないだろうと思つてはいたのに、彼女が入ってきた途端、俺は今までで発したことのない声を上げてしまった。

「……お、おおお前!?!何入ってきてんだ!?!」

「何って、遼くんと一緒に入りきたんだよ?」

「えっ!?!」

俺は、完全にこいつに対して油断をしていた。

風呂にやってきたのは、千歌である。

「遼くんがちょうど頭を洗い終えたってことは、次は身体を洗うんだね!そしたら私が、遼くんの背中を洗ってあげるよ!」

そして入ってきて早々に、俺の背中を洗ってあげるといっご奉仕的な行動に千歌が出てきた。

背中だけなら別にいいが、なんだか変な感じだ。

小さい頃とかはよくそんな事をして一緒にお風呂に入っただけはいたけれど、いざ成長してまた一緒に風呂に入るってなった時、俺はすごくドキドキする。

千歌の身体は、エロいほどに成長している。

性格とかはまだ子供だが、身体は大人っぽくなり、胸も大きく成長していた。

って、何考えてんだよ俺は……。

「ほらほら、千歌に背中向けて！」

「痛っ！お前、それでも旅館の娘かよ！」

「むう！これでも真剣にやってるんだから！」

仕方なく俺は千歌に背中を向け、背中を洗ってもらうことにはしたが、千歌がゴリゴリと力強く洗ってくるから逆に背中が痛い。

力加減でいうものを、こいつは知らんのか？

それで背中だけを洗ってもらった後、自分で身体の隅々まで洗い流し、待ちに待った露天風呂に入る。

露天風呂の湯加減は、とても最高だった。

「はあく♪極楽々極楽々♪」

「湯加減はいかがですか〜？」

「ああ、最高だよ」

「えへへっ♪良かった♪」

背中を洗ってくれた千歌も、俺が身体を洗っている最中で頭と身体を洗い流してて、そのまま露天風呂に入っては、俺の話に嬉しそうに聞いていた。

ていうか俺と千歌は一緒に入っているわけだから、ぶっちゃけこれって混浴みたいな展開だよな。

「千歌と風呂に入るのって、小学生以来だよな？」

「そうだね。私も久しぶりだよ！」

素っ気ない話を繰り広げ、俺は空を見上げる。

空は雲一つなくて、星もすっかり見える。意外と、今日泊まってって良かったかもしれないな。

「星、綺麗だな……」

「うん、綺麗だね……」

ただ、思うように会話が弾まない。

千歌の表情は明るい、俺の話に対して一言で会話が終わってしまう。こういう時は、アレを聞くしかないな。

千歌にかえって申し訳ない気持ちがあるが、これが男の性癖なんだ。許してくれ、千歌。

「そういえば千歌って、バストどれくらい?」

「なっ!?!いきなり何聞いてくるの!?!」

俺は千歌に対し、胸の大きさを聞いたのだ。

その質問に千歌は瞬間的に顔を真っ赤にし、両腕を使って胸に当てては、胸を隠して俺から離れるように後ろに後ずさる。

女の子だけあって、顔をトマトのように真っ赤にするあたり、そういうことには敏感なんだな。

「まあ……気になるから?」

「女の子の秘密は、聞いちゃダメ!」



千歌は顔の前でバツ印を作る。自分の身体の秘密を俺には知られたくないらしい。

千歌の顔の赤さと表情を見るに、俺から胸のことを聞かれることに凄く驚いていて、ものすごく恥ずかしそうな顔をしている。

だが俺からしてみれば、そんなに千歌の胸が大きいと、逆に胸の大きさが気になって仕方がなかった。

「まあまあ…そんな事を言わずに……」

だから俺は、じわりじわりと千歌に迫った。

けど千歌の口から放たれた一言に、俺の身体は時間が止まったようにピタッと止まった。

「りよ…遼くんダメ。今に千歌をやったら、夕方の浜辺のときみたいになっちゃう／＼」

ピタッ！

千歌ってば、夕方のこと覚えてたんだ。

あの時はすぐに千歌は寝てしまったのにな。あの時を覚えていることに俺は驚いている。

「あの時は、お前はすぐその場で寝ちやっただけけど、あの時のこと覚えてたんだな」

「あれはちよつと、忘れられないかも……／＼／＼」

千歌は顔を赤らめながら、あの時のことが忘れられないと呟く。あれは俺からしかけたことだからな。申し訳ないと思っている。

「あれは俺から始めたことだから、別に千歌は気にしなくてもいいよ。でも、俺は胸が気になる」

「も……もう〜！ 遼くんってば〜！／＼／＼」

俺がそう言えば、千歌はポカポカと右肩のあたりを両手で打ってくる。

だが、千歌に打たれても痛くもかゆくもない。別にからかつてるわけじゃない。気になるだけ。

揉んで確かめたいくらい、気になっている。

「……………はあ……………もう……………／＼／＼」

すると千歌は俺に背を向けてため息をつくとき、俺に振り返ってきていきなり命令してきた。

「遼くんっ!!」

「んっ? 何だ?」

「そこ……………座って!」

千歌に命令されたのは、とある場所に座れという命令だった。場所は、風呂場のすぐそばの角。

正面を見て首を右に回せば、ちょうど海が見える。

そんな角の場所で、一体何をするつもりだろうか? そんなことを考えていた矢先、千歌はとんでもない行動に出たのだった。

ハラリツ……

「なあ!? え……ええ!? // //」

千歌は、巻いていたバスタオルを自分から取って、一糸まとわぬ姿となったのだ。

その瞬間を見た俺は、思わず鼻血が出そうになる。

そして千歌はその後、俺の目の前に座る。それで俺の身体に自分の身体を預けるようにして、俺に寄りかかって座ってきた。

「あ……あの……千歌さん? // //」

俺の顔が今、どんな風になっているかは察して。

俺は正面に座る千歌に『さん』付けで呼ぶと、千歌はボソツと呟いた。

「……………いよ // //」

「えっ? なんだったって?」

「“触っていいよ” って言ったの! // //」

俺が千歌の声を上手く聞き取れなかったことを聞くと、彼女は俺の耳元で大きく叫ぶ。

『触っていいよ』

その言葉から考えられるのは、俺は…千歌の豊満で大きな胸を触ったり、揉んだりすることが今ここで出来るということ。

「い……いいの? // //」

「いいよ。遼くんなら…… // //」

俺はもう一度確かめると、彼女は俺に振り向かないまま、そのまま首を縦に振る。彼女は、恥じらいを捨てて俺に伝えてくれた。

自分の胸は、俺になら触られてもいいという了承を得て、俺は固唾を飲み込み、そつ

と……両手を千歌の胸の前まで持つてくる。  
それから俺は、彼女に告げた。

「じゃあ、触る……ね？」

「う……うん……」

触るよという、自分の行動を伝えた。

そして俺は、千歌の胸をギユツと鷲掴んだ。

「ひゃあ……」

「……っ！」

掴まれた瞬間の声は、とても千歌から発せられることのない、今までで聞いたことのない声。

モミツ……モニモニツ……♪

千歌の胸は、ちよūdの俺の手に収まるくらいな大ききで、触つていてとても柔らかい。

俺は千歌に対して、感想を述べる。

千歌の胸を揉んでいる、その様子を見せながら。

「千歌の胸……とつても柔らかいよ」

「うう、言わないでえ……／＼／＼」

すごく恥ずかしい表情が、彼女から見て取れる。

耳元で胸が柔らかいことを千歌に告げれば、彼女は顔を火照らせ、羞恥にまみれる。

「はあ……あつ……んんっ……／＼／＼」

それで千歌の嬌声に耳を傾けて聞けば、俺の性欲はさらに駆り立てられ、胸の揉み方を次第にゆつくりと変えていく。

2つの双丘の頂点に位置する乳首。その薄ピンク色に染まった乳首をも一緒に刺激させて、より一層に激しく胸を揉んでいた。

「あっんっ……はあ……ああん／＼／＼」

同時に、次第に大きくなる彼女の嬌声。

「んっ……はっ……あんっ……ああん！／＼／＼」

千歌の心臓の鼓動が早くなっているのが分かるし、自分の心臓がどうなっているのかさえ分かる。

それくらい、俺の千歌の身体は密着し合っていて、俺も千歌も心の底から興奮していた。

そしたら千歌は、途切れ途切れに言ってくる。

「遼……くん、千歌……気持ち、いい……／＼／＼」

「……………そうかい」

でもその言葉は、俺の性欲がさらに高まる言葉で、途切れ途切れの言葉が逆にエロく



て、今の状況から千歌をイかせたくなった。

俺は、ひたすら胸を揉み続けた。

「あつ……ああつーんつ……はあん！／＼／＼」

弾力があつてハリのある胸に、しばらく弄ったせいでぶつくりと大きく膨らんだ乳首を、俺は意のままに揉み続けた。

「んっ……あんっ……ああん！／＼／＼」

千歌に関してはもう抵抗する気力も何もなく、ただ俺に自分の胸を触られ揉まれ、弄られる。

千歌はあの時と同じように、快楽に溺れていた。

「遼……くん、私……を、イか……せて……／＼／＼」

「……っ！千歌……」

すると千歌は、胸を激しく揉んでいるだけなのに、彼女はイかせてと俺にお願いをし  
てきた。

また夕方の時のようになってしまっけど、あの時とはまた違い、今度は千歌の方から  
お願いしてきた。だから俺は、その言葉に応えなければならぬ。

そう……最後までイかせるためにね。

「分かった。千歌を気持ちよくさせるよ……」

「うん、来て……♡」

そして俺はスパートをかけるため、千歌の敏感なあそこをまた弄り、千歌を気持ちよ  
くイかせる。

クチュ……クチュクチュ……♪

「あつ、あんつ……ああん！／＼／＼」

あそこを弄ればいやらしい水音が鳴り、千歌は嬌声を上げ、腰を思いつきり仰け反つ

ている。

彼女の声を聞いている限り、千歌はとても気持ち良さそうな声を上げていた。

「あんっ……んっ……ああん／＼／＼」

右手を使ってあそこを弄り、左手で両方のおっぱいを揉みしだく。今の俺にとっては  
ファイバータイムのようなものだった。

千歌のおっぱいなんて、いや、女の子のおっぱいなんて滅多に触れるものではない。だから俺は、千歌に対してこう告げながら、彼女を気持ちよくさせて、気持ちよくイかせてあげた。

「最後に気持ちよく、イっちゃええ！」

「あああああああん!!!／＼／＼」

あそこを激しく弄り倒し、おっぱいを揉みしだき、千歌は腰を思いっきり仰け反らせ、  
イった。

「イ……イツ、イツちゃうううう!!／＼／＼」

旅館の外にまで響くくらいに声をあげ、いった直後の千歌は、ぐったりと俺の体に身を預けた。

「はあ……はあ……／＼／＼」

「はあ……はあ……」

俺も千歌も、当然のごとく息が上がっていた。

当たり前だ。こんなにも激しくなってしまったことが、俺の中で想定外だったからな。

でも俺も千歌も、とても満足だった。

「気持ち……良かった？」

「うん。気持ち……良かったよ／＼／＼」

俺の問いかけに千歌はそう答え、笑顔を見せる。

本来の目的は胸を触るだけだったのに、千歌は興奮して最後にはイかせてしまった。でもまあ、今日で2度も興奮している千歌を見られたのは、俺としては良かったかなって思ってる。

とりあえず露天風呂出たら、もう寝るなこれ。

「千歌、一緒に上がろう?」

「うん。分かったよ遼くん……／＼／＼」

それから俺と千歌が風呂から上がったあと、千歌は部屋のベッドですぐに熟睡してしまった。

布団をかけ、スヤスヤと眠っている千歌を微笑ましく見つめていた俺は、明日は部活の朝練のために、俺もすぐに寝ることにした。

「おやすみ、千歌」

「うう……んっ……遼……くん、好きい……」

おやすみと言った一言に対して、千歌は寝言でとんでもないことを言ってきたが、あ

くまで寝言なのであまり気にしないでおいた。

「千歌、おやすみ……」

もう一度千歌にそう告げ、俺は深い眠りについた。

今日は千歌の『初経験』？ありきな1日だったが、案外とても楽しかったと、俺はそう感じている。

スクールアイドルの話がたくさん聞けたし、志満さんから手料理を振舞ってもらい、久々に露天風呂にも入ることが出来た。

俺の中では、楽しい1日だったよ。

頭の中で日記のように綴り、今日の出来事を決して忘れないようにしようと思った俺なのであった。

## # 2 9 学校が統廃合!?

く ルビイ side

放課後

全ての始まりは、理事長の鞠莉さんとお姉ちゃんの2人の会話からでした。

「どういうことですか!?!」

「どういって、書いてある通りよ」

そんな会話が聞こえた時、ルビイはたまたま理事長室の前を通り過ぎようとしていたところだった。

鞠莉さんとお姉ちゃんが話をしているのが私の耳に入り、一体何の話をしているのか

が私は気になって仕方なかった。

だから私はドアをこっそり開け、開いたドアの隙間から様子を眺める。コソコソして人の話を聞いちやいけないと思っっているけど、ルビイは気にせずにはいられなかった。

そしたら次の瞬間、理事長の鞠莉さんの口からは、ルビイが信じられないほどのことを言い出す。

「沼津の高校と統合して、浦の星女学院は『廃校』になる。ダイヤなら分かっていたことでしょう?」

「それは……そうですが……」

内容は、この浦の星女学院はなくなり、沼津の学校と統合するということ。

つまり、『統廃合』の話だった。

ルビイは両手で口を抑え、声が出ないようにする。あまりにも衝撃的過ぎて、思わず声を上げて驚いてしまいそうだった。

「嘘、学校が……廃校!?!」



ルビイは2人が聞こえないように小さい声で、鞠莉さんが言ったことを繰り返すように呟く。

ルビイは少し、信じられなかった。

やっとスクールアイドルになれて、A q o u r s のメンバーになって少しずつランキングも上がって、少しずつ人気になってきたところなのに……。

「ただ、まだ決定ではないの。まだ待つて欲しいと、私が強く言ってるから……」  
「鞠莉さんが……?」

すると鞠莉さんは、まだ統廃合が確定したわけではないと話し、鞠莉さん自身の理事長の権限なのか、『待つてほしい』と、伝えているらしい。

だとしても、たとえば学校の理事長の権限でも、それがいつまで持つてくれるのか分からない。

下手をすれば、時間の問題かもしれない。

「何の為に私が理事長になったと思ってるの?」

「鞠莉……さん……」

「この学校は絶対になくさない！私にとって、どこよりも大事な場所なの！」

だけでも鞠莉さんは、この学校を絶対に廃校にさせないと強く意気込んでいる。鞠莉さんの表情がその強い意志そのものを表現していた。

お姉ちゃんは、鞠莉さんに尋ねる。

「でも方法はあるんですの？この2年間、入学者はどんどん減っている一方なんですのよ？」

確かに、お姉ちゃんの言う通りでもある。

私と花丸ちゃん、善子ちゃんの3人が合わせたとしても、1年生はたったの15人しかない。

それをどういった方法で人を集めるのか？

ルビイもそれが気になって耳を傾けた時、鞠莉さんは座っていた椅子から立ち上がって、お姉ちゃんにその方法を話す。

「『スクールアイドル』、これがあるじゃない？」

「鞠莉さん……」

その方法は、スクールアイドル。

つまり、私たち『A q o u r s』が学校を救う方法の1つだと、理事長の鞠莉さんは話す。

そして鞠莉さんはお姉ちゃんに対し、握手をしようと右手を差し出しては、私にとって意味深な言葉をお姉ちゃんに投げかける。

「あの時も言ったでしょ？ 私は諦めない。今でも決して、終わったとは思っていない」  
「……………」

鞠莉さんが発したその言葉に、なんの意味があるのかはルビイは全く知らない。

だけどお姉ちゃんとの間で何かがあったことは確かだ、話を聞いていて自分の頭の中で理解出来る。

お姉ちゃんの身に、一体何があつたの？

そんなことを私は考えていた矢先、お姉ちゃんは、鞠莉さんとの握手を拒否した。

「私は、私のやり方で廃校を阻止しますわ！」

鞠莉さんに対してお姉ちゃんはそう告げると、鞠莉さんに背を向けてこつちに歩いてくる。

あつ……お姉ちゃんにバレちゃう！

こつちに歩いてくるお姉ちゃんに咄嗟にドアを閉めた私は、慌ててドアの陰に隠れるように廊下の壁にベツタリ張り付き。

ガチャ！バタン！

お姉ちゃんが理事長室から出ると、鞠莉さんにお辞儀をすることなく、そのまま私に

も背を向けて廊下を歩いていく。気づかれないように息を殺し、お姉ちゃんの姿が見えなくなるまで隠れた。

早く千歌さんたちにも、この学校の『統廃合』の話をしないと大変なことになっちゃう。

そう私が考えていた時、理事長室でただ一人佇んでいた鞠莉さんが、独り言のように呟く。

「本当、ダイヤは好きなのね。『果南』が……」

「……………」

ただ、それは意味深な発言だった。

その言葉にも、どんな意味が込められているのかはルビイもよく分からない。

とにかく、千歌さんたちに伝えなきゃ！

そう思った私は、まず1年生の教室へ走り出す。

花丸ちゃんと善子ちゃんに、『学校の危機』が迫っていることを伝えるために……。

ルビイ side out

~~~~~※※※~~~~~

「『統廃合?!』」

「そ、そうみたいです…。沼津の学校と合併して、浦の星女学院はなくなるかもつて……」

善子ちゃんがAqoursのメンバーになった束の間、ルビィちゃんの話聞いた私たちは、驚きを隠す事が出来なかった。

浦の星女学院の『統廃合』

沼津の高校と合併して、そのせいで浦の星女学院は事実上『廃校』になってしまったことに、私もみんなも信じられずにいた。

「そ、そんな……」

「それ……いつなの!？」

私はそのことにポツリと眩き、梨子ちゃんはルビイちゃんに対してそんなことを聞くと、ルビイは下に俯きながら話す。

「それは、まだ分からなくて……。一応、来年の入学希望者の数を見て決めるらしいんですけど……」

「そ、そうなんだ……」

すぐに廃校にはならないことに、梨子ちゃんは安堵はするものの、部室には重苦しい

空気が漂う。

でも、仕方がないようにも思える。

私たちの学校は少子化の影響だったり、入学希望者がどんどん減ってきている。そのせいもあって、学校が廃校の危機にさらされている。

何かと、必然的なことのように思えた。

「廃校……?」

「えっ? 千歌……ちゃん?」

そんなとき、さつきまで下に俯いて黙っていた千歌ちゃんが、ポツリとその言葉を吐く。

千歌ちゃんも学校が廃校になってしまう事に、ものすごく悲しく感じていると、そう思っていた。

「キター! ついにキター!」

「えっ!?! ちょ……千歌ちゃん?」

でも私の考えは、間違っていた。

千歌ちゃんはなんと、笑っていた。

学校が『統廃合』になるかもしれないっていうのに、千歌ちゃんは心なしか、凄く嬉しそうに笑う。

「統廃合ってことは、つまり廃校ってことだよね！学校のピンチってことだよね！」

「そ、そうだけど……」

「千歌ちゃん、心無しか嬉しそうに見えるよ」

私は左手を千歌ちゃんの顔の前で振って、千歌ちゃんに対してそう告げる。

すると千歌ちゃんは、嬉しそうに話をする。

「だって廃校だよ！音ノ木坂と一緒になんだよ！」

「確か、μ☒sが通ってた学校だよね？」

「そうだよ！それと一緒になんだよ私たち！」

学校の廃校のピンチであることを、μ☒sが通っていた音ノ木坂学院と同じよう見せ

かけて、千歌ちゃんは話を続ける。

「これで舞台が整ったよ！私たちが学校を救うんだよ！そして輝くの！あの、μsの
ように！」

「あ、あははは……」

μsと同じように、学校を救う。

何故か善子ちゃんを抱きかかえ、千歌ちゃんは右手の人差し指をビシツと上に掲げ
て、ポーズをとる。

千歌ちゃんに抱きかかえられている善子ちゃんも、なんだかノリノリでポーズをとっ
ていた。

それで梨子ちゃんは、千歌ちゃんに尋ねる。

「本当に出来ると思っているの？」

「出来るよ！μsが出来たんだもん！」

μsが、学校の廃校の危機から救うこと出来たんだから、私たちにも出来るよって、

千歌ちゃんは俄然やる気満々な表情を見せる。

「ただ、そう簡単に上手くいくかなあ……。」

「花丸ちゃんはどう思う〜?」

ルビィちゃんは廃校のことで、花丸ちゃんに尋ねている。花丸ちゃんも何かと真剣に考えている様子が見て取れた。

「ただ、花丸ちゃんが口から発せられたのは、私にとっては驚きの言葉だった。」

「統廃合〜?」

「こっちも!」

目をキラキラと輝かせ、統廃合という言葉に対して嬉しそうに笑う花丸ちゃん。

「それにルビィちゃんは驚くと、笑顔の花丸ちゃんはルビィちゃんに対して尋ねながら話す。」

「学校が合併ということとは、沼津の高校になるぞらね!あの町に通えるぞらね!」

「ま、まあ……」

「うわあ〜!!」

私たちが通うこの学校が廃校になれば、沼津に通うことができる。それが、花丸ちゃんが廃校を嬉しく思っている理由なんだと思う。

私にとって不確かな理由だけど、その花丸ちゃんを呆れて見つめる善子ちゃんは、私と梨子ちゃんに話をしてくれた。

「相変わらずね、ずら丸。実はずら丸、昔からこんな感じだったし……」

「えっ? そうなの?」

「幼稚園の頃から、よく『未来ずら!』って……」

善子ちゃんが私と梨子ちゃんに話してくれたのは、幼稚園の頃の花丸ちゃんの話。

幼稚園の砂場にあつた人感センサーで付く自動照明を、自分で付ける度にそう叫んでいたらしい。

昔から、花丸ちゃんは変わっていないんだね。

それで私は、今度は善子ちゃんに尋ねる。

「善子ちゃんは……」

「ヨハネ!」

「……ヨハネちゃんは どう思う?」

「そりゃ統廃合する方にヨハネは賛成よ! 私みたいな流行に敏感な生徒も集まってるだろうし!」

得意な墮天使のポーズをしながら、善子ちゃんは統廃合に賛成する。流行に敏感な善子ちゃんは、自分と同じ子たちと友達になりたいと話す。

「だけど花丸ちゃんは、善子ちゃんの心に『グサツ』と突き刺さるような言葉を投げかけた。」

「善子ちゃん良かったぞらね! 中学生の頃の友達に会えるぞらね!」

「やっぱり統廃合絶対反対!」

そしたら善子ちゃんは前言撤回。

きつといつもの墮天使ヨハネを、ドン引きするような目で見ていた子たちが多いのか

もしれない。善子ちゃんは慌てて、今言ったことを否定した。

バンツ！

そして、千歌ちゃんがテーブルを右の手の平で叩くと、私たちに対して一つの宣言をした。

「とにかくっ！廃校の危機が迫っていると分かった以上、Aqoursは学校を救うため、行動します！」

μsがしたように、学校の廃校を阻止する。

そんなやる気満々に笑顔を見せる千歌ちゃんを見ていたら、私もやる気が湧いてきた！

千歌ちゃんがやるなら、私たちもやらなきや！

「ヨーソー！スクールアイドルだもんね！」

私は笑顔を見せながら千歌の言う事に賛成し、いつもやっている敬礼をして『ヨソソロー』を呟く。

梨子ちゃんや花丸ちゃんたちは何も言わないけど、笑顔を見せているからみんなの気持ちは同じなんだと、私はそう感じた。

それで梨子ちゃんが口を開く。

「それで、行動って何をするの?」

その言葉を、千歌ちゃんに投げかける。

すると千歌ちゃんの表情は打って変わる。

「……………へっ?」

梨子ちゃんの話に、千歌ちゃんは首をかしげる。

その行動を意味するのは、千歌ちゃん自身が発した行動について、千歌ちゃんは全くもって考えていたなかったようだった。

「もしかして、全然考えてない?」

「か、考えてるよ!!」

梨子ちゃんの指摘に慌てる千歌ちゃん。

『考えてるよ』と言いながら、実は全然考えていなかったことは、千歌ちゃんに關してはよくあることなんだ。ごめんね梨子ちゃん。

「μsはね、スクールアイドルとしてランキングに登録して、ラブライブに出て、生徒を集めたって私聞いたことあるんだ!」

「それだけの?」

「あとは……PVを作ったりとか!」

それから千歌ちゃんは、梨子ちゃんから出る質問に対して意気揚々に答え、梨子ちゃんとはそんな感じにやり取りを見せる。

花丸ちゃんにルビイちゃん、善子ちゃんの3人は、今から何をするんだろうって、黙々と千歌ちゃんと梨子ちゃんの話聞いていた。

そしたら千歌ちゃんは、みんなに話を切り出す。

「よしっ! 決めた!」

「えっ? 何を決めたんですか?」

右手を握り拳にして、決心めいた言葉を口にした千歌ちゃんに花丸ちゃんは尋ねる。

その答えに千歌ちゃんはというと、『ムフフ』という少し不敵な笑みを浮かべながら答えた。

千歌ちゃん、ちよつと怖い……。

「P Vだよ! 私たちみんな、P Vを作るの!」

「……そもそも、〃P V〃ってなに?」

「あつ、梨子ちゃんはそのからなんだ……」

私は梨子ちゃんの言葉に少し驚いた。

初めて聞いたような声を出す梨子ちゃんに、私も隣に立つ千歌ちゃんも驚いていた。

「P Vっていうのはね……ゴニョゴニョ……」

「へえ〜！そういう意味なのね！」

「うん！だからみんなで作ろうよ！」

千歌ちゃんは梨子ちゃんに“PV”の意味について耳打ちして話をすると、梨子ちゃんはその説明に納得してくれた様子を見せていた。

「私はいいよ！なんか面白そう！」

私は千歌ちゃんの意見に、すぐさま賛同する。

善子ちゃんも同じように賛成する声を上げたけど、その時の善子ちゃんは面白かった。

「フフツ、堕天使ヨハネの姿を下界の民に思い知らせ、見てくれる人たち全員、リトルデーモンにしてやるんだから！」

堕天使ヨハネの口調から、だんだんいつもの口調に戻っていることを知らず、思っていることを口から発しているだけにしか見えない善子ちゃん。

花丸ちゃんとルビィちゃんは苦笑いをしているけれど、私も千歌ちゃんも梨子ちゃんも笑っていた。

「なによ！なんで笑ってるのよ！」

「いや、ごめんごめん！」

「善子ちゃん、無自覚だったずらか……」

さつきまでの重苦しいは、なんだか嘘のよう。

学校の統廃合の危機になっているのにも関わらず、私たちはみんなで笑い合っていた。

「じゃあ、練習を始めよう！」

私はそれで思う。

この楽しい時間を、この学校を、今からみんなで守るために、私たちは活動すべきなんだと思う。

もちろん、上手くいくとは限らない。

理由は、お姉ちゃんにこれからA q o u r sのPVを作るから、しばらく帰りが遅くなるので親に伝えて欲しいとお願ひするため。

あとでルビィからお母さんとお父さんに伝えるつもりだけど、いち早く伝えないと怒られちゃう。

だから、お姉ちゃんにお願いしに行くの。

「はあ……はあ……！」

廊下を走ったせいで息が上がってる。

呼吸……整えなきゃ……。

「すう……はあ……！」

千歌さんたちには、部室で待っててもらってる。

お姉ちゃんに話をしてくるといふ無理なお願ひなのに、千歌さんは許してくれた。

息を整え、目の前には生徒会室がある。

生徒会室に何とかたどり着き、私はドアのガラスからこっそり中を覗き込むと、パソ

コンとにらめっこをしているお姉ちゃんの姿があった。

ただ、お姉ちゃんは困惑の表情。無闇にお姉ちゃんに話しかけるのが、なんか気が引ける。

でも練習はすぐに始まっちゃおうし、言わなかつたら親に叱られちゃう。だからルビイは、勇気を出して生徒会室に顔を出す。

「お姉ちゃん……?」

「ルビイ? どうしたんですの?」

ルビイの声を聞いたお姉ちゃんは、ルビイが生徒会室にやってきたことに驚いた表情を見せる。

それでルビイは、お姉ちゃんに話を続ける。

「実は千歌さんの提案で、入学希望者を増やすためにA q o u r sのPVを作るんだって言うって、今日から少し帰りが遅れるかもしれないの……」

「今日から?」

「う、うん……」

千歌さんの話を持ち上げ、学校の入学希望者を増やすためにPVを作ると告げる。それと同時に、帰りが遅くなることも伝える。

「はあ………」

「……………っ!」

ルビイの話聞いたお姉ちゃんは、パソコンに向き直るとそれと同時に、一度ため息をつく。その行動をするお姉ちゃんに、ルビイは一瞬恐怖した。

『ダメです!』って言われちゃうかもしれない。

そう思っただルビイは覚悟を決めた時、お姉ちゃんはもう一度ルビイに視線を向けて話をする。

「分かりましたわ。お父様とお母様に伝えておきます。ですが、暗くなる前に帰ってくるのですよ?」

「……………っ! うん! 分かったっ!」

お姉ちゃんから発せられた言葉は、〃許可〃の言葉。

〃暗くなる前に帰ってくる〃という条件付きでの許可だけど、お姉ちゃんが許してくれたのが、ルビイにとつてとても嬉しかった。

「じゃあお姉ちゃん！行ってくるね！」

そしてルビイはお姉ちゃんにそう告げたあと、急いで部室に戻ろうと、ドアを開けて廊下に出る。

その瞬間だった。

「どう？スクールアイドルは？」

「……………っ！」

お姉ちゃんは、ルビイにそんな質問をしてくる。

素っ気ない、何気ない質問なのに、お姉ちゃんの声は何だかルビイに気を遣っているような声。

その質問に、ルビイはありのままに答えた。

「大変だけど、とても楽しい!」

「そう。良かったですわ……」

ルビイの言葉を聞いたお姉ちゃんは、少しだけ安心しきったようなそんな声を上げる。

でも、何かを隠しているような声にも聞こえた。

「……………」

「……………」

“真意を尋ねたい”、そう思った私は口を開く。

「お姉ちゃ……」

「早く行きなさい!」

「うっ、お姉ちゃん……」

だがそれを知っていたかのように、お姉ちゃんはルビイに部屋に戻るよう促して行く。

「練習、遅れてしまいますわよ?」

「……………分かった」

これ以上、お姉ちゃんに迷惑はかけられない。

そう考えたルビイは、お姉ちゃんにこれ以上の質問とかも何も言わず、お姉ちゃんに言われるがまま、生徒会室をあとにした。

「……………お姉ちゃん」

でも、お姉ちゃんが気になって仕方がなかったルビイは、ふとお姉ちゃんと呼んだ後ろを振り返る。

いつか……………お姉ちゃんを助けてあげたい。

そう思ったルビイは、また、部室へと駆け出す。
学校を救うため、ルビイは頑張ります！

ガンバ……ルビイ！

く
ルビイ s i d e o u t
く

#30 PVを作ろう！

千歌ちゃんの発想で、この内浦の街の魅力を伝える『PV』を作ることになった私たち Aqours。

それから次の日、私たちは長浜城跡に来ている。
理由はもちろん、PVを作成するためである。

「じゃあここで撮ろうよー！」

「そうだねー！」

天気は快晴で富士山も見えるし、長浜城跡から見える海もキラキラしてて綺麗だった。

撮るにはここが最適だと言った千歌ちゃんに対して、私はビデオカメラとサンバイ

ザーを取り出し、カメラマンになりきる。

私、こういうのやってみたかったんだ!

すると梨子ちゃんが千歌ちゃんに尋ねる。

「でも、まず最初にどうするの?」

「まず最初に、私たちがこのPVを作った理由を知らせるために、ここでみんなで話をするの!」

PVを作るために、まず最初に何をするのかと聞いた梨子ちゃんに対し、千歌ちゃんはそう答える。

それで千歌ちゃんは、そのあとに何故か善子ちゃんを名前を呼ぶ。

「それでね、善子ちゃん!」

「ヨハネ!」

「ちよつと来てくれる?」

「むう……何よ?」

千歌ちゃんと梨子ちゃん、そして善子ちゃんの3人は輪になって何かを話し合っている。

私から少し離れて、同じように様子を見ていた花丸ちゃんとルビィちゃんも、なんの話をしているのか気になっている様子だった。

2分後

「よしっ！じゃあよろしくね、2人とも！」

「わ、分かったわ……」

「まっ、普通にやれば大丈夫でしょ？」

話し合っていた輪は解かれると、千歌ちゃんは2人に期待を込めるような言葉をかけ、梨子ちゃんと善子ちゃんはそんなことを眩く。

一体何を相談していたんだろうと考えると、千歌ちゃんが私に近づいてきた。

「曜ちゃん！」

「千歌ちゃん。今からなにをするの？」

だからちようど私はそのことを尋ねたら、千歌ちゃんはフツと笑みをこぼし、私に話す。

「今から梨子ちゃんと善子ちゃんの3人で話すんだけど、曜ちゃんのそのビデオカメラで、その様子を撮っておいて欲しいんだ!」

「……あつ、なるほど!そういう事だね!」

私は千歌ちゃんの話聞いて、今から3人でなにをするのか、すぐ理解することが出来た。

それに気づいた私を見た千歌ちゃんは、嬉しそうに笑い、梨子ちゃんと善子ちゃんに今から始めることを告げる。

「それじゃあ位置について!」

「は~い!」

梨子ちゃんと善子ちゃんは位置に着く。

千歌ちゃんと梨子ちゃんが私に対して背中を向けて立ち、善子ちゃんはそのからちよつと離れたところに腕を組んで立つ。

そしたら千歌ちゃんは、私に合図を送る。

「じゃあ曜ちゃん、始めるね!」

「ヨーソロー!いつでもいいよ!」

背中を向けながら私にそう言ってきたから、私はビデオカメラの録画ボタンを押して、千歌ちゃんと梨子ちゃんが映るように撮影を始める。

「じゃあ行くよ〜!3、2、1、はい!」

千歌ちゃんは右手を3にして、カウントダウンによる合図によって、PVの作成がスタートした。

「内浦のいい所?」

「そう!東京と違って、外の人はこの街のこと知らないでしょ?だから、まずこの街のい

い所を伝えなきゃって!」

滞りなく、作成は続く。

ビデオを回している間、梨子ちゃんは緊張している様子もない。さつきまで千歌ちゃんとの会話の受け答えに、オドオドしている様子はあつたのに……。

「それでPVを?」

「うん! ヽ sもやってたみたいだし、これをネットで公開して、みんなに知ってもらおう!」

善子ちゃんのぶつきら棒な質問にも、千歌ちゃんは笑顔でそう答えていく。

ただど次の瞬間、千歌ちゃんは花丸ちゃんとルビイちゃんの元へ行つて、2人に話を振つたのだ。

「というわけで、一つよろしくつ!」

「えっ、ええ!?!」

梨子ちゃんと善子ちゃんの3人だけで打ち合わせをしていたから、突然に話を振られた2人はどうしようと慌てていた。

「いや、マ、マルには無理ず、いや無理……」

表情がすごく強ばっている花丸ちゃん。

ただ花丸ちゃんは慌てている様子を見せたけど、いつもの『ずら』は言うことはなく何とか耐える。

花丸ちゃんが否定的な言葉を発したら、それを聞いた千歌ちゃんは今度はルビィちゃんに話を振る。

「じゃあルビィちゃん！」

「ピ、ピギイ……！」

「んっ……っ？」

私はルビィちゃんが映るようビデオカメラを向けた瞬間、ルビィちゃんはビデオカメラに映らないように画面から逃れ、そして、私が直に目で見ると一瞬のうちに、姿まで消

してしまった。

「あれ？ルビイちゃん？」

その近くにいた千歌ちゃんたちも、ルビイちゃんの行方を知らず、どこ行っただろうと心配そうに首を振って探し回る。

するとその時、善子ちゃんが言い放つ。

「見える！あそこ！よっ！」

左手でいつもの堕天使の手をしては、右手で近くにそびえ立つ大きな木を指差す。

ルビイちゃんはそこにいると善子ちゃんはそう発言をするものの、ルビイちゃんって木を登れるの？

あまりそういう事は聞いたことない。ルビイちゃんだったら木を登れなさそうな気がするし、登れたとしても降りられなさそう。

それはまるで、猫みたいに……。

「違いますう〜！べ〜っ！」

私がそんなことを考えていたら、善子ちゃんの指摘にルビイちゃんが声を上げる。

ルビイちゃんは、案内板の陰に隠れていた。そしてそこから顔を出し、口から舌を出して『べ〜っ！』って善子ちゃんを煽る。

「ルビイちゃん、見つけ！」

「ピ、ピギイ〜！」

私はビデオカメラをルビイちゃんがいる方向にすぐさま向けたけど、ルビイちゃんは映りたくないのか、また逃げ出してしまふ。

ルビイちゃんはどうやら、ビデオカメラに映るのか嫌いな様子が伺えて、カメラの前で話すのも何だか苦手な様子が伺える。

PVの作成は、少し困難を極めそう。

「おおっ！なんだかレベルアップしてる！」

「そんなこと言ってる場合?！」

本当に、困難を極めたって感じだった。

内浦から見える富士山は絶景。

広大に広がる駿河湾はキラキラして綺麗。

寿太郎のみかんは美味しい。

ただ、内浦の街には……何もない。

内浦の街は、そこから見える景色はとも良いとは思ってもらえるかもしれない。だけど、内浦の街自体には、変わってどこにも良いところがない。

沼津へと私たちは足を運んで、商店街があつて色んなお店がたくさん並んでいると、沼津の街のいいところもたくさん動画に収めた。

だけど内浦から沼津までは、バスで1時間弱はかかるし、バスの運賃だつて500円もかかる。だから交通の便に関しても、内浦という街は、決して良いところとは思つて貰えなさそう。

これを鞠莉さんやダイヤさんに見せたら、2人から一体なんて言われるんだろう。

「はいーお待ちどうぞさま〜♪」

「ありがとうございます」

それで私たちは今、撮影の帰りにみんなで喫茶店の『松月』に立ち寄っている。

撮影の疲れもあるからと、ここでケーキでも食べて一休みしようっていう、千歌ちゃんの意見でこうなったわけである。

みんなで頼んだケーキを、店員さんが運んで来てくれるたびに私たちはお礼を言つて、お皿に乗せられたケーキを受け取る。

「こんなに大人数なんて珍しいわね」

「すみません。こんなに大人数で……」

「いいのよ。ごゆっくり！」

あまり大人数でお店に来られることがあまりないからと、店員さんも珍しいってすごく驚いていた。

それでみんなのところへケーキが行き渡ったところで、善子ちゃんがなんでここに来たのかの理由を、千歌ちゃんに尋ねる。

「どうして喫茶店なのよ？」

目の前にある母のシヨートケーキをじっと見つめ、その質問をする善子ちゃん。

その質問に付け加えるように、ルビイちゃんは少し怯え、千歌ちゃんの方に振り向きながら尋ねる。

「もしかして、この前騒ぎすぎちゃって、家族の人に怒られたりしたんですか？」

ルビイちゃんが話したのは、梨子ちゃんがシイタケから逃げて、千歌ちゃんの家から自分の家のベランダにジャンプして逃げた、あの時の話。

その後で、家族から何か怒られたのではないかって、ルビイちゃんは気になっている様子。

ただその質問に対して、千歌ちゃんはフオークでケーキを一刺しにすると、そのケーキを食べようとする直前に、みんなに向かって答える。

「ううん、違うよ。梨子ちゃんったら酷いんだよ。うちのペットのシイタケがいるから、絶対に私の家には行かないって……」

「ち、違うわよ！行かないとは言ってないわ！ちゃんと繋いでおいてって言うてるだけ！」

ペットのシイタケがいるから、絶対に千歌ちゃんの家にはいきたくない。

犬が苦手な梨子ちゃんなら言いそうな理由だけど、千歌ちゃんが言ったことは間違いだって、梨子ちゃんは慌ててその間違いを訂正する。

そんな梨子ちゃんに、私はペットの話をする。

「でも梨子ちゃん、ここらへんじゃ、家の中だと放し飼いの人のほうが多いかも……」
「そ、そんなあ……」

大体の家は、ペットは家の中で飼っていることが多い。シイタケもそれは例外じゃない。
い。

いつもは旅館の正面入り口にある自分の家にいるけれど、結構な回数で家の上がつている時もあるから、大体の家はそんな感じだと説明をする。

その話を聞いていた梨子ちゃんは、ガツクリと肩を落とし、
“ずくん”と落ち込んでうなだれる。

そして梨子ちゃんの背後には、小さな犬がいた。

ワンツ！

「えっ……!?!」

鳴き声を聞いた梨子ちゃんは、恐る恐る後ろを振り向く。まるで壊れかけのロボットのようにガクガクと振り向いた先には……

キャンキャン！

まだ幼い、小さな黒い柴犬がいた。

名前は、ワタちゃん。

全身ほぼ真つ黒な毛に覆われ、首輪は緑色に風呂敷の模様がついた、とても可愛いオスの柴犬。

この店の、いわゆるアイドルなんだ。

「うわぁー！可愛い♪」

その犬を見たルビィちゃんは、笑顔で声を上げる。

ただそれに対して梨子ちゃんは、ワタちゃんを見ては恐怖を抱き、悲鳴の声を上げる。

「ひいっ!」

こんなに小さくて可愛いのに、梨子ちゃんは大ききにかかわらず、犬はとても苦手なようだった。

「こんなに小さいのに!」

「大きさは関係ないの! その牙! そんなので噛まれたら、ひいっ!」

「噛まないよ。ねえ、ワタちゃん!」

ワタちゃんは噛まない。

そう言い切る千歌ちゃんは、ワタちゃんを持ち上げては名前を呼び、ワタちゃんの顔とでウリウリして楽しそうにしている。

でもそれを見ていた梨子ちゃんは、未だに怖がりながらも千歌ちゃんに注意を促す。

「あ、危ないわよ！そんなに顔近づけたら……！」

梨子ちゃんはもしかしたら、犬に噛まれたこと原因で犬が嫌いになったのかもしれない。梨子ちゃんの言い方に、私はそう感じた。

すると千歌ちゃんは、ある行動をする。

「そうだ！ワタちゃんて慣れるといいよ！」

「ひっ……！」

そう言つて千歌ちゃんは、両手に掴んだワタちゃんを梨子ちゃんの目の前に持つていく。

千歌ちゃんがそうしたのは、犬に慣れるため。

ただ目の前で嫌いな犬を見せられている梨子ちゃんの体は、ビクビクと小刻みに揺れ、怯えていた。

その様子を見兼ねたのか、なんとワタちゃんが梨子ちゃんを落ち着かせようと、とある行動に出たのだ。犬にしか出来ない、あの行動……。

ペロッ

そう……舐める”ことである。

「ひいつー!いやあああああ!」

でもそれは、梨子ちゃんにとっては逆効果。

鼻の先端をワタちゃんに舐められた梨子ちゃんは、大声の悲鳴を上げ、お店のトイレに駆け込む。

「梨子ちゃん!」

「私のことはいいから!早く続けて!」

「はあ、しょうがないなあ……」

もうここまで来ると、梨子ちゃんが犬嫌いを克服するには当分時間がかかるかもしれない。最悪、克服できないかもしれない。

梨子ちゃんには、早く犬嫌いを克服して欲しい。

「善子ちゃん、出来た？」

「ええ、簡単にまとめたわ」

それで梨子ちゃんがトイレに立て籠もる中で、千歌ちゃんは善子ちゃんに、今日に撮影したPVの編集をお願いさせていた。

簡単にまとめたと、生放送とかでパソコンの扱いが慣れている善子ちゃんは言うけれど、善子ちゃんから出た言葉は、あまり良くない印象だった。

「だけど、魅力的とは言えないわね…」

「そっか。どうしよう……」

善子ちゃんの言葉に、千歌ちゃんは大きくため息をつく。

それにはルビイちゃんも同じように頭を悩ませては、みんなに向かってボソリと呟く。

「やっぱり、ここだけじゃ無理なんじゃ……」

内浦の街や、沼津の街だけを撮影して、P Vを作るなんて無理なんじゃないかと、ルビイちゃんは下に俯きながらそう呟く。

ただ、その瞬間だった。

「何が無理なんだ?」

「「「「「……!?!?」」」」」

ルビイちゃんが言い放った言葉に反応する声、店の入り口から聞こえてくる。

私たちは入り口の方向に一齐に顔を向けると、ここには決して現れないであろう人物がそこにいた。

「よっ。P Vの作成は頑張ってる?」

「遼くん!?!」

遼くんが現れたことには、千歌ちゃんは驚きの声を上げる。梨子ちゃん以外のその場にいたみんなも、驚きの表情を見せていた。

もちろん私も、遼くんが来るとは思わなかった。

「なんでそんなに驚くんだよ?」

「いや、だって、遼くんがここに来るなんて思ってたし、それより、どうしてここにみんながいるって分かったの!?!」

「……ただの勘だ」

ズツテーーン!

遼くんの全然まともじゃない理由に、みんなは盛大にその場でずっこける。でもこう見えて、遼くんはちゃんと考えて行動する人。

千歌ちゃんもそれは知っているから、千歌ちゃんは怒ってもう一度だけ彼に聞いた。

「嘘つき! そう言つて本当はちゃんと分かってるんでしょ! ちゃんと答えなさい!」

「お前は俺の母かよ。まあいい。曜からはPVのことは聞いていたし、撮影の疲れを癒すならここにしかないだろうと思っただけさ!」

遼くんの考えは、ものの見事に当たっていた。

『撮影の疲れを癒すために』喫茶店に立ち寄ったことだって、ものの見事に正解している。

千歌ちゃんは、その答えに呆気にとられた。

「なんだ？全部当たってますって顔だな」

「うん。全部当たってます……／＼／＼」

そして自分が怒って、遼くんに尋ねたのが間違っていたかと思ったのか、千歌ちゃんは恥ずかしさのあまりに顔を真っ赤に染め上げた。

「うう、なんか恥ずかしくなっちゃったよ……／＼／＼」

千歌ちゃんは遼くんに顔を見られたくないと、その場でしゃがんで縮こまる。その様子がすごく微笑ましく思ったのは、みんなには内緒ね？

それでそれを見ていた遼くんはため息をついた後、彼は今度はルビィちゃんに話を尋ねた。

「それで、ルビイちゃん」

「は、はい!？」

「ルビイちゃんが言ってた“無理”って話なんだけど、一体何が“無理”なんだ？」

「あつ、あつた、それは……」

遼くんがやって来た時、その時は、ちょうどルビイちゃんがあることを話していた時だった。

『やっぱり、ここだけじゃ“無理”なんじゃ……』

この言葉をルビイちゃんが発した時、同時に遼くんはやって来た。だから遼くんは、その『無理』という言葉が気になっている様子が分かる。

遼くんからそう聞かれたルビイちゃんは、視線を遼くんから逸らし、目を泳がせながらどう答えればいいか迷っている。

だけどある方向にルビイちゃんの目が止まった時、ルビイちゃんは視線を遼くんに戻しては、左手である方向へ伸ばして答える。

「そ、それはですね。善子ちゃんが簡単に編集した映像を見れば分かると思います」

「ちよつと！なんで私に振るのよ!？」

ルビイちゃんにご指名を受けた善子ちゃんは、自分に話を振られたことに驚きを見せる。

でも善子が使っているパソコンには、今の私たちの現状を知るための唯一の答えを持っている。それを察した遼くんは、善子ちゃんに尋ねる。

「善k……」

「だからヨハネよ!」

「ヨハネは確か、パソコン得意だよな?」

「ええ。このヨハネなら楽勝よ」

遼くんの問いに、余裕綽々と答える善子ちゃん。

その答えを聞いた遼くんは、パソコンを見せてくれと右手を差し伸ばす。それで善子ちゃんからパソコンを受け取った後、善子ちゃんが簡単に編集してくれたPVの動画を、遼くんは見る。

「……………」

「ゴ、ゴクリ……」

黙つては何も言わず、じつとパソコンとにらめっこして遼くんは見ているから、その場の雰囲気は張り詰め、千歌は固唾を飲んで遼くんの反応を待つ。

そして一通り動画を見終えたのか、パソコンをそつと閉じ、何故か両目を瞑る遼くん。
「ど、どうだった？」

千歌ちゃんは、目を瞑る遼くんに感想を聞く。

遼くんは千歌ちゃんの質問に対して、しばらくの沈黙のあとに動画を感想を話した。

「あまり、魅力的とは言えないな」

「そ、そつか……」

それはあまりにも直球な言葉で、千歌ちゃんの心にグサツと突き刺さる言葉だった。
下に俯き、酷く落ち込んで項垂れる千歌ちゃん。

すると遼くんは『でも』と続けて、私たちに一つのアドバイスをしてくれた。

「でも、良いところはある」

「えっ!?! 本当!?!」

「ああ。ここまで撮影をしているのなら、街の紹介だけじゃなくて、いろんな観光名所とかも撮影した方がいいかもな。その方が、『ここに行きたい!』って思う人もいるだろうしな……」

一通りに動画を見て、遼くんは思ったこと、考えたことをそのままアドバイスとして発言する。

遼くんの動画に対してのアドバイスに、千歌ちゃんは目を輝かせ、折角のアドバイスだと遼くんの話を一生懸命に耳を傾けて聞いている。

このアドバイスは、千歌ちゃんにとっても私たちにとっても、とても参考になるアドバイスだった。

私たちみんな誰もがそう考えていた時、アドバイスを話し終え、一呼吸をする遼くん。その時の表情は、少しスッキリした表情だった。

「どうだ？参考になったか？」

「うんっ！すごく参考になった！ありがとう！」

「どういたしまして」

千歌ちゃんも遼くんからのアドバイスが参考になって、ものすごい笑顔を見せていた。

するとふと外を見た遼くんが、ある事を告げる。

「あつ、終バス来た」

「えっ!?!うそお!?!」

喫茶店『松月』に、終バスがやって来たのだ。

沼津に住む私と善子ちゃんは、急いで帰る支度をしていると、遼くんが私にこう言うてきた。

「曜、自転車乗ってくか？」

「えっ? いいの?」

遼くんはいつもの如く私を後ろに乗せ、2人乗りで家に帰ろうと言い出す。

本当なら、私は終バスで帰るつもりだった。

だけど、遼くんとはお隣同士だし、よく2人乗りで自転車に乗っていたから、私は迷った挙句、遼くんの言葉に甘えることにした。

「じゃあ、お言葉に甘えるよ」

「うん、よしきた」

遼くんは私の言葉にうんと頷き、両手に持っていたパソコンを善子ちゃん本人に手渡して返す。

それから遼くんは、私に言った。

「じゃあ、日が暮れる前に帰ろうぜ！」

「……っ！うん！」

日が暮れる前に家に帰る。

その言葉を笑顔で言った時、私の心のどこかで、『トクン』という胸を打つような衝撃に駆られた。

それがどういう事なのか？

私は未だに分からなかった。

「もう〜！自転車なんて卑怯〜！」

「じゃあな善子！また明日な！」

「だからヨハネだってば〜！」

終バスに乗る善子ちゃんは、いつまでも遠くから弄られながら、終バスに乗って帰っていく。

「ああ！私も帰らなきゃ！」

「ふひいひちゃん（ルビイちゃん）!?!」

「花丸ちゃん、お口に餡子付いてるよ！」

そしてルビイちゃんも、ダイヤさんから言われてた約束を守るため、どら焼きを食べ

ている花丸ちゃんを連れて、急ぐように帰っていった。

「よしっ、俺らも帰るか!」

「ヨースロー!」

それでルビィちゃんと花丸ちゃんが帰っていったのを見送った後、遼くんは帰ろうつて言ってくる。

自転車に跨って私を待っている遼くんを待たせて、私は千歌ちゃんと、トイレに未だに隠れている梨子ちゃんに別れの挨拶をした。

「じゃあ千歌ちゃん、梨子ちゃん、また明日!」

「うん! 曜ちゃんまた明日!」

手を振って見送ってくれる千歌ちゃんを背に、私は遼くんの自転車に跨って乗る。

「準備はオツケーだな?」

「うん! 準備万端だよ!」

く千歌 side く

みんなが家に帰っていった後、喫茶店に残っていたのは私と梨子ちゃんの2人だけ。海の水平線に沈む夕陽を、私はじっと眺めていた。

「意外と難しいんだな。いい所を伝えるのって…」

結局のところ、PVを作成したのはいいけど、遼くんにあんなことを言われちゃうと、全然ことが進んでいないことが身に染みて分かった。

それに、とても難しいと感じた。

PVを作って人に見せるなんて簡単で、そのPVにどれだけ街の魅力を伝えられるかは分かっていったけれど、私は、本当にPVを作るのが難しいと感じた。

そんな私の気持ちを聞いていた梨子ちゃんは、やっとトイレから出てきて話し出す。

「住めば都よ。住んでみないと、分からない良さもたくさんあると思うし……」
「うん、そうだね……」

住んでみないと分からないこともある。

そんな優しい口調でポジティブに話してくれる梨子ちゃんに、対して私は、ネガティブな発言をする。

「でも学校がなくなっちゃったら、こういう楽しい毎日も、なくなっちゃうんだよね……」

「ええ、そうね……」

本当はなくなって欲しくない。

曜ちゃんに梨子ちゃん、ルビイちゃんに花丸ちゃんに善子ちゃん。みんなと楽しい毎日を過ごしていた日々がなくなってしまうのが、私は凄く嫌だった。

スクールアイドルを始めて、2人から3人、3人から6人とメンバーが増えていって、そこから生まれる楽しいことを私はたくさんやりたい。

だからこそ、私たちAqoursが、スクールアイドルを頑張らないといけない気がした。

うん、そうしないといけない気がした。

「スクールアイドル、頑張らなきゃ!」

「ふふつ、今更?」

そう意気込む私を、不意に笑う梨子ちゃん。

今更って、私そんなに頑張ってないかなあ? 私なりに頑張っていると思うけどなあ……。

まあ、いつか!

今やっと、私も気づいたことがあるし……。

「だよね。でも、今気がついた。この学校は、なくなっちゃだめだつて……!」

今までスクールアイドルをガムシヤラにやってきたけど、こうしてPVを作つて、学校や街の魅力を伝えなきゃって思った時、私は知ることができた。

自分の中に秘めていた、学校に対する思い。
今まで無自覚だったこの思い。

そんな思いを、背後にいる梨子ちゃんに振り返り、私はその思いを彼女に向かってぶつけた。

「私、この学校好きなんだ……！」

「……………うん！」

この気持ちは、間違いはないと思う。

学校がなくなつて欲しくないという思い。

梨子ちゃんも私の言葉を耳にすると、梨子ちゃんは笑顔になつてそう答える。

梨子ちゃんも同じ思い。

だから絶対、学校を廃校にしたくないと思つた。

大切な仲間と、楽しい時間を守るために……

〈千歌 side out〉

3 1 失敗と思惑

放課後

私たちがいるのは、鞠莉さんがいる理事長室。

「……………」

あれから私たちは、遼くんのアドバイスを生かし、たくさんの観光名所と言える場所を撮影した。

沼津港大型展望水門びゅうおに、伊豆・三津シーパラダイス、そして沼津港深海水族館と、私たちの街にあるたくさんの観光名所を撮影した。

これの他にも、私たちがいつも練習している淡島神社とか、果南ちゃんが経営しているダイビングショップとかも撮影した。

淡島神社から見える景色はすごく絶景だし、ダイビングショップに行けば、海にダイビング出来てお魚さんとも触れ合える。

やれることは、全部やったつもり。

私たちはそのPVを何とか作り上げて完成させ、鞠莉さんにそれを見せていた。

「……………以上！頑張ルビィー！こと、黒澤ルビィがお伝えしました！」

「……………」

ルビィちゃんの元気な声の後、映像は消える。

理事長の鞠莉さんは机に両肘を乗せ、組んだ両手の上に顎を置いて、柔らかい表情でパソコンの画面を見つめている。

鞠莉さんからどんな感想が飛び出てくるのか？

私たちは、固唾を飲んで見守っていた。

「どう、でしようか？」

「……………」

千歌ちゃんの質問に、鞠莉さんは無言。

開けていた鞠莉さんの目は、次第に閉じる。

何も話してくれないことに不安に駆られ、理事長室全体には緊張感が張り詰めていた。

が、次の瞬間だった。

「……………はっ!」

「えっ? どうしたんですか!」

鞠莉さんは何故か、驚いたような声をあげる。

ルビィちゃんの声の後に映像が途切れて、それから少しの間があつてのそんな声。

どうしてそんな驚いたような声を、鞠莉さんは上げたのだろうと考えていたとき、鞠莉さん自身が、私たちに対してこう言ってきた。

「ごめんごめん。つい寝ちゃってた!」

ズツテーション!

鞠莉さんは、寝ていたと話す。

右手を拳に頭に当て、口から舌を出しては『テヘペロ♪』と私たちに向かって言った。

その時に私たちの緊張が解けてしまったのか、はたまた鞠莉さんが抜けていたせいか、善子ちゃんを除いた私たちは、力が抜けて座り込んでしまう。

けど同時に、怒りがフツフツと込み上げる。

動画を見せては感想も言わず、ましてや生徒の前で寝てしまうという行動に、千歌ちゃんが代表して、鞠莉さんに言い放った。

「もう！私たちこれでも本気で作ったんですから、ちゃんと観てくださいい！」

「……………本気……………ですか？」

本気で作った私たちの映像を、ちゃんと見て欲しいと千歌ちゃんは鞠莉さんに話す。

だけど鞠莉さんは、千歌ちゃんが言った『本気』という言葉に反応を見せると、開いていたパソコンを閉じ、嘲笑うように言葉を返してきた。

「本気で作って、この体たらくですか？」

「て、体たらく？」

千歌ちゃんは鞠莉さんの言葉に、首を傾げる。ただ私は、その言葉に憤りを覚えた。もうその時、私は我慢出来なかった。

「それは、流石に酷いんじゃないか……」

そんな梨子ちゃんの話のあと、私は立ち上がって、梨子ちゃんが言ったあとに続くように、鞠莉さんに話をした。

怒ってはいんだけど、至って冷静だった。

「そうです！千歌ちゃんをはじめ、みんな一生懸命に作ったんです！それを、どれだけ大変だったかを知らない理事長には言われたくないです！」

「曜ちゃん……」

人の苦労も知らず、動画に対して感想も言わないで罵倒しかしない理事長に言われた

くないと、私は鞠莉さんにそう訴えた。

隣にいる千歌ちゃんからは心配そうな声が上がったけど、みんなで作ったPVを、そんな風に言われたくなかった。

だけど、鞠莉さんは反論した。

バンツ！

「努力の量と結果は、比例しません！」

「……………っ！」

机を叩き、鞠莉さんは私に言い放つ。

努力をしてきたことと、それに伴って出た結果は、決して良いとは限らない。

鞠莉さんは、私の話を一蹴した。

「大切なのは、この街や、学校の魅力を、ちゃんと貴方たちが理解しているかデース！」

まるで、自分は街の魅力や学校のことを知っているような口ぶり。だから私は、それ

に対して本当なのって思ってしまう。

でも、鞠莉さんは私たちより先輩。

私たちより1年長く生きているわけだから、もしかしたらと思うと、私は何も言えなかった。

「それって、つまり……」

「私たちが理解していない、ということですか？」

「……そうね」

花丸ちゃんから発せられた疑問の声にも、鞠莉さんは少しの間を開けて答える。真っ直ぐに見据える目を私は見ると、鞠莉さんが話した事は、本当のように聞こえた。

すると、今まで口を挟まないでいた善子ちゃんが、鞠莉さんに尋ねるように口を開く。

「じゃあ理事長は、私たちよりもこの街や、学校についての魅力を分かっているのね？」

「……………」

善子ちゃんが、鞠莉さんに対して敬語を使ってないのはあまり気にしなかった。それ

よりも、私は鞠莉さんの答えが気になっている。

千歌ちゃんたちも、同じ思いを持っていた。

そして鞠莉さんは、私たちに言い放った。

「少なくとも、貴方たちよりは……」

「……………」

温厚だった理事長の目は鋭い眼差しに移り変わり、鞠莉さん是我们たちに対してそう話
す。

「……………聞きたいですか？」

それから鞠莉さんは、私たちに対して不敵な笑みを浮かべてくる。それがとても嫌ら
しく、私からして見れば、からかっているようにしか見えなくつて、とても腹が立った。

それで誰も、鞠莉さんに尋ねようとしなない。

だから私はその様子を見て、右足を半歩前に踏み出しては、鞠莉さんに事を尋ねよう
とした。

「理事長、話を聞かせて……」

だけどその瞬間、私は彼女に止められる。

「ダメ、曜ちゃん！」

「っ！千歌ちゃん……！」

その「彼女」は、千歌ちゃんだ。

「やめて……曜ちゃん……」

「……………」

私の肩に左手を置き、首を振る千歌ちゃん。

どうして私を止めたのか、その理由を千歌ちゃんに聞きたかった。だけど、千歌ちゃん困った表情を見せられては、千歌ちゃんの言うことに従った方がいいと思つた。

そうしなかつたら、きつと千歌ちゃんを困らせてしまう。悲しませてしまうと、そう

思った。

だから私は、鞠莉さんに言葉を訂正した。

「すみません理事長。今のは無かったことに…」

「ええ、分かっているわ」

鞠莉さんもそのことを分かってくれて、私の言葉に許してくれる言葉を投げかけてくれた。

その後、千歌ちゃんが床から立ち上がると鞠莉さんに話をする。その中身は、一つのお礼だった。

「理事長、今日はありがとうございました」

「別に構わないわ。またPVが出来上がったら、私にまた見せにきて頂戴ね！待ってるから！」

鞠莉さんの陽気な声とは裏腹に、千歌ちゃんは少し元気がないような、そんな声を発していた。

「はい、分かりました」

そして鞠莉さんとの話のやり取りを終えた後、千歌ちゃんは理事長に深くお辞儀をしては、そそくさと理事長室を出て行く。

私たちも千歌ちゃんを追うように、鞠莉さんに一人ずつお辞儀して理事長室を出ては、そそくさと出て行った千歌ちゃんを追いかけた。

最後に、私が鞠莉さんに言葉をかけようとした時、鞠莉さんが私に話しかけてきた。

「あなた、やっぱり似ているわ」

「えっ……?」

その言葉に、私は言葉を詰まらせる。

えっ? 似ている? 一体誰のことなんだろう?

「それは、どういう事ですか?」

「別に、何でもないの。ただ、あなたが私に話している姿を見ていたら、昔の彼に似てる

なつて……」

鞠莉さんが話す口々に、私は疑問を呈する。

彼女の言う昔の「彼」とは、一体誰なんだろうって考えてしまう。鞠莉さんの口調からして、きっと男の人なんだろうとは理解できるけど……。

「会いたいわ、彼に……」

「……………会えると、いいですね」

その人とはもう会えていない事を口にした鞠莉さんに、私は、そう話すことしか出来なかった。

「それでは、失礼します!」

「ええ。また会いましょう!」

そして私は、鞠莉さんに対してお辞儀をしてはそう告げ、理事長室を出て行く。

そして部室に戻って行った千歌ちゃんたちを追いかけるように、私も部室へと戻って

行った。

~~~~~  
※※※  
~~~~~

「どうして聞かなかったの？」

「……………」

私が一旦部室に戻ったら、みんなは既に部室にいなかったもので、私は学校の昇降口に向かった。

そしたらちようどその頃に、梨子ちゃんが千歌ちゃんにそんなことを尋ねていた。

どうして、話を聞かなかったのか？

梨子ちゃんの他、みんなは同じことを考えていた。

もちろん私も同じ意見なわけで、その質問に対して千歌ちゃんは、口を開いて話す。

「なんか、訊いたらダメなような気がした」

「何よそれ。なに意地張ってるのよ？」

千歌ちゃんの話に、善子ちゃんは呆れ気味に話す。

「意地じゃないよ……」

「千歌、ちゃん……」

だけど、千歌ちゃんの口から出たのはそんな言葉。善子ちゃんの言葉を、訂正をするように話す。

その言葉は、私には重みがあった。

「それって大切な事だもん。街や学校の魅力を自分で気づかなきゃ、PV作る資格ないよ……」

下に俯き、千歌ちゃんはそう話す。

その言葉を聞いた私は、鞠莉さんから話を聞こうとしていたことが間違っていたのかもしれないと、私は不意にそう感じてしまう。

そしてそう感じた時、私は口を開いていた。

「千歌ちゃん、ごめん……」

「……っ、曜ちゃん」

「私が、鞠莉さんから聞こうとしていたのは間違いだったんだよね？ だったら、ごめん……」

唇を噛み、私は千歌ちゃんに謝る。

千歌ちゃんが私を止めたのはそういう理由があったからで、千歌ちゃんの考えとは裏

腹に、私は理事長への怒りだけで口を開いていた。

そんな身勝手な自分を、恨みたい。

無責任だった行動を、すごく反省していた。

けどそんな時、千歌ちゃんは私の両手を優しく握って、優しい言葉を投げかけてくれた。

「大丈夫だよ、曜ちゃん。曜ちゃんは鞠莉さんに、みんなのために怒ってくれたんでしょ？」

「……………うん」

「だから怒ってないよ。寧ろ、嬉しかった」

「……………っ！」

優しい笑顔で、私にそう言ってくれた。

「だから、いつもの曜ちゃんでもいいよ！」

「……………っ！うんっ！」

そんな千歌ちゃんのおかげか、私は何だかスッキリした気分になれたような気がした。

疑問形じゃなくて、わりと断定に近い。

うん。そんな気分にはなれた。

「ヨースロー！」

「うん！ やっぱそれが曜ちゃんらしい！」

私がそう言って元気よく言い放つと、千歌ちゃんもさっきまでの落ち込んだ顔はなく、もうすっかり笑顔が溢れていた。

ルビィちゃんたち3人も、『ふふっ』と笑みをこぼす。さっきまでのどんよりした空気も綺麗さっぱりになくなって、和んだ雰囲気になっていた。

それで私が敬礼をして、梨子ちゃんに対してニヤリと不敵な笑みを浮かべながら話す。

「じゃあ今から千歌ちゃん家で、作戦会議だ！」

「ええ!? また千歌ちゃんの家!?」

「喫茶店だつてタダじゃないんだし、梨子ちゃんも頑張ルビィ！してね！」
「もう〜！」

学校からは、千歌ちゃんの家が一番近い。

だから千歌ちゃんの家でPVをどうするか作戦を練らないといけない。その事を梨子ちゃんに告げると、彼女は途端に顔をしかめる。

そんな顔になる理由は、察して？

「よぉ〜し〜！」

そして千歌ちゃんは右手を拳に上へ突き上げる。

いつものように、『頑張るぞ〜！』つて締りのある言葉をみんなに投げかけるのだろうと、私は勝手にそう考えていた。

「あつ、忘れ物した……」

だけど、そんな一言に私たちは盛大にコケた。

あまりにも締りの悪さに少し苦笑いをしてしまう私だけでも、でもそれが、千歌ちゃんらしい。

「ちよつと部室見てくる〜！」

そう言つて千歌ちゃんは、部室へと駆けていく。

「はあ、本当…締りがないわね」

「あはは、ごめんね善子ちゃん……」

「べ……別にいいけど……！」

締りが悪いと善子ちゃんから発せられた指摘を、私は苦笑いを浮かべながら返す。

その言葉に善子ちゃんは言葉を詰まらせながらも、千歌ちゃんを信頼しているのか、すぐに私の言葉に対して許してくれた。

それから千歌ちゃんを見送った私たちは、昇降口でしばらく待つことにしていた。けど、千歌ちゃんを迎えに行つた方がいいかもしれないと思つた私は、みんなに口を開く。

「みんな、千歌ちゃんを迎えに行かない？」

「えっ？どうしたのいきなり？」

「なんか、そんな気分なんだ！」

どうして私は、そんな事を思いついたのかは自分もよく分かっていない。

でも何となく分かる。

自分が、千歌ちゃんに迷惑をかけてしまったから、彼女へのちよつとした“償い”の
するような感じで、無意識にそれを私ははしたくなつたんだと思う。

そう考えていたときには、私の身体は、勝手に千歌ちゃんが向かった部室へと走つて
いた。

というより、体育館の方が正しいかも……。

「早く千歌ちゃんのところに行こう！」

「えっ、ちよつと曜ちゃん!？」

「な…何ずら〜!？」

「もうー！一体なんなのよ〜?!」

みんなは驚いた声を上げながら、私についてくる。

それで部室がある体育館へ足を運んでいると、だんだん体育館に近づくとつれて、誰かが何かを話している声が聞こえた。

「一緒にやりませんか？ スクールアイドル！」

「……っ?!? 千歌ちゃん?!?」

千歌ちゃんが、誰かを勧誘しているそんな声。

誰よりも早く着いた私は体育館を覗くと、体育館のステージには千歌ちゃんと、ダイヤさんがいた。

どうやら千歌ちゃんは、スクールアイドルが嫌いなダイヤさんをA q o u r s に勧誘していたらしい。

どうしてスクールアイドル。嫌っているダイヤさんを千歌ちゃんは勧誘していたのか？

私には、到底理解できなかつた。

く千歌 sideく

私が忘れ物を取りに体育館に着いた時、とある人物がステージで踊っていた。

「……………」

「うわあ〜〜!」

それが目に入った私はふと、ステージへと足を運ぶ。部室に用があつてきたのに、その人が踊る凄さに目が離せなくて声まで出ちやう。

これが、 “舞踊” ってやつなのかな？

千歌にはよく分からないんだけど、ステージで舞うように踊っているのがとても凄かつた。

踊っている張本人の髪は長い黒髪に、銀色の髪留めが2つ。そして宝石のエメラルドのように輝く翠の目が特徴で、ツリ目。

話しての通り、その人物はダイヤさんである。

パチパチパチパチパチパチッ！

「……っ!?」

ダイヤさんが踊る姿に感動して、私はいつの間にかダイヤさんに拍手をしていた。

そのおかげで、私はダイヤさんに気づかれる。

「ち…千歌さん!?! / / /」

「ダイヤさん凄いです!感動しました!」

「な…なんですの突然! / / /」

自分がしていたことを見られて恥ずかしかったのか、ダイヤさんは顔を赤くする。

そのときに私は、ダイヤさんの両手に大量の書類を持っていることに気づく。ただそ

れを見た私は、ところ構わずにダイヤさんに想いを伝えた。

「ダイヤさんがスクールアイドルが嫌いなのは分かってます。でも、私たちも学校続いて欲しいって、なくなって欲しくないって思ってるんです！」

ダイヤさんだって、自分が通っている学校がなくなって欲しくないとは思っていると思う。

それに本当は、ダイヤさんは本当は……！

「一緒にやりませんか？スクールアイドル！」

そう考えたから私は、ダイヤさんを勧誘する。

「お姉ちゃん……」

それと同時に、ルビイちゃんの心配そうな声が後ろから聞こえてくる。ルビイちゃんの1人の声しか聞こえなかったけれど、私の後ろにみんながいると感じることができ

た。

それで曜ちゃんたちが、私の元へとやってくると、それと同時にダイヤさんはステージから飛び降り、私の勧誘を優しい言葉で拒否してきた。

「気持ち嬉しいです。でも残念ですが、私はそんなことをしている暇はありませんの……」

「……そう、ですか……」

「お互い、頑張りましょう……!」

そう言つてダイヤさんは、体育館を立ち去る。

そのときに私は、床に落ちていた一枚の書類を手取る。見たところ、ダイヤさんが落としたものだと思は考える。

「ねえ、ルビイちゃん……」

「えっ?」

そして私は、ルビイちゃんに尋ねる。

ダイヤさんの、本当の気持ちを……。

「ダイヤさんって、本当は……スクールアイドルが大好きだったんでしょ？」
「……………」

ダイヤさんは私たちに一度も振り返ることなく体育館を後にしたけれど、私でもなんとなく分かった。ダイヤさんが、何かを抱え込んでいるって……。

それを唯一知っているのは、ダイヤさんの大く切な妹のルビィちゃんただ一人しかない。

私は彼女に尋ねたら、ルビィちゃんは暫くの無言のあと、私たちに話してくれた。

「はい……。お姉ちゃんは私よりもずっと、スクールアイドルが大好きでした……」

ダイヤさんの後ろ姿を見つめながら、ルビィちゃんは私たちにダイヤさんの話をしてくれた。

スクールアイドルが、ルビィちゃんよりも好き。

私は拾った一枚の紙を見る。するとそれは、学校の廃校を阻止するための「署名」の

書類だった。

これをたくさん集めて、廃校を阻止しようとかイヤさんは考えているみたい。でもそれで廃校を阻止できるのか、私も不思議だった。

こんなことをするんだったら、ダイヤさんも一緒に大好きなスクールアイドルをして、大好きな学校の廃校と一緒に阻止しよう！

そんな風に声をかけようと考えた私は、体育館から立ち去ろうとするダイヤさんに声をかける……

……寸前だった。

「今は言わないで!!」

「……っ、ルビィちゃん……」

ルビィちゃんが、私の前に立ち塞がる。

両手を広げて、顔を私に向けず下に俯いたままで、ルビィちゃんは私に対してそう告

今日も今日とて、汗をかいた部活のあと。

最近俺の行動を何処かで見られているのか、部室に戻ってきた直後に携帯のバイブ音が鳴り響く。

ブ~~~~ツッ! ブ~~~~ツッ!

電話だ。してきたのはいつもの人物。

俺は携帯を手にとって一旦部室を飛び出し、誰にも聞こえないだろう場所で俺は電話に出た。

ピッ!

「……もしもs」

『ヨースr……!』

ブツツ!

最近のあいつの電話での開口一番はこれなのか?

あいつの声が大きすぎて、思わず耳を遠ざけてしまうし、一緒に電話まで切ってしまっただ。まっただ。

甚だしいにもほどがあるというか、電話での最初の一言は、まず『もしもし』というのが普通なんだがな。『ヨースロー』と叫ぶのはちょっとすまんが、やめて欲しいと思っている。

ブツツツ! ブツツツ!

「……またか」

またあいつから電話がかかってくる。

ただ、ここに「拒否」という赤いボタンがあつてな、これを押せば電話の応答を拒否できる。

だが、仕方ない。

俺は電話に出る「応答」という緑のボタンを押し、あいつからの電話に仕方なく出ることにした。

「……もしもし?」

『何で突然電話切っちゃったの!?!』

そしたらこの第一声だ。

いや、唐突に電話を切っちゃったのは俺も悪いとは思つてはいるよ?

だけどそうさせたのはお前だ、渡辺 曜。

「あんな大声を耳元で言われてみる? 切っちゃまうのは仕方ないだろ? てか、お前のせいだよ」

『遼くん酷い! そんなこと言うなんて!』

「いや、酷いのはお前だよ……」

最近、電話でのやり取りはいつもこんな感じ。

何かあるとつい口喧嘩が始まり、これがいつまでもキリがなく続いてしまうから、俺は無理やり話を切り替える。

というのも、俺が気になっていることを、彼女に少し聞きたかったからなんだけどね？

「とりあえず、PVはどうだったよ？」

『えっ？あつ、うん……』

「ダメ、だったのか？」

『……うん。ダメだったよ』

その曜の受け答えの声を聞くと、結果は散々だったみたいだな。

相当PVに対してダメ出しをされてしまったんだろう。だとすると、千歌の野郎も相当落ち込んでるに違いないな、うん。

まあ、仕方ないよね。理事長が俺たちよりも1年歳上なんだし、1年長く生きているわけで……。

「何か言われた？」

『言われたよ。『本気で作ってこの“テイタラアク”ですか？』ってね。馬鹿にされちゃった……』

『テイタラアク』か……。

その日本語と英語の口調が混ざり合ったその言い方は、相変わらず変わってはいないようだ。

まあ、あいつらしいといえばあいつらしい。

「それは、生徒会長にもか？」

『PVは生徒会長には見せてないよ。ただ……』

「ただ……？」

生徒会長のダイヤにもPVを見せたのかと曜に聞いたら、彼女はそう言った後で、言葉を詰まらせる。

けど、そのすぐに曜は言葉を発した。

『ダイヤさん、実はスクールアイドルが好きだったらいいんだ。私、それに凄く驚いてて……』

あつ、なるほどね……。

ダイヤが実はスクールアイドルアイドルが大好きだったことに、曜はだいぶ驚いている様子だ。

まあ、今までスクールアイドルが嫌いと言われて、それが好きになって何かも覆ったわけだから、逆に驚かない人はいないんじゃないかな？

あつ、俺が驚かない方だったわ……。

「その事は、生徒会長自身から？」

『ううん、ルビイちゃんから聞いたんだ……』

「……そうか」

ダイヤから告白したのかと聞いたら、曜はルビイちゃんから話を聞いたらしい。

あいつもあいつだなんて思う。

生徒会長だからと、ダイヤはきつと学校を救わなければならない使命感を背負っている。それを全部自分で背負って、仲間に頼らない。ルビイという、大切な妹に対してもだ。

ダイヤは頑固、そういえば当てはまる。

「じゃあまた家に帰ったらその話を聞かせてくれ。俺は少し用事が出来ちまった」

『うん。私も今から千歌ちゃんの家に行つて、またPVをどうするかを考えなきゃいけないから!』

「分かった。じゃあ、また家で!」

『うん!また家でね!』

そして俺は、曜とやり取りをして電話を切る。

電話で言っていた“用事が出来た”っていうのは、少し行きたいところが出来たという話だ。言うなれば、とある人物の“家”に行くんだけど……。

ここは一つ、“あいつ”に話をつけてこよう。

そう考えた俺は、まず練習着から制服にせつせと着替えて荷物をまとめる。それから部室で寛ぐ先輩たちに挨拶をしては、部室を勢いよく飛び出し自転車置き場へ足を運ぶ。

それで各学年ごとに止めている自転車置き場に足を運んだ俺は、自分の自転車を引張り出したあと、自転車に乗って学校を出ては、あいつがいるであろう家へと向かったのであった。

あの時の話は、まだ終わってはいない。
聞きたい事が、俺には山程あるんだからな！

あいつに思いを馳せ、沼津の街並みを縫うように、俺は自転車を漕いで行くのであった。

#32 知らされる真実

学校からあの家に向かうまで、約30分。

結構遠い道のりだが、俺にとっては朝飯前。後ろに人を乗せたとしても悠々と自転車で行けるくらい、俺にとって余裕な距離なのだ。

実はあの家に向かうまでに、一度千歌の家の前を通る必要があるのだ。千歌を含め、6人はきつと家で相談をしているだろう。

「おっ、やってるやってる」

家の前を通る時、ちょうど梨子が縁側から部屋の中を覗き込んでる様子が見える。

きつとペットのシイタケのことを気にしているんだろう。これでも俺、梨子が犬嫌いを知ったのは、ごく最近の話である。曜から話を聞いたのだ。

都会の人は動物好きとかって思い込んで、犬が嫌いな人なんてこの街にはあまりいないから、俺からしてみると「意外」の2文字が思い浮かぶ。でもそれも人の個性だから、気にしたら負けなのかも。

「……頑張れよ」

俺はみんなに向かって小さく呟く。

鞠莉姉に色々言われて落ち込むところもあるだろうけど、あいつに認められるまでやるといい。

めげずに精一杯やって、それでもダメなら、またみんなで考えればいい。それを繰り返してやっていけば、いずれは認めてくれるだろう。

鞠莉姉にも、あいつにも……。

「いやあああああああ!!」

「……」

そんなことを考えていたら、千歌の家から梨子の虚しい悲鳴が聞こえてくる。それが

俺には可笑しくて、俺は思わず笑みをこぼした。

きつとシイタケとバツタリ会っては、あんな事やこんな事をされて襲われているんだらう。

「ご愁傷様だな、梨子のやつ。」

無事に生きている事を、切に願うよ。

「梨子、無事でいろよ」

そんな映画みたいな台詞を梨子へと呟いた俺は、急いであいつの家へと向かう。

空は朱色に染まり、夕暮れ時だ。

だんだん空も暗くなってしまいうから、俺は急いで自転車を漕いで行った。

それで千歌の家から自転車を漕いで5分。

目的の家に、俺は着いた。

「ふう……やつと着いた」

ここに来るのは本当に久しぶりだ。

2年ぶりだな、ダイヤの家に来るのも……。

自転車を止め、目の前に見据えるは木造で作られた大きな門。横には木板に「黒澤」と黒い文字で描かれ、胸の高さで門に引つ掛けられている。

ドクンツ

不思議な気分だ。

2年ぶりにダイヤの家にやって来ただけなのに、ダイヤが家にいると考えると、心臓がドキドキして破裂しそうだ。

ここひとつ、深呼吸……深呼吸……。

「すう……はあ……」

よしっ。行こう！

何かしらでドキドキしてる時、大きく深呼吸すれば大体は落ち着きを取り戻せる。それをこの時でも使い、しっかり身を整えて俺は家の玄関へと向かう。

部屋の明かりは付いてるな？

よしっ、ビンゴだ。

あいつは絶対、家にいる。

ピンポーン♪ピンポーン♪

そう思つて、玄関のインターホンを鳴らす。

あいつならきつと俺が家にやって来たことに驚くだろうと考えながら、玄関が開けられるのを目の前でじつと待つ。

そしてその後の数秒後、閉まっていた玄関の引き戸がゆっくり開けられる。出てくれたのはダイヤかと思つていたが、顔を出したのはダイヤではなく、ダイヤのお母さんだった。

「はい、どちら様ですか？」

「こんばんは。突然すみません」

「あら？あなたは確か……」

「お久しぶりです。金子さん」

名前は、黒澤 金子。

『かなこ』な？ 『かねこ』じゃないからな？

まあ確かに、世の中にはそんな苗字あるけどな。つてそんなこと話してる場合じゃない。

「自分、ダイヤの友達の楠神です」

「あらあら！楠神くんじゃない！」

「はい。お久しぶりです！」

金子さんは俺に気づいてくれた。

そのことにホツとする俺は束の間に、家にやってきた用件を金子さんに伝える。

「金子さん、ダイヤはいますか？」

「いるけれど、ダイヤに何か用でも？」

「はい。少しお話がしたくて……」

この時間に家を訪れること自体に関し、金子さんには凄く申し訳ないとは思って

る。

でもダイヤと早く話をしないと、俺の中で何かの手遅れになってしまふような感じがして、どうしてもダイヤと話さずにはいられなかった。

“あの時”の話も、ちゃんと聞きたいから。

すると金子さんは、俺に対して何も言うこともなく、ダイヤの部屋へと易々と案内してくれた。

「いいわよ。案内して差し上げますわ」

「あ、ありがとうございます！」

和かな笑顔を見せる金子さん。ついそれに見とれてしまい、俺はハツと我に返ったときは、それがとても恥ずかしくて仕方がなかった。

これは、あいつの前では見せられないな……。

ダイヤの家は、簡単に説明するなら廊下がとても長い。だから玄関から部屋まで距離があるし、何にしる家の中での移動が大変だと俺は感じている。

ずっとここに住んでいるダイヤや、ルビィちゃんがそう感じることは、まずないと思うけど……。

とにかく、ダイヤの家は建物的に広いのだ。

「さつ、ここです」

「ありがとうございます」

それで前を歩いていた金子さんは、とある部屋の途中で立ち止まって俺の振り向きそ
う話す。どうやら、ダイヤの部屋に着いたみたいだ。

そのあと金子さんは目の前の襖を少し開けると、そこから中に顔を出し、中にいるで
あろうダイヤへと声をかけた。

「ダイヤ、お客様よ」

「お客様。このお時間にですか？」

「ええ。あなたと話がしたくて来たそうよ」

すまないなダイヤ。こんな時間に押しかけて。

俺は金子さんが気を遣って開けてくれた襖の陰から、中にいるダイヤに姿を現す。

「よう、ダイヤ」

「えっ!? 遼さん!?!」

俺の姿を見た瞬間、ダイヤは自分の右手を口元に当て、いつものキリツとした表情から、目を見開いて驚きを隠せない表情に移り変わっていた。

ダイヤとは沼津の砂浜で会ったとき以来の再会。

会った時期が千歌たちの最初のライブ前だったから、約1月と半月ぶりだ。

「この時間にすまんな……」

「え……ええ。大丈夫……ですわ……」

ダイヤは動揺している。

電車の「ダイヤ」が乱れているくらいに動揺してはいないけれど、俺から視線を逸らして、何かを考え込んでいる姿があった。

それで俺が一步、ダイヤの部屋に足を踏み入れたとき、金子さんはまた俺に気遣って

くれた。

「それじゃあ、お茶を淹れてくるわね？」

「すみません。ありがとうございます」

俺のために、お茶を淹れてくると言ってきた。

でもそんなに長居するわけにもいかず、本当は話を済ませてすぐ帰ろうと思っていたけど、金子さんにあんな対応されるとすぐには帰れる気がしないが、まあ、お茶だけ頂いていこうと思う。

金子さんが部屋を後にして姿を消すと、途端に部屋は一気に静かになる。一言に言い表すなら、『無』が当てはまるかもな。

「砂浜で会った以来だな」

「ええ。そうですわね」

俺の言葉に、ダイヤは素っ気ない声で返す。

ダイヤは目の前にあるテーブルを正面に、綺麗に正座して座っていたから、俺はダイ

ヤの正面に来るようにあぐらで座り込む。

ひとまず目的の人物に出会えたことにホッとすると、ダイヤは俺に話を切り出してきた。

「それで、私に何の用ですの?」

口から発せられたのは、俺がダイヤに会いにきた理由だ。そう思うのは当然だ。何も事前に告げることなく、いきなり家に押しかけてきたのだからな。

そこは、ちゃんと話をしないとイケない。

「聞きたいことがあってここに来た」

「そうですか。では早急に私に質問してください。私はこれから、用事があるので……」
「……わかった」

用事。お前にそんな忙しい用事があったか?

確かにダイヤの家は綱元で、昔から古風な家系。昔は習い事とかであまり遊ぶ機会がなかったダイヤだが、今はそんな風には見えない。

気品で、綺麗で、大和撫子と呼ぶに相応しい人柄に育ったように俺は見える。だがそんなダイヤが、こんな時間に忙しい用事だと？

俺の中では色々と考えられることは挙げられる。けど、とりあえず俺は彼女に尋ねた。

「どうしてダイヤは……ううん、違うな。どうしてお前らは、スクールアイドルをやめた？」

「……………っ！」

直球に、超ど直球に彼女に尋ねた。

これは、俺が2年間ずっと思ってきたことだ。

「2年前、あんなに楽しそうにやっていたお前たちが、どうしてスクールアイドルをやめた？」

「……………」

2年前、ダイヤはスクールアイドルをしていた。

鞠莉姉と、果南の3人でな……。

このことについては、ルビィは知っているかと勝手に俺は考えている。ダイヤの妹だし、何かしら知っていると思っている。

ただ、千歌や曜たちは知らないはずだ。ダイヤがスクールアイドルが好きだったと知っても、果南と鞠莉姉と一緒にスクールアイドルをしていたなんて多分考えられないだろう。

「……………」

それで黙って下に俯き、俺の質問に対して何かを考えていたダイヤは、やっと重い口を開く。

「あなたに、答える必要はありませんわ」

ダイヤはそう言って俺の質問に答えようとせず、俺に対していつもの硬度さが発揮される。

俺は更にダイヤに問い詰めた。

「どうしてだよ？」

「あなたには関係のないことだからですわ」

だが俺の問い詰めに答える気配もなく、そう言つて話をはぐらかそうとするダイヤは、いつも以上に口が硬くなつていた。

本当に、答える気がないのだろうか？

「本当に何も、答えてくれないのか？」

「……………」

その質問にも、ダイヤは何も答えない。

相当に口が硬くなったようだ。昔は質問責めして押せば、大体の質問や悩み事をダイヤは打ち明けてくれたというのに……。

いつからそんなに、たった一人で何もかもを背負うようになってしまったのだろうか？

ダイヤの背負うものを、俺も背負つてやりたい。

俺は、ダイヤの助けになってやりたいんだ。

「俺は、ダイヤの助けになりたい」

「……………っ！」

「お前が背負ってる重荷を、俺も背負うよ」

「……………遼さん」

その気持ちを、俺は彼女に打ち明ける。

今日のところはもう遅いし、ここでダイヤが真実を話してくれなければ、俺はもう帰るつもりだ。

本当に長居するつもりなんてさらさらない。後々に千歌たちに行動がバレたら、色々面倒なことになりそうだからな……………。

でもまあ……………また来るつもりだけどね。

そんな自分の考えを、頭の中で整理させていた。

その時だった。

「はあ……………分かりましたわ」

「……えっ?」

「本当に、あなたにはこの事を話したくはなかったのですが、目の前で私にそんな想いを言われてしまうと、やっぱり私の中では、あなただけは許せるのだと思いますわ……」

ダイヤはため息をつき、俺に対してそう話す。

ただ俺は最初、ダイヤが一体何を話していたのかさっぱり分からなかった。

ただダイヤが話した事をもう一度自分の頭の中で再生したとき、俺はダイヤが話していた事をやっと理解することができた。

「話して、くれるのか?」

「さっきも言ったでしょう!ちゃんと話しますわ!果南さんと鞠莉さんの、2年前のことを……!」

丁重にもう一度彼女に尋ねると、ダイヤは目の前のテーブルに身を乗り出し、俺に自分の顔を近づけて鬼気迫るようにそう答える。

でもあまりにもダイヤの顔が近かったので、俺はダイヤに顔が近いことを告げる。

その瞬間、ダイヤは顔を赤らめた。

「ダイヤ、顔が近い……」

「あつ、す、すみません……／＼／＼」

照れているダイヤが凄く可愛い。2年経っても、その照れ顔は相変わらず変わらないようだ。

俺からしてみれば、その照れ顔をずっと見てみたい気もするが、ここはちよつとぼっかし我慢だ。

また次の機会にダイヤを照れさせよう。

あつ、これは絶対本人に悟られないようにしないとね。本人に気づかれたら元も子もない。

気づかれたら多分、殺されるかもね。

しれつと言ってるけど、結構ダイヤは怖いよ？

「とにかく、早く話してくれよ」

「わ、分かってますわ！」

とりあえず俺は、顔が近かったことを未だに照れているダイヤを急かすように声をかける。

ダイヤは分かった素振りを見せながらも、両手で髪を整えるなり、右手を胸に当てて深呼吸を何度もしたりと、少し忙しい感じが見てとれた。

それが、今から俺に話すことの前ぶれなのかは知らない。けど、ダイヤから聞かされる事は、心してちゃんと聞かなければならない。

でないと、ここに来た意味がないからな。

それからダイヤは一つ咳払いをすると、俺に対して胸を張って言い放つ。

ダイヤに張れる胸なんて、ないのにね……。

おっと、つい本音が出てしまった。

「準備はよろしいですか？」

「ああ、そんなのはとっくに出来てる」

俺もダイヤと同じように胡座から正座に体勢を変え、ダイヤの話聞くように心掛けた。

「では、話しますわ」

「……………うん」

そして俺は、ダイヤから発せられる言葉に耳を傾け、2年前の事をこと細かく全てを聞いた。果南と鞠莉姉との3人の間で起きた出来事まで、ダイヤが全部、全てを丸裸にしてくれた。

その話を聞いた俺は、衝撃を受けた。

言葉が出ないくらい、凄いくらいにね。

それで同時に、どうしてダイヤがそれを一人で背負い込んでしまったんだろうと、俺は、1人それをずっと考え込んだ。

俺もその場にいれば、ダイヤが1人で全部背負うことなんてなかったのに…………。

俺は、とんだ大馬鹿野郎だ。

唇を噛み締め、1人俺は悔やんだ。

3人の間に起きてしまった事に、俺が直ぐさま関われなかった事に対して、俺は、暫くダイヤに申し訳ないと感じていた。

ごめんな、ダイヤ、と…………。

かける。

梨子ちゃんはまだ、シイタケに慣れない。

それよりか、逆に梨子ちゃんがシイタケを避けるようになった。別にシイタケは、好きで梨子ちゃんを襲ってるわけじゃない。

なかなか、上手くないかないこともあるんだなあって、私は梨子ちゃんの様子を見てそう感じた。

でも今はそれより、P Vを作るのが最優先。

街や学校が魅力に感じよう、また一からP Vを作り始めないといけない。

それは、善子ちゃんの第一声から始まる。

「それよりもP V、どうするの?」

「確かに、まだ何にも決まってるはずら……」

善子ちゃんの話には、部屋の奥のベッド側に座っている花丸ちゃんもネガティブな発言をする。

実際本当に、何も決まってるない。

P Vをどうするか決めるために、千歌ちゃんの家が集まっているのだけれど、いい案

は思い浮かばず、みんな苦戦していた。

「みんな、いらつしやうい！」

するとそこへ、志満さんが部屋に顔を出す。

志満さんの右手にはお盆で、そのお盆の上にはお茶が入った急須と、人数分の湯のみがある。

「みんなで相談？」

「はい」

私は志満さんの質問に答えると、襖の陰にずっと隠れていた梨子ちゃんは、志満さんの邪魔にならないように私の右隣に座る。

梨子ちゃんのすぐ背後には千歌ちゃんのベッドがあつて、千歌ちゃんは家に来てから、ずっと自分の布団に潜っている。

千歌ちゃん、具合でも悪いのかな？

さつきまでそんなに具合が悪い顔をしている様子はなかったのに、一体どうしたんだ

ろう？

千歌ちゃんの容態で私はそんな風に考えていた時に、テーブルに急須と人数分の湯のみを置いた志満さんから、ちよつとした注意をされた。

「別に構わないけど、明日みんな朝早いんだから、今日のはあんまり遅くなつちやだめよ？」

「「「はーい！」」」

志満さんの言葉に、私を含め、千歌ちゃんと梨子ちゃんを除く4人が返事をする。

千歌ちゃんはまだ布団に潜っていて、梨子ちゃんに関しては、志満さんは一体何の話をしているのかと、少々アタフタと困惑していた。

「ねえ、明日は何があるの？」

その勢いでか、梨子ちゃんは私に尋ねてくる。

その質問を答えないわけにはいかないから、私は梨子ちゃんの質問に答えようとした。

「それは、明日の朝早くに……」

「海開きだよ!!」

「だけどそこへ、思わぬ人物が私の答えを単刀直入に省略し、襖から顔を覗かせながら言い放つ。

しかもその人物は、私はベッドの布団に潜っているとずっと思っていた人物だった。

「えへっ……♪」

「千歌ちゃん!」

襖から顔を出す千歌ちゃんに、私も梨子ちゃんもびっくり仰天で顔を驚かせる。

そして、私はすぐに悟った。

布団にくるまっているのが千歌ちゃんじゃないのなら、一体何が布団にくるまっているのか?

私は、すぐに理解することが出来た。

「じゃあ……もしかして……」

梨子ちゃんもその事にようやく気づいたようで、顔をカチコチに強ばらせ、恐る恐るとベットのの方に振り向く。

すると何という事でしょう。くるまっている布団がどんどん膨らみ、布団がペロンとめくれ、布団に包まっていたものの正体が明らかになった。

ワンツ！ワンツ！

正体は、ペットのシイタケ。

梨子ちゃんは、私たちが耳を塞いでしまうほどに、とても大きな悲鳴をあげた。

「いやあああああああ！」

「「「「……!!」」」」

もうシイタケは、梨子ちゃんからしてみれば天敵と言える。うん、もう絶対的にそう言える。

それで梨子ちゃんかというと、シイタケがいるその場から離れようと、熊と出会った時の対処法を梨子ちゃんは試みる。

相手に背中を見せず、ゆっくり離れる。

その対処法を使つて、梨子ちゃんは千歌ちゃんの部屋から難なく抜け出せると、私も彼女自身もそう思っていた。

けど、千歌ちゃんがそれを邪魔した。

「それっ！捕まえた!!」

「ち、千歌ちゃん!?!」

私、渡辺曜は、千歌ちゃんの行動にはびつくりだった。千歌ちゃんがそんな行動をするなんて、全くもって考えてもいなかったから……。

「千歌ちゃん、離して!いやあ!」

「(っ)、(っ)ら!暴れちゃダメ!」

今の状況を説明すると、簡単に言ってしまうえば、千歌ちゃんは梨子ちゃんを背後から捕まえている。

どう言っているのか分からないんだけど、なんかプロレス技っぽいんだ。

背後から梨子ちゃんの腕に両腕を引っ掛け、そこから梨子ちゃんの腕が、肩と平行か上になるように持ち上げる。それで千歌ちゃんががっちりホールドして、梨子ちゃんの肩は動かさなくなり、肘から下の腕部分しか動かさなくなってしまった。

フリーになっている千歌ちゃんの両手は、梨子ちゃんの頭を挟むように捕まえていた。

梨子ちゃん、ちよつと苦しそう。

「千歌ちゃん、離してよお……」

「ふふふん♪」

でも、千歌ちゃんは離さない。

すると、どういう風の吹き回しなのだろうか？

「ルビイちゃん！花丸ちゃん！梨子ちゃんの両足、しっかり捕まえといてね！」

「は、はい！」

「分かつたずらく！」

ルビイちゃんと花丸ちゃんは、千歌ちゃんの言うことを聞いては、梨子ちゃんの足にしがみつくように捕まえたのだ。

右足にルビイちゃん、左足に花丸ちゃん。

「いや、離してえ〜！」

梨子ちゃんのがむしやらにもがくも、3人は決して離さない。梨子ちゃんの肢体は、きつちり3人によってホールドされていた。

ていうか、こんな説明をしている私の知らない所で一体何の策を練っていたのだろうか？

ルビイちゃんも、花丸ちゃんもそうだ。

どうして千歌ちゃんの言うことに素直に従って、どうして善子ちゃんはシイタケに悪魔の耳が付いたカチューシャを身に付けさせているのだろうか？

「フッフッフ……」

そんな事を考えていた私に、善子ちゃんがいつもの墮天使言葉で教えてくれた。

「さあ魔獣ケルベロス。我に従い、あそこで怯えるリトルデーモンに、大いなる愛を捧げなさい！」

ワンツ！ワンツ！

「愛っ!?!いや、やめて！近づけさせないでっ！」

「……………」

もう私、何がしたいのかわかっちゃった……。

千歌ちゃんごめん。それはダメだよ。

それは、一番やつちゃダメなやつ……。

ていうかシイタケは魔獣でケルベロスじゃない。ましてや頭も3つもないから、善子ちゃんの墮天使言葉にはツツコミたいところがいっぱいありすぎて、何を言えればいいか

分からないや……。

「曜ちゃん！みんなを止めてっ！」

「……………」

そして梨子ちゃんは、私に助けを請う。

梨子ちゃん自身も何をされるのか分かったみたいで、若干涙を溜めては私に助けを求めた。

ただど時すでに遅し。シイタケは既に梨子ちゃんの目の前、梨子ちゃんの足元にいた。尻尾を左右に振って、今にも梨子ちゃんに飛びかかろうと、身をかがめている状態。

もう、全部が遅かったんだ……。

だから私は、梨子ちゃんにこう告げた。

「梨子ちゃん、もう無理だよ……」

「……………っ!?!」

慈悲はある。だけど、ごめんね梨子ちゃん。

もう私、助けられないや……。

そうした表情で梨子ちゃんに訴えた瞬間に、千歌ちゃんと善子ちゃんは言い放つ。

「さあ来て！シイタケ！」

「ケルベロス！行きなさい！」

ワンツ！ワウウ！

その声にシイタケは、身をかがめた状態から梨子ちゃんめがけて飛びかかる。

そして梨子ちゃんは、誰にも助けてもらえないことに対して、虚しい叫びの声を上げたのだった。

「いやあああああああ!!!」

#33 それが、魅力

く 梨子 side く

翌日、早朝

太陽も登らないまだ早朝の頃、私は、朝の3時半を告げる時計のアラームで目が覚める。

アラームを止めた私は、そのベッドの上で大きく伸びをする。私がここまで早く起きるのは初めてで、今までにない経験だった。

「ふわあ……ああ………」

でもあくびが出るくらい、まだ眠気がある。

目を擦る私はベッドから起きると、すでに起きていたお母さんの声が下から聞こえてくる。

「梨子〜！早く起きなさい」

「は〜い……」

『みんなと集まる時間に遅れるわよ！』と、やや強い口調でお母さんは私に言ってきた。

それを耳にした私は、ため息を無情に吐き、学校指定の上下真っ赤なジャージに着替え始める。

昨日、千歌ちゃんや曜ちゃんや志満さんが話していた通り、今日の朝は海開きの事前の準備として、砂浜のゴミ拾いをする事になってる。

都会に住んでいた私にはそんな事をするんだって驚きで、今日のその日のために朝は早起きしなきゃいけないのって、少し戸惑うところもあった。

だけど、それだけこの海を大事にしているんだって考えたとき、すぐに私は納得が出来た。

海も砂浜もすごく綺麗だし、私もそれにはやってやろうと自信を持っていたけれど、それ以前に私は眠気に襲われている。

だからこの時に私は、早くこれくらいの時間にも起きられるようにしようと思った。色々、得るものがあるかもしれないから……。

「ふわあ……行つてきまゝ……」

「ええ、行つてらっしゃい！」

そしてこんなに朝早いのに、元氣ハツラツな様子で私を見送ってくれるお母さんを尻目に、私は集合する場所へと家を出る。

外はまだ暗く、空は一面に雲が覆っていて、まるで夜になりかけの夕方みたいな明るさだった。

だから街灯も、今も尚付いている。

「梨子ちゃん！」

それで私が目的の場所に向かっていると、すでに聞き慣れた声が後ろから聞こえてく

る。

私はその場で足を止め、後ろへ身体ごと振り返ると、自転車を勢い任せに漕いでいる遼くんと、その遼くんの後ろに乗って、私に笑顔で手を振っている曜ちゃんの2人の姿があった。

「梨子ちゃん！おはヨーソロー！」

「おはよう曜ちゃん！遼くんも！」

「おう。おはよう梨子」

こんな時間でも、特に曜ちゃんは元気一杯で、私はとてもそれが羨ましい。

いつでもどこでも前向きで、衣装作りが得意で、みんなが憧れる存在で、とても優しい女の子。

そんな女の子と友達になつては、一緒にスクールアイドルをしている。そんな私は、良い意味で恵まれているのかもしれない。

「相変わらず元気ね……」

「えへへっ♪元気が一番の取り柄だから！」

そうやって曜ちゃんは右手を額に当てて、ビシツと敬礼する。何かとそれが癖なのか未だに分かってない私だけど、それが一番曜ちゃんらしいなって、最近そう思ってる。するそこに、遼くんの横槍が飛んでくる。

「何が元気が一番の取り柄だ。俺が朝、曜を起こしに行かなかったら、今頃寝坊して、大遅刻をかましてたっていうのに……」

「ああ！それ言っちゃダメなやつ〜！／＼／＼」

遼くんは曜ちゃんのことを起こしに行つた出来事を、曜ちゃん本人の目の前で話す。

その話を目の前でされた曜ちゃんは、『どうしてそれを梨子ちゃんに話すの!』って感じで、顔を真っ赤にして羞恥にまみれていた。

「別にいいじゃねえか」

「良くないよ！もう〜！／＼／＼」

曜ちゃんは遼くんの左肩をポカポカ殴る。けど、肩を殴られて痛がる様子を見せない

遼くん。

曜ちゃんとは幼馴染みなだけあって、曜ちゃんや千歌ちゃんの扱い方が、とにかく慣れていようなそんな感じがしてならない。

遼くんは、余裕の表情を見せていた。

「とにかく、今日は海開きがちゃんと出来るよう、砂浜のゴミ拾いをするために来たんだから、もう肩を殴るのはやめろ」

「むう……分かったよ……」

それで遼くんは曜ちゃんを制止させる。曜ちゃんはそれに捻くれるようにして遼くんにジト目を見つめては、フグみみたいに膨れっ面になる。

でも、曜ちゃんもそれをやらなきやいけないことは分かっているようだった。すぐに遼くんの左肩に殴るのをやめ、腕を組んでは遼くんから背を向けてそっぽを向いてしまった。

「じゃあ、早く砂浜に行こう！」

「あつ、曜ちゃん……」

不機嫌な表情をして、砂浜へ通じる道をズカズカ進んでいく曜ちゃんに私は声をかけようとした。

でもその行動をする直前に、彼に私の左肩を掴んで止められる。

『どうして止めるの?』と思つて、私は彼の方を振り返る。すると遼くんは何故か微笑んでいて、私に今の曜ちゃんのことを話してくれた。

「安心しろ、あれで曜は怒つてなんかいない。ただ私情をバラされて、少し捻くれてるだけさ。すぐにいつものあいつに戻るよ」

「えっ? あんなに不機嫌な顔をしてるのに……?」

「ああ。だから、あまり心配しなくていいよ」

どこからそんな自信があるのだろうか?

私が見ると凄く怒つてるような表情しか見えないんだけど、本当にあのままで大丈夫なのかな?

私、すごく心配だなあ……。

「2人とも〜！早く行こうよ〜！」

「あ、うっ、うん！今行くね！」

それから、3人で砂浜へ向かう。

遼くんは途中、自転車が悪魔にならないところにポツンと止めて、自転車が盗まれな
いよう盗難防止のU字型のロックを後輪にかける。

物の管理が凄く厳しいって曜ちゃんが言ってたけど、本当に遼くんの物の管理はすご
い。

なんか。マナージャーっぽい感じだった。

「お〜い！みんな〜！」

そして、また聴き慣れたそんな声。

目的地の砂浜に目を向けると、私たち3人に手を振っている千歌ちゃんがそこにい
て、善子ちゃん、花丸ちゃん、ルビイちゃんも既にやって来ていた。

「おはよう〜！」

「おはよう！」

「おはヨースロー！」

浦女の赤いジャージを身に纏い、みんなの手には光る提灯と、大きなゴミ袋と、鉄の大きなはさみを持っている。どうやらそれで、みんなでゴミ拾いをしていくみたい。

挨拶を交わした後、千歌ちゃんは3人の分も用意してくれていて、それをまず遼くんを手渡す。

「はい！3人の分！」

「サンキュー千歌」

それでそこから、遼くんは私と曜ちゃんにゴミ袋とはさみを1つずつ手渡すのだけど、私は曜ちゃんの遼くんへの対応に愕然と驚いた。

「ほれ、曜の分」

「ありがとう、遼くん」

「……………っ!？」

さつきまでプンスカと遼くんに怒っていたはずの曜ちゃんが、いつの間にかいつもの曜ちゃんに戻っていた。

それを目の前で見せられた私は、開いていた口が塞がらない。そのせいか、私のすぐ横に立っていた遼くんは声をかけられて、私の身体は驚きとともにビクツと跳ねさせた。

「……………梨子？」

「は、はい!？」

「……………はい、梨子の分」

「あ、ありがとう……………」

そんな私の様子を気にすることなく、遼くんは私にゴミ袋とゴミばさみを手渡してくる。

すると遼くんは、私にそれを手渡した後で、正面に立ったまま私の右耳元に迫り、小声で話す。

「なっ?言つた通りだろ?」

「……っ?!?!?」

私はまざまざと、彼に見せつけられた。

怒っていたはずの曜ちゃんが、少し時間が経つといつも通りの曜ちゃんに戻っていたことに……。

それとも、私が抱えている曜ちゃんの疑問を解決させるためなのかもしれない。そうだとすれば、遼くんが千歌ちゃんから手渡されたものを、自分から貰いに行くはずがない。

そう考えたら、私はまんまと嵌められた。

「気になってたんだろ?顔に出てた」

「えっ?本当?」

「意外と梨子も、表情に出やすいんだな」

「……馬鹿にしてるの?」

「ああ、少し馬鹿にしてる」

その瞬間、私は遼くんの右脇腹を殴る。

けど私の行動を読んでいた遼くんは、私の左手の拳を右手で悠々とパシッと受け止める。

余裕な表情を見せる遼くんに、悔しきで私は意外にも腹を立てた。

「そんなに怒るなよ。シワが寄ってるぞ?」

「うるさい!怒るに決まってるわよ!」

そんな感じに遼くんに対して文句を言う。でも、遼くんは私の文句に対しては何も言わず、私のために千歌ちゃんから今からすることの話を聞き出す。

「それで千歌、どこまでやればいい?」

「うーんと、こつちから……あつちまで!」

「へいへい。分かったよ」

今のやり取りで、どこからどこまでゴミ拾いをすればいいのか分かって、なかなか凄いと思う。

だって、私ったら今の遼くんと千歌ちゃんの2人のやり取りが全然わからなかったんだもの……。

そこへ私に、遼くんが簡単に説明してくれた。

「どうやらその端から、あつちの海に向かって、ゴミを拾っていく感じだったさ。今日も『みんな』は来てる感じだし、みんなで頑張れば、そんなに時間もかからないだろう……」

「みんな……」

指を差してゴミ拾いをする範囲を教えてくれて、初めてこういうのに参加するわたしにとっては、遼くんの説明はとても分かりやすかった。

その説明の後で、私は周りを見渡す。

遼くんが言っていた『みんな』という言葉の通りで、砂浜には私たちだけじゃない。千歌ちゃんのお姉さんたちや、学校の生徒みんなもいる。理事長の鞠莉さんや果南さん、ダイヤさんもいて、このゴミ拾いにみんな集まっていた。

そして何より私の目に止まったのは、このゴミ拾いをする上で、街の人もいることだった。

「ねえ、曜ちゃん」

「んっ？どうしたの梨子ちゃん？」

「毎年、海開きってこんな感じなの？」

あまりこういう事に参加することもなかった私にとっては、あまり見ない光景だった。

そう感じていた中で、私は曜ちゃんにそう尋ねると、曜ちゃんは一度だけ千歌ちゃんと顔を見合わせながらも、私に笑顔で質問に答えてくれた。

「そうだよ！でも、どうして？」

「この街って、こんなにたくさん人がいるんだなって思ってた……」

「うん！町中の人が、毎年参加しに来るんだ！」

「もちろん、学校のみんなもだよ！」

「そうなんだ……」

あとから千歌ちゃんも私に説明を加えてくれて、そのあとで私は、自分の頭の中で考

えていた。

普段、この内浦の街はそんなに人が多くいるように見えなかった。でも、私が見ている光景の中で、改めて感じたことがある。

それは、街の人みんなが1つになって、街のために活動しているということ。

私が住んでいた東京では、なかなか見られない光景だった。街の人たちや学校のみんなが、こうして一つのことに関心一杯やっていることに、私は、目の前に広がる光景に感動していた。

「これ、なんじゃないかな？」

「えっ……？」

「梨子ちゃん、どういうこと？」

思わずその事を自分の口から発して、曜ちゃんや千歌ちゃんに話を聞かれながらも、私はそのままに思うことを繰り返して話した。

「これなんじゃないかな？この街、内浦の街の魅力って、これなんじゃないかな？」

「これが、この街の魅力……」

私の言葉に、2人は周りを見渡す。

これで千歌ちゃんや曜ちゃんが、この街の魅力に気づくことが出来れば、これからまたPVを作る上で、きつといい材料になるんじゃないかと思う。

私は、間違いなくそう確信が出来る。

これが、この街の魅力なんだって……。

「そっか！これなんだね！」

「分かったよ！梨子ちゃん！」

良かった。2人とも気付いてくれたみたい。

でもいきなり2人で私に抱きついてこられると、いくら2人が嬉しくても、私ちよつと苦しい。

でも遼くんが、私が2人に抱きつかれて凄く苦しそうにしている私を見かね、千歌ちゃんと曜ちゃんを引き剥がしてくれた。

「ほれ2人とも！梨子が苦しがつてるだろ」

「あつ、ごめん梨子ちゃん……」

幸い、遼くんが強く言ってくれたからすぐに2人は離れてくれて、ことはすぐに収まった。

ただど次の瞬間、千歌ちゃんは何か思いつく。

「あつ、そうだ！」

何かを閃いた千歌ちゃんは、手に持っていたゴミ袋やさみなどを近くの朝礼台に置く。そしてそのまま朝礼台に登っては、ゴミ拾いをしているみんなに向かって声を上げた。

「あの！皆さん！私たち、浦の星女学院でスクールアイドルをしている『Aquours』です！」

ここでゴミ拾いをしているみんなは、千歌ちゃんの声に一齐に彼女の方へ振り向く。

この場で、千歌ちゃんが一体何の話をするのか私も疑問に思っているけれど、とりあ

えず私は、千歌ちゃんの話聞くことにした。

「私たちは、大切な学校を残すために、学校に生徒をたくさん集めるために、皆さんに協力して欲しいことがあります！」

この砂浜にいる学校の生徒や、街の人たちみんなに対して、千歌ちゃんは何かをやるうとしている。

みんなで一つの事をやって、この街の魅力を伝えようって、千歌ちゃんは、話を聞いてくれているみんなにお願いをする。

そして、千歌ちゃんはみんなに告げる。

「みんなの気持ちを形にするために！」

学校がなくなつてほしくない。

学校の生徒を集めて、学校を存続させたい。

そんなみんなの気持ちを“形”とするために、千歌ちゃんはある作戦をみんなに告げ

た。

その作戦にみんなは『ええ〜！』って驚いていたけれど、私や曜ちゃん、ルビィちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃんにとっては、千歌ちゃんらしくて、凄くいい提案だと思っ
た。

学校の間みんなも、面白そうって言ってくれて賛成してくれたし、街の人たちも、千歌ちゃん
の意見を快く受け入れてくれた。

みんなが千歌ちゃんの意見に賛成してくれた時、山の上から太陽が顔を出す。

それはまるで、『何もない』と思っていた私たちに希望を与えてくれたような、そんな
思いが伝えられたような、そんな気がした。

く 梨子 s i d e o u t く

く
く
く
く
く
※※※※※
く
く
く
く
く

「まさか、こんな事になろうとはな……」

はつきり言って、千歌が提案したことが、まさかここまでの規模になるとは思わなかった。

「綺麗だね……」

「ああ、そうだな……」

俺の隣には、真っ赤なワンピース風の衣装を身に纏った曜の姿がある。頭の後ろと胸に大きなリボンが特徴的で、それでも至ってシンプルな衣装。

千歌と曜は赤、梨子とルビィちゃんは紫、花丸ちゃんと善子がピンク色と、3種類の衣装を2人ずつが身に纏っていた。

そんな衣装を着た曜と見ていたのは、赤紫と朱色が混ざり合った夕暮れの空……へ、フワフワ飛んで行く、たくさんのスカイランタンだ。

その数、なんと1, 000個。

千歌が提案した案というのは、みんなでスカイランタンを作って空に飛ばし、この町には、みんなの温かい気持ち溢れることを伝えるため。

娯楽施設とか、そういうものはこの街にはあまりないけれど、街の人たちの温かい気持ちは、どこの都会よりも溢れている。

そしてそれを、A q o u r sの『新曲』と共に『PV』としてみんなに見てもらおう。それが千歌が言っていた、みんなの気持ちを『形』にするということだった。

「曜ちゃん！そろそろ始めるよ！」

「あ、うん！分かった！」

この案を提案した千歌本人は、そろそろ新曲のPVの撮影を始めると曜に声をかけてくる。

曜がそれに返事をした後、千歌は梨子たちの元へそそくさと戻っていった。それで曜は、俺に尋ねてくる。

「ねえ、遼くん」

「んっ？なんだ？」

「魅力は、伝わるかな？」

「……学校や、内浦の街のか？」

「うん……」

例えこんな事をして、学校の魅力が伝わったとしても生徒が集まるのか？きっと曜の頭は、そんな事を考えているに違いない。

心配するのも分かる。でも、結果のことを考えても仕方ない。なんせ、未来がどつちに転がるなんて分からないんだから。

だから俺は、曜の頭をチョップした。

「ていつー！」

「痛っ！」

「そんなもん、いくら言っただってどうなるか分からない。良い方向に転がるのか、悪い方向に転がるのかなんて、分かったもんじやないしな……」

「……………」

頭を両手で抑える曜に、俺はそう伝える。

俺は、みんなは、やれることをやるしかないとはい思ってる。

全力で精一杯、みんなで一生懸命に頑張ってやっていけば、自ずと結果も良い方向に現れてくる。

だから、俺から言えることはただ一つ。

がむしやらに精一杯頑張って、生徒を集めて、『学校を救う』という目標に向けて、やり遂げろ。

「遼くんは、凄いな……」

「凄くねえよ。お前も、余計な心配すんな」

「……………うん！」

それから曜からは、*“安心”*というキラキラした眼差しを向けられる。あまりにも眩

し過ぎるその視線に目のやり場を失っていた俺に、中学の同期であるむつが俺たちに声をかけてきた。

特に俺には、怒声混じりだけど……。

「曜ちゃん！そろそろ始めるから位置について！」

「うん！分かった！」

「遼はカメラの邪魔にならないところにいてよね！へましてカメラに映ったらぶん殴るから！」

「はいはい。殴るのだけは勘弁な……」

中学の時に一度むつを馬鹿にして、一度だけ左頬を右ストレートで殴られたことがある。

どうなったかは察してくれ。気持ちとしてはもう殴られたくないと思っている。次にまた馬鹿にしたら、次はきつと……殺されるかもな。

「じゃあ曜、頑張れよな！」

「うん！遼くんも、私たちの練習の成果、しっかり見守って見ててね！」

「はいはい。言われなくても大丈夫だよ」

それで俺は、むつに言われるまま曜と別れる。

曜は5人の元へ向かい、撮影がすぐに始められるように最初のポジションへと位置につく。俺は彼女たちの撮影の邪魔にならないよう、学校の屋上から降りられる階段に陣取った。

言い忘れていたけど、今俺がいる場所というのは、千歌たちが通う浦の星女学院の屋上。

つまり、俺は「禁断の領域」に足を踏み入れているわけで、だからといって、無断で学校に立ち入ったわけじゃない。

この学校の理事長である鞠莉姉や、ダイヤに許可は得ている。だから、どうってことないのだ。

あれから1週間、街や学校を魅力を伝えるために彼女たちは練習を頑張ってきた。彼女たちの努力は、結果として現れるだろう。

でもまあ、すぐにとはいかないけどね。

「じゃあみんな！学校に生徒を集めるため、この街の魅力を精一杯伝えるため、今日は頑

張ろう！」

「「「おっう!!!」」」

千歌はその場で右手の拳を高々と掲げ、みんなで頑張ろうと声を張り上げる。みんなもその声に反応して、もの凄いやる気を見せていた。

その元気がみんなにあるなら、きつとこの撮影も無事に成功すると俺は思った。根拠は別にない。ただ、そんな気がした。

そして俺は、ふと頭をよぎる。

果南、ダイヤ、鞠莉姉の3人。

3人がこれを見たら、3人はどう思うのか？

夕暮れの赤紫の空に浮かぶ「1, 000個」ものスカイランタンを眺めながら、俺は6人が撮影を行っている中で、ふと、そんなことを考えるのであった。

#34 梨子と鎌倉 前編

梅雨の時期が明け、それから1週間が経った頃

ことの始まりは1週間前、俺の行きつけの書店から全てが始まった。

「あれ？ 梨子じゃん」

「あつ、遼くん……」

毎週のごとく、俺は有名なサッカーの雑誌を立ち読みしようと、いつも『マルサン書店』という書店に立ち寄っている。

それで今日もそのサッカー雑誌が出るからと、俺は書店に足を運んだら、ちょうど店の入り口付近で梨子が雑誌を立ち読みしていたのだ。

お互い、出会っては驚きの声を上げる。

「偶然だね。遼くんは部活帰り？」

「ああ。そつちも？」

「うん。ちよつと見たいものがあった……」

「ふうくん……」

お互い部活の帰りとだけあって、梨子の首筋から流れる汗につい見とれてしまっていた。

それを彼女にはバレないように、梨子の背後を回りサッカー雑誌が置いてある棚に向かうとした瞬間だった。

俺は、梨子が読んでいる雑誌に目が止まる。

「んっ、『鎌倉』？」

梨子が読んでいた雑誌は、観光ガイドブック。

それでその本内に記載されている『鎌倉』と書かれたページを、梨子はじゅつと読んでいた。

ただ俺がその言葉を口にした途端、梨子は驚いてこちらに振り向き、驚きの声をあげ

た。

「りよ……遼くん!？」

「へえ、梨子ってそういうの読んだ」

「ち、違うの!これは、別に……!」

書店に売っている観光ガイドブックを読んでいる地点で、梨子がどう理由を上げようともそこに行きたがっている証拠になっている。

書店の入り口にあるわけで、足を止めてつい行ってみたいところを読んでいたのだろう。

でも、この書店の観光ガイドブックの本を読む人なんてごく稀だ。その本を読む人が決して多いわけではないのだ。

これが、都会の女の子の特性なのだろうか？

「別に、隠すことはないと思うが……?」

「だって、恥ずかしいじゃない?」

「恥ずかしくない。だってそれって、梨子が行ってみたいところなんだろ?それなら、特

にそれを隠す必要もないと俺は思うぞ？」

「っ……………／／／」

俺は梨子に対してそう言って安心させようとするものの、梨子は観光ガイドブックを閉じては、本で顔の下半分を隠す。

いや、顔の半分を隠す事をしてまで恥ずかしがることもないと思うのだが、やはり彼女のやっぱり恥ずかしいと思うのだろうか？

すると彼女は、しきりに話し出す。

「……………分かった」

「えっ？今なんて……………？」

「分かったって言うてるの！仕方ないから、遼くんにはちゃんと話すわ」

ため息まじりに、梨子は俺にそう話す。

彼女が行きたがっている場所を、自身から聞ける事に安心しきっていた俺の前で、梨子は観光ガイドブックをペラペラページをめくり、俺に自身が行きたいと思っっている場所を見せた。

「ここよ！私が行きたいと思ってるところ！」

「へえ、やっぱり鎌倉だったのか」

「何よ！最初から分かってましたって言うの!？」

「別に、ただ、ここなのかなって……」

梨子の問いかけにはつきりと答えず、中途半端に答えた俺は梨子の持っていた観光ガイドブックを手に取る。

「ちよつとそれ、見せてくれないか？」

「えっ？あ、うん……」

梨子の持っていた観光ガイドブックを手に取った俺は、鎌倉の特集がされているページを、順に目で追っていく。

鎌倉には観光名所はたくさんある。だから、その観光スポットそれぞれに観光の“オススメ度”として最高☆5の評価形式で、この本には記されている。

また、その鎌倉におけるグルメとかも本には記載されているから、なんともまあ、観

光したいと誘惑させる本だなと俺は思った。

「梨子は、ここに行きたいのか？」

「ええ。だって、行ってみたいと思わない？」

「まあ……行ってみたいとは思うぞ？」

梨子は何も隠すこともなくなったせいか、俺に対して初めて見せる表情を見せていた。目をキラキラ輝かせて、鎌倉に行ってみたくないとウキウキしている表情だ。

確かに俺も、鎌倉という場所には行ってみたいところでもある。観光できるどころは満載で、1日かけても全て観光できる場所ではないが、行ってみる価値はある。

だが、梨子はポツリと呟く。

「はあ、行ってみたいなあ……」

少し残念そうに、雑誌を見つめて言う。

鎌倉に行きたかったという気持ちだが、梨子の残念な表情に現れていた。俺は、その気持になる理由をすでに分かっている。

千歌たちとやっている、〃スクールアイドル〃だ。

「……………」

土曜・日曜と、ほぼ毎日スクールアイドルの練習に取り組んでいると曜から話は聞いています。

でもそれ以前に、梨子が前々から鎌倉に行きたいと思っていたら話は別になるけれど、俺は、梨子に対してこう思った。

梨子を、鎌倉に連れて行ってやりたいって……。

俺がそれを考えた頃には、梨子が手に持っていた観光ガイドブックを取り上げていた。

「えっ!?! 遼くん!?!」

「悪い。ちよつと待っててくれないか?」

梨子が驚きの声を上げるなかで、俺は彼女にそう告げてガイドブックをレジへ持って行って買う。

このガイドブックは、俺のために買ったのではない。この本は、梨子のために買ってあげたものなのだから、変な誤解をしないはほしい。

「ほれ、ガイドブック」

「で…でも、どうしてこれを？」

観光ガイドブックの入ったレジ袋を梨子に手渡すと、彼女はそんな事を聞いてくる。

こんな事をした理由は俺にとつては明確だ。だが彼女に対してどう説明すればいいのか分からないでいたとき、俺は何となく梨子にこう言えばいいかなと思って、彼女に對してこう口を開いた。

「……………うよ、鎌倉」

「えっ？なんて言ったの？」

俺は少し恥ずかしいと感じている。

くく梨子 sideくく

あれから、1週間後が経った。

今日は、遼くんと鎌倉に行く日。

本当は今日もいつも通りに千歌ちゃんたちと練習する日なんだけれど、今日はサボっちゃった♡

梨子『ごめん千歌ちゃん。今日、ちよつと用事が出来ちゃったから練習に行けないかも……』

千歌『ええ!?!そんなあ……!』

朝方、千歌ちゃんとLINEでやり取りを交わしたら悲しみにくれた言葉を返されてしまった。

本当にごめんね千歌ちゃん。

！
いつしか千歌ちゃんたちの言うことに、ちゃんと付き合っ
てあげようと思ってるから

「ふうっ、よしっ！」

だけど同時に、本当に今しかないと思ったから。

人生は一度きりだし、行きたいと思ってるところには絶対行きたいと思ってる。

あの場に遼くんが来てくれなかったら、私はこうしてワクワクしながら沼津駅に向かうことなんてなかった。それにそもそも、鎌倉にすら行けなかったかもしれない。

だから素直に、遼くんに『ありがとう』って言いたい。でも今は、まだ言わないでいた方がいいかも。それは、また後にとっておこうと思った。

「お〜い梨子！ここだ〜！」

「あっ、おはよう〜！」

バスで沼津駅まで乗り、バスから降りれば沼津駅には先に遼くんがいた。腕組みをして壁に寄りかかり、私のことを待っていてくれていた。

私がバス停から走って近くまで寄り、遼くんと挨拶を交わす。すると彼は、私に対して素っ気ないことを質問してきた。

「ちやんと眠れたか？」

「ふふっ♪ええ、もちろん！」

きつと、私のことを心配しての質問だと考えた私は、元気よく彼に眠れたことを話す。そして彼は、安心したような表情を見せた。

「良かった。行きたいって言ってた人物が寝不足でぶっ倒れたらたまつたもんじゃないからな……」

「何それ？私に対しての嫌味？」

「全然。ただの独り言さ……」

ふと笑みをこぼしつつ、遼くんはそう呟く。

彼は、私を心配してその言葉を言ってくれたのかもしれないけど、少し嫌味っぽく聞こえてしまったのは気のせいなのかな？もしかして、そう思ってるのって私だけ……？

「んじや、早速電車で鎌倉へ出発すつか！」

「えっ!? ちよ、ちよつと遼く〜ん！」

それで私は半ば置いてけぼりにされて、遼くんは電車の切符を買おうと券売機へ向かう。

この日のために、私は事前に電車の料金を調べたの。そしたら沼津から鎌倉まで、2回の乗り換えもあつて片道だけで1,500円もするらしいの。

私が東京いた時に、東京から少し離れた場所に行く時にはそんなに料金はかからなかったのに、地方の電車の料金はとても高かった。

「切符は買えた？」

「買えたよっ! でも、東京と違ってお金がたくさんかかるのには正直驚いたわ」

「まあ、それが田舎の宿命よ……」

「田舎の宿命」と、東京での料金を羨むようにして命名し、私にそう告げてくる遼くん。

沼津から鎌倉までの往復切符を買った彼は、往路の切符を右手に持ち、復路の切符は無くさないように自分の財布の中へしまう。

往復でかかる料金は約3,000円。

出費のダメージは意外に大きかった。

『まもなく3番線に、電車が到着します。危ないので、黄色い線より下がって、お待ちください』

するとちょうど、電車が到着しますというアナウンスが駅構内に流れる。

それを耳にした遼くんは、私に言う。

「そろそろ電車も来るみたいだ。じゃあ行こうか」

「ええ！行きましょ！」

私はそれに答えて、鎌倉へと向かう足となる電車に乗り込み、遼くんと2人で鎌倉に向かう。

目的地の鎌倉駅に向かうまでには、なんと2回も電車を乗り換える必要がある。で

も、私と遼くんはそれを気にすることもなく、お隣同士で席に座っては、互いに話に花を咲かせていた。

「へえ、梨子つてサンドイッチが好きなんだ」

「そうなの！でも、意外だった？」

「ううん。俺は人の好きなものを別に貶したりなんかしないよ。逆に言えば、人の好きな物事を貶して何が楽しいんだか知りたいくらいだ……」

お互いに趣味とか、好きな物や嫌いな物。休日の時には何をして過ごしているのかと、何気ないことを遼くんと話し合っていた。

実はね、今日私はあることを企てているの。

「ねえ、遼くん？」

「んっ？次はなんの話だい？」

フフツ、それはね……？

「何だよそれ。全く千歌のやつ……」

「そうなの。本当変な人よね……」

元々東京からやつてきた子だから、服というか、彼女のファッションがとにかくすごい。

薄い水色を基調に、花柄が散りばめられたワンピース。その上に紺色のすらつとしたカーデイガンを羽織り、太ももから足にかけて露出させては、靴は真っ白のハイヒールだ。

比べてはいけないけど、この間の曜の私服を比べたら、真っ先に梨子の私服には『可愛い、綺麗』って言える自信がある。

それくらい、彼女には神々しさがあつた。

「今日の梨子の服、すごく綺麗だね」

「えっ？そ、そう……？」

「うん。女の子らしさの中にある、華やかさっていうのかな？俺、あんまりファッションとか全然詳しくはないけど、今着ている梨子の服は、俺はすごく似合ってるの思うぞ？」

話の一区切りの後に、俺は梨子の私服で思った事をそのまま彼女に告げた。

思ったことを自分の思いのまま彼女に伝えたら、彼女は嬉しくて顔を真っ赤し、赤面を浮かべながら俺に一つお礼を話してきた。

「嬉しい。頑張つて選んできた甲斐があつたかも。ありがとう遼くん！」

「いや、別にお礼されるほど何も言つてないと思うけど、有り難くお礼は受け取るよ」

赤面し、恥ずかしい気持ちでややはにかんだ笑顔を見せながらお礼を言ってくる梨子に、俺は致し方なく、そのお礼を胸に刻む。

すると梨子は、俺に自分のことを話してきた。

「実は私ね、あまり男の人とあまり話す機会もなくて、正直に今日はとても不安だったの……」

「えっ？不安、だったの？」

「うん……」

その話の内容は、俺にとつては意外なこと。

綺麗で美人で、誰とでも隔てなく話せそうな梨子が、そんな事を呟くなんて思つてもいなかった。

最初に出会った時は少し萎縮しているように見えたけれど、それ以後は普通に話せるようになって、だから俺は、最初だけ少し用心深い人なのかなって思つてた。

でもそれは大きな間違い。改めて人の性格を勝手に決めつけてはいけなさと感じた。俺みたいな男と話す機会がなくて、今日をととても不安に感じている梨子。

正直、俺はびっくりしている。

でも、俺はその不安を掻き消せる自信がある。

簡単にそう言える理由は、たった一つ。

それは、今日を目一杯楽しむことだ。

「でも梨子、そんな心配はいらない」

「へっ? どうして?」

「ていうか逆に、そんな不安なままで鎌倉に行つたつて、それで楽しもうなんてダメだよ」

ひとまず俺は、そんな不安に駆られている梨子に言葉を投げかけ励ます。梨子がそんなに不安なままで、一緒に鎌倉を探検するのはちよつと嫌だ。

だから、出来るだけ楽しく、たくさんの思い出を作つて帰りたい。俺にはまだ梨子のことを知らないところが多いからさ。

「今日は2人つきりだ。思いつきり楽しもうぜ」

「ふ、2人つきり!？」

「何だよ？顔を茹でタコみたいにして……」

「な、何でもないわよ!」

さつきよりも顔を赤くする梨子には、どうして『2人つきり』に敏感なのか不思議でならない。

梨子にとつて、その単語に何か深い事情でもあるのかは知らないけど、なんかあるんじゃないかなつて思っている。

それで俺は、梨子にあることを尋ねる。

「あつ、そういえば……」

「今度はなによ？」

「鎌倉で行きたい所、ちゃんと計画できた？」

「あつ、うん。それは大丈夫よ」

それは、今日の予定についてだ。

実は、俺が梨子に観光ガイドブックを買ったあとの話だ。あ後の話で、梨子自身がこの日の予定を決めると自分からそう宣言したのだ。

それを、俺は今聞こうとしている。

俺の質問に梨子は、自分のカバンから俺が買った観光ガイドブックを取り出す。

本にはいくつかピンク色の付箋が貼られていて、その付箋が貼られているページに載っているところに梨子が行きたいんだなって思った。

「私が最初に行きたいのは、ここ！」

「ほほう、鶴岡八幡宮か」

梨子が最初に指差したのは、鎌倉に来たら誰もが行く場所である『鶴岡八幡宮』とい

う神社。

それは、鎌倉の中心に建っている。

1063年、源頼義が京都の石清水八幡宮を由比ヶ浜辺に祀ったのが始まりで、それから後、鎌倉幕府を源頼朝が開いた際、現在の鎌倉に移動した。

鎌倉でNo. 1の観光スポットを最初に選んだ梨子だ。是非とも訪れてみたかったんだろう。

実は俺も一度は鶴岡八幡宮に行つてみたかったところだ。だから最初に行くところは、鎌倉でNo. 1の観光スポットで決まりだな。

「じゃあ、最初はそこで決まりだな！」

「うん！はあ、楽しみ〜！」

「ははっ！さつきからそればつかだなあ〜！」

「もう！別に楽しみにしたっていいじゃない！」

鎌倉の鶴岡八幡宮を間近に見られることに浮かれている梨子。俺はその浮かれようを指摘すると、彼女は膨れっ面で激おこぶんぶん丸になった。

でも、すぐにそれも治まったけどね。

「まつ、今日は1日、楽しむこととするか！」

「ほら、遼くんだって私と同じじゃない」

「そうだとしても、梨子よりは負けるけどな……」

「うふふつ。まあ、そうかもしれないわね」

「あはははっ!!」

電車の中で、俺たちは笑った。

お互いにおかしな話だと思いつながら、俺は大胆に、梨子は右手で口を少し隠すようにして、俺たちは笑いあった。

それから俺と梨子は。しばらくの間は電車に揺れに揺られながら車窓を眺め、鎌倉に着くまでの間のひと時を過ごした。

2度の乗り換えもあるけど、今のところ何の問題もなさそうだから大丈夫そうだ。

鎌倉、楽しみだなあ。

#35 梨子と鎌倉 中編

2回もの電車を乗り換え、特に何も問題なく俺と梨子は、無事に鎌倉に着くことが出来た。

「うわあ〜！大きい！」

「これが三の鳥居ってやつか。壮大だな」

初めてやって来た鎌倉に着き、早速俺たちは最初の目的地である鶴岡八幡宮へとやって来ていた。

目の前に聳え立つ三の鳥居の壮大さに、俺も梨子もそれに圧倒されていた。

「ここをくぐれば、中に入れるのね」

「ああ。きつとそうだろう」

鎌倉駅からここに至るまでには、若宮大路という参道を徒歩で10分歩いてきた。

若宮大路は、源頼朝が妻である北条政子の安産を祈願して作らせた鶴岡八幡宮の参道。鶴岡八幡宮から由比ヶ浜までを一直線に結んでいて、鎌倉の中心となる道でもある。

その道沿いには177本の桜が立ち並び、桜が咲く春に来ると良いと言われているらしく、日本の桜名所100に選ばれる程の人気桜スポットらしい。

今は清々しい緑が生い茂る木となつてはいるが、名所と言われればまた来てみたいと思わせられる。

その、桜が咲く春頃にね……。

「それじゃあ、早速行きましょう！」

「そうだな。ゆつくり見ていこう」

そうして2人は、境内へと入っていく。

三の鳥居をくぐり、鶴岡八幡宮の本宮へと歩を進めようと太鼓橋（赤橋）を渡つて

いると、太鼓橋のその両側に大きな池が広がっていた。

太鼓橋の左側には平家池があり、右側には源氏池がある。歴史の授業で聞いたことがある2つの家系にちなんだ名前が、池に付けられていた。

「見て遼くん！おつきな池がある！」

「ああ。源氏池と平家池だな。もともとの池は、昔は田んぼだったらしいよ」

「ええっ!?こんな池が、昔は田んぼ？」

「うん。少し前に調べたんだ」

梨子は俺の話に驚きを隠せない。でもそれは俺も同じで、調べた同時は本当に驚いた。
さ。

その田んぼになっていたその頃は、『弦巻田』という苗を渦巻きのように植える齋田のことを指していて、当時の田んぼはそういう苗の植え方があったことに俺は驚いている。

でもそれは、源頼朝の命によって池に変えられ、跡形もなく消えてしまった。

なんともまあ、不思議な話よ。

「そんなことがあったのね……」

「でも、それが本当かどうかは俺には分からない。あくまで、ことの『云い伝え』ってことでパソコンに載ってたから……」

ただパソコンには、『〜と云い伝えられている』というよくある最後の綴りがあった。だから本当の事は、当時に生きていた人たちしか分からないわけなので、真実に關しては不明なのだ。

それから俺は、梨子を正面にして話をする。

「それで、梨子の念願だった鶴岡八幡宮に来たわけだけれど、その後はどうするんだ？」
「あ、うん。ちゃんと計画は立ててるよ」

念願の鶴岡八幡宮に来たわけだが、電車の中では鶴岡八幡宮に行くとしか話はしていなかった。

だから今のうち、今日の予定の流れを知っておく必要があった。それで俺は、梨子へそんなことを質問したのだ。

野暮ではあるが、質問をして損はない。

そして梨子は、今日の予定を話してくれた。

「えっと、鶴岡八幡宮を見たあとはお昼を食べて、それから円覚寺っていう神社と由比ヶ浜に行きたいなって私は考えてるの」

「円覚寺に、由比ヶ浜か……」

円覚寺に行くならば、一度鎌倉駅から北鎌倉駅へ電車で移動した方がいい。そうすれば円覚寺はすぐ目と鼻の先にあるから、その方法がいいと思う。

由比ヶ浜は、鶴岡八幡宮から一直線に行くことができる。だけど梨子が考えてそのようなことは、夕方に由比ヶ浜を訪れるということだ。

夕方の由比ヶ浜は『綺麗だ、素敵だ』など、パソコンで調べた時に、夕方の由比ヶ浜を絶賛する声が多く見られた。

そんな中で梨子も、それを見たいんだらうなって俺は考えてる。俺も別に嫌じゃないしな……。

「今日は、あとその2つに行きたいんだな？」

「うん！私、その2つに行ってみたい！」

俺は彼女にそう質問すれば、彼女は満面の笑みでそう答える。

彼女の笑顔はそれはもう女神のような笑顔。

ものすごく眩しく、逆に彼女が眩しすぎて梨子の顔が見れないくらいだった。

「遼くん? どうしたの?」

「ううん、なんでもない……」

危うくそれを彼女にバレてしまいそうだったが、なんとか表情だったり言葉で誤魔化す事は出来た。

だからこれからは出来るだけ、あまりそういう事で意識しない方がいいと思ってる。じゃないと、俺の身体も心も悪い意味で長く保つことが出来ないかもしれないから……。

「じゃあそういうことなら、今はここ鶴岡八幡宮をゆっくり見て行ていこうよ。時間も勿体無い!」

「うん! そうだね!」

ひとまず、こんなことを考えるのは止める。今日は一日楽しむために、梨子と鎌倉に来たんだ。

頭の中からそんなものを綺麗さっぱり忘れて、梨子と楽しい思い出を残そうと思う。

ここに來ること自体、絶好の機会だからね。

「んじゃ、行きますかー！」

「ええー！行きますよー！」

そしてそれから俺と梨子は、鶴岡八幡宮の本宮へと歩み始めた。

そういうえばよくよく考えたら、鶴岡八幡宮のあとに昼飯を食べるって梨子が言っていたよな？

今、午前10時を回ったところなんだが……。

えっ、いや、まさか、ここに2時間もずっといるわけないよね？

ねっ、ねえ……？梨子さん？

回っていた。

梨子に少し振り回されるようにして、境内の中にある多くの寺院を見て回った。

源氏池に浮かぶ一番大きい中島に建てられている『旗上弁財天社』や、境内の東側に位置して建っている『白旗神社』、そして本宮前に建つ『舞殿』を含め、計8カ所の寺院を梨子と見て行つた。

そのせいで俺は身体の疲れを感じていた。だけどそれよりも、境内にこんなにも寺院が建っていた事には驚きだった。

ガイドブックには鶴岡八幡宮の本宮と、その前に建つ舞殿のことしか本には載っていなかったから、俺はその時とても驚いていた。

「やっぱり休日だから、人もいっぱいね」

「仕方ないさ。観光スポットでNo. 1だからね」

それで俺と梨子が今いる場所は、本宮前の階段。

本宮前に鎮座して建っている『舞殿』を背にしていた俺と梨子は、本宮へと繋がる階段を前にして、ドドンつと佇んでいた。

でも同時に、休日を満喫するため俺たちと同じようにここ鶴岡八幡宮を訪れる人も多

かった。

やはり、鎌倉の観光スポットNo. 1という肩書きは伊達じゃないと、俺はすぐに感じる事が出来た。

「少し人も多いけど、行くか?」

「うん。これくらい慣れてるから大丈夫」

「そっか。じゃあ行こうか」

目の前にいる多くの観光客に顔一つ変えない梨子も、やっぱり東京という大都会で人混みには慣れてるんだなと感じられる。

俺や曜が横浜に行った時なんかは、特に曜が苦しそうだった。人混みに慣れていない俺や曜にとっては、梨子はただ単に凄いと思った。

「ねえ、遼くん」

「んっ? どうしたんだ?」

そう思っていた矢先、梨子に話しかけられる。

階段を上り始めて、8段目を登ったところでだ。

すると彼女は、何か少しそわそわしていた。

唐突に彼女から話しかけられたから少しびっくりした俺だけど、俺は冷静になって彼女に質問を投げかけると、梨子は人目を気にしてキョロキョロ視線を振り、俺にとあるお願いをしてきた。

「だけど、俺が思っていたそのお願いというのが、まさか『それ』だとは考えられなかった。」

「あのねっ！別にその……、遼くんが良かったらでいいと思ってる、けど……」
「けど……？」

最初は梨子が何を言っているのかさっぱり分からなかった。顔を下に俯かせ、俺がちゃんと聞き取れるか聞き取れないくらいの大きさで話していた。

だから俺はもつと梨子の近くで聞こうと自分の身を少し寄せたら、彼女は俺に『それを言い放った。』

その言葉は、俺にとって衝撃的だった。

「その、遠くんと、手を、繋ぎたい……かな？」
「……………えっ!？」

衝撃的過ぎて、俺は梨子が発した言葉を理解するのに5秒間もの時間がかかった。

『手を繋ぎたい』

梨子からのそんな要望に、俺の思考が追いつかず頭が少し混乱している。

いや、ほら、東京から内浦に引っ越してきてさ、まだ出会って3ヶ月と少ししか経っていない女の子から突然、『手を繋ぎたい』って言われてみる？

その時どう思う？

俺と同じようにびっくりするはずだ。

「べ、別に私の言うことに付き合わなくていいの!ただ、人も多いから逸れたらなって、その……」

そしたら梨子は、俺にそんな事を話してくる。

両手を自分の前で左右にブンブンと降って、俺に迷惑はかけられないと思っただろう。

けど、それを見たら逆に申し訳ないよな？

ギョツ！

俺は何も言わず、梨子の左手をギョツと掴んだ。

彼女より少し大きい自分の右手を使って、絶対に彼女と逸れないようにそつと優しく握る。

彼女は必然として驚きの声を上げると、俺に自分の左手を優しく握られたことに對して、顔をさらに真っ赤に染め上げていた。

「えっ!?!りよ、遼くん!?!」

「何も言わないでくれ。俺は大丈夫だから……」

そんな梨子に、俺はそう告げる。

正直に言ってしまうと、俺も少し恥ずかしい。

彼女にそれを悟られないよう顔をそっぽ向かせているけれども、彼女には全く効果はなく、俺がした行動の意味がすぐにバレてしまった。

「もしかして、手を繋ぎたかったの?」

「なっ!?!ち、ちち、違うから!」

こういうところ、我ながら全然素直じゃない。

彼女と手を繋ぎたくなかったと言われれば、それは全く以って嘘になる。

ただ、俺は梨子と手を繋ぎたかった。

まあ……それだけである。

「ほ、ほら!階段を登りきったらあと少しで本宮だから、さっさとお参りしに行こうぜ!」

「えっ、あ……うんっ……」

ちゃんと言えがいいのに、馬鹿だな俺……。

それから俺と梨子は本宮に辿り着き、2人で5円玉を1枚ずつ入れてお参りをする。

サツ、サツ、パンツパンツ！

2礼して、2拍手。お参りをする上で、それをきつちりこなした俺と梨子は神様にお願いをする。

彼女がどんなお願いをしているのか、俺はそれが少し気になってはいる。けどそれよりも先に、自分のお願いに集中した俺である。

どんなお願いをしたのかって？

それはたった1つだけ。新年になってすぐに始まる、高校サッカーの夢の舞台、『全国高校サッカー選手権大会』における、全国大会での「優勝」。

努力をして、その大会で勝ち続けられたもののみ得られる称号を、俺は手にしたい。でもそのためには、これからの部活でもっと努力をしないといけないけどね……。

あっ、その前にインターハイも頑張らないと！

インターハイも全国に出られるわけだし、それもちやんと頑張らないと……！

「お願い、終わった？」

「うん」

「じゃあそろそろお昼にしよっか。俺もお腹すいてきちやっだし、梨子もそうなんじゃないか？」

ギョルルル〜！

「ふふつ。ええ、もちろんよ！」

梨子にお昼の話を持ちかけた瞬間、梨子の腹の虫が俺の耳にしつかり聞こえるくらいに鳴り響く。

梨子はその音を聞かせてしまったことを恥ずかしいと思いつつも、彼女は笑顔を見せ、俺の質問にそう答えた。

彼女もお腹は空いているみたいだから、早いとここから撤収しないと……。そんな事を考えていた矢先だった。

「遼くん！」

「んっ？えっ……？！」

梨子は突然、後ろから俺の右手をギュツと両手で握ってくると、それに驚いて振り向いた俺をじっと見つめてくる。まるで梨子が子犬にでもなったかのように、そのつづらな瞳が俺を見つめてきたのだ。

どういった意味で俺の手を握ってきたのか俺には分かるはずもなく、でも何故か、俺は彼女に対して理由を聞くことができなかつた。

すると次の瞬間、彼女は俺の目の前に回り込んでくると、俺を正面にして笑顔で言い放ってきた。

「じゃあ、行こうっ！」

「えっ!? あっ、お……おう……」

それは、あまりにも俺にとって不意打ちになってしまい、俺は彼女のとびつきりな笑顔に顔を真っ赤に染め上げてしまう。

目も彼女の目に合わせられないくらい、俺は恥ずかしくて仕方なかつた。

「ほら遼くん! そんなにぼーっとしてると、私置いてっちゃうよ〜!」

「あっ、梨子! そ、そんなに引つ張るなよ!」

それから彼女に手をグイグイ引っ張られ、そして俺はしばらくの間、彼女に対し話しかける勇氣すら出てこなかった。

それと同時に、どうして後ろから手を握り、目の前に回り込んで俺に笑顔を見せたのか？

俺はそれに不思議に思っているとともに、あの時にちゃんと理由を聞いておけば良かったなど、俺はしばらくの間、ずっと後悔するのであった。

#36 梨子と鎌倉 後編

「んんんっ！美味しい！」

「んっ。そうだな……」

口にフレンチトーストを頬張りながら、梨子の話にウンウンと首を縦に振って頷く。
鶴岡八幡宮を後にした俺と梨子は、ランチを取るため梨子の案内でとあるお店に訪れていた。

そこは『BRUNCH KITCHEN』というお店。

鎌倉駅から鶴岡八幡宮へ歩いてきた若宮大路から外れ、小さい小道を真っ直ぐ進んで行くと見える、小さな一軒家のレストラン。

店には暖炉とテラスがあり、ゆったりとくつろげるスペースもある。そして何より、このレストランは2つの“顔”をもつレストランでもある。

そう、この店はカフェ&レストラン。

午後5時の夕方から、カフェだったお店が高級感溢れるレストランへと早変わりする。

こだわりある食材を使って、お客さんに提供する様はどこか高級レストランのようだって、梨子が今持っているガイドブックにそう書いてあった。

それより前に説明したこともガイドブックに載っていたわけだから、俺をすごい物知りだなんて思わないでほしい。

「ねえ遼くん。遼くんが頼んでた、その“サーモンのグリル”って、美味しい?」

「これ? ああ、すごく美味しいよ!」

あれから俺は、少し気持ちを切り替えた。

鶴岡八幡宮を出るまでは、俺は顔を真っ赤にしている彼女を意識し過ぎていた。

でもそれは、逆に彼女に対して失礼だと思った。せつかく今日は2人で鎌倉に来たわけだし、今日のような大切な時間を、俺は大事にしたい。

だから気持ちは、一度自分の中でリセットした。

梨子と心の底から楽しめるよう、このお昼時から優しく接したり、彼女とこの機会にまたいろんな話をしたりと、彼女との親睦を深めようと思う。

でないとい今日は、俺にとって多少の「消化不良」になると思っているからさ……。

そんな事態になる可能性を俺は考えていたら、俺が食べている「サーモン」のグリルをじつと見つめていた梨子が、俺にお願いをしてきた。

「それなら、それを私に一口……頂戴？」

「えっ？一口……？」

「うん。遼くんがそのサーモンを食べてるのを見てたら、私も食べてみたくて……」

右頬を人差し指で掻きながら、梨子は申し訳なさそうに聞いてくる。けど、その梨子の困った表情が俺はとても可愛いと感じた。

俺が実際に食べているものは、フワツとしているホイップクリームが乗ったフレンチトーストが2枚と、梨子が食べたがっているサーモンのグリルに、スクランブルエッグの3品だ。

因みにスクランブルエッグは、目玉焼きとどちらかを選べられるので好みに分かれる

けれども、これでお値段は1,600円。なので高いか安いかと考えるのはあなた次第……かな？

とりあえず俺は、彼女に一切れをあげる。

凄く食いた気な表情をして俺を見つめている梨子を見ると、あげたくなくても、なんかあげたくなっちゃうんだよね。

「……いいよ。一口だけな？」

「えっ!?!いいの!?!」

「今回だけ特別だからな？」

「やった!」

愛くるし過ぎる。人懐っこい犬のようだ……。

それから俺は、自分が食べているサーモングリルにナイフを入れる。フォークで抑え、梨子が食べやすいサイズに切り分けた後、俺はフォークでサーモンを刺し、それを梨子に差しむける。

それはまるで、カップルなどがよくやっている『あくん』って食べさせるヤツだった。俺が梨子に対して、今そういう状況になっている。

いいや、正しくは、そういう状況に “している” と考えた方がいいかも。
梨子の反応が、少し面白いからさ。

「ほい、サーモンのグリル。 “あゝん” して？」

「ええ!?!りよ…遼くん!?!」

「何だよ? いらなののか?」

「も、もう……!」

梨子は当然、俺の行動にびっくりしていた。

俺からそんなことをされるなんて思ってもいなかったのか、彼女は何を想像したのか分らないけれど、顔を真っ赤に染め上げていた。

だけど彼女は、自分が食べたがっているサーモンのグリルを俺からくれるわけだから、右手で垂れる髪を耳に掻き上げ、差し向けられたサーモンを一口でパクリと食べる。彼女が髪を掻き上げて食べる瞬間が、俺にとつとてもエロいと感じたことは言うまでもない。

「どう? 美味しいか?」

「……………」

口を左手で軽く抑え、あげたサーモンのグリルをモグモグと行儀良く食べている梨子に俺は尋ねる。

その数秒後にそれを飲み込んだ彼女は、食べてみての感想を一言で言い表す。

「……最高に美味しい……♪」

「んっ、そっか……！」

『美味しい』というその一言と共に、梨子は笑顔を浮かべている。

その笑顔を見つめていた俺も、どういうわけか、その笑顔に不思議と幸せな気分になつていた。

そんな気分になる原因は分からないけれど、多分きつとそれは、さつき俺が飲んでた熱いカフェオレのせいだ。

……って、一体何を言ってるんだ俺は……。

「んじゃ、さつきとお昼食べて、梨子が次に行きたがつてる『円覚寺』にでも見に行きま

すか！」

「うん！そうね！」

次に向かうのは、『円覚寺』という寺院だ。

円覚寺は、北鎌倉駅を降りてすぐ目の前に佇み、鎌倉五山第二位の寺院。そして何より、鎌倉で唯一の国宝建造物だそうだ。

どんな建物なのか、これから見ものである。

~~~~~※※※~~~~~

円覚寺までの道のりは、そこまで遠くはない。

鎌倉駅から電車で移動して、隣の駅の北鎌倉駅を降りるとすぐに円覚寺は存在する。

「これが、円覚寺の総門か」

「ここをくぐれば、境内に入るってこと？」

「ああ。きつとそうだろうな……」

その前に俺と梨子を出迎えてくれたのは、円覚寺の入り口である「総門」。鶴岡八幡宮の三の鳥居より大きいと言えないが、「総門」とだけあつて、雰囲気は異様。でも、俺や梨子などの参拝客を迎え入れてくれているようにも思えて、2人はゆつくり境内に足を踏み入れる。

「んじゃ、ゆつくり行こう」

「うん……」

「ここでも彼女は、俺と手を繋ぎたいとすっかり求めてくるようになった。」

なにも言わず、自分の左手で俺の右手をギユツと握ってくるあたり、彼女の中で、俺の立ち位置でも変わったのだろうか？

いや、それは今考えないでおこう。

「ここが……山門ってやつなのか？」

「うわあ！山門って、すごい造りをしてるのね！」

総門をくぐって境内の中を進んで行くと、すぐにまた別の門が俺たちの目の前に現れる。

その門は総門より大きく、2階建てだ。だが1階は丸太で柱だけの質素な造りで、2階は豪華と言っても過言ではないくらいの造りだった。

その門の名は、『山門』（さんもん）という。

「こういう建物を見ると、機械も何もなかった時代で建物を建てた人って偉大だよな」

「うん！みんなで力を合わせてきたから、こうして今の時代にも残っていて、たくさんの人に来てもらえるくらいの観光地になった。本当、不思議よね」

梨子はこの山門を見て、同時にそんな事を呟く。

歴史のある建物が今も残り続けていることに感銘を受け、梨子が述べていた言葉の数々には俺も同じ思いだった。

機械もなく、人の力だけで作り上げた建物だからこそ歴史に残り、今尚も語り継がれている。

昔に建てられたものがこうしてこの場所に残っているのも不思議ではある。だけど鎌倉に今あるたくさんの寺院が残っていないなかったら、きつと、ここが観光名所になんてならなかった。単なる只の鎌倉という街だけしか残らなかつたかもしれない。

そういう意味ではこうして残っている事が不思議に思つて、それが偶然なのか必然なのかは、俺には全然分らない。

でもその建物があるからこそ、俺は梨子とここに來れたわけで、俺は良かったと心から思つてる。

「でも、良かったじゃん」

「えっ? どういうこと?」

「鎌倉にこういう建物がなかつたら、俺と梨子がこうしてやってくるのがなかつたわ

けで、俺は梨子とここに来て良かったと思ってるぞ」  
「ええ!?!な、何よいきなり!?!」

そのことを梨子に直接伝えると、梨子は何故か顔を真っ赤にして俺から数メートル後ろに後ずさる。

それで彼女は後ずさってそんなことを聞いてくるものだから、俺は彼女に尋ねるよう  
に話す。

「何って。俺は思うことを言っただぞ?」

「でも遼くん。そんなこと、平然と私に真顔でそう言わないでよ……」

梨子はそう言うと、恥ずかしそうに視線を外し、彼女からそっぽを向かれてしまった。  
俺、梨子に何か変なこと言っただか?

それから俺と梨子は、トボトボと山門をくぐって歩いていくと、目の前に円覚寺の本  
殿とも言える『仏殿』が姿を現す。

『仏殿』は、円覚寺のご本尊が祀られている建物だから、ここでも俺たちはお参りをす  
る。5円玉をお賽銭箱の中に投げ入れ、2礼2拍してからそれぞれお願い事をしてい



た。

インターハイ全国優勝！

インターハイ全国優勝！！

インターハイ全国優勝!!!

鶴岡八幡宮では、俺は冬の選手権のことをお願いしていたけど、円覚寺では同じお願いはせず、夏に出る『全国高等学校総合体育大会（インターハイ）』のことを俺はお願いした。

まああれだ、〃優勝祈願〃ってやつだ。

大会前にこんな事をするのがあまりなくて、逆にしたらすぐ負けるんじゃないかって思ってるけど、全国の舞台だし、後悔はしたくないからさ。やれることは、全部やつておきたいんだ。

『インターハイ全国優勝！』というお願いを10秒行なって、俺はふと隣の梨子を見る。

「……………」

すると彼女はまだ目を瞑り、手を合わせてお願いをしていた。綺麗な横顔だったから、思わず俺の胸がドキツと高鳴っていたのは秘密だ。

それで八幡宮でもそうだったけど、彼女がどんなお願いをしているのかとても気になつていた俺は、梨子が終わるまで隣で待っていた。

「……あつ、ごめんね？待たせちゃった？」

「ううん、待ってないから大丈夫だよ」

そしたら思いの外すぐに終わり、そんなやり取りをして少し間を置いてから、俺は彼女に尋ねる。

尋ね方としては、少しさりげなく尋ねた。

「それで？どんなお願いをしてたの？」

「えっ？さ、さっきの？」

「そう。随分と長くお願いしてるもんだから、どんなお願いしてるのか気になつてさ……」

仏殿で立ち話をするのもあれだから、俺が尋ねたことは梨子と歩きながら話をする。

「聞きたい……?」

「えっ?それはどういう……」

「私があそこでどんなお願いをしていたのか、遼くんは聞きたいの?」

そしたら、逆に梨子から尋ねられる。

俺の右隣から、正面に向き直って立ってきた彼女は、どこか優しい笑顔を浮かべながら、俺にそんな風に尋ねてきたのだ。

もちろんそんな感じに尋ねられると、逆にどんなお願いをしたのか気になって仕方がなかった。

「あ、ああ。是非とも聞きたいな……」

「ういふふ……♪」

俺はしっかりとその答えを聞きたいと、ちゃんと意志を持って彼女に答える。

すると彼女はそんな悪戯っぽい笑みを浮かべると、俺に対して背中を向けて2〜3歩歩き、顔だけをこつちに振り向かせる。

やっと事を話してくれるとそう思っていた俺だったが、彼女は何にも話してくれなかった。

「教えな〜い♪」

「なっ!?!何でだよ!?!」

「だって教えたくないんだもん!」

「はあ〜!?!」

俺に対して『教えたくない』と、お茶を濁すように話をはぐらかす桜内 梨子。

どうしても教えてくれないと分かった俺は、彼女にはこの手を使いたくはなかった。でも仕方ないと思つて、俺は力づくで彼女の口から聞いてやろうと思つた。

俺もある程度、梨子がどんなお願いをしていたのか予想は考えていた。けど、やっぱり本人の口からそれを聞きたい。

そんな思いに俺は、彼女との空いた距離を一気に縮め、彼女を背後から抱きつき真意に迫つた。

「きやつ！」

「何だよ！教えてくれたつていいじゃんか！」

「いゝや！教えたくないゝ！」

端から見れば、ただのカップルのイチヤイチヤにしか見えないだろう。でもそんな意味でやったわけじゃないし、そういうのを狙って俺が梨子に対してしているわけでもない。

あくまで、彼女が仏殿で願ったことを聞きたかった所以の行動だ。決して、深い意味はないのだ。

「観念しろ！そして全てを吐き出せ！」

「いやっ！絶対に教えたくないんだからゝ！」

そして俺は彼女に色々と迫った。だけど、梨子は最後まで俺の問いをはぐらかし続け、結局のところは、何にも話してはくれなかった。

俺はもう仕方なく、彼女に問い続けるといつしか頬にピンタを食らいそうだったか



夕方、時刻は4時を回る。

俺と梨子が円覚寺をあとにして最後にやってきたところは、『海に行くならここ！』つて言う人たちも多いであろう観光地、『由比ヶ浜海水浴場』

美しい砂浜に約900mも続く海岸、そして遠浅の綺麗な海が特徴の海水浴場。

毎年の夏は多くの観光客で賑わい、ロマンチックな雰囲気のある海岸は、有名なドラマや映画のロケ地として使われることが多く、あまり説明しなくても知っている人も多いはずだ。

「うわあ〜！綺麗〜！」

空はすっかり青色から朱色に染まり、夕日が海をオレンジ色に輝かせていた。

その景色を見た梨子は感動の声をあげる。

「ねえ遼くん！綺麗だね〜！」

「ああ。すごく綺麗だと思う」

俺も梨子から声をかけられる以前から、この由比ヶ浜の海岸は綺麗だと思っていた。

まだ海開きにもなっていないのに関わらず、ゴミは全く見受けられない。ましてや真つ白な海の砂浜は、夕日の直射日光でキラキラと輝いていた。

すると梨子は、俺に話をしてくる。

「ねえ遼くん。今日はありがとう」

「えっ？何だよ突然……」

俺は、彼女の言葉にびっくりする。

彼女はいきなりの突然、俺に対してなんとお礼を言ってきたのだ。

そんなことを言うもんだから、どうしてそんな事を今ここで言うんだろうと彼女に尋ねる。

そしたら彼女は、こんな事を口にしてくる。

「だって、今日は遼くんはおかげだもん……」

「はっ？俺の……おかげだと？」

俺にとっては、とても変な言葉だった。



どうして今日を『俺のおかげ』と理由付けるのかと、俺は不思議で頭がいっぱいになった。

でもすぐに梨子は、その理由を話してくれた。

「そう。1週間前、あのときの書店で遼くんが私に『一緒に行こうよ!』って言わなかったら、私たちは今、ここにはいなかった……」

「あの時のことか……」

梨子が理由に挙げた話というのは、1週間前に書店で俺が告げた『一緒に行こうよ、鎌倉!』という言葉だった。

彼女のその言葉を聞いたときは、あの一言が今の俺たちを左右していたと考えられる。そして何よりも俺は、あの言葉があったからお礼を言われたんだと初めて認識し、それで今、彼女からお礼を言われたんだと理解することが出来た。

「まさか、梨子からお礼を言われるなんて……」

「なに?びつくりした?」

「まあ、ね。正直驚いてるよ」

「だけど俺はただ、あの時すごく残念そうな表情をしていた梨子の願いを叶えてあげただけで、お礼を言われるまでだとは思わなかったが、彼女のお礼はしつかり受け止めるつもりだ。」

「じゃないと彼女に対して失礼だし、俺だつてそうしないと気が済まないから。すると、梨子は驚きの言葉を言ってきた。」

「私ね、今回行けなかった観光地、また来たら見に行きたいなつて思つてるの。」

「えっ? また来ようと思つてるの?」

「うん。もちろん、また遼くんと2人で……」

「えっ?! えくつと……」

「彼女はまた鎌倉に来たいと思つているらしくて、そして俺とまた2人でと考えてるみたい。」

「梨子はモジモジと恥ずかしそうに身体をくねらせたり、俺をチラチラと見て来るあたり、俺の答えをものすごく待つている様子だった。」

「そんな風に梨子から言われたり、恥ずかしそうにして俺の答えを待つている姿を見る」

と、俺からしてみれば、それを断る選択肢はなさそうだった。

でも、また梨子と鎌倉に来れるという新しい楽しみが増えたから、俺の中では、あまりネガティブな思考にはならなかった。

「いいよ。また、鎌倉に来よう！」

「……っ！ありがとうっ!!」

それで俺の言葉を聞いた彼女は、嬉しさのあまりに俺の両手を手に取り、満面の笑みを浮かべる。

その笑顔につられるようにして、俺も梨子の笑顔とともに笑った。

「ねえ！海に入ろうよ！」

「ええ!?まだ海開きしてないんだぞ？」

「足だけよ！そこまで入らない〜！」

これで一つの冒険が終わるのかと思っていたら、そしたら梨子の奴、唐突にそんな事を言い出すと、ハイヒールを抜いで海へと駆け出す。

きつと海に入りたくなつたんだらうと勝手に俺は考えていたが、ものの見事に的中してしまつた。

「遼くん！すぐく気持ちいいよ〜！」

「そうかい。そりや良かった」

そしてしばらくの間、俺は足を海につけ、気持ち良さそうに山の陰に沈もうとしている夕陽を、じつと眺めている彼女を見つめていた。

本当ならば、彼女に海の海水を浴びせて服全部をビチョビチョにしてやろうと思つていた。

けど、優しい風に吹かれる赤みがかった長い髪、綺麗に整つた横顔、そして、魅惑溢れるその身体。全てにおいて彼女に魅了されていた時、俺の視線に彼女は気がつくど

……

「……………」

「……………」

顔をこっちに向けて優しく微笑み、右手で優しく髪を耳に掻き上げる。その瞬間の姿に俺は、*“心を奪われた”*。

トクンツ

優しく、波を打つように鳴ったその心の音は、きつと、それは間違いないと思う。今日一日、梨子と付き合っていて、そんな音はいくつも心の中で鳴った。だから、きつとそうなんだと思う。

でも、それは *“真に”* 確信までには至らない。

それがちゃんと確信に変わるまでは、心の中の奥底の隅っこに留めておこうと思っ  
た。

*“恋”*

俺がきつと、彼女に対して抱いた感情。

不確かだ明確ではないけれど、心の奥底で鳴り響いたその優しい音は、きつとそれなんだ……。

「じゃあ、そろそろ帰ろう！」

「……ああ、そうしよう」

海から上がったその子はそう言うから、俺は彼女に抱いた感情を表に出さず、彼女の発した言葉には俺も従うように賛成する。

それから足についた砂を近くの水道で洗い流した彼女は、タオルで水を拭き取り、ヒールを履いた後で俺に近づいてきて手を差し出す。

もう俺は、彼女から言われなくても何を求められているのか分かってしまっていた。

ギユツ

俺はその手を優しく握り、梨子は微笑む。

もし、俺が梨子の笑顔を守らなきゃいけない時が来たなら、俺は絶対に彼女の笑顔を守ってやろうと考えている。

まだまだ彼女とは出会って数ヶ月の付き合いで、彼女の知らないところもたくさんあるけれど、そこはめげず彼女と付き合い合っていきたいと思う。

「じゃあ、帰ろっ!!」

「ああ。そうだな……!」

そんなやり取りを交わした俺と梨子は、帰るために鎌倉駅へと由比ヶ浜をあとにする。

そして俺たちは2人だけの秘密として、鎌倉駅の近くにあるス〇ー〇ックスに立ち寄り、帰りの電車の中で静かなひと時を過ごしたのであった。

## #37 一通の招待状

「えっ？この前のPVが5万回再生？」

「はい！そうなんですっ！」

千歌ちゃんは持つてる団扇を仰ぎながら、ルビイちゃんが発した言葉に驚きの声を上げる。

『夢を夜空で照らしたい』っていう曲と、内浦の街の魅力を伝えるPVをホームページにアップして、ちょうど1ヶ月がたった。

季節はもうすでに夏に差し迫り、私たちの学校の制服も夏服へと切り替わる。

1年生だけは夏服に袖がなく、ほぼノースリーブな形なだけけど、私や千歌ちゃんも1年生の時に経験してるから、あまり気にすることはなかった。

それで梨子ちゃんやルビイちゃんが、私たちの動画を見てのコメントを拾って読み上



げていく。

『ランタンが綺麗』、『みんな可愛い!』

『頑張ってください!応援してます!』、私たちの動画を見て、凄く評判になつてるみたいです!』

コメントの数々には、私たちを応援するコメントや、サイトにアップした動画を褒めるコメントが、たくさん載せられていた。

そんなコメントをたくさん見ていく中で、ルビイちゃんの隣で床に膝立ちし、顔だけをテーブルからひよっこり出していた善子ちゃんが私たちに呟く。

「見て。ランキングも上がってるわ」

「「「えっ!」」」

私を含め、みんなは善子ちゃんの言葉に驚くと、パソコンの画面に目を見やる。

すると、私たちAqoursのサイトに記されているランキングを見たとき、私たちは信じられないといった表情にたちまち変わる。

まさか、こんなにも私たちの順位が上がっているなんて思わなかったし、千歌ちゃんだつてきつとこんなことになるなんて予想外でしょ。

「きゅ……99位!？」

「び、びっくりすら……」

梨子ちゃんと花丸ちゃんは、部室の外にまで聞こえるくらいに大きな驚きの声を上げる。でもそれくらい、私たちは驚いていた。

そして、千歌ちゃんも全く同じだった。

「……来た。来た来た!」

『99位』という、誰が見てもとんでもない順位を目の当たりにして、みるみる表情が笑顔になっていく千歌ちゃん。

それで彼女は一度私たちに尋ねるように、今の順位を確かめるようにして、千歌ちゃんの話しです。

「『99位』って、全国で『99位』ってこと!? 5000以上もあるスクールアイドルの中で、100位以内ってことでしょ!？」

「うん! 確かにそうなるね!」

「もしかしたら一時的な盛り上がりってこともあるかも知れないけど、それでもすごいわ!」

「ランキング上昇率でも、第1位!」

「す、すごいぞら〜!」

梨子ちゃんは千歌ちゃんに対してそう話し、ランキングの上昇率では第1位と、ルビィちゃんの一言でさらに盛り上がる私たち。

そんな雰囲気の中で千歌ちゃんは、今度はとんでもないことを私たちに言い放つ。

「何かさ……このまま行ったら、ラブライブで優勝出来ちゃうかもしれないね!」

「優勝……?」

「もう! そんなに簡単なわけないでしょ?」

「うん。私も梨子ちゃんと同意見」

でも梨子ちゃんの言う通りで、簡単に『優勝』と言って、簡単にそれが出来るわけじゃない。

5000以上もあるスクールアイドルのグループがしのぎを削りあって、たった1つのグループにしか得られないものなのだから、それは凄く簡単なことじゃないと私は思う。

「2人が言うのは分かっているけど、でも、可能性は〃0〃じゃないってことだよ！」  
「まあ、それもそうだけど……」

ただ、それでも千歌ちゃんはそう言うのだから、きっと千歌ちゃんは本気で目指すつもりなんだと、私はそう感じる事が出来た。

ピロリン♪

「んっ？メールです」

するとパソコンから、メールが送られてきた着信の音が鳴る。ルビィちゃんはメール

に声を上げると、私の宛先についての話を聞きながら、そのメールをクリックして開く。

「どこから？」

「ええ……つと、東京スクールアイドルワールド運営委員会って書いてあります」

「東京？」

「スクールアイドルワールド？」

「運営委員会？」

メールを私たちに送ってきたのは、東京スクールアイドルワールド運営委員会という、少し長めく名前が付いた運営委員会らしい。

それでルビイちゃんは、その運営委員会から送られてきたメールの内容を話し始める。

「浦の星女学院 アイドル部 A q o u r s の皆さん、東京スクールアイドルワールド運営委員会です。この度『東京スクールアイドルワールド』なるイベントを開催するこ  
とになりました」

「つきましては、昨今、注目されていますスクールアイドルのグループに参加いただきました

く、ご案内の連絡をお送りしました。だって……」

梨子ちゃんもその話をするように加わって案内の話をした上で、私たちは送られてきたメールについて考えていた。

ただ、千歌ちゃんは違った。

「東京って、東にある京……？」

「全然説明にもなっていないけど……」

「でも、当たってなくもない」

東京は「東にある京」。

間違つてはないけれど、ルビイちゃんや花丸ちゃんたちに対しての説明は、全然なつていなかった。

それを言うなら、西にも京はあるけどね。

そしたら千歌ちゃんは、疑問な表情から一転して、今度は嬉しそうに話し出した。

「でも東京だよ！ 私たち、東京で開かれるイベントに呼ばれたんだよ！ それって、私たち

のランキングが上がって、人気になってきたからだよね！」

「確かに、ランキングが上がらなかつたら、きつとこのメールは送られてこなかつたかも」

千歌ちゃんがいつも私たちに話してくれていた『μ×s』は、確か東京の“秋葉原”で活動してたつて千歌ちゃんから話は聞いていた。

きつとその『μ×s』がいた東京に行けると思っているのだろう。千歌ちゃんは喜ぶ声を上げて、梨子ちゃんも千歌ちゃんの話に相槌を打つ。

それで私は、千歌ちゃんに尋ねる。

答えは聞かなくても分かっている。けど、このイベントに参加するのかどうかを、私は尋ねる。

「じゃあ千歌ちゃん、参加するんだね？」

「もちろん！こんな機会、滅多にないんだよ！このイベントでもっと人気になれば、ライブ優勝だつて十分に出来るよ！」

自信満々な表情を浮かべて、東京でのイベントに参加する意向を示している千歌ちゃ

ん。

千歌ちゃんが東京に行ってイベントに出たいという気持ちは、私も十分に理解することが出来た。

でも、その千歌ちゃんの気持ちと意志を、とある人物にちゃんと伝えなきゃいけないよね？

じゃないときつと、私たちを東京に行かせられる許可だつて下りないと思うから。

「千歌ちゃんがイベントに参加したいって気持ちは私も十分に分かった。でも千歌ちゃん、その意志をとある人物に伝えないといけないよね？」

「えっ？誰に伝えるの?！」

「私、なんとなく分かったかも。曜ちゃんが、千歌ちゃんに言いたいこと……」

察しが良くて助かるよ梨子ちゃん。

1年生のみんなも分かったような素ぶりを見せているあたり、3人も私が何を言いたいのか分かっているようだった。

すると、いまだ私の話の意味が分かってない千歌ちゃんは私の肩を掴み、揺らしながら聞いてくる。



「ねえ曜ちゃん！それって誰なの？」

“教えて欲しい”という煌めいた目に負けてはいけない。ちゃんと自分で理解して上げないと、下手をすればこのメールや、千歌ちゃんの意志が全部水の泡のようにパクになってしまう。

だから敢えて、私は遠回しに話す。

「千歌ちゃん、私たち学校の生徒だよ？」

「先生や理事長の鞠莉さんに伝えないと、きつと私たち、東京に行かせてくれないわよ？」

「あ……あああああ!!？」

だけど善子ちゃんが私の言いたいことを全て言いふらしたので、千歌ちゃんは当然の如く、私が出たかったことが分かって悲鳴を上げる。

やっぱりだとは私も思っていたけど、千歌ちゃんはやっぱり忘れていたみたい。

「そうだよ！理事長に話さなきゃいけないじゃん！曜ちゃんどうして黙ってたの!？」

「黙ってないよ。千歌ちゃんが忘れてるだけ」

「うわあ〜ん！どうしよ〜!!」

黙ってたわけじゃない。というのも、理事長に話をしなきゃいけないと気づいたのはついさっき。

だから千歌ちゃんにそんな風に責められたけど、私はわざと黙っていたわけじゃないから、ごめんね千歌ちゃん。

そうして心の中で千歌ちゃんに謝っているとき、頭を抱えて、叫びながら項垂れている千歌ちゃんに対して梨子ちゃんが話をする。

「ひとまず、理事長にこの事を話しましょう。千歌ちゃんだって参加したいんですよ？」

「参加したいよ！」

「だったらいつまでもウジウジしてないで、理事長に話をして許可を降ろしてもらいましょう」

「……そうだね。梨子ちゃんの言う通りかも」

でも話をするというか、頭を抱えてウジウジしている千歌ちゃんを見かねて、ちよつとしたお説教をする梨子ちゃん。

そしたら千歌ちゃんは、梨子ちゃんからのお説教を聞いたあとで自分で考え、その後に梨子ちゃんの言う通りだと自分でも納得していた。きつと、梨子ちゃんのお説教が良意味で千歌ちゃんの迷いごとを吹っ飛ばしたんだと思う。

やっぱり凄いなあ……梨子ちゃん。

なんか……嫉妬しちゃうな。

「じゃあ早速、理事長室に向かいましょう！」

「おお～！絶対に許可を貰うぞ！ねっ、曜ちゃん」

「えっ？あつ、うん！そうだね！」

あ、危ない危ない。

危うく千歌ちゃんや、みんなにこんな事を気付かれちゃうところだった。

とりあえず、今は嫉妬だとか変な事は考えちゃダメだと思う。みんなにも迷惑がかかるとし、決してこれは顔に出しちゃいけない。

うん、これからはそうしよう。



夜、午後9時、遼くんの部屋

「東京のイベントに参加するだつて？」

「そう！あの東京で！」

いつも通りこの時間は、私は遼くんの部屋に訪れていて、今日学校であつた出来事を話していた。

もちろん、東京のイベントのこともね。

「私たちが5000以上もあるグループの中で99位。100位以内つてすごいと思わない!?!」

「すごいと思うけど、いきなり『参加してください』つてその運営唐突だな」

遼くんも、この事には当然驚いていた。

私が開口一番にその事を伝えたら、ランキングが100位以内に入って、ましてや東京に行つてイベントに参加するなんてつて、凄く驚いてた。

良い意味で遼くんには、ちよつとしたサプライズが出来たかもしれない。そしたら彼は、私に聞いてくる。

「でもどうせ、行くんだろ？」

「うん！理事長にも許可は下ろして貰ったよ！」

「そっか。そりゃあ良かった」

遼くんは私の答えを聞いて、やっぱりなつて感じの表情をしていた。口の口角を上げて、不敵な笑みを浮かべていた。

実はあの後、鞠莉さんがいる理事長室で、千歌ちゃんは鞠莉さんに頼み込んだの。『東京のイベントに招待されたので、参加したいから東京に行かせてください！』つて……。みんなで鞠莉さんの前でお辞儀して、必死に頼み込んだの。そしてそれが、功を奏する。

結果はもちろん“OK”だった。鞠莉さんが私たちに、『みんながそれで良ければ、理事長として許可を出すわ！』つて言ってくれたときの千歌ちゃんの喜びようは、とても

凄かったけどね。

すると遼くんは、何かを思い出したような表情を私に見せると、また私にことを尋ねてくる。

でもその内容は、私たちの中でも一度だけ話題になったことだった。

「あつ、でも一つ気になることがある」

「んっ？なあくに？」

「東京に行くまでの交通費は、どうするんだ？」

「あつ、それは大丈夫であります！」

そう、沼津から東京に行くまでの“交通費”。

遼くんはこの前に横浜に行った時の経験があつたから、東京はそれよりも遠いし、お金も凄くかかることは私も百も承知だった。

でも、東京までの交通費がかかる事を千歌ちゃんたちはド忘れしてて、私が話をしていなかっただらと思うと、私は冷や汗をかいた。

「でも私が言わなかつたら、みんな忘れてたみたい。千歌ちゃんも忘れてたみたいで、思

い出した時にこう言ってた。お小遣いを前借りするって！」

「左様でございますか……」

遼くんは千歌ちゃんが言ってたことをそのままに話せば、彼は呆れてそう言い、ため息をつく。

東京へは、今度の土日を挟んでの1泊2日。日曜日にイベントが開催されるから、その前の日に東京に行こうって、みんなで話し合った結果そうなった。

だから東京の街並みを見て回れる時間もたくさんあるし、それに千歌ちゃんの提案で、秋葉原に行くことにもなってるから、私も早く行きたいなうって思ってるんだ！

ただ本当の目的はイベントに参加して、みんなの前で精一杯ライブを披露することだけだね。

「でもまあ、本当凄いなんだ。4月から活動を始めたAqoursが、もう100番目に近い順位まで上がってくるなんてな。全然想像もしてなかったよ」

「うん。私も思ってたかった」

遼くんは私たちのランキングと、私たちの頑張りに感銘を受けている。彼のベッドに



座る私の隣で、パソコンを使い、笑みを浮かべて笑っていた。

でも、こうして私たちAqoursがこのランキングにいられるのは、紛れもなく、少なからず遼くんも関わってる。毎日の朝練、振り付けの練習にも付き合ってくれている遼くん。彼がいなかったら、今の私たちはいないと思う。

だからむしろ、私は遼くんに感謝してる。

千歌ちゃんたちもきつと、そう思ってると思う。

その気持ちを表すかのように、私は彼の左肩に頭をそっと置き、心の底から感謝の気持ち述べた。

“いつもありがとう！遼くん！” ってね！

「んっ？眠いのか？」

「ううん。嬉しいんだ……」

「嬉しい？何だよそれ？」

「いいんだ。遼くんに分からなくても……」

私がスクールアイドルを始めるきっかけも、一緒に横浜に行ってくれた時も、遼くん

がいてくれたから楽しい日があつて、今ある楽しい日々がある。

この気持ちは、絶対なくしちゃいけない。

私は、心からそう決心したのだった。

「変な曜だ。んつ、メール来てるぞ?」

「えっ? あつ、本当だ」

すると彼の指摘で私は自分のスマホを覗くと、彼の言った通りスマホに一通のメールが届いていた。

送り主はママ、お母さんだった。

「誰から?」

「えつと、お母さんから」

私はスマホをいじりながら遼くんの質問に答え、送られて来たママのメールの内容を見る。

一通り送られてきたメールの内容に目を通した後で、遼くんがまたメールのことで尋

ねてくる。

「どんな用件だった？少し話があるから、家に戻って来なさいって書いてあるとか？」

「凄い！ものの見事に的中だよ！」

「え”え!?”」

そしたら、遼くんの言ったことが、そのまま全てママからのメールの内容に当てはまっていた。

一文字も、寸分の狂いもなくね。

言った遼くん本人もびっくりしてる。

「いや、嘘だよな？」

「ううん。じゃあこれ見て」

「あつ、そのままじゃん」

まだ『嘘でしょ？』と疑問に感じている遼くんに私は証拠を見せると、彼は私に送られてきたメールの内容を見て、瞬時に理解してくれた。

その後、遼くんは、私に言ってくれた。

「だとしたら早く戻ってやれよ。お母さんに怒られるのは面倒だろ？」

「うん。まあね……」

ママのために早く帰ってやれよと、すごく優しく彼は私にそう言ってくれた。

彼のこういうところ、私は……。

「じゃあ私は戻るね！また明日！」

「おう。また明日！」

そして私は、ママに怒られないように早く自分の家に戻るため、遼くんの部屋を後にした。

ママからきたメールの話は、きっと今度の東京への交通費の話だと思う。学校から帰ってきてその事を伝えたら、『考えておく』って言われてたから、今その考えが付いたんだと思うんだ。

これで、何の心配もなく東京に行ける。

はあ〜！、楽しみだなあ〜！！

早く土曜日になって欲しいと  
切実に願う私であった。

〜  
〜  
〜  
〜  
※※※※※  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

「うふ♪やっぱり来た」

「……待っていたんですの？」

「ええ。来ると思ってたわ♪」

私に来るのを待っていたかのように、鞠莉さんは自分の部屋のドアの前で待っていました。

時刻は9時半を回り、もう夜も遅い時間。

どうして私が鞠莉さんの家、いえ……鞠莉さんの部屋へこんな時間に訪れたのか？  
そのきっかけは、少し時間を遡りますわ。

1時間前、午後8時半

『えっ？東京？』

『うん。東京のイベントで、一緒に参加して歌いませんか？……』

『そうですか……』

妹のルビィが活動しているAqoursの皆さんが、東京で開催されるイベントの参加を呼びかけられたらしいんですの。

まるで、それは昔の“私たち”のように……。

『交通費は大丈夫なんですの？』

『え、えっと、千歌さんがお小遣いを前借りして、何とかしてみるって言って……』

『はあ。そうですか……』

正直、千歌さんの言う言葉には少し不安が募っています。

千歌さんはAqoursのリーダーですが、私からしてみると彼女の言動にはとても不安になるのです。

ですが、これは私が話に首を突っ込むことではありません。ルビイが東京のイベントに参加したいのであれば、私からは何も言わないつもりです。

『お姉ちゃんは、どう思う？』

『私は、ルビイの気持ちに賛成しますわ』

『えっ？ど、どうして？』

『私は“Aqours”のメンバーではありません。それにルビイは自分の意志でスクールアイドルを始めたのですから、誰がどう思おうと、ルビイ自身で思ったことに従うべきですわ』

『お姉ちゃん……』

“姉”として、妹を見守るつもりですわ。

自分の考えを行動しなさいと、私はルビイにそう言います。何事にも、自分の考えを持って行動しえ欲しいと、私は心からルビイにそう訴えました。

『私から言えるのはこれだけ。ではルビイ、今日はもう遅いので早く寝なさい。また明日、朝から練習があるのでしよう?』

『うん。分かったよお姉ちゃん』

『ええ、おやすみなさい』

そうしてルビイは私の部屋から出て行き、私は鞠莉さんの家にやって来て今に至るのです。

「どう言うことが分かっているんですの?」

「んんっ? どういうことか?」



私が鞠莉さんの家にやって来た理由は、もうこの地点で彼女自身も分かっているはず  
です。だから私は、何の前置きもなしに鞠莉さんに尋ねました。

「あの子たちを今、東京に行かせるのがどういふことか分かっているのでしょうか？」  
「Oh〜！そういうことですか！」

私の問いかけに、両手を合わせて今思い出したかのように話す鞠莉さん。ですがこれ  
は、鞠莉さんがわざと忘れていたふりをしているので、昔からの友人である私には見え  
見えなのです。

でも次の瞬間、鞠莉さんは言います。

私に鋭い視線を向けて、私の心にグサツと突き刺さるようなその言葉を、鞠莉さんは  
言いました。

「ならダイヤ、あなたが止めればいいのに……」

「……………」

「ダイヤが本気で東京に行くのを止めれば、あの子たち、諦めるかも知れないよ？」

「……………」

その言葉に私は、何も言えませんでした。

すでにルビイにはあんな事を言ってしまったのですから、今更そんなことは死んでも出来ません。

すると、今度は鞠莉さんが私に問いかけるようにして話を続けてきました。

「ダイヤも期待してるんじゃないの？あの子たちが、私たちが乗り越えられなかった壁を乗り越えてくれることを……」

「だとしても、もし越えられなかったらどうなるのか、十分あなたも知っているでしょう？取り返しがつかないことになるかも知れないのですよ！」

その問いかけを筆頭に、私と鞠莉さんは言い合いになりました。

千歌さんたちが下手をしてしまえば、昔の「私たち」のようになってしまい、取り返しのつかないことになってしまいます。

私はただ、私たちの二の舞になって欲しくはないと、鞠莉さんにもその事を伝えました。

ですが私は、鞠莉さんのたった一言に言葉に詰まらせてしまいました。

「だからといって避けるわけにはいかないの。本気でスクールアイドルとして、学校を救おうと考えているなら……」

どうして？ 鞠莉さんはそんな余裕な表情をされていますの？ あんな事があったのに、果南さんともあんな事があったのに……。

「……………」

でもやっぱり、彼女は変わってませんわ。

“あの時”と同じように、全く変わっていないのですねと、私は改めてそう感じました。

「ダイヤも、応援してあげま……」

バンツ！

「……うふっ♪」

「変わっていませんわね。あの時と……」

「褒め言葉として、受け取っておくわね♪」

私は鞠莉さんが寄りかかる壁に右手を叩きつけ、それでも尚、全く動じない鞠莉さん。  
真っ直ぐ私を見つめる鞠莉さんの瞳は、何かしらの思惑を秘めているような、そんな  
気がしました。

## #38 東京に向けて

「曜〜！遼くん迎えにきてるわよ！」

「うんっ！今行く〜！」

ついに、ついにこの日がやってきた！

今日は私たちが東京に行く日で、東京で開催されるイベントの前日である。

私は1年生の時に千歌ちゃんと一度訪れたことがあるから、久しぶりにあの街に行けると思うとすごくワクワクしちゃう！

ああ〜！早く行きたい！

そんな期待に胸を膨らませている私へと、一つの怒号が玄関から部屋へ鳴り響く。

「曜〜！早くしねえと、乗り遅れちまうぞ！」

遼くんってば、ときどき私を急かしてくるときがあるから、それはそれで嫌になっちゃう……。

でも、それだけ遼くんが心配してくれてるって考えたら、それもそれでいいかなって私は感じる。どっちにしても、五分五分って感じ。

「分かってる〜！」

私は東京に持っていくものをカバンに詰め込み、そのあとに服を着替え、帽子はツバが後ろになるように向けて被る。

それで忘れ物がないかを確認した上で、私は部屋を飛び出し玄関へと向かうと、玄関に仁王立ちして待っている彼の姿があった。

「遅い。俺を何分待たせる気だ」

「何分って。遼くんはいつ来たの？」

眉間にしわが寄り、腕組みをして私を待っていた彼に私はそう尋ねると、彼はこう答

える。

ただ遼くんはその答えには私は馬鹿としか言いようがなく、私は呆れてため息ついた。

「……30秒前だ！」

「ついさつき来たばかりじゃん！」

たった30秒前に私の家に来て、私によくそんな事が言えるねって私は思っちゃう。とりあえず、私は靴を履いてママに言う。

「じゃあママ、行ってくるね！」

「ええ。向こうでも気をつけてね！」

「うん！行ってきま〜す！」

土曜・日曜と2日も会えないことに少し寂しそうに私を見つめているママ。そのママに別れを告げた私は遼くんの自転車に乗り込み、玄関で私を見送ってくれるママに手を振った。

ママの姿が、他の家の陰で見えなくなるまで手を振り続けた私は、その振り続けた手を下ろす。

そして彼のお腹に両手を回すように、ちゃんと彼から離さないように背中から抱きついたところで、遼くんは私に話しかけてきた。

「曜、忘れ物はないだろうな？」

「大丈夫！ちゃんと確認したし！」

「そうですかい」

彼のその言葉に、私は『心配性だなく』って心の中で微笑むも、遼くんの質問にちゃんと答える。

なんだかんだ心配してくれてることに、私も少しばかり安心しきっていた。

「それにしても、今日はやけに暑いな」

「そうだね。今日は真夏日って言ってたもん」

今日は気温27度。



真夏日となる25度を超えていて、太陽の日差しがさんさんと私と遼くんに照りつける。

まだ7月が始まったばかりなのに、夏の季節はすでに到来しているかのよう。海から涼しい風が吹いてくるけど、それよりも暑かった。

「でも、やっと夏が来るんだな」

「うん！今年もとうとう『夏が来た』って感じがするよね！今年もたくさん楽しみたい！」

ただ、実は遼くんも私も夏が大好き。

小さい頃から夏になれば毎日のように外に出て、千歌ちゃんと果南ちゃんと4人で、一緒に海で日が暮れるまで遊んでいた時がある。

今でもそれはいい思い出だけど、今年はそれよりもっといい思い出になると思っている。

千歌ちゃんはもちろん、梨子ちゃん、ルビイちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃん。全員を合わせて7人もいるんだから、今年はもっと楽しい夏になる。

それだから私は、早く夏休みにならないかなって思っていて、心から待ち遠しかった。

「まっ、曜はそんな事を言う前に、それよりも先にやることがあるんだろうけどさ……」  
「うぐつ。遼くん、それ言っちゃダメ……」

だが、遼くんは心に突き刺さる言葉を言い放つ。

彼は一応遠回しに言ってくれているけれど、私にとってそれは悪魔的存在で、嫌でもそれはやりたくないものである。

みんなもきつと、分かるよね？

「それだったら、遼くんだって一緒じゃん」

「俺はいいんだよ。曜とは違って、ちゃんと夏休みの期間内に終わらせられるからさ」

「むう〜！遼くんのバカッ！」

「なんでえ!?!」

彼の耳元で私はそう叫び、鬱憤を晴らす。

全くもって聞きたくもなかったことを彼に言われて、私はがっくりと肩を落とした。

それからしばらくして、私は遼くんの送迎のおかげで、みんなと集まる集合場所であ

る沼津駅に辿り着く。

集合時間まではあと15分もあるから、まだ駅には私と遼くん以外誰も来ていない感じだった。ただ、私が駅の周りを見渡していたときに、駅前は何故か人だかりができていた。

「ねえ遼くん。あれ……」

「ああ。こんな時間に何をしてるんだ？」

遼くんもそれに気づき、疑問の声をあげる。

こんな朝早い時間に、しかも子供連れの親の人たちまでいる。人だかりの中心には一体何があつて、一体どんな事をしているんだろうと思つていた。

すると、人だかりから少し離れた子供と、その母親のちよつとした会話が私の耳に入ってくる。

「ねえお母さん、あれなに？」

「しゅつ！あれは見ちゃダメよ」

人だかりに向かって指を指す子供と、それに対して遠ざけるように離れさせる親。親子の会話の様子を見て聞いていると、あの人だかりの中心には子供にとつて悪影響な物、あるいは、“人”がいるのだと考える私に、遼くんは尋ねてくる。

その質問の仕方には、私と同じで、彼も既に分かっているような口ぶりだった。

「曜。今の親子の話……」

「うん。私、あの人だかりの中心に一体“誰が”いるのか分かっちゃった気がする」  
「奇遇だな。俺もだ」

私も遼くんもそれが分かったときには、こんなにも早い朝っぱらから、“あの子”は一体なにをしているんだって思った。

どうしてあの人だかりの中心には“人”がいるって分かったのか？理由としては、さっきの親子の会話と、私たちが沼津駅に集まるということ。

この2つの理由を照らし合わせれば、私と同じで沼津の街に住み、集合時間の15分も前にここにいる子なんて、私の中でたった“1人”しかない。

「うふうふう……うふうふう……」

「この笑い声。間違いないね……」

「ああ。全く、世話の焼けるやつだよ」

遼くんも呆れるくらいの女の子で、自分を堕天使ヨハネと名乗り、私たち A q o u r s のメンバーの 1 人で、私の大切な後輩の 1 人。

そう、善子ちゃんだ。

「天津雲居の彼方から、堕天使たるこの私が、魔都にて、冥府より数多のリトルデーモンを召喚しましょう！」

「またあいつは変なこと言ってる……」

「まあまあ。あれが善子ちゃんだから仕方ないよ」

今日もまた、いつものようによく分からないことを話している善子ちゃん。

人だかりの近くまで寄っていくと、集まっている人たちみんなはスマホのカメラを持ち、何故か善子ちゃんに向けて写真を撮っている。

どうして善子ちゃんにカメラを向けているのかと考えながら、私は遼くんの後を追うように人だかりを掻き分けて進むと、人だかりの中心に予想通り、善子ちゃんの姿が

あつた。

ただ……

「ウッフッフ……ウッフッフ……」

「よ……善子ちゃん……!?!」

「おめえ、なんて格好してやがる!?!」

一瞬にして、私も遼くんも愕然とした。

何につて? 目の前の善子ちゃんの姿にだよ。

「善子じゃなくて、ヨハネ!!!」

私は善子ちゃんのその姿に驚き、遼くんは彼女にそんなことを尋ねると、善子ちゃん  
は両手を大きく広げて大きな声を上げる。

したらその場にいた人だかりは、善子ちゃんの声に驚いて一斉に離れていく。

善子ちゃんの声に相当に驚いてしまったんだねと考えていたら、私と遼くんの正面す

ぐ下にいた3人が、善子ちゃんに対して不敵な笑みを浮かべ、彼女に向かって話し出す。その言葉は、善子ちゃんを知っているかのような口ぶりで、そしてそれは言うまでもなく私も遼くんも知っている子たちだった。

「くつくつく、善子ちゃん……」

「やってしまいましたなあ……」

「善子ちゃんもすつかり墮天使ずら……」

千歌ちゃん、ルビィちゃん、花丸ちゃんの3人。

3人は身を寄り添って、しゃがんで善子ちゃんに向けてジト目でそう言うと、3人が私たちの足元にいることに遼くんは驚きの声をあげる。

「おっ、お前ら?! い、いつの間に!?!」

「いつの間について、前からここにいたよ?」

「何だよそれ……」

千歌ちゃんと遼くんの話聞いた後で、どうやら私と遼くんは1番最後に駅に着いた

んだと気づく。

てつきり私が一番最初に来たと思っていたけど、さっきの人だからの中で、すでにみんなが集まっていたことに驚きを隠せなかった。

「ていうか、梨子はどうした？」

「梨子ちゃんはおそこだよ」

「あつ、いた」

千歌ちゃんが指差したバス停の方に視線を向けると、千歌ちゃんの言う通り梨子ちゃんは腕を組んでこつちを見つめながら立っている。

それで私と遼くんが千歌ちゃんたちに合流したのを見て、梨子ちゃんがこつちにやっ  
てきて彼女と朝の挨拶を交わす。

「梨子ちゃん、おはヨーソロー！」

「おはよう梨子」

「おはよう曜ちゃん。遼くん」



笑顔を見せる梨子ちゃんは元々都会っ子だから、地元に戻るような感じの彼女は、年に1度行けるかどうかの私たちより凄く落ち着いていた。

大人びていて、とても綺麗で……。

「千歌〜！」

「あつ、むつちゃん！」

するとそこへ、同じクラスメイトのむつちゃんを始め、よしみちゃんといつきちゃんの3人が私たちの見送りにやってきた。

いつも私たちの活動を陰から支えてくれてる3人が来てくれて、千歌ちゃんはとても嬉しそうな表情を浮かべていた。

「東京のイベント頑張つてね！」

「私たち、みんなで応援してるから！」

「うん！ありがとう！」

彼女たち3人からの応援のエールに、千歌ちゃんは笑顔になって彼女たちにお礼を言

う。

そしたら、後ろにいたいつきちゃん、袋一杯に入った“のっぽパン”というパンを、私たちへの差し入れとして渡してきたのだ。

「あとこれ！みんなからの差し入れ！」

「わあ〜！ありがとう！」

“のっぽパン”は静岡で親しまれている長さ34cmくらいある細長いパン。

それらを差し入れとして渡してきた3人に、千歌ちゃんは快くそれを受け取ると、3人から私たちへの激励の言葉を話してくれた。

「これ食べて、浦女の底力を見せてやって！」

「学校のみんなも、期待してるから！」

3人は、私たちAqoursに期待している。

学校の統廃合の危機を救おうと、スクールアイドル活動をしている私たちの陰からずっと支えてくれている彼女たちの言葉には、『学校を救って』と、心からそう願って

るような言葉だった。

そんな彼女たちの思いを真剣な表情で受け取った千歌ちゃんは、思い思いに彼女たちの期待に応えられるようにして、大きく返事をして答える。

「……うん！頑張るね！」

東京のイベントで全力でライブをして、みんなに良い結果を報告できるようにすると、千歌ちゃんの表情は、やる気溢れる表情を見せていた。

そして、会話が終わったのを見かねた遼くんは、私たち6人に向けて言い放つ。

それは、私たちの出発を促す言葉だった。

「んじゃ、そろそろ時間だな」

「うん！遼くん、行ってくるね！」

「おう。気をつけてな」

私を含めてみんなは彼の言葉を聞き、それを合図に自分の手荷物を持つ。

それでみんなで遼くんとよしみちゃんたち4人に向き直っては、彼らに『行ってきま

す!!』と千歌ちゃんは告げるように言い放った。

「じゃあみんな、行ってきます!」

「精一杯やってこい!」

「いつてらっしや〜い!!」

そして、私たち6人は遼くんたちに見送られながら改札を抜け、東京に向かう電車に乗り込む。

遼くんとの横浜に行ったとき以来の電車だから、またあのとときみたいに長い旅路の始まりが思うと、胸が踊ってワクワクが止まらない。

『早く東京に着かないかな』と、私を含めて6人みんなは電車内で談笑しながら、そんなことを考えているのであった。

~~~~~※※※~~~~~

千歌たちを無事に駅で見送り、朝のやるべきことが済んだ俺は、今日は部活が午後からのため、午前中は何をしようかと考えていた。

家でずっとゴロゴロするのもあまりで良い。

だが俺の性格上、1つの場所ですっとじっとしている事が出来ない。なんにしろ、何かしていないと落ち着いていられないのだ。

「うーん。どうすつかな……」

この快晴の空の下、のんびりと家で過ごすか？何かしらアクティブなことをして過ごすか？

その2つの選択肢の間で頭を悩ませている俺は、不意にある事を思い出し、それを考

えた上で午前中はそうしようと決心した。

「あつ、午前中はアレをしよう」

沼津の街は海が超近い。そして俺の幼馴染みは、海へダイビングできるアクティビティを取り揃えたお店を手伝っている。午前中の間だけは「あいつ」とあそこで過ごすしかない。

そしてついでに、彼女からあの話も聞いておこうと考える。

ダイヤから話を聞いたって彼女に言えば、あいつもきつとあの時の話をしてくれると思う。

そう思った俺は、すぐさま駅から自転車を漕いで家に戻り、あいつの店に行く準備をした上で母さんに告げる。

「母さん、午前中は果南の家に行ってくる」

「はいよ。くれぐれも気をつけてね！」

「うん。じゃあ行ってくる」

母さんのそんな心配をかける言葉を胸に秘めて、俺は果南の店へと出発する。

家から自転車フェリー乗り場まで15分漕いで、そこからフェリーで淡島へは15分。

俺が果南の家に着いた頃には、太陽も上りきっていて、空気も少しムシムシする。夏が近づいてきた証拠だと思いつつ、すでに店の前で開店の準備をしていた果南に俺は声をかけた。

「おーい！果南！」

「んっ？あれ？遼……？」

「午前中暇だから、ダイビングしに来た」

相変わらず、今からダイビングでもするのかって言うくらいに、きっちりと全身にウエットスーツを着込んでいる果南。

そのウエットスーツが、1つ年上の幼馴染みとは思えないグラマーなボディを浮かび上がらせているけれど、ただそれはまた別として、果南は俺が店にやって来たことに驚いていた。

「まだ開店の2分前なんだけど……」

「まあそう言わずに、早く開けてくれよ」

「もう、しょうがないなあ……」

そして、俺の要望に『仕方ない』といった表情を露わにしている果南だったが、あと2分で店も開店だからと、少し早めに店を開けてくれた。

「今日だけ特別だからね？」

「サンキュー、果南」

半ば果南には申し訳ないと思いつながら、俺は開店した店の中へと入っていく。

ダイビング自体をするのは本当に久しぶり。前は梨子の『海の音を聞きたい』という希望で、千歌と曜と4人でダイビングしたつきりだったからな。

もうあれから3ヶ月も経っている。時の流れは恐ろしいほど早いんだなと実感させられた。

「んしょ……んしょ……」

慣れた手つきで、俺はウエットスーツを着る。

もう何度もここには来てるし、果南にも親父さんにも世話になってるから、ウエットスーツを着る事なんてもうへっちゃら。

ウエットスーツをちゃんと着た上で、ダイビングに必要な不可欠のゴーグル、シユノーケル、フィンを手を持って外に出ると、俺を待っていたかのように果南が腕を組んで立っていた。

「それで？今日はどうするの？」

「今日はそこまで深いところは行かないよ。午前中はとても暇になってるけどね」

「分かった。じゃあちよつと待ってて？」

「えっ……？」

すると果南は俺に待っているようにそう言い残すと、いそいそと店の中へと入っていく。

一体果南はどうしたんだと思っていたけど、仕方なく俺は果南に言われるがまま店の前で待っていると、2分後、果南がやつと帰って来る。

が、俺は果南に対して驚いた。

「お待たせ〜！」

「あれ？店番はしなくていいの？」

「うん。午前中、しばらくはお客さんは来ないし、折角だから、遼と一緒に潜りたいなあ〜って……」

俺が驚いたのは、彼女の手を持っているダイビングの用具で、俺が店から取っていったものと一緒にしたこと。

ゴーグル、シュノーケル、フィンの3点セットを手に持ち、苦笑いを浮かべながら、そんな話を話す彼女の姿に、俺の今日の運はいいと心中でそう思いながら笑みを浮かべる。

俺にとって、それはとても都合な話。

俺も果南とは潜りたかったし、果南の要望を断る必要はなかったから、俺は果南の希望に何の躊躇いもなく応える。

「全然構わないよ。それよりも、むしろ俺から言いたかったところだし……」

「本当!? 良かった〜」

果南も俺の話聞いて胸をなでおろし、ホッとしたような安堵の表情を見せる。

果南には機会を伺って、「あの話」も聞き出したいところ。でも今は、俺は果南と2人でダイビングをしたいという気持ちが強かった。

「じゃあそうと決まれば、早速一緒に潜ろうぜ!! 時間は待つてくれないんだからさー!」
「そうだね! じゃあ行こー!」

果南もその意識はとても強く、近くの海岸に小型ボートを浮かべて、俺と果南はそれに乗り込む。

付属しているオールは器用に使って、果南を正面にして俺は後ろへと漕いでいく。波は静かで穏やかだったから、そこまで大変なことではなかった。

そうして俺たちが潜ろうとしている目的地のところまでやって来ると、あらかじめ先に準備をしていた果南が海に勢いよく飛び込む。

「よつとー! おつさぎー!」

「うわっ！おい、先に行くなよ！」

そのせいで水しぶきが顔に飛んできて、危うく目や口に入りそうになる。

果南のようにすぐに海に入りたいのも山々。でも俺もまだダイビング出来る格好じゃなかったから、ゴーグルとシュノーケルとフィンを身につけ、すでに飛び込んだ果南がいる海へと、俺は飛び込んだ。

「果南。さすがに早すぎ……」

「ごめんごめん。早く海に潜りたかったんだ」

「そんなに早くしなくても、海は逃げないよ」

海は、意外にも暖かい。

あの時よりも温度は低いという感じはしないから、今日のダイビングはとても気持ちいいものになるだろうと俺は思う。

まっ、最初に飛び込んでった果南もそう思ってる様子だし、いつもより有意義なダイビングになるんじゃないかなって、俺はそう思った。

「それじゃあ、早速潜ろつか！」

「うん。それもそうだな」

こうして果南の言葉に俺は賛同したのちに、俺と果南による2人だけのダイビングを始まる。

果南と“2人で”っていうのが意外にもこれが初めてだから、そういうことも含めて、果南とダイビングを楽しもうと思った俺であった。

#39 真意と、責任と

果南と2人でダイビングを始めてから、もうかれこれ1時間弱くらいは潜ってる。休んで、潜って、休んでと、間には休憩を挟んでダイビングを楽しんでいるけど、ほぼ休みなしで海に潜っているようなものだった。

「ぶはあ！はあ……はあ……」

「どう？まだ潜れる？」

「いや、少し休みたい……かな？」

海面に浮上し、俺に近づいてそう尋ねてくる果南に対して、俺は苦笑いを浮かべてボートに戻っては休みたいと伝える。

その答えを聞いた果南はというと、ふふつと笑みを浮かべては、やれやれといった表

情を見せた。

「分かった。じゃあボートに戻ろう?」

「ああ。早くボートに戻りたいぜ」

俺はそう言って、果南と一緒にボートに戻る。

ボートに乗る前に俺と果南は、付けていたゴーグルとシュノーケルをボートに投げ入れて、その後にはボートをよじ登って乗り込む。

海の水でウェットスーツが重くなって、少し登り辛かったけど、なんとか乗り込むことが出来た。

「はあく潜った潜った」

「まさか、これで終わりじゃないよね?」

「果南がそう聞くあたり、果南はまだ潜り足りないって感じだな?」

「私はまだまだ潜れるよ!」

締め切っていたウェットスーツを開かせ、自分からボンバーな胸を見せてくる果南。

彼女はまだまだ潜れると、余裕の表情を見せている。

これで俺だけ引き上げてしまえば、果南と一緒にいる時間が勿体無い。それに聞きたいことが聞けなくなるし、何よりそのためにダイビングをしに来たわけだから、引き下がるわけにはいかなかった。

「よっしゃ。俺もまだまだ潜れるぞ！」

「おつ、遼もまだまだやる気だね！」

「俺だってやると決めたらやるんだよ！」

果南にはそんな事を告げる俺だけれど、目線があからさまに果南の胸に集中してしまっていて、それがもろに果南にバレていた。

「またダイビングしてくれるのは嬉しいけど、私の胸を見ながら言うのはやめてほしいな？」

「……バレた？」

「目線があからさまだから分かっちゃうよ」

自分の胸を、両腕を使って隠す果南。

ただビキニの水着を着ているし、ウエットスーツで隠せば良いものなのに。それか何だ？ そんなあざとい仕草して、俺を誘っているのか？

いや、それは確実にはないだろう。

「ごめんごめん。果南の胸は大つきいなくって思っちゃってさ。つい目が行っちゃってた……」

「もう。馬鹿……」

とりあえず、自分から果南の胸に目が行っていた理由を述べると、果南は俺に向かってそう言っ、少しながら顔は赤く染まっていた。

あまり調子に乗って彼女に言い過ぎると、果南の無慈悲な制裁がくだる。だから言うのはここまでにして、彼女にまた潜ろうと話を切り出す。

「まっ、そういう事は置いてだ。そろそろまた海に潜ろうぜ！」

「……うん。そうしよっか」

今は午前の10時だから、あと30分くらいは果南とダイビングが出来る。

その後にはちやんと、果南に話を聞こうと思う。

ダイヤから聞かされた3人の間で起こった真実を、果南から直接聞こうと思った。

「ぶはあ！ふう〜！」

「遼、大丈夫？疲れてない？」

「果南、俺を殺そうってか？」

「まさか。もうそんな真似しないよ」

それで再び果南と再開したダイビングは、30分といえど時間はあつという間に過ぎていった。

天気は「快晴」とご機嫌で、そのおかげで海の中は透き通っていて、今日はダイビング日和と言っても過言じゃないくらいだった。

そうやって30分のダイビングを終え、果南とまたボートに戻れば、果南の胸がまたポロリと見える。

彼女が気づいた頃にはもう遅く、果南のセクシーな胸を俺は見ていると、果南は俺を睨みつけるようにして聞いてくる。

「……………見た？」

「何のことだ？俺はさっぱり分からんぞ？」

胸を見ていたのかを聞いてくる果南は、また俺に対して胸を腕で隠している。

良い加減、胸を見られたくないなら、今着ているウェットスーツのジツパーを下げなければ良いのにと思ってしまう。でもダイビングを終えたら果南はそのスタイルになるし、俺はそれについて言及する権利もないから、果南の意思次第になる。

けれども、果南の胸を見ることは出来る。

こんな事は思いたくないけど、出来ればずっと、そのスタイルでいて欲しいかな？

「次にまた胸見たら、訴えるからね？」

「はいはい。十分に承知しました」

果南のジト目と忠告を耳にして、俺たちはボートで海岸に戻る。

海岸についた後で俺と果南は、縄を使って海岸にボートを括り付け、ボートが海へと流されないように固定する。これを忘れてしまったら絶望的だから、こういうのは注意

しなければならぬ。

「果南、今日はありがとな！」

「うん！私も遼とダイビング出来て楽しかった！」

ボートを括り付け、海岸からお店の前までやって来たところで俺は果南にお礼を言う。

彼女もお礼で俺にそう言うけれど、店を開けつぱにして俺と付き合ってくれたんだから、お礼を言うのはこっちの方なんだけどな……。

でも彼女がそう言うてくるのだから、それを素直に受け取った方がいいのかもしれない。

なにせ、彼女の笑顔が眩しいからな。

「俺も、果南とダイビングが出来て楽しかったよ。じゃあ俺は着替えてくるから、少し待っていてくれ」

「分かった！じゃあ、私はここで待ってる！」

果南がお店の前で待っていると聞いてから、俺は空き部屋を借りて私服に着替える。ダイビングをしに来ただけだから、大きな荷物はなく、携帯と財布以外は何も持ってきていない。

果南の店は色々と用具とかを貸してくれるから、何も持たずに手ぶらで来ても大丈夫なのだ。ただ数は限られてるから、自前のウェットスーツを持つてくるのがいいのかもしれないけどね……。

「終わったぞ〜」

「はい！アジの干物だよ！」

「ええ〜!? また干物かよ!?!」

「文句言うなら母さんに言つてよ」

着替えを終えて店に戻ると、アジの干物を袋一杯入ったビニル袋を持った果南がいて、笑顔でそれを俺に渡してくる。実は果南の家では干物も作っていて、親戚の人や、たまに俺や千歌にお裾分けをしているのだ。

でもずっと渡されるのはアジの干物だから、少々飽きている自分があるんだ。

「イカの干物とかないのかよ？」

「ごめん。うちはアジだけなんだ……」

「まあいいけど。美味しく食べさせてもらおうよ」

「うん。そうしてもらえると嬉しいな」

イカの干物だったら、それを細かく刻んで飲み物のつまみとかに出来るのだが、仕方ないね。

俺はアジよりイカの干物の方が好きだから、イカの干物があればと思っていただけ、今回もアジの干物で我慢するしかない。

そんじゃあ、そろそろ聞きますかね？

果南に聞こうと思ってた、2年前の話を……。

「そうそう。果南に1つ聞きたい事があるんだ」

「んんっ？なに？聞きたいことって……？」

「まあその……少し大事なことだ」

俺はそう言うと、果南は首をかしげる。

俺がその場にいなかった彼女の思い出や、その時の記憶や出来事について彼女に尋ねるのは、あまりにも危険だということは十分に承知し、それを理解しているつもりだ。

あのダイヤにもしつこく忠告されたしね……。

『果南さんに話を聞くなら、十分に気をつけてください。なにせ果南さんが全ての始まりで、彼女自らが“提案した”のですから……』
『分かった。その点は、十分に俺も気をつける』

俺が質問して、果南がちゃんとその質問に答えてくれるかは、100%定かではない。でもそれでも、俺は聞きたかった。

果南の思う、彼女の本当の気持ちだね。

「“2年前”の東京でのイベントのことなんだけどさ、どうして果南は……歌わなかった”の？」

「……………えっ?」

彼女に対してそう尋ねた瞬間、果南の表情が一転してだんだん曇っていくのを、俺は一瞬たりとも、見逃さなかつたのであつた。

~~~~~※※※~~~~~

「フフツ。ここが、遍く魔のものが闊歩すると伝えられている約束の地、魔都・東京……！」

「善子ちゃんは相変わらずね……」

「あつ、あははは……」



内浦から電車で2時間半。

私たちは、やつと東京に辿り着いた。

「あつ、見て見て！ほらあれ！あれつて、スクールアイドルの広告だよね！」

そこから秋葉原に私たちはやってきていて、駅の改札を抜けて早々、千歌ちゃんはスクールアイドルの広告を見てはしゃいでいる。

そういうのは別に私はいいんだけど、あまりにもはしゃぎ過ぎるとなんか「アレ」じゃない？

なんというかこう、『この人たち、地方の方からやって来たんだな』って思われちゃうと思う。

だから私は、千歌ちゃんに注意を促す。

「千歌ちゃん。そんなにはしゃいでると、地方から来たって思われちゃうよ……？」

「そ、そうですね。慣れてますって感じにしないと、みんな変に思われちゃいますよね……」

「そっか！ごめんごめん！」

私のすぐ後ろに立っていたルビィちゃんも、私と同じような意見を話したら、私に注意をされた千歌ちゃんは、それに気が付いてハッと我に帰る。

「あの『ム、s』がいた秋葉原に来たと思うと、つい嬉しくて嬉しくて仕方がなかったんだ……」

「もう、千歌ちゃんってば……」

私と千歌ちゃんが1年生の時以来に来たわけで、ましてや、千歌ちゃんが今も憧れている『ム、s』がいた秋葉原。

千歌ちゃんがはしやいじやうのは分かるけれど、今は我慢してほしいかなって思う。

「今回は東京に遊びに来たわけじゃないんだから、千歌ちゃんしつかりやってよね？」  
「は〜い。分かってます！」

まあ正に、梨子ちゃんの言う通りかな？

今回は東京に遊びに来たわけじゃないし、東京でスクールアイドルのイベントに招待されたから来たわけだから、あまり羽目を外さないように私たちもしっかりしないと……。

「あつ！あそこにスクールアイドルのお店がある！曜ちゃん、一緒に見に行こう！」

「えっ!?千歌ちゃん!？」

「はあ、相変わらずね……」

と思っていた束の間、千歌ちゃんは近くに構えるスクールアイドルショップを目にすると、一目散にお店の中へと入っていく。

梨子ちゃんがさっき話したばつかりなのに、それを忘れてお店の中に入っていく千歌ちゃんの姿に、当の梨子ちゃんは呆れた表情になっていた。

「梨子ちゃんはどうする?？」

「私はいいわ。ここで待つてる」

「分かった！じゃあ私は千歌ちゃんが入ったお店にいるよ。ここは東京だし、人の数も沼津と比べられないくらい多いからね！」

それでその梨子ちゃんかというと、千歌ちゃんがいるスクールアイドルシヨップのすぐ外で待つてると言うから、私が千歌ちゃんのそばにいて、絶対に逸れないように近くにしようと思った。

ここは東京で沼津じゃないし、人の多さは沼津と比べられないくらいからね。みんなと逸れたら、元も子もない。

「うわあ〜！輝く缶バッチがこんなに種類がある！おおっ！このポスター見るの始めて！可愛い！」

千歌ちゃんは『μ s』のグッズが置いてある場所において、バッジやポスターなどを目を輝かせ、多くの『μ s』のグッズを見て喜んでいた。

この時にも私は、千歌ちゃんは本当に『μ s』のことが大好きなんだなって思った。『μ s』の存在があつて、それに憧れて千歌ちゃんはスクールアイドルを始めた。もし『μ s』という存在がいなかったら、今の私たちはなかったのかなって思う。

梨子ちゃん、ルビイちゃん、花丸ちゃん。それに善子ちゃんと、一緒にスクールアイドルをすることもなかったのかもかもしれないと思うと、何だかとても寂しい気持ちにな

る。

でもそれは、もし『μ s』がなかったらの話。

『μ s』がいたから、今の私たちがあつた。

幼馴染みとしてずっと一緒にいた千歌ちゃんや、こうしてみんなとスクールアイドルとして活動している。だから私は『μ s』に対して、数えきれないくらいに感謝してるんだ。

ただ素直に、『ありがとう！』ってね！

そんな中で私は、千歌ちゃんから目を離さないように近くにいながら、綺麗に並べられている制服のコーナーで、色んな制服を物色していた。

お寺の巫女さんの制服や、空港のCAの制服など、このお店にはスクールアイドルのグッズの他、たくさんさんの制服が取り揃えられていた。制服が大好きな私にとっては、正に天国のよう……。

ハッ!?ダメダメそんなのっ!今回はイベントに参加するために東京にやって来たん

だから、こんなことで制服に惑わされちゃ……………えっ？

嘘。コレって、本当にあるの？

「制服が、100種類以上……？ゴクリ……」

そこで私が目にして驚愕したのは、多くの制服が並ぶその横に置かれていた制服雑誌の文字にある。

制服が『100種類以上』と、そう書かれた雑誌の文字に私はゴクリと固唾を飲み込む。そして多くの制服がそのお店に揃っているのかと想像した時に、私は、そのお店にどうしても行ってみたいという欲が、フツフツと徐々に湧き上がっていた。

制服が100種類以上となれば、今まで見たことのない制服がたくさんあって、色々な制服を試着することが出来るのではないかと思う。そう考えた時に私は、ここに居ても立つても居られなかった。

「千歌ちゃん千歌ちゃん。あのね！」

「んっ？どうしたの曜ちゃん？」

「私ちよつと行きたいお店があるから、千歌ちゃんは見終わったら梨子ちゃんと待ってね?」

「う、うん。分かった……」

首を傾げながらも、私の話にうんうんと頷く千歌ちゃんを尻目に、私は制服専門店へと向かう。

スクールアイドルショップを出て、そこから制服専門店までは道のりは意外とそんなに遠くはなく、それよりは寧ろ、すごく近いくらいだった。

「あつ、このお店……だよね?」

私が雑誌で見た制服専門店の場所は、千歌ちゃんがいるスクールアイドルショップの隣隣の隣。

制服専門店『NARIKIRI!!?』という、いかにもって感じの名前でそのお店は開いていた。

「いらつしやいませ〜!」

「うわあ〜!すごい!」

私がお店に入ると同時に、可愛いメイド服を着た私より年上の女性が、私にそう声をかけてくる。

お店の中は制服専門店というだけあって、本当にお店の中は制服だらけ。セーラー服は勿論のこと、メイド服に警察官の制服があつて、チャイナドレスなどの外国の制服まで取り揃えられていた。

私はお店中にあるたくさんの制服に目を奪われ、キラキラと目を輝かせていた。

私の今の表情は、もう誰にも見せられない。

見たらきつと、みんなドン引きしちゃうかもしれない。でも一番に私にドン引きしちゃうのは、多分彼以外ありえないと思うけどね。

「制服のレンタルも出来るんですよ?」

「えっ!?!本当ですか!?!」

「はい!お一人様で2着までレンタルが可能ですので、お決まりでしたらお声をおかけください!」

「はい!ありがとうございます!」



私の後ろから声をかけてくれたその店員さんは、ピンク色のセーラー服を身に纏っていた。今の店員さんの説明では、このお店は、どうやら1人2着までの貸出をしているらしい。

“1日”だけのレンタル貸出らしいけれど、それでも私にとつてはここは天国そのものだった。

1度着てみたかった制服が、今ここで着れるかもしれない。そう思っている私の心は、自然と期待とワクワク感でいっぱいだった。

レンタル貸出は、“1人2着”まで。

100種類以上の中から好きな2着を選ぶのつてなかなか難しいけど、後悔しないよう、しっかり選んでいこうと思う私であった。



「よろしつー！じゃあみんなて明日のライブの成功を祈って、神社の方に……………えっ?」

私は曜ちゃんが言ってた通り、スクールアイドルシヨップのすぐそばで待っている梨子ちゃんの元へと向かい、私たちのカバンを見るようにして待っていた梨子ちゃんがいしたのは確認出来た。

ただそれよりも、ルビイちゃんと花丸ちゃんに、そして善子ちゃんの姿がそこにいなかったの。

私は、その3人と一緒にいたはずの梨子ちゃんにそのことを尋ねたら、梨子ちゃんは善子ちゃんのことだけについて話してくれた。

「ねえ、梨子ちゃん！ルビイちゃんと花丸ちゃんと善子ちゃんはどこ?」

「ルビイちゃんと花丸ちゃんの2人は、私もどこにいるのか分からないの。だけど、善子ちゃんならついさつきあの店に入っていったわ」

「えっ?あつ…………」

梨子ちゃんが指差した方向は、少し高いビルから出っ張り出た看板で、墮天使が大好きな善子ちゃんなら、必ず飛びつきそうな名前だった。

そのお店の名前は、『黒魔術シヨップ 墮天使』  
うん。そのまんまの名前だね。

「善子ちゃんは、あの店に？」

「ええ。間違いないわ」

善子ちゃんがいるだろうというお店は、意外にもスクールアイドルシヨップから程近い場所。だから逸れることはなく、善子ちゃんが合流する時に迷うこともなさそうだった。

ていうかそれよりも、ルビィちゃんと花丸ちゃんはどこに行っちゃったの!?

「ていうかルビィちゃんと花丸ちゃんだよ！2人ともどこに行っちゃったんだろう!」

2人がいないことに心配で、私はどこに行っちゃったんだろうと不安に駆られていた。

でもそんな時に、隣にいた梨子ちゃんが私を落ち着かせてくれて、元々東京に住んでいた梨子ちゃんは、私に的確な指示をしてくれた。

「落ち着いて千歌ちゃん。こういうときは、ルビイちゃんか花丸ちゃんに電話した方がいいわー!」

「えっ!?ど、どうして……?」

「そうした方が、お互いにどこにいるのか居場所も分かるし、電話で話してたら、意外にも近くにいたってこともあるから……」

「う、うん!分かった!電話してみる!」

梨子ちゃんはやっぱすごい。

私たちより都会慣れしてて、凄く落ち着いた雰囲気私に意見を出してくれて、梨子ちゃんと本当に友達になれて良かったと、私は心の中でそう呟く。

そして私は梨子ちゃんに言われるがまま、自分のスマホでルビイちゃんに電話をかける。

2回くらい『プルルル!』というコールの後、『ブツツ!』という音とともに声が聞こえる。

その声は、間違いなくルビイちゃんの声だった。

『はい!もしもし!』

「ルビイちゃん?私、千歌だよ!」

『あつ、千歌さん!』

ルビイちゃんは私だと気づくと、少し嬉しそうな声が電話越しに分かる。

するとルビイちゃんが電話越しで、私たちがどこにいるのか尋ねてくる。彼女の声からして、やっぱりどこかで迷子になっているみたいだった。

『千歌さん!今どこにいますか!?!』

『マルたち、迷子になっちゃったずらく』

そしたら花丸ちゃんの声も同時に聞こえてきて、2人は一緒にいるんだということが分かって、私はホッと一安心する。

でも、2人はどこにいるんだろう?決して遠くには行っていないと思うんだけど……。

「落ち着いて2人とも。今どこにいるの?」

『それが……私も花丸ちゃんも分からないんです。秋葉にいるのは分かっているんですけど、大きなビルが立ち並んで、どこがどこだか……』

ルビイちゃんと花丸ちゃんは、今のやり取りで私たちから比較的近いところにいそうな感じだったけど、ルビイちゃんの声は不安そうな声だった。

まだ私の中では安心出来る範囲だったから、私は梨子ちゃんが私にしてくれたのと同じようにして、電話越しに2人にひたすら質問を繰り返していく。

「落ち着いてルビイちゃん。2人は今、大きなビルがたくさんあるところにいるんだよね？」

『はい。そうですけど……』

「今いるルビイちゃんたちの周りに、なにか目印になりそうなものは何かない？」

『ええっと、目印、目印……』

『大きな看板に、“SEGA”って書いてあるぞら』

「……！」

その中で私は、花丸ちゃんの言い放った言葉に反応して、もう一度2人に質問をする。

「その他には!？」

『他には、緑色の橋に電車が通つて、あとは目の前に大きな道路があるんですけど、人がたくさんいて車が一台も通つてないんです』

「えっ!?!なにそれ!?!」

私の質問に答えたルビィちゃんの言葉には、私には理解できないような言葉だった。

緑色の橋に電車を通っているのは、何となく私も理解できるけど、大きな道路に人がたくさんいて、それなのに車が一台も通つてないってどういうことなんだろう？

私には全然出来ないと悩んでいた時、私の電話でのやり取りを聞いていた梨子ちゃんが、私にそのことについて話してくれた。

「千歌ちゃん、それはきつと歩行者天国よ」

「歩行者、天国……?」

「一時的に道路を封鎖して、その道路を歩行者専用の道路にすることの呼称なの」

「そ、そうなんだ」



“歩行者天国”というものが、今尚ルビイちゃんと花丸ちゃんの目の前で起きているんだと思った時、梨子ちゃんは話を続ける。

そしてその話が、私をある決心へと導く。

「その歩行者天国は、ここからすぐ近いわ」

「えっ!?!本当!?!」

「ええ。この街をまっすぐ行けば歩行者天国に行き着いて、きつと2人も見つけられると思う」

「そっか。なら私、2人の迎えに行ってくる!」

私は梨子ちゃんにそう告げて、行方が分からなくなっていたルビイちゃんと花丸ちゃんの迎えに行こうと決心した後、私はルビイちゃんに電話で話す。

できるだけすぐ見つかると、私はルビイちゃんに対して、そこから動かないようにと話をした。

「ルビイちゃん! 私が今からそっちに向かうから、できるだけそこから動かないでね! 花丸ちゃんにもルビイちゃんからそう伝えて!」

『は、はい！分かりました！』

ブツリッ！

そんなやり取りをした後でルビイちゃんとの電話を切り、私は梨子ちゃんに告げる。

「よし！じゃあ私行ってくる！もし曜ちゃんと善子ちゃんが帰って来たら、2人に伝えてー！」

「うん！気を付けてね！」

「うんっ！」

未だ帰ってこない曜ちゃんと善子ちゃんに伝えておくようにそう伝えて、背後から梨子ちゃんに見送られながら、私は2人の元へと走っていった。

2人の居場所を何とか見つけられて、私はホツと安堵しているけれど、同時にAqoursのリーダーとして私は、全然ダメだなんて思っている。

リーダーである私が率先してみんなを引っ張っていかなきゃならないのに、スクールアイドルシヨップで騒いだり、今みたいにメンバーが逸れちゃったりと、グループ内の仲

間の面倒を見れていない私は、A q o u r s のリーダーとして全然ダメだなうって……

私はこうなってしまったことに

責任を重く感じていた。

## #40 『憧れ』がいた場所

ひとまず、みんなが逸れずにいて良かったと私は思っている。

私たちは逸れることなく、無事に合流することが出来たものの、東京の街を充分に見て回れた？と聞かれれば、全くそうではない。

ルビイちゃんと花丸ちゃんの2人を私は見つけて、何とか梨子ちゃんが待っている場所に戻つてはこれだ。ただ今度は梨子ちゃんがいなくなつて、一時は、みんなと合流出来ないんじゃないかって、私は心の中でそんな心配を抱えてしまっていた。

だけど、梨子ちゃんはすぐに戻ってきた。

何か本みたいなものが入つていそうな袋を持っていて、同時に嬉しそうな、満面の笑みを梨子ちゃんやさんは浮かべて、私たちの元に戻ってきた。

曜ちゃんと善子ちゃんに関しては、それから10分後に私たちのところに戻ってきた。

曜ちゃんは私服からものすごく格好が様変わりをしていて、神社の巫女さんが着ている白と赤の着物を身に纏い、『えへっ♪』と笑みを浮かべる。

善子ちゃんはというと、やっぱり堕天使ヨハネというべきか、両手いっぱい紙袋を持ち、袋の中身は黒魔術の道具がたくさん入っていた。それをどう使うのかは、私には分からないけどね。

「もう〜！時間なくなっちゃったじゃん！秋葉原にある神社、じっくり見ようと思つたの〜！」

私たちは秋葉原にある神社、『神田明神』に向かっている。私が憧れている『μ's』が練習していた場所と言われていて、車が行き交っている大きな道から小さな道に入つて、私たち6人はそこに向けて足を運んでいた。

「曜ちゃんもそんな格好して……」

「だって、みんなで神社に行くつて言つてたから！千歌ちゃん、似合ってますでしようか？」

「その服で敬礼はないと思うな……」

曜ちゃんは巫女服のまま、それとは全然違う行動をしてみせ、いつもの敬礼をビシツとしていた。

私から見て、巫女服は着物っぽく見えるから動き辛いんじゃないかって思ってしまった。けど曜ちゃんは余裕の表情を見せているから、そこまで動き辛い服じゃあないんだな〜って思った。

そうやって考えながら歩いているうちに、私たちは目的の『神田明神』に辿り着く。

「ここだ。やっと着いた！」

「ここが、神田明神……」

「大好きなμ、sが、練習してたって場所……」

みんな神田明神を目の前にして、『μ、s』がいたとか、その他に何かしらの思いを馳せていた。

目の前にそびえる階段は、かつて『μ、s』が練習していた階段で、私はとても嬉しかった。だって『μ、s』が登ってた階段だよ？ここで、ライブを目指して頑張っていた場所なんだよ？

嬉しくないわけじゃないじゃん!!

「登ってみようよ!」

「うん! いいね!」

「私も登ってみたいです!」

ルビィちゃんも私と同じような反応をしてみせ、神社へと通じる階段に私と同じように目をキラキラ輝かせていた。

「よーし! じゃみんな行くよ!」

「」「」「おーう!」」「」

それで私は、みんなに向かってそう言い放って、その後で目の前の階段を一段一段、駆け上がるように登っていく。

大きな石とコンクリートで作られたその階段を、1つ1つ足に地をつけるようにして駆け上がり、最後に私はジャンプして、私は階段を登りきる。

他のみんなも、私に付いてくるように階段を駆け上がっていたけれど、初めて登った

階段で、私たちの息はいつもより格段に上がっていた。

「はあ……はあ……」

淡島神社の階段で鍛えているはずなのに、μ s が練習していたこの階段は、私たちが鍛えている淡島神社の階段の、その倍以上にきつかった。

これが、『μ s』が練習をしていた場所なんだと思った時、この階段を登ってみて、改めて私はそう感じる事が出来た。

「みんな、大丈夫？」

「うん。ちよつと疲れちゃったけど……」

私のみんなへの問いかけに、梨子ちゃんが呼吸を少しづつ整えながらそう答える。

他のみんなも、曜ちゃんできさえも呼吸が上がっているのだから、やっぱりこの階段は、とてもきついの一言に尽きる。

そんな風に自分の心の中で、自分の思っている事を整理している時、神田明神の境内で、なにか人の声が聞こえてきた。



「~~~~~♪」

「~~~~~♪」

話している声じゃない。しかも2人……。

歌ってるような、そんな感じの声に聞こえる。

あまりにも私は『えっ?』って感じで驚いていたから、私はちゃんとその声に耳を澄ます。

それが私には「歌を歌っている」と理解できた時には、私は境内の本堂に視線を向けると、私と同じ年くらいの女子高生の2人組が、本堂に向かって綺麗な声で歌っていた。

「感じよう♪」

「し〜っかり♪」

「今立〜つて〜る〜場所♪」

「Self Control♪」

私はその声が気になって、もっと近くでその声を聞いてみようと思った時、私の正面

から突風が吹いてくるくらいに2人の歌声は力強くて、彼女たちの歌声に私は吸い込まれそうだった。

「さういこう〜♪」

「……………す〜」

思わず歌の感想を口からこぼすと、彼女たちの歌が終わり、くるつとこつちに振り向いてくる。

2人とも同じ制服を身に纏っているから、どこかの高校生なのかな？私から見ても左の女の子は私よりも大人びた感じ。頭の右側にはサイドテールにしている、身長も私より少し高い。

右側の女の子の特徴は、ルビィちゃんの同じツインテールの髪型にしてるところかな？身長もルビィちゃんくらいにそこまで大きくはない。

そんな2人の容姿をまじまじと見ていたら、左の女の子がにこやかに笑みを浮かべて、私たちに礼儀よく挨拶をしてきた。

「いんにちはー！」

「こ、こんにちはっ!」

「この子……脳内に直接……!」

「違うずらっ!」

それがあまりにも唐突で、私は慌てながらその人に挨拶を返す。

善子ちゃんは花丸ちゃんの後ろに隠れながらも、相変わらずの“墮天使”を發揮している。だから善子ちゃんは花丸ちゃんに任せ、私は正面にいる2人組と向き合っていた。

すると左の女の子が私たちをじっと見て、何かを思い出したのか、私たちに問いかけてくる。

「あれ?あなたたちは、もしかして……Aqoursの皆さんですか?」

「「「「えっ!」」」」

その問いかけに、私たちみんな驚いた。

私たちAqoursのことが、他の学校の生徒にまで知れ渡っている事に、私はとても嬉しいという感情が、心の奥底から湧き上がっていた。

それを表情に出したくても出せなかった私は、ひとまず彼女たちの質問に答える。

「あつ、はい！そうです！」

「マルたち、もうそんなに有名人!？」

「PV見ました。とても素晴らしかったです」

「あ、ありがとうございます！」

この人、私たちのPVまで見てたんだ。

なんか嬉しいな。まさかここでそんなことを言われるなんて思ってもいなかった。

「明日のイベントでいらしたのですか？」

「はい！」

「そうですか。楽しみにしています！」

そして彼女と私の間でやり取りを交わしたあと、彼女はそう言っただけで私たちの横を通り抜け、ゆっくりとした足取りで神社を後にする。

けど、もう一人のルビィちゃんと同じ容姿をした女の子は、その人について行かず、そ

の場でずっと立ち止まっていたままだった。

なんであの人に着いていけないんだろうと、私を含め、みんな同じようなことを考えていた。

そして先人去っていった女の子がその子の名前を呼んだ瞬間、その子は、私たちに向かって一目散に走ってきたんだ。

「……理亞！」

「……っ！」

「えっ……!?!」

あまりにも突然にその子が走り始めて来たから、『このままじゃぶつかっちゃう!』って思ってたんだけど、彼女が見せた身体能力の高さに、私たちはみんな驚きを隠せなかった。

ツインテールの女の子はまず側転をして、それからバク転の後に私たちの上を超えるくらい大きなジャンプをする。

体をひねりながら大きくジャンプしたその子は、私たちを頭上を越える時、私たちに向かって余裕の表情の『笑み』を浮かべていた。

「うわあ〜！す〜いずら〜！」

「……………」

特に花丸ちゃんが、その子の動きに対してとても驚愕していた。けれどツインテールの女の子はまた無表情に戻っては、名前を呼ばれた女の子の元へと足を運んでいく。

サイドテールの子が呼んでいた『理亞』っていう名前が、ツインテールの子の名前なのかな？

多分、きっとそうだと思うけどね……。

「では！失礼します！」

そしてそう言っていたサイドテールの女の子は、私たちに対してそう言い残した後、颯爽と私たちの前から2人は姿を消したのだった。

「す、凄いです！」

「東京の女子高生って、こんなに凄いずら？」

「あつたり前でしょ！東京なのよ、東京！」

2人の姿が見えなくなつてからは、花丸ちゃんと善子ちゃんの2人が東京の女子高生について色々議論を始める。

ただ私の中では、あの子があんなことをするのが出来るだけだと思つてる。東京の女子高生全員が、今のを簡単に出来るとは限らないと思うから。

そんな風に、花丸ちゃんと善子ちゃんの話の展開に色々と考えていた私だけれど、それとは裏腹に、さつき出会つた2人組のあの歌声が、私の頭や耳に残つていた。

力強くて、魅力的で、吸い込まれそうで。

それくらい、とても綺麗な声だった。

「歌、綺麗だったなあ……」

彼女たち2人が去つていった方向をじつと見つめながら、私はあの2人の歌声に感動していた。

そして私にもあれくらい歌えたらなつて、密かに私は、2人の歌声に憧れていたのであつた。

～  
～  
～  
～  
～  
※※※※※  
～  
～  
～  
～

その後、私たちは梨子ちゃんの案内で、私たちが今日泊まる旅館まで連れて行ってくれた。

『鳳明館』

その旅館が、今回私たちが泊まる場所。



「はあ、落ち着くずら〜！」

「なんか、修学旅行みたいで楽しいね！」

「気に入ってくれたみたいで、嬉しいわ！」

私の家の旅館と同じで主に和室だから、みんなで私の家に泊まっているのとあんまり変わらなくて、みんなはゆつくりと寝間着でくつろいでいた。

そんな中で私は、部屋の外で電話をしていた。

その相手はもちろん、遼くんだよ。

『無事に宿に着いたのか？』

「うん。梨子ちゃんが紹介してくれた旅館、すごく落ち着くし、何か修学旅行みたいで楽しい」

『そうかい。そりや良かったな』

実は、私から電話をかけたんだ。

何というか、一応の報告……みたいなの？

『でもただよ、そんな観光気分で明日のイベントに参加するんじゃないやねえぞ？今回は、そっちがメインで東京に行ったんだからさ』

「む〜！遼くんと言われなくても分かっているよ！」

私は遼くんの話に対して膨れっ面で怒り、遼くんに向かって私は怒鳴るようにそう言い放つ。

でも彼には全く効果はなくて、それよりも以前に私が今言い放った言葉自体が、私の強がりだということが彼にはお見通しだった。

『本当か？今のお前の言葉、ただのバカの強がりの言葉にしか聞こえないけどな？』

「……っ！なんで分かるの？」

『お前の性格上で考えた上だ、ド阿呆』

『ド阿呆』という一言多い言葉に、私も少しだけ腹が立った。けど全くもって私は、遼くんには敵わないと感じていた。

“幼馴染み”だからとか、そういう事じゃなくて。

遼くんは周りを見て、私たちよりも一歩先の事を考えているような感じがして、だから彼は私にそう言えるんだろうなって……。

何となく、私はそう感じていた。

『とにかく、明日は本当に大丈夫か?』

「うんっ! 大丈夫!! 明日のイベントは、みんなで精一杯頑張る! 私たちを見てくれるたくさんの人に、目一杯にアピールしてくるよ!」

『そうかい。頑張れよ!』

「うんっ!!」

そして遼くんとは、そんなやり取りをする。

彼の口からはすごく不安そうな声が聞こえてきたけど、私が『頑張る!』というフレーズを発せば、彼も『頑張れよ』ってエールを送ってくれた。

その言葉に私は『やってやるぞ!』って気合いが湧いてきたけど、同時に期待されているということ対しての『不安』も頭の中でよぎる。

これがプレッシャーなんだって感じていた頃には、彼の方から電話を切る言葉を発していた。

『じゃあ切るぞ。千歌、おやすみ』

「うん。おやすみ遼くん」

私もその言葉に対して彼にそう言つて、その後には彼の方から『ブツツ』と電話が切れる音がして電話は終わる。

遼くんとの電話を終えてホツと一息ついた私は、暗くなつたスマホの画面をじつと見つめる。今にも思えば、彼からみんなからの期待による『不安』を消せる方法はないかなつて聞けば良かった。

そうすれば、明日に不安を残さないでイベントに臨めるし、何より遼くんならその方法を知つてると思っていたからなんだ。

でも結局、何も聞けずに終わってしまった。

私は、それに対して深く後悔したのだった。

「あつ、千歌ちゃんおかえり！」

「随分と長く話してたわね」

「うん。少し話が長くなっちゃった……」

それで私はみんながいる部屋へと足早に戻ると、みんなはテーブルを囲み、テーブルの中心に置かれた饅頭をモグモグと食べていた。

そんなみんなに私は、遼くんから電話で伝えられたメッセージをみんなに伝える。

「遼くんからは、『頑張れよ』って言ってたよ」

「本当？じゃあ明日は目一杯頑張らないとね！」

「はい！みんなの期待に応えないと！」

そしたらみんなは遼くんのエールの言葉に喜び、彼のみに関わらず、よしみちゃんたちからの期待にも応えようって、みんなやる気を溢れさせていた。

ただ私の頭の中には、不安と恐怖があった。

みんなの期待に応えられなかったらどうしようとか、そんな感じの不安や恐怖の方が、期待よりも頭の中にはあった。

でもそれを、みんなには言えない。

だって私はA q o u r s のリーダーだもん。

「じゃあ今日はもう寝よっか」

「そうですね！明日はライブですし！」

「じゃあお布団敷くずら〜！」

そして曜ちゃんの一言で、ルビイちゃんと花丸ちゃんが自主的に布団を敷こうと動き出す。

押し入れに押し込まれていた布団と枕を6つずつ引つ張り出し、テーブルを部屋の端に退け、6人がちゃんと寝れるよう左右に3つずつ布団を敷く。

私の両端には曜ちゃんと梨子ちゃん。反対側には善子ちゃんと花丸ちゃんとルビイちゃんの3人が川の字に並んで寝転がる。

みんながふかふかの布団を自分の体に掛けたのを見た私は、頭上にある電気を消す前にみんな尋ねる。もちろん、一応の確認だよ。

「じゃあ消すね？」

「「「は〜い！」「」」」

うん。みんな大丈夫みたい。

そうして私は部屋の電気を消し、みんなは明日のイベントに向けてぐっすり眠る。

私も明日のライブに万全の状態で臨めるように、ギユツと目を瞑って寝ようとしていたんだけど、みんなからの期待による不安と恐怖が頭の中でぐるぐるして、なかなか眠れなかった。

ダメ、全然眠れないよ。

明日は肝心のライブなのにと、やや少し項垂れながら私は体をゆっくり起こす。

すると何故か窓側の襖が開いていて、私は何で？ って顔をそっちに向けると、襖に寄りかかり、団扇を持って満月が顔を出している夜空をじつと眺めていた梨子ちゃんの姿があった。

「梨子……ちゃん？」

「千歌ちゃん。眠れないの？」

「うん。ちよつとね……」

梨子ちゃんも、私と同じで眠れないみたい。

そのことに無意識に安堵しきっていた私に、梨子ちゃんが顔を覗き込むようにしながら、私が抱えている悩みについて尋ねてきた。

それに私は、ドキッと心が弾む。

「緊張、してるの？」

「……………うん」

やっぱり私って顔に出やすいのかな？

遼くんは性格上で分かるって言ってたけど、私は梨子ちゃんの間いかけになんの言い訳もせず、素直にうんと首を縦に振る。

本当なら梨子ちゃんにも話したくはなかったんだけど、このままずつと自分の中で悩みを抱えているのも嫌だから、私は緊張している理由を梨子ちゃんに話すことにした。

「私ね、実は怖いんだ」

「えっ？」

「沼津から出発する時、みんな見送りに来てくれたでしょ？みんなが来てくれて、すごい嬉しかったんだけど、同時にみんなの期待に応えなくちゃって、失敗できないなって



思って、怖いの」

「千歌ちゃん……」

きつと梨子ちゃんも、私と同じで緊張していると思う。こうしてぐっすり眠っているみんなも、私と同じプレッシャーを感じているんじゃないかって、私はそう思っていた。すると梨子ちゃんは、何故か笑っていた。

「なんか、前の私と一緒にね」

「えっ? どうしたの梨子ちゃん?」

唐突にそんな事を喋り出す梨子ちゃんに私はそう尋ねると、彼女は自分の昔の話をお話してくれた。

それは、梨子ちゃんが中学生から高校生に上がるときの話だった。

「千歌ちゃんの気持ち、よく分かる。私も高校生になった頃、中学の時にピアノの全国大会に出ていたから、凄くみんなから期待されちゃってたの」

「梨子ちゃんも……?」

「うん。みんなの期待にちゃんと応えないとって、いつも練習ばかりしてた。でも結局、大会で上手くいかなかった……」

「そう、だったんだ……」

だんだんと顔を下げながら話していく梨子ちゃんの話聞いていたら、梨子ちゃんも、以前に私と同じ思いを抱えていたことに驚きだった。

でもその話を聞いていて、私の今抱えていることの不安が、少し消えたような感じにはなった。けれども、全ての不安がなくなったわけじゃない。

明日のイベントには、凄く不安はある。

でも今は、そう考えてはられない。そうじゃないと、みんなの期待を裏切ることになっちゃう。

それだけは、絶対に嫌だった。

「ごめんね。全然関係ない話しちゃって……」

「ううん。ありがとう梨子ちゃん」

自分の昔の話をしてくれた梨子ちゃんに、笑顔を浮かべて私はお礼を言う。

明日のライブは、みんなで全力で臨む。

“期待される”って本当はどういう意味なのかよく分かってないけど、私はみんなと一緒に頑張つて、イベントのライブを成功させたい。

だって、もうここまで来たんだもん。

ここで後戻りなんて、絶対に出来ない。

「寝よう。明日のために！」

「…っ！うんっ！」

そうやって私と梨子ちゃんは、明日のイベントのために寝ることにした。

明日のライブは絶対に成功させてやる！

私はそう心から、決心を決めたのであった。

## #41 現れた強敵

朝 今の時間は6時半。

昨日梨子ちゃんと話をした後、あの時全然眠れなかった私は、あれからすぐに眠れるようになった。

ものすごい、一瞬ではあるけれど……。

「ふわあ……ああ……」

まだ布団でみんなが眠っている中で、私は目覚めて布団から起き上がる。

外は近くで小鳥がさえずり、私に朝を知らせてくれている。それにカーテンの隙間からは朝日が差し込み、私は外を見られずにはいられなかった。

「わあ、良い天気〜！」

カーテンの隙間から顔を覗けば、空は快晴で雲が一つもない晴れやかな青空。

旅館の近くで鳴いていた小鳥は空を飛び立って、私が初めて東京で迎えた朝はとても清々しかった。

「すう……すう……」

「んっ……墮天、使……」

「……………」

私は外を見て、朝の東京の街中をランニングでもしてこようかなって思っているけど、まだみんなは布団で眠っていて、起きているのは私だけ。

みんなを起こして、一緒に東京で街をランニングしようと考えはした。けれどこのときの私は、少しばかり悪になっちゃった。

……………よしっ！

私は一人抜け駆けして、東京の街中をランニングすることを決心する。

寝間着からいつも着ている練習着に着替えた後、みんなを眠りから起こさないようにそつと部屋を出て、それから外に出る。

太陽の日差しがとても眩しい。

でも、ランニングにはもってこいの朝。

日差しを右手で隠しながら空を見上げ、しばらく準備運動をした後に私はランニングを始める。

「よしっ！行こう！」

旅館を出発点に閑静な住宅街の中を走って行き、神田明神の前、秋葉原の歩道、巡り変わる東京の街並みを眺めながら、私は目的の場所へ向かって駆け抜けていく。

その向かつてる“目的の場所”っていうのは、私がスクールアイドルを始めるきっかけをくれた場所であって、初めて“μ's”を見たところでもある場所。

“UTX”と書かれた大きなビルと、そのビルに設置された大きなスクリーン。それがある場所が、私がもう一度行ききたかった場所だった。

「はあ……はあ……」

そこまで走り終えた私は、目の前で立ち止まる。

両手を膝につき上がった息を整え、汗が頬を伝う顔を上へ見上げれば、つい3ヶ月前にも見たことのあるスクリーンが私の目に映る。

ここで初めて見たんだ……スクールアイドルを！

そして、μ，sを……！

スクリーンの画面はまだ真つ暗ではあるけれど、あるとき見たスクールアイドル『μ，s』は、とても輝いていた。

私と同じ、普通の高校生なのにね……。

「千歌ちゃん！」

「……っ！みんな……」

そうやって『μ，s』に対して思い耽っていた私に向かって、曜ちゃんの声が聞こえてくる。

私はその声が出た後ろを振り返ると、私を走って追いかけて来たのか、練習着を身に

纏い、息が上がっているみんなの姿があった。

「やつぱりここだったんだね！」

「うん。もう一度、行ってみたくて……」

「でめ練習行くなら声かけてよ！」

「そうよ！一人で抜け駆けなんてしないでよね！」

曜ちゃんは私がどこにいるのか分かっていたみたいだけど、梨子ちゃんと善子ちゃんには一人で抜け駆けをしたことで怒られちゃった。

ただ抜け駆けというより、梨子ちゃんたちみんながぐっすり寝てたから、起こすにも起こさなかったのが理由なんだけどね……。

「帰りにみんなで神社でお祈りするぞら〜！」

「うふふっ！だね！」

「うん！帰りはそうしょっか！」

「ヨーソロー！」



それで帰りは花丸ちゃんの提案で、ライブの成功を祈って神田明神でお祈りをすることになった。

花丸ちゃんの提案に誰も否定する人はいなくて、ルビィちゃんをはじめみんなが賛成だった。

そして次の瞬間、大きなスクリーンに映像と、それを演出するための音楽が流れ始める。それを目の当たりにした私たちは、特に私とルビィちゃんはその映像に驚いた。

「ラブライブ……」

「今年のラブライブ！が発表になりました！」

ラブライブの開催。

決勝の会場はアキバドーム。

初めてスクールアイドルを見た場所で、いきなりその映像が突然流れ出すから、その映像に私の目が止まって、釘付けだった。

だけど、曜ちゃんの一声で我に帰る。

「千歌ちゃん、どうするっ？」

「……………」

『ラブライブに出る？』

そんな遠回しな感じに尋ねてくる曜ちゃんのその言葉に、私は映像を見ながらも、ちゃんと気持ちが変わるようになんかに話す。

ラブライブに出るのが、私たちの目標だから。

「もちろん出るよ！*μ's*がそうだったように！学校を救ったように……！」

それに、私たちの学校の統廃合も阻止しないといけないから、やることはとてもいっぱいある。

ただ今は、今日のイベントに全力で臨んで、みんなが期待してくれている通りの結果が得られるように頑張りたいと思った。

そう思った私は、みんなに声をかける。

「さあ、行こう！今、全力で輝こう！」

「……うん！」

みんなの前で自分の右手を前に差し出し、いつものアレをやらうと言葉とジェスチャーで促す。

それをみんなは分かってくれて、笑顔で躊躇う事なく私の上に手を5人は重ねて、円状に円陣を組んで空に向かって叫んだのだった。

『A q o u r s ~ ! サ ~ シ ャ イ ~ シ ~ !!』

イベントの結果は、私たちにとって絶対に恥ずかしくないものにした。

みんなで全力で頑張つて、今の私たちの現在地を明確にしたい。

みんなそれぞれ気持ち胸に秘め、私たちはU T Xと書かれたビルを後にして、神田明神でイベントの成功をお祈りをしていくのであった。

~~~~~※※※~~~~~

「ランキング……ですか？」

「そうそう！会場にいるお客さんの投票でね、出場するスクールアイドルのランキングを決めることになったの！」

「そうなんですか」

イベントの会場に着いた私たちを待っていたのは、薄ピンク色の縁取りが印象的で、眼鏡をかけたお姉さん。

一見して、今回のイベントの係員って感じには私は見えないけれど、それを言っちゃったら、絶対にこのお姉さんに怒られちゃうよね。

うん、間違いなくそうなると思う。

「これで上位に入れば、一気に有名になるチャンスってことですか？」

「まあ、そうね。それで A q o u r s の出番は 2 番目!! だから、元気にはっちゃけちゃつてね！」

「は、はあ……」

それで私たちは、その係員のお姉さんに促されるまま、私たちは控え室に案内される。私たちの出番が最初の方なんだって分かったときは、梨子ちゃんとルビィちゃんが話した事と、私は同じことを思っていた。

「2 番目……」

「前座ってことね」

「仕方ないですよ。周りは全部、ラブライブの決勝に出たことがあるグループばかりですから」

「そうずらか……」

前座。

きつとこのイベントの盛り上げ役として、私たちを抜擢したんだと思う。私たちの後

にはラブライブに出場しているグループはたくさんいるから、仕方ないと思う。

でも、これはチャンスなんだ！

この絶好の機会、逃すわけにはいかないよ。

「でもチャンスなんだ！頑張らなきゃ！」

そうやって私たちは控え室に向かうと、既に多くのスクールアイドルグループが控え室にいた。

ステージ上で歌う衣装に着替えているグループもすでについて、この人たちみんながラブライブの決勝に出たことのあるグループなんだって思うと、俄然私のやる気はさらに上がる。

それに、間近で他のスクールアイドルのグループも見れるから、いい意味で一石二鳥だと思う。

「梨子ちゃん、緊張してる？」

「そりゃ……もちろんよ」

控え室のカーテンに仕切られた場所で、みんなで衣装に着替えてるときに、曜ちゃんが梨子ちゃんにそんなことを尋ねていた。

梨子ちゃんとは昨日の夜に話をしたけれど、彼女もこのイベントに対して緊張を抱いていた。

すると曜ちゃんが、梨子ちゃんの緊張を解すために「いつもの」をし始める。梨子ちゃんにも、それをやるように促しながらね。曜ちゃんがいつもしているそれは、緊張を解す「おまじない」だってことは私も理解してるんだ。

「じゃあ私と一緒に敬礼！おはヨーソロー！」

「お、おはヨーソロー？」

「緊張が解けるおまじないだよ！」

「ありがとう！曜ちゃん！」

曜ちゃんの「おまじない」は凄いんだ。

私も絶賛するくらいなんだから！もし緊張する事があった時に『おはヨーソロー！』って緊張を解せば、何もかも上手くいく気がするくらい！

梨子ちゃんは曜ちゃんにお礼を言い、2人で笑顔で笑い合っていた。

ただ、1人だけ感情が正反対の子がいる。
すごく人見知りな子、ルビイちゃん。

「うう……や、やっぱり無理です……」

だけど人見知りという性格よりも、きつとライブで失敗しないかとネガティブに考え
ちやつてるのかもしれない。

イベントのライブを目前にして、ルビイちゃんはその場でしゃがんで1人縮こまって
しまった。

「うっ、ぐっ……ひつく……」

「ル、ルビイちゃん……」

弱々しく怖がるルビイちゃん。

そんな彼女に私が何か一声かけようと考えていた瞬間、花丸ちゃんがルビイちゃんの
肩に手を置いては、優しい声でルビイちゃんを元氣付ける。

「ルビイちゃん。ふんばルビイずらー！」

「花丸ちゃん……うん！」

ルビイちゃんの名前を掛け合わせ、花丸ちゃんはルビイちゃんに『負けないで！』つて声をかける。

そのおかげでルビイちゃんは表情を明るくなり、花丸ちゃんを正面にして笑顔になった。

ルビイちゃん、元気になってよかった。

「A q o u r s の皆さ〜ん！準備お願いしま〜す！」

「「「「「……っ！」「」」」」

そしてちょうど、係員が私たちを呼んでいる。どうやらもう時間で、出番が回ってきたみたい。

よしっ！このライブは絶対に成功させてやる！

「じゃあ行こう！みんな！」

「「「うんっ！」」」」

私はみんなに向かってそう声をかけ、係員の指示に従ってステージの舞台袖で私たちは待っていた。

「す、すごい人です！」

「だ、だだだ……大丈夫よ！」

ルビィちゃんは舞台袖の幕から顔を覗かせては、観客席にいる人の数を見て驚いていた。

善子ちゃんもそれを見て驚いて、ルビィちゃんの言葉に対して『大丈夫』と安心させるような言葉を投げかける。けど善子ちゃんも緊張しているせいで、全然大丈夫そうに見えるなかった。

「善子ちゃんも緊張してるぞら」

「うっさい！」

体を震え上がらせている事によって、花丸ちゃんに彼女は言われてしまう。善子ちゃんも弁解の余地もなく、ただただ花丸ちゃんに『うっさい!』と嘆いていた。

ルビイちゃんもさつきよりも元気になったから、緊張とかそういうのは、もう大丈夫だと思った。

1年生3人のやり取りを見ていて、私も曜ちゃんも梨子ちゃんも笑みを浮かべる。緊張してる面持ちもスツキリなくなって、いい雰囲気ですらライブに臨めると、私はそう感じていた。

そしたら次の瞬間、2つの足音が鳴り響き、私の耳に入ってくる。

コツン……コツン……

誰かが来る。私は気になって後ろを振り返った時に、私はその“2人”の姿を見て驚きを隠せない。

足音を鳴らしながらゆっくりこっちにやって来たその2人は、神田明神で歌っていたあの2人、私たちのことを知っていたあの2人だった。

「よろしくお願いますねー!」

「スクールアイドル……だったんですか？」

私は見れば分かるのに、ついサイドテールの子にそんな質問をしていた。

私のすぐ後ろに立っているみんなでさえも、この人たちがスクールアイドルだったことに驚きを隠せないでいた。

そんな時、サイドテールの子は答える。

「あれっ？言ってますませんでしたっけ？なら自己紹介しますね。私は鹿角 聖良。こっち

は妹の理亞」

「……………」

鹿角 聖良に、鹿角 理亞。

2人は姉妹らしくて、姉妹でスクールアイドルとして活動しているみたい。

お姉さんである聖良さんが、私たちに對して質問に答えているけど、妹の理亞ちゃんは何も言わず、ただ私たちを睨みつけていた。

どうしてそんなに睨みつけられるんだろうと考えていたら、司会の人がトップバッターである2人の名前を叫ぶ。

「では、トップバッターはこのグループ！」

『SAINT SNOW〜!』

『『『『キャアアアア!』』』』

『SAINT SNOW』

その名前が2人のグループの名前なんだって分かったとき、聖良さんがステージに出て行く間に、私たちに振り返って言い放った。

「是非見ていってくださいね!私と理亜の……SAINT SNOWのステージを!」
「……………」

私は聖良さんの言葉に対して返す言葉もなくて、聖良さんに言われるがまま、彼女たちの歌とパフォーマンスを見ることにした。

同じ前座という立場ではあるけれど、ライブを目指す上で、この人たち以上に頑張らなければならない。そうしないと、絶対に「出られない」という感情に、私は……みんなはさせられた。

「最高くだと 言われたいよ〜 真剣だよ〜」

「We gotta go〜♪」

ロック的な曲調に、自分たちの心情が込められた歌詞。2人それぞれ違うダンスは、今の私たちよりもキレは格段に上。

1分から2分の間で見せられた光景の中で、私たちと彼女たちの間に歴然とした差があることを、私は目の前でまざまざと見せつけられた。

「遠くくの光へ〜 もつとBaby〜♪」

「一緒に〜飛びたい〜 もつとBaby〜♪」

「震える指先〜 知ってても 見〜な〜い〜で〜♪」

「大切なのは SELF CONTROL〜♪」

曲の演奏が終わって、SAINT SNOWのライブが終わって、次は私たちAqoursの番。

それなのに私は、SAINT SNOWのライブを見て口にする言葉が見当たらず、

なんて言っていないのか自分でも分からなかった。

“圧倒”された。

せめて、強いて言うならその言葉。

一言も話せないくらいに“衝撃”を受けた、という感じで受け身になったわけじゃないけれど、私の心の中で不信がざわめいていた。

『みんなでなら大丈夫だよね?』

『みんなで精一杯練習して来たんだもん!』

『大丈夫だよね?大丈夫だよね?!!』

胸中で自分に何度も何度も問いかけている私に、またあの不安が頭をよぎり、重くのしかかる。

そのとき司会の人は、イベントの進行を進める。

「続いて!今、人気急上昇中のフレッシュなスクールアイドル、Aqoursの出番です

！」

『『『『キャアアアアア！』』』』』

私たちAqoursの名前を呼ぶと、客席のお客さんから黄色い歓声が湧き上がる。その歓声にビクツと体を跳ねさせる私に気づいた曜ちゃんが、背中から優しく声をかけてくれた。

「千歌ちゃん！」

「……………っ！うん！」

大丈夫。みんなでならきつと出来る。

その気持ちを全面に、全力でライブで出せば、きつと結果はついてくると思う。

その思いを胸に抱きながら、私たちはステージに登る。客席から私たちを見つめる視線が注がれる中で、今出せる最高の全力を尽くして、全力のライブをするのであった。

4 2 感じた実力の差

今日の内浦は、とても静かである。

あいつらがいないのもそうではあるけれど、それだけでそれを「寂しい」とかは全然感じてない。それより寧ろ、これくらいの静けさが良いくらいだ。

今日も天気は曇りもない快晴だ。太陽は俺のほぼ頭上、真上にまで上がり、そこから俺の脳天を焼き尽くしてしまいそうなくらいの直射日光の強さ。

そんな頭上から降り注ぐ直射日光を受けながら、俺は防波堤の上から海の波や音を聞きつつ、とある人物と待ち合わせをしていた。

そいつはここに来るって話してて、俺から話をしようって電話をしたのがこのきっかけ。

彼女は俺の誘いを断ることもなくすぐに了承してくれて、彼女は今こっちに向かっている最中。

でも、もうそろそろ現れるだろう。

そう思っていたその直後、当の彼女が現れる。

「お待ちせ……しましたわ」

「急に誘って悪かったな、ダイヤ」

「いえ。別に構いませんわ」

俺が電話で誘った人物というのは、ダイヤだ。

彼女をどうして話に誘ったのかって理由は、一応のアレだ。昨日の果南との話の報告ってやつだ。

ダイヤには、色々とアドバイスをくれたからな。その報告をしてあげようって思ったのさ。

ただ、その報告はあまりにも『残念』なことばかりなんだけどね。俺はため息しか出ないよ……。

「それで、話というのは？」

「昨日、果南に話を聞いてきた。ダイヤには、その話の報告がしたくてね」
「そうですか。どうでしたか、果南さんは？」

「……………」

正直、彼女の「豹変」ぶりには驚かされた。

俺が知っている果南は温厚で、いつも俺たちの面倒を見てくれる、とても優しいやつなんだ。

けど、昨日の果南は初めて見た。

ダイヤから聞かされたことをそのまま彼女に伝えて話を聞き出そうとしたら、彼女は俺の見たことない表情に変わったんだ。

「怒る」って感じの感情に近くて、鋭い眼光で果南に睨まれたことを、今でも脳裏に焼き付いている。

結局、果南から何かしらを聞き出すことは出来たのか？そう聞かれたら、答えはとても簡単さ。

「何も」、彼女は答えてくれなかったよ。

「あいつは、何も話してくれなかった」

「……そうですか」

果南は多分、もう俺には絶対に話してはくれないだろう。

口を開いたとしても、きっと果南が自分で考えた捏造で話をはぐらかすばかりだと思う。

「頑固」つていえば、間違いなくそうである。

だがそれでも、俺は果南からちゃんと聞きたいっていう思いを持つ自分がいるから、俺はまだ諦めるわけにはいかないって思ってる。

俺つてば、気になりだしたら止まらないからさ。

「でも、俺は諦めないよ」

「えっ……?」

「昨日はすぐに果南に追い返されちまったけれど、今度またあいつと会ったときは、ちゃんと果南の口から話させてやりたいって思ってる」

「でも、それでも果南さんが拒否したら?」

「あいつが言うまで追いかけてやるさ」

ダイヤのその質問に、俺は笑みを浮かべ答える。
ただ彼女は、俺とは真逆の表情をしていた。

「……………そうですか」

「……………」

ダイヤは俺の言葉に小さく呟き、顔を下に俯かせながら両手を太腿の上でギュツと握っている。

ダイヤはさつきから、とても暗い。

その行動にどうしたんだろうと俺は疑問に思い、彼女に対して口を開き尋ねる。

「どうした？今日は何か暗いな、お前……………」

「そうですか？私は何でもありませんが……………」

「……………」

でも、間違いないと考えている。

彼女は顔に出るからな。何かしらで頭を悩ませている時が特に1番顔に出やすいんだ。

「何かあったの？」

「……遼さんに話すことではありませんわ」

「そういう事は、＼ある＼んだね」

「……っ。ずるいです、遼さん」

やっぱり、話すことは＼ある＼ようだ。

でも、いくら俺でも話したくないということは、きっと俺が想像しているダイヤの悩みは相当大きいものなのかもしれない。

だとしても、それを誰も言わないで1人で抱えてしまうのは言語道断。もつてのほかだ。

こういう時は、ダイヤに対して＼押す＼のみだ。

「1人で全部抱え込んでんじゃねえよ」

「……っ」

ダイヤはその言葉に反応してこっちを見る。

ダイヤに対してどうして“押す”のか？これも対して理由は、特に難しいことじゃない。

ただ単に、ダイヤは俺や果南や鞠莉姉に問い詰められたりすると、自身が思ってる本心を口にする。ただ、それだけのこと。

ダイヤはあまりにも隠し事をするのが苦手でさ、すぐに隠し事がバレちまうんだ。まあ、誠実なダイヤの性格たる所以だよ。

「俺がそんなに信用ない？」

「……………っ！違います！そういう事では……………！」

「だったら思うことがあるなら、それを俺にガツンとぶつけてこいよ！お前の気持ちは、俺が全部受け止めてやるからよ！」

「……………っ！遼……………さん……………」

でも、だからといって“本心”を聞き出すために俺は“演技”をしているわけじゃない。

俺も、ダイヤから聞きたい“本心”で言っている。
決してそういう誤解はしないほしい。

「話してくれダイヤ。俺は、信じるからさ」

「うっ、うう……くっ……」

そして俺がダイヤに対して思う本心を話した時、ダイヤの感情は崩壊して、彼女の潤んだ瞳から次第に涙が溢れる。

何かとお堅いダイヤが見せてるその涙は悲愴感が漂う。何か悲しい事があったような涙で、ダイヤのその表情が全てをものがつていた。

「うっ、うう……」

「ほれダイヤ。そんな顔するな……」

俺は右手の人差し指で、ダイヤの目に浮かぶ涙を拭う。

綱元の長女が、そんな簡単に泣いちゃいけないんじゃないかって思うだろうけど、実際彼女はとてとも言っていないほど泣き虫だ。

親もいるし、妹のルビイちゃんがいるから、今はあまり泣くことは少なくなったけど、性格は本当に変わらないものだとか改めて感じる事が出来た。

するとダイヤが、俺に向かって指摘してくる。

「これは……あなたのせいですわよ」

「はいはい。ごめんな？ダイヤちゃん」

「……なっ!？」

『自分が泣いたのは俺のせいだ』

ダイヤが泣いてしまった理由を俺にしてくるもんだから、俺はダイヤに対して「昔」の呼び名で呼ぶ。

実は俺やダイヤが小学生の頃に、ダイヤにちゃん付けで呼んでいた時期があったんだ。あの頃いつもダイヤは果南の後ろに隠れっぱなしだったから、今となっては、どういう理由でそう呼んでいたのかは全く俺自身覚えていない。

強いて挙げるなら、「可愛かった」から、かな？

「な、なんで今更ちゃん付けで……!」

「懐かしいだろ？あの時のお前はずっと果南の後ろに隠れっぱなしでさ、弱虫で泣きま……」

「それ以上はダメ！ブツブツですわ！」

ダイヤは昔のちゃん付けで呼ばれたことから恥ずかしくなつて、茹で上がった真つ赤なタコみたいに顔全体が真っ赤になる。

だんだんと昔のダイヤっぽくなつてきたからさ、こうなるとやつぱり聞きたくなるんだよね。ルビィちゃんもたまに声に出してるけど、またダイヤから発せられる鳴き声が聞きたい。

まつ、それはそれで置いといて、だ。

「あははっ。まあそれは置いといてだよ」

「はっ!?!んっ、んんっ！」

ダイヤも俺の言葉を察してくれて、“ハッ”と我に帰つて咳払いを一つする。

話が逸れてしまったことには後悔は一切にせず、俺は仕切り直してダイヤにまた訪ねる。

「じゃあダイヤ。話してくれるな？」

「はあ、本当に、仕方のない人ですね……」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

俺からの質問にダイヤは笑みを浮かべ、やれやれといった風にそう答える。久しぶりに見せたダイヤの笑顔は、とても煌びやかな笑顔だった。

ダイヤにはとりあえず、俺に対して自分の悩みを素直に話をしてくれた。だが、その悩みはとんでもないものだった。

俺はダイヤからその悩みを聞いて、正直に言わせて貰えば、今にも「あいつ」の顔をぶん殴りたいって気持ちになった。

ダイヤは昨日、「あいつ」から酷いことを言われたらしくて、俺にはとても信じられなかった。ずっと一緒だった友達だったのに、ダイヤに対してそんなことを言っちまうなんてな。

“幼馴染み”として、人間性を疑うよ。

本当に酷い奴だよ…… “あいつ”は……。

に小さく、遠くに見える富士山が、ビルに遮られることなく綺麗に見える観光スポットなんだ。

普通なら私たちは、こういうことにワイワイして観光を楽しんでいるはずなのに、今の私たちは全然それどころではなかった。

「……つて言っても、全然想像できないけどね」

「やっぱり違うのかな？そういうところで暮らしていると……」

「圧倒された”。その言葉が、イベントに参加していた他のスクールアイドルを見ての率直の感想。

逆に私たちが、ライブでとんでもないミスをしたということじゃなくて、ただただ私たちよりも、他のスクールアイドルの方が魅力的に感じた。

そのことで私と梨子ちゃんは、こんな感じにちよつと憂鬱な雰囲気になっちゃってる。

あまり、遼くんにも見せたくない雰囲気だよ。

「どこかを見てもビルだらけすら……」

「あれが富士山かな？」

「うん。きつとそうずらね」

それで私と梨子ちゃんが2人で話してるなかで、その横でルビイちゃんと花丸ちゃんが双眼鏡を手に持つて景色を見渡していた。

2人も一見普通に話しているように見えるけど、実際の胸中は私たちと同じ気持ち。花丸ちゃんは特に他のスクールアイドルを見て、そのグループに目を奪われていたのを私は覚えてる。

それくらい、私たちはレベルの『差』を感じた。

「最終呪詛プロジェクト、ルシファーを解放！魔力2000万のリトルデーモンを、召喚！」

たった1人を除いてね？

「善子ちゃんは元気だね〜！」

「善子じゃなくて、ヨ・ハ・ネ！」

いつからそんなマントを羽織っていたのって、私は思わず彼女にツツコミを入れたくなる程に、彼女は相変わらずの墮天使っぷりを見せている。

善子ちゃんらしいといえば、善子ちゃんらしい。

「ライブ終わったのにヨハネのままずら……」

「うっ、うううるさい！」

でも例え彼女でさえも、私たちと同じ気持ちには少なからずなっているのかもしれない。

「悔しい」って……。

だからわざと明るく振舞って、重苦しい雰囲気は軽くしようと思ってるのな。善子ちゃんの名前の通り、やっぱり善い子なんだと思う。

「お待ちせ〜〜！」

するとそこへ、みんなの分のアイスを買ってきた千歌ちゃんがこっちに戻ってくる。

私たちの感情とは正反対で、いつもの明るい笑顔を振り撒く千歌ちゃん。彼女は自分が買ったアイスを私たちの前に差し出して、美味しそうだと私たちに話してくる。

「見てみんな！すごいよ！キラキラしてる！」

「千歌ちゃん……」

「これ凄く美味しいよ！食べる？」

「えっ？あ、うん……」

「はい！ルビイちゃんたちも！」

「あつ、ありがとう……ございます……」

「……………」

もしここに遼くんがいたなら、千歌ちゃんの行動と心中がすぐにバレ、大きく怒鳴られるだろう。

それくらい千歌ちゃんが考えていること、心中で思うことが私には分かっていた。

なのに私は、すぐに千歌ちゃんに言えなかった。

嘘つき……。

「みんなで全力で頑張ったんだよ?」

「ち、千歌ちゃ……」

「私ね!今日のライブは今までの中で1番良かったって思った。声も出てたし、ミスも少なかったし。それに、周りはみんなラブライブの決勝に出てる人たちでしょ?入賞できなくて当たり前だよ……」

「……………」

確かに、千歌ちゃんの話に間違いはない。

私たちのライブは、今までにないくらいに成功を収めた。ミスもなくて、見てくれるお客さんを楽しませるくらいには出来たと思ってる。

でも、私たちのそれ以上に他のグループのレベルが高くて、ラブライブの決勝にまで駒を進めた実力を、私たちはまざまざと見せつけられた。

入賞出来なかったのは、当たり前。ただ、本当にそれは当たり前だったのかな? そんな時に梨子ちゃんが千歌ちゃんに尋ねる。

「だけど、ラブライブの決勝に出ようと思ったら、今日出ていた人たちより、もつと上手くならないといけないってことでしょ?」

「それは、そうだけど……」

その言葉に、千歌ちゃんは言葉を詰まらせる。

千歌ちゃんが目指してるラブライブの決勝には、絶対に今日以上のパフォーマンスをしないとイケなければ、優勝とかそれ以前に、勝てない。

それを身を以て感じていたはずの千歌ちゃんは、みんなに自分が思ったことを話す。

「私ね、Saint Snowを見たときに思ったの。これがトップレベルのスクールアイドルなんだって。このくらい出来なきやダメなんだって。なのに、Saint Snowは入賞すらしていなかった。あの人たちのレベルでも無理なんだって」

「それはルビイもちよつと思った」

この話にはやつぱり、ルビイちゃんも花丸ちゃんも感じてはいるみたい。

Saint Snowの2人が見せたあの演技でも、2人は入賞すら出来なかった。ラブライブで優勝するためには、本当にもつとこれ以上の練習を積み重ねなければならぬ。

2人はきつと、そう感じたんだと思う。
すると、善子ちゃんがみんなに言い放つ。

「あ、あれは絶対にたまたままでしょ？天界が放った魔力によって……」

「何がたまたまなの……？」

「何が魔力ずら……？」

重苦しく雰囲気が悪くなっている中、善子ちゃんはたった1人でみんなを明るくさせようとする。

でも堕天使の言葉を使ったせいで、ルビイちゃんと花丸ちゃんからニヤついた表情をされてしまい、双眼鏡で顔色を伺われ、弄られてしまう。

「そ、それはその……」

「慰めるの下手すぎずら！」

「何よ！人が気を利かせてあげるのに！」

善子ちゃんについては相変わらずだけど、さっきまでの重苦しい空気は少しだけ軽く

なっていた。

場の雰囲気を少しでも明るくさせようとした善子ちゃんは、やっぱり「善い子」だった。

そのノリに乗つかるように、千歌ちゃんも言う。

「そうだよ！今はそんなことを考えても仕方ない。それよりさ、せつかくの東京なんだから、みんなでいっぱい楽しもう！」

千歌ちゃんの『楽しもう！』という言葉と一緒に出た笑顔は、きつと善子ちゃんと同じように、暗い雰囲気を明るくしたいという気持ちの表れ。

けれども私や梨子ちゃんは、表情を笑顔には出来なかつた。あまりにも千歌ちゃんの笑顔は偽物で、いかにも無理して笑つてるように見えてしまう。

今までずっと一緒に、千歌ちゃんの気持ちだつて誰よりも分かっているのに、この時の私は、自分が情けないと感じていた。

そしたら次の瞬間だった。

ブルルルルッ♪　ブルルルルッ♪

「あつ、私の携帯だ」

「えっ？誰からだろう？」

千歌ちゃんの携帯に、電話がかかってきた。

電話の送信先は誰なのかよく分からないけれど、千歌ちゃんはその電話に躊躇する事なく出る。

「はい、高海です。えっ？はい、まだ近くにいますけど、はい、はい。分かりました」

いくつかの受け答えを目の前で千歌ちゃんはしたあとで、電話はそこで途切れる。

誰からの電話なのだろうと思ひ、私は尋ねる。

「千歌ちゃん、誰から？」

「イベントの主催者側から。何か私たちに渡したいものがあるって言うて、イベントの会場に戻ってきて欲しいんだって……」

電話の送り主はイベントの主催者。

主催者側から何か渡すものがあるらしく、それを連絡するために千歌ちゃんに電話してきたみたい。

その事に梨子ちゃんも同じことを考えていたら、善子ちゃんがとんでもないことを眩く。

「何を渡されるんだろう?」

「もしや……ギヤラ!?!」

「違うぞら!」

うん、私も花丸ちゃんと同じ意見。善子ちゃんが自分で思ってるものとは全然違うものだと私はそう思ってはいる。

お金が貰えたら、それはそれで嬉しいけど、でもそれは何となく違うと思うんだ。

「とにかく、一旦みんなに戻ろう!」

「」「」「うんっ!」「」「」

そんな千歌ちゃんの言葉に、私たちは東京スカイツリーを後にし、足早にしてイベントの会場に戻ることにした。

ただ、私たちはまだ知らないのだ。

本当の意味での、自分たちがいる現在地を……。

#43 私たちの現在地

「ごめんなさいね。急に呼び戻しちゃって……」

「いえ、大丈夫です」

私たちがイベントの会場の前までやって来ると、そこには何か青い封筒を手に持ち、私たちを待っていた係員のお姉さんの姿があった。

私たちを呼び戻しちゃったことを申し訳なさそうにしているお姉さんは、私たちに謝りながら右手を上げてジエスチャーをする。

それに対して千歌ちゃんはお姉さんとそんなやり取りを交わすと、お姉さんから左手に持っていた青い封筒を私たちに差し渡される。

「これ、渡し忘れてたって思って……」

「は、はあ……」

それを千歌ちゃんは受け取り、封筒は開けずに前と後ろを確認する。封筒には間違いなく、正式名称でスクールアイドルワールド運営委員会としつかり文字で記されていた。

それでまた、善子ちゃんが言う。

「中身は何だろう?」

「まさか……ギヤラ!?!」

「善子ちゃんしつこいずら……」

けれども花丸ちゃんにジト目でそう言われてしまって、がつくり肩を落とす善子ちゃん。

そのやり取りを見て『ふふつ』と笑みを浮かべた係員のお姉さんは、封筒の中身が何なのかを私たちに教えてくれた。

「今回、お客さんの投票で入賞グループとか決めたでしょ? その集計結果が封筒の中に

入ってるわ」

「わざわざすみません……」

「いいよいいよ。こつちが忘れてたから……」

中身の事を話してくれたお姉さんに梨子ちゃんが謝れば、お姉さんは『謝らなくていい』と、両手を胸のあたりで軽く振ってそうジェスチャーする。

投票結果となると、今回のイベントで出た私たちの順位も分かるということで、何人が私たちに投票してくれたのかも分かるということ。

あはは……なんか変に緊張するなあ……。

投票結果でちよつとドキドキし始める私。

だけど係員のお姉さんが次に言い放った言葉が、私にとってはとても疑問に残る言葉だった。

「でも正直、あなたたちには渡すのかどうしようかちよつと迷ったんだけど、出場して貰ったグループにはちゃんと渡すことにしてるから……」

「……えっ?」

渡すのかどうか『迷った』と言うお姉さん。

その言葉が発せられた意味として私は、まず先にさつきまでのドキドキ感は一瞬でなくなつた。

係員のお姉さんが言い放つたその意味が、絶対に悪い方での意味で『迷った』と言つたことが私には理解できたからだつた。

そしてお姉さんは私たちに対してそれ以上は何も言わず、別れの言葉を告げたあと、私たちに背中を向けてこの場を後にした。

「じゃあお疲れ様ね！ラブライブの出場目指して、これからも頑張つてね！」

「は、はい！ありがとうございます！」

お姉さんの別れの言葉に千歌ちゃんもお礼をそう言つて、ひとまず呼び出されたことの用事はこれで終わったわけだけど……。

「見てみる？」

「うん。集計結果ついていても、結果が上位だけのものなのか？全部なのか分からないし……」

「ひとまず開けて見てみましょうよ！」

「そうだね。じゃあ開けてみるよ」

……見るのかな、やっぱり。

私には、とても不安でしかない。お姉さんの言ったことにはいまだ疑問には思っているし、絶対にさっきのは悪い意味でだと思っ

そんな不安をよそに、千歌ちゃんはお姉さんから貰った青い封筒の封を開く。それで封筒の中に手を入れた千歌ちゃんは、封筒の中からA4サイズの2枚の紙を取り出す。

それがどうやら、集計結果の紙みたい。

1枚の紙には、全部で30組が参加したグループの上位半分がそこに載せられていて、ランキングと、そのグループに投票をした人数が書かれていた。

「上位入賞したグループだけじゃなくて、出場グループ全部の得票数が書いてあるのね」
「そうみたいだね」

「Aqoursは？Aqoursは何位ずら？」

1枚目には、残念ながら私たちの名前はない。

やっぱり実力差が明確だった。

「あ、Saint Snowだ……」

「あの人たちは9位だったんだ」

「もう少しで入賞だったのね……」

その1枚目を上から順に見ていくと、上から9番目の『9位』にSaint Snowがランクインしていた。

前座であっても、あの圧倒的なパフォーマンスを見せたからこの順位なんだと思う。でなかったら、この順位にはいない。

「それで私たちは!? Aqoursは!?」

「うん!今見てる!」

そうやって善子ちゃんに急かされて、千歌ちゃんは集計結果の2枚目の方に目を移していく。

でも、未だにAqoursの“A”ですらまだ見つかっていなくて、私の頭の中で

ずっと漂っていた嫌な予感が、今まさに的中してしまった。

2枚目の1番下、『30』と記されているその隣に書かれていたグループは、私たち
“A q u o u r s” だった。

「……………えっ?……………30位?」

「30組中……………30位……………」

「つまりビリってこと!」

「わざわざ言わなくていいすら」

みんな、とてもを超える以上にそのランキングを見てショックを受けていた。

私ももちろんショックを受けている。でも私たちは、これ以上にショックを受ける事態になる。

その理由として、得票数にある。

「得票数はどれくらいなの!」

「えっと……………えっ?」

千歌ちゃんは梨子ちゃんに促されるまま、自分の指で見えなくていた得票数を見るために自分の指を退ける。

それで私たちに投票した得票数を見たとき、千歌ちゃんは「信じられない」、
「ありえない」という表情を私たちの目の前で見せていた。

「千歌ちゃん……?」

千歌ちゃんのそんな表情を目の当たりにしたら、得票数に何かあったのかと不思議にならないわけにはいかなくて、私は千歌ちゃんの横から顔を覗かせて、Aqoursの得票数を見る。

その得票数に私も、とても衝撃的を受けた。

「嘘。得票数、0……?」

「私たちに入れた人、1人もいなかったってこと?」

「……きつとそうだと思う」

30. Aqours …… 0

私たちに票を入れた人は誰一人としていなくて、例え自分たちが頑張ったと思つてたとしても、それを見てくれたお客さんの心に響かなかつた。

それが結果としてこうして現れていて、みんなはその結果を目の当たりにして、さつきよりも大きなショックを受けていた。

特に、千歌ちゃんは尚更。

「お疲れ様でした！」

「あつ、Saint Snowさん……」

そんな感じにショックを受けている時、私たちの背後からSaint Snowの2人が現れる。

聖良と自分で言っていたサイドテールの女の子が1歩前に出て、私たちに話を始める。ただそれは、私たちにとっては心地の良いものじゃなかつた。

「とても素敵な歌で、とてもいいパフォーマンスだつたと思います。ただ……」

「ただ……?」

「もし、*Ms*のようにラブライブを目指しているのだとしたら、諦めた方がいいかもしれません」

正直、同じラブライブを目指しているものとしてそんな風に諦めさせるような言葉は、言っちゃいけないと思う。けれども私を含めて、私たちはそれに対して言い返すことが出来なかった。

個人的な考えで、彼女たちにとって私たちがそういう風に見えたのかもしれない。でも相手を貶して嫌な気持ちにさせるのは、誰であつても決してしてはいけないもの。

その事をこの人に私は言いたかった。でも、それは出来なかった。

「馬鹿にしないで！ラブライブは……」

……遊あそびじゃない！」

2人が去る間に、妹の方が涙ながらにそう言い放った言葉には、私たちはひどく胸に突き刺さったのであつた。

～
 ～
 ～
 ～
 ※※※※※
 ～
 ～
 ～
 ～

東京の観光を暗い感じで回った私たちは、内浦に帰るために帰りの電車に乗り込み、
 重苦しい雰囲気の中で電車で揺られていた。

空はスツキリした朱色の夕方なのに、私たちの心はどんより曇っていて、ルビィちゃん
 と花丸ちゃんは、涙を浮かべていた Saint Snowの妹のことで話をしてい
 た。

「泣いてたね、あの子……」

「きつと、イベントで入賞することが出来なかったから、悔しかったんだと思うぞら……」

それは、何となく花丸ちゃんの言葉には同意見。

あの子が泣いていた本当の気持ちとしては、あのイベントで「入賞」をしたかつたということ。

例え前座だとしても、他より高いパフォーマンスを見せれば、ランキングの上位に入れることを彼女たちはすでに知っていた。

私の思うに、今回の東京でのイベントで、私たち6人のA q o u r s は、『上に行きたい』という積極的な何かが欠けていたんだと思う。

善子ちゃんの話すことも、十分に分かるけど。

「で、でもだからって、私たちにラブライブを馬鹿にしないうでなんて言わなくても……！」

「でも、そういう風に見えたのかも……。みんなで精一杯頑張ったけど、周りからはそういう風に見られちゃうのは、もう仕方ないことだよ」

「うっ……」

でも、『だから』だと思おう。

上に行きたいという強い気持ちが強かったから、今回のイベントのライブは、ただ“こなした”だけとしてなってしまうと、他人からああいう風に見られてしまつて、あんな風に言われたんだと思う。

すると千歌ちゃんが窓越しに、夕方の空を眺めながら話し出す。

「私は良かったと思つたけどなあ……」

「千歌ちゃん……?」

「精一杯やつたんだもん。努力して頑張つて東京に呼ばれたんだよ? それだけで凄いとだと思おう!」

精一杯やつたから、良かった。そんなことを言いながら話す千歌ちゃんは、私たちを明るくさせようと笑顔で笑つてみせる。

でも、私には分かつてる。

千歌ちゃんが無理して笑つてる事も、千歌ちゃんが1番悔しいって1番感じてる事も

……。

「胸張って良いと思う!!今の私たちの、精一杯が出来たんだから……!」
「……っ!」

ダメ。もう私には我慢出来ない。

無理をして笑顔を作って、私たち偽物の笑顔を向けられても千歌ちゃんには良いことなんてない。

千歌ちゃんは、本当は悔しいんじゃないの？

「ねえ、千歌ちゃん……」

「んっ?どうしたの、曜ちゃん?」

「千歌ちゃんは、悔しくないの?」

「「「……!?!」」」

「えっ……?」

私が千歌ちゃんに対してそんな風に尋ねたとき、周りのみんなもそうだけど、千歌

ちゃんは私の問いに驚きの表情に移り変わる。

そりやそうだよな？ 私の性格からして、こんな事を千歌ちゃんに尋ねるなんて滅多にないもん。

「千歌ちゃんはアレを見て、悔しくないの？」

「そ、それはちよつとはあるよ」

「………本当？」

「ほ、本当だよ！ 本心だよ！」

私の連続でかけた問いかけに、千歌ちゃんは冷や汗のようなものを垂らしながら必死に答えてる。

この時の私は、千歌ちゃんの本当の気持ちをみんなの前で吐き出させたかった。

みんなを前向きにさせるために、自分が無理して笑顔を作ってる千歌ちゃんを見てるのが嫌だった。強がってることだってもう知ってる。

それなのに私は、どうして惨めなんだろう？

「満足なの！ みんなであそこの舞台に立てて、私は嬉しかった。もう満足だよ……」

顔を次第に俯かせて、微妙な笑みをしながら話す千歌ちゃんを見ていた私は、その言葉に対して心のどこかでそれに納得してしまっている自分がいた。

その気持ちを表している言葉を、私は呟く。

「……………そっか」

この私の一言を最後に、電車の中で話す人は誰一人いなくなってしまった。

電車が沼津に着くまでの間、私は千歌ちゃんにとって何なんだろうと考えていた。いつ何時、ずっと隣で寄り添っていた千歌ちゃんが私にですら本当の気持ちを打ち明けてくれないなんて…………。

みんなには打ち明けられないことなの？

それとも私たちには言えない理由があるから？

ううん違う。きっとそうじゃなくて、もっと別な理由があるはずなんだ。

その理由をちゃんと自分から話してくれると私もスッキリするし、こんなモヤモヤも消える。

だから、本当の千歌ちゃんを見せてよ。

誰にも包み隠すことなんかしないで、自分の本当の本心を、私たちにを見せてよ。

私がいくら尋ねても答えない千歌ちゃんだから、私が思ってることは、本当にこれくらいしかない。でも、それが私が思ってる本心だよ。

私は臙げに夕陽の空を見つめて、沼津に着くまでの2時間の間はゆっくりと過ごす。

それでやっと戻ってきた私たちのホーム・沼津を見たとき、1日だけしか街を離れてないのに、どこかしら懐かしさを感じていた。

「ふう〜。戻ってきた……」

「やっと『ずら』って言えるずら〜!」

「それずつと言ってたじゃない!」

善子ちゃんと花丸ちゃんは、2人で花丸ちゃんの語尾である『ずら』のことで話を繰り広げていた。

実は昨日の東京に向かつてる時に、花丸ちゃんは梨子ちゃんにあまり『ずら』は言わない方がいいって言われてたんだけど、東京にいてもいつも通りの花丸ちゃんだった。

静岡の方言を東京では言うなって言われたとしても、なかなか無理な話でもあるけどね。

「お〜い！千歌〜！」

「あつ、みんな！」

そんな時、東京から私たちの帰りを待っていた、学校みんなの姿が駅の広場にあった。みんな手を振って、『待ってたよ』と言わんばかりに……。

「どうだった？東京は？」

「う、うん。凄かったよ！何かステージもキラキラしてて……とにかく凄かった」

千歌ちゃんやんはみんなの質問に答える。イベントのステージを見て思ったこととか、ライブではミスはあまりしなかったとか、隣の梨子ちゃんのフォローもあって、冷や汗をかきつつも答える。

私からは、みんなには何も言わなかった。

「ちゃんと歌えたの？」

「緊張して、間違ったりしなかった？」

「うん。それは何とか……ねっ？」

「え、ええ。ダンスのミスもなかったし……」

千歌ちゃんの梨子ちゃんへのフリだったり、梨子ちゃんのその後の対応も少しぎこちない。

だけどそのぎこちなさの理由に気付く人は誰一人としていなくて、千歌ちゃんはそのまま勢い任せで話を続けた。

「そうそう！今までで一番のパフォーマンスだったねって、みんなで話したところだったんだ」

「なくんだ！心配して損したよ〜！」

よしみちゃんたちは、千歌ちゃんが話したことについては納得した表情を見せていた。

そのあとで、自分たちが私たちの心配したことを笑いながら後悔する。

すると、むつちゃんが話を切り出す。

その話の内容を聞いた千歌ちゃんは、答えることを躊躇って、表情を歪ませた。

「じゃあじゃあ、もしかして、本気でラブライブの決勝が狙えちゃうかもってこと!？」

「えっ……………」

「そうだよね! 東京のイベントに呼ばれちゃうくらいだもんね!」

「……………」

ラブライブの話で、よしみちゃんたちが笑い合ってた話していることとは裏腹に、ラブライブの決勝を「本気」で狙えるかどうか考えている千歌ちゃん。

東京でSaint Snowにあれだけ言われて、結果は『最下位』で投票数も『0』だ。

そんなグループがラブライブに出て、決勝にまで駒を進められるのかとそう聞かれたら、私は間違いなく、『NO』と答える。

それが私たちの、今の現在地だから。

「どうなの? 千歌ちゃん!」

「そうだな。まあ、あと1人いるけど……」
「あと1人……?」

遼くんも私たちが東京から戻ってきたのを迎えてくれただけど、遼くんが発せられたその言葉に私も含め、6人は首を傾げる。

ただ遼くんの背後から、遼くんが今さっき言った『あと1人』の人物が姿を現わす。その人物は、私たちが東京から帰ってきたことに対して言葉を発して、私たちは彼の背後から現れた人物に驚愕した。

1番驚いたのは、ルビイちゃんだった。

「お帰りなさい」

「お、お姉ちゃん!」

「ダイヤさん……!」

遼くんの背後から現れた人物というのは、ルビイちゃんのお姉ちゃんであるダイヤさんだった。

「皆さん、東京でのイベントお疲れ様でした」

「は、はあ……」

「ルビイも、よく頑張りましたね……」

「お姉ちゃん……」

ダイヤさんは、私たちに今まで見せてこなかった明るい笑顔を見せていた。

ルビイちゃんは、自慢のお姉さんのダイヤさんに褒められた言葉を投げかけられて、ルビイちゃん是我慢できなかったのか、感情が崩壊した。

「うっ、うう……うわああああん！」

「ふふっ。仕方ないですね……」

ダイヤさんの胸元に飛び込んで、ルビイちゃんは思いつきり泣いた。ダイヤさんは、ルビイちゃんの行動に驚いたけれど、すぐにまた微笑んで、ルビイちゃんの頭を優しく撫でていた。

かたやその様子を見ていた遼くんは、一度両手で大きく手を叩いたあと、私たちとよしみちゃんたちに向かって事を告げる。

パァン!!

「『『『……!』』』」

「んじゃあ、ひとまず千歌たちが無事に帰ってきたことだから、よしみ、千歌たちから東京の話を聞きたいなら、学校であとで聞いてくれ」

「ええ!?!?なんで!?!」

「ちよつとな。隣のダイヤが、千歌たちに話したいことがあるらしくてな……」

「どうやら、ダイヤさんが私たちに対して話したい事があるらしい。でも、どうしてダイヤさんが?」

「それに、どうして遼くんといえるの?」

「それが今、私が今一番に思った疑問だった。」

「分かったよ。じゃあみんな、帰ろ!」

『『『はい!』』』』

「じゃあ千歌!また明日ね!」

「う、うん。ばいばい……」

それでよしみちゃんは遼くんの意見を飲み込み、その後によしみちゃんたちは駅から姿を消す。

別れ際に、千歌ちゃんがよしみちゃんに向かって手を振ったその手は、私から見て、少し元気がないように思えた。

やっぱり千歌ちゃんは、無理をしてる。

我慢して、悔しさを堪えてるように私は見えた。

「それじゃあここで話すのもなんだから、話は少し場所を変えてしようか？」

「そうですわね」

「じゃあみんな、ついて来てくれ」

「うん、分かった……」

そして私たち6人は遼くんに促され、ダイヤさんと一緒に駅を後にして別の場所へと移動した。

ダイヤさんが私たちに話があると、遼くんはそう話していたけれど、一体どんな事を

私たちに話してくるのか？

今の私たちは、全く予想すらつかなかった。

#44 それぞれの思い

「得票数、〃0〃ですか……」

「……………はい」

千歌たちを駅から連れ出し、俺とダイヤが連れて行った場所は狩野川の河川敷。

河川敷の歩道と、狩野川を挟んで佇む手摺には、夏祭りではよく見かける赤と白の提灯が川に沿って飾られていて、ライトアップもされている。

この狩野川の河川敷は、花火も上がるからデートスポットには最高の場所の場所なんだ。

まあ、それはともかくだ。

こいつら、相当なほどに精神がやられてる。

全国トップレベルが見せる歌とダンスの質の高いパフォーマンスを見て、自分たちの

今の実力が明白に示されたのかもしれないな。

「やっぱり、そういうことになってしまったのですね。今のスクールアイドルの中では

……」

「……………」

ダイヤの言う『そういうこと』っていうのは、後々にダイヤ自身から話をするだろう。

30. A q o u r s …… 0

順位は『最下位』で、得票数が『0』人。

俺は千歌たちが参加した東京でのイベントの結果は、少々受け入れ難い気持ちではある。だがそれが今の現状で、彼女たちが精一杯やっての結果だ。

ただこの結果は、しっかり受け止めた方が良いと俺は思っている。俺なりの考え方だけだな。

とても残念な結果ではあるけど、この結果を受け止めて、またこれから努力して練習すればいいと、俺から言えば良かったんだがな……。

あまりにも雰囲気暗すぎて、とても言い出すにしばらく感じだった。でもダイヤは、みんなに話を続ける。

「先に言っておきますけれど、あなたたちは決して駄目だったわけではないのです。スクールアイドルとして十分練習を積み、見てくれる人を楽しませるに足りるだけのパフォーマンスもしている。でも、それだけでは駄目なのです。それだけでは……」

実際のところ、ダイヤはなんだかんだで千歌たちの活動に関してはちゃんと認めていた。

あれだけ批判的な言葉を千歌たちに向かって言い放ってきた彼女だけれど、それは彼女なりの理由があつて、本気でスクールアイドル活動は認めないと思つていたわけじゃないらしい。

俺もあの後にダイヤから話を聞いたけど、ダイヤもやつぱ心配性というか、千歌たちがすることがずつと気になって仕方がなかったんだなつて思った。

「それって、どういうことですか？」

「では質問です。『7236』、この数字が何なのか、皆さん分かりますか？」

「それはもちろん、ヨハネのリトルデーモン……」

「違うすら」

「ツツコミ早っ!?!」

唐突なダイヤからの質問に、善子はいつものリトルデーモンがどうのこうのつて答えようとした。

だがあえなく花丸ちゃんに突っ込まれ撃沈。

答えることを読まれていたようだ。

「ふふっ。この数字は、去年最終的にラブライブにエントリーしたグループの数ですわ。これは第1回の約10倍以上にもなります」

「10倍。そんなにグループが……」

みんな、今現在でそんな数のスクールアイドルが存在していることに驚きを隠せない。

それはもちろん俺もだけどな。サッカー部がある全国の高校の数でも約4,000校。こつちとでは比べ物にならないほど、スクールアイドルというものが爆発的に人気

であることが分かる。

「スクールアイドルは確かに、以前から人気がありました。しかしラブライブの大会の開催によって、それは爆発的なものになった」

「……………」

「A—RISEと μ s、この2つのグループの活躍によりその人気は揺るぎないものになり、アキバドームでの決勝が行われるまでになった。そしてそれと同時に、レベルの向上を生んだのですわ……………」

それが、今のスクールアイドル全体の現状。

俺も、実はその話をダイヤから聞いたときには、開いた口が塞がらなかった。

スクールアイドルも一つのスポーツのように既に成り立っていて、だんだんとレベルが上がっているということには正直驚きだった。

でもそれは、どんなあらゆる競技にも起こり得ることで決して悪いことではない。むしろ良い方。

俺がやってるサッカーだって、毎年毎年レベルが上がっている。年始に行われる選手権だって、毎年優勝校は変わりに変わりまくるのだ。

そのの「スクールアイドル版」と考えたら、意外にも俺の頭の中にストンと理解することができた。

そしてダイヤは、意味深な言葉を呟く。

「あなたたちが誰にも支持されなかったのも、私たちが歌えなかったのも、仕方のないことなのです」

「えっ……？今、歌えなかったって……」

「ダイヤさん、どういうことですか？」

それには勿論のこと、曜と梨子の2人がダイヤの発言に興味を持つ。

するとダイヤが、俺に問いかけてくる。

「どうします遼さん？話しますか？」

「ダイヤ、それは俺に聞くもんじゃないやねえよ」

その質問に俺は即答。

正直なところ、ダイヤが今から話そうとしている一部のところは全部嘘だ。事実もあ

るけれど、その嘘のほとんどはダイヤが全て考えた。

それを俺にわざわざ聞いてくるなんてな。

まどろっこしいといえ、まどろっこしいがな。

「そうですね。実は2年前、既に浦の星が統廃合になるかもしれないと、噂がありましたね」

「じ……じゃあ、この間の統廃合の話は……」

「統廃合の『本格化』と考えた方がいい。でもダイヤが今話してるのは『噂』ってだけだ」

以前に曜から聞いた統廃合はそれの『本格化』で、ダイヤが発した統廃合は当時の単なる『噂』。

ただその『噂』が2年の歳月を経て本格的になって、今こうして千歌たちが阻止しようとしてるのは、どこか2年前のダイヤたちと同じで似ている。

「それで私は果南さんと鞠莉さんの3人で、統廃合をなんとかしようって奮起したのですわ……」

「『スクールアイドル』をしてな……」

「やっぱり、やってたんですね？」

「はい。1年のこの頃までは……」

みんなは意外にも、ダイヤがスクールアイドルをしていたことに驚いている様子はない。

きつとルビイちゃんが知らない間に、千歌たちにダイヤがスクールアイドルをやっていたことを教えたんだろう。当のルビイちゃんは、頭をダイヤの膝の上に乗せてぐっすり眠ってるけど……。

「町の人たちも、学校の人たちも、私たちを応援してくれていました。ですが、東京に呼ばれた私たちは、他のグループのパフォーマンスと会場の空気に圧倒され、何も歌えませんでした」

「……………」

ダイヤも果南も鞠莉姉も、当時は千歌たちと同じ悔しさを感じていたんだ。

ダイヤの話を耳にしたみんなは、誰も言葉を発言することはなく、ただただじつとダ

イヤの話に耳を傾けて聞いていた。

「あなたたちは私たちと違って、あの場所で歌えただけでとても立派ですわ。胸を張りなさい」

「……………はい」

『胸を張りなさい』

それはダイヤなりの励ましの言葉。

ダイヤも、千歌たちがイベントで感じた事をもう分かっている、それで彼女はそう言った。

だが千歌たちは、ライブを精一杯頑張っても『0』だったことのショックがあまりにも大きく、千歌が零した言葉には力が感じられなかった。

こうしてダイヤは話しかかったことを話し終え、ルビィちゃんを起こしつつ、今日はここでお開きにしようと話を切り出した。

「では今日はここでお開きにしましょう。皆さん、明日からは学校なので、遅刻しないように……………」

明日は月曜日。だから学校も始まる。

ダイヤはルビィちゃんを連れたまま、そのまま家に帰ることになった。それで一瞬だけ、俺はダイヤとアイコンタクトを取る。ダイヤからは『千歌さんたちを任せましたよ』という視線を送られて、俺はそれを託されたわけだ。

でもそれは、ダイヤから言われる前に俺も分かりきっていた。別に勘というわけじゃない。

長年の経験ってやつさ……。

「それじゃあ、俺たちも帰ろう」

「うん。そうだね……」

今回、千歌たちは東京のイベントで多くのことを学んだだろう。

ラブライブで優勝するためには、生半可な気持ちでは絶対に無理であること。他のグループよりも、今よりも練習は一生懸命取り組まなければならないことなど、感じたことは数多くあるだろう。

けどそれよりも、1番大切な感情があるはず。

スポーツ競技のように勝ち負けがあるから尚更。勝負で負けたら、必然的に思うことがあるよね？

まあ、とりあえず言わないでおくよ。

どうせ言わなくても分かるはずだからさ。

「千歌ちゃん、1つだけ聞きたい」

「……うん。なに曜ちゃん？」

それで俺たちは、狩野川の河川敷から、中央公園付近の大通りのところまで戻る。すると、ちょうど美渡姉さんが運転をしている旅館の車が、道路脇に止まって俺たちを待っていた。

沼津から少し離れた千歌や梨子の迎えで、ずっと待っていた車に千歌ちゃん乗り込もうとした時に、曜が千歌に声をかける。

俺はその時に曜が、千歌に対して何を尋ねようとしたのかをすぐに察することが出来た。

曜がいつも千歌に聞く、あの言葉である。

「やめる？スクールアイドル……」

「……………っ！」

「……………」

けれども、その魔法は全然通じない。

千歌は曜の話に顔をを振り返らず、じつとその場で動かなくなる。

大事な幼馴染みの言葉に、千歌がどう答えるのかは気にはなるけれど、早くみんなに本音を言つて、また“0”からリスタートすればいいと俺は思う。

だが、それはどうも簡単にはいかないらしい。

「曜ちゃん、ごめんね……」

「あっ……………」

千歌は曜の質問に答えず、曜に振り返ることなく申し訳なさそうに彼女は謝る。

千歌が車に乗った直後に梨子もその車に乗り込んで、全員が乗ったことを確認した美渡姉さんの後、梨子が車のドアを閉め始める。

「……………」

曜は下に俯き、何も言わない。

千歌が自分の質問に答えてくれなかったことに、よほどショックなんだろう。

ただその様子を隣で見ている俺は、どうも彼女の思惑に理解に苦しんだ。曜の質問に少しくらい答えてやってもいいはずなのに、『ごめんね』だど？

逃げてんじやねえよ……

バンツ!!

「……………!!?」

俺は閉まりかけていたドアをこじ開けて、千歌が乗る車に体半分乗り込む。

一歩間違えれば、俺の指が切断されてしまうギリギリのところであつたが、なんとか

間に合った。

「遼……くん……？」

千歌の力のない言葉を聞いてくると、余計に俺の中でむかつ腹が立つてくる。いつまでもそんな風に我慢してたつて、何も良いことなんて起きない。

曜や梨子、みんなに迷惑をかけるだけだ。

「……………明日だ……………」

「えっ…………？」

「明日までにさつきの質問、その答えを出せ。そしてそれを、みんなの前でちゃんと話せ！」

「ええ…………!?」

だから俺はひとまず、千歌と超無理矢理に約束を交わす。もちろん、千歌に嫌とも言わせないくらいに超強引に…………。

そうじゃないと、こいつは「逃げる」。さつきの曜の質問に答えないように、自分の

本音を口にしないだろうから。

「ど、どうしてそんなことを……?」

「もしそれをみんなに話さなかつたら、俺はお前らの手伝いをやめる。もしそれか、スクールアイドルをお前がやめるかの2択だ」

「りよ……遼くん。そんな強引な約束……」

「悪いけど、梨子は少し黙っててくれ」

「……………」

梨子には申し訳ないけど、こいつ千歌を素直にさせるためだ。多少の強引は、受け入れて欲しい。

「“約束”だからな? 破るんじゃないぞ?」

「……………」

それで俺は車から降りるとき、少しギロツと睨みを効かせながら千歌にそう話す。これくらいやっておけば、千歌はもう現実から逃げられない。

千歌が何も反論しないのが、その証拠だ。

「曜、帰るぞ」

「えっ？ちよ、遼くん！」

そして俺は、曜を連れて家に帰る。

俺に千歌に対しては言いたいことが言えたから、いつまでもここで油を打ってるわけにはいかない。

そんな時、後から俺についてきた曜が俺の隣まで歩いてきて話しかけてくる。

「遼くん、流石にあの言い方はないよ。千歌ちゃんが本当にスクールアイドルをやめたら、私……」

どうやら曜の奴、質問を答えて貰えなくて、更に俺が『スクールアイドルをやめろ』って言ったから超ネガティブ思考になっていやがる。

そうだよな。曜は千歌と一緒に何かやりたいって言って、スクールアイドルを始めたんだよな。

でも大丈夫さ。あいつはやめない。

「アレで良いんだよ」

「えっ……？」

「大丈夫さ。あいつはやめないよ」

俺は、曜に言い聞かせるようにそう話す。

千歌に超強引に約束をしておいて、そういう根拠のないことを言うのは変かもしれないけれど、何となく、俺はそう感じた。

ていうかあんなショッキングな事があって、千歌が本当にスクールアイドルをやめることになれば、千歌の「やる」って決めたその決心は、そんな程度のものだったのかわかる。

はてさて、どんな答えが出るのやら？

~~~~~※※※~~~~~

「いつ以来かな？ こういうの……」

「ダイヤから聞いた。千歌たちのこと……」

「そう」

2年前。ううん、それ以上も前にやっていたこのやり取りが、とても久しぶりに感じている。

場所は、私のパパが経営する『ホテルオハラ』の付近の船着場。

そこには私と、私をここに呼んだ果南。

私たちがいる船着場は、髪や服が舞うくらいに風が吹き荒れ、海の波を高くしていた。

「どういうつもり？」

「……なんのことかしら？」

果南の具体的でもない質問に、私はシラを切る。

でも、私の内心は分かっている。果南が私に一体何を聞こうとしているのかを……。

「千歌たちには、同じ目に合わせたくない。なのに鞠莉、どうして千歌たちを東京に行かせたの？」

「その何が悪いの？ダイヤにも話をしたけれど、あの子たちなら、私たちが乗り越えられなかった壁を乗り越えてくれると思ったのよ」

やっぱり。聞きたいことはそれよね？

あの子たちも、下手をすれば、2年前の私たちと同じ目に遭ってしまうかもしれない。でも私は、彼女たちに賭けているの。

学校が統廃合の危機に直面した時に、真っ先に何とかしようと思った彼女たちを見て、彼女たちなら私たちが越えられなかった壁を乗り越えるかもしれない。そう思ったの。

ただ私の中で、一番に分かってほしい彼女には、全く理解すらしてくれなかった。

「でも、外の人にも見てもらおうとか、ラブライブで優勝して学校を救うとか、そんなことは絶対に無理なんだよ！」

『無理』か。果南の口からそんな言葉が出てくるなんて、まるで果南じゃないみたい。私知ってる果南は、どんな失敗をしても笑顔で次に走り出し、絶対に成功するまで諦めなかった。

そんな彼女が『無理』などのネガティブな言葉を使うのは、私からしたらあり得ない。目の前にいるのは、私が好きだった果南じゃないのは明らかだ。

「だから諦めろって言うの？」

「……私はそうすべきだと思う」

私の発言に賛同するように、果南はあの子たちに対して諦めさせた方がいいと話す。やっぱり、もう昔の果南じゃないのね……。

でも、果南はしてくれと信じてる。

「……果南」

「……っ！」

私は果南の名前を呼び、大きく手を広げる。

それは、果南がいつもしてくれていた『ハグ』の前フリのようなもの。

果南は私の声に顔を上げれば、私がこうして手を広げ、自分を受け入れようとしてくれていることに驚きの表情を見せる。

でも、驚きは一瞬だけ。果南はすぐに真剣な表情になって、私を鋭い目つきで睨みつけてくる。

果南にこうしても、結局はダメなのかな？

そう思った矢先だった。

「……………っ！」

「……………っ！」

果南が、私を見つめながらこっちに歩いてくる。

私がハグをしたいと果南は思ったのか、果南は私から視線を外すことなく、まっすぐ私を見つめて、ゆっくり近づいてくる。

私は心の中で嬉しく思った。

久しぶりのハグを、私が誘って果南からハグしてくれることに、私は今しかと心待ちにしていた。

でも、それは“非情”に裏切られる。

約束を破られるそれ以上に、私の心は抉られた。

「誰かが、傷つく前に……」

「……………っ」

果南はそう言って、私の横を通って去っていく。

私がしたハグの前フリを受け付けることもなく、果南はそのまま、私に一切振り返らずに歩いていってしまった。

“悲しい”

私には、今まで以上にそう感じた。

ただ私は、諦めたくない。

果南とダイヤと過ごした、『輝き』で満ち溢れていたあの時を、私は取り戻すの！

その確固たる思いを、私に背を向けて歩き去っていく果南に向かって私は言い放つた。

「私は諦めない！必ず取り戻すの、あの時を！果南とダイヤと一緒に過ごしたあの時を！私にとって、宝物だったあの時を……うつ……」

私は吹き荒れる風に打たれながら、海の水しぶきで湿ったコンクリートに涙を零し、すすり泣くようにして泣いた。



## # 4 5 千歌の本当の気持ち

『千歌ちゃん、大丈夫？』

『うん、大丈夫。少し考えてみるね。私がちやんとしないと、みんなに迷惑かかっちゃうから……』

家の前でそんな会話をして梨子ちゃんと別れて、私は部屋のベッドで横になっていた。

寝ようとしていたわけじゃない。ただ、帰る時に遼くんに言われたことをちゃんと守ろうと、自分の気持ちを整理していた。

『やめる？ スクールアイドル……？』

「……………」

曜ちゃんに聞かれたあの質問。私は、あの質問に真剣に向き合って、遼くんにも、みんなにも納得のいく答えを出さないといけない。

私がみんなをスクールアイドルに誘ったんだもの。私がしつかりしないと……。

私は部屋の襖と障子を全部閉じて、部屋を薄暗くする。それでベッドで寝返りを繰り返して私は考えていた時に、思わずベッドから床に落ちてしまう。

……私は、何をやってるんだろう……？

床に対して仰向けになって、そんな風に自分自身を戒めながら目を開ける。すると視界の上の端に、ずっと前々から襖に貼っていた、憧れの『μ's』のポスターが目に移った。

「……………」

届くはずもないのに、私はそれに手を伸ばす。

『μ's』を「星」と例えるなら、私はいつか、あの星のように輝けるんじゃないかっ

て思ってた。

でもそれは、ただの私の理想だった。

『もし、μ sのようにラブライブを目指しているのだとしたら、諦めた方がいいかもしれません』

『ラブライブは、遊びじゃない!!』

私の頭には、S a i n t S n o wの言葉とパフォーマンスと、得票数『0』という数字が頭をよぎる。

何もかも、これが現実なんだってことを私に訴えかけてきて、私の胸の奥がギュツと締め付けられるような感覚に陥る。

『“約束”だからな？破るんじゃないやねえぞ？』

「……………」

そしてまた、帰り間に遼くんの鋭い視線で言われたあの言葉が思い浮かぶ。

明日には、ちゃんとしっかりみんなに伝えないといけない。続けるのか？やめるのか

?

みんなへ話す一言が、私の、みんなの未来にかかっていることを想像したとき、私は  
 μ s のポスターに伸ばしていた手を、床に力なく下ろした。

みんな、私の答えを受け入れてくれるのかな？

薄暗い静かな部屋で、私は不安を感じていた。

~~~~~※※※~~~~~

朝、午前6時を過ぎる頃

「んっ、はぁ……」

今日はどんよりとした曇り空。

そんな空を見てため息をつきながら、俺はいつものごとく、毎朝のランニングのために家の前で準備運動をしていた。

「1、2、3、4、5、6、7、8……」

屈伸、伸脚、アキレス腱伸ばし、上体の前後屈、体側、旋回、跳躍、深呼吸。

1つ1つのストレッチをゆっくりと数えながら、じわりじわりと自分の身体を温めていく。走ってても身体は温まるけれど、この準備運動がとても大事だから、特に俺はこれを入念にやっている。

いい運動は、いい準備運動からって感じにな。

ガチャリ！

「……………！」

その時、曜の家の玄関が突如として開かれる。

こんなに朝早くから曜の家族で家を出る人を見たことがなかったから、突然開いた玄関に俺はビクツと身体を跳ね上がらせる。

でも、家から出てきたのはあいつだった。

「あつ……………遼くん」

「曜……………」

曜。昨日からずっと千歌のことで頭がいつぱいで、頭が爆発寸前にまであつていたやつが、玄関を開けて俺の前に姿を現す。

しかも、昨日の私服姿のままだった。

「どうしたんだよ？昨日の服のまんまじゃん」

「あつ、うん。それは分かかってるんだ……………」

「もしか、まだ……………」

「うん。ちょっとね」

困った表情のまま頬をポリポリと掻く曜を見て、どうやら彼女は未だに昨日のことを引きずっているような感じだった。こいつの気持ちは、分からなくてもないけれどさ……。

俺に超強引に約束された千歌は、今日には答えを出してくれるはずだろう。

そうでないと、俺や曜たちが困る。

「続ける」のか「やめる」のかで、千歌を含めた6人の未来は大きく変わる可能性は十分にある。続ければ彼女たち次第でどうなるか分からないけど、千歌がやめると言ったら、統廃合の件は、きっとそっちに向けて前進することになるだろう。

東京で言われたことに挫折せず、スクールアイドルを続けるのか？それとも、そこで諦めて、今までの努力を無駄にするのか？

さて、千歌はどちらを選ぶのだろうか？

全ては今、彼女にかかっている。

「遼くんは今からランニング？」

「ああ。曜も一緒に走るか？雨が降りそうだけど、朝のランニングは気持ち良いぞ？」

「うーん、分かった。私も一緒に走る」

それで曜はそう言つては、俺と朝のランニングをするために一旦家へと戻つていく。正直なところ、曜をランニングに誘つたのは頭に抱えている千歌のことを少し忘れさせたいため。

曜は何かと色々抱え込んでしまうタイプだから、時たま俺が何かするときには、俺から曜を誘つたりはしている。

でも、それは一時的なものに過ぎない。

すぐに浮かない顔に戻るからさ、曜も曜で本当の気持ちを話してくれないことが多い。い。

後々、あいつもそうなるのか？

「お待たせ〜！」

そんな時、準備を終えて俺のところに戻つてきた曜だったが、俺は彼女の姿に呆然とする。

「……変えたのは靴だけか？」

「うん。着替えるの面倒くさいし……」

「おいおい。年頃の女の子が言うかそれ……」

彼女は服装を一切変えないまま、靴をランニングシューズに変えただけで俺のところに戻ってきた。

着替えるのが面倒くさいとか、年頃の女子が言うような言葉じゃないと思うけれど、彼女がそういう格好でいいのだったら、好きなようにすれば良いと俺はこの時そう思っていた。

「まあいいや。それじゃあ走るぞ?」

「うん! ヨーソーロー!」

そこで曜のいつもの掛け声のあとで、俺と曜は朝のランニングを始めていく。

家から車が走る大通りへと出て、そこから永代橋通り、国道414号線と道なりに沿って走って、俺と曜が向かうのは千歌の家がある方向だ。

別に千歌へ会いに行くわけじゃない。

あくまで朝のランニング。俺が所属してる部活の練習の一環である。
ただ、それよりも……

「ハア……ハア……！」

「……………」

家から曜と走っているわけなのだが、どうも今の曜の様子がおかしいし、いつもの元気もない。

やっぱり、千歌の事が関係してるのはまず間違いないと思う。特に昨日のことに
関してが、何よりも一番に関係しているのは確かだ。

「朝のランニング、とても気持ちいい！空が晴れてたら、もつと気持ちいいのに……！」
「ああ、そうだな……！」

偽りぶった笑みを浮かべながら、朝のランニングを楽しんでいるつもりでいる。

もうなんか、今の曜は精神的に色々とヤバそうに見える。辛い気持ちを隠して、無理
してランニングと一緒に走って……。

俺が誘ったことがまず悪かったな、これ。

しばし俺は、曜をランニングに誘ったことを後悔しながら走る。千歌のことで思い詰めていた曜を、ランニングに誘うこと自体にね。

「千歌ちゃん！千歌ちゃん！」

「んっ……？声が聞こえる」

そんな時、曜と2人で走っていてだんだん千歌の家に近づいていくと、微かにながら、千歌の名前を叫んでいる声が聞こえてくる。

「あれは……梨子ちゃん？」

その声は、千歌の家に近づいていくたびに大きくなつて、曜の声に連れられて浜辺へと視線を向けると、海に向かって叫ぶ梨子の姿があった。

そんな梨子の姿を見て俺たち向かわずにはいられなくて、俺も曜も、ランニングを途中でやめて梨子の元へ駆け寄る。

「梨子ちゃん！」

「あつ、曜ちゃん！遼くん！」

「梨子ちゃん。一体どうしたの？」

「大変、大変なの！」

「り、梨子！ひとまず落ち着け……！」

そしたら梨子は、目に涙を浮かべて泣いていた。

それはまるで、自分の力が頼りなく、大切な友達を救えなかった友人のようだった。

「一体どうした？何があった？」

「千歌ちゃんが海に向かったのが見えて、私も千歌ちゃんを追いかけてきたんだけど、千歌ちゃんの姿が全然見当たらず……」

「ええ!？」

「おいおい……」

梨子曰く、千歌の姿が見当たらないらしい。

海に向かったと証言し、それでも千歌の姿がないということは、俺たちは今、『最悪の

事態』に直面してしまったのかもしれない。

俺の言う『最悪の事態』っていうのは、少し簡単な説明になるけどこうなる。
海への投身による、自殺。

「まさか、自殺じゃないよな?」

「違う!千歌ちゃんがそんなこと絶対しない!」

「ひとまず、千歌ちゃんを呼びましょう!」

俺だって絶対にそれは信じたくない。でも千歌の姿が見当たらない以上には、それを考えてしまうのは仕方のないことだった。

「千歌ちゃん!千歌ちゃん!!」

「千歌ちゃん!千歌ちゃん!」

「千歌!どこだ!?!返事しろ!!」

俺たちはそれから、千歌の名前を呼び続けた。

薄黒くて、穏やかな海へ向かって、千歌の名前を必死になつて何度も何度も呼びかけ

た。

そしたら俺たちの声に反応してか、千歌が海の中から顔を出す。

「ぶはっ！あれ？梨子ちゃん？曜ちゃん？遼くん？どうしてみんなここに？」

「……っ！千歌ちゃん!!」

俺たち3人がどういう理由でここにいるのか彼女はいざ知らず、俺たちの姿を見た千歌は、首を傾げ疑問の声を呈する。

こいつもまた昨日の服装のまま、海の中に飛び込んだせいで服がずぶ濡れだ。それにも関わらず、曜は千歌に勢いよく抱きつく。

目に涙を浮かべ、大切な友達が生きていたことに嬉しく思いながら。

「良かったっ、良かったよお……」

「よ、曜ちゃん？どうして泣いてるの？」

「分からない？私も遼くんも心配してたのよ？」

「あつ。あはは……ごめんなさい……」

千歌は泣いて抱きついてる曜の姿と、梨子の分かりやすい説明のおかげで全てを察してくれた。

彼女は曜を自分の身体から少し離れさせてから、千歌は俺たちに向かつて、頭を深く下げて謝った。自分の行動が、ちよつとした誤解を生んでしまったことに、千歌は反省の色を見せていた。

それでちよつとした誤解が打ち解けたあとで、俺は千歌に聞いて当然のような事を尋ねた。

「それで? どうして海に飛び込んだんだ?」

「えっ? あつ、うん。海に行ったら、なにか見えるのかなって思つて。ずっと探してた……」

「こんな暗い海なのに……?」

「うん。探してみたくなっちゃったんだ」

海に飛び込んだ理由。

多分きつと、千歌はこの前の梨子と同じような事をしたんだと思う。 “海之音” を聞きにいった時のように、海に行けば、何か見えるんじゃないかって。

破天荒といふかなんというか、突発的な発想だ。

「それで、それは見れた？」

「……ううん。何も、何も見えなかった」

梨子の質問に、千歌は微笑んで答える。

今この薄黒い海の中で、何かが見えるはずなんてないのに、千歌の声やその話し方は、いつもの千歌とは思えないくらいに落ち着いていた。

ただその微笑みは、梨子や曜を逆に心配させる。

2人の表情がそれを物語っていた。

すると千歌は、俺に向かって言い放つ。

「でもね！ 遼くん、私決めたよ！ “続ける”」

「……………」

「私、まだ何も見えてないんだって。先にある物がなんなのか。このまま続けても『0』なのか、それとも『1』になるのか、『10』になるのか。ここで止めたら、全部からないままなんだって……」

「千歌ちゃん……」

「だから私は『続ける』よ！スクールアイドル！」

「……そうかい」

千歌の口から発せられた『続ける』という言葉聞いた俺は、安心して胸を撫で下ろす。

てつきり『やめる』って言うんじゃないかと一瞬だけドキツとしたけど、彼女のその言葉を聞いて、俺の内心はホッと安堵していた。

「だってまだ『0』だもん。『0』だもん……」

でも千歌の表情は、だんだん暗くなっていく。

イベントでの得票数が『0』であったことを話に持ち出して、彼女の手は次第に強く握られていく。

そして一緒に声も少しずつ震えていて、千歌自身も我慢が出来なくなっていることを俺は感じた。

「あれだけみんな練習して、みんなで歌を作って衣装も作って、学校のためにPVも作って、頑張って頑張って、みんなに良い歌聞いて欲しいって……、スクールアイドルとして輝きたいって……」

自分の思いを口々に重ねていくうちに、千歌の声は掠れて涙声になり、そして……

ドゴツ！

「……っ!？」

「なのに、〃〃〃だったんだよ！悔しいじゃん!!」

「千歌ちゃん……」

千歌は自分の両手で、自分の頭を強く殴る。

みんなを明るく引っ張る千歌が、自分の頭を殴るくらいにまで悔しい感情を滲ませている。その行動の意味として、彼女自身の思う気持ちだが、俺たちの目に見えるほどに表れていた。

ドゴツ！

「他のスクールアイドルと差が凄くあるとか、昔とは全然違うとか、そんなのどうでもいい！悔しい！やっぱ私、悔しいんだよ……うっ……」

「……………」

千歌はもう一度頭を強く殴って、悔し涙を流して声を上げずに泣いている。

やっと千歌は、自分の本音を打ち明けてくれた。

東京のイベントのあとから、千歌は今までずっと我慢してきたと思う。みんなに悔しい姿を見せたくないって、この瞬間までそう思ってきたと思う。

でも、それももう終わりだ。

俺たちに隠すことも何もない。

悔しいなら悔しいと、思う存分に泣けばいい。

お前の近くには『喜怒哀楽』を共に共感出来る、大切な仲間がいるのだから。

ギョツ！

「……っ！梨子ちゃん、曜ちゃん……」

「良かった。やっと素直になれたね」

「私も、千歌ちゃんが素直になってくれて嬉しい」

梨子と曜。2人も目に涙を浮かべて泣いている。

服や靴が海の水で濡れようとも関係なく、梨子は千歌の背中からギュッと抱きしめ、曜は千歌の横に立ち、手を肩に置いて寄り添っていた。

俺を含め、3人は千歌が素直になってくれたことを心から喜んでいる反面、千歌は涙を拭いながら、俺たちに尋ねるように話をしてくる。

「だって私が泣いたら、みんな落ち込むでしょ？今まで頑張ってきたのに、せつかくスクールアイドルしてくれてるのに、悲しくなっちゃうでしょ？」

「……………はあ」

「だから、だからあ……」

千歌の中でも、色々と気にはしていたみたい。

自分がみんなをスクールアイドルに誘ったから、私が泣いたらいけないとか。私がリーダーだから、みんなを明るくさせなきゃとか。

千歌は千歌なりに、明るく振舞ってみんなを引っ張ろうとしたんだろうけど、結局それは、みんなの心配を煽るようになってしまった。

こうなったのはもう仕方ないことだ。次からはちゃんと、自分の口から本音とか言うようにすればいい。ただそれだけの話だ。

「馬鹿ね、千歌ちゃん」

「えっ……?」

千歌が涙ながらに言ったことに対して、梨子は『ふふっ』と笑って千歌に話を始める。

「みんな、千歌ちゃんのためにスクールアイドルをやってるんじゃないの。みんな、自分で決めたの。私も、曜ちゃんも……」

「そうだよ千歌ちゃん。ここにいないけど、ルビイちゃんも花丸ちゃんも善子ちゃんも、みんな自分で決めたんだよ」

『A q u o r s』としてスクールアイドルを始めようと決心したのは、千歌ではなくて誘われた本人。

それを証言するようにして、梨子と曜は、千歌に笑いかけながら話をする。

「でも、でも……！」

でも千歌は、未だにそれを自分の責任だと思い込んでいるようだったから、仕方なく俺も千歌の元へ歩み寄り、千歌に言葉を投げかける。

「もういいんだよ、千歌」

「遼、くん……」

「いい加減素直になりやがれ。感じたことや思ったことを声にして、素直にみんなにぶつけばそれでいいんだよ、ド阿呆」

「……っ！うっ……うう……」

大きく怒鳴り散らすことなんてしなくとも、俺の言葉はちゃんと千歌に伝わっている。彼女の頭を優しく撫でれば、千歌はまた大粒の涙を流す。

今日は仕方ない。こいつには目一杯泣かせてやろうと思った俺は、果南直伝のアレで、千歌を俺の身体へと思いつき抱き寄せた。

「ほれ千歌、ハグ」

「……うん」

「千歌ちゃん」

「千歌ちゃん！」

千歌が濡れてるとか関係ない。

俺が千歌を抱き寄せれば、梨子も曜も、左右から千歌に抱きついて静かに涙を流す。

それで俺や梨子の言葉を聞いたのを最後に、千歌の我慢は、まるでダムが決壊するよ
うに崩落した。

「みんなと一緒に歩こう。一緒に……！」

「全く、心配させやがって、馬鹿野郎……」

「うっ、うう、うわああああん！」

声を上げ、千歌は泣く。みんながいつもそばにいてくれることの安心感を認識した千歌は、俺の胸のあたりに顔を埋めて、一緒に泣いてくれる梨子や曜よりも、大きな声で彼女は泣いた。

しばらくそのまま彼女を泣かせ、千歌が泣き止んで落ち着いたところに俺はまた話をする。

これは彼女に、希望を与えるような言葉だ。

「なあ、千歌」

「うん、なに遼くん？」

「今から〃0〃を『50』とか、『100』とかにするのは無理だとしても、その〃0〃を、『1』にすることは出来ると思うんだ」

「……っ！」

実際、『0』は1番下で底辺に位置する。

でも『0』というどん底であることは、つまりはもうそれ以上に下がることはないということ。もう彼女たちは、上へのし上がるしかない。

その上で俺は、千歌たちにまず地道に上へ登っていかうという意味で、その言葉を告

げた。

『0』から『1』へ

俺の話を聞いていた梨子と曜も、千歌の両隣で『やろう』って話をしていた。

「私も知りたい！それが出来るのかどうか」

「そうだね！私も知りたい！」

「千歌は、どうする？」

「……………うんっ!!」

俺の話に彼女たちは、ほぼ満場一致だった。

涙を浮かべたまま、千歌は笑って頷く。

やっと千歌は笑った。散々暗い顔をしてみんなを心配させていた彼女に、ようやく笑顔が戻った。

もう彼女はきつと、みんなの前で悩むことなく、素直に話をしてくれるだろう。自分の気持ちをも、はっきりと言ってくれはるはずさ。

そんな俺たちを照らすようにして、雲の隙間から太陽が顔を出す。

「「うわあ〜!!」」

なんか、太陽が千歌たちに『頑張れっ!』とでも言っているかのようだ。

千歌たち3人はその太陽をじつと見つめて、気持ちを新たに胸に秘めているようだった。

この先、A q o u r s がどんな道を辿っていくのかは俺も彼女たちも分からない。ここから飛躍するかもしれないし、また挫折するかもしれない。

千歌たちみんなが力を合わせ、どんな未来を切り開いていくのか、俺も少しワクワクしてきた。でもまあ、俺が彼女たちの力になれるように頑張らないといけないけどな……。

「よ〜しっ! みんなでまた頑張ろう〜!」

「おお〜!!」

「お〜っ!」

「これでよしつとー」

私は部室にあるホワイトボードに、1枚の用紙を貼り付ける。それは東京のイベントで貰った、投票の結果が書かれている用紙。

30. A q o u r s 0

紙の1番下に、その名前は書かれている。

私たちにとって、それは一つの悔しさであることはまず間違いない。それは、とても変えられることじゃないけれど、遼くんの言葉がああ時の私を助けてくれて、希望をくれた。

『今から〃0〃を『50』とか、『100』とかにするのは無理だとしても、その〃0〃を、『1』にすることは出来ると思うんだ』

『0』を『1』にするなら、私たちなら出来そうな気がする。今すぐに出来るわけじゃないけれど、いつしか、出来たらいいなって思う。

でも、そのためには……

「じゃあ、練習しに行こう！」

「「「うんっ！」」」

みんなで上に行けるように、もっとたくさん練習をしなきゃね！そうしないと、私たちが目指してるライブに出られないんだから！

「ヨーソーロー!!」

「頑張ルビィ!!」

これから私たちは、『0』から『1』へ向かって走っていく。悔しい気持ちはあるけれど、もうここで立ち止まってなんかないからいい。

憧れている『μ's』みたいになれるように、光り輝く眩しい光に向かって、私たちは、そこへ全力で走って行くんだ！

悔しさを乗り越えて、『0』から『1』へ！

#46 充実の週末 前編

『今日、私たちに付き合いなさい!』

『ずらっ!』

『ヒギイ!』

1年生。特に善子の一言で、今日の予定がすでに決まってしまったようなものだった。

待ち合わせ場所は沼津駅前。時間は10時。

今日は真夏日の30度。澄み切った空から太陽が燦々照りつけ、特に女子なんかは確実に日焼け止めクリームとかを塗りまくる頃だ。

そんな日に、俺は何に付き合わされるのかは未だに彼女たちから言われてはいない。でもだからこそ、俺は少し疑問に思うところがある。

どうして、俺を誘ったのかだ。

「……遅い」

とても素朴な疑問かもしれない。けどさ、善子、ルビイちゃん、花丸ちゃんの3人の外出で、理由もなしに俺を誘うわけがないんだ。

とりあえず、俺はもう沼津駅にいる。

時間は9時50分。集合時間の10分前に来て待っているのだから、誰も文句は言うまい。

その時……

「ちゃんと来たわね！私のリトルデーモン！」

「やっとな人目のご登場か」

俺から見て左から善子がスタスタとやって来て、相変わらずの堕天使ポーズで『ギラッ』と、自分から口にして笑っていた。

彼女の着ている格好に感じて、『堕天使』という雰囲気はとても感じられる。

ピンクのハートがプリントされた白のTシャツの上に、黒のレザージャケット。首と腹にはチョーカーという「首輪」を身に付け、ワインレッドと黒のスカートに黒のショートブーツ。今日の善子はハードというか、格好良い系で決めてきたようだ。

「今日も黒一色だな。さすがは墮天使」

「クッククック、当然……」

俺の思っていた服装とは、ちょっと違った。

この間着ていた、なんか少しゴスロリっぽい感じの黒の服装だと俺は思っていたのだが、ちょっと俺からしてみれば意外だった。

まだルビィちゃんと花丸ちゃんの姿は見えない。

本当は3人が揃ってから聞いた方がいいのかもしれないけど、今のうちに善子から聞いておこう。

「なあ善子……」

「だからヨハネ！」

「……ヨハネさん。今日はどうして3人のお出かけに俺も呼んだのか。それを教えて欲

しつ」

正直、いちいちヨハネ呼びしなきゃいけないのが少し気に入らない。だが彼女はそう呼べば満足するらしいから、それくらいは我慢する。

それで俺は善子に理由を聞くと、彼女は両手を腰に当て、『えへん』と言わんばかりに説明する。

凄く、単刀直入に……。

「遼さん。今日はあなたと親睦を深めたいの！」

「……………はい？」

「だからっ！私とズラ丸とルビィの4人で、楽しくお出かけして親睦を深めようってこと！」

「……………なるほどね〜」

“親睦を深めたい”、とな……。

俺も全く考えていなかったわけじゃない。それとは別として、全然違う理由だと思っていた。

でも確かに、俺と1年生との関わりはそこまでは多くない。話す頻度に関しても、千歌たち2年生組よりは圧倒的に少ない。

だからこの機会にと思い、善子を筆頭に、今日を以って3人は決行したんだと思う。それなら俺も彼女たちと同様にその気になって、彼女たちと親睦を深めよう。善子たちが俺と仲良くなりたと言っているのだから、俺もそうしないと彼女たちに失礼だ。

「まつ、あまり1年生と出かけたなり、遊んだりしたことないからこの機会だ。俺たち4人で、みんなで目一杯に遊ぶか！」

「クツクツクツ、承知っ！」

自分自身にも言い聞かせるようにして、俺は善子にそんな風に話をする。

するとそこへ、花丸ちゃんとルビィちゃんの2人が走ってこちらにやってくる。腕時計を見たら、針がちょうど10時を指していたから時間ぴったしだ。

「おはようございま〜す！」

「お、おまたせしたずら〜！」

「時間ぴったし。待ってたよ2人とも」

2人は走ってきたことで息は荒い。だから、しばらく2人が落ち着くまで善子と待つて、2人の呼吸が整ったところで話を切り出す。

「じゃあ全員集まったところだけど、実際3人は、今日どうするのか決めてるのか？」
「はい！もちろんです！」

あつ。どうやら聞くまでもなかったみたい。

ルビイちゃんと花丸ちゃんの輝かしい目つきが全てを物語ってて、今からどこに行くうとしているのか分かった気がする。

でもまあ、一応聞いておくんだけどね。

「それなら、一応話してくれ」

「はい！私たち、遼さんと今から水族館に行きたいと思ってるんです！」

「それってもしかして、“ミトシー”？」

「はい！イルカさんを見るすら！」

俺が言う「ミトシー」っていうのは、日本の中でも2番目に歴史の長い水族館とされている伊豆・三津シーパラダイスのことだ。

場所は千歌の家の近くにある。ただ、バスでしか移動手段はないから大変なんだ。

「ルビィ、イルカさん大好きなんだ♪」

「そうなんだ。それは楽しみだな!」

「はいっ!」

ミトシーで2人が見たいのはイルカ。つまりは、イルカのショーを彼女たちは見たがっている。

それだけじゃないと思うけど、水族館でメインになるのは、それ以外に他ならない。

「それじゃあ、早速行くぞら〜!」

「「おぉ〜!!」」

そんでもって俺たちは、目的地の伊豆・三津シーパラダイスへとバスを利用して向かった。

バスで片道740円もかかるのは、少し我慢しないとイケないけどね……。

~~~~~※※※~~~~~

「アシカさん……可愛い♡」

「本当ずらね〜♪」

ミトシーに着いて、ルビイちゃんと花丸ちゃんはアシカを見てはしゃいでいる。特にルビイちゃんがガラスに顔をべったりと付けて、俺から見てルビイちゃんは、少し子

供つぽく見えた。

「2人とも、楽しそうでは何よりだ」

「何よ。アシカなんかではしゃいじやって！」

「そういうお前は楽しくないのかよ？」

「べつ！別にヨハネは、こんな生き物を見ただけではしゃぐ身じゃないの！」

「ふう〜ん……」

だが逆に善子は、アシカを見てあまりはしゃぎはしないつぽい。ただ俺の隣で、ルビイちゃんやと花丸ちゃんがアシカを見てキャツキャツしてるのを、腕を組んで眺めているだけだった。

俺はそのとき思う。善子が、どんな魚を見て目を輝かせたり、はしゃぐのかつて……。

こいつ墮天使だし、アシカみたいなあまり可愛いものには興味なさそう。今、善子が着ている格好も含めてだけど、善子は結構、「カツコイイ系」ばかりのものが好きそう  
だ。

となると、善子が好きそうなのはアレだな。

よしっ。そうなればすぐに行動だ。

「なら善子。ちよつとこつちに来い！」

「ええ!?!ちよ、ちよつと何よ!?!」

俺は善子の手を握り、2人にここを後にすることを話した上で俺は、善子がある場所へ連れて行く。

ルビイちゃんと花丸ちゃんがいるところは明るいところだけど、俺が善子連れて行く場所は、そこは打って変わって薄暗い場所。

カツコイイ魚といえば、ヤツしかないよな？

「ほら、着いたぞ」

「……………つ!?ここ、ここつて……………」

「ああ。//サメ//がいる水槽だ」

俺が善子連れて着た場所は、海でも恐れられているサメがいる水槽だ。

俺は実はサメが大好きで、小学生ぐらいの小さい頃から、千歌と曜の3人でよくここに來ていた記憶がある。

「サメ」って、結構カツコイイよな？

歯が鋭くてカツコイイし、画像とかでしか見た事ないけど、海面から『バシヤッ！』って飛び上がりながら、獲物を『ガブツ！』って捕らえる瞬間が、俺的には最高にカツコイイんだ。

さて、善子はどう思う？

「わあ〜！カツコイイ……！」

聞くまでもなかった。

善子は水槽で身軽に泳ぐイタチザメを見て、あの2人と同じように目をキラキラさせている。

ルビイちゃんみたいにまでとはいかないけれど、善子もまるで子供みたいになっていた。水槽で泳ぐイタチザメを近くで見ようと、彼女は水槽のガラスに両手をつけて見ている。

善子の後ろ姿を見守るように見ていた俺は、彼女を一瞬だけ、自分の妹のように見ていた。

俺ってば、一人っ子だからさ。『妹』を持つ『兄』の気持ちってこういうものなのか



な？つて、俺は終始そんなことを考えていた。

別に妹が欲しいとか思ってたねえからな!?

「遼さくん!!」

「やっと見つけたぞら〜!」

するとそこへ、ルビイちゃんと花丸ちゃんの2人がこつちに走ってやってくる。アシカを見終えて、俺たちを探しに来たんだらう。

でも、何故か2人は慌てた表情を見せている。

一体どうしたんだらうと思つて、俺は息を整えている2人に対して言葉を投げかける。

「どうした2人とも、そんなに慌てて……」

「た、た、大変ぞら〜!!」

「どうしたのよズラ丸!言いたいことがあるなら、ちゃんと言いなさい!」

善子も2人の表情を見かねて、ガツと2人に顔を近づけて恐喝じみた感じに尋ねる

と、ルビイちゃんが開口一番に話を始める。  
でもそれは、とても意外なことだった。

「あ、あのね！イルカさんのショーが、あと3分で始まつちやうの！だから急いで、善子ちゃんたちを呼びに行かなきゃって思つて……！」

「ああ、なるほどね……」

「なんだ。そういうことだったのね……」

ルビイちゃんの言葉で時計をよく見たら、ルビイちゃんが言っていた通り、イルカショーの時間まであと3分を切っていた。

ルビイちゃんと花丸ちゃんが1番見たがっているイルカのショー。これには俺と善子も、イルカのショーが行われる場所へ向かうしかなかった。

2人に対して『嫌』つて言ったら、俺も善子も2人から怒られる未来しかないから。

「じゃあ、早く行きましょ！」

「うん！急がないとショーが始まつちやう！」

「遼さんも行くぞら！」

「お、おう……！」

それで善子が先頭を切って、俺たちはイルカショーが行われる屋外の方へ出ると、もうすでに観客席が埋まるほどのお客さんがいた。

座れる場所がないか探していると、4人で一緒に座れるわけじゃないけれど、前後で2人ずつ座れる場所がちょうど見つけることが出来た。

「良かった！間に合った〜！」

「ふう。間に合わないかと思ってたわ」

「間に合ったのは、善子のおかげだな」

「善子言うな！ヨ・ハ・ネ！」

「はいはい……」

ルビイちゃんと花丸ちゃんが前に座り、俺と善子が後ろに座る形。いちいち『ヨハネ！』と突っ込みを入れる彼女だが、その反応が俺は見ていて面白いから何も言わないでおく。

その方が何というか、善子らしいからさ。

『お待たせ致しました！まもなく、イルカショーの開演です！』

『『『『パチパチパチパチ！』』』』

司会の言葉と共に、客席から拍手が湧く。

目的だったメインイベントが始まるから、ルビイちゃんや花丸ちゃんは無意識にワクワクしている。

隣で座っている善子は、2人と違って腕を組み、いつものように捻くれたような顔をしていた。善子は本当に、可愛い顔を台無しにしちゃってるよ。

バシャーーン！バツシャーーン！！

「うわあ〜！すごい！」

「すごいね〜ルビイちゃん！！」

「うんっ！イルカさんすごい！」

快晴の空の下でイルカショーが始まり、それからは前の2人ははしやぎっぱなし。

イルカが水中から華麗に宙を舞い、観客の人たちはそれに大きく魅了されているのが伺える。

ただ、イルカが宙からプールに戻った瞬間に起きる水しぶきのおかげで、前で見ていた人たちはずぶ濡れになっちまうのが恒例だけだな。

「……………」

善子。そんな颯めっ面すんなよ。

さつきも言ったけど、お前の可愛い顔が台無しになっちゃってるからさ。その表情やめた方がいいのにな……全くよ。

「……………」

「……………」

でも今思うと、何故か善子の顔が赤い。

イルカのショーで顔を赤くする理由が俺には見当たらないため、どうしてそうなっているのが俺はどうにも分からなかった。

だがだとしてもだ。善子のことだから、イルカが宙に舞う姿がとてもカッコイイとか、少なからずはそう思っているはず。

だからあまり、気にしない方がいいのかも。

そう言い聞かせて俺は、またすぐにイルカショーに視線を注いだ。彼女が顔を赤くしている、本当の意味を知らずにね。

「……どうしてこいつに、ドキドキしてるの？」

~~~~~※※※~~~~~

「はあく！楽しかった〜！」

「良かったね、ルビイちゃん！」

「うんっ！」

無事にイルカショーを楽しく見て、俺たちはそのあとにミトシーを後にする。

沼津駅行きのバスに乗り込んで、ルビイちゃんと花丸ちゃんは笑いながら、楽しく談笑していた。

その2人の後ろには俺と善子が席に座り、善子とこの後について話をしていた。

「んで？この後はどうするんだ？」

「とりあえず、まずお昼を済ませたいわ。なんだかんだで、私もお腹空いちやったし……」

ぐっっ！！

「……………」

「「……………」」

なんつうグッドタイミングなんだろうか？

善子が言ったそばから彼女のお腹から音が鳴り、ルビイちゃんも花丸ちゃんも、その音に驚いて話を止めては、途端にバス内は静寂に包まれる。

それで、自分のせいで場の空気が気まづくなつたことを気にしている善子は、自身の顔を赤くする。とんだ凄いタイミングだったから、彼女自身でさえも驚きを隠せないらしい。

「本当に、お腹空いてたんだな……………」

「うっさ〜い！聞くなあ〜！」

恥ずかしそうに、彼女は俺の肩を叩く。

全然弱くて、全然痛くないけど……………」

「じゃあ沼津に戻ったら、みんなどこかでお昼にするぞら！善子ちゃんですら、凄くお腹が空いちやっつてるらしいし……………」

「ず〜ら〜ま〜る〜!」

「あ、あはは……」

花丸ちゃんが言っていることは事実。だから善子には、弁解の余地もない。ただ善子の顔を見ながら話す花丸ちゃんのその言い方には、とても無慈悲にも感じるけどな……。

でもまあ、みんなお腹空いていることには変わりないだろう。それならばここは一つ、今日お出かけに誘ってくれたお礼をしたいと思つた俺は、3人に対して話をする。

「それじゃあ3人には、俺がご馳走しよう」

「えっ!? 遼さん、お料理出来るんですか!？」

なんだいルビイちゃん。俺には料理の才能が全くないと思つていたのか？

それはまあ、しょうがないよね〜。

料理をしているところ、見せたことないからな。

「失敬だなくルビイちゃん。これでも俺はな、簡単な飯くらいは賄えるんだぞ?」

「それならルビイ、オムライスが食べたい！」

「ほほう。オムライスか！」

それでルビイちゃんは、自分はオムライスが食べたいと右手を挙手して提案をしてくる。何も心配もいらぬ。オムライスなら普通に作れる。

「花丸ちゃんと善子は？食べたいものとか、なにかあるなら言つてよ」

「良いんですか？賭つてもらつても……」

「良いんだよ。誘つてくれたお礼の意味も込めて、花丸ちゃんが食べたいものを作つてあげるよ！」

「っ！ありがとうございます！」

花丸ちゃんは少し、俺に対して気を遣っていた。

でも『お礼がしたい！』と俺は言つたら、彼女は笑顔を浮かべて嬉しそうに笑う。遠慮しなくて良いんだと、俺は俺彼女の思いを感じる事が出来た。

「じゃあマルも、ルビイちゃんと同じでオムライスが食べたいぞら！」

「分かった。善子はどうする？」

「私も良いわ。オムライスが食べたいわ」

「オツケー！じゃあ決まりだな！」

花丸ちゃんも善子も、ルビイちゃんが食べたいと言っていたオムライスを食べたいと言うから、今日のお昼はオムライスに決定。

沼津駅に着いたら、早速オムライスを作るための材料を買う必要があるそうだ。

「楽しみだねえ〜！」

「うん！マルも楽しみずら〜！」

「……………ふっ♪」

沼津駅までバスに揺られている俺以外の3人は、三者三様、どことなく俺が振る舞う料理を楽しみにしている様子がうかがえる。

その様子を間近で見ていた俺は、腕によりをかけて作るオムライスで、ここにいる3人を、キラキラの笑顔にしたいと思った。

#47 充実の週末 後編

「ごめんな。荷物持ってもらっちゃって……」

「大丈夫です！それにお料理を作ってくれるんですから、これくらいはさせてください
ずらー！」

「ありがとな、花丸ちゃん」

「えへへっ♪」

自宅の近くのスーパーに寄って材料を買い、俺は彼女たちを家に招き入れる。

ぶっちゃけ、1年生の3人を家に招くのは、当然のごとく初めてだからこつちも多少の緊張は、なきにしもあらずって感じよ。

「ちよっと！私にも何か言いなさいよ！」

「はいはい。ありがとなく善子〜」

「もう！棒読みで言うなく〜！」

やれやれ、善子は我が儘なやつだな……。

お礼は言ってるんだから、素直に受け取ってくれても良いじゃないか？減るもんじゃないんだし。

「遼さん、材料はここに置いておきますね」

「おう。サンキューなルビィちゃん」

「い、いえ……」

さて、材料も全部揃ったことだし、彼女たちを待たせるわけにはいかないから、早速オムライス作りを始めるとしよう。

早く作り始めないと、彼女たちにめっちゃ怒られちゃうからな。

「じゃあ、俺は早速オムライスを作るから、3人はゆっくり寛いでて良いよ」

「では、お言葉に甘えさせて貰いますぞら〜！」

俺は彼女たちにそう言つて、花丸ちゃんがそんな言葉のあと、3人でリビングへと向かつて行つた。

今しばらく善子のお世話は、主にツツコミを入れる花丸ちゃんに任せるつもり。朝練のときにいつもその様子を見てるから、花丸ちゃん自身もそのことは分かっていると思う。

頼んだぞ、花丸ちゃん。

「クツクツク。やつと墮天使ヨハネを……」

「他人の家でやめるずらよ？善子ちゃん？」

「うっ。わ、分かつてるわよ！」

うんうん、それでいい。

さて、こつちもこつちで始めますか！

料理を始める前に俺はエプロンを着て、ゴシゴシと隅々まで手を洗う。

半袖のTシャツを着ているのに、袖を捲る仕事をしてしまったことに恥ずかしさを感じながら、料理に使う材料を冷蔵庫から取り出す。

オムライスを作るのだから卵は必須だ。

あとはご飯とケチャップ。それにチキンライスに入れる材料諸々を台所に置いて。よし、ライスの方の材料はこれくらいだろう。

チキンライス of 材料 (※1人分の量)

- ・ご飯：お茶碗1杯
- ・玉ねぎ：1／4個
- ・鶏肉：50g
- ・バター：20g
- ・塩こしょう：適量
- ・ケチャップ：大さじ2〜3．5

上の一覧が1人分の目安。だから4人分になると、用意する材料はこれの4倍になる。材料の消費量ももの凄く増えるけど、作りがいがあるってもんだ。

「花丸ちゃん！善子ちゃん！ここにトランプがあるから、3人で何かやろう！」
 「いいわよ！ババ抜きでもしましょ！」

「ババ抜き？それは一体なんぞら？」

「花丸ちゃん知らないの？」

「仕方ないわね。私が説明してあげる！」

リビングにいる3人はババ抜きをするみたいだ。

3人の声を耳で拾っていると、とても楽しそうな雰囲気でトランプをしているように聞こえてくる。

ルビィちゃん、花丸ちゃん、善子の3人も、千歌たち2年生と同じくらいに、とても仲が良くなったように俺はそう思えた。

それじゃあ、こつちも料理を始めよう。

まず先に、チキンライス作りだ。

《チキンライスの作り方》

1、まず玉ねぎの皮を剥いてから、包丁で細かくみじん切りにする。鶏肉は食べ応えが得られるように、四方1.5cm角に切る。

2、フライパンにはバターを弱めの中火で熱し、バターが溶けたら鶏肉と玉ねぎを炒

める。鶏肉の色が変わり、玉ねぎが透き通つたら、塩とこしょうを各少々をふつて混ぜる。その後中火にして、ご飯を加えてほぐしながらフライパン全体に広げる。

3、木べらで切るようにして炒めて、ご飯が炒飯のようにパラパラしてきたらケチャップを加える。上下を返すようにして混ぜながら炒め、ケチャップが全体に馴染んだらチキンライスの完成だ。

ざつくりな説明ではあるけれど、ここまで出来たなら、もうチキンライスに関しては大丈夫だ。

炒めて完成したチキンライスは、フライパンからボールへと移しておく。

「ふわぁ……いい匂い……♪」

「ヨダレが出ちやいそうずらく」

「ズ、ズラ丸！もう出ちやつてるわよ！」

「あつ！ごめんずら♪」

チキンライスから香る匂いに3人は大興奮。

特に花丸ちゃんが匂いだけでヨダレが出るといふことだから、彼女もそれなりにお腹

が空いていたんだろう。善子に指摘され、花丸ちゃんは恥ずかしさを隠せない様子。

それで次に俺は、チキンライスの上に被せる卵の部分を作っていく。

材料は卵と牛乳と塩少々。

地道ではあるが、この調理はゆっくり1人分ずつ作っていく。多少時間はかかるけれど、彼女たちの美味しく食べる笑顔が見たいからな。

すまないが許してくれ。

《上に乗せる卵の作り方》

1、用意したボールに卵2個を割り入れ、そこに牛乳大きじ1杯と塩少々を加える。菜箸2本の間隔をあけて持ち、ボールの底を擦るようにして、白身と黄身が混ざるまでしっかり溶きほぐす。白身の塊が残っていたりすると、卵がフライパン全体に広げにくくなるから、そこを注意してほしい。

2、卵を作るのに使うのは、さつきチキンライスを炒めたフライパンより少し小さいフライパンだ。サラダ油を小さじ2杯入れて強めの中火にかけ、1分ほど熱する。卵液を一度に加え、すぐにフライパン全体に広げる。火の通りにくい中心だけは、菜箸を使って手早くかき混ぜるのがポイントだ。

3、卵の中心が半熟状になってきたら火を止め、チキンライスをやや手前に、横に細長く、ラグビーボールのような形になるようにして乗せる。その後、フライパンを少し手前に傾け、向こう側から卵を破かないよう、フライ返しの手先をフライパンに押し当てるようにして、卵の下に斜めに差し込み、卵をそつとチキンライスに被せる。

4、差し込んだフライ返しを手前に起こしながら卵をそつと持ち上げて、チキンライスを覆うようにしてそつと被せる。さらにフライ返しで手前に引き寄せて、フライパンの側面に軽く押し当てながら形をしつかり作る。

5、ここで、盛り付けるお皿を用意する。そして皿の上でフライパンを少し傾けて、縁が皿に当たらくらいまで近づける。卵の中からチキンライスがこぼれないよう、合わせ目にフライ返しを当て、その上にオムライスを被せるようにして、フライパンをそつと返す。フライ返しを横にすべらすようにして引き抜き、オムライスをお皿に移す。

6、オムライスをお皿に移したら、オムライスが熱いうちにペーパータオルで包む。はみ出た卵を下に押し込むように、両手でラグビーボールのように形を整えたら、オムライスの完成だ。

「ふう、やっと出来た！」

でも、これをあと3回繰り返す。
心許ないけど、あと3人分を頑張って作る。

「遼さん、まだ完成しないの？」

「あと3人分だ。もうちよつと待っていてくれ」

「……分かったわ」

善子のやつ、相当待ちきれないみたいだ。

もう少しだけ待っていてくれ善子。もう少しで全員分のオムライスが出来るから、辛抱しててくれ。

それで、それから20分後

ようやく全員分のオムライスが完成した。

「よくしつ！オムライスの完成だ〜！」

「うわあ〜！美味しそう〜！」

「あと“仕上げ”を済ませたらオムライスをそつちに持って行くから、リビングで待っていてね」

「はい！分かりました！」

完成した様子を見に来たルビィちゃんは、出来たてのオムライスを見て目を輝かせている。

俺はそんなルビィちゃんをリビングへと一時的に追いやり、ルンルンと上機嫌なルビィちゃんの立ち去る姿を見たあとで、最後の仕上げに取り掛かる。

オムライスの上に何にもかけないなんてき、それだとあまりにも寂し過ぎるし、それがあるからこそオムライスなんだよな。

「……………よしー！」

そして俺は『それ』を手に取り、オムライスの上に文字を書き始める。

『ルビィ』『花丸』『ヨハネ』

これでもう、お分かりに頂けただろう。

「はい、お待ち！楠神特製のオムライスだよ！」

「遼さん！ありがとうございます！」

「うわあ〜！美味しそうずら〜♪」

「ゴ、ゴクリ……！」

手に取った“それ”はケチャップだ。

ケチャップでそれぞれ3人の名前を書いて、3人の前でそれを見せれば3人は超興奮している。

ルビイちゃんは最初からもうすでに興奮してたけれど、善子は一体何をしている??自分のスマホを取り出して写真をパシャパシャ撮っていやがる。

もしかして、あれか？女子の中で流行っている、俗に言う“インスタ映え”ってやつか？

「遼さん、食べていいですか!?!」

「もちろん!そのためにつつたんだからな!」

「ありがとうございます!」

「それでは、いただきますずら〜♪」

花丸ちゃんは俺の話の話を聞いてからスプーンを手に取り、オムライスを食べられる大き

さにカットし、大きな一口目を頬張る。

「ああくん♪」

「ああくん……」

「あん。もぐもぐ……」

ルビイちゃんも善子も、花丸ちゃんの少しあとに一口目を口にした途端、3人の口からは感嘆の声が飛び出してきた。

「美味しい！美味しいですー！」

「スプーンが止まらないぞらー！」

「ちよ、ズラ丸！がつつき過ぎよー！」

花丸ちゃんは将来、もしかしたら大食い選手権で優勝するんじゃないかってくらいの食いつぶりだ。

隣でそれを見ていた善子でさえも、その勢いある食べ方に心配そうに彼女を見つめていて、不安そうに言葉を投げかけていた。

でも花丸ちゃん本人は、スプーンを動かすことを止めない。

俺のオムライスの味が想像以上に美味しいと感じているのか、もうすでに半分を平らげていた。

「マル、遼さんのお料理なら何でもいけちゃう気がするすら。マル、遼さんのお料理好きすら！」

「うん。そう言ってくれると嬉しいよ」

「ル、ルビイも！遼さんが作ってくれたオムライスが、とても美味しくて、とても大好きです！」

「あはは！2人とも、ありがとな！」

なんか、すごく照れてしまう。

2人のお礼は心の奥底からの気持ちで言っていると俺は感じれるから、な、なんかね……？

「……………」

「んっ？どうした善子？」

「べ、別に何でもないわよ。ただ……」

「ただ……?」

「うっ。えつと……その……」

善子のやつも、何か言いたげな表情。

でもそれを言うことが恥ずかしいのか、善子の頬は赤く明るみを帯び、俺と目を合わせるとしめない。

けれども彼女は自身で身体をもじもじとくねらせながら、目線を合わせずとも眩いた。

「お昼作ってくれて、ありがと……」

「……ふっ。善子はやつぱ良い子だな」

その様子を見て俺は、笑みを零してそう言った。

彼女の羞恥にまみれたその顔を見て、自分は彼女をとっても可愛いと感じた。彼女を弄ってるわけじゃない。

俺の率直な、心から言える本心だ。

「う、うるさい！あとヨハネ！」

「はいはい。分かりましたよ、ヨハネ」

「むう。分かればいいのよ」

だがやっぱり、俺にとつてそれは少し難儀だ。

いちいち「ヨハネ」呼びで善子の名前を呼ぶのは、俺でも少し心が折れそう……。

「それじゃあさつさとオムライスを食べて、午後も目一杯楽しんでいこうぜ！」

「は〜い！」

「クツクツクツ、承知！」

一先ずそんな俺の考えは頭の片隅に置いておき、俺たちはオムライスを食べ、俺が知らない午後の予定を目一杯楽しもうと3人に声をかける。

午前中はミトシーに行つて、イルカショーを見たりして楽しんだけれど、午後は一体、どんな予定を立てているのだろうか？

俺は、それも気になって仕方なかった。

それは一体どこののか？

今の会話でもう既に分かっただろう。

「なあ、俺がここにいて良いのだろうか？」

「何言ってるのよ！私もルビイもズラ丸も、遼さんを選んでもらいたいから、別に良いのよー！」

「なんかそれ、もうむちゃくちゃやな……」

俺たち4人がいる場所は、主に女性の下着を取り扱っているお店。俺みたいな男性が立ち入るべきではない、言ってしまうえば禁忌の領域。

そんな領域に足を踏み入れている俺は、彼女たちの下着を選ぶために今回訪れている。

正直に言つて、恥ずしいの一言だ。

「遼さん！これとかどうですか!？」

「ああ、うん。ルビイちゃんなら似合うと思うよ」

ルビイちゃんが見せてきた下着は、本当にルビイちゃんに似合いそうなピンクの下着。花柄の刺繍が散りばめられ、大人っぽくも可愛いらしい下着だ。

でもルビイちゃん、そんな目で見ないで。

ちゃんと似合うと思ってるからさ。ねっ？

「……本当ですか？」

「う、うん！似合う似合う！」

「ありがとうございます！」

俺はルビイちゃんにそう言うと、彼女はニコリと笑顔を見せてトコトコと試着室へ足を運ぶ。

また後々に試着をした姿を見ると、ルビイちゃんの恥じらう顔を頭で想像しただけで、こっちまで恥ずかしくなっちゃまう。

俺みたいな男子がここにいること自体場違いな気もするけれど、このお店は彼女たちにとつて、大事なお店であることは俺も十分に分かっている。

沼津には、下着店が2店しかないからな。

「遼さん！ちよつと来てください！」

「んっ？どうした？」

すると俺の背後から、顔だけをひよっこり出して俺を呼ぶ善子の姿があった。

ただ俺はこの時、善子がどうして身体を見せずに顔だけを出しているのか？そんな理由を考えることもしないまま、善子のもとに行つてしまったことが大きな間違いだった。

「もしかして、買う下着もう決まつ……た？」

「うふん♡どう？ヨハネの魅惑の下着は？」

「……………」

いや、その下着は過激にも程があるだろ。

胸を隠す生地が少な過ぎないか？なんなのこれ？ぶつちやけ、こういう下着を着ている人いるの？

ダメだ。その下着は俺には刺激的過ぎる。

「善子、すまないが俺は却下だ」

「ええ!? なんでよ! 別に良いじゃない!」

「そもそも! あの試着室から堂々と俺のところまで出て来るなよ! ほら、戻った戻った!」

「ちよ、ちよつと〜!」

俺は善子の背中を押し、試着室へと強引に戻す。

それで俺は後々にして、善子が着ていたその下着を、*“マイクロビキニ”*の下着物だと知る。

着用する者の身体の最小限のプライベートゾーンだけを覆う大胆なデザインだから、俺の思った通りなかなか刺激的な代物だ。

あんまり、俺の前で来て欲しくはないな……。

「遼さん、遼さん!」

「んっ? どうした花丸ちゃん?」

「ちよつと良いですか?」

そう考えていたら、今度は花丸ちゃんが俺を名前を呼んで来る。なにやら試着室のカーテンから顔を出し、恥ずかしそうに俺に視線を向けている。

何か困ったことでもあったのか？

「何か困ったこととかあった？」

「いえ。そういうことじゃないんですけど、ちよつとこつちに……」

「えっ!?!ちよ、ちよつと!」

バタン

「え、ええ……」

「ごめんなさい。悪気はないんです」

俺は花丸ちゃんに声をかけた瞬間、花丸ちゃんに自分の手を掴まれて、試着室に引き込まれる。花丸ちゃんの行動に思わず抵抗しようと思っていたが、抵抗する前に中に引き込まれてしまった。

どうしたものかと思っていたら、俺の目に飛び込んで来たのは花丸ちゃんの下着姿。黄色でシンプルな下着ではあるが、何ともエロスなのだろうか？花丸ちゃんのグラマーなボディに俺の性欲が駆り立てられる。

1年生で15歳ながら果南並みにありそうな大きな胸に、引き締まったお腹と太もも。本当にこの身体が1年生なのかと驚かされる。

そんな花丸ちゃんは俺に話をし出す。

それは彼女からのお願いであるが、同時に男子には到底『いいよ』とは言えない難しい決断だった。

「あの、遼さんにお問い合わせがあるんです」

「えっ？！お願い？！」

「次に試着しようと思ってる下着、遼さんには試着の手伝いをして欲しいんです……」

「えっ、ええ……?!？」

彼女の言う試着する下着というのは所謂スポーツブラのようなものらしい。それで花丸ちゃんが試着しようとしているスポーツブラには、「ジッパ―」というものが施されている。

つまりその下着は、自分一人で着ることが不可能だから、代わりに閉じて貰う必要があるわけだ。

彼女曰く、ジッパーがないよく見るスポーツブラだとサイズはあるけど、自分の胸元が少し苦しいと感じているらしい。

スクールアイドルの激しい練習で、胸が苦しいと彼女が言っていた。だから今回それを買って、それを着て練習しようというわけだ。

でも思うのは、どうして俺なのかだ。

別に不満があるわけじゃないけど、ルビィちゃんと善子がいるのに、どうして異性である俺に手伝いをお願いしたんだろうってね。

……このお店にいるから、俺の考えすぎか？

「これが、次に試着する下着です」

俺が考えた矢先に、花丸ちゃんが試着する下着を見せてくる。いかにもスポーツブラっぽく、純白のように真っ白なスポーツブラだった。

だが、俺はあることに気づく。

「なるほど。これが次の……んっ?」

「……? どうしましたか?」

このブラのジツパー、胸に付いている。

背中ではなく、『胸』に付いていやがる。

「さつき花丸ちゃんさ、俺に下着を着る手伝いをして欲しいってお願いしてきたよな?」

「はい。そうですけど……」

「この下着、その必要はないんじゃない?」

「あっ……!?!」

これなら俺が花丸ちゃんの試着の手伝いは必要もないし、何より一人でジツパーも閉められる。

花丸ちゃんでも、これは見ても分かるはずだ。

なのに俺には、試着の手伝いをして欲しいと彼女は間違いなく、きつぱりそう言った。全くことが矛盾している。

これは一体、どういうことなのかな？

「花丸ちゃん、これは一体どういうこと？」

「あつ……マル、おトイレ行きたくなつたずら」

「理由を教えてくださいたら通してやる」

「そ、そんなあ……」

場所はあくまで試着室。俺と花丸ちゃんの2人がやつと入れるスペースで、あまり身動きは取れないから早く質問に答えて欲しい。

そうすれば、俺もここから出るしな。

「ごめんなさい遼さん。さっきのは嘘ずら」

「……うん。だろうとは思ってた」

「本当は、話を聞いてもらいたくて……」

「話？どんな話？」

「ちゃんと話すので、少し待ってください」

そう言った彼女は、突然服を着始める。

本音は着替える姿を見ていたい。でも彼女にそれが失礼だろうから、彼女に失礼のなように後ろを向いて、着替えが終わるまで待つことにした。

それで3分が経った頃に、彼女は言う。

「終わりました。こつちを見てもいいですよ」

「うん。やつぱり、花丸ちゃんは綺麗だな」

「えっ!?!き、綺麗!?!」

「ああ。髪がサラサラで、俺の好きなタイプかも」

「ええ!?!」

おっと。これは少し彼女には刺激的だったかな?思わず自分が思ったことを口にしてしまった。

でもいいか。花丸ちゃんの顔は真っ赤になって、文学少女の彼女だから変な妄想を働かせているのを見て堪能できるし、これでもいい気がする。

「あつ。少し恥ずかしかった?」

「遼さんにはこの気持ち、絶対に分らないすら」
「ええ……」

やっぱり、ダメだな。

彼女にはあまりこれはよろしくないかも。

「ズラ丸！いつまで試着してるのよ！私もルビイも買う下着決めちゃったわよ！」
「花丸ちゃん、大丈夫〜？」

そんな時、カーテンの向こう側から善子とルビイちゃんの声が聞こえてくる。

2人はどうやら試着を終え、自分で買う下着を既に決めたようだ。善子なら特に、さつきの変な下着だったらマジ勘弁して欲しいところだ。

とりあえずは、ここに俺もいては2人に変な誤解を招いてしまい、花丸ちゃんに迷惑をかける。

その時、花丸ちゃんが背後から言い出す。

それはもう、自分からの志願だった。

「遼さん、ここはマルに任せてくれませんか？」

「えっ？でもそしたら君に迷惑……」

「迷惑じゃないです。むしろ、嬉しいです」

「えっ……？」

『嬉しい』というとても意味深な言葉には、正直どういう意味なのかは分からなかった。

嬉しい？一体どういうことなんだろう？

「お待ちせずらく！」

「えっ？なんで遼さんもいるのよ！」

「マルのお手伝いをしてもらったずら！」

「な、なんですすつてく!？」

そしてやれやれ。善子のことだから、絶対にこういう展開になるのはもう分かっていたよ。

年頃の男女が、密室に近い試着室であんなことやこんなことをしていたなんて考

えてしまうのは、当然のことです。仕方ないことだった。

だからこそ、俺も話に加わらないといけない。

「変なことを考えるなよ、善子。俺は花丸ちゃんに『手伝ってください』って言われただけで、お前が想像していることには全然なつてないからな」

「そう考えてたら善子ちゃん、スケベずら」

「うるさく！悪かったわね〜！」

ふう。2人でいい感じには持っていけたな。

それに善子が何気に反論をしないということは、まあそういうことなんだろうな。善子のやつ、意外とイケナイ妄想をしやすいようだ。

その後、ルビイちゃんに花丸ちゃんに善子の3人は、自分が気に入った下着を買うことが出来た。

俺は彼女たちに似合う色とか、そこらへんの意見を出すことしか出来なくて、あまり彼女たちの役に立つたと言える立場ではない。

でも、俺は彼女たちの笑顔を見て、少しほっこりしている。なんというか、安堵感みたいなもの。

どうしてだろうな？まるで彼女たちの兄か、父親にでもなった気分だ。

そうして3人は、それぞれ自分が購入した下着が入った紙袋を手に持ち、俺たちは店を出る。

時間も午後3時。太陽も西に傾きかける頃。

するとその時だった。

「そうだ！遼さん、まだお金ありますよね？」

「なんだ？嫌な予感しかしないんだが……」

「まだ太陽も沈みかけの3時ですし、私たちに何か奢ってくれませんか？例えば、アイスとか？」

「あつ！ルビイもそれがいい！」

「ええ。ルビイちゃんもかよ……」

善子が俺にアイス奢って欲しいと、とんでもないことをお願いしてきやがった。

この時に俺は頭を抱えた。同時にルビイちゃんまでもが賛同してきたのだからな。

お金はあるけど、俺たちが今いるところの近くにあるアイスのお店となると、沼津駅にある2店舗くらいだ。

あそこしかない。そう言い切れる自信はある。

「分かったよ。奢ってやる」

「わーい！じゃあ私はチョコミント〜♪」

「ルビイはストロベリーにしよう〜♪」

俺が奢ってやると言った瞬間、2人は子供のように喜びをみせる。ルビイがストロベリーを選ぶのは何となく分かってはいたが、善子がチョコミントを選ぶとはな。

人を見かけによらないとは、こういうことか。

「遼さん、とても太っ腹ずら」

「花丸ちゃんは何となく分らないの？」

「マルはいいずら」

花丸ちゃんは、どうやらいらぬらしい。出費は減るからいいものの、イマイチ釈然としない。

でも花丸ちゃん自身、4人で過ごした今日の1日をとても満足しているんだろう。

「今日は1日とても楽しかったですし、マルはもう満足です。遼さんがお昼に作ってくれたオムライスは、とても格別だったずら」

「ありがとう、花丸ちゃん」

笑顔がそれを物語っている。

3人の中で1番多く笑顔を見せていた彼女に同じく、俺も今日の1日が楽しかった。『充実した週末』と言っても過言じゃない。

あつ。そういえばあの時……。

『本当は、話を聞いてもらいたくて……』

花丸ちゃんと試着室にいた時、あのときに彼女は俺に対して何か話をしようとしていたな。

あれも一体、どんな話だったんだろう？

「そういえば花丸ちゃん」

「はい？何ですか？」

「……………」

いや、今は聞かないでおこうかな。

あの時、俺が彼女の話の逸らすようなことをしてしまったから、俺から話しかけるのはダメだな。

彼女が話そうとしていたことが、もしかしたら俺が聞いちゃいけないことかもしれないから。

「……………うん。何でもないや」

「……………？変な遼さん」

気持ちを切り替えよう。

この子のためにも。あの2人のためにも。

「じゃあ行こう。2人に置いてかれないように！」

「はいー！一緒に行きましょう！遼さん！」

こうして俺と花丸ちゃんは、ルビイちゃんと善子に置いていかれないように2人を追いかけた。

それで俺は沼津駅の近くにあるアイス屋さんで、2人に対してアイスをそれぞれ、1つずつ奢ることになってしまったのである。

はあ。しばらく金銭は節約だな。

ルビイちゃんと善子が嬉しそうにアイスを食べている反面、俺は内心でため息をついたのであった。

#48 過去と招待

私は彼女の言葉に愕然とした。

「……………えっ?」

私は果南から部屋に呼び出され、どんな話をするのか疑問にも思わないまま部屋に向かったら、果南からそんな話を唐突に切り出されたのだ。

「果南?今、なんて言ったの?」

『私、スクールアイドル辞めようと思う……………』

「どうして?なんでそんなことを言うの?まだ引きずっているの?東京で歌えなかった
ハ)と……………」

なんで？まだあのことを気にしていたの？

東京で歌えなかったことを引きずって、だからってスクールアイドルを辞める必要なんてないのに。

どうしてそんなことを平然と言えるの？

そんな事を考えていた私に、果南が話す。

『鞠莉。鞠莉には留学の話が来てるんでしょ？絶対に行くべきだと思う』

「どうして？冗談はやめてよ！それは何度も2人に言ったじゃない！あの話はもう断つたって……！」

『ダイヤも同じ意見なの』

「……っ!？」

それは私の留学の話だった。

その話は、ずっと前に断ったはずなのに、果南がまたその話をぶり返して話し出したの。

そしてまさか、ダイヤが果南とグルなんて……。

「ダイヤ？ 本当なの？」

『……………』

「……………っ！ダイヤも何か言つてよ！」

『……………』

私はダイヤに問い詰めたけれど、ダイヤはドアの物陰に隠れて、何も話してはくれなかった。

『ほらね？ダイヤも私と同じ意見。だからこれ以上スクールアイドルを続けても、意味が無い』

そして果南は、私を突き放すように告げた。

『終わりにしよう……………鞠莉』

「やだ……………私はまだ！果南！ダイヤ！」

私の叫びは2人に届くことなく、2人は私を背に、私1人残したまま部室を出て行ってしまった。

これが、2年前に起きた真実

「……………」

それを『夢』でまた見ていた私は、重い瞼を開け目を覚まし、身体に掛けていた毛布を取り払ってベッドから起き上がる。

部屋のカーテンを勢いよく開ければ、海の向こう側の水平線から太陽から顔を出して、もうすぐ夜が明ける時間であることが私には分かった。

「……………果南」

日が昇る時に徐に眩いた、彼女の名前。

もしあの時に、私が留学を意地でもしていなかったら、私たち3人の関係はどうなっていたかな？

多分、結果は今と変わらないかもね。

もしかしたら、私が留学しなかったことに果南が怒って、絶交だったかも……。それだったら、この今の方がずっとマシね。

「ハア。シャワーでも浴びよ……」

気がつくのと、私の背中はずっとりと汗をかいていた。だから私はその汗を洗い流そうとシャワー室へ向かった。

朝見た過去の出来事を、少しでも早く忘れたいがために。そしてまたあの日に戻れるようにと、決心を新たにするために……。

~~~~~※※※~~~~~

「えっ?! 夏祭りですか!?!」

「屋台も出るずら〜!」

私たちはとある一通の招待から、千歌ちゃんの家でミーティングを行っていた。

そうだったのは今日の朝で、千歌ちゃんから電話がきてどうしたんだろうって電話に出たら、すぐく慌てていた千歌ちゃんの声だった。

私は千歌ちゃんを落ち着かせて用件を聞いたら、千歌ちゃんちに届いた一通の手紙がとんでもない事だったと聞いて驚いた。だからみんなを千歌ちゃんの家を集め、朝練の練習前にそのことについて話し合っていたんだ。

「まさか、『沼津夏祭り』と『狩野川花火大会』の日にライブをやって欲しいってオファーが来るなんて思わなかったよ」

「ねっ! ねっ! 凄いでしょ!?!」

千歌ちゃんは相変わらず大はしやぎ。

でもそれは千歌ちゃんだから仕方ないんだ。夏の沼津だったら、1番のメインイベントだからね！

沼津に引越してきた梨子ちゃんには、その祭りがどんなものなのか、まだ分からないと思うけど。

そしたら本人が私に問いかけてきた。

「ねえ、沼津の夏祭りってどんな感じなの？」

「梨子ちゃんはまだ知らないよね？沼津の夏祭りはね、ここら辺じゃあ1番のイベントなんだ！」

「へえ〜！そうなんだ〜！」

私は出来るだけ簡単にお祭りの事を説明した。

そのあとで、梨子ちゃんに沼津のお祭りにどんなものがあるのか話をしようとお話を開いたら、ルビイちゃんたち1年生組が、私の代わりに梨子ちゃんへ夏祭りについて話をしてくれた。

「花火大会も凄いですよ！」

「すごく豪華で壮大で、一番の目玉は、ナイアガラっていう花火ずら！」

「それはまさしく、魔界へのゲート！」

「へえ〜！見てみたい！」

善子ちゃんの言う魔界へのゲートっていうのは、ちよつと違うような気がするけど、花火大会自体は凄く盛り上がるし、何より壮大なんだ。

思わず、感嘆の声が出ちゃうくらいだよ。

「それでどうするの？千歌ちゃん？」

「……………うん。決めないかね……………」

それで私は千歌ちゃんに参加するかどうするか話を投げかけると、千歌ちゃんはさっきまでの笑顔とは正反対で、明らかに違う反応を見せる。

いつもの千歌ちゃんなら即『やる！』って言っていたのに、なんだか何かに思い耽ったような声を上げて、悩むような表情を見せていた。

千歌ちゃんは変わった。良い意味で……………。

「曜ちゃん。遼くんもこれ知ってるの？」

「もちろん！私から話したんだ」

そして、彼にもこのことを話している。

遼くんも夏祭りのイベントでライブをしてほしいと手紙が来るなんて思っていないくて、遼くんもそれには凄く驚いていた。

でも、千歌ちゃんから聞いた話の内容をそのまま彼に伝えたら、彼は首を縦に振って納得し、みんなに助言をするように話をしてくれた。

それを私が、みんなに向かって話をする。

「もしたら、遼くんはこう言ってたよ。『祭りには出たら？そうすれば祭りに来る人たちに "A q o u r s" の名前を知ってもらえるから、ちよūdい機会なんじゃないか？』ってね！」

「それじゃあ、遼くんは『賛成』ってことね？」

「うん。そういうこと！」

まあ、簡単に言うとなうなる。遼くんは夏祭りでライブをすることには大賛成なんだ。

ただ、それでも私たちには問題がある。

「そんなイベントに、私たちが……」

「でも！ライブに出るとしたら、今からじゃあ練習時間もありませんよね？」

「うん。ルビィちゃんの言う通りだよ」

ルビィちゃんが話してくれた通り、沼津の夏祭りまでの日にちは、そこまであるわけじゃない。

歌詞作りに曲作り。それにダンスを考えて覚えて踊るには、あまり時間が足りないかもしれない。

「そうね。私思うに、今は練習を優先した方が良いと思うけど……」

「うくん、そうだね……」

その上で、梨子ちゃんはそんな提案をする。

夏祭りまで日もあまりないわけだから、今は練習を優先してやっていった方がいい。  
千歌ちゃんは、どうするんだろう？

「千歌ちゃんは どうする？」

「……………」

私は千歌ちゃんに尋ねたが、千歌ちゃんは四角くて細い木製の柱に身を隠して何も答えない。

ていうか千歌ちゃん。『頭隠して尻隠さず』の諺を超えちゃってて全身が隠しきれないよ……………」

千歌ちゃんの行動にちよっぴり困っていたとき、千歌ちゃんがそこから顔をひよこつと出して私たちを見ながら、私の問いかけに答えた。

「うん！私は出たいかな！今の私たちの全力を見てもらおう？それで駄目だったらまた頑張る！それを繰り返すしかないんじゃないかな？」

「千歌ちゃん……………」



やっと『出る』って答えてくれた。

満面たる笑みを浮かべながら私たちに発したその言葉は、私たち6人『A q o u r s』の、次の目標が決定したということと同時に告げる言葉だった。

「ヨーソロー！賛成であります！」

「ギランツ☆」

その言葉を聞いた私たちは笑って、私はいつものようにそう叫んでは、善子ちゃんはその言葉で右目の目元に右手を持ってきて、軽くピースするようにジェスチャーをして答えていた。

本当に、千歌ちゃんは変わったと思う。

私の隣に座ってる梨子ちゃんだって同じ。

「梨子ちゃん」

「んっ？どうしたの？」

「変わったね、千歌ちゃん……」

「……っ！うんっ！」

遼くんも含めて、あのときに3人で千歌ちゃんを慰めた結果だと思ってる。

『嬉しい』とか、『悔しい』とか。感じたことや思ったことを、素直に言えばいいって千歌ちゃんに言ったからこそ、今の千歌ちゃんがある。

千歌ちゃんが素直になつてくれて私は嬉しい。

さつきからこれしか言つてないけど……。

「ハア……」

そんな時、千歌ちゃんがまた背を向けて木の柱に身を隠す。今度は千歌ちゃんは体育座りをして、何か思い悩むような深いため息をついていた。

「どうしたの千歌ちゃん？ 悩みごと？」

「う、うん……」

私が深妙にそう尋ねると、千歌ちゃんはその問いに首を縦に振って頷く。

千歌ちゃんがどんな悩みを持っているのだろうと気になった私と梨子ちゃんは、2人

で彼女のもとへ歩み寄ると、千歌ちゃんはその悩みを自分の口から打ち明けてくれた。

「果南ちゃんのことなんだけど、どうしてスクールアイドルやめちゃったんだろうって

……」

「何よ、そんな話？生徒会長が言ってたじゃない。東京のイベントで歌えなかったからだって！」

「でも本当なら果南ちゃん、それだけで止めちゃうような性格じゃないと思う」

千歌ちゃんが悩んでいること。それは、私や千歌ちゃん、そして遼くんとは小さい頃からの幼馴染みで、1つ年上の果南ちゃんのことだった。

どうして果南ちゃんなのか？そう考えていた矢先に、善子ちゃんがダイヤさんが話していたことを話を持ち上げ、それで私を含め、みんなはすぐに理解することが出来た。

でも千歌ちゃんはその話に首を振り、本当の果南ちゃんはそんな人じゃないと告げる。

それには私も、千歌ちゃんの話したことに理解出来る。千歌ちゃんが言った通り、本当の果南ちゃんはそんな性格はしてないからだ。

「私が知ってる果南ちゃんなら、そんな事で諦める訳がないんだよ。私が怖くて海に飛び込めなかった時でも、果南ちゃん凄く応援してくれたんだよ」

そして千歌ちゃんはみんなの前でそう言い切る。

実際、私や遼くんよりは、千歌ちゃんの方が果南ちゃんとの付き合いは長い。だから千歌ちゃんは、そう言い切れるんだと思う。

すると千歌ちゃんは、今日の朝に淡島神社で果南ちゃんに会ったことを私たちに話してくれた。

「私ね、朝に果南ちゃんと会ったんだ」

「えっ? 本当!？」

「うん。それで果南ちゃんに聞いたの、『スクールアイドルやってたの?』って……」

「それで? 答えは?」

「『ちよつとだけね!』って言って、笑ってた」

「そう……」

果南ちゃんに、スクールアイドルをしていたの? と千歌ちゃんは聞いただけで、ス

クールアイドルをやめた理由を聞くことが出来なかったみたい。

私も、果南ちゃんのことを少し気になる。

スクールアイドルをやめてしまうほどの理由が、果南ちゃんにあるのになって、私は気になって仕方がなかった。

ダイヤさんから話を聞いた時は、正直果南ちゃんがスクールアイドルをしてたなんて嘘だと思った。

だけど、千歌ちゃんが果南ちゃんに本当のことを聞いた話を聞いて、果南ちゃんがスクールアイドルをしていたのは本当だったと知ることが出来た。

「もう少しだけ、スクールアイドルをやっていた頃のことを分かればいいんだけどな……」

「聞くまで全然知らなかったもんね」

「そうだねえ。何か手がかりがあれば……」

「……………」

それで果南ちゃんのことについて、千歌ちゃんと梨子ちゃんは手がかりはないかと呟いていた時に、私はその事を知っていきそうな人物が、私たちのすぐ近くにいるじゃない

かと気づく。

その人物に、私はすぐさま問いかけた。

「ねえ、ルビイちゃん」

「ピギツ！な、何ですか？」

「ダイヤさんからなにか聞いてない？小耳に挟んだとか、些細なことでもいいからさ」  
「ええ!?そ、それは……その……」

その人物はルビイちゃん。

ダイヤさんは果南ちゃんと鞠莉さんと一緒に3人でスクールアイドルをしていたから、ダイヤさんの一番そばにいたルビイちゃんなら、何か知っているんじゃないかって思ってたの。

その私の声を耳にしたみんなも、ルビイちゃんに視線を向けて千歌ちゃんと梨子ちゃんを尋ねる。

「ルビイちゃん、何か聞いてない？」

「ダイヤさんとは、ずっと一緒に家にいるのよね？絶対に何かあるはずよ！」

「う……うゆ……」

梨子ちゃん、そんな鬼気迫るみたいにルビィちゃんに聞いたたら、ルビィちゃん怖がっちゃうよ。

ほら、ルビィちゃんの身体が小刻みに……

「うう……うつ、ピギヤアアアアア！」

……つて！ルビィちゃん逃げちゃったよ！

「ちよ!?!逃がさないわよルビィ！」

「えっ……!?!」

そしたら善子ちゃんが悪戯っぽい笑顔を浮かべると、ルビィちゃんを捕まえるために追いかける。

ただ善子ちゃんはその捕獲の仕方が、私たちから見るととても意外なやり方だった。

「墮天使奥義！墮天流拘縛！」

「いやあく！善子ちゃん、痛いよお〜！」

「あんたが逃げるからでしょ！」

ただ簡単に捕まえるわけじゃなくて、善子ちゃんはそっちの知識を知っているのか、プロレスの技を使ってルビィちゃんの身体を拘束した。

確か技の名前は、『コブラツイスト』

善子ちゃんは背後からルビィちゃんの左足に自分の左足を絡めるようにフックさせ、ルビィちゃんの右腕の下を経由して自分の左腕を相手の首の後ろに巻きつけ、背筋を伸ばすように伸び上がっていた。

『コブラツイスト』は関節技みただから、それにやられているルビィちゃんはみんなに対して助けを願うように悲鳴を上げる。

そんな感じに、助けを求めて涙目を浮かべているルビィちゃんを助けたのは、善子ちゃんの頭に軽くチョップを当てた花丸ちゃんだった。

「善子ちゃん、やめるずらっ？」

「あっ……ハイ……」



花丸ちゃんのその言葉に恐怖した善子ちゃんは、ルビィちゃんから離れるように拘束を解く。

花丸ちゃんのおかげで、無事に善子ちゃんの拘束から逃れられたルビィちゃんは、私たちに對して、ダイヤさんたち3年生のことを話してくれた。

「ルビィが話として聞いたのは、東京でのライブがうまく行かなかつたつて話くらいなんです」

「本当に……?」

「はい。それからはお姉ちゃんは、スクールアイドルの話もしなくなっちゃったので。でもただ……」

「ただ……?」

「この前、鞠莉さんがルビィの家に訪ねて来た時、鞠莉さんにお姉ちゃんが言っていたんです」

『果南さんは逃げている訳じゃない』

「そう……お姉ちゃんは言っていました」

「“逃げている”わけじゃない……かあ……」

ダイヤさんが鞠莉さんに向かって口に発した、『逃げている』という言葉。

果南ちゃんはどういうことから逃げているのか？ 私にはそれがどういふことなのか全く以って分からなくて、同じ言葉を言った千歌ちゃんをも含めて、みんなも同じことを考えていた。

「どういう事なんだろうね？」

「さあ？ 私も全然分からないわ……」

頭を悩ませる千歌ちゃんたち。

手がかりが一切なくて、ダイヤさんたちのことで練習どころじゃなくなっている時、頭を抱えている千歌ちゃんがボソリと呟く。

「誰か、ダイヤさんたちのことを “知っている人” がいればいいのになあ……」

「はい、そうですね」

ダイヤさんたちを知っている人か。

『ダイヤさん』『果南ちゃん』『鞠莉さん』

千歌ちゃんの言葉をきっかけに、私はこの3人に深く関わりがありそうな人物を考える。

一体誰がいるんだろう？当然鞠莉さんに関しては分からないし、ダイヤさんもあんまり分からない。

果南ちゃんなら私と千歌ちゃん。そして……

そして……

そして……？

……あつ。

「ああああああああ!!?？」

「わあ!?!よ、曜ちゃん!?!どうしたの!?!」

「何よ！突然大声なんか上げちゃって！」

いた。たった一人だけいる！

鞠莉さんとかどうなのかはつきりよく分からないけれど、果南ちゃんやダイヤさんとは知り合い深く、実際私たちは、以前ダイヤさんと一緒にいたのを目撃している。

だから多分、間違いないと思う。

「いる！果南ちゃんたちのことを知っていそうな人、一人だけいるよ！」

「本当!?誰なのその人!?!」

「勿体ぶらずに答えなさいよ！」

千歌ちゃんや善子ちゃんは、私の言葉にももの凄く興味津々に尋ねてくる。

梨子ちゃんやルビィちゃん、そして花丸ちゃんの3人も興味を示していて、彼女たち3人も私をじっと見つめていた。

隠す必要もないよね。

だって私たちの知ってる人だもん。

「えへへっ！その人はね……い！」

それで私はみんなにその人物を伝えた。

その人である理由を交えながら話したとき、私の話には耳を傾けて聞いていたみんなの口から、驚きの声が大に上がったのであった。

「「「ええ〜!?!」」」」

## #49 衝突

「えっ？果南たちについて？」

「そう！遼くん何か知らないかな？」

「突然そう言われてもな……」

部活終わりで疲れた身体をベッドで休ませていたときに、部屋にやって来た曜が、果南たちについて俺に尋ねてきた。

というのも、今日の千歌たちは朝練でも放課後の部活でも、果南やダイヤや鞠莉姉の3人のことを、ずっと考えていたらしい。

でも特に、果南についての話ばかりだ。

「少しだけでもいいから、お願い！」

「両手を合わせてお願いされてもなあ……」

「おねが〜い!」

正直、俺でさえ果南がスクールアイドルをやめた理由を知らない。なのに曜は、千歌たちは、果南たちの真実を突き止めようとしている。

ダイヤがあいつらに自分たちの過去を全て話したが、このきっかけなのは間違いないけど、今の果南が全てを話してくれるはずがない。

聞きに行けば、追いつかれるのが目に見える。

「悪いが曜、俺はお前に話せることはないよ」

「そんなに話したくないことなの?」

「違う、そういう事じゃない。俺もお前たちと同じように、果南がどうしてスクールアイドルをやめたのかは知らないんだよ」

「えっ? 本当なの?」

「俺が嘘ついてるように見えるか?」

やれやれ。本当のことを言ってるのに嘘をついてるように見えるか?

まあ実際、俺は嘘をついているんだけどね。

「……見えない。じゃあ遼くんも果南ちゃんたちについては、私たちと同じくらいの事しか分からないってことだね？」

「そういう事だ。悪いけど、曜たちが求めてることに俺は答えられないや」  
「そっか……」

俺の本心で言えば、曜たちには果南たちの真実を話したいと思ってはいた。

でもそれは、俺の中では何となくダメなような気がした。ダイヤは千歌たちに話したけれど、俺からは何も言っではいけないような気がしたのだ。

「遼くんなら知ってると思ってたのに……」

「悪いいな。俺の情報不足で……」

「ううん。遼くんは悪くないよ。私たちの勝手で遼くんに聞いてみようってなっただけなんだから」

話の流れがそっちに傾いている。



俺が考えているのは、俺から話さなくても、彼女たちが求めてることに気づかせてやればいいのかも知れない。けれどそれが、簡単に上手く行くことも保証は出来ない。

「そんなに果南が気になるのか？」

「うん。特に千歌ちゃんがね」

「またあいつか。まあ、しょうがない」

「ここまで来ると、もう仕方ないのかな？小さい頃からずっと遊んでいた仲だし、それでこそ、まさに幼馴染みたる所以ってやつなんだろうな……」

「よし。じゃあ俺も、千歌たちが求めてる果南たちの過去に付き合っただけでやるか」

「えっ？本当!？」

「俺も果南とは幼馴染みだ。あいつを気にしない事なんてないからな」

俺も実際、あいつには話したい事が山程ある。

ダイヤに言い放ったあの言葉のせいで、俺は果南を許そうなんて思わなくなっただけからな。

何もかも全部、あいつのせいだ。

「じゃあ手伝つてくれるんだね!？」

「ああ。もちのろんだよ」

「わあい！ありがとう遼くん！」

曜は俺が手伝つてくれることに嬉しくなつて、俺に盛大に抱きつく。

なんだか最近、曜がやけに俺に抱きつく事が多くなつてきたような気がする。けど、それが千歌たちからの感謝だと考えれば、これくらいはいいかと、俺は曜とともに笑みを浮かべた。

~~~~~  
※※※
~~~~~

後日

遼くんも果南ちゃんの事で手伝わてくれることに歓喜した私たちは、果南ちゃんの素性を確かめるためにあることを決行した。

それは果南ちゃんへの『尾行』である。

とても千歌ちゃんらしい思いつきだった。

「んんっ！はあくー！」

「いたよ。果南ちゃん」

「まだマル眠いずら……」

「しっかりしなさい、ズラ丸」

果南ちゃんがすぐ目の前にいる最中で、私たちは淡島マリナーパークの看板の陰に隠れて、じつと果南ちゃんを観察していた。

そんな時、彼は警戒しながら話す。

「おい千歌。本当にこれでいいのかよ？」

「そうよ。こんなに大人数でいったらいつ気づかれてもおかしくないわよ？」

「大丈夫大丈夫！何とかなる！」

「おいおい。大丈夫なのかこれ……」

梨子ちゃんも、遼くんの話と重ねて千歌ちゃんにそう言うけれど、果南ちゃんを尾行することに夢中な千歌ちゃんは、あんまりそんなことを気にしてはいなかった。

その時、果南ちゃんに動きがあった。

準備運動を終えて、ランニングを始めた。

タツタツタツタツ！

「あつ、果南ちゃん走り始めたよ！」

「バレないように追いかけてよう！」

「」「」「うん！」「」

「……バレないといいな……」

私たちは果南ちゃんにバレることがないように、物陰に隠れながら尾行を始めた。

さり気なく心配そうにそう呟いた彼も、私たちの最後尾から遼くんは果南ちゃんを追いかけた。

ただ、私たちが果南ちゃんを追いかけるのは想像以上に過酷なものだった。

マリナーパークバス停から出発した果南ちゃんは、三津三叉路を通り、三の浦観光案内所がある長浜のバス停を通るといふ、私たちが走る距離をも遥かに超える距離を、果南ちゃんは走っていた。

「しっかし、果南は早いなあ……」

「一体……どこまで走るつもり？」

「もうかなり走ってるよね？何キロくらい？」

「もうかれこれ“2 km”だ。余裕だろ？」

「そ、そんなに……」

遼くんの感じる2 kmと、私たち6人が感じる2 kmは全くもって違った。

遼くんは私たちと同じように2kmを走ったとしても、全く疲れを感じていなかった。私たちが疲れているのを見て、ぶっきらぼうに呆れていた。

「も、もうだめずら……」

「花丸ちゃ〜ん！しっかりして〜！」

「クツクツクツ。こんなことで疲れるなど、ヨハネにとっては全く問題など……」

「足ガクガク震えてるぞ、善子」

「だからヨハネ！」

足が小刻みに震えている善子ちゃんに対しても、涼しい顔をして指摘する遼くん。彼がこんな風なのは、朝に果南ちゃんと一緒にランニングをしているからだと思し、遼くんは学校の部活でサッカーもしている。

彼の努力してきたことが、私たちの目の前で体現されているかのように、私は感じる事が出来た。

それからまたしばらく果南ちゃんを尾行し続け、私たち7人が辿り着いた先は『弁天島』だった。

「ハア……ハア……」

「もう、足が動かない……」

「みつともねえなあ〜お前ら」

「遼くんは疲れてないの？」

「3 kmくらい、俺は全然疲れないよ」

マリンパークのバス停から弁天島まで約3 Km。

それなのに彼は、私たちに対して全く疲れた様子を見せなかった。

もしかしたら私も、今の遼くんみたいに頑張れば走れるようになるのかな？

気になる。ものすごく。

「ねえ遼くん」

「んっ？ 曜どうした？」

「遼くんって、毎朝何キロ走ってるの？」

「わ、私も気になります！」

「聞かせて遼くん！」

私以外のみんな、特にルビィちゃんや千歌ちゃんが遼くんに差し迫って尋ねていた。2人にキラキラした目をされて、その質問に答えようか悩む遼くんは頭を掻いて視線を逸らしていたけれど、彼はやむなしに答えた。

「……しばらく前までは5Kmくらい走ってたけど、今はだいたい10Kmは走ってるな」

「じゅ、10kmですって!?!」

「そんなに走って大丈夫なの!?!」

「ああ。特に問題はないよ」

その答えに私たちは、とても衝撃を受けた。

でも話によれば、サッカー選手は90分の中で行う試合の中で、1試合大体10kmくらい走るらしい。

だから遼くんはもつと練習に励もうと、今までは5kmを走っていたのを、倍の10kmにしたみたい。彼の中には、全国の舞台で最初の11人に入ることを目標にしているようだった。

それと同時に、彼の口から発せられる言葉の数々には、何かしらの背景がありそうに



思えた。

私には分からないけど、そんな感じがした。

「そんな事より、先に果南を尾行するのが先だろ？早く追いかけないと見失っちゃうぞ」  
「そうだった！みんな、急ごう！」

遼くんが一通りに話を終えたところで、彼自身が本来の目的を指摘すると、千歌ちゃんはその言葉に『ハッ！』と我に帰って、果南ちゃんがそこにいるであろう弁天島へとみんなで足を運んだ。

「ハア……ハア……」

入り口で少しばかり休んだものの、弁天島へ続く階段は淡島神社前の階段並みに段数があつて、頂上に着く頃にはまたみんなは疲れ切っていた。

それで千歌ちゃんが弁天島の神社に視線を向けると、目の前に見える光景に声を上げた。

「あつ……」

あまりにも衝撃的だったのか、千歌ちゃんの声はあまりにも素っ気なく、何を見てそんな声を上げたのか私たちは全く分からなかった。

だからみんな木陰に隠れ、千歌ちゃんが見ている方向へ目を向けると、そこには驚くべき行動をしている果南ちゃんの姿があった。

「綺麗……」

千歌ちゃんは思わず感嘆の言葉を漏らす。

果南ちゃんは、神社の前で軽やかに踊っていた。

「踊ってるな。あいつ……」

「うん。確かにすごく綺麗……」

爽やかな汗を焔びやかに撒き散らして、私たちが隠れて見ていることを知らない果南ちゃんは、笑顔でステップを踏んだり、ターンをしたり、ダンスというものを知ってい

るかのような動きだった。

私を含め、みんなは目を奪われていた。

ただ彼は、果南ちゃんを冷酷な目で見ていた。

「……………」

「……………遼くん？」

「んっ？どうした？」

「うっ、ううん！何でもない！」

尋ねられなかった。

軽蔑しているというか、果南ちゃんに対して憤りを抱いた目をしていた遼くんに対して、私は尋ねるのが怖かった。

そんな時だった。

パチパチパチパチ！

「……………っ!?」

神社の方から、誰かが果南ちゃんに対して拍手をする音が聞こえてくる。

ふと果南ちゃんの後ろにある神社に目をやると、そこには浦の星の理事長、鞠莉さんがいた。

どうやら鞠莉さんが、果南ちゃんに向けて拍手をしたんだろうとその時の私はすぐに理解できた。

私たちは鞠莉さんが現れたことに驚きながらも、果南ちゃんと鞠莉さんのやり取りに耳を傾けた。

「復学届け、提出したのね」

「まあね。お父さん、帰ってきたから」

果南ちゃん、学校復学するんだ。

「やっと逃げるのを諦めた？」

「勘違いしないで！学校を休んだのは、お父さんの怪我が原因。それに復学してもスクールアイドルはやらない！」

「私の知っている果南は、失敗したとしても、笑顔で次に向かって歩き出していたわ。成功するまで、諦めなかったわ！」

果南ちゃんと鞠莉さん。2人のやり取りを聞いていると、やっぱり果南ちゃんには、何かしら原因はありそう。

もしかしたら、この話を聞いていれば千歌ちゃんが気になっていたことが分かるかもしれない。

千歌ちゃんも同じくして、みんなも同じ事を考えながら2人の様子を見守っていたとき、果南ちゃんが鞠莉さんに話を繰り出す。

その果南ちゃんの言葉に、鞠莉さんはもとより、私たちは驚きを隠せなかった。

「卒業まであと1年もないんだよ……？」

「それだけあれば十分！それに今は後輩もいる」

「だったら千歌たちに任せればいい」

「果南……」

「鞠莉、どうして戻ってきたの？私は、戻ってきてほしくなかった！」

「……っ！」

まるで果南ちゃんのその言葉は、鞠莉さんを強く突き放すかのような言葉で、言葉に受けた鞠莉さんは、メンタル的に深いダメージを受ける。

それでも鞠莉さんは、果南ちゃんに対抗しようとするけれど、果南ちゃんが一方的に鞠莉さんに言い放っていた。

私たちでさえ、見ているのが辛いくらいに……。

「果南！フツ、相変わらず果南は頑固者……」

「もうやめてっ！」

「……っ！果南……」

「もうあなたの顔、見たくないの！」

「……………」

果南ちゃんがそんなことを言うなんて、この時の私たちは思いもしなかった。

鞠莉さんに対して嫌悪を撒き散らした果南ちゃんは、私や千歌ちゃん、それから遼くんが知っているような果南ちゃんではないように感じた。

あまり、こういうことを信じたくはないけれど、目の前で起こっていたのは現実だっ

た。

『酷い』としか、言いようがなかった。

「じゃあね……鞠莉」

「やばっ！こつちに来るわよ！」

「一旦逃げよう！早く！」

すると果南ちゃんは、鞠莉さんをそのままにしてこつちに歩いてくる。

バレてはないけど、果南ちゃんに今の話を聞いていたことがバレたら大変なことになる。1時間以上も果南ちゃんから説教をもらうかもしれない。

だから私たちは一旦この場から離れ、果南ちゃんに見つからないように階段を駆け下りた。

千歌ちゃん表情を見ると、今の2人のやり取りよりも果南ちゃんのことを気にしていた。表情を強張らせて、ずっと何かを考えていた。

「果南さん、酷い……」

「何だか理事長が可哀想ずら……」

勢いで弁天島の入り口まで下りてきた私たちは、果南ちゃんと鞠莉さん、2人の話についてどんよりとした雰囲気話し合っていた。

尾行を通じて、分かることもあった。

「なんか、やっぱり何かありそうだね」

「うん？ そうとしか思えないわ」

色々と気になる果南ちゃんの言動。

果南ちゃんの本当のことを知ったら、きっと千歌ちゃんは行動に移すと思う。

私と一緒に、〃幼馴染み〃だから。

それに、遼くんだってきつと……

「……つてあれ!?! 遼くんは!?!」

「本当だ! 遼さんがいない!?!」



私は遼くんがいる背後に視線を配ると、そこには彼の姿がどこにも見当たらなかった。

私はそのことに驚いて声を上げれば、必然とみんなも彼の姿がないことに驚きの声を上げ、特に千歌ちゃんは私以上に驚いていた。

「ま、まさか……!?!」

遼くんがいないことに対して、そんな声を上げる梨子ちゃん。

もしかしたら遼くんは、果南ちゃんに対して何かしらの行動を起こしに行ったのかもしれない。

あまり悪い意味で考えたくはないけど、遼くんが果南ちゃんを見つめる目つきがとても冷酷だった、悪い目つきをしていた。それがこの場にはない意味を表しているように、私は思えた。

それで梨子ちゃんがみんなに話す。

「早く遼くんを連れ戻さないと!」

「そうですね! 早く連れ戻さないと果南さんに見つかって、尾行していたことがバレ

ちやいますし！」

遼くんを連れ戻さないと、果南ちゃんに尾行していたことがバレてしまうとね。

でも、それについて私は違う意見を述べた。

悪い意味じゃなく、いい意味で。

「ダメだよ。みんなでもたさっきの場所に戻ったら、逆に果南ちゃんにバレちゃうと思う」

「そ、それはそうだけど……」

わざわざ果南ちゃんにバレてしまう行動をしてはいけないのは、私も十分に理解している。でも彼のことだから私は、遼くんが何とかしてくれるんじゃないかって期待しているの。

抽象的で変な理由かもしれない。

でも私は、遼くんを信じてるんだ。

「遼くんを信じてみよう？」

「そうだね!! 曜ちゃん!」

「千歌ちゃん……」

「遼くんも分かっているはずだよ。だから、遼くんに任せてみよう?」

「……そうね」

梨子ちゃんが遼くんを心配しているのは私も分かっている。でもだからこそ、遼くんも私たちのことを気にしていると思うんだ。

とにかく信じる。遼くんをね!

この後に私たちは、ここにいたらまた果南ちゃんにバレちゃうんじゃないかって話になって、一先ず私たちは弁天島を離れることにした。

彼を置いていく形にはなっちゃうけど、彼の考えもあると思うからきつと大丈夫……だよね?

~~~~~※※※~~~~~

これでいいんだ。これで……。

鞠莉に『顔を見たくない！』と告げたあと、私は鞠莉を背にして弁天島をあとにする。私がここで鞠莉がいる方向に振り返ったら、そこにいる鞠莉の表情を私はまともに見れないと思う。

でも、これは全部鞠莉のため。

こうまでもしないと、鞠莉はずっと今後私を追いかけてくると思う。大きく分厚い一枚の壁を隔てて、鞠莉が近づいてこないようにしないと……。

そして海外から戻って来ては、今更またスクールアイドルをしようなんて……。

そんなの……絶対に……

「おい、果南」

「……………」

弁天島から降りる階段を下っていた時、馴染みのある声が私の背後から聞こえてくる。

けれどもその馴染みある声はとても低く、とても威圧的な声だった。

「随分な言いようだな」

「遼……」

背後から現れたのは、幼馴染みの遼。

他の木よりも一回りくらい大きな木の陰から姿を現した彼は、じつと私を睨んでいる。

多分きつと彼は、さつきまでの鞠莉とのやり取りを聞いていたに間違いなかった。

そうじゃなかったら遼はこんなところで呼び止めたりしないし、こんなにも睨んではこない。

そう考えていたら、彼は私に言い放つ。

「どうしてあんな事を言う必要がある？」

その言い方は、まるで私たちの事情をもうすでに全部知っているかのような発言で、またダイヤから話を聞いたのだろう。

遼には全く関係のないことなのに……。

「……遼には、関係ないでしょ？」

「いいや。幼馴染みとして大アリだ」

そういつて私にそう告げると、彼は階段を下りてきて私にゆっくり近づいてくる。

幼馴染み。確かに私と遼との関係は小さい頃からの仲で昔からよく遊んでいたし、幼馴染みじゃないと言ったら嘘になる。

でも、それとこれとは関係ない。

これは、私と鞠莉だけの問題。2年も経ってからこの問題に突っ込んできたところで、何かが変わるわけじゃない。

私は、鞠莉のためにしているの。

「遼には関係ない！幼馴染みだからって、こんな事に余計な首を突っ込んでこないで！」

私の気持ちを知らない彼に、私は言い放つ。

鞠莉のために自分から憎まれ役をしてまでの行動をしているのに、彼は私の邪魔をしてくる。

私がしている言動の意味が、全て鞠莉の為であるということを知っていながら。

「もうダイヤから話を聞いてしまった以上、お前ら2人のことを気にせずにはいられないんでね。もう加減さ、鞠莉姉に素直に伝えたら？」

「……何をさ？」

彼の問いかけに私は首を傾げる。

もし、ダイヤが遼に全部話さなかったら、こんな状況なんてなかったはずなのに……。そんな時に遼は、私に怒号を撒き散らした。

「とぼけてんじゃねえよ！何なんだよあの言い方！あれで自分は良いとも思ってるのかよ！」

「……………」
「おい！なんとか言えよ！」

遼はそう言つて、私は彼に胸ぐらを掴まれる。

こんな風に怒られる理由は私でも十分に分かっているのに、私は彼を睨み返して
いた。

そして私は彼に叫んでいた。

「……………」

「ああ？聞こえねえなあ？」

「うるさいって言つてるの!!!」

彼がさつき言つた怒号に負けなくらいに大きな声を出した私は、自分の胸ぐらを掴
んでいた遼の手を思い切り振り払う。

彼に対して怒りが胸の奥底から湧いてきていた私は、怒り任せに彼に向かって言い
放った。

「私の、本当の気持ちも知らないくせに！」

「お、おい！まだ話は……！」

本当の事実を知ったとしても、私の気持ちなんて知れるはずがない。だから私はそう言つて、彼から逃げるようにそのまま階段を駆け下りた。

今の私の顔、一体どうなってるんだろう？

きつと酷い顔をしていると思う。

今の状況から逃げたいがためにあんな事言つて、また私は酷いことしてしまった。

ダイヤにも私は酷いことを言つて、それを聞いた遼が私をあんな目で見ていた。そうなれば、彼には一先ず内緒にして、あとでダイヤにきつちり謝ろうと思った。

ちゃんとした、謝罪の意味を込めてね。

#50 蟠りと決心

遼くんは結局戻ってこなかった。

あれから私たちは遼くんが戻ってくるのを待っていたんだけど、戻ってくる気配がなかったから、彼を置いていつてしまった。

それが悪い事だとは私たちも分かっている。でも彼は戻っても来なかったし、入口で待つてたら果南ちゃんがやって来て超慌てたしで、とにかく止むを得ずだった。

「遼くん、大丈夫かなあ……」

「きつと大丈夫だよ。遼くんだもん！」

「そうね。遼くんなら大丈夫よ」

「うくん……」

そして私たちは各自に戻り、私に関しては遼くんに再会することもないまま学校に来てしまった。

ギリギリまで家で待って、遼くんからなにか聞き出せば良かったと後悔しながら、教室のベランダで項垂れる千歌ちゃんを元気付けていた。

梨子ちゃんも一緒にね。

すると千歌ちゃんが仕切りに話し出す。

「果南ちゃん、どうして鞠莉さんに対してあんな事言っちゃったんだろう……」

「私もそれに関してはずごく気になってた。私から見ても果南さんは、あんなことを言う人だとは思えないもの」

朝の弁天島で繰り広げられていたやり取り。

果南ちゃんが鞠莉さんに向かってあんな言い方をしていたのは初めて見た。

現場を目撃してた私たち6人でさえ、果南ちゃんに対してもの凄いシヨックを受けていた。

そして多分、遼くんもそう感じてるかも。

「確かに果南ちゃんは、私たちの知らない、本当の自分みたいなところを鞠莉さんに見せていた。でもそれは、何か理由があるのかもしれないと思う」

「曜ちゃん、何か知ってるの?」

「うん。何となく、そう思っただけ……」

千歌ちゃんの問いかけには『何となく』と、私は苦笑いをして答える。

正直なところ、果南ちゃんが鞠莉さんに向かって言った言葉の裏には、何かしらの真実がありそうな気がするの。

絶対にそうとは言い切れなくて、確証も全くないけれど、私はそんな感じがするの。

もしかしたら、遼くんはそれにもう気づいてたのかな? そうじゃなかったら、遼くんは果南ちゃんにあんな『目』で見えていないと思うし……。

「そっかあ。はあ……」

「どうしてだろうね?」

「うん。私も全然分からないや」

私たち3人は思い悩む。

私や千歌ちゃんにとっては、いつも一緒に遊んでいた友達だ。梨子ちゃんに関してはまだ関係が深いとは言えないけど、果南ちゃんと会えば、楽しく話をしていると聞いた。ただそんな果南ちゃんが、鞠莉さんに向かって、『顔も見たくない!』って言葉を、簡単に口にするような人じゃない。

この2人を一番よく知っているのは、ダイヤさんのただ1人。

一か八かで、2人のことを一番知っているダイヤさんから話を聞いてみたいけど、ダイヤさんがそれを話してくれるかどうかさえ未知数。

何も手がかりもなく、今の果南ちゃんたちの関係に足を踏み入れる手立ても何も無い今の私たちは、一体どうすればいいのか思い悩んでいた。

そんな時に、ある転機が訪れた。

「んっ? 何あれ?」

「本当だ。なんだろう?」

私たちの真上、つまり上階のベランダから、1着の真つ白な服がヒラリヒラリと落ちてくる。

まるでそれはセーラー服のようで、純白な生地に紫のリボン、更にはスカートの部分にまで紫の生地を取り入れられていて、シンプルながらも、とても綺麗な出来栄えの服だった。

そう。それは、それはまるで……！

「くんくん♪制服だあ〜♪」

「……っ!? 曜ちや〜んっ!!」

「ダメエ〜!!」

私はこの時、目の前に落ちてきた制服に夢中で、自分がいる場所を全く理解していません。私には、

間一髪で千歌ちゃんと梨子ちゃんに助けられたものの、もし助からなかったら私は、2階のベランダから真つ逆さまに地面に落ちていただろう。

危うく本当に死んじゃうところだった。

千歌ちゃんと梨子ちゃんに感謝しないとね。

「ご、ごめん！千歌ちゃん。梨子ちゃん」

「曜ちゃん！突然飛び出したら危ないじゃない！」

「私もびつくりしちゃった。曜ちゃん大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だよ千歌ちゃん」

とりあえず私は、ギリギリでその真つ白な制服を両手で掴むことは出来た。千歌ちゃんも梨子ちゃんもそうで、ギリギリで私を掴むことが出来た。私の腰のところを、2人で抱きかかえてる感じ。

でもこの制服、よく見ると何かスクールアイドルで着そうな制服だ。

「でもこれって、スクールアイドルの……？」

「本当だ。私もそんな感じに見える」

「でも、どうして上から……？」

そして梨子ちゃんの言う通り、どうして“3年生”のいるベランダからこれが落ちてくるの……えっ？

あつ、これってもしかして!?

「私、分かったかもしれない」

「えっ？何が？」

「千歌ちゃん！梨子ちゃん！一緒に3階に行こ！」

「えっ!?ちよ、ちよつと〜！」

私は制服を見て閃き、すぐさま千歌ちゃんと梨子ちゃんを連れて3階へと駆け上がる。

私の突然な行動に2人は驚きながらも、私の後ろを着いてくる。それで私たちがいいる2階から3年生の教室がある3階へと向かうと、教室のまへの廊下にはたくさんの生徒がそこに集まっていた。

1年生のルビイちゃんできえ、3年生の教室の前で中の様子を覗き込んでいた。

「ルビイちゃん！」

「あつ！曜さん！」

ルビイちゃんがそこにいることに私たちは驚いたけど、今はそれよりも3年生の方だ。

「なんで3年生の教室にいるの？」

「実は、あれを見てください……」

「えっ……？ええ!!」

私はルビイちゃんに対してそう尋ねると、ルビイちゃんは3年生の教室に指を指さす。ルビイちゃんが指した方向に導かれるようにして私たちは視線を向けると、教室内はバトルが繰り広げられていた。

「離して！離してって言うてるの!!」

「いいって言うまで離さない〜!」

黒板の、さらには教卓の目の前で、果南ちゃんと鞠莉さんが激しい言い争いをしていった。

鞠莉さんが果南ちゃんの腰の辺りにしがみついては、果南ちゃんが鞠莉さんを引き剥がそうとする。それはまるで、朝の弁天島で繰り広げていた、あのやり取りの続きを見ているかのようだった。

「強情も大概にしなさい果南！ たった一度失敗したくらいで、いつまでもネガティブに……!!」

「うるさい！ いつまでもはどっち？ もう2年前の話だよ！ 大体今更スクールアイドルをしようなんて！ 私たち、もう三年生なんだよ!？」

「2人ともおやめなさい！ みんな見てますわよ！」

ダイヤさんは2人のそばにいて、喧嘩をする2人を止めさせようと声をかけているけど、一向に2人は止める気配はない。

というか寧ろ、激しくなる一方。

「ダイヤもそう思うでしょ?」

「おやめなさい鞠莉さん!! いくら粘ったとしても、果南さんは再びスクールアイドルを始めることはありませんわ!」

「どうして!?! あのとときの失敗をそんなに引きずること? 千歌っちたちだって、再スタートを切ろうとしてるのに!」

「私は、千歌たちとは違うの!」

理事長である鞠莉さんに、生徒会長であるダイヤさん。学校の代表と生徒の代表が一堂に会しているこの場面に誰も割って入る姿もなく、まるで修羅場のような状況をどうにかして収めようと行動をする人もいなかった。

当然、私や梨子ちゃん。そしてルビイちゃんたちもそう出来る勇気すら持っているわけじゃない。

「……………」

ただ、1人を除いて……。

その子はズカズカと3年生の教室へと入っていくと、団子のように集団で集まっていた3年生の間を縫うように割って入っていったのは、果南ちゃんたちの目の前に姿を現した。

その姿を見た果南ちゃんたちはさつきまでの喧嘩が嘘のようになくなって、それと同じにその子は、果南ちゃんたちに向かって叫んだ。

「いい加減にい〜！しろ〜!!!」

「……っ！千歌?!」

果南ちゃんの前に姿を現したのは千歌ちゃん。

千歌ちゃんの叫び声は、学校に張り巡らされた窓ガラスをガタガタ揺れるくらいに響かせていた。

そして無音という静けさに落ち着いたところで、千歌ちゃんの口は止まることなく果南ちゃんたちに向かって言葉を紡ぐ。

3年生に囲まれているというのに……。

「もうっ！なんかよく分からない話を、いつまでもずっとずつとずつと!!隠してないで、ちゃんと話しなさい!」

「ち、千歌たちには関係ない!」

「あるよ!!!」

果南ちゃんの突き放そうとする言葉。それに対しても千歌ちゃんは、それに対抗して言い放つ。

そして千歌ちゃんは半ば強引に、目の前の3人に向かって強く言いつけるように言っ

た。

「ダイヤさんも！鞠莉さんも！3人揃って、放課後に部室に来てください！」

「いや、ですが……」

「いいですね!？」

「……はい……」

千歌ちゃんのものすごい剣幕に気圧された3年生の3人は、ただただ『はい』と、否定の言葉を口に出ることが出来なかった。

でも今の千歌ちゃんは何んというか、私でさえあまり見てこなかった千歌ちゃんの姿だった。本当にあの時から、千歌ちゃんは自分の思ったことを話すようになったと思う。

それを見ていたルビィちゃんたちも、千歌ちゃんの姿に目を見開くほどに驚いていた。

3年生のダイヤさんたちも、例外じゃなく。

「ち、千歌さんすごいずら……」

「3年生に向かつて……」
「……あつ……」

~~~~~※※※~~~~~

まさか千歌に怒られるなんて思わなかった。

いきなり3年生の教室に入り込んできて、目一杯に私や鞠莉、それにダイヤに向かつてあんなことを言ってくるなんてね。

いつも私の後ろにべったり着いてきてた昔の千歌を比べたら、全然考えられなかった

よ。

「果南ちゃん、どうしてスクールアイドル辞めちゃったの？ やってたんだよね？」

「だから！ それは東京で歌えなくて！」

そして私は只今、現に千歌たちが使っている部室に呼び出されて事情聴取を受けている。

私の隣にはダイヤが座って、テーブル越しに千歌たちが並んで立っている。それから鞠莉に関しては千歌の後ろに立っていた。

「それはダイヤさんから話は聞いたよ」

「……………ダイヤ」

「私の顔を見ないでいただけます？」

話は少しだけずれるけど、昼休みに私はダイヤを屋上に呼び出し、頭を深く下げた謝った。

あの時にダイヤに向かって凄く酷い言葉を言ってしまった事を反省して、私はダイヤ

に何度も何度も謝った。ダイヤにそれを許してもらえたのは、それからすぐのことだった。

ダイヤとはなんとか仲直りをして、そしてダイヤは私の肩をまた持つてくれると言ってくれた。本当にダイヤにはお世話になっている。

でも逆に、ダイヤに重荷を待たせ過ぎてしまっていることを気にしてる私がいるんだけどね……。

こうして話は戻るけど、ダイヤ、千歌たちにも話をしていたなんて私聞いてないよ……。

「どうしてなの果南ちゃん？果南ちゃんは、それで諦めるような果南ちゃんじゃないですよ？」

「そうそう！ちかつちの言う通りよ！だからマリーは何度も言ってるのに……！」

千歌の両肩に手を乗せて顔を出し、千歌の意見に賛同しながら鞠莉は私に向かってそんな風に言う。

私の性格は、当然みんなにバレている事だつて私自身でも分かっている。でもそうし



なければ、鞠莉の将来がダメになる。

そのときの私は、自分の性格とかなんてどうでも良いと思っていた。

「何か事情があるんだよね？」

「……………」

「ねえ、果南ちゃ」

「そんなもの何にもないよ！」

「…………っ！か、果南ちゃん」

「さっき言った通りだよ！私が、東京のイベントで歌えなかった。ただそれだけだよ！」

私は千歌に怒鳴るようにして話した。

あまりに千歌たちには怒る場面がなかったから、私が怒っているという感情を目の当たりにしている6人は背筋が凍ったように体は固まっていた。

でも、それも一瞬の束の間。

誰も体を動かす言動すら見受けられなかったのに対して、千歌の隣で立っていた梨子  
が、その場から一步前に出てくる。

すると梨子から、思いもよらない事を言われた。

「でも果南さん、1つ聞いて良いですか？」

「……なにさ？」

「今朝、果南さんは弁天島で踊ってましたよね？」

「……………」

見てたんだ。あそこで、あの場面を。

あはは、参ったな。あんなの見られた遼や鞠莉の2人以外、誰にも見せたくなかったし、見られたくなかったのに……。

凄く恥ずかしくて、死んでしまいたい。

「Oh〜♪果南つてば赤くなってる〜♪」

「うるさい！鞠莉は黙ってて！」

「やっぱり未練あるんでしょ〜？」

「……………」

だがそんな恥ずかしい感情は、鞠莉のそんな一言によって一瞬のうちに消えてなくな

る。

未練なんてものはないし、それ以前に私は自分からそう決めたわけなのだから、さつき言った鞠莉の言葉に私は怒りをあらわにした。

「……………さい」

「ええ？ 聞こえな…………」

「うるさいって言ってるの!! 未練なんかないっ! とにかく私は、もう嫌になったの!!!」

「果南…………」

「とにかく、私は絶対に、二度とスクールアイドルなんてやらないから!!!」

「あっ! 果南ちゃん待って!」

鞠莉に対して言いたい事を全部言った私は、その後にパイプ椅子から立ち上がった部屋を後にする。

背後から千歌の呼び止める声が聞こえるけど、私は部屋をもう見向きもしないまま、お父さんが待つ家に帰ることにした。

お父さんがやつと家に帰って来たのが私はすごく嬉しかったし、何よりこれでまた学校に行けるのが嬉しいって私は感じていた。

けれども今日はまた鞠莉が邪魔をして来て、気分もズンとすっかりなくなっちゃった。

千歌たちに怒鳴るのも、本当は嫌だったのに。

はあ……帰ったら寝よ。

教室に置いて来た自分のカバンを取りに来たあとで、今後は鞠莉と関わらないよう、彼女のそばから離れようと心から決心を決めた私だった。

くくくくくく※※※※くくくくくく

『私は絶対に、二度とスクールアイドルなんてやらないから!!!』

果南さんは皆さんに言い残した後で、部室を出てどこかへ去って行ってしまいました。

千歌さんが果南さん呼び止める声を上げたものの、果南さんはこちらを振り向かず、歩みを止めずに去ってしまいました。

「……………」

そして部室は、沈黙の空気に包まれました。

誰も口を開こうとしません。鞠莉さんでさえも、先程果南さんに言われた発言に、大変なショックを受けていました。

それから2分後

ある1人の人物がようやく口を開きました。

「あの、ダイヤさん……」

「……はい。何でしょう千歌さん」

私に声をかけてきたのは、千歌さん。

私を前にして礼儀正しくなって、私に尋ねること自体申し訳なさそうな表情を見せる千歌さん。私に声をかけてから10秒くらいの静けさのあと、千歌さんは私に尋ねてきました。

「どうしてダイヤさんは、果南ちゃんの肩を持つんですか？ どうしてダイヤさんは、果南ちゃんの味方なんですか!？」

「……………」

その千歌さんの聞き方には、私の中では多少野暮のように聞こえました。

それはまるで、私は果南さんの味方であることを決めつけているかのような発言。はつきり言って、そう決めつけられるのは困りますわ。

私は果南さんが出て行った中庭側に1つため息をつき、鞠莉さんを含めた7人に話をすることに私は決意しました。

「……勝手に決めつけしないで欲しいですわ」

「えっ……?」

「どういう事ですか?」

「そろそろ、潮時かと思ひまして……」

〃潮時〃

今まさにその時かもしれませんね。

果南さんには『肩を持つ』なんて昼休みに言ってしまったけど、今ここで告げれば、状況が一変するかもしれない。

良い方向か、悪い方向の2つです。

私はその場でゆっくり椅子から立ち上がり、果南さんの言葉に撃沈していた鞠莉さんに告げました。

「鞠莉さん。私は今からあなたに全てを話そうかと思つています」

「「「「……っ!?!」」」」

「ダイヤ!?それは一体どういう事!?!」

「ひとまず鞠莉さん、落ち着いてください」

私が発した言葉に鞠莉さんは興奮気味になると、私の両肩を強く握ってきます。千歌さんたちも私の言葉に驚きを隠せません。当たり前です。果南さんとずっと隠してきたことなのですから。

私は自分の肩にかけられた鞠莉さんの両手を握り、鞠莉さんを含めた7人に尋ねます。

「皆さん。このあと時間はありますか？」

「あ、あります！ 私たちは大丈夫です」

「ダイヤ……」

そんな興奮に満ちた眼差しで私を睨まないでください鞠莉さん。そして安心してください鞠莉さん。あなたにちゃんとした真実を話してあげます。

彼にもこのこと、連絡しないといけませんね。

「分かりました。ではこれから、私の家に皆さんで集まってください。そこで、全てを話



しましよう。私と果南さんで隠してきた本当のことを……」

「『『『『………』』』』』」

皆さんに話す意志を告げた後で、私は果南さんと同じように部室を出て行きます。

それで部室に私の声が届かないだろうというところまでやってきた私は、スカートの右側のポケットから携帯を取り出し、彼に電話をかけました。

『もしもしっ？』

「こんな時間にすみません、遼さん」

『ダイヤか………』

電話に出た彼は、私の声を聞いて驚きました。

私自身も、あまり彼に電話をする機会がなかったので、今の私はおどおどしています。

ですが今は、それどころではありません。彼にもしっかりと、私の思う意志を伝えました。

「私、鞠莉さんに話そうかと思えます」

『……………そうか』

「あの、何か言うことは？」

『ないよ。俺はダイヤの意志を尊重する』

すると彼は、私に何も言いません。

その言葉に偽りすらなく、真つ直ぐで透き通った言葉が私の耳に入ってきました。そして彼は、私の胸中を当ててきました。

『正直、今の状況が嫌なんだろう？』

「……………つ。遼さんには分かるのですか？」

『ダイヤが電話してきた地点でな』

それは、まるで私の考えている事が全て分かっているような発言で、遼さんはとても勘が鋭い人だとこの時の私はそう思いました。

『話すってみんなに伝えたのか？』

「はい。私の家で話すと皆さんに伝えました」

『ならみんなにしつかり伝えろよ。偽りも躊躇いもなく、鞠莉姉にもちゃんと分かるよ  
うにね』

「ふふつ。ええ、十分承知していますわ」

大事な電話ですが、彼の言葉を聞いている私は不意に笑みを溢してしまいます。彼  
と話をしていると安心してしまうのでしょうか？

……いいえ。そんな事はない、はずです。

『まあ無理せずに頑張ってくれ。果南は？』

「果南さんは先に、自分のご自宅へと帰ってしまいましたわ。まさか遼さん……」

『ああ。そのまさかだよ……』

私には分かります。彼は電話越しに不敵な笑みを浮かべていることに。今から彼が  
しようとしていることに、私はすぐさま言いました。

「それ、私も協力したいです」

『ダイヤならそうしてくれると信じてた』

遼さんのしようとしていることに、私も協力する言葉を告げました。彼が試みようとしているのは、たった1つで一度きりの賭けです。

その結果次第では、もしかしたら本当に状況が『一変』するかもしれません。この場合では、確実に2パターンに分かれます。

『良い方向』か、『悪い方向』

私は、彼の賭けに乗ることにしました。

果南さんと鞠莉さん。彼女たちが、無事に仲直りしてくれることを私は切実に願いました。

あの時みたいに戻れるようにと、  
彼がそう導いてくれることを信じて……。

# # 5 1 仲直り

午後4時、黒澤邸

「ちよつと！それは一体どういうこと!？」

「ダイヤさん、本当なんですか!？」

「ええ。これは本当のことですわ」

夕方、私から発せられる事実を知るために私の家にやってきた千歌さんたちと鞠莉さん。  
ん。

私はやって来た彼女たちを部屋に案内し、ほんの少しの間を開けてから本当のことを告げました。

「果南さんは歌えなかったのではなく、ある理由で歌わなかったのです」  
「だから！それは一体どういう……！」

「鞠莉さん！落ち着いてください！」

「……っ。はあ、分かっているわよ」

告白した事実には鞠莉さんは興奮します。

ですが私は彼女に落ち着かせるためにそう促すと、鞠莉さんは1つ大きなため息をつき、縁側からガラス戸越しに外を眺め始めました。

外はまるで鞠莉さんの心情が具現化しているかのような曇り空であり、今にも雨が地面に打ち付けてきそうなくらいの天気模様でした。

その鞠莉さんの背中を見つめていた私に対して、ただ唯一一人だけ立って話を聞いていた梨子さんが口を開いて尋ねてきました。

「でも、どうしてですか？」

「……………」

その質問は簡潔で、答えるのも簡単でした。

ですがこの時の私は、梨子さんの質問にすぐには答えられませんでした。

「まさか、闇の魔じゆ……むぐつ!？」

「やめるすら」

「むっ……んんっ……!」

「……はあ」

理由はとても簡単です。

自らを「墮天使ヨハネ」と名乗る善子さんに、話を遮られてしまったのです。幸い花丸さんが善子さんの口を押さえ、体ごと取り押さえてくれたおかげで、私は梨子さんの質問に答えました。

「全ては鞠莉さん、あなたのためですわ」

「私の、ため……?」

「はい。覚えていませんか? 2年前のあの日、鞠莉さんは怪我をしていたでしょ?」

「……あつ」

そうです。2年前のあの日です。

鞠莉さんはライブの前々日に怪我をした右足を、そのまま我慢してまで3人でライブをしようとしたのです。これを気にして果南さんは歌わなかった。これが果南さんが歌わなかった理由の1つです。

「そんな。私は、そんな事をして欲しいなんて一言も言っていない……」

「ですけれど鞠莉さん。あのまま進めていたらどうなっていたと思うんですの？怪我だけでなく、事故になってもおかしくはなかった」

あの時あのまま歌っていたら、鞠莉さんは間違いなく怪我をしていたでしょう。

そのせいで鞠莉さんの将来でさえも、間違いなく危うくなっていたのは言うまでもありません。

「だからお姉ちゃん、鞠莉さんに果南さんは逃げてないって言ってたんだ……」

「ええ。何度も私はそう言いましたわ」

「そうだったんですか……」



そしてルビイの言う通り、ときに私の家に訪ねてきた鞠莉さんにはずっとそう言ってきました。果南さんは、全て鞠莉さんの為にあんな行動をしていたということなのです。それなのに鞠莉さんは、私の言葉に何一つ信じる様子を見せず、挙句の果てには今日のような行動をしてしまいました。

「でも、その後は?」

「そうですよ! 怪我が治ったら、スクールアイドルを続けても良かったのに……」

「そうよっ! 花火大会に向けて新しい曲を作って、ダンスも衣装も完璧にして! なのに……」

でも、これは全部私のせいでもあります。

私がちやんと鞠莉さんに本当のことを伝えれば、あんな事にはならなかったのです。私の無力さに、とても腹が立ちます。

「……そういうわけにはいかなかったのです」

「……えっ?」

「どういうことですか?」

鞠莉さんの怪我が治ったら、また続ければいい。

千歌さんが言い放ったその言葉には私もまた3人でそうしたかった。ただ、そういうわけにはいかなかったのです。その時の鞠莉さんには、ある事情をたくさん抱えていたのです。

それが果南さんにとっての、もう1つの理由でもあります。

「心配していたのですわ。鞠莉さん、あなたは留学や転校の話がある度に全部断っていたでしょ?」

「そんなの当たり前でしょ!」

「果南さんは思っていたのですわ。このままでは、自分たちのせいで鞠莉さんの未来やいろんな可能性が奪われてしまうのではないかって……」

「……っ!」

果南さんが鞠莉さんに対して感じていたことや、鞠莉さんに対して思っていたこと。私は鞠莉さんに対して、果南さんが思っていたことを代弁するように話をしました。

鞠莉さんを含め、千歌さんたち7人は果南さんの思いを知り、驚きを隠せませんでした。

た。

そして鞠莉さんは、ハッと何かに気づきます。

「果南、まさか…それで……………」

「ええ。そのまさかですわ」

どうやら果南さんの思いが伝わったようで、赤く艶やかな唇を潰すようにギュツと噛みしめる。

それは、鞠莉さんにとっての怒りでした。

「……………くっ!!」

すると鞠莉さんは、私の部屋を出てどこかへ向かおうとします。それを私は呼び止めました。

「待ちなさい!どこへ行くつもりですか?」

「あいつを、果南をぶん殴る!そんな事、私に一言も相談せずに勝手に決めつけて!!」

胸のあたりで拳を作り、「怒り」という感情を果南さんにぶつきたいと、鞠莉さんの行動や表情を私の目の前で見せていました。

私は、鞠莉さんの怒りを落ち着かせようとして声をかけ、後に鞠莉さんに対してこう言いました。

「おやめなさい鞠莉さん！果南さんはずっとあなたのことを見てきたのですわ！」

「……………」

「あなたの立場、あなたの気持ち！そしてあなたの将来！誰よりも深く考えていたのですわ！」

「……………」

もう小学生の時からずっとです。

転校してやってきた鞠莉さんと友達になったときからずっと、果南さんは鞠莉さんへ気にかけていたのです。

そして2年前のあの時も、鞠莉さんの転校や留学の話を目にした果南さんは、鞠莉さんの将来を考えて決断したことなのです。ただそれを果南さんは、鞠莉さんに向かって

直接言えなかった。

彼女も彼女で素直じゃないのです。

「そんなの、そんなの分からないよ！どうして果南は言ってくれなかったの!？」

「ちゃんと伝えていましたわよ。鞠莉さん、あなたが気づかなかっただけ」

「いつよ!?!いつ果南が私に伝えたのよ!」

「……………」

果南さんがいつ、そんなことを鞠莉さんに対して伝えたのか？

それについても果南さんは全く素直ではなかったので、ある場所に果南さんはそれを書き、鞠莉さんに遠回しに伝えました。

今はもう、すでに消されてしまって、なくなっているかもしれませんが……。

「2年前、部室で使っていた『ホワイトボード』です。あそこに果南さんが残した、鞠莉さんへの『想い』があったはずですよ」

「……………あつ、まさか!?!」

どうやら思い当たる節があつたようです。

私の話を聞いた鞠莉さんはハツとなにかに気づくと、何故かその次に千歌さんが何かに気づき私に話をしました。

「あつ、それ私も見たかもしれないです！」

「千歌ちゃん、それつてあの時の？」

「うん。ダイヤさんが今さつき言つたことつて、もしかしたらそれなんじゃないですか？」

千歌さんがいつそれを見たのかは私は問い詰めはしませんでした。彼女自身が見たならば恐らくはきつとそれでしょう。

ただ鞠莉さんには分からなくて、千歌さんがそれに気づいてしまうのは少し残念であります。今はそれどころではありませんね。

「私、学校に行つてくるわ！」

「鞠莉さん！お待ちなさい！」

「止めないで！もう私、決めたから！」

鞠莉さんはそう言うと、私の言葉に耳を貸さず、一目散に私の部屋から走り去って行きました。

外は晴れ間が嘘だったかのような大雨。

私に氣遣って止めるような声をかけるべきだったかと思いますが、今の鞠莉さんには、そんな声を聞き入れてくれるはずがありません。

「止めなくて、良かったんですか？」

「……………そうですね」

きっと今の鞠莉さんには無駄でしょう。

あの人はある意味強引ですから。

それに……………果南さんだって本当は……………

~~~~~※※※~~~~~

昼にダイヤと連絡を交わしたあと、俺は放課後に果南の家へ直接向かった。

早朝に弁天島で会って、今日これが2回目になるけれど、今はもうそんなのどうでも良かった。

今から俺は、果南と喧嘩するのだから。

そしてこの時に、一度ダイヤからメールが送られてきた。どうやら鞠莉姉に全部を話したらしい。

メールの内容に目を通した俺は、フェリーが目的の場所に着くと同時にそこから飛び降り、果南の家は早足へと向かう。

すると果南のダイビングショップの前で、何やら作業をしている人物がいた。でもその人物が自分の知っている人だと分かった時は、すぐに俺はその人に声をかけた。

俺にとってその人には、色々とお世話になつてゐる人だつたからね。

「お久しぶりです。堅志郎さん」

「あれ？ 遼くんじゃないか？ こんな時間にどうしたんだい？」

「果南に話があつて来ました」

ダイビングショップ前のテラスで作業をしていた人物は、果南のお父さんである堅志郎さん。怪我が治り無事に退院したばかりなのに、雨の中で合羽を着て作業している姿はとても元氣そうだった。

俺がここに来た用件を話すと、堅志郎さんは果南は部屋に居ると言つてくれた。

本人がいるなら良かった。これで果南とちゃんと話すことができる。鞠莉姉が学校に向かったのなら果南にも行つてもらわないと……。

「では、お邪魔しますね」

「おう。ゆつくりしていけよ」

「ありがとうございます」

相変わらず堅志郎さんは優しい。

そんな堅志郎さんとのやり取りを終えた俺は、果南がいるであろう部屋へと足を運ぶ。

コンッ！コンッ！

「……っ？誰？」

「果南、俺だけど……」

「なっ!?なんで遼が家に!？」

「少し話があつて来たんだ」

果南の部屋の前に立ち、なんの躊躇もなくドアをノックすると果南の声がして、俺が来た事を伝えると彼女は驚いた声を上げる。

でもすぐに果南は俺を突き放すような言葉を投げかけてきた。表情はドアで見えないけど、その言葉と口調を聞いただけでも、あいつの表情はすぐ俺には分かった。

朝に見せた、あの表情と口調ままだ。

「何さ、また鞠莉のことで話しに来たの？」

「ああそうだ。それ以外に何かある？」

「帰って！遼に話すことなんて何も無い！」

ガチャツッ！

「……っ!?!ダメ！入ってこないで！」

「悪いけど、もう遅いよ」

ものすごい剣幕を撒き散らす果南を尻目に、俺は堂々と果南の部屋に入り込む。駄目だと拒否されるけれども、半ば強引に俺は押し入る。

俺を無理矢理にでも帰らせようとしてくる果南に対して、俺はダイヤからのメールの内容を告げた。

「ダイヤは鞠莉姉や千歌たちに全部伝えたそうだ。果南が鞠莉姉に思っていたこと、全部な」

「……っ。だから、なんだって言うのさ？」

「果南、お前からもちろんと鞠莉姉に全部を話した方がいいと思う。お前や、鞠莉姉のためにも……」

「分かったようなことを言わないで！」

果南は、やはり鞠莉姉との話を嫌がっている。

俺はダイヤと同じ気持ちだ。こんなにも悪い状況は早く終わってほしいし、果南と鞠莉姉が仲直りをしてまた仲良くなつてほしいと思つている。

あとは果南があと一歩踏み出してくれるかどうかにかかっていたが、果南は俺に向かって、信じられない言葉を言い放つてきた。

「遼には言つてないから言うけれど、私はスクールアイドルをすることが嫌になったの！ 鞠莉とダイヤと3人でするのが、とても嫌になったの！」

「……………」

「だから、私はスクールアイドルをもうしない!! だからもう出て行って！」

「……………」

自分は、本当はスクールアイドルに対してはこう思っていたとか、鞠莉やダイヤと楽

しくやっていたけれど、本当は2人といるのが凄く嫌だったとか。自分が言わないことをとにかく言葉にする彼女は、俺に対してそう言い放った。

これを他の人が聞いたらどう思うだろう？ 鞠莉姉には絶対に聞かせたくないし、千歌たちやダイヤが聞いたらほとんどの人が驚き、失望するだろう。

まあつまりは、そういうことである。

きつとこいつは、俺を無理矢理に“失望”させようとそう思ってたのだろう。

けれど今となってそんな言葉は俺を前では無意味である。俺みたいな付き合いの長い人を除いては、ほんの少しの付き合いがある人だったなら、すぐにその人との関係は断ち切れるだろうな。

「……嘘は言っちゃいけないなあ、果南」

「嘘なんかじゃない!! 私の気持ちなんか知らないくせに、知ったよう口を聞かないで!」
「……………」

ここまで来ると、こいつがなぜそこまでこだわるのかが気になって仕方がない。けれど今の果南は、鞠莉姉から逃げている。

それに、俺に対して『嘘なんかじゃない!』って果南は言い張ってはいるけれど、元

はといえばよ、こんなことになっているのは全部自分のせいだってことを、こいつは自覚しているのか？

「でもぶつちやけさ、今こんなことになっているのは全部果南が鞠莉姉に嘘ついたから
だろ？」

「……………っ！違う！私は嘘なんか……………」

「もういい加減にしろっ！」

「……………っ。遼……………」

どうやら全然自覚すらしていなかった。

“呆れた”

そんな言葉が頭をよぎる。怒りすら忘れてしまいそんなことであって、怒りすら飛び越えてそうなるようなケースもよく見かける。

でも今は、『呆れ』と共に『怒って』いた。

「こうなってるのは、全部お前にある。それなのにお前は知らんぷりで、嘘なんかついていないだど？ふざけるのも大概にしやがれっ！」
「……………」

これが果南と鞠莉姉、2人を仲直りさせる一番の方法だとは思ってはいない。寧ろ違う意味で逆効果になる可能性が一番高い。

ただそうと分かかっていても、俺は果南に言わなければいけないかった。
例え、俺と果南の関係が壊れてもだ。

「……………うるさい」

「あつ?」

「うるさいって言うてるの!」

そして俺に言われてばっかりで我慢の限界に来たのであろう。果南の目には涙が浮かんでいた。

「遼に言われなくなつてそんなの分かつてる!でももう2年も経つちやつたんだよ!今

更そんなこと言えるわけないじゃん!!!」

「……………」

「言えない。私には、もう、無理なんだよ……」

なんだ。ちゃんと言えるじゃんか。

それらをちゃんと鞠莉姉に向かって言えるようになれば、仲直りなんて全然簡単なはずなのに。本当に素直じゃねえんだから。

果南が本心を吐露してくれたことに少し安心しながら、果南の話に俺は言葉を投げかける。

「果南、自分で勝手に無理とか決めつけているようじゃ、本当に鞠莉と仲直りすら出来ないぞ……」

「えっ…………?」

「無理みたいなネガティブ思考ばかりを考えて、それを決めるのは果南じゃない。無理なんてもんは存在しないぞ!」

「……………!」

自分には無理。鞠莉姉とは仲直り出来ない。

そんなネガティブな発言を一切なくさせるようにして、俺は果南に対して喝を入れる。

今の状況なら多分、果南にはこう言った方が得策かもしれない。果南には前を向いてほしいし、何より果南はそうでないと困る。

果南が果南らしくいてほしい。俺はただただ彼女にそう願った。

「……鞠莉と仲直り、出来るかな？」

「なにを弱気になってるんだよ。大丈夫、ちゃんと自分の本音で話せば、仲直り出来るはずさ。鞠莉姉だって、同じこと思ってるはずだから……」

多分鞠莉姉だって同じこと思ってる。

あの人にとって果南は特別な人で、果南と同じで誰よりも一番に考えていたはずさ。

そうじゃなかったら、まずこの内浦に戻ってくるはずがないし、何よりも俺はそう確信している。

根拠はないけどね……。

「……ふふつ。そうかもね……」

「やっとお前らしくなった。ホツとしたよ……」

「ごめん。私ってば馬鹿だったよ」

「本当にそうだよ、ばかなん」

果南に対して『ばかなん』って言ったのはなんか久しい。これを名付けたのは渦中の鞠莉姉だから、なんかとても懐かしく思うところがあった。

そこで、やっとなんは笑った。

今まで暗かったり、怒ったりしていた果南の表情は打って変わって、様変わりするよ
うに一変した。

ある意味、良い方向に向かっている。

そしてそれを象徴するかのように、果南は心から決心をした。

「分かったよ遼。私、鞠莉のところに行ってくる」

「やっとなん決心したな。待っていたよその言葉」

「えへへっ。ごめんね、あんなこと言っちゃって」

「もうそんなことはいいよ、果南」

鞠莉姉と仲直りすることを決めた果南は、優しく和かに笑いつつも俺に対して深々と謝る。

だが、今は呑気に謝っている場合ではない。

果南にはまだ、やるべきことがあるのだから。

「俺に謝ることよりも、早く行かなきゃならないところがあるだろう?」

「うん、そうだね。早く鞠莉のところに行つて鞠莉とちゃんと話をつけてこないといけないよね?」

「ああ。俺はそうさせるつもりで来た」

そう。鞠莉姉と話をつけてこなければならぬ。

俺の中でのあわよくば、何事もなかったかのように2人が仲直りしてくれることを密かに望んでいる。

まあ本当にそうなってくれる保証はないけどな。

「鞠莉姉は今学校にいるらしいぞ。ダイヤからメールで送られてきたから、まず間違い

ないだろう」

「あつ、本当だよ」

ダイヤから送られてきたメールを果南にも見せてやると、彼女も納得したように首を縦に振る。学校に鞠莉姉がいることを伝えれば、自然と果南は学校に向かつてくれるだろう。

すると果南は俺の隣を通って部屋を出ると、俺に振り返って笑みを浮かべながら言うてきた。

「じゃあ私、鞠莉のところに行ってくる」

「鞠莉姉のところに行くのは止めないけど、そんな風に笑っていると鞠莉にキレられるぞ？ぶっちゃけ今は笑ってられない状況なんだからよ」

「うん、分かってるよ」

正直に今は笑っていられる状況じゃない。

果南もちゃんと分かっているはずで、学校にいる鞠莉姉のところに行けば、きっと真剣に鞠莉姉と話をしてくれるだろう。

そんで逆に真剣になり過ぎて、この2人が大喧嘩にならないことを祈るか。

「じゃあ行ってくる!」

「おう。もし果南と鞠莉が仲直りできたら、ダイヤと俺と4人でどつか出かけようぜ。俺ってば、まだちゃんと鞠莉姉に会ってないから」

「分かった。じゃあね!」

「……ああ」

こうして果南は、鞠莉がいるであろう浦女へと足を運んで行った。

俺はしばらくして、果南の家の前に出て空をふと見上げる。雨は上がり、雲の隙間から朱色の空が顔を出していた。若干紫色と混ざっているけれど、なんかとても幻想的だった。

「はてさて、2人はどうなることやら……」

海を挟んで見える浦女の校舎を眺めながら、俺は2人のことを思いやり、そう呟いたのだった。

～
～
～
～
～
※※※※※
～
～
～
～
～

「……………」

あんな風に笑ってここまで来ちゃったけど、本当に彼の言う通り、笑ってる場合じゃなかった。

「……………はあ」

浦の星女学院に鞠莉がいる。

そういう情報を受けて私は学校にやって来たけれど、いざ鞠莉と話をつけると考える
と、途端に心臓の鼓動が早く感じる。

2年前のことや、こうして今尚も鞠莉を傷つけてしまっていることを思うと、ね？
逆にここで鞠莉と話して、絶交になっちゃつたらそれは全部私のせい。私が率先して
それを企てたんだから、そんなの当たり前だよね。

「……よし。行こう」

私は決心し、学校に足を踏み入れる。

校門の門は既に少し開いていた。その意味としては、今千歌たちが使っている部室に
行けば、それはすぐに分かった。

「鞠莉……」

「……っ、果南」

私は部室まで迷うことなく足を運ぶと、全身が雨に濡れ、私をじっと睨みつけて見つめる鞠莉の姿がそこにあつた。

部室のいたるところに水たまりがあることから、鞠莉はだいぶ前に部室で待っていたことが分かる。ホワイトボードの前にも水たまりがあつたから、私が伝えたかつた事も分かつたのかもしれない。

そしたら鞠莉は、私に向かって話し出す。

「いい加減、話をつけましょう?」

「うん。私もそのつもりで鞠莉のところに来た」

今までのことに“終止符”を打つ。

鞠莉の発した言葉には強い気持ちが見れていて、それに気圧されながらも私もそう言い放つ。

私と鞠莉がいるこの部室と雰囲気には、誰も立ち入ることが出来ないくらい。その中で、鞠莉が最初に私に対して尋ねるようにして話は始まった。

「ねえ果南。どうして言ってくれなかったのよ!? 思ってることとか、考えていることと

か、私に何で言ってくれなかったの!？」

どうして本当の気持ちを話してくれなかったのかなんて、話すにも恥ずかしくて話せない。それでも2年前の当時に思っていた事は、今も変わらない。

私にとって鞠莉は、とても大切な友達だから。

「私にとって鞠莉は、ダイヤと同じくらい、とても大切な友達だからだよ……!」

「そんなの、そんなの私だって同じよ!私だって、果南のことを大切に思ってるの!」

そう言った私に対して鞠莉は、私に同様なことを話した。私を大切な友達だって、鞠莉は言った。

その鞠莉の話を聞いてた私は、鞠莉も同じ思いがすごくあって、私も鞠莉もお互いに思いやっていたんだなって感じた。

それなのに私と鞠莉は、本当の気持ちを言わず、大切に思うあまり遠ざけてしまい、こうして2年間も離れ離れになってしまった。

あの時、私が鞠莉に対して言ってしまったことに『後悔』を覚えるなかで、鞠莉は当時から思っていたことを全て私に打ち明けてくれた。

「正直将来なんて今はどうでもいいの！留学？全く興味なかった。だって果南が歌えなかったんだよ？放っておけるはずがないじゃない！」

「……………」

その内容にもやっぱり、私に対しての思いやりが含まれていた。あのステージで歌えなかったことを気にして、留学はもとより、将来すらも鞠莉は全く考えていなかったらしい。

鞠莉の口から初めて聞いた言葉の数々が、まるで槍のようになって私の心に突き刺さる。

そして私が招いてしまったこの状況に、私は顔を下げてふと考えさせられてしまった。どうして私は鞠莉にあんな事を言ってしまったんだろうって。

「……………」

そのとき私の左頬に、痛みの衝撃が走った。

パアンツ！

「……っ!？」

私自身も衝撃的だった。本当に一瞬の出来事で、鋭い音が部室中に響き渡る。

私を平手で殴ったのは目の前にいる鞠莉。目には大きな粒の涙を浮かべて、今にも泣きそうなところを堪えながら私に言い放った。

「私が、果南を思う気持ちを、甘くみないでっ!」

ああ。やっぱり私は馬鹿だ。

鞠莉の気持ちをちゃんと考えていたはずなのに、私は全然考えていなかった。

でも、これだけは鞠莉に言いたい。

言いたいことがあったのなら、私に素直に言ってくれば良かった。リベンジだとか、負けられないとか、そんなことよりも大事なことは一番に言っていて欲しかった。

「だったら……だったら素直にそう言つてよ!」

「果南……」

「リベンジだとか、負けれないとかじゃなくて、言いたいことがあるならちゃんと言つてよー!」

その思いを本能の赴くままに、涙を浮かべながら叫ぶように私も言い放った。

けど鞠莉は私がそう言い放った次の瞬間、彼女はフツツと優しく笑うと、涙を溜めながら何故か自分の左頬を指差す。

「……………だよね?」

「えっ…………?」

「だから、(´▽｀)…………」

さっきのお返しとして「やり返していいよ」と、鞠莉は自ら左頬を私の目の前に出してきたのだ。

きつと鞠莉は、私に殴られておあいこにしたいのかもしれない。突然殴ってしまったことに関してのお詫びと、自分が殴られれば仲直り出来るかもしれないという考えを感じた私は、右手を上げて殴ろうとする仕草を見せても、決して鞠莉のことを殴ろうとは

思わなかった。

「……………」

「……………」

鞠莉が私に殴られることに怯えて、身体が震えているのを目の当たりにしたら殴ろうなんて思う？

これは鞠莉の単なる自己満足。

こんな事をして仲直りしようだなんて、鞠莉には悪いけれどそれはできない。

ただ、それよりももっと簡単な方法がある。

「……………」鞠莉

「へっ……………」

「ハグ、しよ……?」

「……っ!」

『ハグ』は私の愛情表現。

鞠莉に向かって両手を広げて『おいで』と誘い、『仲直りしよう』と静かに涙を浮かべる。

鞠莉は私のその行動に驚きはした。でも鞠莉はそれを見て次第にまた涙を零し、堪え切れなくなって私に飛びつき大声で泣いた。

「うっ、うう、うわああああん!!」

「う……うう……」

私もそんなに我慢出来なかった。思いつきり抱きついてきた鞠莉を抱きしめ返して、2年越しに鞠莉の優しい温かさを間近に感じた。

「うっ……ぐすっ……」

「ひっくっ、うえん……」

もうあの日からの2年間の空白は戻らない。

その事をちゃんと理解した上で、私は鞠莉とこれからの日々をいつも以上に大切にしたいと思った。

2年間離れていた分、今まで以上に鞠莉と一緒にいたい。私はこの時からそう思った。

「鞠莉い、ごめんねえ〜!」

「なによお。私もごめんなさいい〜!」

私も鞠莉もお互いに謝りあって、私たちは無事に仲直りをする事ができた。

私と鞠莉との間にあったわだかまりも消えて、私の奥底にある胸の内も、スッキリ軽

くなっていた。

これから私と鞠莉はどうするのかって？

それは多分、言わなくても分かると思う。

「ねえ果南。またスクールアイドルしょ？」

「そうだね。千歌たちのグループに混ざろつか？」

「ええ！私もそれに大賛成！」

2年ぶりのスクールアイドルの再開。簡単に千歌たちのグループに混ざって始める事を決めちゃったけど、今の千歌たちなら喜んでくれるかな？

多分、喜んでくれる……はずだよね???

~~~~~※※※~~~~~



「良かったな、ダイヤ」

「ええ。でも、本当に世話の焼ける2人ですわ」

少しばかりホツとしている俺とダイヤ。

部室の外からこっさり覗き、2人が無事に仲直りをしてくれたことに少しばかり安心としていた。

ただ、鞠莉姉が果南に対して頬を引つ叩いた時は本当にどうなるかと思っただぞ。ダイヤもその場面を見て、思わず驚きの声を出してしまいそうになっただくらいだからな。

でもそれだけ、2人を思ってる証拠になる。

「それでもダイヤは、あいつらのこと大切に思っているんだろ？良かったじゃねえか」

「まあ、そうですけど……」

彼女が否定しないあたり、そういうことだ。2人が抱き合って泣いて、そして無事に丸く収まった。俺もあの状況に納得はしている。

するとダイヤは思いがけないことを呟く。

「ただ遼さん、果南さんと鞠莉さんのこと、あとはよろしくお願いいたしますね？」

「えっ？何でそんなこと言うんだよ？」

「私はもう、やるべきことは終わったのです」

自分の『やるべきこと』が終わった。

そう言っただイヤはその場で立ち上がると、なにか吹っ切れたように笑みを浮かべて俺の前から消え去ろうとする。もしかしてダイヤは、2人を仲直りさせたあとで、自分は何事もなかったように普通の日常に戻ろうとしているのかもしれない。

「……………」

果南と鞠莉姉の2人がスクールアイドルをして、自分は生徒会長として学校生活に戻

る。それがどういう事を意味するのか瞬時に理解することが出来た俺は、すぐさまダイヤの右手首を掴んで、逃さないようにしっかりと握った。

ダイヤは自分から、今一番にやりたいことを無理に塞ぎ込もうとしているんだ。

「待てダイヤ。『終わった』じゃないだろ？」

「どうして、そう思うのですか？」

「ダイヤだって本当は、あの2人と3人で、スクールアイドルをやりたいんじゃないのか？」

「……………」

俺の問いかけにダイヤは終始無言。

ダイヤが何も反論すら言わないことが、結果的にどうすればいいのか悩んでいるように思えた。

「自分に正直になれよ」

「私は……………」

「ダイヤは今、何がしたい？」

別に悩む必要なんてないはずなのにな。でもまあダイヤは宝石みたいに堅物だし、プライドもお高いからさ、自分の本心に関しては何に對してもあまり口にしたくないのかもね。

だけど、もうそれは無しにしよう。

「私は果南さんと鞠莉さんと、また3人でスクールアイドルがやりたいです！」

「……ふっ。ちゃんと言えたな。よしよし！」

「ちよつと！頭撫でないでください！」

「あはは、ダイヤは可愛いなあ〜」

「なっ!?!もう!からかわないでください!」

やっと自分の口から本心を話してくれたから、俺は嬉しくなつてダイヤの頭を優しく撫でると、彼女は恥ずかしくなつて顔を赤くする。

果南と鞠莉姉、それからダイヤの3人がスクールアイドルを再開してくれることを心から喜ぶ俺は、校門前で待っている。『あいつら』にも報告しないと思ひ、ダイヤを連れて校門前へ足を運んだ。

「じゃあダイヤ、校門前に行こう」

「えっ？ どうしてです？」

「あいつらにも報告しないとだろう？ ルビイちゃんだって、きつと心配してるはずだから」

「ルビイが……？」

部室にはまだ果南と鞠莉姉がいるから、2人にはバレないように『？』を浮かべるダイヤを半ば強引に連れて行く。

そしたら俺とダイヤが戻ってくるのを、笑みを浮かべて待っている千歌たち6人の姿があった。

「どうだった？ 仲直りしてた？」

「ああ。無事にあの2人は元通りだ」

「良かったぞら〜！」

6人に事実を伝えれば、たちまち6人は喜びを表現する。千歌ならはしゃいで喜んだ

り、梨子なら笑って拍手したり。

みんなが果南と鞠莉姉の仲直りを祝福しているなかで、俺はダイヤについてみんなに話をした。

「それで、果南たちがスクールアイドルを再開するらしいんだけど、ここにいるダイヤもやろうかなって考えてるんだってさ」

「ええ!?ダイヤさんも!？」

「ちよつと待っててください! 私は生徒会長ですよ? スクールアイドルをやってる暇なんて……」

おいおい。さつき俺には『やりたい』とはつきり言ってたくせに、千歌たちの前でまた悩むのか。

せつかく俺には自分の意志を言ってくれたのに、千歌たちを前にすると言えなくなるとは、ダイヤもあの2人と同じくらい曲者だな。

ダイヤの言動に頭を抱えていたときに、俺の前に千歌が現れ、ダイヤに対して和かに話をした。

「大丈夫ですよ！ダイヤさん！」

「えっ……？」

「果南ちゃんと鞠莉さん、そして遼くん。それに、私たち6人もいるので……！」

ダイヤを安心させるような、そんな風に千歌は話をする。すると何故かだが、千歌がルビイちゃんをこちらに手招きする。

そしたらルビイちゃんの手には、赤を基調とした着物のような衣装を持っていた。そのままダイヤの目の前にやってくると、衣装を前に差し出しながらダイヤに向かって言い放った。

他の誰よりも一番大切に思っている、姉に対しての歓迎の言葉だった。

「親愛なるお姉ちゃん！ようこそ、A q o u r s へ！」

「……っ。ルビイ……！」

「わあ!?!お姉ちゃん、苦しいよお……！」

ダイヤは妹から歓迎される言葉を言われるなんて思ってもいかなかったんだろう。

ルビイちゃんから誘われたことに嬉しさが勝り、ダイヤは静かに嬉し涙を流しながら

ら、ルビイちゃんをギュツと抱きしめる。ダイヤもダイヤで妹思いで大好きだからね。自慢の妹のお願いを、断れるはずがない。

「ありがとうルビイ。私、決めましたわ!」

「じゃ、じゃあ!?!」

「フフツ。ええっ! 私も果南さんと鞠莉さんと一緒に、千歌さんたちのグループに混ぜて、スクールアイドルをやらせて頂きますわ!」

「やった〜! わ〜い!!!」

「お姉ちゃん!」

そしてやっと、自分の口からスクールアイドルがやりたいとみんなにも話をしてくれたダイヤ。

一歩前に踏み出し、Aqoursのメンバーの一員として活動をすることを決めたその時、俺とダイヤの背後からあの2人がやってきた。

「あれっ? みんな?」

「どうして千歌っちゃんたちがここ?」



本日の主役である果南と鞠莉姉。鞠莉姉が果南にべつたりと左腕にしがみつき、早速俺たちに仲直りをした様子を見せていた。

それで俺たちがここにいることを知らない2人には千歌が説明し、果南と鞠莉姉はスクールアイドルを再開、千歌たちのグループに入ることを話した。

「じゃあ…果南ちゃんも鞠莉さんも、ダイヤさんと一緒にA q o u r sに入ってくれませんか!?」

「うん!もちろん!」

「イエス!マリーに果南にダイヤを入れて9人!!ものすごく楽しいグループになると思うわ!」

「やった〜!」

話の中では何も問題はなく、むしろ良い意味で話は盛り上がりを見せていた。

そんな時、俺は鞠莉姉と目が合う。彼女たちの面倒を見るのが更に大変になりそうだ。

そんな時、俺は鞠莉姉と目が合う。

「あら？あなた誰？」

「あはは……。まあ覚えてないよね？」

「えっ……。？」

けれども俺に対してキョトンとした目を見ると、初めて会うかのように俺の名前を尋ねてくる。

目が合ったのは良いものの、もう2年も会っていないとなると、忘れてしまうのも無理ないよね。

でも仕方ないから、思い出させてやる。

彼女に対して「○○姉」って呼ぶのは、俺以外には誰もいないのだからな。

「久しぶりだな、〃鞠莉姉〃！」

「……っ!? えっ? 嘘、貴方なの?」

「俺のこと忘れたなんて言わせねえぞ?」

「ううん! 忘れるわけじゃない!」

鞠莉姉に対して名前を呼ぶと、久しぶりに名前を言われた彼女は俺をギュツと抱きしめてきた。

まあ何せ2年ぶりの再会だからね。鞠莉姉自身も嬉しいのだろう。

「遼〜！久しぶりね！」

「ああ。約2年ぶりだな」

「遼くん、鞠莉さんと知り合いなの？」

そして鞠莉姉が俺に抱きついてきたところを目の当たりにすれば、当然彼女たちも気にならないはずがなく、曜が俺にそれを尋ねてくる。

その問いかけにどう答えようか考えていた時に、鞠莉姉が前に出て曜たちに話をしてくれた。

だが鞠莉姉が言い放ったのと同時に、俺は彼女たちから命を狙われることになってしまった。

その理由がね、 “コレ” なのよ。

「もちろん！私と遼は小学生からの友達で、お互いを大切に想い合っている “カップル”

“なのよ!”

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「……………」

『カップル』とは、簡単にいつてみれば恋人などの恋愛関係である2人組のことを言う。

しかし鞠莉姉がみんなに對して言ったことは全部がデタラメ。俺と鞠莉姉はそんな関係じゃないし、ましてや言い過ぎだ。

ただそれを鞠莉姉の冗談だと受け止めず、何故か真に受け止めている彼女たちがいた。

「遼くん? どういうことかなあ……?」

「少し説明していただく必要がありますね?」

「お、お前ら!?!」

俺の前には目を赤く光らせたダイヤがいて、その後ろには千歌と梨子までもが佇んでいた。

うん。もう自分の中で察したよ。  
俺、下手したら今日が命日かも……。

「遼さん、お覚悟ですわ！」

「やめろ！俺はまだ、死にたくない!!」

「うるさい！問答無用だあ〜！」

「ぎゃあああああ!!」

俺は最後までダイヤたちに弁解を求めたものの、ダイヤたちには全く聞く耳を持ってくれず、鞠莉姉によって俺はとぼちちりを食らってしまった。

こうして果南と鞠莉姉との間に起きていた蟠りはなくなり、無事に終止符を打つように2人は仲直りをしてくれた。

鞠莉姉らしいあの爆弾発言には、少し久しぶりに感じてはいるけれど、こっちに飛び火が移ってくるから結構嫌なのよね……。

まあ、今回だけは許してやるけど……。

「……………」

ただ俺に制裁を下してるダイヤたちの背後にて、1人の幼馴染みが唇を噛み締めて、身体を小刻みに震え上がらせているのを俺は知らなかった。

そしてそれが、あんな事になるなんてことを……

俺たちは知る由もなかった。

## #52 夏祭りと自覚

あれからしばらくの月日が流れた。

果南と鞠莉姉が無事に仲直りをして、その後千歌たちは、次の日から夏祭りのライブに向けては日々練習に取り組んでいった。

毎日の毎朝、そして放課後。俺は部活があつて、あまりみんなに顔を出すことは出来なかつたけど、練習の合間には必ず連絡を入れ、彼女たちのことをずっと気にかけていた。

厳しい指導をするダイヤと果南だからさ、色々とみんなが弱音を吐くんじやないかって思っていたんだが、思いのほか、全くそうじやなかつた。

もちろん、良い意味で……。

その話を聞いていた俺は、みんなが無駄な時間を過ごしてないことに安堵し、充実な練習をしているならライブは何の問題もないだろうとすぐに感じる事が出来た。

でもなんか、あつという間だったよ。

「遼くん！早く早く〜！」

「はいはい。分かってるよ」

なぜなら、今日が沼津夏祭りの当日であり、9人になって初めてのライブの当日だからだ。

あれから本当に時間が過ぎるのが早すぎて、本当にあつという間だったよ。俺も正直驚いている。

それで朝っぱらからいつもの元気さを見せている曜は、今日は夏祭り使用で浴衣を身に纏っている。全身が水色に彩られ、ところどころにピンクと白の花柄が施されていた。

ライブにおいても浴衣をモチーフにした衣装を曜は作ったらしいけれど、どんな感じの衣装なのかは俺も未だに分かっていないから楽しみでもある。

そんな感じで、曜が俺に言ってきた。



「今日はライブの時間までみんなとたくさん遊ぶんだから、はぐれちゃダメなんだからね!？」

「へいへい。言われなくてもそうするよ」

爽やかな印象を持たせる浴衣をふわりと揺らし、曜は俺に対してガミガミと説教じみたことを言ってくる。ただその言葉の裏には、今日をすごく楽しみにしていたことが俺には丸わかり。

呆れているわけでもないけど、他のみんなも同じことを思っているはずだ。なにせ、『夏祭り』なのだから。

ドテツッ!

「うわあ!？」

「ああっ!なに転んでんだよ!？」

「ごめんごめん。久しぶりに浴衣着たから、嬉しきで思わずはしゃいじゃって……」

「………つたく、気をつけろよ」

曜は久しぶりに浴衣を着て、それに嬉しさを覚えはしゃぐのは別に構わない。しかし怪我でもしたらライブが中止になり、みんなに迷惑をかけてしまうのは全くとってごめんだ。

何より、今までの時間とみんなの努力が水の泡になってしまうことがね。  
本当に気をつけて欲しいもんだよ。

「ほれ。手を貸せ」

「う、うん。ありがと……」

俺は曜に手を出し、彼女をゆっくりと立たせる。

浴衣で足の動きが制限されるから、あまり素早く立たせようとすると浴衣が破けるケースがある。

「ありがと、遼くん」

「別にいいよ。ほら行くぞ」

だから慎重に、丁寧に曜を立たせたそのあとで、俺は曜を連れて夏祭りの会場へ歩き

始めたが、曜はなぜが俺を呼び止める。

「ま、待って遼くん！」

「何だよ今度は？」

「あつ、えつと……その……」

俺に対して、何かを話そうとしているのは彼女の様子を見てすぐに分かった。だが曜は口を噤んで、何を言おうとしているのか分からなかった。

するとすぐに彼女は、俺に対して言った。

「……ううん、何でもない！」

「……………」

それは裏に何かがありそうな発言で、そんな風な言い方に作り笑う彼女は、俺を追い越し、先を急ぐように会場へと足を運んで行ってしまった。

「何なんだ？今日のあいつは……？」

今日が夏祭りのせいなのだろうか？

いや、それは違うな。曜の後ろ姿を見て、率直に思った事をそのまま口に出した俺は、その場で立ち尽くし、徒歩からスキップに足取りを変えていく曜の姿を見つめていたのであつた。

~~~~~※※※~~~~~

うわあああああん!!!

「はあ……はあ、はあ……はあ……」

無理い！無理無理無理い！

せつかくデートの誘い方を鞠莉ちゃんから手取り足取り教えてもらったのに、私は恥ずかしくなって逃げ出してしまった。こんなのだうやって遼くんを誘ったらいいの？

今日は年に一度の夏祭りで、今の場面は遼くんを誘える絶好の機会だったはずなのに……。

「はあ……ごめん。鞠莉ちゃん……」

色々教えてくれた鞠莉ちゃんに私は謝る。私がどうして鞠莉ちゃんに謝っているのかというと、色々とかくかくシカジカなんだけれども、ちゃんとした理由があるんだ。ちようど夏祭りの1週間前のことなんだけど、私が鞠莉ちゃんと部室で2人っきりの時、鞠莉ちゃんに度肝を抜かれる言葉を言われたんだ。

「曜、あなた“恋”してるでしょ？」

「ええ!?こゝ、恋!」

「そうよっ!」

「ええく!」

その言葉には私も衝撃的だった。けれども、その言葉に思い当たる節とかや場面とかは、私の中にはたくさん思い浮かんでいた。

でもそれを『恋』だなんて私は思いもしなくて、すごく戸惑っている自分がいた。

すると鞠莉ちゃんは私に対しニヤリと悪戯っぽく笑うと、私をからかうように話をしてくる。

「なぐに?もしかして自覚してなかった?」

「自覚も何も、私がお、恋してるなんて……」

「あらあら♪そうは言っているけれど、もしかして曜は、無意識に『彼』を見ているのかしら」

「えっ?彼……?」

鞠莉の言う『彼』という言葉に、私はその人物が誰なのか予想すら出来なかった。

ただし鞠莉ちゃんはというと、私が誰に恋をしているのかを既に知っているような口調ぶり、自分のスマホで「彼」の画像を私に見せてきたのだ。

「曜ってば、彼と幼馴染みの関係なんですよ？」

「えっ、ええっ!?!」

「うふふっ♡反応がすごく可愛いわよ、曜♡」

「か、からかわないでっ!」

鞠莉ちゃんが私に見せてきたのは、部活で練習に取り組んでいる遼くんの姿の画像だった。

いつ、どこで彼の写真を撮ったのかの話は別としてね、私は彼に対して恋を抱いていることの認識は全くしていなくて、私は鞠莉ちゃんに弄られ、軽くからかわれた。

それで私は、鞠莉ちゃんに尋ねる。

私が、恋をしている理由。

「でも、どうして私が遼くんを恋を？」

「そんなの決まってるじゃない!曜は、遼のことを『LOVE』の意味で好きなのよ!」

「ええ!? 私が、遼くんのことを……好き!?」
「イエース! もう鞠莉も胸キュンよ〜!」

私は、いわゆる『愛してる』という『LOVE』の意味で、遼くんのが好きなんだって鞠莉ちゃんにそう言われる。

だから私は思い返した。私が遼くんのことを好きである、確固たる証拠になる行動。するとそうしたら、”とても”と言えるくらいに、たくさんの行動があつた。

全部が全部、恥ずかしいと思うくらいに……。
そうして私は顔を真っ赤に染め上げた。

「~~~~~っ!」

「うふふ♡ やつと自覚できたみたいね♡」

「なんか、変な感じだよ……」

本当に変な感じ。幼馴染みでお隣さん。ましてや学校でもモテモテの遼くんには、『LOVE』で好意を持っているなんて……。

まるで、自分が自分じゃないみたい……。

「それで〜?この後どうするの?」

「え……ど、どうするって?」

「も・ち・ろ・ん、するのよね?」

「す、するって何を!?!」

「うふふつ♡分かってるくせに……♪」

そうしているうちに鞠莉ちゃんからそう言われると、不覚にも私は、遼くんに告白をしている場面を妄想してしまった。

『遼くん!私、遼くんのが好きっ!』

『好きで好きで堪らないの!』

『だから、遼くんの彼女にして♡』

『私を、遼くんのモノにして♡』

「~~~~~っ!」

おかげで私の顔は辱めを受けたかのように真っ赤になって、鞠莉ちゃんできえも、今私はどう思っているのか分かってしまう。

「あらあら♪ 曜つてばもしかして、遼と何か如何わしいこと考えちゃつてた？」
「うっ！ もうグウの音も出ません……」

心に突き刺さる言葉を言い放たれ、何も反論することすら出来ない私。

死んでしまいたいくらい恥ずかしくなつて、部屋には鞠莉ちゃんだけだったから良かったものの、他のみんなには見せられない顔をしていた。

でもそんな時に、鞠莉ちゃんは私の肩に手を置き優しく声をかけてくれた。

「でも良いのよ曜。恋をする女の子は、みんな同じことを考えているんだから！」

「えっ？ みんな……っ？」

「イエス！」

恋をする少女はみんなそうと、鞠莉ちゃんは私の妄想を擁護してくれた。でも、恥ずかしいことには変わりはないんだけどね。

でもそれでも尚、鞠莉ちゃんが自分の昔のことを話してくれた。鞠莉ちゃんが言うには、2年前に私と同じように恋をしていたみたい。

「私だって、2年前に曜と同じように恋をしていたわ！本当、あの時が懐かしく思う」

「鞠莉ちゃんも、恋をしていたの？」

「ええ。ある人に対して心を奪われてね、私も凄く胸キュンだったの」

「へえ〜！そうだったんだ！」

鞠莉ちゃんが昔に恋していたのは、話を聞いてて素直に私は驚いた。確かに鞠莉ちゃんも綺麗だし、恋人がいても全くおかしくない。

ただ私は『逆』だと思っていた。

鞠莉ちゃんとはとにかく、男の人から告白されてるものだと思っていた。

けどただそれは私の思い違い。鞠莉ちゃんも恋をする女の子なんだって、私は改めてそう感じた。

そして、私は鞠莉ちゃんに尋ねられる。

「だから私は、曜には失敗して欲しくないの」

「えっ?じゃあ……」

「曜は、遼のこと好き?」

「えっ?あつ、ううっ……」

一瞬、私は鞠莉ちゃんに聞かれる前の言葉に考えさせられた。だけど遼くんのこと『好き?』って尋ねられたら、その質問に対して答えないわけにはいなくて、自分が遼くんを恋をしている事を自覚した上で、恥ずかしいけれど鞠莉ちゃんにちゃんと意思を伝えた。

「……………うん。私は、遼くんのが好き!」

「……………ふふっ♪」

私の意思、私の想いを聞いた鞠莉ちゃんは、何か少し嬉しそうに笑って、優しくはにかんだ。

そうしたら鞠莉ちゃんは、私に対してある決心をしてみせる。それは私にとって、もの凄く得をするようなことだった。

「それじゃあ私は、曜の恋の成就を願って、恋愛におけるやり方を手取り足取り教えてあげるわ！」

「えっ!? 本当!？」

「もちろん! 可愛い後輩のためだもの!」

「えへへ♪ありがとう鞠莉ちゃん!」

恋の成就なんて、聞いただけでも凄く恥ずかしいことだけど、ただ鞠莉ちゃんが応援してくれているから、なんとなく頑張れそうな気がした。

それから1週間、私が遠くんに告白できるようにと、鞠莉ちゃんは自分が持っている恋愛の知識全てを徹底的に私に叩き込んでくれた。

デートで男性が好む仕草とかも教えてくれたし、鞠莉ちゃんだけが知っている遠くんのことも話してくれた。

『あとは自分の“勇気”次第!』

そして恋愛の知識の全てを教わったあとで、鞠莉ちゃんに言われたその言葉は、今の私の心に、深く深く突き刺さっている状態だよ。

「曜？さつきから元気ないけど？」

「う、ううん！私は全然大丈夫だよ！」

「それならいいけど……」

本当に「勇気」って大事なんだねって、鞠莉ちゃんが言ったその言葉と意味を、私は改めて感じたのであった。

~~~~~※※※~~~~~

今日の曜ていは、どうも様子がおかしい。家で最初に会ってからずっとだ。

俺に話すことがあるのかと思えば、曜は顔を赤くして何も言わないし、モジモジとその場で変な動きをしていて、行動も何かと変だ。

ただそんな行動は俺だけに見せていて、みんなと沼津駅において集合した時には、今のところはその行動を誰にも何一つ見せていない。

こいつは一体、何がしたいんだ？

「遼くん！遼くんってば！」

「おわっ!? な、何だよ千歌」

「『何だよ』じゃないよっ！ さっきから遼くんの名前呼んでるのに、ずっと無視してるんだから！」

「あつ、ああ。悪い悪い」

曜に関して思い悩んでいたら、何度も俺の名前を呼んでいた千歌に怒鳴られてしまった。

年に一度の夏祭りだから、千歌も千歌で夏祭りを楽しみたい気持ちが強いのだろう。

だから俺は千歌の機嫌を損ねないようにしつかりと謝った。

沼津駅で定刻通りにみんなと合流し、何気に9人全員が浴衣姿なのには正直驚いている。いや、女子全員が浴衣を着るのは必然的なかもしれないが、目のやりどころに少し迷う。

でも、浴衣を着ているみんなの姿はとても可愛く見える。それに合わせて変えている、みんなの髪型も含めてね。

「それにしても、みんなの浴衣姿には髪型も含めて凄く似合ってる。なんつうか、みんな綺麗だよ」

「「「「「ええ!」「」」」」」

「もう遼つたら、私たちの浴衣姿を見てメロメロになっちゃってるの? 遼はとんだ変態さんね♪」

「うるせ〜鞠莉!俺は変態じゃねえ〜!」

本当、〃鞠莉〃には世話が焼ける。こう言うのもなんだが、世話の焼け具合は千歌以上だ。ただ、千歌以上に頭がいいからまだマシか。

というか、お分かりに頂けただろうか?



俺は今、「鞠莉」と呼んでいる。さつきから鞠莉とそう呼んでいるのは、彼女からそう呼んで欲しいとお願いされたからだ。

〇〇姉と言われると、なんか年上扱いされている感じがして嫌だと彼女が駄々をこねるので、彼女を仕方なくそう呼ぶことに決めたのだ。

「もう〜！ 遼は素直じゃないんだから！」

「だからっ！ 俺はそうじゃないって！」

「ル、ルビイが……綺麗……？」

「ルビイちゃん!? し、しつかりするぞら！」

「ルビイ〜!!!」

そんてまあ、俺が言い放った言葉のせいでルビイちゃんが顔を赤くして倒れ、花丸ちゃんとダイヤの2人が介抱をする。けれどもルビイちゃんは、何とかある意味嬉しそうな表情をしていた。

満足気に、優しい笑顔を浮かべて……。

「えへへ……ルビイ、綺麗……」

「なんか、満更でもなさそうな顔ね」

「うん。そうずらね……」

「えへ、えへへ〜♪」

とりあえず、俺はこれ以上みんなには言わないでおくことにした。ルビイちゃんのように、嬉しくて倒れる人を増やさないためにね。

「じゃあみんな！夜のライブの時間まで、みんなで夏祭りをたくさん楽しもう！」  
「イエス！屋台の食べ物を食べまくるわよ〜！」

「こら鞠莉っ！食べるのはいいけど、食べ過ぎたら太っちゃうんだからね！」

「果南、それはちゃんと分かっている♪」

こうして俺たちは、朝からももの凄い盛り上がりを見せている夏祭りのところへと足を運んでいった。

屋台が立ち並んでいるところは、沼津駅から少しばかり離れた香陵広場。お祭りだけあって、屋台がずらりと立ち並んでいるところには多くの人だかりが出来ていて、特に大人気のたこ焼きや焼きそばの屋台には、多くの人が大行列を成していた。

だが色々食べる気満々の鞠莉と千歌は、大行列などお構いなしに列に並びやがる。炎天下の空の下で長時間待つことを、彼女たちは大変だとは思っていないのだ。

なんてったって、「夏祭り」だからな。

「みんな、焼きそば食べる？」

「はーい！ヨハネも焼きそば食べる！」

「マルも焼きそば食べるぞら！」

「曜は食べる？」

「うん。私も焼きそば頂こうかな？」

「りよーかい！」

千歌と鞠莉はみんなに焼きそばを食べるかどうかを尋ね、結果的に焼きそばを5つ買うことに。

まだ朝の9時を過ぎたころなのだが、こいつらの食欲の欲求は意外にも高い。俺はもちろん朝の食事は取ったのだが、こいつらが美味そうに食べているのを見ると食べたくなる衝動に駆られる。

だがまあ、我慢するんだけどね。

「んん〜！やっぱり焼きそば美味しいね！」

「焼きそばはいつ食べても絶品ずら〜！」

頬つぺたを落とすくらいに、満足気に焼きそばを食べている千歌と花丸ちゃん。そしてその裏では、ダイヤが未だにニヤけているルビイちゃんをベンチに座って介抱していた。

まだルビイちゃんの頭には、どうやら俺の言葉がグルグルと駆け回っているようだった。

「ルビイちゃん、まだ笑ってるね」

「そんな事を言っていられる場合ですか？遼さん、ルビイがこうなってしまったのは紛れもなくあなたのせいなんですから、少し反省してください！」

「……ああ。悪かったよダイヤ」

正直あのときに言った言葉は、別に何気ない言葉だったんだけどな。まさかルビイちゃんが倒れて、こんな状況になるとは思わなかった。次はこうならないよう少し控え

なければならぬな。

……つてか、俺が悪いのか？

「よしっ！次はたこ焼きを食べるよ！」

「はあ!?!お前まだ食うのかよ？」

「もつちろん！ライブの時間までに全部回るつもりなんだから！」

「おいおい、正気かよ……」

それで千歌は千歌で、またとんでもない事を言い出しやがる。この屋台と人の数だ。ライブの時間までに全部の屋台を回れるとは思えない。そう思えるのは絶対千歌だけだろう。

「よしっ！次はたこ焼きだあ〜！」

「たこ焼きずらく〜！」

「はあ……」

そうやって意気揚々と次の屋台へと突き進む千歌の背中を見て、俺は深い溜息をつ

く。花丸ちゃんもなんかノリノリの様子であったが、花丸ちゃんならきつと大丈夫……  
なはず、だよな？

「まったく、相変わらずね……」

「そういえば、果南さんと曜さんは？」

「2人は別の屋台に行ったそうだ。だけど、どんな屋台に行ったのかは俺も知らない」

曜と果南の2人はたった今別行動中で、俺たちとは別の屋台を回っている。

どういふわけかも知らないけれど、どこの屋台に行くかも説明せずに姿を消してしまつたのだ。連絡はすぐに取り取れない。この人混みようで、2人を探すにはとても骨が折れるからな。

「でも2人なら大丈夫だろう」

「そうですね。千歌さんや鞠莉さんと違って、2人はしっかりとしていますから」

少し千歌と鞠莉のことをdisるようにダイヤはそう話す。ダイヤの言うことは正論だから、あの2人は何も言えないだろう。ダイヤの前に限らずね。

「うゆ……んんつ……」

「……つ。ルビイ！」

すると、さつきまでダイヤの膝の上で倒れていたルビイちゃんが、やっとの思いで目を覚ました。

俺のあの言葉でずっと笑っていた彼女は、まるで眠っていたように重い瞼を擦り、ゆつくりとダイヤの膝の上から起き上がった。

「うゆ、あれ？お姉ちゃん？」

「やっと気が付いたのですね。良かった」

ホツと胸を撫で下ろすダイヤ。

俺もルビイちゃんの様子を覗き込むように伺う。俺やダイヤをじつと、ボーッと見つめてくるルビイちゃんだけれど、特に問題があるような様子は何も見受けられなかった。だから、俺もルビイちゃんの表情を見て少しホツと安心した。

「ルビイちゃん、大丈夫？」

「遼さん、ごめんなさい。ルビイ、遼さんに迷惑をかけちゃいましたよね？」

「ううん。迷惑なんて思っただけよ。むしろルビイちゃんが無事で元気になってくれて良かった」

「……………っ！」

自分が倒れてしまったことで、俺に迷惑をかけてしまったんじゃないかと、ルビイちゃんは深々と頭を下げて謝る。

ただそれは、俺がみんなに対して『可愛い！』と言ったことが原因なだけで、それでルビイちゃんが責任を感じることはない。俺はルビイちゃんを笑顔にするため、優しく笑いながら言葉を投げかける。

だがそれが、またルビイちゃんが大変な事になる原因になってしまう。

それを見た俺は、もの凄いデジャヴを感じた。

ルビイちゃんは再び顔を真っ赤にすると、湯気を立ち上らせながら、またダイヤの膝の上へとボタンと倒れてしまったのだ。

「うゆ……………」



「……………っ!？」

目の前で妹がまた倒れる瞬間を目の当たりにしたダイヤは、突然の出来事に慌てふためく。

俺は挙動不審になるダイヤを落ち着かせたかったけれど、彼女はこの状況をなんとかしようと躍起になり、興奮気味になっていた。

「ル、ルビィ! しつかりしなさい! ルビィ!」

「落ち着けダイヤ!」

「落ち着いてなんかいられませんわ!」

多分ダイヤは、この夏によく起きる“熱中症”なんじゃないかと思っただろう。ただ今いる場所は運良く日陰のベンチだ。それでも、熱中症になる可能性は低いはずなんだ。

そんでもって、ルビィちゃんが倒れた原因は少なからず俺にあると思うんだ。うん、確実に……………。

「遼さん！」

「な、なんだ!？」

「早く! 早く水を買ってきてください!」

「えっ!?! 水だつて!?!」

「ルビイの命が危ないのです! ですから、早くルビイのために水を買ってきてください!」

ああ。これはマジなやつだ。

これは俺、今ダイヤに話したら殺されるかもしれないから今は言わないでそうしておくか。ダイヤにはもの凄く申し訳ないのだけど……。

「あ、ああ! 今すぐ買ってきてくる!」

「至急にお願ひしますわよつ!」

そうして俺は、近くにある自動販売機へと走っていき、ルビイちゃんのためにペットボトルのお水を2つほど買うことになったのだ。

とりあえず後でだが、ダイヤからカミナリを落とされる覚悟で謝ることにしよう。

……どうしてダイヤだけに謝るんだと思う？

慌てまくるダイヤ、倒れたルビィ、そしてたこ焼きを食べに行つた千歌と花丸ちゃん以外で、同じ状況を見ていた人物がその場に3人いるからだ。

梨子、善子、鞠莉

この3人は、水を買いに行く時にダイヤの近くに行かなかつたのだ。その何もしない行動が、さっきの状況を把握している何よりも証拠だった。

その3人には少し安心してゐる。何せあの3人まで誤解されたら、合計4人から大きなカミナリを落とされることにならない。

「本当……運がいい……」

自動販売機でペットボトルを買いながら、他愛もなく、変なことをボソツと呟いた俺だった。

## #53 迷いの末の『決定事項』

「えっ？ 曜、遼に告白するの？」

「うん。本当は鞠莉ちゃんと2人だけの秘密にしたかったんだけど、果南ちゃんには、この事を伝えておこうかなって思ってた……」

「……………ふうくん」

夏祭りの真つ只中で、私と果南ちゃんはみんなと別れ、2人で今ヨーヨーすくいをしている。

遼くんから一旦離れた訳は、ずっと彼にドキドキしてたからで、それを落ち着かせたかったからだ。果南ちゃんが一緒なのは、この水風船のヨーヨーの屋台に行く私を見て着いてきただけ。

私は夏祭り、毎年ヨーヨーすくいをして水風船ヨーヨーを釣るのが恒例で、今年も

水色の水風船を軽快に釣り上げる。

「やった！今年も水色！」

「よっ！よし、私も釣ったよ！」

「やったね果南ちゃん！」

果南ちゃんも緑色のヨーヨーを釣り上げ、ご満悦な表情を見せているのだけでも、すぐに私の方に顔を向けては真剣な表情に移り変わる。

その表情を見て、私は果南ちゃんに何かしら言われるんじゃないかって思っていたけど、果南ちゃんから放たれた言葉は、とても真面目なことだった。

「……でも曜、本気？告白するだけでも、とてつもなく覚悟が必要なんだよ？」

「分かっている。鞠莉ちゃんから全部教わったんだ。好きな人に“告白”するということ  
は、好きな人から断られることも受け止めないといけないんだって。恋愛経験がある鞠  
莉ちゃんから聞いた」

「……………」

どうして果南ちゃんだけにこの事を話すのかなんて、理由はこの一言に尽きる。

“幼馴染み”だから。

そしたら千歌ちゃんにも話すべきだって感じると思うけれど、私の中では、千歌ちゃんにはこの事を話したくはないんだ。

それにもし千歌ちゃんが遼くんのことを好きで、それで私が思わず千歌ちゃんに話してしまつたら、千歌ちゃんは間違いなく嫌な気分になると思う。

私と遼くんは恋人同士になれば、千歌ちゃんだけが仲間はずれのように“友達止まり”になつて、千歌ちゃんに気を遣わせてしまうからだ。

私に気を遣つてくる千歌ちゃんを、私は見たくないからだ。

だから私は思つた。例えば私と遼くんが恋人同士になつたとしても、千歌ちゃんにはそれを知つて欲しくない、ずっと友達同士でいたいって。

それが、私だけの自己満足だとしても……。

「あまりこういう事を聞くのもアレだけど、遼に告白して失敗したら、どうする？」

「……果南ちゃん、今から幼馴染みに告白しようって人に質問すること？……あんな

「……そう」

果南ちゃんの問いかけはある意味意地悪だ。人が告白しようって時なのに、失敗したらどうするとかそんな事を尋ねてくるなんてさ。

本当に持てなくなっちゃう。

遼くんに告白する『勇氣』がさ。

「まあ曜、告白することであまり気負い過ぎてたら出来なくなっちゃうから、緊張せずに頑張つてよ。私も鞠莉も、応援してるからさ！」

「うん。ありがとう果南ちゃん」

でも何か応援してくれる果南ちゃんは、やっぱり私にとつては優しいお姉さんで、すごく頼れる人。告白を応援していると聞いた時は、不思議と自然に勇氣が湧いた。

「じゃあみんなのところに戻ろう！」

「そうだね。行こうか！」

そして私の恋愛をずっと応援してくれていた鞠莉ちゃんのためにも、遼くんへの告白は、絶対に成功させたいと思った。

遼くんに対して持っている『好き』という気持ちを、全部彼にぶつきたいと思った。そういう気持ちを持って、私は果南ちゃんと一緒に人混みの間を縫うようにして遼くんたちがいるところへと戻る。

すると、ベンチでたこ焼きを美味しそうに食べている千歌ちゃんと花丸ちゃんがいる。そこから少し離れたところには、3人で楽しそうに話をしている梨子ちゃんと鞠莉ちゃんと善子ちゃんの姿がある。そして千歌ちゃんと花丸ちゃんが座っているベンチの隣のベンチでは、未だに倒れているルビィちゃんを介抱している、遼くとダイヤさんの2人の姿があった。

「ダイヤさん、ルビィちゃんは？」

「ルビィは大丈夫ですわ。2人がいない間に一度目を覚まされたのですが、またこの状況ですわ」

「う……………うゆ……………」



ルビイちゃん、一度目を覚ましたんだ。でも今もこの状況ってことは、また遼くんが何かしらルビイちゃんに言ったのかな？

でも遼くんの表情はどこか落ち着いていて、全く焦っている様子さえなかった。

私はルビイちゃんがいるベンチのところまで歩み寄り、ひとまずダイヤさんにことを尋ねる。

「何かあつたんですか？」

「ええ、ありましたわ。彼から聞けば、全ての全貌が明らかになりますわ」

「……………ああ」

そしたらダイヤさんは呆れた表情でそう言うもんだから、やっぱり遼くんが悪かったんだって改めて理解することが出来て、私は彼に視線を送る。

ていうかどうして自分のせいだと分かっている、遼くんはそんな表情でいられるのだろうか？自分の罪を認めているのかな？

「そっだよ曜。俺が悪いんだ」

「あはは。きつぱりとした潔さだね」

「俺がした事はちゃんと認めるさ」

きつぱりと、彼は自分のしたことを認めていた。キツと澄んだ目を、じつと私に向けていた。

ドキツ

「……………」

その時、私は彼のその目に心が高鳴る。吸い込まれるようにその眼差しから離せなくなって、遼くんに対して抱いてる気持ちを変更して再確認出来た。

けれど、心の動悸が早くなって収まらない。

「んっ？どした？」

「う、ううんっ！何でもないっ！」

「変な曜……………」

うう、またドキドキし始めてきちゃった。

果南ちゃんと一緒にだったときは全然こんなことはなかったのに、遼くんを前にすると胸のドキドキが止まらない。やばい……どうしよう。

そんなときに、ダイヤさんの膝で目を閉じていたルビイちゃんが、ゆつくりとふと目を覚ます。

「んっ……あれ？お姉ちゃん？」

「ルビイ！はあ……良かったですわ」

重い瞼を擦りながら起き上がるルビイちゃんを、ダイヤさんはホッと安心し、安堵していた。

それはルビイちゃんに何かしらを言い放った彼も一緒だった。私から見た彼の横顔は、口角を上げて優しく微笑んで笑っていた。

「ルビイちゃん、もう大丈夫？」

「はい。また迷惑をかけちゃってごめんなさい」

「いいよ。俺は大丈夫だから」

ルビイちゃんの謝りにも、笑って対応する彼。

僅かな木の枝から差す太陽の光に当たれば、彼の表情はより一層に明るくなって、私の胸はキュンと不思議な気持ちになった。

これが私が抱く、遼くんへの恋……

やっぱり私、彼に恋してるんだ。

心の底、本心からそう思うようになったその頃、たこ焼きを食べ終えた千歌ちゃんが、夏祭りの賑やかさに飛び込ませるように促す。

夏祭りを心から楽しんでいる彼女の声は、みんなを屋台の並ぶ楽園へと駆り立てた。

「よくしつ！ルビイちゃんが目覚めたことだから、またみんなで屋台に繰り出そう〜！」  
「ずら〜!!!」

「あ、あははは……」

遼くんから話を聞いたら、千歌ちゃんはライブの時間までに屋台を全部回るつもりら

しい。

千歌ちゃんが考えそうで、本当にやりそうな行動ではある。でも、こうしてみんなと楽しく夏祭りを過ごせる時間はそんなにない。

何故なら、ライブの準備があるから。

「それじゃ、レッツゴー♪」

「あつ、鞠莉さん！」

「今のこの時間を、目一杯楽しみましょう！」

「クツクツクツ！承知！」

でもみんなは夏祭りの事を考えていて、どうやら今はライブのことを考えててもしよ  
うがないように思えた。

みんながそれぞれ屋台に向かっていき、楽しそうに話しているみんなの後ろ姿を見て  
いたときに、私の肩をポンと軽く叩いた彼は、私の前を歩くようにして私に言ってきた。

ポンッ

「へっ?」

「なにブーツとしてんだよ?置いてくぞ?」

「あつ、うん!」

その場で立ち尽くしていた私を見かねた彼は、私に対して微笑みかけながらそう言つて、みんなの後をゆつくりと追いかけていった。

「……………」

みんな、誰も遼くんのことを見ていない。

もしかしたら、今なら出来るかも。

鞠莉ちゃんから教えてくれた、さりげない行動で男の子を絶対に墮とす方法『その1』を試す時かもしれない。

そう感じたとき、私は、即行動に移した。

ギユッ!

「えっ?」

「ごめん! 少しだけ……このままで……」

今の私の表情、彼には見られなくない。私が自分から彼と手を繋ぐなんて事、恥ずかしくて遼くんにさえ顔向けできない。でも遼くんは、それを察してくれた。

「……………分かった」

「……………っ!」

遼くんはそれ以上何も言わず、私の右手と繋いでいる左手を、ギュツと優しく包み込んでくれた。

その暖かさが、彼の暖かさでもあった。

「……………ありがとう」

「礼なんざいらねえよ……」

「えへへ。嬉しい」

その後、しばらくの間だけど、彼は嫌がる様子もなく私と手を繋いでいてくれた。  
突然にこんな風に手を繋がれて、本当は遼くん嫌なんじゃないかと思うのだけど、  
やっぱり遼くんは優しいな……。

こんなの、"好き"にならずにいられないよ。

~~~~~※※※~~~~~


「んんん！りんご飴美味しい〜！」

「やっぱり飴さんはりんご飴ずらく〜♪」

「そうだね！花丸ちゃん！」

あれからルビイちゃんは、いつも通りにすっかり元気になった。

千歌と花丸ちゃんと、一緒に3人で仲良くリングオ飴を舐めている風景は、正しく祭りを楽しんでいる子供のようだった。

まあ、これは本人たちには内緒だ。

千歌が特にそれを気にするタイプだからな。子供扱いされるのが嫌なんだ、千歌は。

「ルビイが元気になって良かったですわ」

「うふつ。良かったねダイヤ」

「ルビイちゃんが元気になると、ダイヤまで元気になる。やっぱりダイヤは妹思いだね！」

「なっ!?!私は別に……!」

「もう、照れ屋さんなんだから！」

「鞠く莉くさく〜ん！」

そこでダイヤたち3年の3人は、特にダイヤが果南と鞠莉の2人に弄られている始末。

ルビイちゃんが元気になって嬉しそうにしていると、2人にかかわれるように弄られているのである。

でもそれが、俺がずっと見てきたいつもの光景。

鞠莉がダイヤを弄り倒して、時と場合でどちらかの味方につく仲介役の果南。この3人のやり取りをまた日常の一部として見られることが、俺にとって何よりも嬉しく感じた。

ただ俺の隣にいるそいつは、俺が感じている気持ちなんていざ知らず、俺が浮かべている笑みの表情を、ある意味変に捉えられてしまった。

「遼くん……?なんで果南ちゃんたちを見て笑っているの?変な目で3人を見てたら、果南ちゃんたちに言いつけちゃうから!」

「はあ?!いい、いや!俺は果南たちをそんな風に見てねえから!変な思い違いはやめてくれ!」

それを俺はすぐさま弁解して、何とか曜にはそういうことで理解してはくれた。

「なんだ。それなら良かった！」

「“良かった”って。なに言ってるんだよお前」

「あつ！う、ううん！何でもないよ」

「……………」

とはったものの、今日の曜はやっぱり何か変だ。

朝での平素ではない素ぶりもそうだけれど、今もこうして手を繋いでいるこの状況も何かと変に俺は思えてくる。

もうかれこれずっとこうだ。みんなと一緒に屋台を回ってる時も、みんなと一緒にお昼を食べている時もだ。曜にお昼を『あーん』させて食べさせるといふ、俺にとつて羞恥極まりないことだとして、曜の右手をずっと握っていたせいも、左手の握力が子供並みに弱くなってしまった。

本当、こいつは一体なにを考えているのか……。

「あつ！ねえ遼くん！」

「んんっ？今度はなんだ？」

「あれ！あれやってよ！」

「ああ。射的かあ……」

そしたら考えていたその矢先に、彼女から射的をしてほしいとの要望が出た。曜が一点張りになって当てて欲しい景品は、あの『ミ〇キーはママの味』で知られるアレだった。

それなりに小さい小箱のような大きさだから、当てられるかどうか難しいかもしれない。

だが安心しろ。

俺は射的が、大の得意なんだ。

パンツ！

「ほれ。ご要望の品だ」

曜からお願いされた小さい景品なら、簡単にそれを当てられるくらい得意である。悪

いけれど、これは俺の自慢だ。

それで俺は当てた景品をやると、曜は繋いでいた右手を離して両手で受け取って、同時に俺の左手もやつとの思いで解放された。

「わあ〜い！ありがとうございます！」

「うお……と」

あかん。久しぶりに左手がフリーになったから、左手だけ異様に変な感覚がする。

麻痺を起こしているような感じでは全くないのだけれど、とりあえずようやく曜と手を繋いでいる事から解放されて良かったと思っっている。

「ふう……」

安堵のため息をつく俺。

が、その束の間の瞬間だった。

「ねえ遼くん！」

「のわっ!？」

俺は曜にTシャツの袖をぐいと引つ張られて、危うく背中から地面へ倒れそうになる。

「……………っ!」

けれど日々の部活の練習の賜物なのかな? 体幹を鍛えていたおかげで何とか倒れるという最悪な事態にはならなかった。

といつても、曜には怒ったけどね。

今までのことを、全部ひっくるめてな。

「曜! お前いい加減にしろよ!」

「えっ!?! ふ、服引つ張っただけだよ!?!」

「そうじゃない! 今まで我慢してきたけどさ、俺は朝からの曜の言動に怒ってんだよ!」

「……………っ!」

あまり曜に対して今までの言動のことで怒る気にはなれなくて、本当は言うべきかどうか迷っていたけれど、正直少しばかり我慢ならない。

言いたいことを、俺は全部言った。

「今日のお前は何か変だぞ？朝から俺に対して何か言おうとしてみたり、俺のすぐ近くでそわそわしてみたり、いきなり俺の左手を握ってきたり！お前は一体、何がしたいんだよっ！」

「うっ……」

俺の怒涛の怒鳴り声に、後退りして怖気づく曜。

幸い、あいつらとはまた別行動で2人つきりなのだけでも、夏祭りを楽しむその他の人たちからの視線がアレで、今すぐここから離れたい。

「……何あれ、喧嘩？」

「あー。あれは多分別れるやつだ……」

離れてヒソヒソ話してても聞こえてるぞ？

でもまあ、夏祭りで男女2人つきりなら有り得ることなのかな？俺も時々たまに目の当たりにする。恋人が夏祭りで喧嘩している光景をね。

ただそれを別に恋人でもない、ただの幼馴染みの曜と恋人扱いされ、更には今の様子を見られて喧嘩していると誤解されてしまうなんてな。何というかもう、俺は早くここから逃げだしたい気分だ。

「……………」

何も言わず、下に俯く曜。

言いたいこと全部言えたから、個人的にはとてもふつきれた。けれど、言い方のところで少しきつくしてしまったかもしれない。

少しばかり、言いすぎたか？

そう思っていた刹那、曜は動き出した。

ギョッ！

「……………へっ？またかよ」

「遼くん、ちょっと場所変えよ?」

また唐突に俺の手を握ってきたから、多分人気のないところへ連れて行くつもりだ。でも俺は無言で抵抗するように、彼女が行こうとしている方向の反対へグイッと腕を引つ張る。それで曜の動きは止まるけれど、顔をこつちに向けようとはしなかった。

彼女を止めた理由は簡単。

まだ曜は、俺の質問に答えていないからだ。

「待て。先に俺の質問に答えろ」

「……………」

そう言って、俺はやや強引に曜に尋ねるけれども彼女は口を開こうともしない。黙秘し、黙って逃れようとしていた。

が、その思い込みはすぐに砕かれた。

「……………遼くんの質問には、ちゃんと答えるつもり。でも、ここで答えるのは私が嫌だか

ら、出来れば、人気のないところに行こう？」

「……………」

曜は目だけをこつちに向け、顔全体を見せることなく俺に対してそんな意見を提示してくる。

俺のあの質問に、何をどう思って人気のない場所に行こうと考えたのかは俺も知らん。ただこうして周りには多くの人に目を向けられているのだから、逃げるように場所を変えるのも必然か。

ある意味好都合。この際、曜の思惑に付き合っただけやるのも、たまにはいいかもしれない。

「分かった。この際は、お前の言い分に付き合っただけやる。でも、人気のない場所に移動したら、ちゃんと答えてくれよな？」

「……………うん、ちゃんと全部話すよ」

暫しの無言の後、彼女は迷いなく口にした。

今日の今まで、霧のようにこの胸を覆い尽くしているモヤモヤが、ようやく彼女の口

から聞けて晴れやかになるのだから。

それだけで俺は満足だった。

「じゃあ、行く？」

「……………おう」

こうして俺と曜は、賑やかな夏祭りの表舞台から降りるように、たち並ぶ屋台の会場をあとにした。彼女の口から、どんなことを話してくれるのか興味が湧いて仕方がないが、今は俺から何にも声をかけないようにして、こいつ自身から直接話してくれることを願おう。

そして、人気のない、あまり人がやってこないであろう場所へと移動するとき、俺はふと曜の横顔を目にする。

「……………っ！」

「……………」

顔全体を見ることが出来たら、彼女がこの今どう思っているのか理解することが出来

ただのだけれど、でも何となく理解出来た。

何となくで、本心はどうなのか分からない。

けど、自信を持つて考えられることがある。

今のあいつは、*“本気”*だ。

迷いという淀みのない、決心をした目だった。

「
…
…
曜、
ちゃん？
遼くん？
??
」

#54 行方

聳え立つ木々の隙間から、西日の日差しが私と彼を照らしだす。
私は今、大きな山場を迎えていた。

「ここら辺で大丈夫だろう」

「……うん」

うわああああああん！

もう心臓がはち切れちやいそうだよ！

遼くんと人気が全くない場所に移動して話すことにしたけれど、いざ移動して遼くん
にちやんと話すってなった時、また凄くドキドキしてきちゃった。

誰もいない、私と遼くんだけしかないこの場の雰囲気は、静かで、さつきまで賑わ

いを見せていた夏祭りの雰囲気とは全くの別物だった。

とてつもなく、異様。

「じゃあ、ちゃんと話してもらおうか」

「うん。分かった」

そうしている内に、ちょうど誰も来ないであろう場所まで歩いてきた。

私はあえて大きな樹木を背にして彼の前に立ち、自分がこの今の状況から逃げないようにした。そうすれば、ちゃんと目の前にいる遼くんに自分の本当の気持ちを伝えられると思ったから。

そうして私は、彼の言葉に対して頷き、ちゃんと話すって意思を伝えた。いや、伝えてしまった。

もう『分かった』と言っちゃったから、私はもうこの場から逃げることは出来ない。僅かに触れてる浴衣の袖を握り、私は真っ直ぐ彼を見据えた。

「じゃあ……話すね」

「おう」

うん。これでいいんだ！

ちゃんと伝えるんだ！私の気持ちを！

鞠莉ちゃんや果南ちゃんがせっかく私を応援してくれているんだ。こんな絶好の大チャンスを与えられて、逃さない私じゃない。

「まずは、遼くんの質問に答えなきゃだね」

「ああ。早くお前の答えが聞きたくてさ、こっちは体がうずうずしてて仕方がないんだ」
「はいはい。分かった分かった」

彼はもう答えが聞きたくて仕方がない様子。

だから順を追うようにして、私が今まで彼にしてきた行動の意味を一つずつ教えていくことにした。

ある意味、自分から公開処刑していく感じ。

「じゃあ一つ目。朝私がソワソワしてた件だけど、あの時に私が遼くんに言いたかったのは、夏祭りを2人で回りたいって言いたかったんだ。つまりは、遼くんと『デート』」

をしたかったんだ……」

「はっ？デート？」

「うん……そう……」

うう……やばい。

まだ1つ目しか話してもないのに、顔がだんだん真つ赤になっていくのを感じる。告白を含めてまだあと2つも話すことがあるのに、我慢できないよ。

平常心を保ちつつも、心の中では色々と破茶滅茶なことを考えていた。

「みんなと一緒に楽しむことを知っていて？」

「うん。知ってて遼くんに話した」

「……どうして？」

「だって、遼くんと回りたかったんだもん」

「……納得できないな」

だよね。こんな抽象的な理由じゃ納得してくれないよね。

本当は、もう遼くんに告白をしたくて堪らない。けど手を繋いだ理由もきちんと話し

てから言った方が良いと思つて、それが理由の全貌だからきつと遼くんも理解してくれると思つてる。

告白をして、そういう理由があつたからそういう行動をしたつて言つたら、遼くん怒るかな？

すると、彼は思いがけない言葉を発する。

「じゃあ別のことを聞こう。俺とずつと手を繋いでいたのはお前も覚えてるはずだ」

「そうだね。かれこれ6時間くらいは遼くんと手を繋いでいたよね。なんか、ごめんね？突然手を強く握つちやつて……」

「もういいよ。別に気にしてないから」

彼からもう一つ話そうと思つていたことを話してくれて、逆に良い意味で私は助かった。

ただ、お昼の時からずつと手を繋いでいてくれた彼にとつては嫌だつたと思う。お昼を食べさせ合つたことを思えば、遼くんには凄く恥ずかしい思いをさせてしまつたと思つてる。

彼に内心で心から深く謝りながら、私は遼くんに対して手を繋いだ理由を口にした。

「遼くんと手を繋いだ理由はね、今日は年に一度の夏祭りだからさ、遼くんと恋人みたいになって、手を繋ぎたいなあって思ったの」

「……………」

これは全く以って私の本心だよ。

だって、大好きな人と夏祭りだもん。こんな時に手を繋がないわけにいかないし、何より鞠莉ちゃんからのアドバイスのおかげなの。

『まずは必ず、遼と手を繋ぎなさい』

『えっ？手を……繋ぐ？』

『Yes！恋愛では一般常識です！それに、恋人同士でよくすることだから、曜も彼と恋人同士になった気分で手を繋いでみなさい。きつと、キyunキyunするはずよ！』

恋愛経験もなく、恋愛に疎かった私を一生懸命に指導してくれた鞠莉ちゃんには感謝しかない。私が鞠莉ちゃんに色々と教わらなかつたら、きつと私は遼くんに告白することすらなかつたかもしれない。

あとは、自分を信じられなかったかも。
私が遼くんにも、*「恋」*をしていたこと自体がね。

「……なるほどな。分かった。お前がどうして手を繋いできたのかの理由は、何となく
だけど理解することは出来たよ」

「本当!?良かった〜!」

ホッ、良かった。

最初の間は一体何だったのかよく分からなかったけど、それでも彼は私の言葉に首を
縦に振って、私が話した理由について理解してくれていた。

その様子にホッと一息、私は安堵する。

そして私の言動において、付属された全ての理由を明かした私は、今から遼くんにも告
白すると思った瞬間、体が小刻みに震えだした。

プルプル……プルプル……

あ……あれ?なんで私、震えてるの?

最初の一時的な感覚は全くのそれ。自分の身体に一体何が起こっているのかって不安で、恐怖の感覚さえもその時は芽生えていた。

けれども私は、その後でようやく気づいた。

私が彼に対して告白する『緊張』といったほうがいいかもしれない。鞠莉ちゃんから強く教えられた『断られる』ことを受け入れられるか。

それを一番に考えていたから、自分の身体が緊張を感じ、震えていたんだと私は思った。

そうやって自分自身に起きていることを深く分析している時に、閉じていた遼くんの口は開く。

「ただ曜。一つだけ、質問いいか？」

「んっ？なあくに？」

腕を組み、神妙な表情で私を真っ直ぐに見つめてくる彼に、不意にまたドキドキしてしまう。けど、今に抱えているそのドキドキは、彼の言葉で一瞬にして消え去ってしまった。

心臓の胸の高鳴りは、度肝を抜かれた『ドキッ』という鼓動音になったのだ。

「お前、俺に何か隠してゐるだろ？」

「……………っ??
!!??」

本当にドキッとした。

遼くんに私が告白するということを知らないはずなのにつて。なのに私はバレてしまったことを前提にして、慌てて口の呂律が回らなかつた。

「な、ななな、何言つてるの遼くん!?!私が遼くんに隠しごとなんであるはずないじゃん
!」

「その慌てぶりよう、
“ある”んだな?」

「うぐっ……………!」

私は本当に馬鹿だ。バカ曜だ。

「いや、だから私は……!」

「隠すな! お前が隠し事をしているときは、大体が慌ててる。俺は分かってるんだぞ?」
「うっ……」

わざわざ隠しごとをばらしちゃったとか、絶対にやっちゃいけないことを私はやってしまった。

ていうか、私の隠しごとのくせを知ってたなら、最初から隠し事なんてしなければ良かったと、私はそれに深く後悔した。

そしてもう、後戻りは出来なくなった。

「話してもらおうか? お前が本当に言いたいこと」

「……………」

もうちゃんとね、彼に話さなきゃいけないときが来ちゃったみたい。あまりこんな展

開、私は望んでいなかったのになあ……。

でも言えるんだ。誰にも邪魔されずに、遼くんに対する想いを直接ぶつけられる。それだけで私は、気持ちをすぐに切り替えられた。

「分かった。ちゃんと話すから、聞いて？」

「……そうか」

遼くんに気持ちを伝える。

今さら緊張なんてしていられない。

気持ちを強く持って、彼の前で一つ大きく深呼吸した私は、もう一度彼をきちんと真っ直ぐ見つめ、私の全部を、遼くんに向かって大きく叫んだ。

羞恥を押し殺しつつ、純粋に、真っ直ぐに。

「私ね、ずっと……ずっと遼くんのが……！」

その時だった。

「あつ！やつと見つけました！」

「……………っ!？」

私の正面、遼くんの背後から、私たちを見つけて嬉しそうな声が聞こえてくる。

私は遼くんの背後を覗き込むように、彼は後ろを振り返って、西日がちょうど当たっている木に視線を向ける。すると、その樹木の陰からこっそりと頭だけ現したのは、とても意外な人物だった。

どうして、私と遼くんの居場所が分かったのか？普通に聞き出して知りたいくらいに……。

「遼さん！曜さん！やつと見つけられた」

「ル…………ルビイちゃん!？」

木の陰から現れたのは、ルビイちゃんだった。

呼吸のリズムが上がっていて、必死に呼吸を整えているから、きつとルビイちゃんはここまで走って来たんだと思う。

けども、本当にどうして私と遼くんがここにいるってことが分かったんだろう。私は、それがとても気になって仕方がなかった。が、遼ちゃんとルビイちゃんでは話は進められる。

「ルビイちゃん、どうしたんだ？」

「あの……そろそろ準備の時間だったので、2人を呼びに行こうと思って……」
「あつ、もうそんな時間なのか」

どうやらルビイちゃんは、ライブの準備のために私たちを呼びに来たらしい。それを見た遼くんは驚き、左腕に輝く白銀の腕時計に目を向ける。

そして遼くんが見た時計の時刻は、そろそろ5時を迎えるところを針は差していた。

「やべっ！本当にもうそんな時間じゃん！」

「ええ〜!? あつ、本当だ〜!」

私も彼の腕時計を懸命に見やると、本当に時計の針はそれを差していて、私もみんなに迷惑をかけるわけにはいかなかった。

その時に告白も、一度やめることにした。

こんな大事なときに告白なんてするべきじゃないって、すぐに感じた私は2人に言った。

「じゃあ急ごう、2人とも! 千歌ちゃんたちを待たせるわけにはいかないよ!」

「そうだな! 行こうルビィちゃん!」

「は……………はいっ!」

告白はライブが終わったらまたしよう。
今度こそ、遼くんに気持ちを伝えよう。

「……………」

ということ、私たちは急いで千歌ちゃんたちのところを戻ることにした。

ルビィちゃんが見れ、告白出来なくなっちゃったのは想定外で残念だったけれど、ラ
イブの後に呼び出して、次こそちゃんと伝えよう。

このまま終わるなんて、絶対できないから。

「これで……いいんですよね？」

~~~~~※※※~~~~~

「はい！事前練習終わり！」

「では、本番前までしっかり休みましょう！」

「「「「はい！」」」」」

本番まで、残り20分弱くらい。

それまでの2時間のほとんどは、ライブの練習に費やしていたところだった。

「はい千歌ちゃん！お水！」

「ありがとう！曜ちゃん！」

「はい！梨子ちゃんも！」

「うん！ありがとう曜ちゃん！」

「えへへっ！どういたしまして！」

給水の為、水の入ったペットボトルを千歌ちゃんと梨子ちゃんに配ると、それを快く受け取る2人。水を一気にがぶ飲みする千歌ちゃんの姿は、なんとなく少し子供っぽく見えた。

千歌ちゃんには、まあ内緒だけど……。

他のみんなもお水を飲んで、練習で疲れてはいるけれど、笑顔は絶えず雰囲気はとても良い。

この良い雰囲気でライブに臨めれば、きっとライブは成功すると思う。そして何より多くの人が見てくれて、私たちのことを知って、覚えてもらえる人たちも増えると思う。

だからこそ、尚更失敗なんてできない。

これには果南ちゃん、鞠莉ちゃん、ダイヤさんの3人の再スタートの意味でもあるからね。

「お〜い！みんな〜！」

「あつ！遼くん！」

そんな私たち最後の休憩の最中、賑やかな控え室に意気揚々と彼が入ってくる。左手にはビニール袋を握りしめ、中には9人分のアイスが入っていた。

「千歌が我が儘だから、お望み通りの寿太郎みかん入り『みかんアイスゼリー』買ってきたぞ〜！」

「わ〜い！ありがとう遼くん！」

「代金は後々に返してもらおうからな！」

「ええ〜!?!」

私は遼くんからの差し入れを両手で受け取っては、みんなに1つずつみかんアイスゼ



リーを順番に配っていく。この『みかんアイスゼリー』はみんながよく食べるゼリー状のアイスなんだ。

彼からの差し入れに、私を含めみんなご満悦。

ただ一人を、除いてはね……。

「わ、私はそんなのいらないわよ！絶対にはらないんだから！」

「そっか。善子はみかん嫌いだったな。悪い、善子がみかん嫌いだったの全然忘れてたわ」

「い、いいわよ別に。って、ヨハネ！」

善子ちゃんはみかんが嫌い。

それでいて彼はその事を忘れてたから、仕方なく善子ちゃんは渋りながらも彼を許した。でも名前は相変わらず訂正するけどね。善子ちゃんらしい。

「いいじゃんかよ。別に善子って呼んでも」

「いや！ヨハネって呼んで欲しいの！」

ていうか、2人とも顔近づけ過ぎだよ。

善子ちゃんを『善子』と呼ぶ遼くんと、どうしても名前を『ヨハネ』と呼んでほしい善子ちゃんの罅迫り合いは、どちらも引かない展開。

ただの2人の『呼び方』についての戯れ。

そう思っただけで見ていた私だった。

なのに……

ズキッ、ズキッ

「……………」

2人の光景を見て、ふと胸に痛みを感じた。

どうしてそうなるのか、理由は分からない。ただ思い当たる事柄があるとするなら、この胸の痛みはきつと、私が告白に悔いがあったからだと思う。

あのままルビイちゃんに見つかりながら告白していれば、また違う状況だったのかも  
しれない。

でもそれを思い、悔やんでも仕方ない。まだ『次』がある。そう思えるだけで気持ち

としても、とてもだいたいぶ楽に感じた。

「……曜ちゃん？ずっと遼くんと善子ちゃんのこと見てるけど、大丈夫？具合悪い？」

「えっ？曜さん具合が悪いのですの!？」

「やめてよ千歌ちゃん！ダイヤさん誤解だよ！」

そしたらずっと遼くんと善子ちゃんのやり取りを見ていたせいか、具合が悪いと千歌ちゃんに変な気を遣わせしまい、ダイヤさんにも変な誤解を招いてしまう。

それに不安を抱いたみんな。私は深く千歌ちゃんとダイヤさんに謝りつつ、即座に2人の誤解を解消すべくみんなに話をした。

「私はただ、遼くんと善子ちゃんの2人のやり取りが面白くて。少しボーツとしてただけだよ」

「なあくんだそうだったんだ！」

「『そうだったんだ』じゃありませんわ！全く！千歌さんのおかげでびっくりしましたわ！」

「ご、ごめんなさ〜い……」

ふう。何とか誤解は解消することが出来た。

けれどもダイヤさんは千歌ちゃんに対して怒りを露わにし、いつものお説教を千歌ちゃんにガミガミと言いつけるのであった。

ただこれは、間違いなく私のせいなんだけどね。ボーツとして、それで千歌ちゃんやダイヤさんに誤解を生ませてしまったのだから、私も私で今の事はしっかり反省しないと！

「失礼します！A q o u r sの皆さん！まもなくライブの時間ですので、そろそろ準備をお願いします！」

「あつ、はい！分かりました！」

そんな時、私たちがある控え室にスタッフさんがやってきて、ライブの準備を進めるように私たちに伝えにくる。

ふと時計を見やると、ライブの開始時間の10分前になるうとしていたから、ちょうどいいタイミングなのかもしれない。

今回のライブは、沼津市が特別に用意してくれた特設ステージで歌うんだ。場所は狩

野川で、しかも花火大会名物のナイアガラを背にして歌うんだよ！

なかなか壮大だから絶対に成功させたい。

「じゃあみんな！今日はいろんな意味で大事なライブだから、みんなで絶対に成功させようね！」

「そうだね。私と鞠莉とダイヤの再スタートの意味もあるから、ミスとか絶対に出来ないね！」

「うふっ☆そうね！」

そんな思いは千歌ちゃんたちも一緒だった。

果南ちゃんたちもそのことを意識は凄くしてて、でも今日のライブを1番に楽しもうという面持ちを持っていた。

今回の衣装は『夏祭り』にちなんで和服。

ルビィちゃんと力合わせ、且つみんなのメンバーカラーに合わせて頑張って作ったの。だから衣装に負けないくらい可憐で、情熱的で、キラキラしているとところみんなに見せてあげたい！

みんなもきつと、それを思っている！

遼くんもきつと、キラキラしている私たちを間近で見たいと思ってるはずだから……。

「ルビイも、一生懸命頑張る！」

「ええ！私も果南さんや鞠莉さんに負けないくらい、精一杯やってみせますわ!!!」

「ダイヤさん、やる気満々ずら！」

「クツクツク。我、墮天使ヨハネも……」

「そういうのはいいずら……」

「ちよつと！最後まで言わせなさいよっ！」

「あ、あははは……」

みんなそれぞれが自分の気持ちや、これから行うライブに対しての意気込みを語っていく。そうしてそれが自分のことのようにスツと思えてきて、自分も頑張ろうって思える。

ある意味これが、*“好循環”* ってやつなのかな？

「ははっ！みんな頑張れよ！」

「遼くんは？」

「俺？俺はちゃんと見てるよ。みんなの歌とパフォーマンス、絶対に成功させろよな！  
変なミスしたら承知しねえぞ！」

「……っ！うん！」

彼もまた、私たちが絶対にミスしないように喝を入れて油断を許さない。

遼くんは遼くんですんなり大事な場面を何度も経験があるから言えるんだと、千歌ちゃんを含めて、みんなはすぐにそう感じた。

「じゃあステージに行く前に、みんなで円陣を組んでいつものやろう！」

「「「「「「「おー！」」」」」」」

そして私たちは、遼くんから貰った緊張感を胸に秘めて円陣を組む。ライブの前にこうして手を重ね合わせて、声を掛け合うのがもう恒例になった。

その様子を見かねた彼は、そろそろと言って控え室を出て行くこうとする。

「んじゃ、俺はそろそろ戻るわ」

円陣を組む私たちを背にし、右手を軽く上げながらそう言っただけで控え室を後にしようとしていた。

けどその時、千歌ちゃんは言う。

「待って！ 遼くんもやろう！」

「は、はあ!？」

「千歌ちゃん!？」

9人でやるんじゃないかと、遼くんも一緒に10人でやろうって千歌ちゃんは言い出す。

あまりにも唐突だったから、遼くんできえ驚きを隠せなくて、みんな千歌ちゃんの発言に驚愕の表情が現れていた。

「お願い！ 私たちと一緒にやって！」

「何言ってるんだ千歌。そんな事に俺が混ざる理由なんてないはずだ」

「あるよ！ 遼くんは、A q o u r s の 1 0 人 目 だ も ん ！」



「……………っ！」

千歌ちゃんの言葉に、思わず驚く彼。

私は、遼くんをA q o u r sの10人目として見ている千歌ちゃんの考えがすぐに分かった。

それで後々にみんなも、千歌ちゃんがどうして遼くんを10人目として言葉を投げかけたのかの理由を知り、彼は口を開く。

「俺が……………10人目？」

「そう！遼くんはいつも私たちのことを気にかけてくれて、部活で忙しくても、いつつも私たちに連絡してくれる。それが千歌、凄く嬉しかったんだ！」

「そうですね。遼さんは私たちにとって大切な人。だから千歌さんはそう言ったのです！」

「……………」

千歌ちゃんはそして彼の両手を握り、無理矢理に私たちが織り成している輪の中へと連れてくる。

千歌ちゃんに両手を握られた彼は、抵抗もなく、何も言わずに私たちの輪に加わる。少し何か考えている表情だったけれど、千歌ちゃんの言葉に何かを感じたのか、少し表情が緩み、遼くんは千歌ちゃんに口を開いて話す。

「……いいのか？俺で？」

「えっ……？」

「俺がA q o u r s の “10人目” でいいのか？ステージで歌うのは、 “9人” だろ？」  
「いいの。遼くんの支えがあるから、今の私たちがいる。それだけで、みんな嬉しいんだ！」

「千歌……」

千歌ちゃんと言葉を交わしていくうちに、遼くんは首を縦に振り、『そっか』って小さく呟く。

表情もみるみるうちに口角が上がって微笑んで、彼は私たちに向かって言い放った。

「分かった。A q o u r s の10人目、俺がしっかり受け取った。みんなを支えられるように、精一杯やってみせるよ！」

「……っ！ありがとう、遼くん！」

「良かったね！千歌ちゃん！」

「うん！千歌……すごく嬉しい！」

その言葉に、梨子ちゃんも寄り添って千歌ちゃんは喜びを爆発させた。

10人目のメンバー、遼くん。

彼自身も満更でもない表情を見せるあたり、遼くんも何かしら思うところがあつたんだと思う。

そうじゃなかったら、こんなに笑う遼くんを見ることなんてできないから。

「とにかく、今からのライブには、みんな集中していこう！ついさっきまで練習してきたんだ。みんななら必ず出来るよ！」

「うん！私たち、やってみせるよ！」

「輝く私たちを見ててね！遼くん！」

「おう。俺も楽しませてもらうよ」

そうやって、また私たちは再び円陣を組む。今度はちゃんと遼くんも混ざって、みんな

なで一斉に声を張り上げた。

ライブの成功を、みんなで願って……！

「じゃあ行くよ！アクア〜!!」

『サ〜ンシャイ〜ン!!!』

~~~~~※※※~~~~~

夏祭りの風物詩『花火』

星空が輝く夜空を彩るように、夜空をいっぱい埋め尽くす花火。音も大迫力。沢山の色、沢山の形にして夜空で光を放てば、一瞬にして夜空に消えてしまう。

そんな火花が上がって夜空を彩る空の下、9人の彼女たちは、狩野川に浮かぶステージの上で堂々としたパフォーマンスを披露していた。

『ど〜んなみ〜らい〜かは〜♪』

『だ〜れも〜ま〜だ知らない♪』

『でも〜楽〜しく〜な〜る〜はず〜だよ〜♪』

曲名『未熟DREAMER』

夏にちなみ『和』を感じられるが、ところどころでギターとの力強い演出がこの曲の良いところ。

果南と鞠莉、そしてダイヤの3人で作詞と作曲をしたこの曲は、この大きな夏祭りにはもってこいの曲だと、俺はそう感じた。

「あの子たち、可愛いね〜！」

「“A q o u r s” っていうんだ！みんな可愛い！」

それでまさか、こんなにも千歌たちを見てくれている人が多いとは思わなかった。

千歌たち9人を見て、『キャツキャツ！』と声を上げる女子高生らしき2人組の会話を耳にする。

周りを見渡せば、デジカメやスマホで写真や動画を撮っている人たちが多く見受けられて、キラキラとステージで舞い踊る9人の姿を写真に収めている人たちがたくさんいた。

これなら、夏祭りに訪れた人は、必ずや千歌たち「A q o u r s」のことを覚えてくれるだろう。

こんなにキラキラしている彼女たちを、見ていて忘れられるはずがない。

『成〜長した〜い〜な〜♪』

『ま〜だまだ〜♪』

『未〜熟ドリ〜マ〜♪』

沼津夏祭りの花火大会において、一番の名物は『ナイアガラ』

知つてると思うが、アメリカの観光地にもなっているナイアガラの滝。それを大胆に模したようにしてき、上から下へ花火が滝のように演出がなされているのはここだけしかないんじゃないかな？

そしてそんな壮大な演出を背に9人の女子高生が歌を歌ったり、ダンスしたり、ていうか沼津市自体がここまで協力的になのは正直驚いた。

特設ステージを狩野川に作ることでだけでも凄い。

千歌たちに出演のオファーを出しただけのことにはあるけど、費用はいくらかかってるんだらう？

それがすごく気になって仕方がなかった。

『やくつとーつになれそんな僕たちだから〜♪』

『本気ぶつけ合う事からは〜じ〜めよう〜♪』

『その時見〜える〜光〜が〜ある〜はず〜さ〜♪』

それでそうこうしているうちに、9人の華麗なるパフォーマンスは終わりを迎えて、『ナイアガラ』が終わると同時にステージのライトも消える。

ある意味、『味』のあるような終わり方をした事によって、観客からは黄色い歓声と、暖かい拍手が沸き起こった。

パチパチパチパチッ！

パチパチパチパチッ！

「ハア……ハア……」

ステージには横一列に並び、上がる息をゆっくりと整えている千歌たち。彼女たちには満足感のある笑顔があり、自分たちも理解出来たんだろう。

ライブは、大成功を収めたってことをね。

「ありがとうございました〜！」

『『ありがとうございました〜！』』

パチパチパチパチッ！

深々とお辞儀をし、お礼を述べる9人。

歓声と拍手は更に一層に湧き上がって、ライブのパフォーマンスを観客に見てもらえた千歌たちは、とても嬉しそうで笑顔が絶えなかった。

「みんな！ライブお疲れ様〜！」

「遼くん〜！私たち、やりきったよ！」

「ああ。みんな、凄く輝いていたよ」

「え……えへへ♪嬉しいな〜♡」

控え室に俺は顔を出すと、和やかに会話していた彼女たち。

その彼女たちに声をかけたら今一番に千歌が抱きついてきて、ライブが上手く行って、キラッキラの満面の笑みを浮かべていた。

千歌に抱きつかれ、ちょうど胸のあたりで顔をウリウリされている俺であるが、それを気にすることはなく、俺は果南たち3人に言った。

2年ぶりにスクールアイドルを再開した3人を見られて、俺自身ものすごく嬉しさがあつたからだ。

「果南、鞠莉、ダイヤ。3人がスクールアイドルをしてる姿をまた見られて、俺はすごく嬉しいよ」

その思いをそのまま3人にぶつけると、ダイヤと鞠莉と果南は一斉に顔を見合わせては、次第に顔を赤くして果南が恥ずかしがりながらお礼を言う。

それに続くようにして、鞠莉もダイヤも俺に対し感謝の気持ちを口にしてきた。

「あ、あははは……。遼にそう言われると、なんか恥ずかしいな。でも、ありがとう、遼！」

「こうして私たちがスクールアイドルをまたする事が出来るのは、これも全て遼さんのお陰ですわ！」

「遼！本当にありがとう！」

「……………」

俺は別に、3人から感謝されるようなことは何もしてないんだけどなあ…………。

ただ3人の蟠りをなくし、あの時のように仲良しだった3人に戻したくて俺は行動してきただけなのに、そこまで感謝されるとは思わなかった。

ただ3人の感謝の言葉は素直に受け取る。

3人は俺にとって、とても大切な“友達”だから。

「じゃあ遼くん。そろそろ私たちは浴衣に着替えるから、遼くんは外で待つてて！覗いたら許さないんだから！」

「へーいへい。そんなの分かってるよ」

そこで俺は曜に控え室から追い出され、みんなが着替え終わるのを外で待つ。

その間、千歌にライブ前に言われたあの出来事というか、あの言葉をふと思い出した。

『遼くんは、A q o u r s の10人目だもん！』

千歌の口から言い放たれたその言葉は、俺といえども衝撃的に近いものだった。

ただみんなは、俺をそういう風に見ていて、千歌の言葉はまさにその通りだと言わんばかりに、俺を10人目のメンバーだと認めていた。

確かに俺は、千歌・曜・梨子の3人で始めたときからずっと彼女たちを支えてきた。花

丸ちゃんたちが加わっても、果南たちが加わっても。

毎日毎日、俺は彼女たちの事を気にかけてやっていた。それが彼女たちからすれば、その行動全てに感謝していると千歌は言っていた。

正直、俺で良いのかなって思う。

でも千歌がそう言っているんだ。みんなは、俺のことを信頼している。だから、俺も千歌たちのことを信頼しても良いのかもしれない。

『No. 10』か。

サッカーにおいて、『10番』は結構重要な意味を持つから、そう考えたら俺は結構重要なところを任されてる気がした。

思わずだけど、ちよつと笑みをこぼした。

ガチャ！

「……っ」

「お待たせ、遼くん」

それで控え室から誰が一番最初に出てくるだろうと、密かに俺は少しばかり考えていた。すると一番最初に控え室から出てきたのは、桜色の浴衣が凄く似合う梨子だった。意外……。

「おおつ。一番最初が梨子とは驚きだ」

「なあゝに？一番最初に誰が出てくるのか予想でもしていたの？私が一番最初で意外だった？」

「まあな。ちよつと驚きを感じてるよ」

ていうか、やっぱり梨子の浴衣姿は綺麗だ。都会っ子はなんでも似合うんだなって思ってしまうよ。

綺麗な髪をまとめ、後ろでお団子にしている様はいつもの雰囲気とはまた違う雰囲気を漂わせる。

本当、梨子は綺麗だな……。

そんな時、梨子が俺に迫って話をしてきた。

「ねえ、遼くん」

「なんだ？」

「あのね、まだみんな着替え終わらないみたいなんだけど、私遼くんと話したいことがあるから、少し離れたところでお話しない？」

「えっ？まあ、別に良いけど……」

「本当？良かった！ありがとう！」

まだみんなが着替えを終わっていないのは分かったけれど、それほど梨子が俺に話そうしていることは重要なのだろうか？

一旦、みんなから離れようだななんて……。

「それほど重要な話なのか？」

「うん。みんなには、少し話しくくて……」

「……そうか」

俺だけには、話せることか。

あまり問い詰めたら逆に梨子も話し辛くなるだろうから、俺はそれ以上に彼女を問い

詰めなかった。

そして、梨子は俺の左手を引いてきた。

「じゃあ、いい？」

「ああ。行こうか」

優しく俺の手を引き、少しなんか小刻みに彼女の身体が震えている様子が伺えた。

梨子は俺になにを話そうとしているのか？まるでこの場面、人気のいない場所にちよ
うど移動しようとしていた曜と同じ場面に似ている。

一体、彼女は何を話そうとしているのか？

~~~~~※※※~~~~~

「あれ？ 遼くん？ 梨子ちゃん？」

衣装から浴衣に着替え、私は遼くと梨子ちゃんがいる外側に顔を出したら、遼くと梨子ちゃんの姿が見当たらなかった。

私はすぐさまみんなに2人がいないことを告げたとき、幸い、千歌ちゃんのスマホに梨子ちゃんからのメッセージが届いていたみたい。

メッセージの内容はこうだった。

『私のトイレに、彼を一緒に付き合わせてもらっています。すぐに戻ってくるから、安心して？』



「だって！だから2人とも大丈夫みたい！」

「ほっ。それなら安心ですわ」

「この時間に女の子1人で出歩かせるわけにはいかないからね。遼を連れて行くのは正解かも！」

「……………」

みんなは、梨子ちゃんからのメッセージに安心・安堵の言葉を並べて胸を撫で下ろしていた。

でも、私の中ですごい胸騒ぎが起きていた。

本当にトイレ？っていう不信心。

もし、違う目的で遼さんと2人つきりになったのだとしたら？

ふと自分がそう考えたときに、私の心と身体に、大きな警鐘を鳴らした。

「…………つ。私、2人を探してくるっ！」

「えっ!? ちよ、曜ちゃん!?!」

身体は勝手に動いていた。

浴衣を着ていて走りたくても早くは走れなかつたけど、背後からの千歌ちゃんの声を耳にしなから、私は2人を探しに控え室を飛び出した。

「ハア……ハア……」

嫌な……すごく嫌な予感がする。

とてつもない不安が身体にまとわりついて、早く遼くんと梨子ちゃんを見つけないとつて、自分の心が強い焦燥感に駆られていた。

控え室を飛び出し、そこから少し離れたところには歩道とベンチが並び、あまり人通りが少ない場所に、その「2人」はいた。

あつ！遼くんと梨子ちゃんだ！

ちょうど蛍光灯が照らしているベンチに腰掛け、2人が横に並んだ状態で座っていた。

「……………」

「……………?」

「――。――。――。――。――。――。――。――。――。――。」

私が今いる場所では、とても遠くて2人の会話は全く耳に入ってこないし、まず聞こえない。表情もよく分からないし、遼くと梨子ちゃんがお互いにジェスチャーをしながら、何かしら会話をしている様子が伺えるけど、本当にどんな話をしているのかよく分からなかった。

ドクンツ！ドクンツ！

そして同時に、私の心臓の鼓動が速くなった。

あの時、私が早く告白していればこんなにも不安に駆られることなんてなかった。

そんな大きな後悔が、目の前で後に降りかかってくるなんて、今の私には考えられなかった。

物陰に隠れながら、ゆっくり、ゆっくりと遼くと梨子ちゃんのもとに近づいていった時に、それは聞こえてしまった。

「お願い遼くん！付き合ってください！」

「……………」

「……嘘……でしょっ？」

信じたく……なかった。

告白の話じゃなくて、普通の2人の楽しい会話だったら良かったの……。

梨子ちゃんに、私は先を越されたのだ……。

ベンチで正面に向き合い、梨子ちゃんが彼に対し告白している言葉が耳に入ってくる。それが私の頭にぐるぐると周回し、何度も何度も脳内でリピート再生された。

私が先に言うはずの言葉だったの……、後悔と悔しさが滲み出てきて、涙が出そうだった。

でも、私の中で一つだけ希望はあった。

告白をしても、遠くくんはそれに対して断ることが多かった。だから梨子ちゃんが告白する事は出来たとしても、彼が『OK』を出すとは思えなかった。

『だから大丈夫だろう！』 って……。

根拠のない事柄を信じて、遼くんが梨子ちゃんを振ってしてくれることを信じて、私は願った。

でもそんな安易な私の考えは、

粉々のゴミ屑のように打ち砕かれた。

「……………いいよ。それを、君が望むなら……………」

「……………っ！あ、ありがとうっ！！」

「…………………………」

遼くんは、梨子ちゃんの告白を了承した。

梨子ちゃんは嬉しさのあまりに彼に抱きついて、大粒の涙を流して泣いていた。

私は、告白と恋人が成立する瞬間を目の当たりにしてしまった。この光景を見たくなくなかったことを、目の前で見せつけられて……………」

「やだ……………いやだよ……………」

次の瞬間、目の前は真っ暗になった。

## #55 4人揃ってバカンスへ! 前編

「あははははっ! シャーイニー♪」

「ま、鞠莉さん! そんなにはしやぎまわっては怪我をさせていただきますよ!」

「えへへっ♪大丈夫♪」

浜辺で無邪気にはしやぐ鞠莉を、ダイヤは厳しく注意する。けれども本人は遊びに無我夢中だ。

仕方のないことだ。それが鞠莉の性格である。

「無駄だよダイヤ。鞠莉だもん……」

「はあ、仕方ないですわね」

果南も鞠莉の性格を一番に知ってるから、ダイヤが厳しく注意しても止めるはずがないと知って、ダイヤを制し、ダイヤも半ば呆れ気味に声を散らすことを止めた。そんなでもって、果南が鞠莉に尋ねる。

「でも鞠莉、本当にいいの？」

「えっ？なにが？」

だが鞠莉は質問の意図が分かっていなくて、彼女は右肩に垂れるように首を傾げる。

だから果南はもう一度話をした。今度はちゃんと鞠莉に理解して貰えるように話を切り出した。

「私たちだよ。鞠莉のバカンスに誘って貰ったのは嬉しいけど、本当にいいのって話……」

「なに言ってるのよ！私はこの4人で楽しみたいと思ったから誘ったの！だから、大丈夫よ果南！」

「もう。これだから金持ちは……」



そしたら鞠莉はそう言つて、その言葉には果南もため息混じりにぼそりと呟いた。  
 そうだそうだ。鞠莉が今一番に浜辺ではしゃいでいたから、それを見るのに夢中で  
 ちよつとぼつかし忘れていたよ。

俺たち4人がいる場所、聞いて驚くなよ?

『ハワイ』

あの「ハワイ」に、俺たち4人はいる。

さっきのやり取りで分かっているとは思うけど、鞠莉の活きのある誘いによつて、俺・  
 果南・ダイヤはハワイにやつて来たというわけだ。

「まあまあ! 果南も一緒に楽しみましょ! えい!」

「ひゃ! ちよ、鞠莉! どこ触つて……!?!」

「いいじゃない! いいじゃない! んん〜っ! 果南のおっぱい、大きくてだ〜いすき!」  
 「んっ……! もうっ! 訴えるよ!」

やれやれ。鞠莉はもの凄く果南の胸を気に入っているらしい。俺は果南の胸も鞠莉

の胸もどっちも好きだから、是非2人の胸を揉みしだきたい。

おっと、話が逸れてしまった。話を戻そう。

こうなったことの発端は、夏祭りを終えてから3日後の朝練。俺が果南にある話をぶり返したところを、ちょうど鞠莉に聞かれてしまったのだ。

『果南、前に話したあの件なんだけど……』

『えっ? あつ、もしかしてあの話?』

『おやおや? 遼と果南、一体2人で何の話をしてるのかな? マリー、とっても気になる〜!』

『』……………『』

その時はもう、何も包み隠さず、俺と果南で鞠莉に何の話をしていたのか話をしたよ。もちろん、ダイヤにもね。

『なるほど。遼さんと果南さんの2人は、私たち4人でどこに出掛けようかと裏で話をしていた、というわけですね?』

『ま、まあ、そうだけど……』

『ちちゃんと鞠莉とダイヤにも相談をしようと思ってたけど、その前に果南がちやんと覚えていたかって話をしたかっただけだからさ』

最初は、俺と果南の2人で勝手に話を進めているのかとダイヤと鞠莉に誤解され、それを色々と解消するのに結構時間がかかり、かなり手間取った。

でも何とかが2人は納得してくれて、そうして4人で相談していたところ、鞠莉から『ハワイにバカンスしに行くから、3人も一緒に行かない?』っていう感じに誘われたことが、この全ての発端である。

最初は、『そんなの絶対嘘だろう』って考えていた俺たち3人。

けれどいざ鞠莉のホテルに来てみれば、自家用でいつもよく見かけているピンク色のヘリコプターが屋上にあつて、その時にやっと俺たちは気づいた。

『あつ、本気だったんだ……』ってね。

「ほれ鞠莉。そろそろやめたらどうだ?」

「そうね。果南も嫌そうにしているから、そろそろこの辺でやめさせてもらおうわ!」

「もう……鞠莉のエッチ……」

胸を揉まれ、わずかに頬を赤くする果南。

鞠莉に対して仕返しをする気配を感じたが、すぐにはしないという雰囲気醸しだし、『ふんっ』と不機嫌になって顔を鞠莉から背けた。

「それにしても、凄い綺麗な海ですわね」

「そうだな。俺もこんな綺麗な海を見るの初めてだよ。すげえな、ハワイってところは……！」

ハワイの海に初めて来て、俺が最初に思った感想はというと、透き通った蒼色でめちゃくちゃ綺麗。これは大変失礼なのかもしれないが、内浦の海よりこっちの方が綺麗に感じてしまう。

ダイヤと一緒に感嘆な言葉を並べ、ちよつとだけ海を鑑賞に入り浸っていたところ、鞠莉に声を掛けられ、4人でビーチボールで遊ぼうと誘ってきた。

そんなえつちすぎる、ド派手な水着で。

「遼！ダイヤ！せつかくこつちに来たんだから、早速一緒にビーチボールで遊びま

しよ〜!」

一体、いつからそれが用意されていたのか分からないが、スイカの緑と黒の柄が目立つビーチボールが、鞠莉の両腕に挟まれ、胸を支えている。そして鞠莉が纏う薄紫のビキニが、彼女のスタイルをより際立たせていた。

……って、何で俺は鞠莉のことやビーチボールのことなんかを説明しているんだよ……。

ビーチボールそこ代われ! あつ、間違えた!

「ええー鞠莉さんのおかげでハワイにまで来たんですから、羽目を外し過ぎないように、今日は至りつくせり、遊びまくりますわ!」

「おお。ダイヤがいつになく張り切ってる……」

「うふふっ♪まあいいじゃない!」

ダイヤも今日はやけに気合が入っている。

表情はキラキラに明るくて、いつもの厳格のあの表情は何処へやらって感じ。目の前にいるダイヤがダイヤじゃないって思ってしまうほどだ。

ただ果南と鞠莉に関しては、そんなダイヤを見て微笑ましく笑っていた。昔のダイヤを見つめる、そんな風に……。

「じゃあ、遼も一緒にやりましょ！」

「いいぜ！俺もたくさん楽しむ事にするよ！」

「それじゃあ、始めるわよ〜！」

鞠莉からの誘いを俺は受け答えて、そして鞠莉が抱えて持っていたビーチボールは、鞠莉自身からの手によって空中にふわりと浮かんだ。

空は雲一つなく、一面が青空。

燦々と俺たちを照りつける太陽は『夏が来た』と感じさせるくらい眩しくて、日差しは俺たちの肌を焼き、良い意味で心地よかった。

~~~~~※※※~~~~~

「はいっ! そっれっ!」

「ほいさ! ダイヤ!」

「分かってますわ……よっ!」

男1人に、女3人。真つ白な砂浜でビーチボールをする俺たち4人は、ただひたすら、有意義で楽しい時間を過ごしていた。

太陽が南の頂点に差し掛かる頃でも、俺たち4人は輪になって、スイカのビーチボールを高々と打ち上げ、時計回りにパスをしていた。

果南から俺へ、俺からダイヤへ。

ダイヤから鞠莉へ、鞠莉から果南へ。

時には逆回りになったり、対角にダイヤから果南へパスしたり、ビーチボールをふわ

りと打ち上げ、俺たちはビーチボールで楽しく遊んでいた。

「鞠莉！それっ！」

「Oh〜！遼つてばす〜い！」

「へへっ！こんくらい朝飯前よ！」

そうそう。鞠莉の水着を説明したばかりに、果南とダイヤの水着姿も説明していなかったな。

ダイヤは純白なワンピースタイプの水着。ビキニを破廉恥だと思っっているダイヤに関して、まあそんな水着だろうとある意味に予想はしていた。

そして果南は鞠莉と同様にビキニ。トレーニングで鍛えた引き締まった筋肉が顔を出し、超魅力的な身体とがベストマッチしている。色は紺と白の横縞で、紐がピンク色。というか、よく見たらそれっでダイビングによく着てる水着だよな？

それでいいのか？まあいいのか、それで……。

そんな時に、ある意味“事件”が起きた。

ビューツ!

「それっ! あっ!」

「ああ……海に行つてしまいました……」

「あはは……。ソーリーソーリー」

鞠莉が果南にパスをしたんだが、さつきまで吹いていなかった風が猛烈に吹き出し、ビーチボールが果南の上を超えて海にポチャリと行つてしまった。

自分のパス自体が強かったと勘違いし、それで海にビールボールが飛んでしまったことから自分から謝る鞠莉。

ただ果南は怒つてる様子を見せなくて、鞠莉が海に浮かべてしまったビーチボールを、自分が取つてくると俺たちに口を開いたのだ。

「じゃあ私、今から取つてくる」

「えっ!?! いいわよ果南。私がビーチボールを海にやつちやつたんだから、私が自分で取つてくる!」

「いいよ鞠莉。これくらいは私がやるよ」

その言動には、自ずと鞠莉は果南を止める。

それでも鞠莉の制止を強引に破り、果南は一人で海へと歩いていく。バシャバシャと音を鳴らして、堂々と海を歩いていく果南は、海にぶかりと浮かぶビーチボールの元へと難なく辿り着いた。

そこまでの深さは、果南の腰の辺りだった。意外と軽いからな。もつと深いところまで飛ばされなくてよかった。

「お〜い！〜いっくよ〜！」

「Hey 果南〜！カモ〜ン！」

ビーチボールを取り戻した果南は、俺たちに振り返りボールを投げる前に声をかける。鞠莉は両手を振り、果南にボールをくれと呼び込む。

それで果南が、鞠莉へビーチボールを投げる。

何もなければ、そうなる筈だった。

ザッパーン!!!

「うわっ!!」

「果南!」

「果南さん!!!」

無風だった風が突然に吹き出したせいで、今まで穏やかだった海に白波が立つ。

そして腰の辺りまで海に浸かってた果南だから、いくら筋トレで身体を鍛えていた果南でさえも、波の勢いに勝つことは出来なかった。

果南の身体は、ぐらつと大きく体勢を崩した。

「これ……やばっ……」

いつも潜っている内浦とは大きく違う海だから、それはまるで海が果南に対して牙を剥いているようだった。

「果南っ!」

「ダメだ鞠莉!お前も巻き込まれちゃう!」

「いやっ！離してっ！」

そんな果南の状況を、ただ突っ立って何もしようとしないうる鞠莉じゃない。

果南を助けるために海に入ろうとした鞠莉を、俺は無理矢理に引き止める。理由として、果南と同じ目にあうかもしれないと思つたから。

両方の手首を掴まれ、『離して！』と叫ぶ鞠莉。

そんな彼女に、俺は言い放つ。

「俺が果南を助けに行く！だからお前は、無理して行くな。ダイヤとここで待つていろ」
「……っ、遼。分かつたわ……」

俺としても、鞠莉にも今の果南と同じ目にあつて欲しくないのが本音。せつかく、またこうして3人が仲良くなれたんだから、もう1人も欠けて欲しくないんだ。
もう誰も、悲しい顔は見たくないんだ……。

「じゃあ、すぐ戻ってくる」

「ええ！」

「気をつけてくださいいね!」

「ああ!」

鞠莉とダイヤを浜辺に残し、果南の元へ海に足をつける。

季節がもう夏であるから、足から伝わる冷たい海の感触が、身体を程良く冷ましてくれた。

「果南!今行く!」

「遼!くっ、助けて!」

果南がいるところに近づくに連れ、次第に俺の身体は海に沈んでいく。さつきまで腰の辺りまで浸かっていたはず果南の身体は、今は胸のあたりまで浸かっていた。

ふと頭をよぎる、最悪の展開。

そんな展開に絶対したくない俺は、必死に果南に手を伸ばし、彼女も俺に懸命に手を伸ばした。

「果南!俺の手に掴まれ!」

「う、うん……っ！」

後悔しかない。果南にビーチボールを取りに行かせたこと自体がさ。男の俺にとつて不甲斐なくて、とても後悔しか残らなかった。

けれど、今になってそれを後悔しても仕方ない。起こってしまったことは起こっちゃまった。

今は果南を助ける。それだけだ。

「わっ！くっ！果南！」

「うっ……んっ！」

海は少々荒波になってきてはいるが、そんな中で俺と果南はお互い必死に手を伸ばした。

浜辺には鞠莉とダイヤが帰りを待つてる。

俺が助けなきや、誰が助けるってんだよ！

「果南……!!」

「遼く!!!」

ギユツ!!!

「……っ！っ！よしっ！」

そして俺は、やっと果南の手を握れた。

果南の左手を右手で掴んだ俺は、波に揉まれながらも果南をぐいつと自分の方に引き寄せて、目には涙を溜めていた果南をギユツと抱き寄せた。

「遼、私……怖かった」

「ああ。怖い思いをさせてごめん、果南」

ダイビングばかりして、それで泳ぎが得意な果南でさえも怖いと思ってしまうのが海の怖さだ。果南には怖い思いをさせてしまった。

涙を流す果南に、俺は『ごめん』と謝った。

ようやく、俺は果南の元に辿り着けた。

そしてここから、鞠莉とダイヤが待つてる浜辺に帰らなければならぬ最大の試練がある。

が、少し海の高さが低くなってきている。さつきまでお腹の高さまだあつた海が、今は太ももくらいまで低くなった。この海にも干潮があるのかは分からないが、今のうちに浜辺に戻るチャンスだ。

「さつ、一緒に2人のところに帰ろう」

「うん。そうだね……」

海の荒波に揉まれ、少し疲弊しきつた表情を見せている果南。仕方ないよ。ビーチボールを抱えたままで波に耐えるのに必死だったのだから。

ここは、俺が果南を支えてあげないと。

「肩を貸せ。支えてやるから」

「うん。ありがとう……」

苦笑いをし、『あはは……』と無理をした笑みをする果南。

俺の心の中では、『もう良い、笑うな』と本気で口に出してしまいそうなくらいの辛い表情だった。

早く、2人のところに早く戻らないと……!

そんな時だった。

「遼! 果南! 早く戻ってきてっ!!!」

「遼さん! 果南さん! 大きな波が来てますわよ!」

「……………へっ?」

「えっ…………?」

浜辺から聞こえた2人の叫びに、俺も果南も首を傾げてしまった。

いや、なんで2人がそんなことを叫ぶんだろうと思っただけなんだけどさ……。

それで俺は何となく、あの2人の言う言葉が本当かどうかを確かめるために後ろを振り向いた。

その瞬間、青ざめたよ。

果南も後ろに振り返ってそれを見て、言葉を失い啞然としてしまった。俺と果南の身長を遥かに超えて、大体3mくらいの高さがある大きな波が、俺と果南の背後から迫って来ていたのだ。

まあそれを見たら、なりふり構わず逃げよね。
ちよつとした津波のようなものだからな。

「果南ー！」

「分かってるっー！」

果南もすでに察していた。

疲弊した体を力一杯に振り絞り、波から逃れようと俺と一緒に足を必死に動かしていた。
た。

けれども海の波がまた俺たちの邪魔をして、足の動きを鈍くさせ、俺と果南を大波に引きずり込もうとしていた。

というか、俺ら2人と大波の距離はそんなにもう離れてはいない。俺たちは間違いない、この大波に飲み込まれる可能性は大いにある。

「はあ……はあ……」

「遼! 果南! 急いで! 早く来て!」

難しい。背後から迫ってくる3mの大波から逃げ切るのは、まったくもって不可能だ。

この状況を打開、乗り切るためには、一体どうすればいいのだろうか?
そんなある時、果南が提案をしてきた。

それはある意味、1つの賭けだった。

「……………」

「……っ!? 本当に、それで生き残れる?」

「やって、みよ? 私も少し、怖いけど……」

「……分かった。一か八かの勝負をしよう」

「うん……」

果南から告げられた内容は衝撃的なものだ。それをして無事に戻って来られるかなんて、一度も全く考えたこともない。だからこそ、俺と果南は一か八かに出た。

「鞠莉っ!!!」

「えっ?」

「これを、受け取れっ!!!」

果南が持っていたスイカのビーチボールを、俺は浜辺にいる鞠莉に向かって思いっきり投げた。

鞠莉とダイヤがいる場所に直接届いたわけじゃないけれど、この大波に飲み込まれることなく、鞠莉がビーチボールを取れるところにそれは落ちた。

「遼、これは一体どういうこと……っ?」

「どういうって、そういうことだよ」

「察してよ、鞠莉」

そしてそれと同時に、鞠莉は俺たちに言葉を投げかけてきたから俺と果南はそう答え
た。

「いや……嫌よそんなの……」

鞠莉は、これから俺たちがすること、これから起こることを予想してしまったので
あろうか？

身体は小刻みに震え、さつき拾ったビーチボールをダイヤに投げつける。そして今俺
たちがいる危険な海に、猛然と駆け寄ろうとしていた。

「遼〜! 果南〜!」

「鞠莉さん! 今行ったら危険ですわよ!」

「嫌っ! ダイヤ離して!」

けれども、鞠莉を止めたのはダイヤ。

ダイヤは至って冷静だった。鞠莉の無理やりにも止めると言わんばかりに、
そう、それでいいんだ。俺と果南は、生きることが諦めたわけじゃないからね。

「覚悟は出来たか、果南？」

「覚悟も何も、もう決心はついたよ」

「……………そうか」

最初から聞かなくても良かったようだ。

俺と果南は大波の方向に向き直り、鞠莉とダイヤに背中を向ける。

怖くないって言ったら、全くの嘘になる。

それは果南も一緒。口では決心したように見えるけれど、身体は小刻みに震え、目は若干怖気付いた目をしていた。

「でも、やっぱり怖いだろ？」

「……………やっぱり、分かっちゃおう？」

「何年、幼馴染みやってると思っていやがる」

「ふふっ。そうだね…………」

海に、こんなに恐怖を抱いた果南は初めて見た。

でも仕方ないよね。俺でさえ経験したことのない事態なのだから、果南の気持ちも凄く分かる。

だから俺は、優しく果南を抱き寄せた。

ギョツ

「えっ……?」

「俺のそばにいろ。離れんなよ?」

「……………うん」

そしたら果南は安心したのか、彼女の身体の震えはすぐに収まってくれた。

てか、俺が正面に果南を抱き寄せたから、果南の豊満で、尚且つ巨大な胸が当たって心臓がバクバクしてる自分がある。こんな状況なのに……。

ザー!! ザァー!!!

「……………来るぞー! 果南」

「うんっ！絶対、離れないから！」

そんなことを考えていたら、もう10mもない距離まで大波は迫っていた。
生きるか？死ぬか？

まさに、『Dead Or Live』って感じだ。

「嫌っ！遼！果南！いやあゝ!!!」

浜辺からは、鞠莉の悲痛な叫びが聞こえてくる。

ごめんな鞠莉。ちゃんと果南を連れて戻ってくるって約束してきたのに。戻って来れなくて、約束を守ることが出来なくて……。

でももし戻って来ることが出来たら、鞠莉には後々、彼女の言うことを一つだけ叶えてあげよう。

うん。そうしよう。

後ろに振り返り、鞠莉に対して告げる。

「鞠莉! また後でな!」

そして、その直後

ザッ
パ
ア
ア
ー
ー
ー
ン
!!!

「いやああああ〜!」

俺と果南。俺たち2人を包み込むように、3 m程の大波は、俺たちを海へと呑み込んだ。

目の前が、真っ暗になった。

#56 4人揃ってバカンスへ! 後編

「いや〜! 無事に助かって良かったよ!」

「ばかあ〜! 本当に心配したじゃない〜!」

正午の夏空

雲が一つもない空の下、大波に飲み込まれた私と遼は、無事に浜辺に戻ってくる事が出来た。

ギャンギャンと私に抱きついて泣き喚く鞠莉。

仕方ないよね。最悪、目の前で2人の友人を失うことになってしまったのだから。

本当、無事に助かって良かった。鞠莉とダイヤのもとに、こうして生きて戻って来られたのだから。

神様と、彼に心から感謝しないと……。

「すう……すう……」

「全く。安心しきつて寝るとは……」

「でも、いいんじゃないダイヤ。私も、遼と果南が戻ってきてくれて良かったもの」

「まあそうですけど……」

私を大きな波から守ってくれた遼は、私を守って戻ってきたことに安心し、私たちで用意したレジャーシートに横たわって眠っていた。

私の意見を真つ向に受け入れ、そしてそれに何の恐怖を抱かずに私を守ってくれた彼は、ある意味で化け物みたいにしかな思えなくなっちゃうのだけど、彼の暖かさに、私は救われた。

もうこれで、〃2回目〃だよ。

「じゃあとりあえず、私とダイヤはまだ海で遊んで来るから、果南はゆっくり休んでて。あとは、遼のこともよろしくね〜♪」

「なっ!?ちよ……鞠莉!」

そうやって鞠莉は私にそう指示する。遼の面倒を押し付け、ダイヤと2人でまた海へ遊びに向かつて行ってしまった。

「……すう……すう……」

「もう。人の気も知らないで……」

でも、すぐにまた『遊びたい』と思っているわけじゃない。私だって少し休みたいよ。ただ彼が私を差し置いて眠っているから、何だか少しムツツて不満に思っちゃって助けてくれた彼に、思わず愚痴をこぼしちゃった。

けれど遼は寝ているし、聞こえないだろうから、別に大丈夫……だよな？

「あはははっ♪ダイヤ〜!それ〜!」

「くっ!鞠莉さん、やりましたわね!」

「ダイヤがやられるのが悪いんだよ?」

「こうなれば仕返しですわ!鞠莉さん、お覚悟!」

そんな中、海では楽しそうに遊んでいるダイヤと鞠莉の姿が見える。笑顔は絶えず、2人ではしやぎながら海水をお互いに掛け合う姿に、その様子を見て羨ましかった。

「……………」

本当なら、私もあそこに混ざりたい。

なのに私は、彼から離れられなかった。

別に鞠莉の言いつけを守ってまで、こうして今眠っている遼の面倒を見なきゃいけないなんて思っているわけじゃない。離れようと思えば、いつだって離れることは出来た……はずなのに……。

私の中で、目まぐるしくある『感情』が渦巻いていて、彼に凄く申し訳ないとさえ感じていた。

「……………はあ」

おもむろに、目を瞑って深いため息をつく。私の身体に重い罪悪感がのしかかり、今

にも自分の身体が粉々に壊れてしまいそうなくらいに感じた。

そんな、ある時だった。

「ため息なんかついて、どうしたんだよ？」

「……………えっ? うわあっ!？」

私の左耳から唐突に聞こえたその声は、私を大波から守ってくれた遼の声だ。私は彼が起きたことを驚いて慌てふためき、思わず遼を正面にして尻餅をついてしまう。

遼に対して凄く恥ずかしい格好になってしまったけれど、遼がいつ起きたのかを、私は尋ねられずにはいられなかった。

「い、いつ起きてたの!？」

「今さっきさ。目を覚ましたら果南が溜息をついていたから、どうしたんだろうって思ってたさ」

「……………そ、そう」

今さっき。私が抱くある『感情』に促され、深いため息をついた頃から彼はすでに起

きていたということになる。

私は彼から海へ目を背け、一瞬だけこの『感情』のことを遼に話すべきかを考えた。頭をフル回転させて、どういう風に話を切り出したら、私も曜も傷つかずに済むのか？

結果、何も言わないのが得策だった。

多分話したら、曜には本当に申し訳なく感じて、きつともう幼馴染みではいられないかも。

「い、いきなりでびっくりしたよ……」

「そうか。悪かったな」

そう言つて彼は、一度仰向けのまま伸びをする。

大きな欠伸も一つして、彼は自分の身体をゆっくり起こすと、鞠莉とダイヤが海で遊んでいる様子をしぼしと眺め始めた。

眺めている彼のその目は、なんだか嬉しそう。

すると彼は突然、私に話を振ってきた。

「にしても、良かったな果南」

「えっ……? な、何が?」

それが一体どういう事なのか? 最初は私にもよく分からなかった。

けど遼が次に発した言葉を耳にした時は、すぐにそれを理解することが出来た。

何となく、ああ……そうだねって感じた。

「またあの時みたいに、こうして楽しい時間を4人で過ごすことが出来る。果南もそう思わないか?」

「……うん。私もそう思う」

前にも話を聞いたことがあったような気がするんだけど、こう思っているのって私だけかな?

ベ……別にその話を聞いて嫌って思っているわけじゃないし、遼の言ってることには私も本当にそう思っている。

だって、鞠莉とまた、一緒にいられるんだもん。

や、やだっ! な、なんか恥ずかしいっ!

「んっ?なんで顔赤くしてんだ?」

「なっ!?!ち、違う!何でもないから!」

そんな羞恥にまみれた私の表情は、いつの間にか彼にも分かるくらい外に露われてしまっていた。

恥ずかしくなつて慌てて顔を両手で伏せるけど、もう手遅れに近いくらいに顔は朱色のように真っ赤に染まつていて、彼は私の顔色に興味津々だった。

「そういう慌てぶりはあるんだろう?」

「な、何でもな……わっ!」

「あつ!果南っ!」

そんな彼に迫られ、私は彼から離れようとした。

そしたら私とあろうかとか、視界を両手で遮つていたせいで砂浜に足を取られ、私は背中から地面へ体勢を崩してしまった。

ギョッ!

「……………っ!」

そんな倒れそうになった私を見た彼は、今一番に早く反応して私の右手を掴んでくれた。その瞬間に一瞬だけドキッとしちやっただけど、私が体勢を崩したことの反応に遅れたおかげで、遼も私に巻き込まれるように一緒に砂浜に倒れてしまう。

「ダメ! 起き上がれな……………!」

「うわあ!?!」

結果、とんでもない状況を招いてしまった。

「……………」

「わ、悪い果南……………」

「……………」

やばっ。心臓がドキドキしてる。

私は今仰向けに倒れ、彼は四つん這いで私に覆い被さるように倒れ、私と彼の顔は、わずか数センチの距離しかなかった。

次第に遼の顔を見るのが恥ずかしくなって、だんだん私の顔は、私自身でも分かるくらいに真っ赤に染まっていた。

「果南、顔、真っ赤だけど……」

「だ、大丈夫……だから、平気……」

私は恥ずかしさのあまりに、彼から目を逸らす。

でも彼は私を一点に見つめてきて、また私が彼にもう一度目を合わせたら、私の気がどうにかなってしまいそうになる。

そんな彼は、私に事を切り出してきた。

「果南、目、瞑っててくれ……」

「えっ……?」

「頼む。少しだけだから……」

どこことなく、彼の顔もほんのり赤い。

直射日光が当たるとは私から見て、逆光で彼の表情が見えにくいんだけど、だからといって顔の色まで見分けられないわけじゃない。

それで分かっているのに、私は彼の言うことに従ってしまう。目をギュツと瞑つて、迫りくる彼にドキドキ耐えながら、私は素直に従ってしまった。

「我慢……してくれよな？」

「……？」

けど、私は彼の行動が気になってしまう。

右目だけを恐る恐る開いていくと、私の目の前には彼の右手がすでにあつて、それにゾツとした私はまた目を再びギュツと閉じる。

『何かをされる』

そう直感した私は我慢した。彼に何をされても、決して何も文句は言わないって

……。

そう心に決めた途端、私の顔に何か触れた。

サツ、サツ……。

「……………」

額。私の額に、何か触れている感覚があった。

指で撫でられてるような感覚。仄かに優しく、心が安心するくらいに暖かかった。

その上で私は、またゆっくりと瞼を開いた。

恐る恐るな感じにだけど、私が彼に何をされているのかがとても気になって仕方がなかった。

「……………遼？ 一体何して……………」

「……………」

トント

『あはは…』と彼は頬を掻く。私に対してやってしまったという思いが、彼の表情から見て取れる。

だから、怒るにも怒れなかった。

正直に言うと、私をこんなにもドキドキさせた分や、私のこの胸のトキメキを今すぐ返してって大声で怒鳴りたいくらいなんだけど。

「……分かったよ。今回ばかりは、許す」

彼も悪気はなかったようだし、今回は許す。

でも次はない、って思ってたほしいところ。

そんなことを考えている時だった。

「あゝなゝたゝたゝちゝ!!!」

「「……っ!?!」」

私の頭上から、ダイヤが私と遼の2人に向かって大声で声を荒げている。というか、怒っている。

怒りの目が、それを物語っているから。

「こんなところにまで来て、よくまあ破廉恥なことが出来ますね! 2人にはお説教ですわ!」

「いやダイヤ。私たちは別に……」

「お黙りなさい果南さん!」

「あつ……ハイ……」

こうなってしまったダイヤは、もはや誰にも彼女の怒りを止められる術はない。ダイヤの後ろから顔を出している鞠莉は、右手を口に当てて『プフツ』と私と遼に対してからかうように笑っていた。

弁解する余地もない。彼もダイヤの表情を見てはきっぱり諦めているし。ていうか、元はといえば遼のせいであんなになったのだから、せめて怒られるのは遼だけにして欲しかった。

なんで、私まで……。

「さあ、お説教の時間ですわ!」

それでダイヤの説教は、日が暮れるまで行われることになった。私も遼も砂浜の上にて正座でダイヤの説教受けたから、足のあらゆる場所が悲鳴を上げていた。

「いつ、いたたたた……」

流石の私でも長時間ずっと正座をして、足が痺れないわけがない。説教が終わって正座を崩した途端から、ずっと足が麻痺している。

そんな私の隣で同じようにダイヤから説教を受けていた彼も、逆にどうして私に問いかけられるのか不思議でしかなかった。

「果南、大丈夫か？」

「う、うん。まあ何とかね……」

遼の足も、長時間の正座で足が麻痺している。

ダイヤの説教がとことん長かったおかげで、日も沈みかけて空も朱色。東の空から

は、少しずつ夜の空が顔を出していた。

「空、暗くなってきたわね……」

「そうですね。そろそろ日も暮れそうですし、鞠莉さんの別荘はここから近いのですか?」

「ええ!ここから徒歩10分からかしら?」

「そうですね。それなら、そろそろここからが退散した方がいいかもしれませんね!」

そんなこんなで、私たち2人を十分にお説教したダイヤは、とても清々しい表情をしている。そしてダイヤの発した言葉で、私たちはこの砂浜をあとにすることになった。それを聞いた遼は、念のためにと尋ねる。

「じゃあ、もう別荘に移動する感じ?」

「はいっ!海で遊び疲れたこの身体を、鞠莉さんが用意してくれた別荘で存分に癒しましょー!」

「……そ、そうだね」

私は遼の質問の答えを聞いてホッとした。

だって、足が痺れて身体もすごく疲れているし、正直もうこれ以上は動きたくなくなかった。

だから良かった。これで少し楽になれる。

すると痺れが収まったのか、私より先にゆつくりと立ち上がる遼。そしたら彼は、真つ先にまだ立ち上がれない私に歩み寄ってくれた。

「立てるか？」

「あつ。う、うん……」

私の目の前に差し伸べるその大きな彼の手を、私は躊躇わず手に取る。それからゆつくりと私を優しく立たせてくれて、私の身体も支えてくれた。

そしてあの時のことを思ってたのか、彼は優しく笑って謝ってきた。

「あの時は悪かったよ」

「……うんっ」

このときの私は、遼に何かしら許すような言葉を投げかければ良かったのかもしれない。

でも私は、彼の優しきで言葉が出てこなかった。理由のそれさえ、思い浮かばなかったほかに……。

どきっ……どきっ……

「……っ!? な、なにこれ?」

「んっ? どうした?」

「や、な、なんでもない……!」

「……?」

やばい! なに、これ!?

心臓の鼓動が、全然収まらないっ!

なんで!?! なんでなんで!?!

また、私の胸が高鳴り始める。

心臓に手を当てると、今度は前より大きく鼓動も早かった。それに気づいて驚いた私

は、つい口から声を出してしまい、危うく彼にばれてしまいそうになってしまった。

「……………」

今日の私、なにか変だ……。

遼に対して、こんなにドキドキするなんて。

~~~~~※※※~~~~~

「んん〜! Delicious♪」

「おい鞠莉、英語になってるぞ」

「だって遼が作ってくれたカレーライスが美味しくて美味しくて仕方ないんだも〜ん♪」

「まあ……それは嬉しい気持ちではある」

鞠莉の別荘での晩御飯。

特別に鞠莉から許可を得て、別荘のキッチンで俺は彼女たちのためにカレーライスを作った。食材は買い出しに行く必要もなく、隣接した食品庫に食材全てが揃っていた。

驚いたのが、カレーのルーも普通にあつたこと。

「聞きたいのですが、遼さんはいつから料理をするようになったのですか?」

「そうだな。俺もいつからだったか詳しくは覚えてないんだけど、母さんの料理を手伝うようになってから……かな?」

今に思えば、俺が料理を始めたきつかけは小さい頃から母さんの料理を手伝ってたことがきつかけなのかもしれない。

俺でさえはつきりとは覚えていない。でも、思い当たる節はそれしか思い浮かばないんだ。

「はつきりとは覚えていないんだが……」

「いいですわ。こんなに美味しいお料理を作ってくれた遼さんですから、何か料理が手に出来る方法を知ってるのかと思ひまして……」

ダイヤってば、料理をする事に少し興味を持つているような口調ぶりだな。

何気に俺を見て、料理が出来ることを羨んでいる表情が見てとれる。ダイヤ、そんなに料理が出来るようになりたいのかな？

「ダイヤは、料理出来るようになりたい？」

「……………まあ、少しは……」

ああ、どうやら上手になりたらしい。

俺から視線をそらして、にわかには顔色が少し赤くなっている。なんとなく察したわ。



「じゃあ気が向いたら、俺がダイヤに料理のコツを教えてやる。それで良いか?」

「……………いいんですか?」

「俺が教えてやるってんだ。良いんだよ」

「……………」

その瞬間、彼女の表情は緩んだ。

なんだ? ダイヤはそんなに料理が出来るようになりたいのか? ってツツコミたいくらい、彼女には何ともいえない表情だった。

なんつうか……………ウキウキしてる。

「あらら? ダイヤだったら、お料理を教えてもらうだけなのにどうしてそんなにウキウキしちゃってるのかしら?」

「……………っ! べ、別に私は……………!」

「もう照れちゃって!」

「ま〜り〜さ〜ん!」

しかしそれを鞠莉に見られ、ダイヤは弄られる。清楚で品のある彼女のわりには、と

てもそういう風には見えないときがたまにある。まあそれも彼女の一面といえ、ある意味納得はできるだろう。

そんなでもってダイヤは、自分を言葉で弄ってくる鞠莉に対してガミガミと説教をす

る。

ガタツ！

「……………?!」

その合間、唐突に果南は立ち上がった。

「……………ちそうさま」

「あら果南？もう食べたの？」

「うん。お風呂入ってくる……………」

すでに果南が平らげた食器には、わずかなカレーの残り。そして果南が食べる際に口をつけたであろうスプーンがあった。

果南はそれをキッチンの流し台に置いたあとで、足早にリビングをあとにする。そのとき一瞬だったが、果南は俺に目を配ったような気がした。

「「……………」」

一連の果南の動きに俺たちは目を向けてたおかげで、さつきまでの鞠莉とダイヤの会話も一瞬のうちになくなってしまっていた。

というよりか、今日の果南の様子を見ていて、変だと思わない彼女たちではない。鞠莉もダイヤも、今日の果南の行動を不思議に捉えていた。

「ねえ。今日の果南ってば変じゃない?」

「ええ……………変でしたわ」

「……………ああ。それは俺も思った」

満場一致。

ただ、今日の果南の言動に違和感を覚えていた俺たちは中で、一番そう感じる事が特に出来たのは俺自身だと自負できる。

何故ならば、今日の朝からずっと、果南の隣には必ず俺がいたからだ。

ビーチボールで遊んでいた時も

大波に飲み込まれた時も

俺がレジャーシートで寝ていた時も

ダイヤに説教されていた時は、それも含むべきかどうかは判断し難いが、果南の隣には、ずっと俺がそこにいた。

あらかじめ言っておくが、自慢ではない。

「もしかして果南さんは、私たちには絶対話せない何かを隠しているのでは……?」  
「What!?! また果南は、私たちに黙って隠しごとをするつもり!?! しかも、今度は自分一人で!?!」

それでダイヤがジト目でそう呟くと、それを聞いた鞠莉はテーブルを叩いて文句を垂らす。

確かに果南ならば、そうやって自分一人で何かを抱え込むことはよくやる。もうすで

に1度しているがな。だから鞠莉はこうして怒っているのだ。

けれども、ここで今、怒ることじゃない。

そうして俺は、鞠莉の怒りを鎮めた。

「落ち着け鞠莉。もしそうだとしても、またあの時みたいに強引に聞き出すのは元も子もないぞ?」

「うっ……。それは、分かっているけど……」

そうだよなあ。やっと自分の本心を語ってくれたというのに、またこんな状況になるなんて思ってもみなかったからな。普通に、俺もそうだ。

鞠莉の気持ちは、分からなくもない。

そういや果南は、今お風呂だったよな?

よしっ。こうなったらヤケクソだ。

「だから、果南は俺に任せてほしい」

「えっ……?」

「これでも果南と鞠莉の仲直りのきつかけを作ったのは俺だ。なくに! 心配すんな。あ

「いつが抱えていること、俺が全部暴いてやる」

2人の前でそう言った俺は、キョトンと俺を見つめてくる鞠莉とダイヤを尻目に食器を片付け、洗面脱衣所へ足を運んでいく。

だが俺が向かおうとしている場所を俺の行動で知った鞠莉は、俺を制止させてきた。きつと鞠莉は、俺を『デリカシーがない』とか言ってくるんだろうな。

「ちよつと待つて遼！どこに行くの？」

「どこって……風呂だよ」

「なっ!?今お風呂には果南さ……っ!?」

「おいダイヤ。なに顔赤くしてんだよ？」

「は、ははは破廉恥ですわ！」

と思つたら、変な妄想をしたダイヤがめっちゃ顔を赤くしていた。男女で一緒にお風呂だ。ダイヤにとつて破廉恥なことを考えてしまったんだろう。

そして若干、鞠莉も顔が赤い。

「今しかないと思ってるんだ。頼む」

「……………」

ダイヤは顔を抑えて、彼女から許可を貰うどころではないから、きつと鞠莉が許可してくれるだろうと思っていた。

けど彼女の口からは、許してくれなかった。

「……………ダメよ」

「……………そうか」

シーンと静まりかえる広いリビング。

まあ俺がいきなり果南がいる風呂に押しかけるのはダイヤの言う通り破廉恥なことではある。鞠莉の言葉に俺は仕方なくやめる決意を心の中でした。

が、すぐに鞠莉は言う。

「だから、代わりに私が行くわ!」

「……………え”っ!?!」

「ま、鞠莉さん!」

とんでもない発言だったよ。

ただ鞠莉の目は赤く燃え、いかにもやってやろうという意気込みが感じられた。多分あれから、鞠莉は果南とはちゃんと本音で語り合いたい。そう思うようになったんだろう。

「必ず私が暴いてみせる!」

「出来るか? 鞠莉……?」

「ふふっ! 任せて!」

やる気満々でウインクをしてみせる鞠莉。

鞠莉のやつ、成長したな。

「じゃあ果南に突撃してくるわね!」

「ああ。俺とダイヤは外から聞いているよ」

「オーケー!」



そして鞠莉は、鼻歌交じりに果南のいる風呂へと向かっていった。果南にいきなり鞠莉が押しかけたとして、果南がどんな反応を見せるか楽しみだ。

あわよくば、あっちの展開に行つてほしい。

『んっ。鞠莉、やめ……んっ』

『ふふっ。果南つてば気持ち良さそうな声が出てるわよ?もしかして……興奮してる?』

『興奮なんか、して……あんっ』

おっと、つい変な事を考えてしまった。

ダイヤの冷徹な目が痛い。

「遼さん?」

「なんだ?」

「今、いかがわしいこと……」

「お前みたいに破廉恥なことは考えてねえよ。俺はただ、果南の真意を聞きたいだけだ」

嘘は吐く。でも聞きたいことは本当のこと。

果南の物事の隠し事は下手くそだから、どうしてもそれが目について気になっちゃう。

今回は鞠莉のやる気ある姿勢を見込み、裸の付き合いで託すことになったけど、今の鞠莉なら何とかしてくれると思う。

やり過ぎはとて禁物だが、あれから本音で語り合おうとする姿勢は、見るべきものがある。果南も鞠莉と同じように素直に言いたいことを言えるようになっていかなければいいのになあ……。

Bannon!

「ハアイ果南!一緒に風呂入ろう!」

「ま、鞠莉?!なんで!」

「なんでって、私は果南と一緒に風呂に入りたいからよ!」

気がつけば、意気揚々と鞠莉は果南がいるお風呂に姿を現しているようだった。

俺の想像が正しければこのあと……

「それっ!」

「ひゃん! 鞠莉、どこ触って……!」

「んんっ? 果南またBIGになった?」

「なつてないよ! 訴えるよ!」

やっぱり予想通りだった。

鞠莉は入って早々に果南の胸を触ってる。すぐに触れたってことは、果南はまだ頭か、身体を洗っていたに違いない。果南の声も直後に聞こえたから、隣のダイヤは顔を真っ赤にしていた。

ていうか、俺よりは余程ダイヤの方が破廉恥だと思うがな。また彼女は変な妄想をしていやがる。

「は、はは破廉恥ですわ……」

「ダイヤ顔真っ赤だぞ? 大丈夫か?」

「ええ、問題ありませんわ」

俺、そう言ってくるダイヤが逆に心配だ。

何気に果南と鞠莉、2人のやり取りに耳を傾けているし、ダイヤも何かと気になってるようだった。

「まあそれは置いといて、っと！」

「……………？今度はなに？」

「まあ、ちよつとしたことよ」

すると、鞠莉は本題に話を切り出した。

雰囲気も、その瞬間から一変した。

「果南、今日は少しどころなく変だったわね」

「なに突然？藪から棒になにさ？」

「まあまあ、話はしつかり聞きなさいよ」

チャプン……………チャプン……………♪

水の音……いや、お湯の音かな？

波立つ音が2回鳴ったから、きつと鞠莉がお風呂に浸かったのだろう。床に打ちつくシャワーの音が続くから、まだ果南が身体はどこかを洗っているに違いない。

女の子は、美容に敏感だからな。

あつ、波立つ音2回ってというのは、片足ずつ足を湯船に入れた時に鳴った音だ。一気に両足でお風呂に入ってみろ。最悪転んで『The End』だ。

「私ね、今日の果南を見ててずっと思ってた」

「私を見て? どういうこと?」

そんなとき、鞠莉は思い思いに話し出す。

鞠莉も今日の果南の言動を不審に思ってた場面があった。だから、彼女自身も早く果南の真意が聞きたいんだろう。

そんなもって俺もダイヤも風呂で繰り広げられる話に耳を傾ける。さつきも言ったけど、俺もダイヤも果南の本心を知りたいわけだから、これは本当に仕方のないことなのだ。

そしたら鞠莉は開口一番、果南に対して――

「果南も、誰かに恋してるんだなあ〜って!」

「ええ!?!わ、私が……恋してる!?!」

「……っ!?!」

俺らも信じられない言葉を言い放った。

いや、うん。本当にまさか鞠莉からそんな言葉が出てくるとは思わなかったから正直驚いてる。

……『恋』ねえ。

「ほら、顔が赤くなった♪その果南の表情が何よりも証拠だから、確実に間違いないわ」  
「な、なな、ななな何で私が恋なんか……!」

「果南が恋してるなんて、マリーは顔を見ただけではつきり分かったわよ?このマリーは、果南が考えてること全てがお見通しなんだから♪」

今、鞠莉がドヤ顔してるのが安易に思い浮かぶ。そして鞠莉に指摘され、顔を真っ赤

にしている果南さえも容易に想像が出来る。果南も年頃の女性だ。やはりあいつも恋はするんだなって思った。

そういや、鞠莉は果南に対して『果南 ムム』って言っていた気がする。もしか、果南以外の A q o u r s メンバーの中で誰か恋をして、それを鞠莉はすでに知っているということか？

……もう少し、話を聞いてみよう。

「それで？果南は告白はするの？」

「うっ、私は……無理だよ……」

「どうして？自分の想いをその人にそのまま伝えるだけなのよ？」

「それが出来ないから私は無理だって言ってるの。それに、鞠莉だって出来なかつたくせに……」

「……………」

な、何なんだこれは？

やや話が拗れてきているような気がする。

な、なんか鞠莉までも実は恋をしてみました発言を繰り返す果南。鞠莉も恋してたん

だって内心すごく驚きながらも、ただいつそんな事をしていたのも少し気になった俺である。

隣で話を聞いていたダイヤでさえも驚き、また俺とダイヤは2人の話に耳を傾けた。したら次の瞬間、果南は衝撃の発言をした。

「遼のこと、好きだった」くせに……」

「……………えっ？」

「……………はっ？」

鞠莉が……俺のことが好きだった？

その時俺にとつて、果南の口から発せられた思いもよらない言葉に驚きを隠せなかった。そして同時に、俺に色んな感情が押し寄せてきて、鞠莉が俺に好意を抱いていたことを、どんな風に捉えればいいのか全く分からなかった。

驚けばいい？それとも嬉しく思えばいい？

一つ年上の女友達から好意を抱かれるなんて事、俺には唐突過ぎて考えられなかった。

すると鞠莉は口を開く。



「果南。もう私は彼に好意は抱いてない。今は彼女が彼のことを好きだし、心苦しいけれど、私はもうきっぱり諦めたわ」

「……………」

「胸に手を当てて、じっくり考えてみなさい」

「……………」

鞠莉が言うにはだけど、今はもう俺に対しては好意を抱いてはいないらしい。

どうしてそうなったのか？不思議なところはあっても、必ず理由は何かしらあるはずなんだ。ただこれは多分、今は聞けないかもしれない。

てか、『彼女』って誰だ？

俺の知ってる人物か？それとも鞠莉だけが知っていて、俺には全く面識のない人物か？鞠莉が言っている言葉が気になったが、よく分からなかった。

「でも、私は告白なんかできない。私を後押ししてくれる鞠莉には悪いけれど、もう私は

告白する権利なんてない」

「なんでよ果南。どうしてそんなこと……」

「私は、やつちやいけないことをしちやったんだ」

「……？」

自分は告白する権限はないと、果南はきつぱりとそう言い切る。それなりに、彼女はそう心に決めた理由はあると思うんだけど、気になる。

隣で必死になって聞いているダイヤでさえ、小学生からの友達が恋愛話でいきこぎを起こしていることに驚いているし、この話には言うまでもなく、彼女も気になっていた。

チャプン……チャプン……♪

また、湯船が波立つ音。

今に思えばシャワーの音がなくなっていたから、果南は身体を洗い終えたんだろう。すると果南は風呂呂に入った後、きつと正面を向き合っているであろう鞠莉に向かって話を切り出す。

「鞠莉、聞いて……」

「……なに？」

この時は俺でも口調で分かった。

こういう真っ直ぐで、キレのある口調を言う時の果南の表情は、真剣で、眼差しも鋭い。

そして果南は言い放った。

俺もダイヤも、夏なのに背筋が震え上がったよ。

きつと鞠莉は絶望し、怒るだろう……

バ バ パ  
シ シ シ  
ン ン ン  
ツ ツ ツ  
!!! !! !

言うまでもなかったかもしれないね？

## #57 天罰と真実と黄昏

「……………はぁ……………」

枕に顔を埋め、ネガティブなため息をするたびに顔を一度離す。私は何の意味のないこんな行動を、何度も何度も繰り返していた。

ただね、こんな風にどうしようもない状況を作り出したのは、紛れもなく自分自身であることは自覚していた。

というのも、今日はあれから数日後。今日はA q o u r sの練習もなにもない、単なる休日である。

「……………」

鉛みたいに重たい自分の身体を起こし、カーテンをゆっくり開いて外を見る。

「……雨か」

午前9時。今日は生憎の大雨。

雲もいつもよりどんよりしてて、私の感情がそのまま天気に見れてるようで、今日の外に出ようにも出られないような天気模様だった。

でもそれでいいや。今日はなんか外に出たくない気分だし、家でゆったり過ごすのも、たまにはいいかもしれないね。

うん。今日は家にしよう。

そう心に決め、私はカーテンを閉じ、再び布団にくるまって深い眠りにつこうとした。けど、その眠りを妨げる人物がやって来た。

トンツ！トンツ！トンツ！

「……………?」

最初はお父さんかと思った。私に用事があつて、何かしらで部屋に訪ねてきたんだと思つていた。

でも、それはただの私の思い違いだった。

「果南? いるのか?」

「……………っ!」

部屋の外から聞こえたその声を聞いて、それが誰なのかを間違える私ではなかった。その声は間違いなく、彼の声そのものだった。

ガチャ!

「よっ、果南」

「遼……………」



私が自ら部屋のドアを開けると、目の前には遼の姿があった。あの大雨の中で来たせいか、着ていた服もところどころ濡れていた。

何しに私のところにやってきたのか？ 私は、彼を部屋に招き入れた後でそんなことを尋ねた。

「何しに来たの？」

「別に。果南と話に来たのさ」

「……話、ねえ……」

話をしに来たって……。

そもそも、こんな朝はやくから来るなんて思わないよ。しかもこんな大雨の中にも関わらず……。

「なにでここまで来たのさ？」

「傘をさしながら自転車で船着場まで来て、あとはなにで来たかも分かるだろ？」

うん、そう……だよね。

船着場からこつちまで来るには、手段はフリーしかないんだもの。それしか方法はないもんね？

あ、あははは……。

本当……私はなにをやってるんだろ？

こんな他愛のないやり取りをしてるだけで、彼とは何の会話にもなっていない。

「……なん！果南っ！」

「……っ！な、なに遼？」

「なに？じゃねえよ。さっきから呼んでんのに」

「あつ。ああ……ごめんごめん！ちよつとぼーつとしちゃって、何でもないよ？」

「……………」

そしてこんな風に彼に名前を呼ばれても、反応がいついつい遅れてしまう。本当に、あれから私ってばどうしちやつたんだろう？

そう物思いに悩んでいた矢先、彼は口を開く。

私の胸を撃ち抜くに等しいその言葉に、私は何も言うことが出来なかった。

「まだ、落ち込んでんの？」

「……………」

「まあ仕方ないよな。俺もダイヤも聞いちまった。それにダイヤが怒り狂うには申し分ないことだとは思うけどな……………」

「……………うん」

あの時、私は久しぶりにダイヤに怒られた。

そして、鞠莉に3回頬を叩かれた。

記憶に新しい。私にとってはとても惨めな出来事で、正直遼に対して顔を合わせたくなかった。

だって、遼も知ってしまったからさ。本当に彼にも申し訳なく感じているんだ。

あの夏祭りの真実を。

「でも、遼は何も思わなかったの？」

「えっ……………」

再び私は口を開いて、彼に気持ちを尋ねる。彼から何かを言われる、その覚悟を持つ

て。

「だって遼は、曜から告白されそうだったんだよ？それを……私がルビイを“利用”して……」

「……ああ。そうだったな」

あの時に口にしたことを繰り返して話をし、それ聞いてた彼は、言葉を口にしながら『うんうん』と首を縦に降る。

もう私は、あの時の夏祭りのことをもの凄く後悔しているの。別に何も、ルビイを利用してまで曜の告白の邪魔をしなくても良かったの……。

はあ、私って本当バカ……。

ばかなんって言われても文句も言えないよ。

「俺も最初は正直驚いたさ。まず曜が、俺のことを好きだったってことがさ……」

「……うん」

「それで俺たちを呼びに来たルビイちゃんが、実は果南の指示で告白の邪魔をしに来たってこともさ」

「あの時は……うん」

ああ。何となく彼の気持ち分かる。

遼が『怒ってない』のは、彼の口調や雰囲気で何となく分かった。ただ今の彼の言葉に対して、私がどういう言葉を返せばいいのか分からなかった。

でも私自身が感じたことは、彼よりもっと大事な友達に謝らなければならないということ。

鞠莉にダイヤ。そしてルビィと曜の4人。

そんな時、彼は私に口を開く。

それは怒りではなく、優しさ溢れる言葉。

「でも俺は怒ってない。逆に何というか、いろんな意味で考えさせられたよ」

「えっ？それって、どういう……？」

「それはな……うーん……」

そう言いながら、彼は下に俯き考える。

今回の一連の中で起きたことで、色んな『意味』で考えさせられたって、どういうこ

と难道らう？

すると遼は、私にある事を尋ねてきた。

「ていうかその前に、果南に聞きたい事がある」

「聞きたいこと？ 一体なに？」

「果南はさ、曜の告白の邪魔をルビイにさせたって言うていたけど、ルビイちゃんはそれを『否定』はしなかったの？」

「……………」

私がルビイちゃんを利用する時、彼女に私の思いを話し、ルビイちゃんは躊躇いなく『分かった』と了承してくれたのかどうかを彼は尋ねてきた。

何かしらでそれを聞く意味があるのかもしれないと思いつつ、私は全てを彼に話した。

「……………うん。ルビイに事情を説明して、2人の会話に割り込むように邪魔してきてって話をしたんだ」

「そうか。なるほどねえ……………」

首を縦に振り、相槌を打つ遼。

こんな話を聞いて、遼は一体なにを考えているんだろう？彼にとつて大事なことなのかな？それともただ聞いてみただけなのかな？

彼にしか分からない事だらけで、正直、自分の頭がこんがらがってきちゃった。

彼のことで思い悩んでいると、遼は私を見かねては、自分の思ったことを私に向けて話をしてきた。その言葉には遼自身が自信を持ってそう言えると、私はそう感じる事ができた。

でも、幾ら何でもそれは『嘘』だと信じたい。

「なあ果南。もしかしたらルビイちゃんもさ、実は俺のことが『好きだった』んじゃないかな？」

「えっ……!!?ええ〜!!」

まさかのルビイまでもが、遼のことを好きだったなんて思えなくて、私は彼の発言に驚かされた。

そして彼はそう言うのと、次に私に向けてその根拠だったり、その理由を話してきた。

「な、なんでそんなことになるの!？」

「理由としては、果南のお願いになんの躊躇いなくルビィちゃんは請け負ったことだ。普通ならそんなお願い、すぐ請け負うはずないだろ？」

「……ああ、うん。確かにそうだけど……」

彼の言うことは理に適っている。

何故かというと、当時のルビィが実は本当にそうだったからだ。

あの日

『よ、曜さんの告白の邪魔をしてほしい?』

『うん。遼と曜が少し深い茂みの中に入っていったから、出来るだけ自然に、2人のことを探してきた感じで告白の邪魔をしてほしいんだ』

『………分かりました』

普通ならそんなお願い、私なら躊躇う。

人の告白を邪魔するなんて出来るわけではない。



なのにルビイはやってみせた。茂みから遼と曜とルビイが出てきて、彼女からOKサインが出たときは本当に驚きを隠せなかった。

って、今そんな感心してる場合じゃないけどね。

「そうじゃなきや、果南のお願い聞かないだろ?」

「うん。そうだけど、でもそれが本当なのかルビイに直接聞いてみないと分からないよ?」

「そうだな……」

そもそも、ルビイがそんな思いがあつて行動したとは限らない。だから遼の考えは当たっているかもしれないし、外れてるかもしれない。

この事は、本人に聞いてみるしか……。

「じゃあルビイちゃんの家に行ってみるか?」

「……………えっ?」

「そうすればダイヤに必ず会えるはずだし、そこでダイヤにきちんと謝らないとね」

「……………」

私の思っていたことが……今現実になった。

いや、これは私から地雷を踏んだんだ。

今からダイヤに謝りにいくのと、ルビイにあの時の事実を確かめにいく2つのこと。ただそうしなければならぬ時が来たんだと考えたら、案外、自分が抱え込んでいたことが少し楽になったような気がした。

「果南、もしやビビってる？」

「……まあ、少しだけ……ね？」

「俺もフオローしてやるし、何とかなるさ」

「ええ……なんか不安だなあ……」

遼もまたね、私を助けてくれる言葉を投げかけてくれた。だからなんだろうな？ なんだか彼がいるだけで心が暖かくなってきた。

やっぱり……これが『恋』なんだろうね？

「でも……ありがとう」

「……………まあ、気にする事ないよ」

私はにこりと笑み、彼に対し感謝のお礼を言う。遼は知らん顔でそっぽを向くけれど、少し恥ずかしそうに頬を赤くして、頬をポリポリ搔いた。

それを見て、また私は笑った。

彼の優しさを感じたおかげで、心の奥底からものすごく晴れやかになった気分だった。

やっぱ私、遼のことが『大好き』みたい。

ただ恋人にはなれない。理由はない。

ただ一つ言えるなら、私は彼の恋人になる資格はない。あんな酷いことをしちやっただし、これは私に対する神様からの天罰。

なんか、悲しい……かな？

~~~~~※※※~~~~~

家を出た俺と果南は、淡島からダイヤの家まではものの40分くらい時間がかかった。

天気が雨じゃなかったら俺の自転車でもっと早くダイヤの家に着くことが出来たのだが、今はそうもいつてられないので我儘は言わないでおく。

ひよんな説明をしていたら、俺たちはダイヤの家の目の前までやって来た。

「ほれ果南、着いたぞ」

「うん。やっぱり……やめた方が……」

「ここまで来たんだし、帰る選択肢なし」

「うう……」

約40分かけてやっと来たのに、いざダイヤに会うと考えてしまった果南は、追い返されると思ったのだろう。いつもより随分と萎縮している。

色々と厳格なダイヤだからな。仕方ないよな。

ただ大切な妹を友人に利用されたって、ダイヤが勘違いしているんだけどさ……。

ピンポーン♪

「はくい！あら？あなたたち……」

「こんにちは、金子さん」

「こ、こんにちは……」

家のインターホンを鳴らし、玄関からはダイヤとルビイちゃんの母、金子さんが顔を出した。

最初は俺たちがやって来てキョトンとした表情を見せたが、すぐに打って変わり、俺と果南に対して訪ねてきた用件を聞いてきた。

「今日はいかがなさいました？」

「ダイヤとルビィちゃんに話があつて……」

「2人なら、今部屋にいるはずですよ」

「ありがとうございます」

「あ、お邪魔します……」

俺が金子さんに用件を話し、2人が家にいることを金子さんの話で知った俺たちは、家上がり2人がいるであろう部屋に足を運んだ。

いつになくたどたどしさが滲み出ている果南。また自分が怒られるんじゃないかと、多分果南自身もそう思つてるんだろう。

ただあの時のダイヤは、果南が発した言葉だけに捕らわれ、怒りに身を任せていた感があつた。

だからルビィちゃんがあの事を隠していたなら、ダイヤにもちゃんと話をしてもらつて、尚且つこの問題も早々と解決したいところ。

あわよくば、鞠莉のところにも……。

「それは一体どういうことですか?!」

「……………?!」

そんな時、廊下にも聞こえる怒声が響く。

ビクンツと、俺も果南もその怒鳴り声には身体を反って驚いたが、その声を主が分かった以上、俺は足を部屋へと急いだ。

「だからお姉ちゃん! ルビイの話聞いて!」

「そんなお話は全くの嘘っぱちですわ! 私は絶対に信じませんよ!」

「……………」

なんとなく俺は察した。多分果南も。

俺は視線を後ろに運ぶと、果南もこっちを向いていて、俺に視線を送っていた。果南も俺と同じことを考えていたようだった。

それで俺と果南は部屋の前まで辿り着き、すぐには開けずに2人の会話を耳にする。

「本当だよ！ルビイは果南さんの話を聞いて、何も知らなかったわけじゃない。ルビイはね、遼さんのことが好きだからそうしたの！」

「だからそれが嘘だと言っているのです！」

姉妹喧嘩の過激さは伊達じゃないようだな。

けれど、まさかルビイちゃんがここまでダイヤと言いが合いが出来るとは思わなかった。勿論だけど、いい意味でだよ。

ぶっちゃけ、俺たちが知りたかったことをダイヤにも話してくれてある意味助かったと思っている。『1対1』という誰にも邪魔されない雰囲気の中で、ルビイちゃんはダイヤに話をしている。

その最中に、俺たちが割って入った。

「いいや、それは嘘じゃないらしいぜ？」

「なっ！遼さん!?!か、果南さんまで!?!」

「や……やあ、ダイヤ……」

部屋の襖を颯爽と開いてなかに入ると、ルビイの両肩を両手で掴んでたダイヤは、俺と果南を見るや驚きの声を上げた。

まあ、連絡もなしにダイヤの家にやってきたわけなのだから、ダイヤが驚くのも無理もない。

そしたらダイヤは立ち上がると、俺の後ろから顔を出している果南に対して、ズカズカと迫りながらルビイちゃんの事について口を開いてきた。

「どういう事ですか！果南さん！」

「ダ、ダイヤ！まず私から話を……！」

「まさかルビイに口封じまでしていたなんて、もう果南さんは最低です！帰ってくださいいー！」

鬼気迫るように、そして超獰猛に、ダイヤはまた怒り任せに果南へ文句を言いまくる。さつきルビイが言っていたことを、ダイヤは全く真に受け止めていないようで、全くやれやれって感じ。

際には『帰れ』とダイヤは言うもんだから、今とても貧弱な果南とダイヤの間に入って、俺が代わりにダイヤと話をした。

「待てよダイヤ。俺と果南は、ルビイちゃんにあることを尋ねたくてやってきた。今はそんなことは後にしてくれ！」

「ですが！果南さんはルビイを……！」

「お姉ちゃん!!!」

「……っ！」

そしたら今度は、ルビイちゃんの怒声。

俺とダイヤの会話に割って入り、ルビイちゃんはダイヤの正面に来ては、姉に対して帰り張り上げながら何度も同じことを説明した。

それを聞いて俺も果南も納得した。

何故、聞きたいことが聞けたからだ。

「ルビイは何度も言ってるよ！ルビイは果南さんのお願いを聞いて、それでルビイの意志で、曜さんの告白を邪魔したって！」

「………やっぱりそうだったのか」

ルビィちゃんは、そうダイヤに告げた。

でもそれは俺たちが来る前からだ。ルビィちゃんは必死にダイヤに対してずっと話していたはずなのに、ダイヤはそれを信じず、真実を受け入れない。

いや違う。今のダイヤの心情に当てはめるなら、『認めたくない』というのがしつくりくる。

単にルビィちゃんが果南に利用されていたたわけじゃなく、ルビィちゃん自身が意思を持つて、果南のお願いを真つ先に受け入れたという真実に、ダイヤはそれを受け入れたくないようだ。

「ルビィ……」

「すごく悪いことだってルビィも分かっている。でもルビィは……遼さんのことが大好きだから！」

「……………」

ルビィちゃんは、俺の目の前でそう言い放つ。

曜の告白の邪魔をする。そうしようとルビィちゃんを突き動かしたのは、やっぱり俺に対しての好意によるものだった。

それを聞いたダイヤは戸惑いを隠せない。何しろ妹が自分の友人に好意を抱いていたこと自体に驚いているはずだ。

だがダイヤは妹の話に対して一つ呼吸をすると、一連の話の中で自分が考えたことをルビイちゃんに向かって話を始めた。

「……分かりました。ルビイ、あなたが遼さんのことをとても好きだということは理解しました」

「お姉ちゃん……!」

「ですが、例え好意あつての行動だとしても、同じグループメンバーの告白の邪魔をしたということは、到底許されることはありません!」

「うん……ごめんなさい……」

ダイヤはルビイちゃんがした行動は許されることではないと、彼女の口からはとても強い口調で言い放たれた。

ダイヤの言葉にルビイちゃんは萎縮し、頭を下げ謝り、俺も果南もそれに口を出さなかつた。

するとダイヤが、ルビイちゃんに告げる。

「だからルビイには、『お仕置き』です！」

「……………」

「お仕置き……………」

「なんだよ、お仕置きって?」

『お仕置き』

途端、ルビイちゃんはビクリと身体が跳ねる。

その言葉にとっても恐怖を感じている様子で、俺も果南も彼女の発言に思わず唾を飲み込んだ。

「これは貴方たちが知ることではないので、どうか2人は帰っていただけますか?」

そしてダイヤは俺たちには帰って欲しいとお願いしてきた。『お仕置き』というものを少しでも見てみたい気もするが、彼女がそう言うので、仕方なく立ち去ろうと思う。

果南がダイヤに、ちゃんと謝ったあとでな?」

「分かった。でもその前に一つだけ……」

「……? なんですか?」

「……ダイヤ、私からなんだけど……」

「果南さん……」

俺が発見した言葉に合わせてくれた果南は、俺の背後からゆつくりとタイヤの方に近づいていく。

俺からしてみれば、雰囲気はピリピリとした緊張感に包まれていくような感覚は、俺の肌にはヒリヒリと伝わってくる。

「……………」

「……………」

しばらく2人は見つめ合った。それで俺もルビィちゃんも何も言わず、ただ2人の行く末を見守ることだけに徹した。

そうして果南は、ダイヤに謝った。

深々に頭を下げ、申し訳ないと素直に。

「ごめん。私……ダイヤを悲しませることをした。だから、本当にごめん！」
「……………」

ルビイちゃんが許されなかったことをしたのなら、私はもつと許されなかったことをしたと果南は思っている。ダイヤは果南が謝ってきたのを正面に見て、表情は全く変わらず、彼女は何も話さない。

そう思っていた矢先、ダイヤはまた一つため息をついたあとで、果南に向かって話をする。

腕を組んで、頭を深く下げたままの果南を見下すように……。

「果南さんも果南さんですわ」

「うん。それは分かっている……」

「反省……していますか？」

「それは勿論！反省しないわけ……」

「ならば分かりましたわ」

「えっ……？」

ダイヤの超意味ありげな言葉に、果南はふと顔を上げる。果南との2人とやり取りを聞いていると、どうやらダイヤは少しだけ果南のことを許したようだった。口調で何となく分かったよ。

「少しだけですけれど、果南さんのことは……許して差し上げますわ」

「……っ！ありがとうございます〜！」

「……ほっ」

安心した。ひとまずホッとした。

許してもらえないかもしれないという悪い雰囲気ではあったけど、何とか許してもらえたようだ。

と思っていた瞬間、そんな安心も束の間だった。

「ですが、果南さんも受けていただきますわ！」

「……えっ？な、何を？」

「決まっていますわ！お仕置きです！」

ガチャン！

「……!?!」

「え、えっ!?!」

俺は目の前で起こっていることに絶句。

果南はダイヤから発せられた言葉に驚愕している間に、ダイヤによって両手を背中で拘束された。

「フッフッフ。これでもう逃げられませんか」

「ダイヤ!?!ここ、これって!?!」

「手錠です。鞠莉さんから頂いたのですわ」

「ま、鞠莉から!?!」

使用した道具は手錠。これは俺も驚いた。

まさか、お仕置きにそんなものを使うなんて思いもしなかったし、ていうか鞠莉から

貰ったなんて今初めて聞いたことだし……。

「ていうかこれ、ダイヤ外してよ！」

「こら、暴れてはいけませんわ」

俺が考えている間にも、ダイヤはそちのけでお仕置きの準備が進められていた。果南が暴れるのを防ごうと彼女をベッドへ寝転がし、仰向けの体勢にダイヤはさせていた。

でもそれでも尚、手錠を外そうともがく果南。

ガチャン！ガチャン！

「外してダイヤ！私、お仕置きやだよっ！」

「そのお願いは拒否しますわ。なにせ、果南さんも受けて当然のことをしたのですから！」

「そ、そんなあ……」

ああ……絶体絶命。

そして何より、凄く「デジャヴ」を感じた。

手錠で拘束しベッドに寝転がし、抵抗も出来ないあいつをひたすら愛撫していたことを思い出した。

『私ね、ずっと……ずっと遼くんのこと……！』

そしてふと思い出す、あいつが言い放とうとしていた言葉。果南が事実を話してくれたあの時から、あいつが一体なにを言おうとしていたのか？それも何となく、ある程度予想もついた。

こういうのもアレだけどき、ここで果南を置いていき、今からあいつの家に行こうと思う。いい加減にこっちもそろそろ決着をつけたいだから。

果南のことはダイヤに任せておこう。

なにより果南なら、この後で鞠莉の家に行つて、ちゃんと謝ることは出来るだろうか。もうあいつは大丈夫だろう。

そうして考えているうちにだが、ダイヤの果南に対するお仕置きが始まったのだ。た。

それはまさに、『地獄』と呼ぶに相応しい。
俺の背筋が、氷漬けされたように凍るくらいに。

「それでは、お仕置きのスタートですわ！」
「や、やだ！私、やだあああああつ！」

じゃあな果南。無事であることを祈るよ。
そして、鞠莉とまた仲直りが出来ることもな。

~~~~~※※※~~~~~

空が青い。そして日差しが強い。

今まで空は曇っていて、雨さえ降っていたのにも関わらずだ。今では太陽が顔を出して、沼津の街を燦々と照りつけていた。

「……………」

そんな中で、私こと渡辺曜は、家の近くの防波堤の上であぐらをかき、涼しい海風に当たっていた。

クアツ！クアツ！

鳴き声とともに私は頭上を見上げると、私の真上でカモメが2羽飛んでいた。じゃれあうように。追いかけてこするように。

「……………」

その2羽のカモメに、私は無意識に手を伸ばしていた。届かないことは分かっているのに、私はそれをあの2人として見た時、ふと悲しい思いになってしまった。

「……………」

川を跨ぐように飛んでいる2羽のカモメは、次第に海の方へと飛んで行ってしまった。『遠く』へ、行ってしまったのだ……。

「……………はあ……………」

2羽のカモメを見届けた後で、私は俯いて思わずため息をつく。

あれから私は、彼とも全く話せていない。理由は凄く単純。彼と話をしようとする、どうしても頭に“あの日”と“あの場面”を思い出してしまふから。

頭から切り離すことが出来ないくらい、私はアレを衝撃的に感じてしまっていた。

だから正直に言ってしまうと、ここでのんびりと海風に当たってるなんて全くの嘘。ただ単に私は、ここで黄昏ているのだ。

ただよくこうして風に当たるようになったのは、多分「あの日」からだと思う。

もしそうじゃなかったら、こんなにも「哀愁」という感情を私は感じることもなんてない。こんなことは全部……

ダメだダメだ。こんな事考えてちゃ……!

頭の中で思い立ってはいけない『感情』を出してしまったことに、私は頭をブンブンと横に振る。

友達なのに、あの子に対してこんな感情を抱いていたら、彼女……いや、みんなに嫌われる。

そんな風に私が頭を抱えていると、私は背後から声をかけられた。

「おい。そこで何やってんだ?」

「……っ!」

私はその声に酷く驚いたけど、すぐに後ろを振り返ると、自転車を停めて、私へと視線を向けていた彼の姿があった。

「曜がそんなところで黄昏てるなんてな」

「遼……………くん……………」

「そんなに何かで悩んでるのか？」

「……………っ」

それで彼はそう言って、私の元へゆつくりと歩み寄ってくる。本当なら彼を見た瞬間、私はここから彼から逃げようと思った。

何故なら、彼の隣は私じゃないから

何故なら、彼の隣はもう既に満席だから

だから逃げたかった……………のに……………

「……………わかつちやう？」

「ああ。振り返ったとき、悲しい顔してた……………」

「……………」

『全て』を見透かしたような声で私に尋ねてくるから、私は彼から逃げられなかった。



なんかもう……いろんな意味で辛いや……。

優しく私を介抱してくれる彼に対して、逆に私は罪悪感がものすごい勢いで溢れていた。

遼くんには梨子ちゃんがいるのに、どうして私をこんなにも優しくしてくれるのか分からなかった。

すると彼は、私に向かって話す。

「別に、無理に話さなくて良い」

「えっ……?」

「ただ俺は、お前に……話が聞きたくてここに来たかっただけだからさ」

「はな、し……?」

左手の人差し指で頬をかきながら、遼くんは私に向かってそう言ってくる。横顔だからか、はたまたは太陽のせいなのか?彼の顔が少し赤かった。

というか彼の言う話って、一体なんだろう?

「なに?話って……?」

「まあ、別に大したことじゃないよ。でもこの質問には、2つの選択肢で答えて欲しいんだ」

「どういうこと？」

「つまり『Yes』か『No』で答えてほしい」

「……っ！」

その話の事を尋ねながら、私は遼くんの話聞いていくと、どうやらとても大事な話のようだった。

だから私は遼くんの話に耳を傾け、彼の問いかけに答えようと思った。

「分かった。その2つのどっちかで答えるよ」

「サンキュー。とても助かるよ」

そしたら、私もすごく驚いちゃった。

彼が発したその言葉それ以前に、話をする内容がそんな話だったとは思わなかった。度肝を抜かれるって、こんな感じなんだ。





「聞きたいことにしても程があるよ!!」

遼くんの口からさ、まさかそんな言葉が出てくるなんて思いもしなかったし、考えてもいなかった。

だから、遼くんがその質問をしてきたその意図を聞くより前に、私は動揺で慌てふためいた。本当、驚きしか感じる事が出来ないよ……。

「まあそうだよな。お前の気持ちも分かる」

「……………」

そう言って、彼はうんうんと首を縦に降る。

そんな遼くんを見ていて、私は彼の言動を不思議に思わないわけがなかった。

遼くんは自分自身で、自分が何を言っているのか分かっているの？

だって、自分から『好きか?』だなんて遼くんの口から言うはずがない。これは、私が自信を持って言えること。

ただ、なんで遼くんが知ってるの？

「でも、どうして……?」

「んっ? 何がだ?」

「どうして? いつ私が、遼くんのことを好きだって分かったの? もしかして、本当は気づいてたの?」

「……………」

私はあのとき、遼くんに告白出来なかった。

なのに彼は、もはや全てを知っているかのような口調ぶり、私に対して話を向けてくる。どうして遼くんは、私が『好き』だってことを知ってるの?

もしかして、誰かから聞いたの?

そんなとき、私の質問に口を閉ざして黙っていた彼の口は開く。すると開口一番、彼は驚きの言葉を私に言い放ってきた。

「気づいたというか、聞かされた」

「えっ? 聞か……された?」

「そうだ。全部、果南から話を聞いたんだ」

「ええ〜!」

彼の口からは、果南ちゃんの名前が。

遼くんの話聞いていくと、どうやら果南ちゃんからその話を聞いたみたい。私はその話にも驚きを隠せなかった。

この場合、私は果南ちゃんに怒るべき？

それかそれとも、感謝するべきなのかな？

「果南ちゃんから……全部？」

「ああ。俺に全部晒け出してくれたよ」

「はあ……果南ちゃん……」

そんな2つの選択肢で考えていた矢先、遼くん言葉聞いた私は、顔を下に俯かせて脱力した。

果南ちゃんが自ら遼くんに話をするなんて、もしかして果南ちゃんは、私のことを思っただろうか？

確かに私はあの日の後で、果南ちゃんに告白は失敗してしまったことは、鞠莉ちゃんよりも一早くそのことを伝えていたのだ。

だから……かな？

これはもう、果南ちゃんから直接聞いてみないと分からないかもしれない。ただ残念ながら、今果南ちゃんはここにいないけど……。

「複雑な心境のようだな、曜……」

「まあ、ね。ちよつと驚いてる」

私の心境を、表情で読み取ってくれた彼は、私の気遣ってそこまで深く入ってこなかった。

それで彼は、私に話をしてくれた。

内容は、私が遼くんを恋をしていたことを知ったあとのお話。当時の遼くんも、最初はすごく驚いていたみたい。

「でも俺も、曜が俺のこと好きだったなんて初めて聞いたときは『嘘だろう？』って最初は思ってた」

「むう。それって、私に好かれてるの嫌ってる？」

「そういう意味じゃない。普通に驚いた」



果南ちゃんの話の話を全て聞いてしまった遼くんは、その後で色々と考えたんだそう。

この私が遼くんのことを好きで、あの夏祭りの日に実は告白をしようとしていたって知って、幼馴染の私に対して驚愕するばかりだったみたい。

それを聞いていた私は、その事を嬉しく思うべきかで思い悩んでいた。理由は、やつと私の気持ちに遼くんが気づいてくれたけど、ふとあの場面を思い出してしまうと、どうしても嬉しくなれないから。

「そしてそう考えていくうちに理解出来た。曜は、俺のことが好き。そういうことなんだよな？」

「……嬉しい。やっと気づいてくれたんだ」

そういう気持ちがあるのに、私は嘘を吐いた。

嘘の笑顔を浮かべ、ニコツと微笑む。

すると彼が口にした言葉の中で、少し頭に引つかかる言葉を聞いた私は、しばらく考えたのち、ひどく荒れ気味に愕然としてしまった。

「なんつうか、本当驚いた」

「もう。それ何回言ってるの？」

「だって、そりゃあ驚くさ。なにせ……」

『俺もお前のことが好き』だからな」

「ふうくん……………えっ?」

その瞬間、私は言葉を失った。

えっ? 遼くんが、私のこと…………『好き』?

私の頭の思考が全くもって追いつかない。遼くんの発した言葉において、私は彼に尋ねた。

「遼、くん…………?」

「何だ?何か聞きたいことあるのか?」

「う、うん。ごめんね遼くん、さっき何言ってたのか聞き取れなかったから、もう一度いい?」

「ああ!?なんだ聞いてなかったのか。はあ、仕方ないな。もう一度言うからちゃんと聞いとけよ?」

「う、うん…………」

遼くんが何を言ったのかはつきりさせるために、私はわざと聞き取れなかったと彼に

告げる。

彼はそれを聞いて頭を掻き、思わず呆れた表情を見せる。けど、遼くんはどことなく恥ずかしそうな雰囲気があつて、それを見た私は心臓が『ドキッ』と、ふいに鼓動が早くなる。

「すう……はあ……」

「……………」

遼くんの顔が赤くなっている。

多分、彼もドキドキしてるんだ。

深呼吸をして、心を落ち着かせている彼を見る限り、遼くんは覚悟を決めているみたい。

だから私も、心から受け止める。

遼くんから発せられる、私への告白を。

そして、さつき遼くんが言い放った言葉は本当のことだったんだってことが、今こゝではつきり理解することが出来た瞬間だった。

「俺は曜ことがずつと前から好きだった。いつからかは覚えていない。いつの間にか好きになってた。だから、俺と、付き合ってください」

「……………っ！」

ギョッ！

「おわっ!?よ、曜?！」

「嬉しい……………！嬉しいよ遼くん……………っ！」

彼が最後に言い放った言葉と同時に、私は防波堤に立って告白してくれた遼くんを抱きついた。

私と遼くんは『両想い』

その事実が分かっただけで、私はいても立ってもいられないくらいに嬉しくて、現に涙を零しているくらいに嬉しかった。

いきなり私に抱きつかれた遼くんは、不覚に驚きを隠せない。ただそれでも彼は、私を優しく抱いて包み込んでくれた。

暖かく、私を受け入れてくれていた。

「嬉し過ぎて、泣いてるのか？」

「うん。嬉しいから泣いてるの」

「そうかい。なら、満足するまで泣け」

私の頭を何度もゆっくり撫でてくれる遼くん。

なんか私、早速彼に甘やかされる気分。

でも彼が言うから、私は思う存分に泣いた。

『号泣』までは流石にそこまではいかないけど、自分の想いというか、『両想い』という事実に、私は嬉しくて嬉しくてたまらなかつた。

「どうだ？もうそろそろ大丈夫だろ？」

「うん……。もう大丈夫」

私はそれからしばらく彼の暖かさの中で泣いて、5分くらい泣いたあとで私はやっと落ち着きを取り戻すことが出来た。

涙を自分で拭い、私の頭を撫でてくれている彼の方に視線を送ると、私の視線に気づ

いた遼くんは私を見かねて様子を伺ってきてくれた。

「どうした？気分でも悪いのか？」

「ううん。遼くんに、1つだけ聞きたいことがあるんだけど、聞いていいかな？」

「ああ。別に構わないが……」

その質問に私は答え、今度は私が遼くんに聞きたいことがあると言って話を切り出す。

遼くんには、ずっつと聞いておきかったことだ。あの日あの時、彼は彼女と一体何をしていたのかを私は尋ねた。

「あのね、『夏祭り』のことなんだ……」

「えっ？夏祭りのとき？」

「ライブの後のことで、遼くんは梨子ちゃんと、なんの話をしていたの？」

「……！あそこにいたのか？」

「……………うん」

思わぬ質問に、驚きを隠せない遼くん。

それもそのはず。私は、遼くんと梨子ちゃんから少し離れたところで話を聞いていたから。

遼くんにも彼女にも目が届かない場所で私は隠れてたから、遼くんが驚くのも無理もないかも。

「う〜ん……」

彼は驚いたそのあとで、一思いに悩み出す。

どこか彼のなかで、これを私に話してもいいのかという迷いがあるのかもって私は感じていた。

すると遼くんは悩みの末、私に視線を向けては口を開き、私がした質問について一つだけ私に対して尋ねてきた。

「曜。これは話さないとダメか？」

「うん。ちゃんと話してほしい」

「……そうか」



その質問に、私は即答。

遼くんは頭をまたポリポリと掻き、頭を下に俯かせたけれども、思いのほか遼くんのなかでは、私に対しては話をしようという覚悟を決めたような言葉だった。

「じゃあ、話すよ」

「うん……」

その重みある言葉を聞き、心を引き締める私。

目を瞑らずにゆっくりと1つ深呼吸をした後に、彼は私に向かって口を開いた。

「話していたのは、梨子の『ピアノ』の話さ」

「……えっ？ 梨子ちゃんの……ピアノ？」

彼の口から出てきた言葉は『ピアノ』

『梨子ちゃん』と『ピアノ』というのキーワードを聞いて、私は『ハッ』と思い返し、思い出さずにはいられなかった。

梨子ちゃんはスクールアイドルを始める前から、小さい頃からピアノをやっていたことに。

「そっか！梨子ちゃん、スクールアイドルを始める前からピアノをやってたって話をしてたね！」

「ああ。それであの時に梨子から相談されたんだ。『ピアノをまた始めたいから、そのために少しでも手伝って欲しい』ってね」

「そういうことだったんだ……」

今の会話の流れではつきり分かった。

私は、ただただ勘違いをしてただけだった。

ちよこつとの会話の部分だけを聞いてはそう決めつけて、あんな早とちりしてしまっただあの時の私に叫んで怒ってやりたい気分。

本当に、私はつくづくバカ曜だ……。

「まだこれから先のことだけど、梨子がまたピアノを始めたいって言うなら、俺はあいつに協力する」

「そうだね。私も力になれるかな？」

「なれるさ。梨子もきつと喜ぶ」

ピアノは、私もよく分からないことが多い。

だけど、しばらくピアノから遠ざかっていた梨子ちゃんがまた始めるって言うなら、私も梨子ちゃんの力になってあげたい。

梨子ちゃんはA q o u r sの作曲もして大変だから、少しでも楽にしてあげたいとは思った。

そう考えたあとで、私は彼に話を切り出す。

あの話は、まだ終わっていないから。

「それでさ、さっきの遼くんの告白、私もそろそろ答えないとだね？」

「ああ、そうだったな。ぜひ聞かせて欲しい」

「うん。分かった……」

彼にそう告げて、私は深呼吸を1つする。

ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！

心臓の鼓動が早くて、どうにかなりそう。

彼の告白に対して返事をするだけなのに、自然と身体が震えて緊張してしまっていた。

でも、私が話さなきゃ何も変わらない。

言う……言わなきゃ気持ちも、伝わらない。

「……………っ！」

伝えなきゃ！私の気持ちを、遼くんに！

「私は！渡辺曜は！遼くんのが、大好きです！だから、私と付き合ってください！」  
「……………」

あ、あはは。打ち明けちゃった……。

ずっと大好きだった遼くんに、『大好き』であるこの気持ちを打ち明けちゃった。

でも今更、後悔は全くないよ。

気持ち伝えなきゃ、遼くんには伝わらないから。

「……………」

正面に立ち、私の告白に彼は口を開かない。

ただ明らかに変化したのは、遼くんの表情だ。

真つ直ぐ、真剣な表情で私を見つめていた彼は、私の告白を境に、ホッと安心したような、もの凄い満面な笑顔に変わった。

ギョツ

「……………っ！」

そうやって、今度は彼から抱きしめられる。

私より大きく、私より長い2つの腕が、小さな私の身体を優しく包み込んでくれた。

そして遼くんは、私の耳元で呟いた。

その言葉に私は、また涙を流すことになる。

「曜。俺たち……『恋人』になろう」

「……っ。うん………うんっ！」

嬉しかった。ただただ嬉しかった。

嬉しくて言葉を失って、私は言葉を発することもままならなかった。

でも何より、私の恋が実った。

遼くんへの恋が、報われた瞬間だった。

「あはは。お前泣きすぎだ」

「だって……嬉しいんだもんっ！」

「まあな。俺も曜と恋人になれて、嬉しい」

私も遼くんも、お互い嬉しそうに言葉を交わす。

いつでもどこでも一緒だった彼と、更に近い距離でいられる。そう思っただけで胸が熱くなって、顔も自分でも分かっちゃうくらい赤かった。

すると、遼くんは私に口を開く。

「それでまあ、俺たちは晴れて『恋人同士』になれたわけだが、この後どうする？ちようどお昼頃だし、2人でどこか食べにでも行かないか？」

「……っ！うんっ！2人で行こう！」

「よし。決まりだな！」

私をお昼ご飯と一緒に誘ってくれる遼くんは、私は笑ってそれを快く受け入れた。

それで私の答えを聞いた彼は私の手を握り、満面に微笑んで防波堤を降りていく。必然として、私も遼くん連れられるように防波堤を降りる。

一見して、彼はただ一目散に走り出した感じではなかったから、私は遼くん1度尋ねてみる。

「ねえ！どこに行くの!？」

「決まってるだろ！店だよ店！一応2人で行くならって考えて決めてたんだ。多分、曜なら気に入ってくれるお店だと思う」

「本当!?!それならすごく楽しみ〜！」

どうやら遼くんは、私のためにお昼を考えていてくれていたらしいんだ。もちろん私はそれがとても嬉しくて、一体どんなお店に連れて行ってくれるんだろうという気持ちだが、胸一杯にあつた。

彼の大きな背中中は、私が見ていた中で一番大きく感じた。何というか、私を守ってくれるその心強い背中だった。

私、遼くんの彼女になれて……幸せ♡

「ねえ、遼くん！」

「んっ？なんだ？」

「私、遼くんが大好き！」

「……フツ。ああ、俺もだ」

そう言い合って、お互い一緒に笑い合う。

私はこれから、遼くと一緒に楽しい時間を過ごすことが出来るようになった。

楽しい時も、悲しい時も。

一瞬一瞬のこの時を、これから遼くと過ごしていくときはとても大事にしていき



い。

そう心に決心した、私……渡辺曜だった。

～  
～  
～  
～  
～  
※※※※※  
～  
～  
～  
～  
～

「……………ふえっっ」

曜ちゃんが遼くんと付き合い始めたということを知ったのは、曜ちゃんと遼くんが付き合い始めてのすぐのことだった。

というか、曜ちゃんからそう教えられた。  
何故なら、みんなの前でその話をしたから。

「りよ……遼さんと付き合う!?!」

「うん! まあ2日前のことだけど……」

「へえ〜! おめでどう曜!」

「えへへっ! ありがとう果南ちゃん!」

練習を始める目前だ。曜ちゃんがみんなに対し、そんな話を持ちかけたのがきっかけ。

果南ちゃんや他のみんなは、曜ちゃんが遼さんと付き合い始めたことに驚きに満ちていたけど、すぐにみんなは、お祝いの言葉を述べた。

「おめでどう! 曜ちゃん!」

「うん! ありがとう梨子ちゃん!」

雰囲気は明るい。恋愛が成就した曜ちゃんに対して、みんなはお祝いムードで接して

いた。

「……………」

それなのに私は、嬉しそうに笑顔を見せている曜ちゃんに対して、どんな声をかければいいのか全然分からなかった。

むしろ何より、その事実にも胸が痛かった。

どうして胸が痛くなっているのかなんて、私でさえもよく分からなかった。理解出来なくて、戸惑いの表情になっている私があった。

「……………千歌ちゃん?」

そしたら突然、曜ちゃんに声をかけられる。

私の表情を見かねてた曜ちゃんは、私の顔を覗き込むようにして私の名前を呼んでくれた。

ただ、私は曜ちゃんの声に驚いてしまった。

それ以上に、自分の胸が痛いことに驚いて、そればかりに集中して考えていたから。

「わっ！よ、曜ちゃんか……」

「どうしたの？なんか千歌ちゃん、ずっと考えごとでもしてるような感じだったけど……」

「う、ううん！何でもないから大丈夫！」

だから慌てて、私は曜ちゃんを安心させるためにそんな風に話をして落ち着かせる。周りにはみんなが私を見ている。だから私は一旦気持ちを切り替えられるように一度深呼吸をした。

「すう……はあ……」

今日は遼くんはいない、部活でね。

でもそんな幼馴染み同士が恋人同士になるなんて私は思ってもいなかった。本当なら、果南ちゃんのように曜ちゃんを祝うべきなんだろうけど……。

ズキツ　ズキツズキツ！

「……………」

この胸の痛みの原因が自分でも分からないから、正直、曜ちゃんの恋愛の達成にお祝いをしていいのかでさえ分からなかった。

「でも、おめでどう曜ちゃん。ずっと遼くんのが好きで、やっと自分の想いを打ち明けられて恋人同士になった。良かったね!! 曜ちゃんっ!」

「……………っ! ありがとう、千歌ちゃん!」

でもそれでも、大切な友達恋愛を祝わないわけにもいかなかった。

だから私は曜ちゃんの両手を手に取り、曜ちゃんに『おめでどう!』と伝えた。そして、曜ちゃんとは感極まって、私に勢いよく抱きついてきた。

曜ちゃんにとっては、私から言われること自体に嬉しそうに感じているようだった。けど、わたしの心はスッキリしなかった。

なんだろうね?

私にも、全然わかんないや……。

「曜さん……」

「あつ、ダイヤさん……」

するとそのとき、曜ちゃんの背後からダイヤさんが声をかけてくる。ダイヤさんの話し方とその真剣な表情を見た私は、曜ちゃんに対してダイヤさんがどんな話をするのか何となく分かった気がした。

けれどもダイヤさんが口にした言葉に、私たちも曜ちゃんも驚きの表情に様変わりした。

「本来なら、私は『スクールアイドルはアイドルと同様に『恋愛』は禁止!』と言うつもりでした」

「えっ……?」

「でも恋人が遼さんであるなら、私が心配することでもないでしょう。良かったですね、曜さん」

「……っ!ありがとうございます!」

いつも誠実で他人にも厳しいダイヤさんまでもがにこやかに笑って、曜ちゃんの恋愛に対して祝福の言葉を口にする。

それは私たちからしてみれば、とてつもなく意外な光景だった。

でもダイヤさんが曜ちゃんの恋愛を許した1番の理由。それは、曜ちゃんの「彼氏」が遼くんという、みんなが知っている「友達」だから。

きつとこれが見知らぬ人だったら、ダイヤさんはカンカンに怒って、『ブツブツですわ！』って言い張っているんじゃないかな？

うん……ダイヤさんならしかねない。

「幸せになるのですよ」

「はいっ！ありがとうございますー！」

「……………」

ただ、遼ちゃんと曜ちゃんが付き合うって聞いた時は、私は2人のことをすごく羨ましくなつてさえ、そう感じていたんだ。

Aqoursの中では1番にファンが多くって、そんな曜ちゃんが幼馴染みの遼くと付き合う。

多分この私の胸の痛みは、きつと2人が付き合い始めることで、私も早く『恋』がしたいなっていう願望なのかもしれない。

それがそうじゃなかったら、こんなにも自分の胸がズキズキ痛くなるはずがない。きつとそうだ。そうだと……信じたい。

「じゃあ、今からみんなで練習だね！」

「そうですわねっ！では皆さん、今日も張り切っていきましよう！」

「練習、頑張るずらく！」

「おお〜!!!」

そうして私が心配事で考えていると、そう言つて果南ちゃんが先頭に立ち、みんなに練習を始めようと促す。

それを機にみんなは、ぞろぞろと部室を出ていき屋上へと足を運んでいった。

「では、先に行つてますわよ」

「はい！私も後から行きます！」



そしてダイヤさんが部室を出て、みんなが屋上へ向かっていったのを最後に、部室に残っているのは私と曜ちゃんの2人だけだった。

「千歌ちゃん、みんな行っちゃったよ？」

「……………うん」

みんなが屋上に行っちゃったなかで、私は部室にポツンと佇んでいた。そんな私を氣遣い、声をかけてくる曜ちゃん。

私はまだ部室にいることに驚いている感じでき、でも逆に私は、どうしてまだ曜ちゃんもいるのって思っちゃったり……………。

ううん、思わずにはいられなかった。

「それは、曜ちゃんもだよ……………」

「あつ……………あはは……………」

私がそう言うと、曜ちゃんは困った顔で笑う。

それで頭をポリポリと掻き始めたそんな曜ちゃんに、私はゆっくり近づいて右手を伸

ばした。

「曜ちゃんも、早く屋上に行こう？」

笑みを浮かべて、曜ちゃんに右手を伸ばす。

別に……寂しいと思ってるわけじゃない。

ただ、今こうして目の前にいる曜ちゃんなのに、遼くんと付き合い始めたって知った瞬間、なんだか曜ちゃんがだんだん遠くに行っちゃうような感じがして、すごく嫌なの……。

私にとって『特別』な曜ちゃんが、千歌の前からいなくなっちゃったような気がして……って、千歌、やっぱり寂しいって思ってるじゃん。

「……一緒に、屋上に……」

そう言いかけた私に、曜ちゃんが口を開いた。

「ごめん、千歌ちゃん！」

「……………っ!？」

部室中、下手をすれば屋上にいるみんなにまで響きそうなくらいの大音量。両手を顔の前で合わせる曜ちゃんは、私に次の言葉を言ってきた。

「私ね、ちよつと用事があるから、少し練習に遅れちゃうんだ……」

「えっ!？そ、そんなぁ……」

「千歌ちゃん、本当にごめん!」

つい曜ちゃんのその言葉に、私はものすごい落胆をしてしまう。

曜ちゃんが私の手を取ってくれて、それで一緒に曜ちゃんと屋上に行こうと思っただのに、用事があると言われてしまった。

けど、用事ってなんだろう？

「そう、なんだ。でも用事って……っ?」

「それもごめん千歌ちゃん。ちよつと千歌ちゃんには言えないことなんだ……」

「……………そう、なんだ」

聞いてみたけど曜ちゃんは口を開かず、手を合わせてそういう風に言葉の一点張りだった。

何度聞いても仕方ない、かな……。

そう感じ取った私は、自分が伸ばした手を悔やみながら降ろしたあとで、曜ちゃんに笑顔を浮かべて口を開き、話を切り出した。

もうこれ以上曜ちゃんには、迷惑をかけたくないからね。

なにせ曜ちゃん、遼くんと“付き合ってる”から。

「そっか。分かった！先にみんなで練習始めてるから、早く来てね！待ってるから！」

「……うん！私も早く済ませて行くよ！」

「じゃあ、屋上で！」

そういうやり取りをしては、私は曜ちゃんに手を振り、曜ちゃんを置いていく形で部屋を出て行く。

みんなを、屋上でずっと待たせないために、私は走って屋上へ向かっていった。

本当、曜ちゃんの用事ってなんだろう？

屋上に向かう途中、それがずくと気になって、ずくとそれが頭から離れなかった。

タツタツタツタツ！

「……………はあ」

「やっぱり……そうなるよね？」

## #59 梨子とピアノと過去

正直に言うと、俺は凄くドキドキしている。  
何故なら、今日初めて彼女の家を訪ねるから。

ピンポーン♪

「よっ、梨子」

「あっ！いらっしやい遼くん！」

彼女の家の玄関。

インターホンをポチッと押し鳴らすと、その音に反応した梨子が軽快に玄関を開けてくれた。玄関から顔を出した彼女は、俺が来るのをすごく待ち遠しかった表情をしてい

た。

梨子も梨子で今日を楽しみにしていたのかもしれないなって、俺はそう感じる事が出来た。

「さっ、上がって上がって！」

「あ、ああ。失礼します……」

笑みを浮かべつつ、俺を中へと促す梨子。

俺は彼女の勢いに押される形で、彼女の家の玄関に入る。靴を脱ぎ、ピカピカのフロアリングに足をつけて彼女の部屋へ足を運んだ。

梨子の部屋は2階だから、階段を一段一段踏みしめていかなければならない。そう考えた瞬間には、また更に心臓がバクバクと鼓動が早くなる。

すると梨子は、俺に告げる。

「私、飲み物持ってくるから、遼くんは私の部屋で待ってて。すぐに行くから」

「分かった。そうさせてもらおうよ」



飲み物。多分麦茶か何かを梨子は持つてきてくれるんだろう。そう思った俺は階段前で梨子と別れ、ゆつくりとした足取りで彼女の部屋へ赴いた。

階段を一段一段と踏みしめるたびに、初めて入る梨子の部屋へ近づくたびに、俺のこの早まるドキドキは収まらず、止まらない。

そうしてうちに俺は部屋の前に来て、一度深く深呼吸をする。

曜や千歌、果南にダイヤと、今まで何度も女子の部屋に上がり込んだことはある。だが梨子は、あの東京からやって来た女の子。千歌や曜なんかよりも凄い女の子らしい部屋なんじゃないかと、俺は不意に、無意識に考えてしまっていた。

「……………入らないの？」

「うわあ!？」

そうしたら突然、悶々と考えていた俺の背後からコップ2つと、2L程のペットボトルのお茶を持って来ていた梨子の姿があった。

俺が一向に部屋に入らないことに首を傾げていた梨子の発言に、俺はビクツと驚いて身体をつい飛び上がらせた。

「わっ！だ、大丈夫!？」

「あ、ああ！大丈夫。ちよつと梨子の部屋に入るの初めてだから、少し緊張しちゃつてさ……」

俺はそれでその後、梨子にどうして部屋に入らなかつたのか事情を洗いざらいに話をすると、梨子は驚くどころか、唐突に笑い出して口を開く。

「ふふっ。なんだ、遼くんも緊張するんだ?」

「何だよ?俺が緊張しないとでも?」

「うん。遼くん、あんまり緊張とかしないでずっと冷静でいられる人なのかなって、そう思ってた」

「悪かったな。梨子のイメージに添えられなくて」

どうやら梨子から見た俺のイメージというのは、どんな状況でも冷静沈着で、周りを見て行動出来る人だとイメージしていたらしい。

それを目の前で聞かされた俺も、梨子が俺のことをそんな風に思っていたなんて驚いた。

だが俺が口にした言葉に対して、梨子は言う。  
それは彼女からの感謝の言葉だった。

「でも、嬉しいの。今日みたいに私のピアノに付き合ってくれるだけで嬉しい。ありがとう遼くん」

「……その言葉、快く受け取っておくよ」

満面な笑みでそう言われてしまうと、その笑顔にやられてどうという言葉を返せばいいのか、俺個人の中でなんか分からなくなってしまう。

けれどなんというか、俺から言えることはたった一つだけで、梨子はやっぱり綺麗だ。ここの子がやっぱり、『美人』という言葉がよく似合うんだなって思った。

「じゃあ、部屋に入らせてもらおうよ」

「うん。特に何も無い部屋だけど……」

そう話した後で、俺は梨子の部屋に入る。

本当に初めてだから、ちよつと恐る恐るで部屋のドアを開けていく。すると、最初に

目に飛び込んできたのは部屋の奥にある黒く煌めくピアノだ。

部屋の奥にあるのにも関わらず、その存在感が圧巻で、一番に目を惹かれた。

その他にも、壁紙だったり布団だったり、あとはカーペットがピンク色で、とても女の子らしい部屋だなんて感じる事が出来た。綺麗に本棚も机の上も整理されている。

「そんな事ないんじゃないか？俺が見る限りでは、統一感があつて、とても綺麗な部屋だ  
と思うぞ？」

「ええ〜？嘘、じゃない……？」

「俺が嘘つくように見える？」

「うっ……見え、ない」

何も自信なさげな表情をする必要もないのに。

どうも梨子がモジモジと恥ずかしそうな表情を俺は見てしまうと、ちよつとなんとも  
いえない感情に悩まされる。

なんというか、う〜ん、可愛い。

……って、全然違う。そうじゃない。

「なにも気にする必要はないさ。いつも通りの梨子でいてくれたら、俺はそれだけで安心するからさ。」

「……………ふふつ。ありがとう……………」

……………かわいい。

あれ？俺、今なんか変なこと考えてたか？

「じゃあ、ゆつくりしてってね？」

「うん。お言葉に甘えさせて頂くよ。」

まあ、いいや。

とにかく気にしないでおこう。

今日の目的は、あくまで梨子のピアノの手伝いに来たわけだから、梨子に変な手出しはしないようにしようと、心の中で俺はそう決めたのだった。

～  
～  
～  
～  
※※※※※  
～  
～  
～  
～

「～～～♪」

「……」

目の前でピアノを弾く梨子。

その横顔と、ピアノを華麗に俺の目の前で弾いているその姿は、一言で例えるなら女神のよう。

「ふふふ………」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチッ！

彼女が披露してくれた演奏に俺は感激し、梨子に対してスタンディングオーベーションで讃えた。

それくらい凄かった、彼女の演奏。

「すごい、本当に凄いや梨子！感激した！」

「本当？嬉しいなあ……！」

褒められることに慣れてないせいか、彼女は両手を合わせ、少し恥ずかしそうな表情をする。けれども梨子は褒めてくれたことに対し、とても嬉しそうに微笑んでいた。

「……………」

そんな俺がピアノを聴いて感じたこと。

ここまでのピアノの実力がありながら、どうしてピアノから手を引いてしまったのかだ。

その実力は、A q o u r s のみんなからのお墨付きでもあるというのに……。  
そうそう。俺がまだ梨子のピアノを聞く以前に、いつの間にかみんな、既に聴いていたのだ。

ただただ羨ましかったよ、その時は。でもこうして目の前で聴くことができたから、  
こうして今はとても満足しているのだが……。

そしてこのときの俺は同時に、梨子の身に起きた過去が気になって仕方がなかった。  
決して、触れていいものではないと心の底から分かっていたいながら。

「でも梨子」

「んっ?」

「そんなにもピアノが上手なのに、どうしてピアノから一度手を引いたんだ?」

「……っ!」

そのことを口にした瞬間、彼女の表情は変わる。

ピアノから一度手を引いたことは、千歌から話を聞いたのだ。

内浦に引越してくる前の話で、梨子は何やら上手くないことがあつたらしく  
て、その過去を聞く上で、それを話に交えながら俺は聞いた。



「……………」

「……………」

だがあまり話をしたくないと、梨子の表情はみるみるうちに暗くなっていく。下に俯き、太腿の上で両手を弄っているだけになってしまっていた。

……うん。やっぱりやめるべきだったな。

彼女にとつて、もしかしたらトラウマともいえる過去を持っていて、それを俺のせいで思い出させてしまったかもしれない。

ああ、やっぱりやめておくべきだったな……。

「……………悪い。今のはなかったことに……………」

そう思い、俺は口を開いた。

が、その瞬間に彼女から言い放たれた。

「怖い……………」

「えっ……?」

「怖い。人の『期待』を裏切るのが……!」

「……っ!」

『期待を裏切るのが怖い』

梨子は今、胸に秘めていた思いを、『苦しさ』を混じえながらそう言った。

ふと見れば、彼女の身体は小刻みに震えている。やはり彼女にとって、とても辛く、重い過去を思い出させてしまったようだ。

これは反省……しなければならぬ……。

彼女の深い闇に触れてしまった事を後悔し、俺は梨子から一旦視線を逸らそうとした。何より、思い出したくもないことを、梨子の脳に呼び覚まさせてしまったのだから。けど梨子は、自分から話を切り出していく。

その話は少しづつ、勢いが増していった。

「私、一度だけコンクールでピアノを弾けなかったことがあるの」

「えっ……?」

「みんなから、『応援』はずごくされていたの。でも本番でピアノの前に手を置いたら、突然指が震えて止まらなかったの……」

「……………」

### 『緊張』

まず、話を耳にして考えられたのはそれだ。

ピアノは一人。コンクールと言うのだから、会場は多くのお客さんで観客席は埋まっているはず。

その多くの観客から見つめられる中で、たった一人で成長を披露する。梨子は多分、その『期待』という目に見えないものの『重圧』に押し潰されてしまったのかもしれない。

試しに俺は、彼女に話を揺さぶった。

「梨子に一つ、聞きたいことがある」

「……………? どうしたの?」

「応援って、いろんな人から応援されたの?」

「……………うん、いろんな人から言われたよ。同じクラスの生徒とか、先生からも。あと、同じピアノをやっている知り合いからも言われた」

どれくらいの人々が彼女に期待し、どんな言葉を投げかけていたのか？

気になって仕方なくて、俺はそのことも口にして梨子に尋ねてみた。その結果、逆にその結果は、俺の想像を遥かに超える言葉だった。

『梨子ちゃんなら “大丈夫” ！』

『貴方は我が校の “誇り” よ！』

『先生は “期待” していますよ！』

『みんなね、梨子のこと “信じてる” から！』

「……………」

正直、こんなの聞くじゃなかった。

胸をギュッと掴まれてグツと抉られるような感覚があつて、逆に俺の心も苦しくなつちまった。

それで彼女の話を聞いていて分かったのは、梨子に向けた言葉の数々が、逆にかえって梨子への重圧になってしまっていたこと。教えてもらった言葉がそれを物語っているし、梨子の過去を聞いてて、俺は本当に心が苦しくなった。

そして梨子がピアノから手を引いた理由も、それを聞いて理解することが出来た。

「辛かった……よな？」

「大丈夫……といえよ、『嘘』になるかな？」

「うん。そうだよな……」

苦笑いを浮かべて、明るく振舞おうとする彼女。

「ただ俺からしてみれば、もう辛いことは、俺やみんなに包み隠さないで欲しいと思っただけ。」

「梨子」

「……？」

「とりあえず、ハグしようか？」

「ええっ!？」

何より『桜内 梨子』という女の子は、もう既にA q o u r sのみんなにとって大切な仲間なのだから。

「梨子は俺たちにとって大事な仲間だ」

「……っ！」

「みんな、仲間一人一人の気持ちを、みんなで分かち合う『義務』がある！」

「……っ。うっ……」

「もう梨子は、一人で辛い思いをするな」

そうやって俺は、梨子の前で両手を広げる。

梨子の過去も受け入れる意味では、果南の十八番の『ハグ』で受け入れた方が一番良いと思った。

「ひっく……うう……」

そしてそれが功を奏する。

俺が伝えた言葉に、梨子は涙を流した。

ギョツ！

「うっ……うう……遼、くん……！」

「ああ。俺の胸にドンとこい」

俺は梨子に抱きつかれ、梨子の涙腺は崩壊。

もう「一人じゃない」。それを初めて認識した梨子は、嬉しさのあまりに俺に泣きついた。

今初めて梨子に抱きつかれたものの、今は梨子の身体がどうかと色々考えている暇はない。自分の両腕で彼女の身体を優しく包み込み、右手で梨子の頭を優しく撫でる。

梨子が泣き止み、落ち着くまではね。

でも、やっぱり梨子の身体美形だな。

体型がスラツとしてて、ザ・美人って感じ。

「……ぐすつ。遼くん、もう大丈夫……」  
「んっ、分かった……」

しばらくして、梨子は涙を拭いながら俺に対してそう告げる。

梨子の涙が俺の服に少し滲んでしまっていたが、そんなことは言っていられない。今は梨子のことを最優先に考えて話をしないといけないのだ。

何よりピアノをすることが、梨子にとつては一番好きなことなのだから、俺が変なことを考えていたら梨子に失礼だろ？

「ねえ、遼くん？」

「うん？なんだい？」

するとそのとき。梨子は俺に視線を向け、少し弱々しく俺の名前を呼んできた。

ただ、あまりにも声が弱々しかった。だから俺は梨子の言葉に誘導されて視線を向けると、彼女の目は潤み、俺に問いかけてきた。

「遼くんは、ないの？」



「えっ……？」

「辛かったこと。遼くんはないの？」

「……っ」

とんでもない唐突な質問だったから、梨子の質問にちよつと驚いてしまった。

でも、彼女の意図を理解したときの俺は、自分の辛かったことをすぐさま梨子に打ち明けた。

個人的には、あまり口にしたくはないことだ。

それでも梨子が聞きたいと訴えかけている。俺は答えないわけにはいかなかった。

「……あるよ、もちろん」

「……っ。そう、なんだ……」

誰にだって、辛い経験はあるものだ。

俺の場合、梨子の話よりもかなり辛い。その時の俺は中学3年で、サッカー部のキャプテンだった。

「中3の時の、サッカーの大会の時だ」

「……うん」

「大事な大会だったんだ。そのPKで、俺が外したらチームが負けるっていう場面で、俺はとてつもないプレッシャーを受けてたんだ」

「……………」

している「もの」は違う。

ピアノとサッカー。名前だけ聞いてみれば、全然することは違うと思うはずだ。サッカーは競技で、ピアノは演技。

けれども、場面は梨子と同じなんだ。

不思議なほどにね。びっくりだ。

「それで外して負けた。俺のせいで……」

「…………つ。ごめん遼くん。私があなただの過去を聞きたかったせいで……」

「梨子が気にすることない。お互い辛かった過去を打ち明けたんだから、これでおあいよ」

俺の辛かった過去の話を聞いた梨子は、少しばかり落ち込んでしまう。過去を聞き出したことを悪く思ってるのかもしれないから、俺はそう言っただけで彼女を開き直させるとはならない。

俺は全然何とも思っていないし、梨子も悪いことは言っていないのだから、気にすることはない。

「それに……」

ギョツ！

「……っ!?」

「一番好きなピアノを諦める梨子なんて、俺は全く考えられない。だから梨子は、好きなものは好きでいてほしい。特に何より、一番なものにはね」

「……っ!」

俺は梨子の手を両手で握って、真剣に、且つ笑みを浮かべては彼女へそう言い放つ。梨子にとってピアノは一番好きなもの。俺の中での個人的な解釈になるけど、でもそ

う感じれるし、そう確信も出来てしまう。

俺の前でピアノを弾いていた梨子の表情を見て、それが全てを物語っていたよ。

「……ありがとう。私、凄く嬉しい！」

「あはは。また涙出てるぞ」

「うん。遼くんに言われて、嬉しいから……！」

再び涙を流す梨子。

でも、それは嬉し涙。明らかにさっきの悲しい涙よりも明るく、彼女は自信を漲らせている。

うん。もう決心がついたような表情だった。

「私、もう一度ピアノ頑張ってみる！」

「そっか。とりあえず涙拭け」

「うん。遼くんにはいつもお世話になっちゃって、なんか色々……ごめんね？」

「もういいさ。梨子がまた好きなピアノを頑張ってるっていう決心に、俺はもう大満足さ」

「ふふっ。ありがとう！」

俺は梨子の涙を人差し指で拭ってあげて、梨子の意志に対して素直に喜びの言葉を述べる。

もう今の梨子なら、いろんな人からの重圧を受けても大丈夫だろう。『もう〃一人じゃない!』』ことをちゃんと胸に秘めていれば、1人でも、どんな困難にも乗り越えていけるだろう。

梨子の背中、少しは押してあげられたかな？

「はあ、なんか少しお腹が空いたな」

「ふふっ。もう遼くんったら！」

「ちようどお昼の手前だけど、近くの松月に行ってみないか？来るときに『新作』が出ました！」ってポスターが貼ってあったからさ、どうだ？」

「本当!?!うん!行きたい!」

「決まりだな!」

そして、お昼なら普通はご飯なのだが、俺が梨子の家に向かっているときに、ちょうど松月が新作を出したというポスターを見かけたのだ。

俺も松月のケーキは嫌いじゃない。だから新作が出たつてなると気になって仕方がないからさ、休憩がてらにちょうどいいかなって思ったのだ。

「じゃあ、早速行ってみるか」

「ええ！私も新作がとっても楽しみ！」

梨子も満更でもなさそうだ。良かった。

それで俺と梨子は家を飛び出し、歩いてものの5分で辿り着く松月へと足を運んでいった。

とりあえず、梨子のピアノの手伝いは一先ず休憩に入る。手伝いは、午後からでも大丈夫だろうか？

そんな風にて、ことを後回しにして考えることにした俺であった。

## #60 夏の始まり、梨子の撰択

「梅雨」という、私にとって嫌な時期が過ぎ去り、とうとう一番好きな季節がやってきた。

夏。

私が四季の中で一番好きな季節。

嫌いな季節はやっぱり冬。当然、寒いから。

「熱くい〜!!!」

「ずらあ……」

「天の業火に、我が翼が焼き尽くされる……!」

燦々とした太陽が、私たち9人と屋上を照らし、千歌ちゃんと、花丸ちゃんと、善子

ちゃんの3人は、この酷な猛暑にこっぴどくやられていた。

暑すぎて、身体がドロドロに溶けてしまいそうだと言わんばかりに……。

「なんでこんなに熱いのー!？」

1番にそう叫ぶのは善子ちゃん。

A q o u r s の中でのかなりのインドア派の善子ちゃんは、夏という季節と、この厳しい暑さがとても嫌いみたい。

家から一步も外に出ようとしない話を花丸ちゃんから聞いたとき、やっぱり善子ちゃんは夏が嫌いなんだなって改めて実感した。

「あはは……。善子は夏は苦手？」

「もちろんよ!天から放たれる灼熱地獄が、我が魔力を削ぎ落として……」

「普通に『苦手』って言うずらっ」

「最後まで言わせなさいよ〜!」

相変わらずの善子ちゃんは墮天使らしき全開なんだけど、花丸ちゃんのツツコミを入



れられて怒りを露わにする。だけど、私も花丸ちやまんの言う通りだと心の中でそう思った。

善子ちゃん、あまり素直じゃないからさ。

まあ、私が言えたことじゃないんだけどね……。

「とくに〜か〜く!ですわ!」

「イエス!とくに〜か〜く〜よっ!」

するとダイヤさんと鞠莉ちゃんは、今日から始まる夏休みについてしきりに話し出す。特にダイヤさんに関しては、もう夏休みをどう過ごしていくのか既に決めているような表情だった。

「さて、今日から夏休みが始まりますわ!」

「サマーヴァケーションといえぱっ!」

「はい!千歌さん!!!」

「ええ!?!」

ダイヤさんがA q o u r s に加入し、それからダイヤさんは別人のように様変わりした。

今までは私たちのスクールアイドル活動に対して反発していたのにも関わらずだよ？あの時の厳格なダイヤさんはどこに行ってしまったのだろうか？

今のダイヤさんは、何か「ポンコツ」だ。

こんなことは、正直本人に言えないんだけどね。言っちゃったら私が怒られちゃうよ。

「うくん。やつぱり海だよ！」

「曜さんは？」

「私ですか!?!私……夏休みにパパが帰ってくるんです!はあ、早く帰ってこないかなあ……」

と思っていた矢先に、ダイヤさんから話を振られちゃって、仕方なく私はパパが帰ってくることをみんなに打ち明けた。

そう。夏休みにやっとパパが帰ってくる!パパに会えることを凄く心待ちにしている私がいって、早く帰ってこないかなって、凄くウキウキしてる。

「……善子……さんは……？」

「クッククック……ヨハネは、夏コミ！」

「……ッ!!!」

「……………」

そんな私の思いも蚊帳の外。

善子ちゃん、もしかしてそっち系なの？

私を含めみんなは、善子ちゃんが言い放った言葉に絶句する。善子ちゃんがそっち系の人なんだってことが、みんな信じられずにいた。

特にダイヤさんは、拳を握りしめて身体を小刻みに震え上がらせている。

私はそれを見ては、彼女の逆鱗に触れてしまったことを一目で確認することが出来た。

故に、ダイヤさんの怒りが学校中に響き渡った。

「ブッブーですわッ!!!」

「……………!?!?」

## 怒声

一体、なにがダイヤさんの怒りに触れてしまったのだろうか？でもそんなことは、言われるまで実際には分からなかった。

ダイヤさんの近くにいる鞠莉ちゃんを除いた千歌ちゃんたち6人も、妹であるルビィちゃんさえも、ダイヤさんに怒られる理由が見当たらず、少しばかりダイヤさんに困惑していた。

そしたらダイヤさんは一呼吸置き、困惑している私たちに向かってこう告げたのだ。

「それでも貴方たちスクールアイドルですの!？」

「「「「えっ?」」」」

とても意味ありげな言葉。

もちろんダイヤさんの言う通り、私たちA q o u r sは言うまでもなくスクールアイドルだ。

でもダイヤさんの今の言い方は、私たちをまるでスクールアイドルとして見ていないような口調で、スクールアイドルであるという自覚が欠如していると言っているように

も私はそう聞こえた。

隣にいる鞠莉ちゃんできさえも、キョトンとしてるくらい驚いた表情をしている。ダイヤさんは、一体何が言いたいんだらう？

「片腹痛いですわ！片腹痛いですわ！」

呆れて物も言えない感じにダイヤさんはそう言うものだから、千歌ちゃんはものもの試みにダイヤさんに尋ねてみる。

「じゃあダイヤさん、何だつていうんです？」

「ふっふっふっ。よくぞ聞いてくれましたわ！」

するとダイヤさんは、千歌ちゃんの言葉に待つてましたと言わんばかりに嬉しそうな表情をする。何やらダイヤさんはとても自信満々で、『夏といえはこうだ』とはつきり言いそうなくらいに自信に満ち溢れていた。

それで両手を腰に当てたダイヤさんは、ドンと胸を張りながら私たちに言い放つてきた。

ただその言葉に私たちは、思わずズッコケた。

「では付いてきてください！部室に着いたらことをお話し致しますわ！」

「「「「ええ〜!?」」」」

今ここで話さないの!?という感じで、その瞬間に思った私のツツコミはみんなも同じだった。

『夏といえば?』という名目で話す事柄の中で、なにか重要なことでもあるのだろうか? 私もみんなもそのことが気になり始めるけれど、ダイヤさんが仕切りに話を進める。

「さあ!早く部室に向かいましょう!」

「あ……あははっ。ダイヤは無理矢理だなあ……」

「か、果南ちゃん!」

「もう無理だよ、千歌。今のダイヤはもう、誰にも止められない……」

「そ……そんなあ……」

「……………」

ダイヤさんは話をする気満々だ。あの果南ちゃんですらダイヤさんを止める術を持っていない。

ということは多分、そういう事なんだと悟った。

~~~~~※※※~~~~~

「夏といえば？ルビイ！」

「えつと……多分ラブライブ！」

「まあ！さすがは我が妹っ！かわいいでちゅね〜！よく出来ましたわ〜！」

「えっへへ♪頑張ルビィ！」

「「「「……………」」」」」

この部屋にいるAqoursみんなが思っていることだろうけれど、目の前でルビィちゃんを可愛がつているダイヤさんの姿は、今までのダイヤさんの印象の全てがひっくり返るような言動ばかり。

果南ちゃんや鞠莉ちゃんを除いた1・2年生の私たちは、啞然して驚きを隠せないどころか、どう反応していいのか分からないくらいだった。

「なに…………この姉妹コント…………」

「コントではありませんわ！」

だから善子ちゃんは、ダイヤさんの言動に対してそう言い放った。善子ちゃんの思う気持ちは、ものすごく理解出来る。

「夏といえば『ラブライブ』ですわ！夏はその大会が開かれる季節なのです！」

「おお！そうなんですわね！」

メニューの下に書いてある数字を見て『ええ……』つてなった。

「ランニング、15 km……？」

「遠泳、10 km……」

「こんなの無理だよお……」

千歌ちゃんがそれを見てネガティブな発言をするのと同じで、みんな、そのメニュー表を見てはもの凄く嫌そうな表情をしていた。

こんな距離は、絶対に私たちには無理だって思わざるをえないくらいの距離である。
“15 km”なんて今まで走ったことないし、泳ぎが得意な私でもそこまで泳いだ経験
すらない。

鬼だ。こんなメニュー出来るわけがない。

「大丈夫ですわ！熱いハートがあれば、どんな練習でも乗り越えることは出来ますわ!!」
「ふんばルビー！」

けれどもダイヤさんは、まるで学校の体育会系の先生のようなことを言う。

「なんで、こんなにやる気なの？」

「ずっとスクールアイドルを我慢してただけに、今までの思いがシャイニーしたのかも……」

今までの思いがシャイニーって……。

そこまで我慢してたんだ、ダイヤさん。

でもここまでスクールアイドルに対してとてつもなく熱い情熱を持っている人を見たのは初めて。

千歌ちゃんもスクールアイドルが大好きだけど、そんなダイヤさんは千歌ちゃん以上であると感じることが出来た。

そして何より、その人は学校の生徒会長。

ルビィちゃんやんは元より、果南ちゃんと鞠莉ちゃんを除いた私たち5人は、驚くこと以外なにも感情が思い浮かばない。強いて上げるならば、ダイヤさんは、本当にスクールアイドルを『愛している』って思えるくらいだった。

そして間髪いれずにダイヤさんは告げる。

「さっ！外に行つて始めますわよ！」

「ええ!?もう始めるんですか!？」

「当然です！時間は待つてくれませんので！」

「「「「「うう……」」」」」

もう色々と唐突過ぎてついていけない。今日からこんな練習メニューこなしていたら、みんな思うし確実に考えられる。

『死人が出る』

ダイヤさんなら、色々と考えているかもしれないけれど、あまり運動が苦手な花丸ちゃんとかは特に注意しておかないときつと大変なことになる。

そうなる前に、私は千歌ちゃんに対してある話を持ち出す。

これは本当にするのであり、決してダイヤさんが見つけてきたそのメニューを、私と千歌ちゃんはやりたくないわけではない。

でも今言つたら変に思われちゃう？

ううん！今言わなきゃ変わらないよね！

そう思い私は口を開く。

「そういえば千歌ちゃん、前に海の家のお手伝いがあるって言ってなかった？」
「えっ？あ！そうだっ！そうだよ！私と曜ちゃん、自治会で出している『海の家』を手
伝うように言われているのです！」

そしたら千歌ちゃんもそれを思い出し、私と一緒に敬礼を行いながら、ダイヤさんに
対してその事情を詳しく説明する。

それに同じくして、果南ちゃんもそれを思い出してみんなにそのことを伝えると、や
る気満々だったダイヤさんは意気消沈したように落ち込む。

「そんな!? 特訓はどうするんですの?」

「残念ながら、そのスケジュールでは……」

「もちろん、サボりたいわけではなく……」

このまま上手くいけば、ホワイトボードに貼られている酷なメニューから逃れられ
る。

それを信じて私と千歌ちゃん、ダイヤさんの答えを待っていると、横から鞠莉ちゃん
がダイヤさんに助言をする形で話に割り込む。

「じゃあそれならみんな海の家の手伝いをして、涼しいmorning and eveningに練習するってことでいいんじゃないかしら？」

「それ賛成ずらー！」

「うん！それなら大賛成です！」

鞠莉ちゃんの名案に、花丸ちゃんとルビィちゃんはすぐさま賛成の意を述べると、それにくよくよ千歌ちゃんがある提案を提示する。

「そしたら、うちで合宿にしない？」

「「「「「合宿？」」」」」」

「ほら！私のうちは旅館だし、頼んで一部屋借りられれば、みんな泊まれると思うし！」

それは、私たちみんなを千歌ちゃんの家に泊めてもらい、千歌ちゃん家の目の前の砂浜で合宿しようという提案だった。

そうすれば、みんなが集まる時間もなくなつて、鞠莉ちゃんの意見も十分に出来る。

「そっか！千歌ちゃん家なら目の前が海だし、移動もないから鞠莉ちゃんが言ってた早朝と夕方に練習も出来るね！」

「うん！その方がいいと思うんだ！」

「でも、急にみんなで泊まりに行って大丈夫すら？親に迷惑かけないすら？」

と、そう花丸ちゃんは尋ねる。

まあいきなり8人も友達が集まることになれば、自ずと必ずやそういう問題も出てくる。

でも、千歌ちゃんはきつぱりと言い放つ。

「なんとかなるよ！じゃあ決まり！」

『決定』のところまで強引に言っちゃうあたり、なんか千歌ちゃんらしい。まだみんなが泊まれるのかどうか決まっていなはずなのに……。

千歌ちゃん、大丈夫なのかな？

「それでダイヤも大丈夫？」

「何か言いたいことはあるかしら？」

「……………」

そんな千歌ちゃんのことを考えてるうちに、果南ちゃんと鞠莉ちゃんの2人は、ダイヤさんに対して話を進めていた。

合宿をする事に腕を組んで悩むダイヤさんだっただけけれど、ダイヤさんの口からすぐに答えは出た。

「……………分かりましたわ。今回ばかりは、私も千歌さんのその意見に賛同いたしますわ」

「本当!?ありがとうございます!」

その答えを聞いた千歌ちゃんは両手を大きく振り上げて喜ぶ。その裏では、その答えにホッと安堵しているみんなの姿があった。

もちろん私もそう。何も合宿でそんなにやったらみんなの身体を壊しかねないから、良い意味で千歌ちゃんの見解はものすごく名案だった。

だから、これでもう終わりだと……………思っていた。

「で・す・の・で！」

「「「「「……!?!」」」」」

「明日の朝4時、海の家に集合ということだ！」

「「「「「ええー!?!」」」」」

突然、またまたダイヤさんは私たちにとつて無理難題を言い渡す。目をキラキラさせて、今にもやる気満々なダイヤさんのその姿は、本当にも、生真面目でとつても厳格だったあの姿を見る影がなくなってしまうていた。

『えっ?この人本当にダイヤさんなの?』

と、見間違えるほどに……。

多分、みんな集まれないと思うけどね。

「「「「「……」」」」」

「「……んっ?」」

そんなとき、その中で、1人だけ別なことを考えている人物がいた。

みんながダイヤさんの話に項垂れているなかで、顔をうつむかせ、右手で頬杖をつくような形で何かを考えている子が一人だけいた。

「……梨子、ちゃん？」

「あつ、曜ちゃん……」

そう、梨子ちゃんである。

「どうしたの？何かあった？」

この今時に、何を考えてるのだろうかと思った。

私はそつと彼女の近くに寄って、ダイヤさんにもみんなにもバレないように小声で梨子ちゃんにそう尋ねると、梨子ちゃんは何も答えてはくれず、話をすぐにはぐらかされてしまった。

「う、ううん。何でもないの……」

「……本当？」

「うん。本当、だよ……」

にこやかに、でもどこか何かを隠しているようなそんな表情で。

だからそんな彼女にもつと色々話を聞きたかったけれど、逆に梨子ちゃんのことを追い詰めてしまいそうだったから、私はそこで口を塞ぐことにした。

もうそこで、彼女に問い詰めないことにした。

~~~~~※※※~~~~~

その日の夜

帰路に着き、私はそのまま部屋に籠る。

お母さんから『大丈夫？』って私の心配して声をかけてくれた。けれど私はあまり不安にさせない為に、無理して笑ってその場をやり過ぎした。

「……………」

部屋の明かりは付けない。

明かりを付けたら千歌ちゃんに気づかれて、千歌ちゃんは私へ声をかけるから……。

今は、私1人になりたい。

そういう理由はたった1つしかないけど、その理由は私にとつとつても『大切』なこと。

『Aqours』のみんなにも関わることだから。

それで結局、今日もみんなに言えなかつた。

みんなに言わなきゃいけないことなのに、いざとなった時に言えないこの状況を何とかしたい。

私もちやんと、分かっているのに……。  
そんな時でした。

ブーツ！ブーツ！

「……っ！」

突然、スカートのポケットに入っているスマホが振動し始める。

その振動が一定感覚で長く続くから、恐らく電話だろうと思つてポケットに手を入れてスマホを取り出すと、電話してきた人物は彼だった。

「……もしもし？」

「梨子か？俺だ、遼だ」

「遼くん！お疲れ様……」

電話に出て、遼くんの第一声を耳にする。

とても優しい声で、安心する。そんな遼くんとはここ最近、毎日のように連絡を取り

合うくらいまで親交が深くなった。

遼くんも遼くんでは部活をしているから、私も彼に対してそんな風に励ましの言葉を口にする。

ただ同時に、いつもそばで一緒にいる曜ちゃんにすぐ申し訳なく感じてしまう。遼くんと曜ちゃんは恋人同士だし、色々と気を遣わないと曜ちゃんに迷惑をかけちゃうから。

恋人、彼女である曜ちゃんの事をふと考えていたその束の間、遼くんは私に話を振ってきた。

「今日も練習だった？」

「ううん。今日はみんな、夏休みの打ち合わせ。それでね、明日から千歌ちゃんのお家で合宿をすることになったの！」

「ええ!? マジか？」

「うん! マジよ♪」

私は今日のこと、学校であったことを彼に提供するように話をする。

多分いつもなら曜ちゃんに話を聞いているんだろうと思うけど、まだ曜ちゃんは帰っ

てきていないのかもね？

そしたら彼はとんでもないことを呟く。

「そうか。俺もその合宿に参加して、みんなの成長のためにビシバシしごきたかったなあ……」

「それだけは本当にやめて！」

「えっ？ダメなのか？」

「ダメよ！まるでダイヤさんみたいよ！」

あの時の部室で、地獄の練習を明日からしようと思卷いているダイヤと同じような雰囲気を醸し出している遼くん。

ダイヤさん以上に地獄の練習メニューを考えてしまいそうな彼を、私は必死に制止させる。

でも遼くんにとって、どうしてダイヤさんの名前が出てくるのか理由を知らないから、遼くんは首を傾げながら私に問いかけてきた。

「なんでダイヤの名前が出てくるんだよ？」

「ま、まあ……それはどうでもいい話だわ」

「……う？そつか。そういうことにしとく」

それを私はなんとかはぐらかし、そこで話を一区切りさせて終わらせる。

遼くんは不思議に思うところがある表情を見せていたけれども、私の話になんとも言及は  
することなく、それで納得はしてくれた。

ただ、その後に彼はいきなり話題を変える。

「そんでき、一つ聞きたいんだけど……」

「んっ？どうしたの？」

「ちよつと、聞き辛いんだけど……」

と、遼くんは私に対して聞き辛いとそう言う。

たつた今、2人で合宿の話で盛り上がっていたそのあとで、なにか私に対して、少し  
言い辛いこともあるのだろうか？

それを考えていた矢先でした。

彼は、私の度肝を抜く言葉を言い放ちました。



「また……言えなかった？」

「……!？」

「最初の『お疲れ様』、暗かったから」

「……………」

その言葉を耳にした瞬間に、私は驚きのあまりで後ろに一步後ずさる。

電話という『声』だけが頼りの会話なのに、その声のトーンだけで人の感情を汲み取って、それで人に発言する遠くんの感知する力はすごい。

驚き過ぎて、凶星になっちゃう。

「……悪い。聞くべきじゃなかったね」

「う、ううん! いいのっ! 別に私は気にしてない。それに遠くんは、私のことが心配で電話してきてくれたんだよね!?! そう……だよね?」

「……うん。そうだよ」

そしたら私が凶星になり過ぎてしまったせいで、彼が逆に申し訳なく感じてしまっ

いた。

私はすぐに言葉を紡ぎ、彼が電話してきてくれた理由を述べる。そして彼が発した答えを聞いた私は、ホッと心が晴れやかになった。

けど、また私は彼によって考えさせられる。

「梨子、迷ってる?」

「迷ってないって言ったら、嘘になる」

「じゃあ、もう一つだけ梨子に質問」

「えっ? 質問?」

「『ピアノ』と『Aqours』、梨子はどっちが大事?」

「……っ!」

「多分梨子の中では、Aqoursの方が気持ち的には強いんだと思う。だから迷って、言えずにいる」

「……………」

私の思う核心を言い当てられてしまった。

そうなの。私はA q o u r sのみんなが大事だから、だからこそ迷ってみんなにちゃんと言えずにいる。

彼は、そんな私に話をしてきた。彼自身の想いは強くて、心が惹かれてしまいそうだった。

「俺はね、小さい頃からずっとやってきたピアノを大事にしてほしいと思ってる。A q o u r sも大事だということとは、あのときに梨子の話でよく分かった。でもだからこそ、ピアノを大事にしてほしい」

「うん……分かってる……」

そう呟きながら、私はピアノにおいてある自分で作曲した楽譜をぼんやりと眺める。

『海へ還るもの』

あの時、本番で弾けなかった曲。

「自分の気持ちには、どっちだい？」

「わたし……しは……」

「別に今言わなくてもいい。ゆっくり時間をかけて考えて、答えが出たら俺に言ってほしい」

「遼くん……」

「最終的に決断するのは梨子だ。今の自分の気持ちに、正直に答えを出してあげてくれ」  
「……………」

自分の、正直な気持ち。

『梨子は、好きなものは好きでいてほしい。特に何より、 “一番” なものにはね!』

あの時、遼くんが私を勇気づけてくれなかったら今の私にはいない。

またこうして昔から続けてきたピアノと向き合うことができたのも、何もかも全ては遼くんのおかげなのも分かっている。

「じゃあ、今日はここで俺は……」

「ま、待って!!!」

「えっ?」

「今、今答えるわ」

「……………えっ?」

でも遼くんに質問されて、答えはすぐに出た。

今の私にとって、ピアノよりもA q o u r sのみんなのことを一番大切に思っている。

「スクールアイドル」が自分の中でどんどん大きくなって、みんなと一緒にスクールアイドルをしていることが、私の中で一番の楽しいことなの。

だから……………答えなきやつ!

「遼くん。私の、私の答えは……………!」

「……………!」

その後、私はスマホに届いてたピアノコンクールの参加申し込みのメールを削除した。

遼くんは私の答えを聞き、少し間を置いたあとに『梨子の答え、しかと受け取った！』って言って、それを最後に彼は電話を切った。

何よりも、みんなが大事だから。

後悔は、ないよ……。

ありがとう、遼くん。

でも……

貴方の思いに応えられなくて、ごめんね？

## # 6 1 曜の欲し、千歌の芽生え

「梨子の梨子の答え、しかと受け取った！」

「うん。ありがとう！」

ピッ！

「……ふう」

梨子が決めた選択を聞き届けた後、俺はゆっくりと通話終了のボタンを押す。

梨子と電話番号が表記された白い画面に自動的に戻ったあと、スマホの電源を落とす。そのまま自分のベッドへポイ投げし、机の椅子に座りなおした俺は、白い天井を見上げて口から零す。

「まあ、そうなるよなあ……」

自分の願ったこととは違う決断を下した梨子。

彼女の答えが、頭の中をぐるぐる駆け回る。

いや、彼女の決断に、俺がとやかく発言する権利なんかは一切ない。ただ、これが梨子が決めた意志なんだって、それを自分に言い聞かせていた。

でも、これで問題がスツキリした。

俺も一応は、梨子がどう答えを出すのか気が気で仕方なかった。だから、梨子が A q o u r s のみんなとラブライブに向けて頑張るって聞いたときは、俺も彼女たちに出るだけのサポートをしてやらないとなつて。自然と俺は、燃えていた。

コンコンツッ！ガチャ！

「遼くん！こんばんヨソロー！」

「……っ。おう。ヨソロー」



すると、曜がノックを2回して部屋のドアを勢いよく開けて入ってくる。だが俺は、そのドアの開く音に少し驚いてしまった。入る前に2回ノックしてくれたのは良かったのだけれど……。

それで何故か、曜には少し笑顔が見えた。

「どうした？ やけにニヤついてるな？」

「えっへへっ♪分かつちゃう？」

「お前はいつも顔に出すぎなんだよ」

その笑みに俺もつられて笑みを浮かべ、俺の問いかけには彼女は敢えて首を傾げ、さらにまた笑顔を振りまく。

こんな風に俺を前にしてニヤニヤしているときの曜は、大体は彼女にとって良いことだ。

多分、梨子が話してた合宿の件だろう。

「あのねあのね！ 明日から海の家の手伝いがあるんだけど、それをしながら、みんなで千歌ちゃん家で合宿をすることになったんだ！」

「ほう。合宿かあ……」

俺の予想が、ものの見事に的中した。

彼女の笑いつぶりを見て、何となく俺は想像していた通りにはなった。

まだ夏は始まったばかりなのに、これから合宿を始めるとか。梨子と話していた中で、唐突に出てきたダイヤの名前も気になる。

そういえば、梨子に合宿をする理由を聞いていなかった。この際に曜に聞いてみるか。曜にはダイヤのことを話したら、誰から聞いたの？ って問い詰められそうだからさ。

この件は曜に秘密にしておきつつ、その思いで俺は曜に合宿する理由を聞いた。

「でも、何で明日から？」

「えつとね、この夏にラブライブの大会が開かれるから、そのためにも合宿をしようってなつて。最初にこの夏にラブライブが開かれるって話をしたのはダイヤさんなんだけど……」

「ふう〜ん。なるほどね……」

曜の話の聞き、その度に俺は首を縦に振って相槌を打つ。

話を聞いていると、梨子の口から何故か出てきたダイヤの名前の理由が、今の話で聞けた気がする。

合宿をするきっかけを作ったのはダイヤだ。

まああいつスクールアイドル好きだし、μsの紬瀬絵里？つて人が好きみたいだし。きつと、そのラブライブに向けて、とんでもない練習メニューを考えてそう。

「ダイヤはスクールアイドル好きだからな。それにあいつは真面目だから、ラブライブのために練習も増やそうとか考えてたんじゃないか？」

「す、すごい!? 遼くんの言う通りだよ！」

「……………あつ。そう」

声を出して曜に『予想（正解）』を口にしたとき、曜の反応を見てもう察した。

間違いなくあいつならやりかねない。千歌が自分の家で合宿しようって言うってくれて、その方が一番良かったかもしれない。

俺も一瞬、冷や汗をかいた。

「そういや、海の家はどうするんだよ？自治会から頼まれてるんだらう？」

「うん！それもみんなでやるんだ！朝と夕方に練習をして、それ以外は海の家の手伝いをする感じ」

「だとしたら、夕方の練習なら来れるかも」

「本当!?!やった〜！」

曜から今後のA q o u r sの予定を聞き、そこに俺の予定を曜に伝える。

でも俺も俺で部活がある。1週間後にはインターハイが控えているから、よくよく考えたらそれまではそれどころじゃないかもしれない。

まあ、無理矢理にでも顔は出すつもりだが。

「といってもこつちも部活あるし、大会も近いから来れない日があるかもしれないけど、出来るだけみんなのところには顔は出すよ」

「うんっ！みんなにも伝えておくっ！」

「ああ、そうしてくれると助かる」

それに明日から合宿を始めるとはいえ、明日の朝早くから練習をするとは到底思えな

いしな。必ずやこいつや千歌は遊ぶだろう。あと鞠莉も……。

なんてったって、夏休みだからな。

「じゃあ、明日は来れる？」

「いきなりだなあ!？」

「えへへっ♪ごめんごめん」

『えへへっ♪』じゃねえ。

明日でさえ行けるかどうか分からないのに、曜はとんだ無茶ぶりを俺にふりやがる。

けど、その間いかけは彼女は本音らしい。

「でも、寂しいな……」

「えっ……?」

俺にとって、彼女がその言葉を言うなんて思いもしなかったからだ。

何しろ毎日のように、こうして俺の部屋に上がり込んで来て、ずっと2人で話をするのだ。

「だって、だって……」

「……………」

そう言うと曜は、尻込み口を噤んでしまう。顔を下へ、視線も逸らし、項垂れてしまった。

『無音』

俺と曜がいるこの部屋の状態。

俺も曜も、しばらくの間は口を開かなかった。

「……………」

ただ俺は何となく曜が、こいつがあのだと何を言おうとしていたのか分かる気がする。

理由は、俺と曜が付き合っていること。

「……………」

ただ単に「会えなくなる」。そういう考えもあるのかもしれないけれど、俺と曜はこれでも恋人同士、付き合っているんだ。

だからこそ、それが一番の『原因』なんじゃないかと、俺はそう感じたんだ。

ぶっちゃけてしまうけれども、俺たちは付き合い始めたはいいものの、特にこれといつてなんだが、『恋人らしいこと』を俺たちはしていないのだ。

恋人としての『デート』も、していない。

俺はサッカー部で、曜はスクールアイドル。

お互いそれで忙しくて、そういう恋人らしい何かをすることに時間を割けられない。それが原因で、曜は「現在進行形」で、ずくつと気にしているのかもしれないと、ふとそう感じたからだ。

「……………ううっ」

「……………」

曜はもう、今にも泣き出しそうだった。

それを見て胸を締め付けられる。こうなってしまったのは俺の責任だ。俺から言っ  
たんじゃないか、『恋人になろう！』って！

その時の俺は、自然と身体が動いていた。

ギユツ

「……………」

「ごめん、曜」

「……………」

椅子から立ち上がって曜に近寄り、俺はこうすることしかできなかつた。

自分の身体に彼女を抱き寄せて、ギユツと優しくハグをする。果南から教わった直伝  
の大技だ。

そして俺は、曜に言葉を紡ぐ。



「気づけなくて悪かった。俺、これから曜とはちゃんと恋人らしいことをしていきたい。俺たちは、まだ初々しい恋人同士だから！」

「……………」

こんなことしか言えない。

でも、曜の思いを汲み取るんだったら、精一杯に自分の気持ち伝えるしかない。

正直なところ、「恋人」としてどうすればいいのか分からない自分もいた。

けれどそれは曜も同じ。だからこれからは恐れずに、2人で一緒に歩んでいきたい。少しずつ、2人でともに前へ……。

「……………ねえ」

「んっ…………？」

そんなとき、ずっと口を閉ざしていた曜がやっとな口を開く。

「約束……………する？」

「えっ?」

「私も、遼くんと恋人らしいことをしたい。だから遼くんは、私とこれからちゃんと恋人らしいことをするって、約束できる?」

顔を俺に向けて、少し上目遣いの形で。曜は涙を拭ったあと、俺に対してそう問いかけてきた。

約束、か。

そんな約束、男なら守らないわけがない。

一度決めたら、俺はそれをちゃんと守る。彼女である曜に言われたら尚更ね。

「ああ。勿論だよ!」

「……っ! ありがとっ!」

彼女にそう伝えた時、曜に笑顔が戻った。

澄み切った青空のように、曇り一つもない満面の笑顔は彼女の魅力。その笑顔を、俺は守らなきゃ。

すると、曜は眩く。

しかし彼女がこれから言おうとしていたことは、俺にとっては想像がつくことだった。

「じゃあ……遼くん」

「今からしようとしても言うつもりか？」

「あつ。あはは……正解……」

だから、曜より先に俺が話した。

約束したそばからやろうって言い出す展開、彼女がいる場合において安易に想像がつくもの。

先に言われてしまった彼女は、俺に対して申し訳ないって感じで苦笑いを浮かべる。それを見ていた俺は、やれやれと呆れ気味に口にした。

どこか、悪戯好きの悪になった気分です。

「じゃあ今からしようか？」

「えっ？きやつ……！」

俺は自分のベッドに曜を押し倒し、逃げられないように彼女に跨って四つん這いになる。

我ながら、この人を弄る性格を直したい。

なのに時に、それが楽しいと思ってしまう自分がいて、このままでもいいかな？なんて考えている自分もいるのだ。

いずれは直したいんだけどね……。

「したいんだろ？恋人らしいこと」

「……うん。でも、いいの？」

「今からしたいんなら、今するよ」

今からしたいと言う彼女の要望に応えるために、至近距離で曜とそんなやり取りをする。

幸い部屋は俺たちしかいないし、そして家には親もいない。この雰囲気でも何も起きないわけがなく、そう考えただけ心臓がバクバクし始めた。

その時、曜がまた口を開く。

「ねえ遼くん」

「んっ？今度はなんだ？」

よく見たら、彼女の顔も少し赤い。

ゆっくり俺の首に腕を回してきて、俺を甘い誘惑へ誘導してくる。このときの曜は、より可愛さが目立った瞬間だった。

そして曜は俺を見つめてきて、俺にニコツと笑いながら言い放った。

「これから、思い出たくさん作ろうね！」

「……………」

たった一言、それだけ。

彼女の本音や本心がいつぱいいつぱいに詰まったその言葉は、俺の心臓を矢の如く貫いた。

『思い出をたくさん作る！』ということは、改めて言うけど、俺と曜、2人で楽しいことをたくさんすること。

たまには喧嘩することもあるかもしれない。ただそれよりも、色んな楽しいことをし

て、楽しかった思い出をより多く作りたい。

それが、「渡辺 曜」という女の子の思い。

その思いを、俺は、絶対に叶える。

「ああ！たくさん作ろう！2人だけの思い出！」

「……………うん！」

彼氏の役目って、こういう感じなのかな？

初めてだし、まだまだ全然分からないことが多いけれど、彼女と少しずつ、ゆっくり前に進んでいきたいと思った。

「じゃあ、いくよ？」

「うん。きて……………♡」

チュッ

「遼くん……………大好き♡」

「ああ、俺もだ」

こうして俺と曜は、この夜、身体を重ねた。

ブーツ！ブーツ！ブーツ！

ある人物から、電話が来てることを忘れて

〜  
〜  
〜  
〜  
※※※※※  
〜  
〜  
〜  
〜

プルルルルツ！プルルルルツ！ブツツ！

『……ただいま、電話に出ることができません。ピーツ！という音に続けて……』



ブツッ！

「……………はあく」

午後9時

遼くんが一度も電話に出てくれない。

もうかれこれ5回目。ため息しか出ないよお。

「……………」

ベッドに仰向けで寝転がっている私は、電話をかけても出ない遼くんにうんざりしていた。

どうして遼くんは何度も連絡していたのかと言われたら、ラブライブに向けて、歌詞作りを手伝ってもらいたかったから。

それなら梨子ちゃんがいるじゃん？って思うかもしれない。けど私は、あの時みたいに遼くんと作詞をしたいって思ったの。あのときのように、遼くんから良いヒントがもらえると思ったから……。

「はあ……」

また、ため息一つ。

明日からは、みんなと合宿を始める。

ラブライブに向けて、自治会から頼まれている海の家を手伝いながら、合宿で練習をこなしていくのはみんな大変だと思う。けど、みんなラブライブに出たい思いがある。

みんな、ラブライブのためにやる気なんだ。

もちろん私も、ラブライブに出たい。

だからそのためにも良い曲を作りたい。そう考えて私は、歌詞ノートを開いて歌詞を考えていたんだけど、これが一向に進まず今はベッドに寝転がっている状態。

遼くんに助けてもらおうと思ったけど、そんな彼も全く電話に出てくれないから、もう、どうしようもない感じなんだ。

「作詞、全然進まないよお……」

自分の部屋の天井をポーツと見つめては、作詞が進まないことをうじうじと嘆く私。

ラブライブの予備予選は8月で、時間はまだまだある。だけど曲の練習もあるし、早く詞を作った方が良いんじゃないかって私は考えてる。

『ラブライブに出たい』『その為にも、みんなの為に私は良い曲を作りたい!』という思いが、逆に自分に重圧を注ぐような、そんな感じになっている気がした。

そんな時、外から声が聞こえる。

「千歌ちゃん!」

「……っ!?!」

私の名前を呼ぶ声だった。

もうよく聞き慣れた、彼女の声だった。

「……梨子ちゃん」

「どうしたの? 元気ないわね?」

「うん、まあね……」

部屋を出ていつもの場所へと向かうと、ベランダに寝巻き姿の梨子ちゃんがいた。

私の今の表情を見たときに、梨子ちゃんは優しく笑みを浮かべて、私に対してそう尋ねてきた。

梨子ちゃんに『作詞が進まない』って言ったら、どんな反応をするのかな？いつも私は梨子ちゃんに怒られちゃってるから、きつと『またなの？』って言われて怒られそう。

でもこういうのは、ダメ元だよな？

そう思い、私は梨子ちゃんに口を開いた。

「作詞、全然進まなくて……」

「……………そう」

また、いつものように怒られるんじゃないかってそう思っていた私だった。

でも梨子ちゃんは怒らなかつた。私が全く作詞を進めていないのに、梨子ちゃんは笑いつけていた。アレレ？梨子ちゃん、怒ってない？

「……………怒らないの？」

「うん。まだ時間あるし、ゆっくり考えていいよ」

「う……うん。ありがとう梨子ちゃん」

彼女に聞けば、まだ時間があると返ってくる。

そっか。それならまだ大丈夫だね。ちよつと梨子ちゃんの話に驚いたけど、まだ何とかなりそう。

「良い歌詞にしたいから、私、頑張るね！」

「うん！私も、良い曲を作りたい！」

私が作詞、梨子ちゃんが作曲。お互いに良い曲にしたいから、私は一緒なんだって気づいたとき、だんだん元気が湧いてきた。

みんなで歌う曲を、絶対良いものにしなきゃって思った。

「ねえ梨子ちゃん！」

「んっ？なあに？」

「……良い曲、付けてね！」

「うん！当たり前だよ！」

その為に、歌詞作り頑張らないと！  
よおしくしつ！やるぞく！  
すると梨子ちゃんが口を開く。

「じゃあ、また明日ね！」

「ええっ!?もう寝ちやうの!?!」

「ううん、まだ寝ないよ。ちよつと……ね?」

「ちよつと……?」

「うん。ちよつと……考えごとをね」

梨子ちゃんが考えごとだなんて……。

このときの私は、梨子ちゃんに考えごとがあるだなんて知らなかった。

そしてなにより、そもそも梨子ちゃんの考えごとって一体なんだろう? 私にも、みんなにも言えないことなのかな?

「じゃあ、また明日！」

「えっ……？あ、うん。また明日……」

私が梨子ちゃんの考えごとを悩んでいたら、梨子ちゃんから突然会話を切り出された。それで会話は唐突に終わり、梨子ちゃんは私に手を振りながら、自分の部屋の中へと姿を消した。

考え方の発言をしたとき以外、終始笑みを浮かべていた梨子ちゃん。

「……………」

“考えごと”って、一体何なんだろう？

それは、梨子ちゃんにしか分からなかった。

「梨子……ちゃん……」

その後、私は梨子ちゃんから貰った元気を借り、もう少し歌詞作りに時間を費やしたいと、再び机に向かって歌詞ノートに言葉を紡いだ。

曲を作るプレッシャーはある。けれど、みんなとライブに出たいから頑張りたい

!

「そうやって『みんなのためにも』と、私は幾多の言葉をノートに書いていると、ひとしきりにスマホのバイブ音が鳴り響く。

ブーツ！ブーツ！ブーツ！

机の上で振動しながら、小刻みに動くそのスマホの画面に表示されたのは、5回も電話をしても出なかった、『彼』の名前だった。

「……………」

私はすぐに手を止めて、スマホを手取る。5回も電話に出なかった彼へ怒りをぶつけようと思ったから、私は彼からの電話に出た。

「もしもし遼くん!!!」

『うおっ!!? 開口一番、大声出すなよ……………』

「出すよ！5回電話しても出なかったんだから！」



『わ、悪かったよ！それに関しては謝る！』

開口一番、私は怒りを遼くんにつつけた。作詞を電話越しに手伝って欲しかったのに、こんな時間でやつと出るなんて……！

まあ、電話に出られなかったことはちゃんと悪いと思ってるみたいだし、ひとまず許そうとは思う。

次は、ないけどね……。

「全く！人の気も知らないで……」

『あつ、それで千歌！5回も電話してきたんだから、俺に何か用があるのか？』

「もちろん！」

それで彼は私にそう質問をしてきたから、私はまた怒りを込めて長々と彼に話をした。

真剣に、電話越しでもちゃんと耳を傾けているであろう遼くんは、流石に白旗を上げて降参した声を上げたのだった。

『……悪かったよ。俺が悪かった』

「もうっ！次からは許さないんだからね！」

『ああ。次からはちゃんと気をつけるよ』

反省の弁を述べる遼くん。

その言葉を聞いたその後、私は驚愕した。

『遼くん！お風呂出たよ〜！』

「……………えっ!?!」

聞き覚えのある、ううん、私にとって大切な人のその声に、私は開いた口が塞がらなかった。

「曜……………ちゃん……………?」

『えっ……………千歌ちゃん……………!?!』

思わず出てしまった声に、当の曜ちゃんも私の声に気づいてしまったみたいで、きつ

と遼くんは、スピーカーで電話しているのかもしれないなかった。

そうじゃなかったら、私の声が曜ちゃんに聞こえるわけないもん。

「どうして、そこに曜ちゃんがいるの？」

『えっ？あ……えっつと……』

何で……こんなことを聞くんだろう？

だって遼くんと曜ちゃんはお隣同士だし、毎日のように遼くんの部屋に曜ちゃんがい  
てもおかしくはない、はずなのに……。

ズキッ！

なに……この苦しくなるような胸の痛み。

『ひとまず先に、俺から話を聞こう。千歌、お前は俺に何か用件あって電話してきたんだ  
ろっ？』

「……………」

『おいしい。千歌……?』

何もいつもと変わらないことなのに、どうして?

どうして遼くんの部屋に曜ちゃんがいるだけで、こんなにも胸が苦しくなっちゃうの……?

ダメ。もう、無理……。

「ううん。やっぱり何でもない!」

『えっ……?』

「ごめん。ちよつと私も用事が出来ちゃった!じゃあ曜ちゃん、また明日ね!」

『あつ!おいちよ……!』

ブツツ!

「……………」

私は曜ちゃんにだけそう言い残し、逃げるようにして、遼くんの通話を切つてし

まった。

ズキツ！ズキツ!!!

「……………はあ……………はあ……………」

胸が痛い。呼吸も苦しい。

曜ちゃんの声を聞くまでは、全然こんなに苦しくなるなんてなかったのに。

遼くんと曜ちゃんは、2人は恋人同士だっていうのはちちゃんと分かっている。

なのに、どうしてこんなに息苦しくなっちゃうくらい胸が痛くなるの？

なんで？

なんで……………？

なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？  
なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？  
なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？

?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?  
んで?なんで?なんで?なんで?なんで?

誰か……誰か教えてよ……。

私しかない自分の部屋で、私は、一人で静かに辛く嘆いた。

## # 6 2 合宿本格始動

夏本番

今日から、みんなと一緒に合宿を始める。

「やっほ〜!」

「まつぶしい〜!!!」

「ふふっ! シャイニ〜♪」

それなのに私たちは、この雲一つとしてない快晴の中で、練習をせずに遊びまくっていた。

こんな日は、水着に着替えてみんなと一緒に海で遊ぶのに限る! だけど、そう簡単にはいかなかった。

「結局、遊んでばかりですわ……」

実際、海で遊んでいるのは私と千歌ちゃんと鞠莉ちゃんと果南ちゃんの4人だけ。千歌ちゃんと鞠莉ちゃんまでビーチボールを楽しみ、果南ちゃんは得意のサーフィンをしている。

そして遊んではないが、ぶかぶかと浮かぶ浮き輪の上で、ゆったりとのんびりしているルビイちゃんもいる。

「はあ……ぶかぶか♪」

波の揺れ加減が丁度いい感じなのか、ルビイちゃんは波に揺られてとても気持ち良さそう。

そんなのんびり寛いでいるルビイちゃんを、私は悪戯せずにはいられなかった。

「……………っ！」



海に潜水し、気づかれないようにルビイちゃんの真下にまでやってきて、その後で自分の両手をそっと、ルビイちゃんの脇腹のところに差し出す。

そして『今だ』と思つた瞬間、私はルビイちゃんの脇腹を思いつきりくすぐつた。

こちよこちよ、こちよこちよ!

「ひゃあつ!?!」

脇腹に突然やってきた変な感覚。私に唐突に襲われたルビイちゃんは驚きの声を上げ、浮き輪の上で私のくすぐりから逃れようと暴れる。

「あはははっ!あははは……わあ!?!」

それでその暴れる勢いのあまり、ルビイちゃんは海へ背中から転げ落ち、海にドボンした。

バシヤン!

「ぷはあ……!!」

「あははは!ごめんねルビイちゃん!」

「もう!くすぐりはダメです曜さん!」

「えへへ!ごめんごめん!」

私は海にドボンルビイちゃんを引きあげ、ルビイちゃんに悪戯したことを笑いながら謝る。まあ見ての通り、全然反省してないけどね!

ルビイちゃんへの悪戯は大成功に終わった。でも後々ルビイちゃんからこつびどく叱られちゃった。プンプンと口を膨らませて、私に怒っているルビイちゃんの顔、とても可愛い。

「マルは言われた通りに4時に来たはずだよ?」

「えっ?!ズラ丸が!?!」

それから私たちがある海とは打って変わり、浜辺では、ダイヤさんが私たちを見つめているその横で善子ちゃんと花丸ちゃんが話を繰り広げていた。

どうやら花丸ちゃんは、本当に朝4時にはここに来ていたらしい。

「うん！でもマル以外誰もいなかったぞ……」

「当ったり前よ！あんな時間からここで練習出来るわけないじゃない！」

「そうだけど、善子ちゃん、それはダイヤさんの前では言っちゃったらダメぞらよ……？」

「……………あつ」

「…………………」

砂浜に、そこに敷いたレジャーシートにうつ伏せで寝転がり、ゆったりと日光浴している善子ちゃんも花丸ちゃんの行動に驚くくらいだった。

ただ、花丸ちゃんに対して口にした善子ちゃんのその言葉が、ダイヤさんの心を深く抉った。

「いいんです……私がラブライブに向けて張り切り過ぎたのがいけないのですから……」

「その表情とトーンで言われると、逆になんか私が一番罪悪感を抱いちゃうんですけど」

……」

ダイヤさん、朝から練習出来なかったことに少しばかり悔しさを感じていた。そしてその表情を目の当たりにした善子ちゃんは、己が発した言葉に凄く罪悪感を抱くことになつてしまった。

「あゝあ。善子ちゃんいけないんだ」  
「う……うっさい！仕方ないでしょ！」

善子ちゃんには、ドンマイっていう言葉しかいいようがないや。

善子ちゃんの花丸ちゃんに対してそんな風に話をしたと思うけど、ダイヤさんがそばにいるとところでそれは話しちゃいけないよ……。

ここまで来たら善子ちゃんを擁護するわけじゃないけど、思わず口から声に出てしまったのかもしれないけどね。

うん、〃思わず〃ね……。

とりあえず善子ちゃん、ご愁傷様だよ。

「梨子ちゃん！梨子ちゃんもおいでよ！」

「ええっ!? 私はいいいよ千歌ちゃん！」

「いいからいいから！」

「……………」

私は善子ちゃんと花丸ちゃんのやり取りを見て、その後でふと視線を千歌ちゃんの方へと向けると、梨子ちゃんの手を取り、彼女を引っ張っていくように海へ駆けていく姿があつた。

海を泳ぎ、梨子ちゃんと遊ぶのをとても楽しそうに笑みを浮かべる千歌ちゃん。今日も千歌ちゃんは元気そうで何よりだ。

ただそう思ったのも一瞬だけ。昨日の夜の出来事をふと思い出しては、私でも自覚は出来るくらいに笑顔はすんなり消えた。遼くんと電話していたことに関しては、私に一言もその事を打ち明けてはくれなかった。

「へへっ！梨子ちゃん、そおれ〜！」

「きやつ！もう〜千歌ちゃん！」

「えへへっ！梨子ちゃんも楽しもうよ〜♪」

「……………」

にも関わらず、こうして千歌ちゃんは梨子ちゃんに対して笑顔を見せている。

最近思うんだ。千歌ちゃん、ここ最近梨子ちゃんに向けて笑うことが多くなっている気がするって。もちろん私の「誤解」なのかもしれない。けど私は、それがずっと気になっちゃって仕方がなかった。

ただ単純に、楽しくて笑っているだけなのに。

「千歌さん！ちよつとよろしいですか？」

「はい？なんですかダイヤさん？」

「そういえばですが、海の家の手伝いは午後からって言っていましたわよね？確か……」

「はい！そうですよ！」

そんな時、ダイヤさんは千歌ちゃんに対して海を家のことを尋ねてくる。

今日からみんな海の家の手伝いをも一緒にするから、ダイヤさんは海を家の事が気になって聞かずにはいられないのかもしれない。

と思っていたその束の間、次にダイヤさんは千歌ちゃんにとんでもないことを声に発

したのだ。

「それで、そのお店はどこですか？」

「……………えっ？」

「「「「えっ!?!」」」」」

ダイヤさんは千歌ちゃんにそう尋ねながら、キョロキョロと周りを見渡し始める。

千歌ちゃんですら、ダイヤさんの発言に、度肝を抜かれた表情をして驚いていた。みんなも、ダイヤさんがそんなことを言うなんてと、口にした言葉に驚きを隠せずにはいられなかった。

「あ、あははは……………」

私も、苦笑いが止まらない。

なにせダイヤさんが探している海の家は、ダイヤさんの目の前に佇んでいるというのに……………。

「ダイヤさん、目の前にありますよ?」

「……………えっ?」

そのことを、千歌ちゃんはダイヤさんに教える。

その促しによつてダイヤさんは、見た目がすごくボロボロな小屋を目にする。それが、私たちが今日からお手伝いする『海乃家』なのであります!

少しボロい小屋だけど、海乃家としてはまだまだ全然使えるから、とりあえず大丈夫……だと思ふ。

「ダイヤさん、現実を見るすら……………」

「……………ボロボロ……………」

それを目の当たりにしたダイヤさんは、自分自身が想像していた海乃家とは全然違ふらしく、衝撃を受けて見た目を眩くことしかできなかった。

まあ確かにボロボロなんだよね。ずっと昔からあの小屋で海乃家が続けてきたつて話を聞いているし、それにあの海乃家をずっと守つて欲しいと自治会の人たちから言われちゃったから、私も千歌ちゃんも果南ちゃんも、その言葉を守らなきゃいけない。



ただ、その隣に佇む海乃家は凄かった。

「それにひきかえ、隣は……」

「と……都会すら……」

「……ダメですわ」

まるで東京にある、雰囲気のあるカフェのような海乃家がそこに佇んでいた。それを見た花丸ちゃんは感激し、ダイヤさんは意気消沈気味。

お隣の海乃家に負けないくらいのお客さんと呼ばなければ、私たちで9人で切り盛りをする海乃家が悪い意味で潰されかねない。特にダイヤさんが一番そう思っているに違いない。

するとそのとき、少し前まで千歌ちゃんとビーチバレーをして楽しんでいた鞠莉ちゃん  
が、ダイヤさんに向かって言い放つ。

「ここで白旗を振るつもり？ダイヤ……」

「鞠莉、さん……？」

「私たちはラブライブを目指しているんでしょう？だったら、あんなチャラチャラした

お店に、私たちが負けるわけにはいかないわ！」  
「鞠莉さん……」

正直に思うのは、今ここで、この場でラブライブの話題を出しても何の意味もないと思うんだ。

「……………」

ほらやつぱり。千歌ちゃんたちの表情を見回してみると、むしろ鞠莉ちゃんの言葉に対して、疑問に思っている表情ばかりだった。

だからこの場面、ラブライブのことを話題にしてダイヤさんをやる気にさせようなんてこと、絶対に無理だってそう思ってたのに。

ダイヤさんは、鞠莉ちゃんの言葉を聞いたのち、一瞬にして感情が正反対に切り替わったのだ。

「鞠莉さん！あなたの言う通りですわ！」

「えっ…………？」

「ダイヤさん、やる気出たみたいですね……」  
「ええ。そうですね……」

本当に、やる気出ちゃった……。

これはとことん、ダイヤさんの厳しい檄が飛ぶに違いない。

そう思った私は、妹のルビイちゃんを再び浮き輪に乗せ、しばらくの間、海乃家のことを考えつつ、ルビイちゃんとの楽しいひとときを一緒に過ごしたのであった。

えっ？千歌ちゃんとはしないのだった？

「梨子ちゃん！そおくれっ！」

「きゃっ！もう千歌ちゃんってば〜！」

「えへへっ♪」

「……………」

うん。私はいんだ。

千歌ちゃんには、梨子ちゃんがいるから。



・千歌：皆無

・梨子：簡単なものなら出来そう

・ルビイちゃん：まあまあ出来そう

・花丸ちゃん：出来なさそう

・善子：論外

・果南：してるとこ見たことない（||不明）

・ダイヤ：そこそこ出来そう

・鞠莉：未知

俺の身勝手な想像ではあるが、こうだと思う。

千歌は全くの料理実力皆無だし、善子は作れたとしてもモザイクかかりそうだから論外に近い。料理が出来るのか俺も全くわからないのは、鞠莉と果南の2人ぐらいだろう。

でも鞠莉なあ。自分から作るって言ったときに、使う食材がめっちゃ高価そうなものとか、そういう食材をよく使いそうだ。魚介類に限れば、鮑とか、伊勢海老、ズワイガニとか。あつ。別に使う食材がめっちゃくちゃ高い代物なんだろうなって思ったただけだ。

料理出来るか、出来ないかは別として。

「ちよつくら向かつてみるか！」

とりあえず俺は、少し足早に彼女たちがいる海岸へと向かった。部活は午前中で終わり、一度帰宅した俺は、必要なものを用意したあとにすぐに自転車で海乃家へと出発した。

「ハア……ハア……」

日差しが強い。汗が額から出て頬を伝い、とにかく身体が出る汗が止まらない。でもそれが夏らしさを感じる。梅雨が明けてからずっとそうだが、気温も30度近い日が続いている。本格的に、季節が夏になったんだなって改めてそう思えた。

漕いで20〜30分の旅。俺を追い抜く車と、対向ですれ違う車が道路を駆け抜け、そして俺は、場所が変わっても必ず見える駿河湾を眺めながら自転車を猛スピードで走らせた。ただ、何かと千歌たちのいる場所も遠いから、部活の疲労が溜まつてるせいで正直しんどいや……あはは……笑えないけどね。

「ハア……ハア……」

海乃家がある海岸に向かうけど、俺の身体はもう『ジ・エンド』と言えるほどに限界だった。なにせほぼ毎日を部活に費やしてるし、インターハイっていう大きな大会を控えている。その上で、あの時に俺は彼女たちの手伝いをするって決めたのだから、如何なる理由があっても、あいつらのところに行かないと駄目だよな？

「ハア……ハア……！」

必死に自転車を漕ぎ、頭の中でずっと考えてた。ラブライブ出場を目指すため、これから精一杯努力しようとしている彼女たち。そんなあいつらのことを思うと、千歌たちのサポートをするって決心した俺が辿り着いた答えは、もう既にたつた。一つだけなのかもしれない。

俺は『Aqours』の『10人目』だ。何が何でも彼女たちのところには行かないとね。

「……………つ！うおおおおお！」

そこから俺は何一つ考えなかった。ただ無我夢中に、一心不乱に、自分の自転車を漕ぎ続けた。

そして気がつけば、目指していた目的地の場所に到着していた。

「……………アレ？着いちちゃった……………？」

ズボンのポケットに入れてるスマホで時間を確認すると、時間は出発してから30分が経ってた。どうやら俺は、本当に周りもなにも気にしないで自転車を漕ぎ続けていたみたいだ。ほぼほぼ考えてた時間通りではある。

すると何故か、俺の正面から声が聞こえてくる。砂浜からではない。それで俺が手伝いにやって来たことを喜んでいいのか分からないが、声のトーンがものすごく高かった。

「あつ！遼くん！」



「遼くん！来てくれたのね！」

声は2つ。千歌と梨子だ。

ただ、俺の方にやってくる2人の格好がいかに斬新で奇抜だった。着てんの？被つてんの？きつと答えは前者だと思うが、ぶつちやけそれはどこから出てきたんだって驚けるくらいの代物だった。

「ああ。部活が終わったから、手伝いに来たんだ。まあそれで早速聞きたいのだが、それは一体何だ？海乃家の宣伝をしているつもりか？」

「これ？そうだよ！梨子ちゃんと2人でね」

「うん。でも……なんか違和感しなくて……」

2人の姿、もう違和感しか感じない。

彼女たちが着ている？それには、俺には全く意味が分からない言葉が記されていた。千歌のやつには『墮天使の涙』という言葉が記され、梨子のやつには『シャイ煮』という言葉が記されていた。おまけにすげえキラッキラしてるし、何がなんなのか全然分か

らない。

ひとまず、他のみんなの話をしよう。

「ところで、他のみんなは？」

「えつと、まず果南ちゃんも私たちと一緒に海乃家の宣伝のためのチラシ配りをしてるんだ！」

「あとは、ダイヤさんと花丸ちゃんとルビィちゃんの3人は海乃家でお客さんの接待を  
してて、曜ちゃんと善子ちゃんと鞠莉さんの3人は、厨房で料理を作って……」

「えっ!? ちよつと待て！」

「「えっ……?」」

とりあえず、大体みんながどの役割をしているのか理解出来た。果南も海乃家の宣伝  
で、ダイヤと花丸ちゃんとルビィちゃんの3人が接待。ここまでは十分に理解出来た。

けど問題は、この先の料理担当の3人。曜ならまだ分かる。あいつは料理得意だし、  
どうせあいつは得意料理を出してるに違いない。俺が問題にしているのは、善子と鞠莉  
の2人の方だ。

『ギランツ！墮天！』

『シャ〜イニ〜♪』

チラツ

「遼……………くん？」

「どうしたの？」

「……………」

何となく、俺の中で全てが一致した。

『墮天使の涙』に、『シャイ煮』という二つの言葉。完全に2人がいつも言っている言葉に、少しばかり変化を加えただけのものしか見えない。そうだ、こればかりはそれしか見えない。

いま、でも待てよ？今こうして善子と鞠莉が料理担当をしているなら、2人は料理が出来るってことになる。そうなれば俺は善子を『論外』って思ってた、鞠莉を『不明』って思ってしまったことを悔い改めなければならぬ。2人が料理を作れるなんて、俺は思いもしなかったよ。

「……いや、何でもない。とりあえず、俺ちよつと海乃家に顔を出してくるわ」

「うん！みんな、遼くんが来てくれたら喜ぶよ！」

「へえ〜？そうか？」

本当に喜ぶのかどうかは分からないが、ひとまず俺は2人と別れ、曜たちが切り盛りしている海乃家にひよつこりと顔を出したのである。中をふと見てみれば、少しは空席もあるけれど、それなりに忙しそうでも頑張ってるみんなの姿があつた。ある意味ちよつとホツとしている自分がある。

「ういゝつす。みんな元気にやってる〜？」

「あつ！遼さん！」

「遼さん！来るのずっと待ってたんですわよ？」

「遅れてすまなかつた。遅れてきた分は、ちゃんと料理をして取り返すよ」

千歌の言つてた通りだな。ダイヤと花丸ちゃんとルビイちゃんの3人がお客さんとの接待をして、曜と善子と鞠莉の3人が厨房で料理を作っている。善子はたこ焼きを

焼く場所に居座り、鞠莉は自分の身体が隠れるくらいのでかい鍋を使って、ぐるぐるとなにかをかき混ぜていた。「シヤイ煮」と名付けたのは鞠莉だろうから、煮込み料理のようなものなんだと思うけど……。

「おい、テキパキ料理してるか〜?」

「遼くん! やつと来てくれた!」

果たして、2人の料理は一体何なのだろうか?

そんなことを思いつつ、俺は厨房にも顔を出す。そしたら今一番に曜が俺のことに気づき、キラキラと目を輝かせながら、鉄板の上の焼きそばを大いに掻き混ぜていた。いや……俺なんかよりも焼きそばの方、そつちをよく見ろよ。

「曜、今はそつちを優先しろ」

「は……はーい」

でっ? 善子の『墮天使の涙』という食べ物は一休なんなんだろうか?

「善子、お前の料理は……」

「クツクツクツ。リトルデーモンよ、悪いが我は今立て込んでいる。邪魔をしないでほしい……」

善子の料理している風景を見ようと覗き込もうとしたが、善子にいつもの感じで断られてしまう。たこ焼き機の前に立っているのだから、善子は何となくたこ焼きを作っているのだろうと思つたが、俺の予想は大きく外れる。

彼女がたこ焼き機の前で作つてたのは、たこ焼きのようであつた。たこ焼きでないような、真つ黒の丸い何かだつた。

「……ほう。そんな丸つこくて真つ黒に焼け焦げたたこ焼きみたいなのが善子が作つた料理か？」

「そうよ。これぞ、堕天使の涙ツ！」

名の如き『“堕天使”』という、黒をベースにしたたこ焼きのようになにか。俺から見ればまるつきりたこ焼きのように見えるのだけれど、断定的に『たこ焼き』とは言い切れなかつた。

だから今は、それを『墮天使の涙』と言った方が良いかもしれないと思った。その味見は、なんかまだしない方がいいと感じた。未知だから、しないでおく。

「それで、鞠莉の方は……」

「Oh, Unbelievable……!」  
「……………」

そこで次に鞠莉の料理を見てみようとな俺は彼女の方へ振り向く。だが俺の鞠莉の料理に対する好奇心を消し去るがごとく、鞠莉の前にある大きな鍋にはただ食材をぶち込んでるだけだった。

それに調味料も大量に鍋の周りに置かれている。これが「料理」として成り立つのかどうかさえ疑問に思ってしまうほどだった。

本当に鞠莉の料理の出来は、『未知』に近い。

「ま、鞠莉。それは……なんだ?」

「これ? うふっ♪これはシャイ煮よ!」

「……………」  
「これが、シャイ煮」

これが、シャイ煮。

鍋に入っている食材を覗き込むと、どれもこれも高級食材とも言える食材ばかりが鍋にぶち込まれている。一体どこからそんな食材をもつて来られるんだと、俺は食材の出所が気になって仕方なかった。

そんな時、ダイヤが俺に言い放つ。

「遼さん!」

「うん?」

「そんな風に遊んでないで、あなたもこの手伝いを始めてください!」

「それは……拒否権なしってやつ?」

「当然ですわ!」

鞠莉から食材のことで色々と聞こうと思っていたのだが、人差し指を差し向けて結構な強めの口調でダイヤは言うもんだから、俺は動きやすいように、上着だけ部活のジャージを脱ぎ捨てる。正直、厨房の中はめちゃくちゃ暑くて脱ぎたかったから、全然ちようど良かったくらいだ。



手伝いはする。曜は焼きそば、鞠莉は煮込み料理で、善子がたこ焼きっぽい黒きもの。その3つ以外で俺が料理すべきものといえば、俺の得意でもあるアレしかないな。

「分かったよ。俺はカレーを作る」

「えっ!?!カレー!?!」

「そんなの作れるの!?!」

俺的王道のカレーライス。でも夏祭りの屋台などで出ているのをあまり見かけたことはないが、今回は俺の腕を振るって作ろうと思った。

ただ今回は海の家だ。少しカレーライスそのものを変えたカレーライスを作る。

「ああ。でも俺が作るのは、〃キーマカレー〃だ」

「キツ……キーマカレー!?!」

家庭でよく食べるようなカレーとは少し違う。

玉ねぎ、にんじんなどを使うことには変わりないけど、肉はひき肉を使い、トマトとニンニクを加えたカレーだ。本場はもちろんインド料理。似てるのはドライカレーに

近いね。

「遼くんはカレーを作るんだね！」

「おう。俺も得意分野だ」

よし。キーマカレーに使う食材もちゃんとある。ダイヤにお願いして、新しく「キーマカレー」というメニューを追加してもらわなきゃな。

「さて、準備するか」

キーマカレーを作るには、まず材料の下ごしらえをしないといけない。だからまずは、キーマカレーで使う食材をカットするところから始めよう。

それでもつてな、この俺が作ったキーマカレーをじゃんじゃん売っ払ってやろうと思つた。今のところ焼きそばで売れてる曜よりもね。

調理に使う包丁とまな板、そして後に使う大きくて底が深いフライパンを用意し、調理を始める前に俺は、あるものをリュックから取り出す。これは俺が料理をする時、必ず用いる必需品だ。

ギユツ！

まあ……“手ぬぐい”なんだけどね。

「よしっ！そんじゃ始めつか！」

意気揚々。

手ぬぐいを頭にギユツと縛り、フライパンに予め火を付けて温めておく。そのあとに、目の前に使う一通りの食材を揃えて、曜・善子・鞠莉から視線が注がれる中で、俺はキーマカレーを作り始めた。

最強で最高のキーマカレー、少々お待ちを！

## #63 過酷特訓と謎メニュー

午後5時半、海乃家前の浜辺

「ふう、流石にお店の後だとちよつときついね」

「いやいやいやっ！その前には俺はあつちで部活もやって来てるんだけど!」

「何さ……自慢?」

「自慢じゃねえし!!」

とてもと言えるくらいの長い戦いのあと、夕方の5時くらいまで海乃家のお手伝いをした俺たちは、その浜辺で特訓を行っている。今さつきランニングを終えたばかりだ。

果南からしれみれば、確かに俺が口にした言葉は聞こえは良くないかもしれない。けれど、実際俺は朝から部活で走り込み、ボールを操り、みんなとはまた違う競技を俺は

行っている。果南には理解して欲しいのだが、これがなかなかね？

難しいよな？この大変さを説明するのって。

「ていうか、それよりも……」

「あつ、あははは……」

そう言いながら、俺と果南は後ろを振り向く。

振り向くその先には、俺と果南以外の全員が砂浜の上で、あらゆる形で休憩を取っていた。俺らから一番遠い千歌と善子と花丸は仰向けに倒れ、ルビィちゃんと鞠莉、そして曜と梨子が背中合わせで座り込んでいた。ダイヤに関しては、四つん這いで崩れ落ちてる。俺と果南のスピードに何とか付いてきてはいた。でも体力の限界のようで、呼吸の息はすでに格段に上がっていた。むしろ彼女には、ここまで付いてきたことを褒めるべきものだ。

「うう……こ、こんな特訓をムスメの皆さんはいつてきたのですか……？」

「うゆっ……凄すぎるよ……」

「こんなの、身体がもたない……」

だが想像以上にみんなは疲れていた。でも練習はこれで終わりになるわけじゃない。すぐに次の練習へととりかかる。

みんなの目標は「ラブライブ」に出場して、学校の統廃合を阻止すること。それを目標に掲げるなら、いつまでも休んでなんかいられないはず。だから、俺はみんなに盛大な発破をかける。

「ほらほら、次は体幹を鍛えるよ！」

「そんなにきついきついって休んでばかりじゃ、ラブライブなんて夢のまた夢だぞ！」

彼女たちの目標への努力を踏みにじる為にこんなにも発破をかけているわけじゃない。むしろ逆だ。この合宿を通じて、改めて、俺は彼女たちの覚悟を知りたい。もちろんそれ相応のサポートを俺はしていくつもりではいるよ。

今現在、それらしい雰囲気は微塵も感じられないけど、胸の内はきつとみんな同じ気持ちははずだ。

「さっ、とつとと始めるぞ！」

「は……はあい……」

「が、頑張ルビィ……！」

そんなことを考えながらみんなを呼び集め、次に取り組む練習へと移る。次は体幹のトレーニング。これは俺も部活で取り組んでる練習メニューだ。

体の軸を作るトレーニングとして、部活でいつも取り組んでいるのは『プランク』。腕と足のつま先だけで1分間身体を支え、一直線に姿勢を維持することがこのトレーニングのポイント。けれど今から彼女たちが特訓するのは、『アーム&レッグクロスレイズ』というものだ。

読んで字がごとく。膝立ちで四つん這いになり、右足と左腕を上げて真っ直ぐ伸ばすトレーニング。上げていない左足と右腕で身体を1分間支えなければならぬし、最初に話をした『プランク』よりは結構大変なトレーニングだから、最初は耐えるのにみんな苦勞するだろう。

「じゃあいくぞ！ ようい、スタート！」

「んっ！ んんっ！ くうっ！」

ほら、やっぱりね……。

「千歌、足が落ちてる！もつと上げろ！」

「あ、上げろって言われても、この体勢、結構キツすぎるよお……」

「グズグズ言わない。ほれ、上げろ！」

「ひゃっ！」

身体を支えようとするあまり、上げている腕と足が少し下がりが味になってしまふのはトレーニングではよくあること。だからこのトレーニングの1番のポイントは、背すじを真っ直ぐに保持し、手足はしっかりと伸ばして身体を支えることが重要。

「……………」

果南たち3年生の3人は流石だ。1年ものブランクさえも感じないくらいにしっかり出来ている。果南は元々筋肉バカだし、ダイヤは言われなくても自分をしっかり追い詰めるタイプ。鞠莉は出来ることに少し驚いたけれど、身体はあれからでも鈍ってない



みたいだった。それから曜と梨子も少しフラフラとしているけれど、耐えながら2人も頑張っている。

やはり問題なのは、千歌と1年生の3人だ。

「んっ！うんっ！んんっ！」

「う……うゆゆっ……」

「き、きついでらあ……！」

「今こそ、我に、力を……！」

今にも倒れそうなくらい、前後左右にフラフラと身体が揺れている4人。この4人は体幹が弱いから、この特訓を毎日のようにしてもらおう。身体の軸を鍛えないとキレのあるダンスなんかしようと思っても出来なくなっちゃうからな。

だがこれからのことを考えていた矢先に、必死に堪えていた千歌の限界が来てしまった。ドミノ倒しのように、千歌↓善子↓花丸ちゃん↓ルビィちゃん↓の順に次々と身体が地面へと倒れる。

「わあ!？」

「いたっ！」

「ずらっ!？」

「ピギイ！」

痛そうに悶えている4人を見て俺が思ったこと。それはこの体幹トレーニングを、しばらくはずっと練習メニューの中に入れておかないとダメだなっということだ。ダンスを披露するんなら、そのための身体作りをしないと。

「はい、もう一度行くぞー！」

『はいー！』

この合宿で色々と積み上げていかないと、みんなが目指しているラブライブなんて勝てないだろう。ぶっちゃけそう断言できる。だからこそ、この合宿で身体の軸を鍛える。毎日コツコツ、じっくり時間をかけてね。

「オツケー！みんなお疲れ様！」

「ふあ〜！終わった〜！」

「この特訓きつすぎるよお………」

こうして体幹トレーニングであるプランク、左右両方とも行うアーム&レッグクロスレイズの2種類の特訓を終える。プランクで1分、アーム&レッグクロスレイズを左右で1分行い、計3分で1セット。合間に休憩時間1分を入れながら5セット行ったことで、特に疲労困憊な千歌と1年生の3人は、終わった途端に即座に砂浜に寝転がった。息も相当に上がっている。5セットもしたから、みんなの身体のことも考えたら十分に特訓はした。でもまあ、まだまだ特訓は続くんだけどね。

「5分休憩したら、次は2人1組になって筋力トレーニングをするから、それまでしっかり休めよ」

「ええく!? 千歌もう疲れた……」

「うん! 分かったよ遼!」

「果南ちゃん!」

休憩という身体を休められるインターバルがあるのに、いつになく果南はやる気に満ち溢れている。みんなが疲れて座り込んでいるのに、果南は笑って立ち上がる。こいつ

もこいつで鞠莉と仲直りしたあの日からは、なんか色んな意味でグイグイと積極的になってきた気がする。

ただみんなはいつもの対応をするから、筋肉バカで体力オバケで俺の勘違いなのかもしれない。けど俺にはそう感じられた。何かしら果南を突き動かす原動力があるんじゃないかと、笑顔に隠された本音を聞かずにはいられなかった。

「いつになくやる気だな、果南」

「まあね！みんなと一緒に合宿するの楽しいなって思って、はやく次の練習がしたいなってじっとしてられないんだ！」

「……フツ。そうかい……」

みんなとの合宿が『楽しい』……か。

果南の口からそんな言葉が出てくるとは。溢れんばかりの笑いある答えに、流石に俺も不意に笑みを浮かべてしまった。でもむしろそれは、みんな同じことを思っているだろう。

「じゃあ、次の特訓に移るぞ〜！」

『はーいー！』

さて、次の練習に取り掛かりますかっ！

さっきまで特訓でヒーヒー根を上げていたみんなは、休憩したおかげで体力は回復し、俺の声かけに元氣よく返事をする。表情は前よりもずっと明るくなっていた。みんなの表情を見渡せば、果南と同じように笑っている。やっぱりみんな同じ気持ちなんだなって感じた。

~~~~~※※※~~~~~

「うう……ひやつこい」

「我慢してルビイちゃん。まだ砂落ちてないから」

「うゆつ。ルビイ我慢する」

それからしばらく特訓を続け、太陽が沈むその前に練習を切り上げた。汗をびつしよりにかいて練習をしたわけだが、髪や身体に付いた砂を落とさなといけなかった。だからでかいドラム缶に溜めた水を使い、みんなは冷えることを我慢しながら、お互いにバケツで頭から水をかけあっている最中だ。

「曜、かけるぞ?」

「うん、お願い!」

俺も水が入ったバケツを持ち、今から曜の頭から水をぶっかける。こんなことをするのは毎年の夏でいつものことだけど、こうしてみんなで水をかけ合うことなんて初めてだからちよつと新鮮。

以前は千歌や曜とばつかりで海で遊んでいたことがものすごく多かっただけに、なん

だか変な感じもしなくはないが、楽しいとも思える自分がいた。

バツシャーン！

「んっ、大体砂は落ちた。もう大丈夫だ」

「ありがとう、遼くん！」

「遼〜！マリーたちにもお願い！」

「はいはい。今行くよ」

曜に水をかけた後、鞠莉から声がかかる。鞠莉は自分たちにも水をかけて欲しいとお願いしてきた。果南とダイヤは何故か恥ずかしそうにバケツを差し出してくる。何か思うところがあるんだろうけど、彼女たちにもお願いされては断れなかった。

ついでに1年生の3人にもしてあげようと思ったのだが、ルビィちゃんは千歌にかけられ、花丸ちゃんに関してはルビィちゃんに水をかけてもらってる。そして善子に関しては、海に潜るときに使うはずのシユノーケルを使い、ドラム缶の中に身体ごと水に浸かっていた。そんなことはしなくても、ちゃんと砂は落ちるんだけどなあ……。

バシャーン！

ひとまず俺は、目の前の果南たち3人に水を盛大にぶっかける。果南から1人ずつ水をかけている最中に、果南が身体に付いた砂を落としていく。すぐ近くで見ている俺にとつては、そんな行動が異様にいやらしくてももの凄く色っぽかった。見てることだけが興奮を覚えてしまう。

「んっ。これでもう砂は落ちたろ？」

「うんっ！ありがとっ！」

「次はマリーにかけてくださ〜い♪」

「そ、その次は私にお願いしますっ！」

「はいはい。順番にするよ」

彼女たちが水着姿だから、性的に見てしまうのは仕方ないことかもしれない。だがそれを表情として表に出してしまえば色々と面倒なことになるから、性的に見ていても表情を変えることなく、いつもと変わらない感じに振る舞う。

「鞠莉、水ぶっかけるぞ?」

「OK! いつでもいいよ♪」

「そのあとはダイヤな?」

「はい。準備出来てます」

鞠莉の次にはダイヤと、順番にバケツに汲んだ水を彼女たちの頭からかけていく。こういうのもなんだが、なんか疲れてきてしまった。

午前中に部活をやって、海の家の手伝いをして、それでA q o u r sの特訓のお手伝い。合宿の初日からこれでは俺の身体が今後保てるか心配だ。でもそれでもやるって決めたんだけどね。

「あんたたち〜!」

『…………!』

「旅館には他のお客さんもいるから、絶対うるさくしたらだめだからね!」

そんな時、美渡さんが玄関の暖簾から顔を出し、俺たちに対して注意を促す。でも仕方ない。夏休みに入ったこの時期から、千歌の旅館に泊まりにくるお客さんがとても多

くなつてくる時期。

必然的に、美渡さんからそんなことを言われるのは大体分かつていた。千歌をはじめ、みんなもね。

「うんっ！分かつてる〜！」

「言つたからね!!」

「は〜い！」

美渡さんと千歌の2人は俺がいつも見ているやり取りをして、美渡さんは暖簾から顔を引つ込め旅館の中へと消えていく。

千歌は美渡さんが姿を消したところで、『ふう』と深くため息をついたところ、ある人物のお腹から、空腹を示す音が鳴り響く。

グウ〜!

「あっ……」

「鞠・莉・さ・ん？」

「えへっ♪テヘペロ♪」

その人物は、すぐ近くにいた鞠莉だった。

鞠莉のお腹から、まさか腹の虫が鳴るとは思わなかったけれども、あれだけ運動すれば、お腹が空くのもおかしくはない。

「でもお腹が空いたわ。ご飯まだ？」

「そ、それが……」

でも海の家での“しきたり”みたいなことをみんなは知らないはずだ。鞠莉の問いかけに対して千歌のこの焦りようを見れば一目瞭然である。

曜と果南もこのことはちゃんと知っているけど、これは俺から説明するしかあるまい。

「俺が説明しよう」

「遼くん」

「きつと美渡さんのことだ。いつものだろ？」

「……うん」

「どういうことですか？」

俺が仕切りに話を切り出すと、やはりというべきかダイヤがその話に食いついてきた。

でも実際は、千歌の口から前もって話をする予定だったから、今ここで話をしていただいた方が、都合は良いのかもしれない。俺はみんなに問いかけるような形で話を始めた。

「海の家で料理を作っただろ？それでもその料理が余ったら、それをみんなで食べて処分しなきゃいけないんだよ」

「ええ!? そうなんですか!？」

「そんな話、ヨハネ聞いてない!」

「じゃあ今聞いたはずだ」

「理不尽! 圧倒的理不尽!」

善子さんや、理不尽だろうがなんだろうがなんとしても言ってくれ。これがルールなんだよ。作っては余った料理をみんなで食べる。仕方ないんだよ。

「それで？なにが余ったの？」

それで果南が口を開き、千歌にその質問の答えを促させる。千歌はその質問に答えるのと同時に、海の家で料理を作っていたとある2人は身体をピクツと反応してみた。自分でも分かってみたい。

「うん。曜ちゃんのヨキソバと、遼くんのカレーはほぼ売り切れたんだけど、シャイ煮と墮天使の泪が全く売れてなくて……」

「うっ……！」

「ご、ごめんなさい……」

善子と鞠莉の2人である。

当たり前だ。見た目でも全くよく分からない料理を注文するお客さんがいるわけがない。口調が少し悪くなってしまったが、事実を言ったままでだ。

「とにかく、余った料理はみんなで食べなきゃならない。それだけはみんな分かっている

てほしい」

「でも、それってどんな味がするんですか？」

「私もちよつと興味あるかも」

「マルも食べてみたいぜら！」

んっ？みんな、2人の料理に興味あるのか？

意外だな。あれを「料理」と呼んでいいのか俺さえ分からないのにさ。ていうか、こんなことを考えてしまった地点で俺の負けじゃないか？

「OK！シャイ煮くPlease！」

「クツクツクツ。堕天使の泪に溺れなさい！」

と、俺がそんな事を考えているうちに善子と鞠莉はみんなの興味に添えられるよう、それぞれの自分の料理を作り始めていた。さつきの話は別として、美味しいのかどうなのかは俺も気になる。

「はい！出来たわよ〜！」

「墮天使の泪、召喚ッ！」

はてさて、もう出来てしまったようだ。

おいおい。出来るの早すぎだろ？

「さあ！召し上がれ！」

みんなが座るテーブルに、出来立てのシャイ煮が入った鍋とそれを盛るための器。そして墮天使の泪がたんまりと乗せられた皿が並べられる。

さつきまで興味津々で食べてみたいとまで言っていたみんなの表情を伺うと、やつぱりねって感じ。初めて目の当たりにする料理に唾を飲み込み、表情は少しばかり曇っている。だがそんなことは2人はいざ知らず、みんなが自分の料理を食べて、どんな反応をしてくれるのかとイキイキしていた。

「……………」

みんなはそれぞれシャイ煮をよそって、その器を左手に持ち箸を右手に持つ。

そしてみんなは、一斉にシャイ煮を口に運んだ。

「……い、いただきます……！」

箸で食材を掴み、もし不味かつたら？つて考えているみんなの表情を見ながら、俺も自分でよそつたシャイ煮を口に運ぶ。不味かつたら美味しくないと言えればいいだけの話だ。

そんなことを考え、俺はそれからなんの躊躇いもなくシャイ煮を口すると、鞠莉が作ったシャイ煮を小馬鹿にしていたときの俺を殴つてやりたい気分になった。

「……美味しいっ！」

「シャイ煮、美味しいっ！」

美味。美味しい。みんなが一口目を食べた瞬間、表情はすぐに一変した。

食材をあんなデタラメに入れて料理になるのかと思つていただけで、逆にそうすることで食べたことのない新たな料理が生まれるという、良い意味でとんでもないことになった。

するとそのとき、梨子から質問が飛ぶ。力を振り絞って大きな鮑を箸で持ち上げながら。

「でも、これ一体何が入ってるの？」

「フツフツフツ。シャイ煮は、私が世界から集めたスペシャルな食材で作った究極な料理デウス！」

そんな質問に鞠莉は答えながら、俺たちにその『スペシャル』な食材を見せてくれた。その食材の多くは、一般の家庭で見ることや、また調理できるなんてことはまずないだろう。

俺も少しばかり驚いた。なにせ、来た時から気になっていたことがようやく分かったからな。

「でっ？一杯いくらするんですのこれ？」

「さあ？10万くらいかしら？」

「じゅ……10万!?!」

「いくら何でも高すぎだよ！」

「はあ。これだから金持ちは……」

松茸に伊勢海老にアワビ。ズワイガニにマンボウにA5もも肉とか、シャイ煮を作るだけでどんだけの高級食材を使っていたのか見ていてよく分かる。

だがよくこんな食材を手に入れられたな。まあこんな大量の食材を手に入れることくらい、小原家みたいな金持ちの家系なら簡単なんだろうな。

「じゃ、じゃあ、次は墮天使の泪を……」

「そうだね。次は善子ちゃんが作った料理を食べてみよつか!」

そうこうしているうちに、ルビイちゃんが早くも次に善子が作った墮天使の泪を手にかけていた。

爪楊枝が刺さったその墮天使の泪を手にとって、ルビイちゃんはなんの躊躇いもなくたこ焼きを口に運ぶ。美味しそうに、一口でパクリと。

「ああ……んっ!」

「……………」

「タ……タバスコ……」

「善子、お前なんてもん入れてんだ……」

タコじゃなくて、タバスコ。そりゃあ辛いわ。

ひとまず言えることは、中身になんてもんを入れてんだよ。普通ならタコだろ？なんでタバスコなんだよ？具でもなんでもないじゃないか。だが善子はそれを美味しそうに食べている。

「んんん！美味い！」

「オウ！Strongly hot！」

「平気なんですの!？」

「まあ私、辛いのが好きだから」

辛いものが好きだというのは初耳だ。普段いつも墮天使な言葉しか善子は言わないからさ。食べ物に関してどんな好みをしているんだと思っていたが、まさかそんな好みがあるとは思わなかった。俺からしてみれば少し意外で、驚いた。

「とにかく、ルビイちゃんに水を！」

「ルビイちゃん！これお水だよ！」

「あ……ありがとう……」

花丸ちゃんがルビイちゃんにコップ一杯に入れた水を与え、ルビイちゃんは一気にそれを飲み干す。見た目でどんな食べ物なのか分かるはずがないのが普通だ。びつくりするのが当たり前。ルビイちゃんは舌を出し、未だに辛味の辛さに耐えていた。

きつと善子は、自分の好きな辛いものを料理にしたかったのだろう。そしてそれを形にしたのがこの墮天使の泪だ。だがみんなはそれを口にしたけど、あまりにもいい評価は出なかった。表情を澁らせ、辛さに耐えることしかみんなは出来なかった。

「なんで私の料理が不評なのよ〜！」

「いや、そんなのにタバスコなんか入れてるから、みんなから不評になってるんだろ？」
「うう……なんで私ばかり〜!!!」

やれやれ。善子には、少しばかり料理というものを教えてあげる必要がありそうだ。

こうして2つの料理を食べ終え、鞠莉のシャイ煮は高評価、善子の墮天使の泪は低評

価で終わった。やはり鞠莉のシャイ煮が美味しかったのが意外で、これを少しでもオススメとして売り出してみれば、多少なり売れるのではと僅かに期待を俺は抱く。

そしたらその束の間、千歌は口を開く。

それは、俺に向けてのことだった。

「ねえ！遼くんの料理は？」

「え……俺の料理？」

「私、遼くんのカレー食べたい！」

「え、ええ……」

千歌からのいきなりのリクエスト。俺が作っていたキーマカレーを、千歌が食べてみたいという唐突な要望だった。

だがそれにはまたカレーを最初から作らなければならない。材料はあるからまだなんとかなるけど、こうなった場合は、一緒にみんなの分のもカレーを作るしかしかない。みんなの分は敢えてだから多少なりにも時間はかかるんだけどさ。

「はあ……仕方ないなあ……」

「作ってくれる!？」

「千歌が言うから作ってやるよ」

「わくわく! やった〜!」

やれやれ。本当に陽気なやつだな、こいつは。

お前のために俺のキーマカレーを作ってやるんだから、少しはじつとして待って欲しいものだ。

とりあえず、相方の力を借りるか。

「ひとまず曜、手伝ってくれ」

「ええ!?! 私もするの!?!」

「サポートだけをして欲しい。それに、お前以外で料理が出来るやつが他にいるか?」
「それ、善子ちゃんと鞠莉ちゃんに失礼だよ」

善子や鞠莉には失礼な言葉を使ってしまったが、それはもう致し方ない。それよりむしろ、これは曜にしか頼めないことだ。一緒に料理をしているから言えること。俺は曜を信頼してるから頼んでる。

その時、それを他所に千歌は口を開く。

「遼く〜ん！早く作つてよ〜！」

「はいはい、分かった分かった！」

外野からガヤガヤと早くカレーを作れと言うもんだから、両手を合わせながら俺は俺に頼み込む。

「曜、すまんが頼むわ」

「もう……人使い荒いんだから……」

曜はそう言いつつ、俺の頼みを受け入れる。上着で来ているパーカーの袖口を少し捲り上げ、渋々と調理台へと向かう。その背中姿を見届けた後で、俺はみんなに少しだけ待つてもらおうように告げた。

「じゃあ俺と曜でカレー作るから、みんなは自由に話をしながら出来上がるのを待っててくれ」

「は〜い！待ってま〜す！」

千歌が今一番に声を大にして返事をし、俺は曜が待つ調理台へ駆け込む。既に大きな鍋とフライパンと包丁とまな板が用意されていて、材料もある程度は曜が用意してくれていた。流星は曜、仕事がとつともなく早い。

「じゃあ、調理を始めよう！」

「分かった！下ごしらえからする？」

「ああ。よろしく頼む」

「了解であります！」

それで俺と曜はそれぞれ役割を決めて、それからカレー作りを始める。曜はひき肉をほぐし始め、俺は野菜を各々のサイズに切っていく。

「ひき肉、こんな感じがいい？」

「……うん。そんな感じでいいや。サンキュー」

「じゃあ次は私も野菜切っていくね！」

「ああ、助かる！」

曜と一緒に料理するのは本当き久しぶりだけど、やっぱりこいつと料理をしていると早いし楽しい。今まで一人でしてきたことの手間が省かかるとが出来て、本当に頼りになる。

その間には、外野がコソコソと俺と曜のことを話している人たちがいた。あえて俺らに聞こえるように話をしているようにも感じられた。

「やっぱり凄いな……あの2人……」

「ええ。お互いに息がぴったりですわ」

「流石恋人同士です！」

3年生のあいづら、俺と曜を見て何やら恋人どうのこうのと話をしているみたいだ。野菜を切る音で少し邪魔になって話が聞こえない時があるけれど、果南が発した『2人』という言葉と、鞠莉が発した『恋人同士』という単語に何となくそう感じた。

「……恋人……同士……」

「……………」

そんなことには曜も反応を示していた。チラツと曜のことを見やると、頬のあたりが若干熱を帯び、僅かに紅く染まっていた。包丁の手の動きもそれを気にしすぎて止まっている。

「なんか……恥ずかしいな……」

「うん、そうだね……」

3人の話、彼女も聞いていたみたいだ。

お互いに恥ずかしいと思い、困りつつ笑みを浮かべて笑い合いながら、俺たちは調理を再開しカレー作りを続けたのだった。

「……………」曜ちゃん

#64 善子の願望、千歌の驚愕

「はい、お上がりよ！」

「冷めないうちに食べてね！」

カレーを作るのに1時間ほどかかった。

特にこれといって別に手間をかけたわけじゃないけど、強いていうならニンニクを加えて、少し辛味が増したくらいだろうか。彼女たちが食べられないほどの辛くにはしてないから、とりあえずは問題はないはずだ。

曜が皿にご飯を盛り付けて、俺がそれにカレーをかけてからみんなの待つテーブルにサーブをする。俺と曜で料理したカレーを見て、驚かない彼女たちではなかった。

「わあ〜！美味しそう〜！」

「ニンニクの香り、とても良いですわ」

「Yes!とても食欲をそそるわ!」

みんな、各々に俺と曜が作ったカレーをまず見て感想を述べる。特に千歌なんかは俺の料理を一番に食べたがっていたから、目をめちやくちやキラキラにしていた。それだけ、俺のカレーを食べたかったんだなということが一目瞭然で見とれたよ。

「じゃあ、早速いただくぞら♪」

「出来たてで熱いから気をつけなよ」

「はいずら!」

もうすでにスプーンを手に持ち、食べる気満々の花丸ちゃん。さつきシャイ煮を3杯も食べていたのに、カレーもまさか食べる気か?

だとしたら、その栄養やら色んなモノは一体どこに吸収されていくんだ? まさか、栄養はその2つの膨よかな……? いいや、ここで言うのはやめよう。なんかあとから制裁をくらいそうだからな。

「それでは、いっただつきまゝす♪」
「おう、召し上がれ」

そして千歌の号令の下、みんなは一斉にカレーを食べ始めた。一口で頬張れる、スプーンにはそれ程の量をのせてみんなはまず一口目を食べると、同時にみんなの表情はにんまりと笑顔になった。

「んんんっ！美味し〜い！」

「まあ！こんなにも美味しいカレー、私でも初めて食べましたわ！」

「すごく美味しいぞら〜♪」

俺と曜で作ったカレーは大絶賛。墮天使の泪でのたうち回っていたルビィちゃんでさえ、『辛い』とかも何も言わずに食している。もの凄く美味しそうに笑顔溢れていた。

「おかわりぞら！」

「はやっ！まだ食べるのかよ？」

「はいっ！遼さんと曜さんが作ってくれたカレー、とても美味しいですから！」

おかわりを要求する花丸ちゃん。この子は本当に食べても太らない体質なのかもね。その代わり15歳でその大きさなら、今も尚のこと大きくなっていくに違いない。ナニがとは言わないけど、そのナニかは言わないでおくよ。大事だから『2回』言った。花丸ちゃんのそれを触ってみたさはあるけどね。

「良かったね、遼くん！」

「ああ、そうだな」

ひとまず俺と曜で作ったカレーの評価は、鞠莉のシャイ煮よりも高評価を得ることができた。

カレーはA q o u r s 全員が完食をし、カレーを食べたおかげなのか、みんなの満足感のある表情が見てとれる。俺からしてみれば満足そうで何よりだ。

グイツ グイグイツ

「んっ……っ？」

その時、俺の背後から服の左側の裾を掴まれる。ギュツと、そしてグイツと力強く引つ張ってくる。俺はその場で後ろを振り向いてみると、そこにいたのはさつきまで満面な笑み浮かべながら美味そうにカレーを食べていた善子だった。

俺に上目遣いをしてくる彼女は、何か言いたげな表情だったので俺から声をかけてみる。

「どうした？善子？」

「……………」

「…………？」

だが、善子は俺の問いかけに視線を外す。彼女をよく見ていると、若干少しばかり彼女の頬の辺りが紅い。善子にとって俺に話す事柄がそんなにも恥ずかしいことなのかは分からんが、とにかく善子から口を開けてもらった方が幸いなのだが……。

「よ、善子さん…………？」

「……………」

「……………善子さ」

「ああもう分かったわよ！」

「……………?!」

じれったく善子の名を呼び続け、彼女の方から口を開いてくれること願っていたら、ようやく善子は口を開いてくれた。自分の中でやっと決心がついたんだろうと思うのだけれど、善子は一体なにを話し出すのだろうか？　そして何より、その大きな声でみんなも善子に視線が注がれる。

それを気にすることなく、善子は重い口を開く。

「遼さん！」

「は、はい……………」

「わ、私に、料理を教えてください！」

いつもの善子なら、墮天使ヨハネになって墮天使なる言語を話すのが通常なのに、たった今俺に対して言い放った言葉は、墮天使が一切含まれていない素の善子の言葉だった。

「素直すら」

「えっ？花丸……ちゃん？」

「善子ちゃんが素直すら〜!?!」

「善子言うな！ヨ・ハ・ネ〜!」

当然、幼稚園の頃から善子のことを知ってる花丸ちゃんは驚きを隠せなかった様子。

「善子さん、熱でもあるのですか？」

「ないわよっ！信じてないわけ!?!」

「まあ、いつもの善子なら墮天使でそれっぽい言葉を話すじゃん？ みんな、少し驚いてる……」

「果南さんまで!?!」

ダイヤでさえ、果南でさえ、善子が墮天使ヨハネになることなく素のまままで話をしてくるとは思っていなかった。みんな、善子があつた行動に驚かざるを得なかった。

「みんなが驚くのも仕方ないよ善子ちゃん。ダイヤさんと果南ちゃんの言う通り、いつもの善子ちゃんなら墮天使ヨハネになっちゃうじゃん」

「うう……曜さんまでえ……」

「泣くな善子。ほら立って」

ただ、あまりにもみんなが驚き過ぎたせいで善子はだいぶショックを受けてしまっていた。その場でへタリと座り込んで、目に浮かべている涙がそれを物語っている。

こんな展開になってしまつては、俺の中で彼女に対する対応はある程度決まつてしまつたわけで。

「善子。料理の仕方なら教えてやる」

「えっ!?! 本当!?!」

目の前で泣かれたら、そりやあ料理を教えないわけにはいかない。善子の思惑がなんなのかは分からないけど、こいつのお願い、男として断るわけにはいかなかった。

「上手くなりたいんだろ? 料理を」

「え、ええ！もちろんよ！」

「なら、泣きべそかくな」

「わ、分かっているわよっ！」

俺の問いかけに、躊躇いなく答える善子。

多分彼女は、鞠莉のシャイ煮が美味しかったからとか、曜の料理を見て、『私もあれくらい料理が出来たらなあ』っていう並々ならぬ欲望があるのかもしれないんじゃないかな？ でもやっぱり、そこは本人から聞いてみるべきか？

その刹那、善子に口を開いたのは曜だ。

「でも善子ちゃん、どうして？」

「な、何がよ……？」

「どうして、遼くん料理を教えてもらおうって思ったの？ 何かきっかけがあるの？」

「えっ？ ええと……その……」

「教えてよ、善子ちゃん」

ニヤツと笑みを浮かべ、まるで善子を恥ずかしがらせるために質問しているようにし

か見えない。

「いや……だから……」

「んっ？だから？なくに？」

ああ、完全にその目的で言っていやがる。みんなもそのことを知りたいようで、俺が止めるにもまずこの状況下ではなす術もなかった。善子は、悩みに悩んだ挙句、みんなに理由を説明した。

「ヨハネは、遼さんの料理がとても素晴らしかったって思ったの！ズラ丸とルビイ、前に3人に作ってくれたオムライスのときもそうだった」

「オムライス……あっ！」

「もしかして善子ちゃん、あの日からずっと……」

顔を紅くして、勇気と羞恥を織り交ぜながら話をする善子は、どうやら俺が以前作ったオムライスの一件からそんなことを考えていたみたい。

あの日から少し時間は経ってしまったけれども、彼女はその事をやつと口にして話す

ことが出来た。言いたいことが言えた。きつと曜はこのことを聞きたかつたんだらう。表情はにこやかで、澄んでる。

「だから私は、遼さんから料理を教わりたい！」

「……そうだったんだ」

「これでいい？ これで満足？」

「どう思う？ 遼くん？」

「いや、別に聞かなくても良かったのに……」

曜のやろう、そこまで聞いて俺に振ることもないだらうに。俺だって、答えはもう善子に話したつてのによ。また言わせる気がつーの。

はあ……仕方ない。また言うしかないのか。

「善子、料理はちゃんと教えてやる。みっちり基本から教えてやるから覚悟しろよ！」

「……っ！ ええ！ 分かっているわよ！」

「ふふっ。良かったわね……」

「ピギヤツ！ さ、流石に辛すぎですわ……」

「もう、ダイヤつたらお子ちやまね！」

「鞠莉さんおだまらっしやくい！」

遼くんは善子ちゃんに料理を教えることになり、一旦その話が後々に持ち越しとなった今、まだ残りに残ったシヤイ煮と堕天使の泪を食していた。

一口食べれば、想像を絶する辛さが口に押し寄せてくる。それを堪えるためにダイヤさんは顔をしかめていたら、鞠莉さんは一口二口と、ダイヤさんのことをからかう。私と曜ちゃんと梨子ちゃんの3人は、みんなから一歩引いたところでその様子を見ていた。

そしてそんなやり取りや風景が、私がいつも見ている、いつもの日常になりつつあった。

「あ、千歌ちゃん」

「んっ……っ？」

そんな束の間の時に、梨子ちゃんは私に声をかけてきた。それをさつきまで忘れて、たった今思い出したような声を上げながら。

「なあに梨子ちゃん？」

「歌詞のことなんだけど、進捗はどう？」

聞かれたのは、今作成中の歌詞のこと。

ラブライブの予備予選に向けて、私と梨子ちゃんは曲の作成の真っ只中だった。

でも……まだ……

「あ。うん……。なかなか思い浮かばなくて」

「難産みたいだね。作曲は？」

「いろいろ考えてはいるけど、やっぱり一番は歌詞のイメージもあるから……」

「いい歌詞にするから、もう少し待ってて？」

「うん。私は大丈夫だから」

まだまだ全然、歌詞が書けていない。

早くどこ作詞して、梨子ちゃんと一緒に良い曲を作って、ラブライブに出るためにみんなとたくさん練習だつてほしい。曲のテーマはあつて、頭の中でそれを思い浮かべているのに、良い言葉が全く検討もつかないのが現状だった。

歌詞に合わせて作曲してくれる梨子ちゃんや、曲に合わせて衣装を作ってくれる曜ちゃんにも迷惑はかけられない。何とかしなくっちゃって、私は躍起になっていた。そんなとき、彼が私たちに歩み寄ってくる。

「なんだ？　また歌詞作りで迷つてんの？」

「遼くん……」

曲作り、そして歌詞作りに難色を示して私たちを見かねて、善子ちゃんたちの輪から離れ、私たちのことを心配そうに声をかけてくる。

そしたら彼から、私へ質問が投げ込まれる。

「曲のテーマは決まつてるのか？」

「うん。テーマはね、『大切なもの』なんだ」

「大切な……ものねえ……」

「……………」

内容は曲のテーマについて。私が口に出した、『大切なもの』というのが今回作る曲のテーマ。

みんなが、スクールアイドルを通じて、それぞれ大切になっているものを見つけたり、大切だっと思って感じたりしてきた。だから、それを歌詞にして曲して、その曲をライブの予選でぶつけたって思った。

でも全く全然書いていない状態で、何から書いていいのか分からなかった。けどそのとき、私はまた彼から問いかけられる。

「千歌にとって、大切なものは？」

「えっ……？」

「お前にとって大切なもの・ことはなんだと聞いている。もしかしてないのか？ 大切な何か……」

「あ、あるに決まってるじゃん！」

る。こんなの、ものすごく恥ずかしいに決まってるんじゃない。

でも、あんな強気に言っちゃって今ここでも言わなかったら？それでこそ遼くん
の思うツボ。

何か……何か話さないと……。

そんな風に自分の首を締め上げてる状態の中で、何かしらをみんなに向けて話そうと
思ってた。けど、逆に話さないと思って思いつめ過ぎている私は軽いパニック状態に
陥っていた。

ただその時だったの。マズイ、すごくマズイって考えていた時に、思わぬ形とある
人物から助け舟が入ったの。

「ま、まあ遼くん。千歌ちゃんが恥ずかしくてるから、今ここでみんなの前で無理に話
させなくてもいいんじゃない？」

「……っ?! 曜ちゃん……!」

「ほら、曜ちゃん嫌がつてるし……!」

私を助けてくれたのは曜ちゃんだった。

私の表情を見かねて声をかけてくれた曜ちゃんは、未だに私に視線を向ける遼くんに対してことを収めようと話をする。

その曜ちゃんの言葉に遼くんは、少し不満の表情に移り変わる。そう思ったらその一瞬に、チラツと何故か曜ちゃんに視線を送ったのが分かった。その意図がどういことなのか全く分からないでいた私を他所に遼くんは口を開く。

「…………分かった。千歌、さっきの話はなかったことにしてくれ。そしてもう忘れろ」
「あ…………う、うん…………」

呆気なかった。彼は曜ちゃんの言葉に従うようにそれからは何も言わず、ただ私にそう言つてことをなかつたかのような振る舞いをしてみせた。

これを聞いた曜ちゃんもホツと胸を撫で下ろし、安心しきつた表情を見せる。とりあえずは、自分が恥ずかしい思いをしなくて済んだと考えれば良いのかな？みんなの前で自分にとって大切なものを話すなんてやっぱり恥ずかしい。

と、私も自分自身の胸を撫で下ろしてホツとしていた。でもその束の間に、ダイヤさんから声がかけられた。

「それより千歌さん」

「は、はい？な、なんですかダイヤさん？」

「善子さんの料理にマヨネーズを使い過ぎてしまいました、マヨネーズがきれてしまったのです」

「あつ！それなら、私の家から新しいマヨネーズを持ってきます！少し待っててくださいー！」

用件は、善子ちゃんの『墮天使の泪』で使ってたマヨネーズがなくなってしまったという話だった。私はすぐにそう言って、海の家を飛び出して新しいマヨネーズを取りに向かう。私がいなくなったあとには、みんなは談笑の続きを始めていた。

「……………」

もしもあのとき、私の口から大切なことを話していたら、みんなはどんな反応をしてくれたらう？

みんな嬉しいと思ったのかな？それとも私のことをからかったりしてたのかな？う

くん。唐突に頭の中に出てきたモヤモヤが消えない。

そんな頭の中のモヤモヤが消えぬまま、私は家の入り口まで来る。暖簾を潜ろうと手を伸ばそうとしたその瞬間、誰かと誰か、何かの話をしている声が入り口から聞こえてきた。

この時間に誰だろう？頭にふと出てきたその言葉ともに私は暖簾を手につけて、そつと中を覗いてみると、そこには梨子ちゃんのお母さんと志満姉ちゃんの2人がいた。

そしたら次の瞬間、志満姉ちゃんの口から信じられない言葉が出てきたんだ。ううん、正しくは梨子ちゃんのお母さんからかな。

「えっ？ピアノコンクール？」

「ええ。案内案内が来たらしいんだけど、あの子、出ることも出ないとも言つてなくて

……」

「……っ!？」

「ピアノ」という言葉が出てきた瞬間に私はすぐに分かった。でも梨子ちゃんが、そんなことをみんなに隠していたなんて……。

思いもよらなかった事実には、私は困惑していた。もしかしたら今も、みんなの知らな

いなかで一人で思い悩んでいるかもしれない。
そう思ったたら、動かずにはいられなかった。

「志満姉！」

「あつ、千歌ちゃん！」

「梨子ちゃんのお母さんもこんばんは！」

「はい、こんばんは！」

ひとまず私は話を聞いていなかったことを装い、ごく普通に振る舞いを意識して玄関に入っていく。

笑顔絶やさず、出来るだけさつきの話の話を聞いていたことがバレないように。

「それよりどうしたの千歌ちゃん？」

「マヨネーズがなくなっちゃったから、新しいマヨネーズ持つてっついていい？」

「あつ、うん！在庫がいくつがあるから、キッチンからそれ持つてっついていいわよ」

「ありがとう志満姉！」

手早く用件を伝えてキッチンへ向かって、志満姉の言われた通り棚にはマヨネーズの在庫があった。そのうちの一つを手に取り、すぐさま私は海の家へと戻っていったんだけど、みんなは既に食器を下げて洗ったりして片付けを始めていたのだ。

「あれ？みんなもう片付けてるの？」

「すみません、千歌さん。新しいマヨネーズを持ってきてくださったのに、皆さんがもうお腹いっぱいだって言うので片付けを始めてしまいました」

「あつ、そうなんだ……」

ダイヤさんが自分から謝ってきたけど、私はすぐにそれを聞いて納得していた。あれだけの量、みんなで全部食べるのが難しいって私も感じてはいた。だから、みんなが片付けを始めてくれていたことが良かったかもしれない。

だって、新しく持つて来たマヨネーズを使わずに済むからね。あつ、ついでに梨子ちゃんに聞きたいこともあるしね。

そう思つて、私は梨子ちゃんがいる方向に視線を向けたんだけど、梨子ちゃんのそばには曜ちゃんと遼くんがいた。楽しそうに話をしながら片付けをしている3人見てたら、何だか申し訳ないくらい話しかけづらかった。

「あつ、千歌ちゃん！」

「なんだ、戻つて来てたのか」

「うん！新しいマヨネーズ持つて来たのに、みんな片付け始めちゃつてるんだもん」

だから「あのこと」は今話さず、機会があるときに梨子ちゃんと2人で話をすることに決めた。今の私がすることは、何事もなかったかのように普通に振る舞うだけだ。

「つべこべ言うな。ほれ、千歌も片付け手伝え」

「わ、分かつてるよ〜！」

いつなら梨子ちゃんとちゃんと話せるだろう。

朝方、梨子ちゃんと2人で抜け出してピアノの話を切り出してみる？その方法ならまだみんな起きてこないはずだし、しっかり梨子ちゃんと2人つきりで話をする事ができる。

うん。この方法でいこう。あつ、でも……

……ピアノコンクールっていつ？